THE CENTRAL REVIEW

中央公論

夏季大附錄號

第四十一年 第七號 第四百六十二號


御贈答には
松屋の商品券
共通
松屋呉服店 東京銀座
松屋家庭部 東京今川橋
松屋大森賣店 大森八景坂
鶴屋呉服店 横濱伊勢佐木町

便利で衛生的
なチューブ入の

クラブ煉歯磨

効力舶来品以上の歯の為
に一番よいクラブ煉歯磨



家庭用
クラブ歯磨

含嗽用
クラブ水歯磨



胡瓜　　　安田靫彦筆

大正十五年

中央公論

七月一日發行

夏季大附錄號

第四十一年　第七號

第四百六十二號

勞働爭議に於ける「既成の事實」

凡ての爭議に於て「既成の事實」と「將來に協定せらるべき問題」といふものがある。將來に協定せらるべき未決の問題に付て爭議が起るのだが、其問題の本當の意味は、夫れの基礎となつて居る「既成の事實」を知らなければ明にならない。而して所謂既成の事實は、過去に於て屢々爭はれた結果協約を以て固定した所のものであり、今日爭はれて居る問題も近き將來にはやがて何等かの形で「既成の事實」の一部を成すに至るべきは言を待たない。

本誌前號の公論欄を讀まれた方々は、英國の勞働爭議に於て何が「既成の事實」なりやに想到して、恐らく慨嘆無量なるものがあつたらうと推察する。併しただ規模の大なるに驚き態度の堂々たるを敬するだけでは、ただそれの眞の意味を了解したものとはいふことは出來ない。英國の勞働者の團體行動が今日まで既にどれだけの地步を占め得たか、又今後更に何物を收めんとして居るか、而して一般の輿論はまたどれだけの範圍に於て之を支持して居るか、之等を明に究めずしては、同國勞働爭議の眞の意味を知ることは出來ず、從て又之を他山の石として我國勞働運動の進化に貢獻する所以の途を明にすることも出來ない。

然らば今次の爭議の基礎となつた「既成の事實」とは何か、試に之を列擧すれば凡そ次の如くになる。(一)炭坑業に於ける收支計算は企業家側の單獨に之を取扱ふことを許さない。勞働者側の緊密なる監督のもとに置くことにする。(二)勞働者の賃銀には其の最低限が保障され、且つ猶此最低賃金より優先に支拂はる。(三)賃銀に次いで支拂はるべき企業家の利得にも一定の限度がある。(四)右の賃銀と企業家利得を支拂つて猶ほ餘剩あれば、それは一定の割合を以て更に勞働者と企業家との雙方に分配さるる。(五)以上のことはすべて勞働者と企業家との協議に依てきめる。即ち協議として企業收益の配分に對する兩者平等の發言權が認められてゐるのである。

斯くして平等の發言權が認められても、協定の利益が必ずしも常に勞働者側に滿足なものとは限らない。英國今次の爭議は即ち之を論定すべき點、更に引けば且つ之を持せんとして起つたのだ。但し他の多くの國々に於ては、單に勞働者の境遇を論定すべきものでないばかりでなく、決してその第一次の保障條件たる平等の

發言權すらが認められて居ない。英國と他の國々とは、同じ勞働爭議と云つても、だいぶ問題が違ふことに留意するの必要がある。

之れだけの地歩を占めた英國の勞働者は、今度の爭議に於て更に此上何を要求する積りなのか。表面の形は協定に於ける企業家側の讓歩屈從を求むるにある。併し前號諸家の所說にも現はれて居る通り、その要求たるや、企業經營方針を現在の儘にしておいては企業家に於て容易に承認し難い性質のものの樣だ。然るに勞働者側が亦撤回し難しとする根據を執て敢て動かずとせば、事實に於て之は結局、企業家側に對して經營方針の根本的變革を要求するものと觀なければならぬ。而してその變革綱目の中には炭坑國有といふが如きも含まれて居ることは、前號諸家の說述にも明だ。して見ると、問題は實に容易ならぬ重大な意義を包藏するものと謂はなければならぬ。要するに炭坑私有制そのものに對し、今や英國の勞働者は、一片空疎なる理論を以つてにあらず、拒み難き現實の力を以て正々堂々と天下に抗議しつゝあるのである。

英國に於ける勞働爭議の經過より我々の學ぶべきものは澤山ある。併し何よりも先づ吾人の念頭に入れて置く必要のあるは、英國勞働者の占むる現在の地歩は、決して一朝一夕に得たものでなく、又決して一時的慷慨悲憤に依て獲たものでもないことである。英國勞働界の羨むべき狀勢に出り、我々の當に何を望むべきやを學ぶことも大事ではあるが、同時に又如何にして之を獲得すべきやを反省することも必要であらう。但しこの式に依ることの外に目的を達する途は他に絕對にないといふのではない。

終りに私は政府當局並に實業界の識者にも一言の警告を呈したい。英國の勞働界が世界の模範であるか、其の到達せる處がその儘他諸國の目標たるべきものかどうかは分らないが、英國勞働者が今如何の地歩を占め、今や更に何を獲んとして居るかは、將來の勞働運動に何等かの暗示を與ふるものたるや疑を容れない。從て今後の勞働問題に善處せんとする者は、之等の現象に直面して大に鑑戒する所なくしてはかなうまい。勞働組合法案が如何の取扱を受けたりしかを回想し、私共は所謂識者の今なほ惰眠を食つて平然たるを悲むものである。

中央公論



第四十一年第七號
夏季大附錄號
第四百六十二號

現代農村問題の特質

——文明問題として觀たる農村問題——

農學博士　那須皓

一　農村問題の現代的意義

時の古今を問はず、國の文明と未開とを問はず、農村に於て發生せる一切の社會經濟的問題を——時には政治的問題をすらも含めて——漠然と農村問題と總稱するならば、農村問題の意義は勿論時代と場所とによりて非常なる相違を示

すであらう。さり乍ら或程度迄商工化し資本主義化せる近代の文明國に於て唱へらるゝ處の農村問題、例へば本邦現下の農村問題の如きは、其の意義に於て之に比すれば遙かに激化せられて居るものである。封建時代に於ける農村問題と今日の農村問題とは假令一味共通なる分子あるにもせよ其の發生の起因、思想的背景、内容の複雜、其の解決方法、並びに影響の及ぶ範圍等に於て多大の相違あるを認めざるを得ない。今茲には現代的意義に於ける農村問題の特質に就て少しく考察したい。

二　農業に於ける經濟的合理主義の適用

斯く限局せられたる農村問題は其の本質に於て何を意味するか。之を考ふるに際して、斯かる農村問題は現代文明の産物であり、而して之が發生は國民經濟の或る程度迄の發達、及び數次之に加へて國際經濟の或程度迄の發達を前提とすることを思はねばならぬ。商工業交通業等に於ける資本主義制大企業が漸く國民經濟の全體を被覆して壓倒的勢力を發揮するに至るや、資本主義的營利原則の下に立つこと甚だ微弱又は皆無なりし在來の農業經營、並びに此種農業經營を基礎とせし在來の農村經濟は、玆に此の趨勢に適應して其經營原則乃至經濟的機構を改造すべきや否やを考慮せざるを得ざるに至つた。問題は資本主義に對する同化か、又は在來の傳統的形態の維持か、或ひは別に第三の新生面を開くかの三つである。更に少しく詳說すれば資本主義に對する同化とは徹底的に農業を營利化し企業化するを意味する。農家の生活が貨幣交換經濟の渦中に捲き込まれ、農家の購入する原料や販賣する生産物又は必要とする資金が資本主義的機關及び行程を經て取り扱はるゝにも拘らず、農業の經營それ自身が昔日の自給自足時代の傳統より離脱し切らざることこそ多くの國に於ける農業困難の禍因をなすものなりとなし、この見地より農業の資本主義化が叫ばるるのであ

る。蓋し此の傳統的時代の遺物は農業生活に附隨せる特殊事情、殊に勞力の供給が多く自給的にして生産物も亦自家消費に屬する部分多く、其の結果として農業が今日尚依然たる營利的企業となり切らざる事情を重視し、種々の意味より斯かる特色の維持を希望し、その存續を妨ぐる所の外圍の勢力を或程度迄人爲的方策により阻止せんとするものである。農産物に對する最低價格の保護や、保護關税の設定や、其の他現在行はれ居る種々なる農業保護政策は無意識的にもせよ上述思想に基ける點多きを認めざるを得ない。何となれば此等手段たるや國際經濟又は國民經濟の内部に於て農業に特殊待遇を與へ、自由なる營利經濟の壓力を之れだけ緩和せんと試みたるものであつて、固よりかゝる保護の範圍内に於て農業が營利化し企業化する可能性を必しも否定するものではないけれども、否、時としては農業の營利化を促進する効ある場合もあることを否み得ぬけれども、而もかゝる農業保護思想が營利以上の或るものに基けるものたる限り、それは同時に非營利的なる自給農業が存續する場合には之を保護する結果を數大生むものであり、又時としては此の事を意識的目的とすることもあるからである。蓋し以上のいづれにも屬せず、機能を專守せざると共に農業の資本主義化をも好まず、別に一個の獨特の道を進まんと欲するものであつて、協同組合主義、農業社會主義、勞農共同主義の農業政策などがこれに屬する。

農業が將來の運命は大別して以上三者ある中に果して其の何れを以て最も望ましきものとなすか。又現實的に成算の可能性あるものとするか。これは如何に吾々の意志に關して中的必然性ありや否や。換言せば吾人の個人的なる思想意力によりて左右し得べき事柄なりや否やの問題にとゞまり、一人々々に動かさるゝ問題であり、又經濟生活に對する吾人の理想如何に拘はらず、已に客觀的に何等かの制度によりて既に決定せらるゝ問題である。而して此の點に吾人の注意すべきは農業の將來問題を考ふる間たらしむべきや否やの問題と、農業の技術的形態を如何にすべきやとの問

題とは自ら別個のものたることである。即ち現代資本主義制生產の主要なる特徴として、（一）資本の集中及び累積、並に之に伴ふ經營規模の擴大、（二）企業者と賃銀勞働者との對立、（三）營利原則による經營の合理化、（四）市場生產の無政府狀態等を擧げ得るものとすれば、此の特性の第二以下は之を斥けつゝも而も第一は或る程度迄之を採用すること必しも不可能ではない。經營規模の擴大に伴ふ經營の機械化及び分業化の如きは、資本主義以外の原則の下に立つ經營と雖も容易に之を採り得るものである。現に消費組合の經營せる大工場の生產技術の如きは資本主義的工場のそれと比して何等の懸隔を見ない。而も其の經營原則は非營利的にして且其の生產は必要額充當を目的とするが故に、所謂無政府的なる市場生產とは全然類を異にするものである。尤も此の際賃銀勞働者は尚存するものであるが彼等は同時に工場の經營主たる消費組合の組合員たる資格を持つが故に一般の資本主義的工場に於ける雇傭勞働者とは其の立場を異にするのである。斯く技術的には資本主義制下に發育せるものを採用し、而も經營原則は之と異るものを採用し得る。併し乍ら資本主義以外に於ける多くの經營が概ね傳統によりて支配せられしに反し一度資本主義の影響下に立ちたる後の經營は正に一個の經濟的合理主義によりて支配せらるるを免れざるやうになりつゝある。そは一面には資本主義的環境の感化又は壓力の然らしむる所であり、一面には人間心理の變化に基くものである。如何となれば非合理性の輕蔑は近代人心理の特徴であるからである。但し此の合理主義の基準は必しも資本の最大收利力を目標とする資本主義的營利原則たるを要せぬ。最大利潤の獲得は資本主義王國に於てのみ專制の威を揮ふ暴君であつて、その支配力は非資本主義的なる經濟的活動を統制する權威がない。然らば傳統の舊夢を離れ新時代の要求を具體化せるものとして現代の混沌たる經濟界に乘り出す非資本主義的經營は如何なる羅針盤によりて其の進路を決すべきであるか。茲に現代の經濟的事業が當面せる新しき問題があり而して又新社會の生みの苦しみがあるのである。

以上の問題が純然たる資本主義的企業をも漸く煩はさんとしつゝある事は最近かの總同盟罷業を勃發する誘因となりし米國炭坑の經營問題等に於ても窺はれる。經濟則に副せる資本主義的企業は漸次に其の經營原則の修正を強要せられつゝあるものであつて、營利會社が其の勞働者を株主に加ふる試みの如きはかゝる反省の一發露である。さはれ經營原則の問題はただ充分に資本主義化せざる、而して資本主義的環境の下に多大の不利を感じつゝも而も資本主義の特色を次第に見つゝある農業に於て殊に痛切に考へられる。一方、資本主義制下に發達せる技術的形體は、その採用を利とするものなしとせぬ。今農業には企業化せざる中小農の存續が多いのであるが、此等中小農地方には經營の規模及式並びに技術的機械を資本主義的大經營に適應せしめ、而も經營原則は必しも資本主義と同一ならざらしめること敢て不可能でない。現に農業界に於ける共同經營、共同作業、付業組合運動の如き、皆かゝる機運が其の片鱗を現はせるものであると云へよう。此の事たる資本主義が漸く獨占期に入り、其の技術的形態が發達すると共に其の營利原則が全部的或ひは部分的に否定せられんとしつゝある今日に於ては特に重要視すべき事柄である。近代文明諸國に於ける反資本主義的の社會運動は押し並べて、勞働者階級の自由並びに契約締結の自由に對する近時の各種拘束は法制的見地より資本主義に加へたる一修正である。斯くの如く、資本主義の根幹が漸く搖らぐと同時に以上の問題は益々切實に考へられざるを得ぬ。而して個別の經營原則に關する論爭の高くなりしを加ふるも亦當然なりと云はざるを得ぬ。

農業經營及び農村經濟の將來を如何にすべきかは、廣く經濟制度一般の將來と密接に係はる事柄なるが故に、唯物史觀を信奉すると否とによりて之に對する見解を異にし來るべきと同時に、農業と工業との間に生產上の事情を均しくせざる事に關する見解の異同、乃ち農業界に於ける大小經營の技術的優劣如何の判斷に依きても結論を異にし來るべき問題である。之は又延いて農村が今日尙相當に保存し居れる共同社會的色彩を今日以上に濃厚ならしむべきか、又は

[illegible]るべき新行の要望に種々の困難あり。又その影響する範圍廣大たるを以て今日本邦及び米國等の專門家間にも一致せる意見を見るに至らず、種々の論爭を見る次第であつて私は玆に之を詳說する暇を有せぬ。たゞ、農業に於ても工業と同じく大經營の絕對的優秀なるを說きたる農業マルキシズムに對して、無機的なる工業生産と有機的農業生産との差點を明かにし中小經營存續の可能を立證せるダヴヰッド一派の修正說が相當に有力にして寧ろ多數の支持を受け居れる事、更に又最近米國の學者間に於て進みつゝある研究の示す如く現狀の下に於ては農は工に比すれば生産要素たる土地、資本、勞力の投下に於て伸縮の彈力性乏しく、爲めに經濟的週期の到來に對して特異の現象を示す事、經濟的合理主義を農業に適用するに當りては此等諸點を考慮するのみならず農民の特異なる心理狀態乃至は農村の共同社會的色彩をも充分斟酌すべきものなる事を一言するに止める。

以上の考察に對して更に一波動を及ぼすものは國際經濟關係である。世界經濟の發展は國際的分業を發育せしめて農産物の國際貿易を盛んならしめたと同時に、他面に於て地域的束縛を受くること比較的乏しき工業の世界的發達は特定國の純然たる工業立國をも漸く困難ならしめつゝある。米露等の穀物が歐洲に侵入すると同時に獨、米、日、等に於ける工業の發達が英國工業の世界的覇權を轉移せしめしは新ける實例である。かゝる事實の示す如く農業生産と工業生産とに於て其の地域的分業可能の範圍並びに分業の利益の大さに差等ある事は、今後の世界經濟が解決すべき一難問の因をなして居るのである。而して安價なる外國農産物に盲目的に隨喜して國內農業を棄てたる國民經濟が早晚國內の勞力利用上に困難を感ずるに至るべきことは、英國現下の失業問題が吾人に示唆する所である。英國の學者中には他國工業發達の結果として英國の工業設備が過剩となりたることが英國失業の根本的基因であつて、國內農業の發達によつて此

の国民経済的缺陥を除かざる限り失業問題の解決は困難なりと論ずるものが少なくない。此等事情を考慮すれば労力の自由なる国際移動が政治的並びに社会的に大なる障碍を受くる事なく行はれざる限りは国内農業経営の問題は異なる経済的見地よりするも吾人の関心事たらざるを得ない。故に吾人は国内農業経営の問題は、世界経済発展の趨勢に基きて経済的合理主義の適用が国民経済全部に拡張せられんとするに際して起るものなりと見ることが出来る。換言すれば農業の個々の経営に対して経済的合理主義を如何に適用すべきやを考察せるのであるが今は国内農業の全部に対して同様の問題を考察するものとも云へる。この事たるや現代農村問題の一特性をなすものである。若しそれ一個の農業の目的観念としての農業及び農村内自給経済にありては、これ全く家事的自由又は戦時経済的自由に出づるものであり、この際は経済的合理主義の適用如何とは甚しく無関係なる別個の問題で、農業に対して外部より附加せられたるものであるから、而して之を解くべき鍵は政治的事情に存するのであるから、茲に之を併せ論ぜざるを宜なりとする。

以上述せる所に基きて私は農村問題に其の内容の一中心を求むとして資本主義制下に発達せる経済的合理主義を如何に農業経営に適用すべきものであるかといふ問題、及び国民経済全部の合理的発達の為めに農業に如何なる地位を與ふべきやとの問題を含めるものであつて、合理化は近代文明の特色であり経済的合理主義も亦資本主義の産物たる意味に於て、此の事は今日の農村問題に近代的特色を附与するものなりと信ずるものである。

二　階級闘争として見たる農村問題

次に云ふべきは現下の農村問題の重要なる一面は民衆的勢力の伸長を前提とすることである。現下の農村問題は所謂農村階級問題を含むでをり、農村社会問題中に於ては農業経営内に於て労務者の占むる地位如何の問題が主要なるも

のである。これは地主、企業者、勞働者を一身に兼ねる自作農の場合に於ては發生せぬのであるが、勞働者が土地又は資本の一又は二を有せずして農業賃銀勞働者或ひは之に準ずべき小作貧農の形を取るときには發生する問題である。そは一面に於て農業の經營管理に關する勞働者の發言權の增減を意味すると共に、他面經濟の成果を土地、資本、勞力間に分配する比率の變更をも意味するものである。換言せば財產權に對する勞働權、生存權の對抗に基く問題である。歐洲農業勞働者の組合運動、同盟罷業、又本邦の小作爭議の如きは此の對抗が具體的に現はれたるものであつて、斯の如きは社會階級間に於ける利害關係の衝突が明かに認識せられその結果として舊來の傳統が漸く維持し難きに至れることを示すものであると云へよう。此の意味に於て農村問題は社會的勢力の消長を意味する階級鬪爭を包含せるものと云はざるを得ない。

之を本邦の例に徵するに新潟縣下に於ける大地主對小作の對抗の如きは正にこれに當るものである。さり乍ら農村に於ける階級構成はヴァルガ其他の指摘せるが如く都會の工業界に比すれば遙かに複雜である。本邦に於ても地主、自作、小作、農業勞働者及び此の四者中の二又は三を兼ぬるものがあり、その內容は漸を以て移つて居る。西洋の學者は之を呼んで農業界の梯子（アグリカルチュラル・ラッダー）となし最下層より最上層まで社會階級的上昇の途ありとなすのである。今純然たる大地主は工業界に於ける大資本家に比すべく、純然たる農業勞働者又は小作細農は工業勞働者に比すべしとするも、兩者の中間に位する人々は種々複雜なる利害關係の立場に立つものである。就中本邦にて最も注意すべきは農村居住の中小地主である。彼等の中或者は若干自ら農業を營み或者は之を營まない。而して在來彼等は農村に於ける比較的上流階級を形作り徒食して日を暮すを得たとするも、今や事態は一變し支出の增大に對して收入之に伴はざる爲め漸く生活上の窮乏に襲はれて居る。昔日彼等と小作人間とに存したる生活程度及び敎養上の差異は今や次第に消滅に歸せんとしつゝある。

否、場合によつては小作人以下の生活を營む小地主すらあるのである。此等中小地主は我農村に相當多數あり、三町步以下の中小地主にして耕作に從事せざるもの丶みを見るも一町村平均約九十戸に近いのであるが、農林省調査によれば大正十二年度に於て本邦内地道府縣——沖繩縣を除く——に於て耕作に從事せざる地主數九七四、六三一戸あり、同年に於て三町步以上の地主戸數は三九八、九一六戸であつて假りに三町步以上の地主は悉く耕作せざるものと定めて之を差引くならば、殘餘たる五七五、七一五戸は三町步以下の中小地主にして耕作に從事せざるものである。之を當時の道府縣町村數約一萬二千で割るならば一町村平均約四十八戸となる丶彼等は小作料が過度に引下げらる丶時は生活の基礎を脅かさるゝに至るものであつて、小作爭議が永引き小作料收入の停止したる場合に於けるその窮状は往々にして小作人以下たる事がある。而して此等中小地主が自ら農業勞働に從事すべく土地の返還を求めて小作人と相爭ふ時、こゝに共同は搾取兩階級の爭ひたる性質を脱して、當該人口が生産手段に對する所有權の確保を意味するに至る。此の如き爭を階級爭ひたる名稱を以て呼ぶことは不合理なりや否やに就ては議論の存する所なるが、而も何れも然らず、或は地方的・自治的に結合せられたる階級が其の内部に存在する中間に於ては更にこれを加へたく、特にも無い又何れにも均しく存在する事である。故に現代農村問題に於ける階級爭ひの一面を具現せることゝなつて、次にこれが問題の中心をなして居ることは之を認めざるを得ない。但し此の階級爭ひのみを以て現代農村問題の本質の全部なりとする見解に私は與し得ないのである。かゝる階級闘爭は既に往昔の農村にも存在したものではあるが、現代に於ける如く強力且普遍的なるものではなかつた。然るに近時は資本主義制下に於ける工業勞働者の階級闘爭意識の熾烈なるに刺戟せられて、農民運動又は農業勞働者の運動が普遍的且永續的に發育しつゝある。生産手段に對する個人的關係に於て一は營利占有者たり一は使用者たるに過ぎざる差異あり、此の間に工業賃銀勞働者と同樣の農業勞働者を除

く[illegible]
者と農民との連絡及び共同運動に各國及び我國に於て屢々見受くる所であり、殊に共産主義に於ては此點に力を注ぐこと大なるものゝ如く見受けらるゝ。

かゝる發現の形式は固より種々であるが、要は角額に汗して勞働する人々の立場を高めんとする意味に於ける階級鬪爭の内在は、近代農村問題の第二の特色を形作ると云ふてよい。

四　都鄙の對立に基く問題

第三に農村問題中には尚數多の政治的社會的問題を含むで居る。都會偏重に對する農村の抗議、國民體質の低化又は思想の病化を防ぐべく田舍住民殊に農民の相當數を維持する必要有無の問題、乃至は前述せる食糧國内自給策等これである。此の中の最後のものは封建時代にも既に行はれたるものであり、偶々近世式國家の成立と共にそれが食糧政策と名けられて其の範圍を擴大したるに過ぎぬから、本質的に農村問題の現代的特色を形作るものと呼び難いのであるが、最初の二問題の如きは大都會の成立繁榮を特色とする近代文明の特産物であつて正に農村問題の現代的特色を發揮するものと云へる。都鄙の對立は昔にもありとは云へ、そは場所に於て少數なりしのみならず往時の都會は尚田舍的色彩を多分に有せるものであつた。されば今日の如き極端なる都鄙の對照を世界的に見た事は曾て無いと云ひうる。而してそが敎育、藝術、政治、宗敎等に關する各種の機關及び活動が大都會に偏在するとか、地方民の生活樣式が都會の流行を逐ふとか云ふ如き具體的事實より、進むで都鄙を問はず近代人の思想感情の全部を都會化し去り騒音化し去り器機化し去り高速度化し去らんとするに及んで、近代文明が都市中心的なる事實は愈々出でて愈々明瞭且深酷なるものと云へ

る。丁度人の個々別々なる無數各の公益的政黨が市民に比して都市なりとか又は各種政黨が多く都市本位なりと云ふが如き事例に、個々以て此の近代人の都市的思想がその一端を現はせしに過ぎぬとも見得るのである。スペングラーは其の名著「西欧文明の沒落」第二卷中に於て此較の消息を説いてゐる。自然を敵として之を征服して何物かを獲得せんと努めし初期的原人が耕作てふ不自然なる作業を始むるに及んで彼れは掠奪を廢して生存をなすに至つた。而も植物を植うる農民は同時に自ら、個の植物化して大地に根付いたのである。人間の精神は自然的風物の中に一個の精神を發見した。而して、土地に緊縛せられたる新しき存在。新しき感觸が玆に到來した。敵たりし自然は友となり大地は母となつた。此の時に於て農家は正に安住の表徴であり、自家所有地上に根づきたる堅なる所有物である。農民に取りての家に相當するものは文化人にとりては都會である。人類は其の發達の第二期に於て都會を建設し而して都會建設者たる文明人は或る意味に於て故郷なき智識的遊牧の徒となる。而も不思議なる哉玆に都會の精神が發生する。其の根源は永遠に秘密なる。全く新しき様式の大衆精神が都會文化の一般的精神界より抽出され、生育し。そして顯著なる形態を取る。個々原始の歴史を有する住居の村落的集合體から次第に一個の純一體が生れる。——都會と村落とを分つものは領域にあらずして、一個の精神である。——大都會は自由精神である。玆に於て人は再び遊牧の民の如く自由であるが、併し彼よりも狭く且冷たい。——

石造の巨人たる世界都市は凡ての大なる文化の終局に於て作らる。靈ある土地によつて精神的に形作られたる文化人は今や彼自身の創造物たる都會によつて所有せられてゐる。遂に都會の創造物となり執行機關となり遂には其の犠牲となり終る。——

此の最後の都市は全く一個の精神を表現する。その家々にはイオニヤ又はバロック都市の家々の如く曾て文化が出發せ

企業心によりて造成せられたる所産である。都市は直ちに一個の世界であり、終結としてのみ人類の住居たる意義を有するものである。

世界都市住民をしてかゝる人工的地域以外に住むを不可能ならしめたるものは、彼れの存在に於ける宇宙的階調の後退を示すに外ならない。而して人々が警戒裡にある緊張は益々危險味を加へ來る。文明は緊張に外ならず凡ての文明人の頭腦は最鋭き緊張の占むる所である。理智とは緊張せる理解の可能性を指す。かゝる頭腦は凡ての文化に於て最後の人類に典型的なるものである。農民の巧智、先天的機智、本能は凡ての賢き動物に見ると同樣に一種の感じによつて成り立つ所のものであるが、之が變じて都會的精神となり遂に世界都市的理智に到達する。而して此の道程は、又宿命的感念の不斷の減退、因果律に對する慾求の無制限なる增加となりても現はれる。理智とは無意識的生活經驗に代ふるに肉なくして瘠せたる思索の巧妙なる練習を以てせんとするものに外ならぬのである。

理智的緊張は休養としては唯一特殊のもの、即ち弛緩を知るのみである。眞の遊戯や生活の悦びは最早本質的に解せられなくなり、娛樂としては精神的緊張に代ふるものとして肉體的緊張を以てするスポーツが、又肉體的緊張に代ふるものとしては肉感的享樂、乃至知力的諧戯が、更に又日常の論理的勞作に代はるものとしては神秘主義が採用される。活動寫眞、表現主義（エキスプレツシヨニズム）の藝術、神秘的宇宙觀、拳鬪、黑人舞踊、カルタ、競馬等、の全世界に瀰漫せる都會遊戯を見よ。而して此の間其の存在が土に根ざすこと益々薄弱となり神經の緊張益々加はりつゝありたる事實に基きて暗默の中に永く準備せられたる現象が、忽然として歷史の表面に現はれ一切の演戲の終末を近づかしめる。文明人の非生殖性これである。

以上に其の一部を紹介せるスペングラーの說は現代都市文明の本質に向つて鋭き解剖のメスを揮ひ都會文明の自滅作用を說きたるものである。本邦に於てもスペングラーにより多大の感化を受けたりと思はるゝ室伏高信氏の如きは都會の器械文明を呪ふて「土に還れ」を說き、都會による農村の搾取、工業國による農業國の搾取を罵つて居る。「みゝずのたはごと」を書いた徳富健次郎氏や、「農自治の家」を經營する江渡狄嶺氏等にも同様の思想感情が窺はれる。然し是等の思潮を可否批判することは本論の目的ではない。玆には唯都鄙の對立に基く問題が單に物質的文明の完、不完や、住民負擔の不公平などゝ云ふ小なる問題でなくして其の依つて來る所、又其の影響する所がより深く、より廣大なる一個の文明問題であること、而して農村村中の主張は此の個人的問題の解決に對する答案の一なることを附へたならば私の望みは足れりとする。

此の都鄙の對立に基く問題が如何に解決せらるゝか。そは都鄙兩勢力の消長によりて決定せらるゝことも大なるものであるが、此の都鄙兩勢力の大きさが單に都鄙の經濟的實力にのみよらずして、現時の國際的又は國內的政治事情によりても動かさるゝ點も多きこと一例へば農民の投票を得るべく政黨が流石農村振興を叫ぶの類一は注意を要する。更に又本問題の解決は吾人の意識並に社會理想によりて動かさるゝ部分の大なるものがあるが、此の社會理想の構成そのものに就ては、狹義なる經濟的環境の外に、より廣き社會的生活の全部並に眼に見えざる幾代の生活と傳統とが相關與するものなることを忘れてはならぬ。

兎も角も現代文明の性格を決定する爲めに農村を如何にすべきかの問題の存在することは幾多の實際的方策の決定にも關係するものであつて、現代農村問題の論究の特色をなすものである。

五　文明問題として觀たる農村問題

以上の外尙擧ぐれば諸種の事項が存するが之を略し、上述せる所の三點、即ち第一には農業經營に對する經濟的合理主義の適用及び國民經濟內に於ける農業の合理的地位如何の問題、第二には農村に於ける階級爭鬪の問題、第三には近代大都會に對立する農村の文明史的使命如何の問題、此の三者を以て私は現代農村問題の三つの主要點並びに特色を形作るものなりと考へたい。而して以上に擧げたる三個の問題はそれ〲經濟、人間、及び文明を主體とするものであつて、概念的には之を明瞭に區別し得るが問題の領域には相交叉する所あり、又問題の水平線は必ずしも同一の高さではない。即ち第一は專ら經營の原則を考へ第二は主として人間の關係を考慮するものであつて、此の兩問題相互の間には密接なる關係あるものであるが、更に第三の文明を考慮する時には前二者は共にその一要素としてその中に加はらざるを得ない。何となれば文明問題を論ずるに當つては文明の構成要素たる經濟及び人的關係を考慮せざるを得ざるを以てゞある。然るに翻つて考ふれば經營原則を規範し人的關係を規範するものは經營並びに人的關係そのものに內在するにあらずして、それに內在する部分及び內在せざる部分を總括する所の標準、換言せば經營及び人的關係以上の標準でなければならず、而して此の標準が人類文明生活發展の傾向に對する或る判斷たるべきは云ふを俟たざる所であるから、第三の農村の文化史的意義に對する考察の結論は軈て第一、第二の問題を解決すべき基礎を與ふるものと云へる。此の意味に於て農村問題は文明問題なりとする私の提言は益々明かとなるのである。

更に少しく詳言すれば以上の事は一層明瞭となるであらう。先づ第一問題を見るに其の主題たる經濟的合理主義そのものが前述せるが如く實に近代文明の特產物なのである。それは自然科學の發達の影響を受けた近代人の心理と而して

濟的なる資本主義的經濟との存在があつた後に於て始めて吾人の意識に上り來つたことである。合理主義は因果關係の觀察を基礎とするものであり、經濟的合理主義は因果關係の數量的判斷の上に成立する。資本主義的經濟も、個の合理主義の上に立つものであるが、唯貨幣價値より出發したその經營原則は人格價値又は道徳價値より出發せんとする新經濟の指導に對して妥當性を持ち得ないのである。茲に於てか經濟的合理主義の新らしき形態が考察せられる次第である。但し道徳又は人格の發展てふ如きものに對する價値が果して數量的計算を許すや否やは一個の問題であつて、故に經濟的合理主義なるものゝ測定し得べき限界があると云はざるを得ない。而して若し計量測り難きもの、因果關係を測示し難きものを以て凡て合理の範圍外に置くとすれば生物は合理ならざるものによつて支持せられ進化せしめらるゝことが余りに多い。生物の本能の如き、又は突然變異の如き、又は先祖返りの現象の如きこれである。農業者の有する一種の誇持や、經驗並びに傳統の尊重等が非打算的生存々續の本能に基きたるものでないと云ふことを誰が斷ずることが出來よう。而してその一部は今尚必要なるものかも知れぬのである。歐洲に於ては、古來制の土地割込み法により一村落共有地を區分せんとせし時多くの農業者は之に反對であつた。我國に於ては之を斷行した。然るに今日に於ては當時の施政者の理論よりも農民の自由的反抗の方が遙かに正しく妥當なりしことを認めざるものは少ない。都會的社會主義者によりて常に非難せらるゝ農民の土地所有慾の如きも同樣に説明せらるゝ其日の來らざるなきを誰か保し得ようか。近くは本邦における明治以後の法則による新町村の合成、部落有林野統一、農民の如き亦同様の批評を加へらるゝ可能性が多い。農民の保守性は相續制度、或ひは合理的ならざる農業の經營及び農村の慣習が果して不合理を完成せる前時代の生活の遺物を傳ふるものに過ぎざるや。此等は現代に於て全部之を無視して可なるものなりや否やは此等諸點の研究を圖りつゝあるべき人々の研究を要する問題である。吾人は一時的に經濟的に基きて發生する農民の經濟並びに農業の形式と、よ

り永久的にしてより高貴なる必要に基けるこれとを區別すべく努めねばならぬ。前者に對しては正に經濟的合理主義の適用を躊躇すべきではないが、後者に對しては輕々に斷ずべきではない。如何となれば合理主義は人間生活を決定する全部ではあり得ぬからである。近代の所謂科學的社會主義者や共產主義者の農業理論には此の點に關する驚くべき無省察が暴露されてゐることを認めざるを得ない。

更に國內農業維持存續の問題は國民經濟全部を合理化せんとの見地、及び國民的生存の安全を保持せんとするの見地より出づるものであるが、前者は經濟的合理主義の一適用であつて、而もそは後者と共に國際政治關係の變動によりて左右せらるゝものである。民族的文化と世界文明との關係によつて國際政治が動かされ、又ひいては國內農業維持問題も動かさるゝ事情があるが、煩を嫌ふて玆には說述を略するであらう。兎も角も以上論ずる所により經營原則の問題及び國民經濟合理化の問題も亦一個の文明史的批判を伴ふものなることが判明したと思ふ。

次に第二の問題たる經營內部に於ける人的關係を考ふるに、此の關係決定の細綱は民衆中心文明を肯定するか又は天才中心文明を主張するかに依りて動かさるゝ所が多い。即ち文明發展の傾向及び速度、並びに之に關與する人間の數及び役割に關する見解が此の問題の解決方法を左右する點少なからぬのである。現代の民衆本位の考へ方は動もすれば質よりも量を重んじ、何事にも多數決主義を振り廻はし、文化創生力其他に於て現實に多大の相違ある各人を一切平等に取扱はんとする弊がある。倫理的意味に於て抽象的人格の價値を平等視することゝ、個々の現實人の特定問題に對する發言權、又は特定財物に對する處分權を平等化することとは自ら別問題である。特權の打破は特權が社會的進化の障碍たる場合に於て始めて意味あることであつて、之は逆に社會的進化を促進する爲めに他種特權を設定することを否定するものではない。現實の事例を見るも、ブルヂョア階級の政治的特權を剝奪せる勞農ロシアの共產主義者等は自ら一個

の特權階級となり了したのである。プロレタリヤの專制を叫ぶ時は假令それが一時の過渡的制度なりとするも——何物か過渡的ならざる制度があらうか——正にその期間中プロレタリヤを特權階級化することを意味するに外ならぬ。然らば問題は抽象的に特權の是非を論ずることにあらずして、具體的現實的なる或種特權の社會的機能を批判することであらねばならぬ。抽象的に特權の廢止を叫ぶことは無意味、無根據に流れ易い。然るに往々にして無意味無根據にして且實行的に實現不可能と思はるゝ性質の不平等觀が、其の許されたる領域を超えて、具體的問題につき天降り式に指導的態度をとることがあり、而も無批判なる獨斷主義は之に盲從する場合なしとせぬ。所謂デモクラシーの危險は茲に潜む一面がある。但し斯くいふことは現實に存在しつゝある特權階級擁護の意味にあらざることは敢て説明を要すまい。農村に於ける階級鬪爭の如き問題に動もすれば無批判なる獨斷主義に陷る危險があるが、而も之に對する處置は眞に現在の制度を持し、乃ち特權階級擁護をア・プリオリの出發點とするものであつてはならぬことは注意を要する。人によりては農村の階級鬪爭に對する立場は現在當事者の何れか一方に味方するより外に途なしと論ずるものがある。例へば小作爭議に對する態度は地主的か小作人的かの何れかに屬する外無しといふ。但し斯くの如きは、これ地主にも小作人にもあらざる第三者の存在を忘れたるものであつて、更には又吾人の社會構成の基礎たる生活經驗は社會的利害關係の衝突又は社會階級的對立に於ける部分のみならず、それ以外のより廣汎なる社會生活に於けるものなること、否、超りよふれば吾人農村の一部は吾人自身の生活經驗に基く所あるものなることを忘れたる點である。吾人の社會生活は他人の生活經驗をも或程度迄は理解し共鳴し攝受し得る。かくてこそ始めて圓滿なる社會生活の可能性もあるのである。一切の利害を自ら經驗せずとも第三者になり得るものであるとすれば、爭議當事者としての經驗無くとも爭議解決者たり得ざることはない。解決の方針を爭議當事者の意識の何れかに依るの外なしとし、而して數と力とが最後の判定

を下すものであつて又其の特定な時に考と且むべきものなりとする法理學的、又は判斷論者の如き吾人に賛し得ぬのである。唯物的綜合論者以外の一切の態度を簡單に非科學的なるブルジョア意識と命名して漫罵しおらんとするが如き所謂科學的社會主義者の一派——果して無條件に科學的の形容詞を許容し得るであらうか——は自ら自己の墓穴を掘るものなりとの譏りを免れぬであらう。

更に考ふれば多くの國の農村に於ける階級爭闘の主たる目的物は土地の所有權、用益權である。特定財物に對する特定人の關係を如何に定むるかが爭ひの骨子である。土地所有權なるものが歷史的に發生せる一の社會制度なることは云ふを俟たない。シュモラーは云ふ、『所有權なるものは其の外部的機能に於ては爭ひを防止し特定の動作範圍を限定するものであり、其の內部的機能に於ては社會的秩序である。換言せば個人、家族、組合、町村、國家を驅つて特定の共同動作に出でしむる所の一の制度である。所有權の歷史は社會並びに其組織の歷史、發展しつゝある道德的理念の歷史を常に反映するものである』と。然らば土地私有制に對する改廢は反面に吾人の道德的理念の變化を示すものとせざるを得ない。

獨逸新憲法は云ふ、『所有權は義務を伴ふ、所有權の行使は同時に公共の福利のためにせねばならぬ』と。我々は玆に新興せる社會的正義の念が如何に所有權に對して明確なる拘束を加へたかを窺ひ得る。さり乍ら顧つて思へば此の事たる所有權の發生及び發達がその齎らす社會的效果によりて是認されたものであると云ふ歷史的事實を意識して表現せしに過ぎぬ。所有權が反社會的作用を逞うするに及んで社會より拘束を受くるに至るべきは固より當然である。

更に『所有權は義務を負ふ』なる語は一の社會理想を現はせしに止まらずして、寧ろ現存せる吾人の心理的事實を說明せるものなることを私は痛感する。何となれば所有は執着と愛とを生み、而して愛は自我の主張と自我の沒却との兩

間を具ふる純一個なるを以てゞある。法律的の言葉を以て云ひ現はせば愛は権利であり又義務である。我が民法が親に子女を監督教育し又種々干渉する親権を認むると同時に戸主の家族に対する扶養の義務を規定せるは、これ家族的愛情の性質を法文化せしに外ならぬのである。人に対する愛情と物に対する執着と相類する所がある。農民が自己所有の土地や家畜を愛惜し之が為に努力するは単なる利己心のみに出づるにあらずして寧ろ本能的愛情に出づることが多い。愛情は注意深き管理と努力とを自発的義務たらしめる。而してかゝる自発的義務の履行は個人的占有と相結ぶことが多いのである。茲に私有財産の心理的根拠があり社会的妥当性があるのである。故に所有が単なる権利のみを意味し義務を意味せざるに至る時、例へば地主が農地を以て単に収益の泉源とのみ見做すに至る時、かゝる地主作権の社会的意義は大半失はれたるものと云つてよい。さり乍ら又過激たる農地共有又は国有の如き制度が、私有に源を発する土地愛着の念を消滅せしむるが如きことあらば地力維持、生産の増進其他に於て社会的に憂慮すべき事態を発生せしめざるなきやを保し出來ぬ。自作制と小作制、農地私有制と国有制、この孰れが可なりやは両者の利害得失を比較商量して決すべき問題であつて特定の時代と場所と歴史とを無視して抽象的に決すべきものではない。然らば現今農村に於ける階級闘争の争因たる農地所有権に関する問題も亦文明史的見地に依らざるを得ぬのである。

以上略説せる所によるも農村に於ける階級闘争が現に現代文明の傾向によりて促進せしめられたるのみならず、其の解決は、個の文明批評的識見を要する事明白である。農村問題が文明問題たるの消息も明かであらう。

最後に第三の階級対立に基く問題が文明問題たるは茲に再びいふを俟たない。

×　×　×　×

私は現代農村問題の三大特徴を挙げて而して此の三者が結局に於て一の文明批判に帰着するを観た。三大問題否其他

の多くの問題はこれ當然のものであり、其等に對する解決の策には既に與へられる。或者によりては緩和すべからざる程の雜多の問題が、均しく農村問題と呼ばるゝ所以は、想ふに此の根本に於ける誤謬の一致から論理的に綜括せられたるに基くのではなからうか。

個々の具體的問題を捉へて批判することは本論考の目的外に存する。故に本邦に於て營利的大經營農業を主張する說に潛む數多の弱點や、又廣汎たる農業的新開國と人口稠密なる商工的舊開國の農業とを同一視して均しく農業は資本主義制の下には死滅の外なしと輕斷する議論の不用意や、或ひは小作權の確立を以て一切の農村問題を解決し得べしと思ふ見解の極めて近視的なることや、都會プロレタリヤの感情と論理とを以て農民を指導し得べしと考ふることの荒唐なること等に就ては敢て詳說すまい。隱れたる深所を探るの人にあらざれば表面的事實の正確なる判斷も不可能である。而も深きを探る人が唯物史觀の限られたる門戶以外に一步をも踏み出さざる慨あるは我國思想界の落莫を感ぜしめるものである。社會改造を論ずる進步的思想家が經濟的事實殊に財貨の生產及び分配關係のみに眩惑せられて、より廣き社會的事實に對する觀察に缺けたる所あるは世界を通じての缺陷であるが本邦には特にそれが著しい。此の中にありて生物學的見地より社會現象を批判する丘博士の如きは、その結論に一々首肯すべからざるものありとするも一異彩たるを失はぬとすべきであらう。獨逸に於てはエルスターにより最近に社會生物學樹立の試みを見た。凡ての社會政策の指導原理を社會的發展にありとし、而して社會政策の二大要素たる經濟及び人口を此の社會發展の概念によりて連結し、生物進化論に說く所の適應及び淘汰の二原理をそれぞれ經濟問題及び人口問題に應用せんと試みたるオットー・キューネの新說の如きも亦同じ傾向に屬するものである。社會問題研究に關する吾人の視界を大ならしむべき時期は今や漸く迫りつゝある。マルキシズム萬能の迷夢より醒むることは眞にマルクスを理解することであらう。斯く論ずる事は徒ら

に出現せる理論の中心を無差別に要約してマルキシズムの現在の理論を不鮮明ならしめんとするのでは決してない。否、寧ろ現在の多くのマルキストの研究の前提と論理上の妥當する限界を示唆し、其の趨勢を戒むると共に社會科學の研究をしてより深く且より廣からしめんと欲するに外ならない。或意味に於て社會科學は今や一大改造をなし一大飛躍をなすべき時機に際會して居る。現在其の存する理論の修正を迫らるゝことを恐るゝの餘り、事實と價値判斷との混入を避けんとする性格の態度は、社會科學自ら其の存在の理由を失するものである。逆に社會科學的眞理が現行制度を脅かすことを恐れて社會科學の自由なる研究を抑壓するに至つては其の愚及ぶべくもない。如何となれば吾人の恐るる所は社會科學的眞理の批判力にあらずして、却つて今日の社會科學に内在する獨斷と偏見との存在であるからである。而して社會科學の獨斷と偏見とを除く唯一の途は、社會科學の研究を抑壓することにあらずして、寧ろ益々其の研究を自由ならしむることにあるからである。

私の所論は少しく岐路に走せた。私は茲に本論に歸つて最後の一言を述べたい。

かの偉大な科學者は其の範圍内に於て總てを發生する如く、現代の資本主義的、在來主義的、個人主義的文明の前途は社會主義を發生せしむると共に社會問題を發生せしめた。社會問題の發生は人類の社會的生存本能が無意識的に自衛手段を取り、現代の問題を捉へて意識化されたるものとも見るを得べく、又近世の科學文明が自己反省をなせるものなりとも見ることが出來る。タイールは云ふ、西洋文明は無機物生活より出發し、東洋文明は有機生活より出立すると。吾人は社會問題を以て右の文明に對する余の文明の批判と見做し、而してこれが解決策として、一向に物質文明を排して以て滿足すべきであらうか。否、斷然たる復古はなすべきでなく又成就すべきでない。吾人の欲する所はより大なる合致である。吾人は統合文明に、又吾人の理智的活動に其の歴史的使命と意義とを認むることに決して吝かでない。唯これが妥當なる領域及び時

明を超えて社會生活の自覺を齎らさんとする時に茲に適當なる批判の必要を感ずるに過ぎない。

之を要するに農村問題は根本的に之を解する時は一個の文明問題である。それは現在の農村を經濟的に、社會的に、政治的に、文化的に如何に展開し行くか、又行くべきものなるかに就ての考察であり、此の考察は又現代文明の趨勢に對する批判を其の前提とするものである。農村問題の内容の複雜なるは正に現代人の生活並に心理の複雜なるを反映するものたるに外ならない。此の問題に對する吾人の心胸中には土に親しむ原始的生活を讃美するトルストイの感情と、自動車、飛行機、新聞、ラジオを悦ぶ二十世紀人の理智とが相交錯して居る。農村生活そのものゝ中にも各種の傳統的慣習や其の他往時の共同社會的生活の名殘りを示すものと、世智辛き現代式事務や新しき諸機關などが並び存して居るのである。問題解決の容易ならざるは蓋文明の意義を解するの容易ならざるが如きものである。然らば問題の解決せざる中に、混沌たる社會的文化的動搖の波に呑まれて農村は影を沒し農民は亡び去るであらうか。スペングラーは之に答へて云ふ、「農民は永遠の人間であり、都市に巣喰ふ一切の文化より獨立せるものである。彼れは都市に先つて在り而も都市無き後にも存す」と。果して然るや否や、玆に一個の大なる謎がある。吾人の意識的努力は或程度迄時代の波を動かすであらうが、時代の流れは此の努力と及び一切の他のものとを載せて運行し、而して上述の謎を自らにして解くであらう。吾人子孫をして荒村行を歌ひしゴールドスミスたらさらしめば蓋し至幸である。（終）

我が資本主義經濟發達の經路と其將來

高橋龜吉

一 我が産業の資本主義的第一期の發達

都市の發展を中心とする貨幣經濟の發達によつて、我國の經濟は、旣に徳川幕府の後半期に於て、多くの資本主義的經濟發達の萌芽を發してゐる。しかし乍ら、我が國經濟の資本主義的發達は、大體に明治維新以後のことゝ見て大過ない。而して、明治維新以後の我が國經濟の資本主義的發達は、大略次の三段の發達を經てその第一の發達階段を經へたが、その時期は大體に日露戰爭前後のことであつた。尙ほ、第一の發達階段に於ける發達の理由及びそれが何故に日露戰爭前後より第二期の發達階段に轉入せざるを得ざるに至つたかの理由については後に詳述する。

一、封建的農業より資本家的農業への發達
二、農業國より第一期の商工國への發達
三、對內相手より對外相手の産業への發達

A、封建的農業より資本家的農業への發達

徳川時代の鎖國政策が破れて、開國交易の時代となるや、我が經濟は茲に在來の[illegible]せる資本主義經濟の[illegible]に打ち出さる

れて、政治上には明治維新の變革を來し、經濟上には產業革命を齎らすに至つた。所で、この經濟の產業革命には、當時の我が經濟が專ら農業本位であつたために、初めは主として、農業に於ける革命として我が產業に最も大なる影響を及ぼした。

そもそも、德川時代の農業は、極めて小地域内に割據せる各藩の軍國的自給自足主義の下に叩くまれ、しかも、武士階級本位の强壓の鞭の下に仕組まれたものであつた。從つて、封建制度の廢頽するや以上二つの目的のために、農民の利益は極度に蹂躪せられ、勢ひ、我が農業は幕末に近づくにつれてその發達の途を閉され、漸次衰退するに至つたのであるが、その農業衰退の主なる原因となりし事實は、思ふに左の諸點であつた。

一、武士階級の農民に對する苛斂誅求。

しかもかくして武士階級の得たる搾取の全部は彼等の驕奢なる生活に浪費せられた。

二、土地賣買の禁止、

三、耕作物の自由選擇の束縛（例へば本田地には穀物以外の栽培を禁止する如し）

四、封建割據のためにと交通不便のために國際的農業分業は勿論、全國的農業の分業すらも殆んど行はれ得なかつた。

然るに、明治維新に伴ふ社會制度の改革は、斯樣な農業に對する封建的制限を一擧にしてその廢棄し、之に代ふるに、資本主義的農業制度を採用するに至つた。ゆへに、明治政府はその當初に於て次の如き改革を斷行してゐる。

(1)明治五年土地の永代賣買禁止が解除せられ、同八年土地細分の制限が除かれ、それと共に所有權が完全に認められるに至つた。

(2)土地に對する耕作物の制限が全部解除せられて、農民は各自が有利と見るものを自由に栽培し得るに至つた。（但しこの自由は地主のみが得たもので小作人には依然ない）

(3)穀物其他輸出入を自由にしたこと。

(4)明治六年の地租改正の結果

（イ）從來耕作者より納付せられた租税が（小作人及自作農の區別を問はず）爾後土地所有者たる地主より納付せられるに至つた。

（ロ）從つて納税者としての政治的保護は、從來の耕作者本位より土地所有權者本位に移るに至り、玆に耕作權よりも所有權を尊重するに至つた。

（ハ）然るに地租改正の結果、公租は德川時代のそれよりも當時已に大體に約二割を減じた。（註一）

（ニ）その上、地租に於ては米納が一定額の金納に變つた

然、しかし小作米は依然米納のまゝを続けたため、其の後の米價の騰貴によつて地主の附收貢擔は實質上著しく軽減せられた。

（ホ）加ふるに、米價騰貴の利益は、以上（イ）及（ロ）の如き土地制度の改革の結果、いまや專ら地主の懐を肥すこととなつた。即ち、小作料引上の他となつて、小作人は依然昔ながらの收斂に苦しんだ。

之を要するに、明治初期に於ける土地制度の改革は、従来の封建的農奴制度の不利を解放して、少からぬ利益を農民に約束したのであつたが、その利益、例へば土地賣買の自由、耕作物選擇の自由、職業の自由、公租の輕減、米價其他農産品價の騰貴、各種農業技術の採用による收穫増加、といふが如き利益は、殆んど皆地主の壟斷する所となつた。斯くて、地主は、この巨大の利益を追求して、及びその利益によつて、多々益々必要の資本を賄ふことが出來て、農業の開發進步に努力し、茲に我が農業は異常の發達を來たすこととなつたのである。が、この發達は大體に日清戰爭を轉機として已に漸く停頓期に入り、日露戰後に於ては、明かにその傾向を認め得るに至つた。

（註一）その當時の地價は少からず上昇する等の我國農業の發達に關する

[illegible]

B、農業國より商工業國への發達

明治維新後に於ける經濟的發達の第一步は、當時の我が經濟事情よりして、自然、農業に於て最も大規模に現はれたが、しかし、これと並行して、而して未だ小規模ながらしかも最も長足の進步を以て發達したものは商工業であつた。この商工業の發達は、始めは、主として、銀行、鐵道、紡績と云ふが如き、商業の大動脈を中心として長足の進步を遂げたが、日清日露の兩戰役後に於て、各種の工業はその第一期の發達を見、他方、商業に於ても、これ迄、その大部分を外國商人に獨占せられてゐた外國貿易の大部分を邦商の手に收めるの大發展をなすに至つた。

しかし、いま我が商工業が斯樣に第一期の發達をなすためには、云ふ迄もなく巨大の資本を必要としたわけであるが、この資本は最初如何にして賄はれたかと云ふに、その大部分は、初め、地主の手によつて供給せられたものの如く考へられる。なる程、その資本の中には、舊大名、舊武士等が家禄の代りに一時的に得た資金の少からぬ部分が投ぜられたことも明かな事實であり、又、舊來の町人階級より供給せられた額も少くはなかつたしあつたらう。しかし乍ら、何と云つても當時の我が國の

大部分は農業であつたから、[illegible]は、結局は農業に頼る外致方のない位迄にあつた。然るに、前陳の如く、明治初期の土地改革は、これ迄、領主の苛斂誅求せし搾取を地主の手に取り戻した上に、その後の資本主義經濟の發達に伴ふ巨利までも、之を全部地主の懐に入れる仕組となした。試にいまその一例として、地主の地租の負擔の激減と、小作料收入の激増との有様を、一の推算によつて第一表及び第二表に示すであらう。（その推算の仕方に關する詳細は非常に複雜してゐるので、遺憾ながら上梓する筈の我國農業の發達に關する拙著にゆづる）

（一） 地租負擔増減累年推定表

五ケ年平均	他租税率に由り推算せる地租額	東京の一石米價	同上により換算せる地租石數	同上の指數
明治七年度	四九、四六三千圓	六・一六圓	八、〇三〇千石	一〇〇
八―十二年	四四、五一七	六・四五	六、九〇二	八六
十三―十七年	四一、二一九	八・四七	四、八六六	六一
十八―廿二年	四一、二一九	五・六一	七、三四七	九一
廿三―廿七年	四一、二一九	七・八九	五、二二四	六六
廿八―卅三年	四三、八五七	一一・〇九	三、九五五	四九
卅四―卅七年	五七、七〇六	一二・九〇	四、五七三	五七
卅八―四十二年	九〇、六八二	一四・六三	六、一九八	七七
四十三―大正三	八〇、一三〇	一七・八一	四、四九九	五六
大正四―八年	七四、一九五	二五・〇八	二、九五八	三六
大正九―一三	七四、一九五	三六・三五	二、〇四一	二五

第一表によると、地主の地租負擔に、[illegible]止の結果、已述の如く約二割以上の減少を來たせる上に、その後の米價の騰貴其他によつて、その二割減つ地租が、明治二十三年頃から明治三十七年頃の間には、大體に約半減してゐることになる。斯く、地租負擔の激減が、地主の懐を豐富にしたること云ふ迄もないが、その上に、米價の騰貴、小作料の引上げによつて、地主の收入は著しく増大した。例へば、大摑みにそれを推算した第二表によると、地主の小作米收入は之を金額に直すと明治十八年に一億二千八百餘萬圓なりしものが、明治四十一――大正一年に至る五ケ年平均に於ては三億五千九百餘萬圓となり、大正五――九年平均に於ては七億二千四百萬圓に激増してゐる。而して、いまこの中から公租（第一表の分は中央地租のみであるが、この外に地方の地租附加税が最近年に於て就中激増してゐるのでその兩者を意味する）を差引くも尙第二表下段の如く、明治十八年の一〇〇に對し明治四十一――大正一年平均は二六八、大正五――九年平均は七五四となつてゐる。

（二） 小作米による地主所得金額推定表

年次	全國平均指數小作料高	地主所得推定小作米石	米價	地主の小作收入金額	公租（中央及地方）	差引地主所得金額	地主所得金額ノ指數
明治一八年度	一〇〇	一九、七三二、六〇八石	六・五三圓	一二八、七八二千圓	四六、九三三千圓	八一、八九九千圓	一〇〇

明治四三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
九	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

然るに、斯様にして地主の手に這入つた巨大の利益は、——搾取は——封建時代の如く領主及其の子臣ないし武士階級の遊食生活のために全部浪費せられることなく地主によつて先づ農業の開発に利用せられた。之れ、前陳の如く、我が農業が明治以後急速に発達するに至つた根因であつた。所で、斯の如き農業の發展には限りがある。就中我が農産物價が騰貴して、外國農業の競爭水準にまで近づくに至つてきたである。然るに他方には、宛もこの時に於て、各國の方法による商工業の有利なることが一般に知れ、且つ會社制度、合資制度等の發達によつて、何等商工業に關する知識なくとも、然ながらにして容易に資金を商工業に投資する途が開かれた。斯様にして、地主の手に集まつた利益は、今度は農業に投ぜられる代りに、直接間接、盛んに商工業に投ぜらるるに至り、茲に、我が經濟は、從來の農業本位より著しく商工業化するに至つた。之れ、大體に日清戰爭以後のことである。即ちこの時に於て、前述の如く、我が農業が一旦發達の極に達したる事情の下にして、爾後我が農業は愈々資金の涸渇に苦しむこととなり、之に反して我が商工業は長足の發展期に入つた。

いま、この我國經濟の商工業化の有様を、人口より伺ふに、假りに人口一萬以下の町村を農村人口と見、一萬以上の市町村人口を商工人口と見倣せば、明治十九年には商工人口は全體の一二%に過ぎざりしものが、二十一年から二十五年にかけて一六%となり、三十一年には一八%と徐々に増大し爾後この勢は急速となつて、大正二年には二七%六二に膨脹し、大正九年には三二%〇〇に激増してゐる。例へば第二表に示せる通りである。

第二表 人口の都市集中表

年 次	實數 人口一萬以下の町村現住人口	實數 人口一萬以上の市町村現住人口	實數 合計	百分率 人口一萬以下の町村現住人口	百分率 人口一萬以上の市町村現住人口	百分率 合計
明治十九年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八八、[illegible]	一二、[illegible]	一〇〇、〇〇
明治二十年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八[illegible]	一[illegible]	一〇〇、〇〇
明治二十一年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八[illegible]	一六、[illegible]	一〇〇、〇〇
明治二十二年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八[illegible]	一[illegible]	一〇〇、〇〇
明治二十三年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八[illegible]	一[illegible]	一〇〇、〇〇
明治二十四年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八[illegible]	一[illegible]	一〇〇、〇〇
明治二十五年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八[illegible]	一六、[illegible]	一〇〇、〇〇
明治二十六年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八[illegible]	一六、[illegible]	一〇〇、〇〇

明治二十七年	[illegible]	六、[illegible]	[illegible]	[illegible]	一六、	一〇〇、〇
明治二十八年	[illegible]八、一一一	六、九四七	四[illegible]、[illegible]	八四、	一六、	一〇〇、〇
明治二十九年	三六、二〇三	七、一二八	四三、[illegible]	八四、	一六、	一〇〇、〇
明治三十年	三六、五九四	七、四九四	四四、[illegible]	八三、	一七、	一〇〇、〇
明治三十一年	三七、三六〇	八、〇四五	四五、四〇五	八二、	一八、	一〇〇、〇
明治三十六年	三八、四九四	一〇、〇四九	四八、五四三	七九、	二一、	一〇〇、〇
明治四十一年	三八、八八四	一二、八九九	五一、七四二	七五、	二五、	一〇〇、〇
大正二年	三九、九〇七	一五、二二四	五五、一三一	七二、	二八、	一〇〇、〇
大正七年	三九、五三五	一八、五五二	五八、〇八七	六八、	三二、	一〇〇、〇
大正九年	三七、九二七	一八、〇三六	五五、九六三	六八、	三二、	一〇〇、〇

1 本表は帝國統計年鑑による
2 現住人口の調査は三十一年以後は五ヶ年毎に變更する

C 對內相手の產業より對外相手の產業への發達

以上に述べたる如く、我が經濟は農業國より商工業に進化したが、しかし、その商工業の多くは、始め專ら、內地人相手の產業であつた。蓋し、外國製品の輸入は、(一)關稅による保護ある上に、(二)運賃保險料並に手數料等の障壁あり、(三)加ふるに嗜好其他のハンヂキヤツプあるため、著しく競爭力を阻害せられる。勢ひ、そこに、內地人相手の產業發達の餘地が出來るわけであるからである。例へば、右の(一)及(二)に二割を要すると假定せば、我が產業の生產費は百二十圓に上る場合と

理、更に生產費[illegible]と競爭[illegible]

しかし乍ら、我國の如く[illegible]な國にあつては、[illegible]地相手の產業の、販路は間もなく飽和點に達し、爾後の發展は、專ら、對外輸出に頼る外ない。事實、我が產業の工業化は、先づ、外國產業の比較的競爭力弱き內地相手に發達し、之を基礎にして或る程度の基礎の築かれるや、直ちに對外相手に極力進出してゐる。例へば、いま之を第四表によつて我が輸出貿易の內容について見るに、大體に工業製品を代表する「其他」の輸出は、明治二一—六年平均に於て全體の僅か七%八に過ぎざりしもの、同二十二—二六年平均に於ては二五%四を占めた。然るに、それが日清戰後の三十二—三十六年平均には三三%に飛躍してゐる。しかし、この工業品輸出發展の狀勢は、その實額を見るに於て更にハツキリト看取出來る。即ち、「其他」の輸出は明治二一—六年平均と同二十二—二十六年平均との二十年間に於ては、百三十萬圓から七千六百萬圓と、七千五百萬圓を增加したに過ぎないが、日清戰後の三十二—三十六年平均に於ては二億四千萬圓に飛躍して、十箇年間に一億六千四百萬圓を著增し、更に次の十ヶ年間には二億五千二百萬圓激增してゐる。

（四）輸出貿易内容の工業化

	實額 食料	實額 原料	實額 其他	實額 計	百分比 食料	百分比 原料	百分比 其他	百分比 計
明治二[illegible]—二六年平均	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四[illegible]—大正[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
明治四十[illegible]年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正一年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
六年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
七年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
十年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
十[illegible]年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

備考）・（[illegible]）は[illegible]貿易表に據り[illegible]、[illegible]中、原料とは貿易表中の[illegible]料毛皮骨角牙介殻及同製品類、油脂蠟及同製品類、藥材化學藥劑及爆發藥類、染料塗料顔料及填充料類、礦物及同製品類を含む。[illegible]は大藏省貿易表[illegible]。

斯様に、我が産業が対内用より対外用に發達せる結果として、我が産業の外國貿易との關係は益々密切を極め、從來の如く、支那其他の後進國の産業の發達が、直ちに、我が産業の繁栄を齎すことゝなるに至つたのであるが、同時に、支那産業の發達が漸く我が産業の繁栄を脅かすに至つた原因としては、我が資本主義的工業第一期の發達は、專ら、粗工業を中心としたものであつたと云ふことを看過してはならないが、これについては次に別述する。

二　我産業第一期の資本主義的發達の原因とその行詰の理由

A　第一期の資本主義的發達の原因

以上に述べたる我が産業第一期の資本主義的發達は、周知の如く極めて短時日に且つ急激であつた。然も、我が國民の間に、一の口癖となつてゐる如く、歐米が数百年の歳月を要して達し得た所を、我が國は僅か四十年ばかりにして、既に到達し得たのであつた。しかしながら、歐米に比し極めて短時間に斯くも長足の進歩を遂げ得た譯は、特に日本人が優秀であつたと云ふよりも、寧ろ、左の三點に負ふ所が大であつたと見るを妥當とする。

一、歐米に於て多大の犠牲と数世紀の時間とを費して、發達

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

夏季大附錄號

第四十一年　第七號　第四百六十二號


御贈答には
松屋の商品券
共通
松屋呉服店 東京銀座
松屋家庭部 東京今川橋
松屋大森賣店 大森八景坂
鶴屋呉服店 横濱伊勢佐木町
商品券

Vitamogen
NERVE TONIC

腦及び神經の食料
ヴィタモーゲン

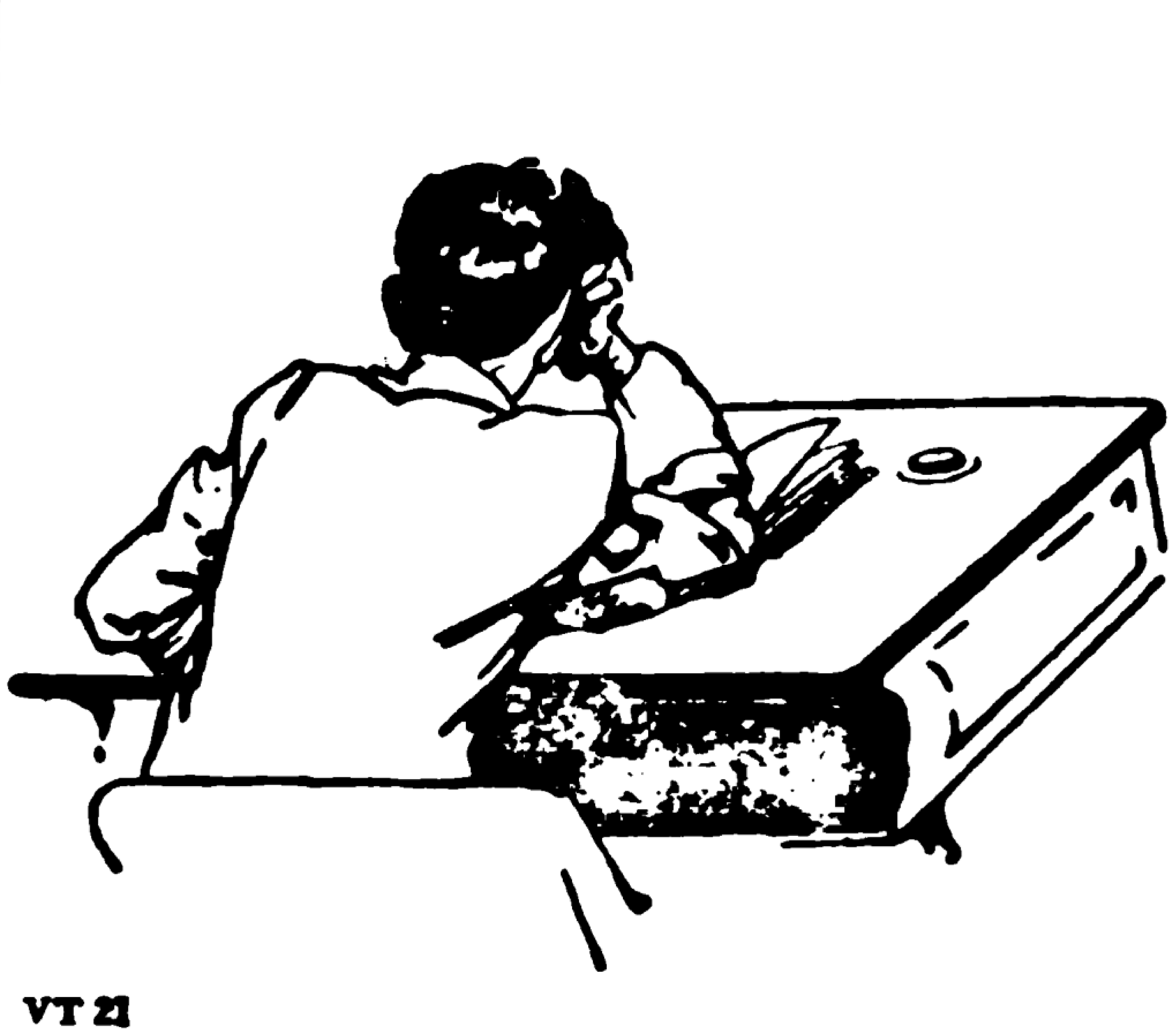
腦に過度の緊張を與ふるときは、神經中樞を通じて全身に反動を來し、頭痛に苦しみ、睡眠は妨げられ、食慾は減じ、仕事に倦み、感情は興奮し易くなります。

この狀態は腦神經細胞の重要成分たる燐その他の物質が過度に消費されて平衡を失した時に起り易き症狀で、興奮劑の服用は一時的には良効を奏しますが根本的の療法としてはこの缺乏せる成分を補給しなくてはなりません。

燐は鶏卵中の卵黄からも一部を補給するを得ますが、頭腦の肥料として必要なる凡ての成分を最も濃厚に最も同化され易き狀態で含んで居るのはヴィタモーゲンであります。

ヴィタモーゲンは神經衰弱者は勿論、劇務家、學生幷びに頭腦を過度に用ふる人々に對する最上の美味なる榮養食料であります。

「腦力と體力とを増進するには」と題する小冊子御入用の方は[illegible]一冊[illegible]す



[illegible]
發賣元　ヴィタモーゲン會社
[illegible]
代理店　株式 田邊元三郎商店

一〇〇瓦入……一圓八十錢
二五〇瓦入……[illegible]圓

各地藥店にあり

VT 21



胡瓜　　安田靫彦筆

大正十五年

中央公論

七月一日發行

夏季大附錄號

第四十一年　第七號

第四百六十二號

勞働爭議に於ける「既成の事實」

凡ての爭議に於て「既成の事實」と「將來に協定せらるべき問題」といふものがある。將來に協定せらるべき未決の問題に付て爭議が起るのだが、其問題の本當の意味は、それの基礎となつて居る「既成の事實」を知らなければ明にならない。而して所謂既成の事實は、過去に於て屢々爭はれた結果術を以て固定した所のものであり、今日爭はれて居る問題も近き將來にはやがて何等かの形で「既成の事實」の一部を成すに至るべきは言を俟たない。

本誌前號の公論欄を讀まれた方々は、英國の勞働爭議に於て何が「既成の事實」なりやに想到して、恐らく感慨無量なるものがあつたらうと推察する。併したゞ規模の大なるに驚き態度の堂々たるを嘆ずるだけでは、ただそれの眞の意味を了解したものとはいふことは出來ない。英國の勞働者の組織的努力が今日まで既にどれ丈けの地歩を占め得たか、又今後更に何物を收めんとして居るか、而して一般の輿論はまたどれ丈けの範圍に於て之を支持して居るか、之等を明に究めずしては、同國勞働爭議の眞の意味を知ることが出來ず、從て又之を他山の石として我國勞働運動の進歩に貢獻する所以の道を明にすることも出來ない。

然らば今次の爭議の基礎となつた「既成の事實」とは何か。試に之を列擧すれば凡そ次の如くになる。（一）英國産業に於ける收支計算は企業家側の單獨に之を取扱ふことを許さない。勞働者側の嚴密なる監督のもとに置くことにする。（二）勞働者の賃銀はその最低限が保障され、且つ總收益金中より優先に支拂はる。（三）賃銀に次いで支拂はるべき企業家の所得にも一定の限度がある。（四）右の賃銀と企業家所得を支拂つて猶ほ餘剰あれば、それは一定の割合を以て更に勞働者と企業家との雙方に分配さるる（五）以上のことはすべて勞働者と企業家との協議に依てきめる。即ち主義として企業收益の配分に對する兩者平等の發言權が認められてゐるのである。

主義として平等の發言權が認められても、協定の結果が必ずしも常に勞働者側に滿足なものとは限らない。英國今次の爭議は即ち之を滿足すべき状態に引上げ且つ之を維持せんとして起つたのだ。併し他の多くの國々に於ては、啻に勞働者の境遇が滿足すべきものでないばかりでなく、概してその第一次の保障條件たる平等の

覺醒すらも未だ出來て居ない。本國と他の國々とは、同じ勞働爭議と云つても、だいぶ違つた所があることに留意するの必要がある。

之れだけの地歩を占めた英國の勞働者は、今度の爭議に於て更に此上何を要求する積りなのか、表面の形は協定に於ける企業家側の讓歩屈從を求むるにある。併し前號諸家の所説にも現はれて居る通り、其の要求たるや、企業經營方針を現在の儘にしておいては企業家に於て容易に承認し難い性質のものの様だ。然るに勞働者側が亦撤回し難しとする根據を執て敢て動かすとせば、事實に於て之は結局、企業家側に對して經營方針の根本的變革を要求するものと觀なければならぬ。而してその變革綱目の中には炭坑國有といふが如きも含まれて居ることは、前號諸家の說述にも明だ。して見ると、問題は實に容易ならぬ重大な意義を包藏するものと謂はなければならぬ。要するに炭坑私有制そのものに對し、今や英國の勞働者は、一片空疎なる理論を以つてにあらず、拒み難き現實の力を以て正々堂々と天下に抗議しつゝあるのである。

英國に於ける勞働爭議の經過より我々の學ぶべきものは澤山ある。併し何よりも先づ吾人の念頭に入れて置く必要のあるは、英國勞働者の占むる現在の地步は、決して一朝一夕に得たものでなく、又決して一時的慷慨悲憤に依て獲たものでもないことである。英國勞働界の羨むべき狀勢に由り、我々の當に何を望むべきやを學ぶことも大事ではあるが、同時に又如何にして之を獲得すべきやを反省することも必要であらう。但しこの式に依ることの外に目的を達する途は他に絕對にないといふのではない。

終りに私は政府當局並に實業界の識者にも一言の警告を呈したい。英國の勞働界が世界の模範であるか、其の到達せる處がその儘他諸國の目標たるべきものかどうかは分らないが、英國勞働者が今如何の地步を占め、今や更に何を獲んとして居るかは、將來の勞働運動に何等かの暗示を與ふるものたるや疑を容れない。從て今後の勞働問題に善處せんとする者は、之等の現象に直面して大に鑑戒する所なくしてはかなうまい。勞働組合法案が如何の取扱を受けたりしかを回想し、私共は所謂識者の今なほ惰眠を貪つて平然たるを悲むものである。

中央公論



第四十一年第七號
夏季大附錄號
第四百六十二號

現代農村問題の特質

——文明問題として觀たる農村問題——

農學博士　那須皓

一　農村問題の現代的意義

時の古今を問はず、國の文明と未開とを問はず、農村に於て發生せる一切の社會經濟的問題を——時には政治的問題をすらも含めて——漠然と農村問題と總稱するならば、農村問題の意義は勿論時代と場所とによりて非常なる相違を示

すであらう。さり乍ら或程度迄商工化し資本主義化せる近代の文明國に於て唱へらるゝ處の農村問題、例へば日本現下の農村問題の如きは、其の意義に於て之に比すれば遙かに錯綜せられて居るものである。封建時代に於ける農村問題と今日の農村問題とは假令一味共通なる分子あるにもせよ其の發生の起因、思想的背景、内容の複雜、其の解決方法、並びに影響の及ぶ範圍等に於て多大の相違あるを認めざるを得ない。今茲には現代的意義に於ける農村問題の特質に就て少しく考察したい。

二　農業に於ける經濟的合理主義の適用

斯く限局せられたる農村問題は其の本質に於て何を意味するか。之を考ふるに際して、斯かる農村問題は現代文明の産物であり、而して之が發生は國民經濟の或る程度迄の發達、及び數次之に加へて國際經濟の或程度迄の發達を前提とすることを思はねばならぬ。商工業交通業等に於ける資本主義制大企業が漸く國民經濟の全體を被覆して壓倒的勢力を發揮するに至るや、資本主義的營利原則の下に立つこと甚だ微弱又は皆無なりし在來の農業經營、並びに此種農業經營を基礎とせし在來の農村經濟は、玆に此の趨勢に適應して其經營原則乃至經濟的機構を改造すべきや否やを考慮せざるを得ざるに至つた。問題は資本主義に對する同化か、又は在來の傳統的形體の維持か、或ひは別に第三の新生面を開くかの三つである。更に少しく詳説すれば資本主義に對する同化とは徹底的に農業を營利化し企業化するを意味する。農家の生活が貨幣交換經濟の渦中に捲き込まれ、農家の購入する原料や販賣する生産物又は必要とする資金が資本主義的機關及び行程を經て取り扱はるゝにも拘らず、農業の經營それ自身が昔日の自給自足時代の傳統より離脱し切らざることこそ多くの國に於ける農業困難の禍因をなすものなりとなし、この見地より農業の資本主義化が叫ばるるのであ

る。第二の傳統的形態の維持は農業生産に隨伴せる特殊事情、殊に勞力の供給が多く自給的にして生産物も亦自家消費に屬する部分多く、其の結果として農業が今日尚純然たる營利的企業となり切らざる事情を重視し、種々の意味より斯かる特色の維持を希望し、その存續を脅かす所の外國の勢力を或程度迄人爲的方策により阻止せんとするものである。農産物に對する最低價格の保證や、保護關稅の設定や、其の他現在行はれ居る種々なる農業保護策は無意識的にもせよ上述思想に基ける點多きを認めざるを得ない。何となれば此等手段たるや國際經濟又は國民經濟の内部に於て農業に特殊待遇を與へ、自由なる營利競爭の壓力をそれだけ緩和せんと試むるものであつて、固よりかゝる保護の範圍内に於て農業が營利化し企業化する可能性を必しも否定するものではないけれども、否、時としては農業の營利化を促進する効ある場合もあることを否み得ないけれども、而もかゝる農業保護思想が營利以上の或るものに基けるものたる限り、それは同時に非營利的なる自給農業が存續する場合には之を保護する結果を數次生むものであり、又時としては此の事を意識的目的とすることすらあるからである。第三は以上のいづれにも屬せず、傳統を保守せざると共に農業の資本主義化をも欲せず、別に一個の新軌道を進まんと試するものであつて、協同組合主義、農業社會主義、乃至共産主義の農業政策などが之に屬する。

農業が將來の進路は大別して以上三種ある中に果して其の何れを以て最も望ましきものとなすか、又現實的に成就の可能性あるものとするか。これは經濟組織の發展に關して必然性ありや否や、換言せば吾人の個人的なる思惟意力によりて左右し難き社會經濟的法則ありや否や、如何により大いに動かさるゝ問題であり、又經濟生活に對する吾人の理想並びに夫れが農業に於ける妥當性如何の判斷によりて直ちに決定せらるゝ問題である。而して此の際特に吾人の注意すべきは經濟の指導原則を資本主義的たらしむべきや否やの問題と、經營の技術的形態を如何にすべきやとの問

團とは自ら別個のものたることである。即ち現代資本主義制生産の主要なる特質として、（一）資本の集中及び擴張、並に之に伴ふ經營規模の擴大、（二）企業者と賃銀勞働者との對立、（三）營利原則による經營の合理化、（四）市場生産の無政府狀態等を擧げ得るものとすれば、此の特性の第二以下は之を斥けつゝも而も第一は或る程度迄之を採用すること必しも不可能ではない。經營規模の擴大に伴ふ經營の機械化及び分業化の如きは、資本主義以外の原則の下に立つ經營と雖も容易に之を採り得るものである。現に消費組合の經營せる大工場の生産技術の如きは資本主義的工場のそれと比して何等の懸隔を見ない。而も其の經營原則は非營利的にして且其の生産は必要額充實を目的とするが故に、所謂無政府的なる市場生産とは全然類を異にするものである。尤も此の際賃銀勞働者は尙存するものであるが彼等は同時に工場の經營主たる消費組合の組合員たる資格を持つが故に一般の資本主義的工場に於ける雇傭勞働者とは其の立場を異にするのである。斯く技術的には資本主義制下に發育せるものを採用し、而も經營原則は之と異るものを採用し得る。併し乍ら資本主義以外に於ける多くの經營が槪ね傳統によりて支配せられしに反し一度資本主義の影響下に立ちたる後の經營は正に一個の經濟的合理主義によりて支配せらるゝを免れざるやうになりつゝある。そは一面には資本主義的環境の感化又は壓力の然らしむる所であり、一面には人間心理の變化に基くものである。如何となれば非合理性の輕蔑は近代人心理の特徵であるからである。但し此の合理主義の基準は必しも資本の最大收利力を目標とする資本主義的營利原則たるを要せぬ。最大利潤の獲得は資本主義王國に於てのみ專制の威を揮ふ暴君であつて、其の支配力は非資本主義的なる經濟的活動を統制する權威がない。然らば傳統の舊套を離れ新時代の要求を具體化せるものとして現代の混沌たる經濟界に乘り出す非資本主義的經營は如何なる羅針盤によりて其の進路を決すべきであるか。玆に現代の經濟的事業が當面せる新しき問題があり而して又新社會の生みの苦しみがあるのである。

以上の問題が純然たる資本主義的企業をも漸く傾はさんとしつゝある事は最近かの總同盟罷業を誘發する誘因となりし英國炭坑の經營問題等に於ても現はれる。漸落期に瀕せる資本主義的企業に茲に漸次に其の經營原則の修正を強要せられつゝあるものであつて、營利會社が其の勞働者を株主に加ふる試みの如きはかゝる反省の一發露である。さはれ經營原則の問題は未だ充分に資本主義化せざる、而して資本主義的環境の下に多大の不利を感じつゝも而も資本主義の彩色を次第に見つゝある農業に於て殊に痛切に考へられる。一方、資本主義制下に發達せる技術的形體は、その採用を利とするものなしとせぬ。今農業には企業化せざる中小農の存續が多いのであるが、此等中小農地方にては經營の規模様式並びに技術的機構を資本主義的大經營に近似せしめ、而も經營原則に必しも資本主義と同一ならざらしめること敢て不可能でない。現に農業界に於ける共同經營、共同作業、作業組合運動の如き、皆かゝる機運が其の片鱗を現はせるものであると云へよう。此の事たる資本主義が漸く爛熟期に入り、其の技術的形態が整備すると共に其の營利原則が全部的或ひは部分的に否定せられんとしつゝある今日に於ては特に重要視すべき事柄である。近代文明諸國に於ける反資本主義的の社會運動は措いて問はず、財産處分の自由並びに契約締結の自由に對する近時の各種拘束は法制的見地より資本主義に加へたる一撃である。一撃又一撃、資本主義の根幹が漸く揺らぐと同時に以上の問題は愈々切實に考へられざるを得ぬ。而して別個の經營原則に關する論爭の漸く喧しきを加ふるも亦當然なりと云はざるを得ぬ。

農業經營及び農村經濟の形態を如何にすべきやは、廣く經濟制度一般の將來と當務とに係はる事柄なるが故に、唯物史觀を信奉すると否とによりて之に對する見解を異にし來るべきと同時に、農業と工業との間に生産上の事情を均しくせざる事に關する見解の異同、乃至は農業界に於ける大小經營の技術的優劣如何の判斷に就きても結論を異にし來るべき問題である。そは又やがて農村が今日尚相當に保存し居れる共同社會的色彩を今日以上に濃厚ならしむべきや、又は

現在進行しつゝある經營の工業化する事實を一般化すべきことを決定するものとは考へられた。[illegible]
るべき資料の蒐集に種々の困難あり。又その影響する範圍廣大なるを以て今日未だ[illegible]にも一致せる
意見を見るに至らず、種々の論爭を見る次第であつて或は茲に之を詳述する暇を有せぬ。たゞ、農業に於ても工業と同
じく大經營の絶對的優秀なるを說きたる農業マルキシズムに對して、[illegible]上の[illegible]點を
明かにし中小經營存續の可能を立證せるダヴヰッド一派の修正說が相當に有力にして與る多數の支持を受け居れる事。
更に又最近米國の學者間に於て進みつゝある研究の示す如く現狀の下に於ては農は工に比すれば生產要素たる土地、資本、勞力の投下に於て伸縮の彈力性乏しく、爲めに經濟的週期の到來に對して特異の現象を示す事。經濟的合理主義を農業に通用するに當りては此等諸點を考慮するのみならず農民の特異なる心理狀態乃至は農村の共同社會的色彩をも充分斟酌すべきものなる事を一言するに止める。

以上の考察に對して更に一波動を及ぼすものは國際經濟關係である。世界經濟の發展は國際的分業を發育せしめて農產物の國際貿易を盛んならしめたと同時に、他面に於て地域的束縛を受くること比較的乏しき工業の世界的發達は特定國の純然たる工業立國をも漸く困難ならしめつゝある。米露等の穀物が歐洲に侵入すると同時に獨、米、日、等に於ける工業の發達が英國工業の世界的覇權を轉覆せしめしは活ける實例である。かゝる事實の示す如く農業生產と工業生產とに於て其の地域的分業可能の範圍並びに分業の利益の大さに差等ある事は、今後の世界經濟が解決すべき一難問の因をなして居るのである。而して安價なる外國農產物に盲目的に隨喜して國內農業を棄てたる國民經濟が早晩國內の勞力利用上に困難を感ずるに至るべきことは、英國現下の失業問題が吾人に示唆する所である。英國の學者中には他國工業發達の結果として英國の工業設備が過剩となりたることが英國失業の根本的基因であつて、國內農業の發達によつて此

の國民經濟的缺陷を除かざる限り失業問題の解決は困難なりと論ずるものが少なくない。此等事情を考慮すれば勞力の自由なる國際移動が政治的並びに社會的に大なる障害を受くる事なく行はれざる限りは國內農業維持の問題は單なる經濟的見地よりするも吾人の關心事たらざるを得ない。故に吾人は國內農業維持の問題は、世界經濟發展の趨勢に基きて經濟的合理主義の適用が國民經濟全體に擴張せられんとするに際して起るものなりと見ることが出來る。近きには農業の個々の經營に對して經濟的合理主義を如何に適用すべきやを考慮せるのであるが今は國內農業の全體に對して同樣の問題を考慮するものともいへる。この事たる亦現代農村問題の一特性をなすものである。若しそれ一朝有事の日を顧念しての食料及び原料國內自給說に在りては、これ全く軍事的事由又は戰時經濟的事由に出づるものであり、この際は經濟的合理主義の適用如何とは甚しく無關係なる別個の問題で、農業に對して外部より附加せられたるものであるから、而して之を解くべき鍵は政治的事情に存するものであるから、茲に之を併せ論ぜざるを賢なりとする。

以上論述せる所に基きて私は農村問題は其の內容の一重要要素として資本主義制下に發達せる經濟的合理主義を如何に農業經營に適用すべきものであるかといふ問題、及び國民經濟全體の合理的發展の爲めに農業に如何なる地位を與ふべきやとの問題を含めるものであつて、合理化的事は近代文明の特色であり經濟的合理主義は資本主義の産物なる意味において、此の事は今日の農村問題に近代的特色を押捺するものなりと信ずるものである。

二　階級鬪爭として見たる農村問題

次に一考すべきは現下の農村問題の重要なる一面は民衆的勢力の伸長を前提とすることである。現下の農村問題は所謂農村社會問題を含むで居り、農村社會問題中にありては農業經營內に於て勞務者の占むる地位如何の問題が主要なるも

のである。これは地主、企業者、勞働者を一身に兼ぬる自作農の場合に於ては見ることを得ないのであるが、勞働者が土地を資本の一又は二を有せずして農業賃銀勞働者或ひは之に準ずべき小作田農の形を取るときには發生する問題である。それは一面に於て農業の經營管理に關する勞働者の發言權の增減を意味すると共に、他面經營の成果を土地、資本、勞力間に分配する比率の變更をも意味するものである。換言せば財産權に對する勞働權、生存權の對抗に基く問題であつて、歐洲農業勞働者の組合運動、同盟罷業、又本邦の小作爭議の如きは此の對抗が具體的に現はれたるものであつて、斯の如きは社會階級間に於ける利害關係の衝突が明かに認識せられその結果として舊來の傳統が漸く維持し難きに至れることを示すものであると云へよう。此の意味に於て農村問題は社會的勢力の消長を意味する階級鬪爭を包含せるものと云はざるを得ない。

之を本邦の例に徵するに新潟縣下に於ける大地主對小作の對抗の如きは正にこれに當るものである。さり乍ら農村に於ける階級構成はヴァルガ其他の指摘せるが如く都會の工業界に比すれば遙かに複雜である。本邦に於ても地主、自作、小作、農業勞働者及び此の四者中の二又は三を兼ぬるものがあり、その内容は漸を以て移つて居る。西洋の學者は之を呼んで農業界の梯子（アグリカルチユラル ラツダー）となし最下層より最上層まで社會階級的上昇の途ありとなすのである。今純然たる大地主は工業界に於ける大資本家に比すべく、純然たる農業勞働者又は小作細農は工業勞働者に比すべしとするも、兩者の中間に位する人々は種々複雜なる利害關係の立場に立つものである。就中本邦に於て最も注意すべきは農村居住の中小地主である。彼等の中或者は若干自ら農業を營み或者は之を營まない。而して在來彼等は農村に於ける比較的上流階級を形作り徒食して日を暮すを得たとするも、今や事態は一變し支出の增大に對して收入之に伴はざる爲め漸く生活上の窮乏に襲はれて居る。昔日彼等と小作人間とに存したる生活程度及び教養上の差異は今や次第に消滅に歸せんとしつゝある。

否、場合によつては小作人以下の生活を營む小地主すらあるのである。此等中小地主は我農村に相當多數あり、三町步以下の中小地主にして耕作に從事せざるもの丶みを算するも一町村平均約九十戸に近いのであるが、農林省調査によれば大正十二年度に於て本邦內地道府縣――沖繩縣を除く――に於て耕作に從事せざる地主數九七四、六三一戸あり、同年に於て三町步以上の地主戸數は三九八、九一五戸であつて假りに三町步以上の地主は悉く耕作せざるものと定めて之を差引くならば、殘餘五七五、七一六戸は三町步以下の中小地主にして耕作に從事せざるものである。之を當時の道府縣町村數約一萬二千で割るならば一町村平均約四十八戸となる。彼等は小作料が適度に引下げらる丶時は生存の基礎を脅かさるるに至るものであつて、小作爭議が永引き小作料收入の停止したる場合に於けるその窮狀は往々にして小作人以上たる事がある。而して此等中小地主が自ら農業勞働に從事すべく土地の返還を求めて小作人と相爭ふ時、之は搾取被搾取兩階級の爭ひたる性格を脫して、消費人口が生存手段に對する用益權の爭奪を意味するに至る。斯の如き場合を階級爭鬪たる名稱を以て呼ぶことが妥當なりや否やに就ては少しく疑ひを存するが、固より何も新然たる、或は特殊の地方的經濟的事情によりこれが形成せられたる階級鬪爭が農村の內部に存在するの事實に至つては疑ふの餘地なく、我國にも他の文明國にも均しく現はれたる事實である。故に現代農村問題が農村に於ける階級鬪爭の一面を具備せることと、否數次にこれが問題の中心をなして居ることは之を認めざるを得ない。但し此の階級鬪爭のみを以て近代農村問題の本質の全部なりとする見解に私は致し得ないのである。かゝる階級鬪爭は既に往昔の農村にも若干は存したものではあるが、現代に於ける如く强力且普遍的なるものではなかつた。然るに近時は資本主義制下に於ける工業勞働者の階級的自覺並びに運動に刺戟せられて、農民運動又は農業勞働者運動が普遍的且永續的に發育しつゝある。生産手段に對する個人的關係に於て一は數次占有者たり一は使用者たるに過ぎざる差異あり、此の間に工業賃銀勞働者と同様（農業勞働者を除

く、と相異る所が存するが、勞働の利益を主張する立場に於ては全然一致して居るのである。その意味に於て農業勞働者と農民との連絡及び共同運動は各國民が我國に於て必ずしも見得ないのであり、殊に共産主義に於ては特に之を主張した
るもの、如く見受けらるゝ。

かゝる發現の形式は固より種々であるが、要に角額に汗して勞働する人々の立場を高めんとする意味に於ける闘爭の內在は、近代農村問題の第二の特色を形作ると云ふてよい。

四　都鄙の對立に基く問題

第三に農村問題中には尙數多の政治的社會的問題を含むで居る。都會偏重に對する農村の抗議、國民體質の低化又は思想の病化を防ぐべく田舍住民殊に農民の相當數を維持する必要有無の問題、乃至は前述せる食糧國內自給策等これである。此の中の最後のものは封建時代にも既に行はれたるものであり、偶々近世式國家の成立と共にそれが食糧政策と名けられて其の範圍を擴大したるに過ぎぬから、本質的に農村問題の現代的特色を形作るものと呼び難いのであるが、最初の二問題の如きは大都會の成立繁榮を特色とする近代文明の特產物であつて正に農村問題の現代的特色を發揮するものと云へる。都鄙の對立は昔にもありとは云へ、そは場所に於て少數なりしのみならず往時の都會は尙田舍的色彩を多分に有せるものであつた。されば今日の如き極端なる都鄙の對照を世界的に見た事は曾て無いと云ひうる。而してそが教育、藝術、政治、宗教等に關する各種の機關及び活動が大都會に偏在するとか、地方民の生活樣式が都會の流行を逐ふとか云ふ如き具體的事實より、進むで都鄙を問はず近代人の思想感情の全部を都會化し去り騷音化し去り器機化し去り高速度化し去らんとするに及んで、近代文明が都市中心的なる事實は愈々出でて愈々明瞭且深酷なるものと云へ

る。否、人の屢々例擧する農業者の公費負擔が市民に比して過重なりとか又は各種政策が多く都會本位なりと云ふが如き事柄は、個々以て此の近代人の都會的思想がその一端を現はせしに過ぎぬとも見得るのである。スペングラーは其の名著「西歐文明の沒落」第二巻中に於て這般の消息を說いて云ふ、自然を敵として之を征服して何物かを獲得せんと努めし初期的原人が耕作てふ不自然なる作業を營むに及んで彼れは掠奪を廢して生産をなすに至つた。而も植物を植うる農民は同時に自ら一個の植物化して大地に根付いたのである。人間の精神は自然的風物の中に一個の精神を發見した、而して、土地に緊縛せられたる新しき存在、新しき感觸が玆に到來した。敵たりし自然は友となり大地は母となつた。此の時に於て農屋は正に定住の表徴であり、自家所有地上に根づきたる聖なる所有物である。農民に取りての家に相當するものは文化人にとりては都會である。人類は其の發達の第二期に於て都會を建設し而して都會建設者たる文明人は或る意味に於て故郷なき智識的遊牧の徒となる。而も不思議なる哉玆に都會の精神が誕生する。其の根源は永遠に秘密なる、全く新しき様式の大衆(マッセ)精神が都會文化の一般的精神界より抽出され、生育し、そして觀易き形體を取る。個々獨立の歴史を有する住居の村落的集合體から次第に一個の統一體が生れる。――都會と村落とを分つものは環境にあらずして、個の精神である。――大都會は自由精神である。玆に於て人は再び遊牧の民の如く自由であるが、併し彼よりも狹く且冷たい。――

石造の巨人たる世界都市は凡ての大なる文化の終結期に於て作られる。曾て土地によつて精神的に形作られたる文化人は今や彼自身の創造物たる都會によりて所有せられ、把握せられ、遂に都會の創造物となり執行機關となり遂には其の犠牲となり終る。――

此の最後の都市は全く一個の精神を表現する。その家々にイオニヤ又はバロック都市の家々の如く曾て文化が出發せ

し[illegible]ではない。それに[illegible]住宅にはあらずして[illegible]にあり、而してこれも單なる[illegible]人[illegible]心により[illegible]られたる[illegible]である。都市は直ちに一個の世界であり、[illegible]としてのみ人[illegible]たる[illegible]を有するものである。

世界都市住民をしてかゝる人工的地域以外に住むを不可能ならしめたるものは、彼れの存在に於ける宇宙的諧調の後退を示すに外ならない。而して人々が警戒裡にある緊張は益々危險味を加へ來る。文明は緊張に外ならず凡ての文明人の頭腦は最鋭き緊張の占むる所である。理智とは緊張せる理解の可能性を指す。かゝる頭腦は凡ての文化に於て最後の人類に典型的なるものである。農民の巧智、先天的機智、本能は凡ての賢き動物に見ると同様に一種の感じによつて成り立つ所のものであるが、之が變じて都會的精神となり遂に世界都市的理智に到達する。而して此の道程は、又宿命的感念の不斷の減退、因果律に對する慾求の無制限なる增加となりても現はれる。理智とは無意識的生活經驗に代ふるに肉なくして瘠せたる思索の巧妙なる練習を以てせんとするものに外ならぬのである。

理智的緊張は休養としては唯一特殊のもの、即ち弛緩を知るのみである。眞の遊戯や生活の悦びは最早本質的に解せられなくなり、娛樂としては精神的緊張に代ふるものとして肉體的緊張を以てするスポーツが、又肉體的緊張に代ふるものとしては肉感的享樂、乃至知力的諧戯が、更に又日常の論理的努作に代はるものとしては神秘主義が採用される。活動寫眞、表現主義（エキスプレッショニズム）の藝術、神秘的宇宙觀、拳鬪、黑人舞踊、カルタ、競馬等、の全世界に瀰漫せる都會遊戯を見よ。而して此の間其の存在が土に根ざすこと益々薄弱となり神經の緊張益々加はりつゝありたる事實に基きて暗默の中に永く準備せられたる現象が、忽然として歴史の表面に現はれ一切の演戯の終末を近づかしめる。文明人の非生殖性これである。

以上に其の一部を紹介せるスペングラーの説は現代都市文明の本質に向つて鋭き解剖のメスを揮ひ都會文明の自滅作用を説きたるものである。本邦に於てもスペングラーにより多大の感化を受けたりと思はるゝ室伏高信氏の如きは都會の器械文明を呪ふて「土に還れ」を説き、都會による農村の搾取、工業國による農業國の搾取を罵つて居る。「みゝずのたはごと」を書いた美的百姓の徳富健次郎氏や、「或百姓の家」を經營する江渡狄嶺氏等にも同様の思想感情が現はれる。然し是等の思想を紹介批判することは本論の目的ではない。茲には唯都鄙の對立に基く問題が單に物質的設備の完、不完や、住民負擔の不公平などゝいふ小なる問題でなくして其れに依つて來る所、又其の影響する所がより深酷、より廣大なる一個の文明問題であることゝ、而して農村對都市の主張は此の個人的問題の解決に對する答案の一なることを傳へたならば私の望みは足れりとする。

此の都鄙の對立に基く問題が如何に解決せらるゝか。それは都鄙兩勢力の消長により決定せらるること大なるものであるが、此の都鄙兩勢力の大さが單に都鄙の經濟的實力にのみよらずして、現時の國際的又は國内的政治事情によりても動かさるゝ點多きこと（例へば農民の投票を得るべく政黨が農村振興を叫ぶの類）は注意を要する。更に又本問題の解決は吾人の思想並に社會理想によりて動かさるゝ部分の大なるものがあるが、此の社會理想の根底そのものに就ては、狹義なる經濟的環境の外に、より廣き社會的生活の全部並に祖先累代の生活經驗と遺傳とが相關與するものなることを忘れてはならぬ。

兎も角も現代文明の進路を決定する爲めに農村を如何にすべきやとの問題の存在することは幾多の實際的方策の決定にも關係するものであつて、現代農村問題の第一の特色をなすものである。

五　文明問題として觀たる農村問題

以上の外尚幾種の事項が存するが之を略し、上述せる所の三點、即ち第一には農業經營に對する經濟的合理主義の適用及び國民經濟內に於ける農業の合理的地位如何の問題、第二には農村に於ける階級爭鬪の問題、第三には近代大都會に對立する農村の文明史的使命如何の問題、此の三者を以て私は現代農村問題の三つの主要點並びに特色を形作るものなりと考へたい。而して以上に擧げたる三個の問題はそれ〲經濟、人間、及び文明を主體とするものであつて、概念的には之を明瞭に識別し得るが問題の領域には相交叉する所あり、又問題の水平線は必ずしも同一の高さではない。即ち第一は專ら經營の原則を考へ第二は主として人間の關係を考慮するものであつて、此の兩問題相互の間には密接なる關係あるものであるが、更に第三の文明を考慮する時には前二者は共にその一要素としてその中に加はらざるを得ない。何となれば文明問題を論ずるに當つては文明の構成要素たる經濟及び人的關係を考慮せざるを得ざるを以てゞある。然るに顧つて考ふれば經營原則を規範し人的關係を規範するものは經營並びに人的關係そのものに內在するにあらずして、これに內在する部分及び內在せざる部分を總括する所の標準、換言せば經營及び人的關係以上の標準でなければならず、而して此の標準が人類文明生活發展の傾向に對する或る判斷たるべきは云ふを俟たざる所であるから、第三の農村の文化史的意義に對する考察の結論は軈て第一、第二の問題を解決すべき基礎を與ふるものと云へる。此の意味に於て農村問題は文明問題なりとする私の提言は益々明かとなるのである。

更に少しく詳言すれば以上の事は一層明瞭となるであらう。先づ第一問題を見るに其の主題たる經濟的合理主義そのものが前述せるが如く實に近代文明の特産物なのである。それは自然科學の發達の影響を受けた近代人の心理と而して

唯物的なる資本主義的經濟との存在があつた後に於て始めて吾人の意識に上り來つたことである。合理主義は因果關係の判斷を基礎とするものであり、經濟的合理主義は因果關係の數量的判斷の上に成立する。資本主義的經濟も一個の合理主義の上に立つものであるが、唯貨幣價値より出發したその營利原則は人格價値又は幸福價値より出發せんとする新經濟の指導に對して妥當性を持ち得ないのである。茲に於てか經濟的合理主義の新らしき形態が考察せられる次第である。但し幸福又は人格の發展てふ如きものに附する價値が果して數量的計算を許すや否やは一個の問題であつて、故に經濟的合理主義なるものの到達し得べき限界があると云はざるを得ない。而して若し計算豫測し難きもの、因果關係を明示し難きものを以て凡て合理の範圍外に置くとすれば生物は合理ならざるものによつて支持せられ進化せしめらるゝことが餘りに多い。生物の本能の如き、又突然變異の如き、又は先祖歸りの現象の如きこれである。農業者の有する一種の感情や、經驗並びに傳統の尊重等が社會的生存々續の本能に基きたるものでないと云ふことを誰が斷ずることが出來よう。而してその一部は今尚必要なるものかも知れぬのである。英國に於て二三百年前かの土地圍込み法により村落共有地を處分せんとせし時多くの農業者は之に反對であつたが國家は之を斷行した。然るに今日に於ては當時の爲政者の理論よりも農民の盲目的反抗の方が遙かに正しく妥當なりしことを認めざるものは少ない。都會的社會主義者により て常に非難せらるゝ農民の土地所有慾の如き亦同樣に說明せらるゝ日の來らざるなきを誰か保し得ようか。近くは本邦に於ける明治以後の法則による新町村の合成、部落有林野統一事業の如き亦同種の批評を加へらるゝ可能性が多い。農民の保守又は非理論的慾求、或ひは合理的ならざる農業の經濟及び農村の機構が果して全然死滅せる前時代の生活の遺物を伴ふものに過ぎざるや。此等は現代に於て全部之を無視して可なるものなりや否やは此等諸點の研究を圖りつゝある吾人の熟慮を要する問題である。吾人は一時的流行的主義に基きて發生せる農民の社會指導並びに農業經濟の形式と、よ

り永久的にしてより本質的なる必要に基けることを閑却すべく努めねばならぬ。前者に對しては直に經濟的合理主義の適用を躊躇すべきではないが、後者に對しては輕々に斷ずべきではない。如何となれば合理主義は人間生活を決定する全部ではあり得ぬからである。近代の所謂科學的社會主義者や共產主義者の農業理論には此の點に關する驚くべき無省察が暴露されてゐることを認めざるを得ない。

更に國內農業維持存續の問題は國民經濟全部を合理化せんとの見地、及び國民的生存の安全を保持せんとするの見地より出づるものであるが、前者は經濟的合理主義の一適用であつて、而もそは後者と共に國際政治關係の變動によりて左右せらるゝものである。民族的文化と世界文明との關係によつて國際政治が動かされ、又ひいては國內農業維持問題も動かさるゝ事情があるが、煩を嫌ふて茲には說述を略するであらう。兎も角も以上論ずる所により經濟原則の問題及び國民經濟合理化の問題も亦一個の文明史的批判を伴ふものなることが判明したと思ふ。

次に第二の問題たる經營內部に於ける人的關係を考ふるに、此の關係決定の細綱は民衆中心文明を肯定するか又は天才中心文明を主張するかに依りて動かさるゝ所が多い。即ち文明發展の傾向及び速度、並びに之に關與する人間の數及び役割に關する見解が此の問題の解決方法を左右する點少なからぬのである。現代の民衆本位の考へ方は動もすれば質よりも量を重んじ、何事にも多數決主義を振り廻はし、文化創生力其他に於て現實に多大の相違ある各人を一切平等に取扱はんとする弊がある。倫理的意味に於て抽象的人格の價値を平等視することゝ、個々の現實人の特定問題に對する發言權、又は特定財物に對する處分權を平等化することとは自ら別問題である。特權の打破は特權が社會的進化の障碍たる場合に於て始めて意味あることであつて、之は逆に社會的進化を促進する爲めに他種特權を設定することを否定するものではない。現實の事例を見るも、ブルヂョア階級の政治的特權を剝奪せる勞農ロシアの共產主義者等は自ら一

の特權階級となり了したのである。プロレタリヤの專制を叫ぶ時は假令それが一時の過渡的制度なりとするも——何物か過渡的ならざる制度があらうか——正にその期間中プロレタリヤを特權階級化することを意味するに外ならぬ。然らば問題は抽象的に特權の是非を論ずることにあらずして、具體的現實的なる或所特權の社會的機能を批判することであらねばならぬ。抽象的に特權の廢止を叫ぶことは無意味、無根據に流れ易い。然るに往々にして無意味無根據にして且實行的に實現不可能と思はるゝ性質の平等論が、其の許されたる領域を超えて、具體的問題につき天降り式に指導的態度を採ることがあり、而も無批判なる多數決主義は之に盲從する場合なしとせぬ。所謂デモクラシーの危險は茲に潜んで居る。但し斯くいふことは現實に無條件に如何なる特權階級擁護の意味にあらざることは敢て說明を要すまい。

農村に於ける階級鬪爭の迎ふる途に動もすれば無批判なる多數決主義が酷な危險があるが、而も之に對する嘆ずべき反撥に現在の制度支持、乃至特權階級擁護をア・プリオリの出立點とするものであつてはならぬことは注意を要する。人によりては農村の階級鬪爭に對する立場は鬪爭當事者の何れか一方に味方するより外に無しと斷ずるものがある。例へば小作爭議に對する態度は地主的か小作人的かの孰れかに偏する外無しといふ。但し乍ら斯くの如きは、これ地主にも小作人にもあらざる第三者の存在を忘れたるものであつて、更には又吾人の意識構成の基礎たる生活經驗は經濟的利害關係の斷面又は社會階級的對立に基ける部分のみならず、それ以外のより廣汎なる社會生活に基けるものなること、否、遡りていへば吾人意識の一部は吾人祖先の生活經驗に基く所あるものなることをも忘れたる謬見である。吾人の理性並に感情は他人の生活經驗をも或程度迄は理解し共鳴し攝受し得る。かくてこそ始めて圓滿なる社會生活の可能性があるのである。一切の病氣を自ら經驗せずとも醫者になり得るものであるとすれば、爭議當事者としての經驗無くとも爭議解決者たり得ざる理はない。解決の方針を爭議當事者の意識の何れかに依るの外なしとし、而して數と力とが最後の判定

を下すものであつて又其の判定が同時に斯く止むべきものなりとする淺薄な斷定、是れ謂ゆる目的論者の常に吾人に與へ得ぬのである。唯物的綜合論以外の一切の態度を簡單に非科學的なるブルジョア意識と命名して排斥し去らんとするかの如き所謂科學的社會主義者の一派――果して無條件に科學的の形容詞を許容し得るであらうか――は自ら自己の墓穴を掘るものなりとの譏りを免れぬであらう。

更に考ふれば多くの國の農村に於ける階級爭鬪の主たる目的物は土地の所有權、用益權である。特定財物に對する特定人の關係を如何に定むるかが爭ひの骨子である。土地所有權なるものが歴史的に發生せる一の社會制度なることは云ふを俟たない。シュモラーは云ふ、『所有權なるものは其の外部的機能に於ては爭ひを防止し特定の動作範圍を限定するものであり、其の內部的機能に於ては社會的秩序である。換言せば個人、家族、組合、町村、國家を驅つて特定の共同動作に出でしむる所の一の制度である。所有權の歴史は社會並びに其組織の歴史、發展しつゝある道德的理念の歴史を常に反映するものである』と。然らば土地私有制に對する改廢は反面に吾人の道德的理念の變化を示すものとせざるを得ない。

獨逸新憲法は云ふ、『所有權は義務を拌ふ、所有權の行使は同時に公共の福利のためにせねばならぬ』と。我々は茲に新興せる社會的正義の念が如何に所有權に對して明確なる拘束を加へたかを窺ひ得る。さり乍ら翻つて思へば此の事たる所有權の發生及び發達がその齎らす社會的效果によりて是認されたものであると云ふ歴史的事實を意識して表現せしに過ぎぬ。所有權が反社會的作用を逞うするに及んで社會より拘束を受くるに至るべきは固より當然である。

更に『所有權は義務を負ふ』なる語は一の社會理想を現はせしに止まらずして、寧ろ現存せる吾人の心理的事實を說明せるものなることを私は痛感する。何となれば所有は執着と愛とを生み、而して愛は自我の主張と自我の沒却との兩

關を具ふる統一體なるを以てゞある。法律的の言葉を以て云ひ現はせば愛は權利であり又義務である。我が民法が親に子女を監護教育し又頻々干涉する親權を認むると同時に戶主の家族に對する扶養の義務を規定せるは、これ家族的愛情の性質を法文化せしに外ならぬのである。人に對する愛情と物に對する執着と相類する所がある。農民が自己所有の土地や家畜を愛護し之が爲に努力するは單なる利己心のみに出づるにあらずして寧ろ本能的愛情に出づることが多い。愛情は注意深き管理と努力とを自發的義務たらしめる。而してかゝる自發的義務の履行は個人的占有と相結ぶことが多いのである。茲に私有權存立の心理的根據があり社會的妥當性があるのである。故に所有が單なる權利のみを意味し義務を意味せざるに至る時、例へば地主が農地を以て單に收益の泉源とのみ見做すに至る時、かゝる地主存續の社會的意義は大半失はれたるものと云つてよい。さり乍ら又漠然たる農地共有又は國有の如き制度が、私有に源を發する土地愛撫の念を消滅せしむるが如きことあらば地力維持、生産の增進其他に於て社會的に憂慮すべき事態を發生せしめざるなきやを保證出來ぬ。自作制と小作制、農地私有制と國有制、この孰れが可なりやは兩者の利害得失を比較商量して決すべき問題であつて特定の時代と場所と歷史とを無視して抽象的に決すべきものではない。然らば現今農村に於ける階級鬪爭の爭因たる農地處分權に關する考察も亦文明史的見地に依らざるを得ぬのである。

以上略說せる所によるも農村に於ける階級鬪爭が單に現代文明の傾向によりて促進せしめられたるのみならず、其の解決は一個の文明批評家的識見を要する事明白である。農村問題が文明問題たるの實愈々明かであらう。

最後に第三の都鄙對立に基く問題が文明問題たるは茲に再び云ふを俟たない。

× × × ×

私は現代農村問題の三大特徵を舉げて而して此の三者が結局に於て一の文明批判に歸着するを說た。三大問題否其他

[illegible]をもつてある。[illegible]より[illegible]へよれる、或ひは見よりては之を重要とすべきか、さる程の幾多の問題が、均しく經濟的に農村問題と呼ばるゝ所以は、思ふに此の根本に於ける經濟の一致が[illegible]的に放任せられたるに基くのではなからうか。

個々の具體的問題を捉へて批判することは本論考の目的外に存する。故に本邦に於て營利的大經營農業を主張する説に潜む數多の弱點や、又廣汎たる農業的新開國と人口稠密なる商工的舊開國の農業とを同一視して均しく農業は資本主義制の下には死滅の外なしと輕斷する議論の不用意や、或ひは小作權の確立を以て一切の農村問題を解決し得べしと思ふ見解の極めて近視的なることや、都會プロレタリヤの感情と論理とを以て農民を指導し得べしと考ふることの荒唐なること等に就ては敢て詳説すまい。隱れたる深所を探るの人にあらざれば表面的事實の正確なる判斷も不可能である。而も深きを探る人が唯物史觀の限られたる門戸以外に一歩をも踏み出さざる慨あるは我國思想界の落莫を感ぜしめるものである。社會改造を論ずる進歩的思想家が經濟的事實殊に財貨の生産及び分配關係のみに眩惑せられて、より廣き社會的事實に對する觀察に缺けたる所あるは世界を通じての缺陷であるが本邦には特にそれが著しい。此の中にありて生物學的見地より社會現象を批判する丘博士の如きは、その結論に一々首肯すべからざるものありとするも一異彩たるを失はぬとすべきであらう。獨逸に於てはエルスターーにより最近に社會生物學樹立の試みを見た。凡ての社會政策の指導原理を社會的發展にありとし、而して社會政策の二大要素たる經濟及び人口を此の社會發展の概念によりて連結し、生物進化論に説く所の適應及び淘汰の二原理をそれぞれ經濟問題及び人口問題に應用せんと試みたるオットー・キューネの新説の如きも亦同じ傾向に屬するものである。社會問題研究に關する吾人の視界を大ならしむべき時期は今や漸く迫りつゝある。マルキシズム萬能の迷夢より醒むることは眞にマルクスを理解することであらう。斯く論ずる事は徒ら

に混沌たる現實の事象を無差別に堆積してマルキシズムの現在の理論を不鮮明ならしめんとするのでは決してない。否、寧ろ現在の多くのマルキストの研究の前提と論理との妥當する限界を示唆し、其の越權を戒むると共に社會科學の研究をしてより深く且より廣からしめんと欲するに外ならない。或意味に於て社會科學は今や一大改造をなし一大躍進をなすべき時機に際會して居る。現在其の存する理論の修正を迫らるゝことを恐るゝの餘り、新事實と新見解との混入を避けんとする態度は、社會科學自ら其の存在の理由を失するものである。逆に社會科學的眞理が現行制度を脅かすことを恐れて社會科學の自由なる研究を抑壓するに至つては其の愚及ぶべくもない。如何となれば吾人の恐るる所は社會科學的眞理の批判力にあらずして、却つて今日の社會科學に內在する缺陷と獨斷との存續であるからである。而して社會科學の缺陷と獨斷とを除く唯一の途は、社會科學の研究を抑壓することにあらずして、寧ろ益々其の研究を深むることにあるからである。

私の所論は少しく岐路に走せた。私は玆に本道に戻つて最後の一言を述べたい。

かつて或る論者が其の領內に抗毒素を發生する如く現代の都市的、資本主義的、工業的文明の內部は社會主義を發生せしむると共に農村問題を發生せしめた。農村問題の發生は人類の社會的生存本能が無意識的に自衞手段を取り、現實の問題を捉へて意識化されたるものとも見るを得べく、又近世の都會文明が自己反省をなせるものなりとも見ることが出來る。タゴールはいふ、西洋文明は石造都市より出發し、東洋文明は森林生活より出立すると。吾人は農村問題を以て右の文明に對する森の文明の相剋と見做し、而して之が解決策として一向に物質文明を排して以て滿足すべきであらうか。否、渺然たる復古は望むべきでなく又成就すべきでない。吾人の欲する所はより大なる合成である。吾人は都會文明に、又吾人の理智的活動に其の歴史的使命と意義とを認むることに決して吝かでない。唯之が妥當なる領域及び時

界を留さこに會生活の目醒と曾らさんとする時に正に想起たる如何のことまでを以てするに過ぎない。

之を要するに農村問題は廣義に之を解する時は一個の文明問題である。それは現在の農村が經濟的に、[illegible]的に、政治的に、文化的に如何に展開し行くか、又行くべきものたるかに就ての考察であり、此の考察は又現代文明の趨勢に對する批判を其の前提とするものである。農村問題の内容の複雜なるは正に現代人の生活並に心理の複雜なるを反映するものたるに外ならない。此の問題に對する吾人の心胸中には土に親しむ原始的生活を讃美するトルストイの感情と、自動車、飛行機、新聞、ラジオを悦ぶ二十世紀人の理智とが相交錯して居る。農村生活そのものゝ中にも各種の傳統的慣習や其の他往時の共同社會的生活の名殘りを示すものと、世智辛き現代式事務や新しき諸機關などが並び存して居るのである。問題解決の容易ならざるは何文明の意義を解するの容易ならざるが如きものである。然らば問題の解決せざる中に、混沌たる社會的文化的動搖の波に吞まれて農村は影を沒し農民は亡び去るであらうか。スペングラーは之に答へて云ふ「農民は永遠の人間であり、都市に巣喰ふ一切の文化より獨立せるものである。彼れは都市に先つて在り而も都市無き後にも存す」と。果して然るや否や、玆に一個の大なる謎がある。吾人の意識的努力は或程度迄時代の波を動かすであらうが、時代の流れは此の努力と及び一切の他のものとを載せて運行し、而して上述の謎を自らにして解くであらう。吾人子孫をして荒村行を歌ひしゴールドスミスたらざらしめば蓋し至幸である。（終）

が、しかし小作米は依然米納のまゝを續けたため、其の後の米價の騰貴によつて地主の租稅負擔は實質上著しく輕減せられた。

（ホ）加ふるに、米價騰貴の利益は、以上（イ）及（ロ）の如き土地制度の改革の結果、いまや專ら地主の懷を肥すこととなつた。即ち、小作料其他となつて、小作人は依然昔ながらの收斂に苦しんだ。

之を要するに、明治初期に於ける土地制度の改革は、從來の封建的農業制度の不利を解放して、少からぬ利益を農業に約束したのであつたが、その利益、例へば土地賣買の自由、耕作物選擇の自由、輸出の自由、公租の輕減、米價其他農産品價の騰貴、泰西農業技術の模倣による農産増加、と云ふが如き利益は、殆んど皆地主の壟斷する所となつた。勢ひ、地主は、この巨大の利益を追求して、及びその利益によつて、多々益々必要の資本を賄ふことが出來て、農業の開發進歩に努力し、茲に我が農業は異常の發達を來たすこととなつたのである。が、この發達は大體に日清戰争を轉機として已に漸く停頓期に入り、日露戰後に於ては、明かにその傾向を認め得るに至つた。

（註一）その算出の仕方は遠からず上梓する筈の我國農業發達に關する拙著參照

B、農業國より商工業國への發達

明治維新後に於ける經濟的發達の第一歩は、當時の我が經濟事情よりして、自然、農業に先づ最も大規模に現はれたが、しかし、それと並行して、而して未だ小規模ながらしかも最も長足の進歩を以て發達したものは商工業であつた。この商工業の發達は、始めは、主として、銀行、鐵道、船舶と云ふが如き、産業の大動脈を中心として長足の進歩を遂げたが、日清日露の兩戰役後に於て、各種の工業はその第一期の發達を見、他方、商業に於ても、これ迄、その大部分を外國商人に獨占せられてゐた外國貿易の大部分を邦商の手に收めるの大發展をなすに至つた。

しかし、いま我が商工業が斯樣に第一期の發達をなすためには、云ふ迄もなく莫大の資本を必要としたわけであるが、この資本は最初如何にして賄はれたかと云ふに、その大部分は、初め、地主の手によつて供給せられたものの如く考へられる。なる程、その資本の中には、舊大名、舊武士等が家祿の代りに一時的に得た資金の少からぬ部分が投ぜられたことも明かな事實であり、又、舊來の町人階級より供給せられた額も少くはなかつたであらう。しかし乍ら、何と云つても當時の我經濟の

大部分は農業であつたから、資金の大部分の出所は、結局は農業に頼る外致方のない位地にあつた。然るに、前陳の如く、明治初期の土地改革は、これ迄、領主の苛斂誅求せし搾取を地主の手に取り戻した上に、その後の資本主義經濟の發達に伴ふ巨利までも、之を全部地主の懐に入れる仕組となした。試にいまその一例として、地主の地租の負擔の激減と、小作料收入の激増との有樣を、一の推算によつて第一表及び第二表に示すであらう。(その推算の仕方に關する詳細は非常に複雜してゐるので、遠からず上梓する筈の我國農業の發達に關する拙著にゆづる)

(一) 地租負擔増減累年推定表

五ケ年平均	他租税率に由り推算せる地租額	東京の一石米價	同上により換算せる地租石數	同上の指數
明治七年度	千圓 四九、四六三	圓 六・一六	千石 八、〇三〇	一〇〇
八—十二年	四四、五一七	六・四五	六、九〇二	八六
十三—十七年	四一、二一九	八・四七	四、八六六	六一
十八—廿二年	四一、二一九	五・六一	七、三四七	九一
廿三—廿七年	四一、二一九	七・八九	五、二二四	六六
廿八—卅三年	四三、八五七	一一・〇九	三、九五五	四九
卅四—卅七年	五七、七〇六	一二・九〇	四、五七三	五七
卅八—四十二年	九〇、六八二	一四・六三	六、一九八	七七
四十三—大正三	八〇、一三〇	一七・八一	四、四九九	五六
大正四—八年	七四、一九五	二五・〇八	二、九五八	三六
大正九—一三	七四、一九五	三六・三五	二、〇四一	二五

第一表によると、地主の地租負擔は、[illegible]正の結果、已述の如く約二割以上の減少を來たせる上に、その後の米價の騰貴其他によつて、その二割減の地租も、明治三十三年頃から明治三十七年頃の間には、大體に約半減してゐることになる。斯く、地租負擔の激減が、地主の懐を豐富にしたること云ふ迄もないが、その上に、米價の騰貴、小作料の引上げによつて、地主の收入は著しく增大した。例へば、大摑みにそれを推算した第二表によると、地主の小作米收入は之を金額に直すと明治十八年に一億二千八百餘萬圓なりしものが、明治四十一―大正一年に至る五ケ年平均に於ては三億五千九百餘萬圓となり、大正五―九年平均に於ては七億二千四百萬圓に激增してゐる。而して、いまこの中から公租(第一表の分は中央地租のみであるが、この外に地方の地租附加税が最近年に於て就中激增してゐるのでその兩者を意味する)を差引くも尚第二表下段の如く、明治十八年の一〇〇に對し明治四十一―大正一年平均は二六八、大正五―九年平均は七五四となつてゐる。

(二) 小作米による地主所得金額推定表

年次	全國平均指數小作料高	地主所得推定小作米石	米價	地主の小作收入金額	公租(中央及地方)	差引地主所得金額	地主所得金額ノ指數
明治一八年度	一〇〇	石 九、七三二、六〇八	圓 六・五五	千圓 一二八、七六二	千圓 四六、九三二	千圓 八二、八九九	一〇〇

明治四十一 大正一	一二〇、三三[illegible]、[illegible] 石	[illegible] 圓	[illegible] 千圓	[illegible] 千圓	二九[illegible] 千圓	[illegible]
大正五 九	一二[illegible] 石	[illegible] 圓	[illegible] 千圓	二〇八、[illegible] 千圓	六[illegible] 千圓	[illegible]

然るに、斯様にして地主の手に這入つた巨大の利益は、――搾取は――封建時代の如く領主及その子飼ひの武士階級の遊食者流のために全部浪費せらるることなく地主によつて先づ農業の開発に利用せられた。之れ、前陳の如く、我が農業が維新以後急速に発達するに至つた根因であつた。所で、斯の如き農業の発展には限りがある。就中我が農業物価が騰貴して、外国農業の競争水準にまで近づくに至つてさうである。然るに他方には、宛もこの時に於て、泰西の方法による商工業の有利なることが一般に知れ、且つ金融制度、會社制度等の発達によつて、何等商工業に関する知識なくとも、坐ながらにして容易に資金を商工業に投資する途が開かれた。斯様にして、地主の手に集まつた利益は、今度は農業に投ぜられる代りに、直接間接、旺んに商工業に投ぜられるに至り、茲に、我が経済は、従来の農業本位より著しく商工業化するに至つた。之れ、大體に日清戦争以後のことである。即ちこの時に於て、前述の如く、我が農業が一應発達の峠に達したる事情の半面にして、爾後我が農業は愈々資金の涸渇に苦しむこととなり、之に反して我が商工業は長足の発展期に入つた。

いま、この我国経済の商工業化の有様を、人口より伺ふに、假りに人口一萬以下の町村を農村人口と見、一萬以上の市町村人口を商工人口と見做せば、明治十九年には商工人口は全體の一二%に過ぎざりしものが、二十二年から二十五年にかけて一五%となり、三十一年には一八%と徐々に増大し爾後この率は急速となつて、大正二年には二七%六二に飛躍し、大正九年には三二%一三に激増してゐる。例へば第三表に詳示せる通りである。

（三）人口の都市集中表

年次	實數 人口一萬以下の町村現住人口	實數 人口一萬以上の市町村現住人口	實數 合計	百分率 人口一萬以下の町村現住人口	百分率 人口一萬以上の市町村現住人口	百分率 合計
明治十九年	千人 三四、[illegible]	千人 四、八[illegible]	千人 三八、[illegible]	% 八八、[illegible]	% 一二、[illegible]	% 一〇〇、〇
明治二十年	三四、六八[illegible]	四、九〇一	三九、[illegible]	八八、[illegible]	一二、[illegible]	一〇〇、〇
明治二十一年	三四、九[illegible]	五、一七〇	四〇、一〇[illegible]	八七、[illegible]	一三、[illegible]	一〇〇、〇
明治二十二年	三四、四[illegible]	六、二[illegible]	四〇、六九一	八五、[illegible]	一五、[illegible]	一〇〇、〇
明治二十三年	三四、八六二	六、〇八[illegible]	四〇、九六九	八五、[illegible]	一五、[illegible]	一〇〇、〇
明治二十四年	三五、〇六[illegible]	六、[illegible]八	四一、[illegible]	八五、[illegible]	一五、[illegible]	一〇〇、〇
明治二十五年	三五、[illegible]一	六、四四六	四一、六九七	八五、[illegible]	一五、[illegible]	一〇〇、〇
明治二十六年	三五、[illegible]	六、五三五	四二、〇八二	八四、[illegible]	一六、[illegible]	一〇〇、〇

明治二十七年	[illegible]	六、[illegible]	四三、[illegible]	八[illegible]、	一[illegible]、
明治二十八年	[illegible]八、一一一	六、[illegible]	四四、[illegible]	八[illegible]、	一六、
明治二十九年	三六、二七三	七、一二八	四五、[illegible]	八[illegible]、	一六、
明治三十年	三六、五九四	七、四八[illegible]	四四、[illegible]	八三、	一七、
明治三十一年	三七、三六〇	八、〇四三	四五、四〇五	八二、	一八、
明治三十六年	三八、四九四	一〇、〇四九	四八、五四三	七九、	二一、
明治四十一年	三八、八八四	一三、八九九	五二、七四[illegible]	七五、	二五、
大正二年	三九、九〇七	一五、二二四	五五、一三一	七二、	二八、
大正七年	三九、五三五	一八、五五二	五八、〇八七	六八、	三二、
大正九年	三七、九二七	一八、〇三六	五五、九六三	六八、	三二、

1 本表は帝國統計年鑑による
2 現住人口の調査は三十一年以後は五ケ年毎に變更する

C 對內相手の產業より對外相手の產業への發達

以上に述べたる如く、我が經濟は農業國より商工業に進化したが、しかし、その商工業の多くは、始め專ら、內地人相手の產業であつた。蓋し、外國製品の輸入は、(一)關稅による保護ある上に、(二)運賃保險料並に手數料等の障壁あり、(三)加ふるに嗜好其他のハンヂキャップあるため、著しく競爭力を阻害せられる。勢ひ、そこに、內地人相手の產業發達の餘地が出來るわけであるからである。例へば、右の(一)及(二)に二割を要すると假定せば、我が產業の生產費は百二十圓に上る場合と

量、[illegible]

しかし乍ら、我國の如く[illegible]國に於ては、[illegible]地相手の產業の、販路は間もなく飽和點に達し、爾後の發展は、專ら、對外輸出に俟つ外ない。事實、我が產業の工業化は、先づ、外國產業の比較的競爭力弱き內地相手に發達し、之を基礎にして或る程度の基礎の築かれるや、直ちに對外相手に極力進出してゐる。例へば、いま之を第四表によつて我が輸出貿易の內容について見るに、大體に工業製品を代表する「其他」の輸出は、明治二一―六年平均に於て全體の僅か七%八に過ぎざりしもの、同二十二―二六年平均に於ては二五%四を占めた。然るに、それが日清戰後の三十二―三十六年平均には三三%に飛躍してゐる。しかし、この工業品輸出發展の狀勢は、その實額を見るに於て更にハッキリト看取出來る。即ち、「其他」の輸出は明治二一―六年平均と同二十二―二十六年平均との二十年間に於ては、百三十萬圓から七千六百萬圓と、七千五百萬圓を增加したに過ぎないが、日清戰後の三十二―三十六年平均に於ては二億四千萬圓に飛躍して、十箇年間に一億六千四百萬圓を著增し、更に次の十ケ年間には二億五千二百萬圓激增してゐる。

（四）輸出貿易内容の工業化

	實額 食料	實額 原料	實額 其他	實額 計	百分比 食料	百分比 原料	百分比 其他	百分比 計
明治二十一—二十六年平均	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇
二十七—三十一	[illegible]	四〇、一六二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	二五・四	一〇〇・〇
三十二—三十六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一四〇、八〇〇	一三・一	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇
四十一—大正二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇
明治四十三年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇
大正二年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	九・八	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇
六年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇
七年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇
十年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇
十三年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一〇〇・〇

（備考）・本表は各年貿易表に从ひて作成したもの、この中、原料とは貿易表中の綿糸布同材料、皮革竹角牙等細工品類、油脂蠟及同製品類、薬材化學藥品及化學製藥類、染料顔料塗料及塡充料類、紙類及同製品類を合し、無印は大藏省貿易表のものに由る。

斯様に、我が産業が對内相手より對外相手に發達せる結果として、我が産業の外國産業との競爭は益々激烈を極め、後述の如く、支那其他の後進國の産業發達が、直ちに、我が産業の繁榮を脅かすこととなるに至つたのであるが、尚ほ、支那産業の發達が斯く我が産業の繁榮を脅かすに至つた理由としては、我が資本主義的工業第一期の發達は、専ら、粗工業を中心とした

ものであつたと云ふことを看過してはならない。が、これについては次に別述する。

二　我産業第一期の資本主義的發達の原因とその行詰の理由

A　第一期の資本主義的發達の原因

以上に述べたる我が産業第一期の資本主義的發達は、周知の如く極めて順調に且つ急激であつた。然り、我が國民の間に、一の自慢話となつてゐる如く、歐米が數百年の歳月を要して達し得たる所を、我が國は僅か四十年ばかりにして、一躍に飛躍し得たのであつた。しかしながら、歐米に比し極めて短時間に斯くも長足の進歩を遂げ得た譯は、特に日本人が優秀であつたと云ふよりも、寧ろ、左の三點に負ふ所が大であつたと見るを妥當とする。

一、歐米に於て多大の犠牲と數世紀の時間とを費して、發達

[illegible]ち、只實行上の第一歩として土地所有權の喪失を主張するものである。故に理論的には之等の人々と社會主義者とを區別する必要は無く、單にタッティックの見地より特別の批評に値するのみである。(二)と(三)は資本主義經濟組織の社會的害惡が土地制度のみの根本的改革によつて免れ得られることを信ずる者である。而して實に(一)に於ては土地所有權を廢止し、之を公有に移すによつて、(二)に於ては土地所有權を其儘に認め、只何等かの形態の地租を賦課し地代を徴收することによつて七分其目的を達し得ると云ふ。私の考ふる所では、法律的見地よりは兎もあれ、經濟的見地よりすれば、此兩者を別個のものとして取扱ふ理由に乏しい。經濟的見地からは土地所有權が土地の生産的又は消費的なる直接の使用權と地代收得權との集合であると考へることが出來る。然らば土地所有權を認めて地代の私有を許さざることゝ、土地を公有として地代に等しき使用料を以て之を私人に貸與することゝは名義上の差に過ぎない。強いて其區別を求むるならば、地代は租税として徴收することゝ、土地の使用料として收納することゝ何れが手續上簡便なるかを問題とするに止まるであらう。故に結局ディールの所謂本來の土地改良主義者のみが茲で論ぜられることになる。

[illegible]である。土地と資本とである。茲に土地と云ふのは[illegible]みならず、凡ゆる自然の原料並に勢力を含み、[illegible]に對して資本財貨は其れ自身勞働と土地との結合によつて成り、單に勞働の生産力を增加する手段に過ぎない。併し生産の時間を考慮に入れる時には、無視し得ざる生産の要素となる。

生産物又は其價額は前記三種の生産の要素を以て生産に協力したる報酬であり、勞働には賃銀が支拂はれ、資本には利潤が與へられ、土地には地代が割當てられる。

然るに生産の要素中に於て土地は生産し得可からざる、從つて增加し得可からざるものであるから、其獨占的地位によつて、生産物又は其價額の中で、資本並に勞働が忍び得可き程度の報酬を得たる以上のものは凡て土地所有者が横取りすることが出來る。從つて經濟並に技術の進歩によつて生産力が增加すればする程地代も亦增加し、小數の地主の手に文化の恩惠である富が集積する。而も彼等は何等其所得に値するものに非ず、土地が獨占的位置を占むるに至つたのは、人口の增加の結果であり、土地を利用して營まれる生産額の增加は云はゞ凡ての人人の協働によつて生じたものである。何人も自己の勞働によつて生産したる物は自己の所有とすることが出來る。賃銀は正當

た所得である。資本は云はゞ過去の勞働の蓄積である。其意味に於て利潤の取得は是認さる可きものである。獨り地代は他者の勞働の結果を搾取りするものであると云ふのである。

土地と其他の財貨との間に存する根本的區別に氣付いて土地が小人數に獨占せられ、彼等地主が多數の者の生活の機會を狹め、土地の使用を許可する條件として生産物の大なる割合をば横領して取得することを禁止するため、土地に對し特別の法制を認めねばならぬと云ふ見解並に實行は、獨逸の土地改良主義者の泰斗アドルフ、ダマシュケの云ふ所によれば「經濟學史」並に「土地改良」最古の人文とも云ふ可きハムラビの法典に見出すを得、其後如何なる民が如何なる時代に於ても其思想は保存せられ、且つ多少の實行となつたと云つて居る。併し工業の發達が大規模なる資本財貨を出現せしめたる以前に於ては、土地は全部の生活の機會を意味して居たものであるから、土地改良主義者の意味に於て土地と他の財貨との本質的なる差を知つて居たかは疑問である。寧ろ生活の機會を不等ならしめるための實際政策が當時の經濟事情に於て偶然土地政策たる内容を有するに至つたのでは無いか。併し斯かる性質の思想若しくは實行並に一定面積の土地に就て絕對的權利を有する者にのみてある土地を利用する權利は自然權の一内容である、等の法律的性質を有する思想を別として、近代土地改良主義の經濟學的根據を築いたものは何と云つてもタヴィツト、リカードの近代學說である。彼は有名なる定式的說明に於て肥度の異れる種々なる農地が存在する場合、人口が增加し最早第一等の農地より與ふる穀物を以てしては不足なる場合に、第二等の農地が耕作せらるゝが故に――一定の技術を前提し、同一の農地に或程度以上の勞働並に資本財貨を利用すれば、所謂報酬漸減の法則の支配によりて、益々割合惡しき報酬の生産物より外収得し得られざるが故に耕作は劣等の農地に移る――同量の勞働並に資本財貨を利用して、兩農地の與ふる生産物の差か、第一等の農地の地代となる。何となれば常に市場に於ける穀物の價格は自由競爭によつて一樣に決定せらるゝ。其價格は第二等の農地に利用せられたる資本並に勞働に相當なる利潤並に賃銀を與へ得る程度に定まるであらう。何となれば其より低ければ第二等の農地の耕作は撤棄せらる可く、穀物の不足は價格を騰貴せしむるであらう。反對に其より高ければ第三等の農地が耕作せられ穀物の供給が過剩となるからである。斯くして耕作せられる、最劣等の農地――之を耕境の農地と云ふ――に於ては利潤並に賃銀より外得られないが優等の農地に於ては、其れ以上に餘剩が殘る。これ「土地の原始の且つ破毀し得可からざる（優秀な

[illegible]其後人口が一層増加し、穀物の價格が騰貴し、第三等の土地が耕作の土地となれば、第二等の土地にも地代を生じ、第一等の農地の地代は其れだけ増加する。

斯かる地代の發生並に増加は農地の位置に差がある場合にも、亦報酬漸減の法則の支配に依て相次で利用せる資本財貨並に勞働の各單位の收益力に差がある場合にも認められる。尚土地が生産の要素として或は事業財貨として優劣の差を有する限り農業のみならず、他種の生産に於ても、並に土地を事業財貨として——例へば住宅地として——利用する場合にも認られる。

今、當爲問題の立場にあつて前述のリカード地代論を考察すれば、二つの顯著なる地代の性質が直に眼を射るであらう。即ち第一は地代が不勞所得であることであるし、第二は地代の取得に當つて何等の新しき富の生産を伴はないことである。地代は自然的、社會的事情によつて生じ、地主は寢ながらにして之を受ける。賃銀並に利潤が取得せらるゝ前には、必ず其に相當する有要なる勞働が提供せられ、又は資本財貨が蓄積される。獨り土地については昔より今日まで一定不變の量をもつて存在して居る。併しリカード自身は、技術の進歩を無視したる一定の假定の下に地代が利潤並に賃銀に對し如何なる割合をもつ[illegible]實現せる社會状態を考へ得ざりしが故に、[illegible]増大するも小作人が之を取得するだけであるとし、之を社會に歸屬せしむる點に氣付かなかつた。彼は寧ろ自由貿易政策の實施により海外より多額の穀物が輸入せられ、穀價の下落により地代の甚しき増加を阻止することを期待して居た。

英國正統經濟學派の中でも既にジョン　スチュアート・ミルは其『經濟原論』に於て地代論の應用に氣付き、土地増價税を起し、少くとも地代の將來の増加を徴收することの社會正義に適合する所以であることを論じて居る。併し斯かる主張の普及と共に甚く土地改良主義運動と云ふ實際勢力の發生に殊勳を立てた者はヘンリイ・ヂョオヂである。彼は其名著『進歩と貧困』に於て、リカードの地代論から分配に關する法則を演繹し、利潤と賃銀は常に最も不利益なる生産條件を有する、從つて地代を生ぜざる土地に於て營まれたる生産の收益によつて決定せらる。故に人口増加して益々劣等なる土地が利用せらるれば、利潤と賃銀として國民所得より受くる分け前は少くとも相對的に絶へず減少する。否遂に最劣等の土地すらも悉く占有せらるゝに至れば、此生産の要素を使用するための許可を得るために、資本と勞働とは再び得可き最小限度の報酬を受けて[illegible]地

主に獻ずる。從つて文明進步の恩澤は悉く小數の地主が獨占し、玆に巨富が蓄積せらるゝに對し、利潤と賃銀とは一定の程度に限局し、玆に貧窮を生ずる。從つて進步と貧とは地代の私有を認むる間は避け難き社會の病患として現はれると述べて居る。

彼の著は人間愛の熱情に充ち、其筆力は宣傳的效果を有し經濟利益に最も苛酷であつて、且つ地代の徴收方法として有名なる地租單稅論を提唱した。

（五）我國小作爭議と土地改良主義

然らば前述の如き土地改良主義は我國現下の小作問題と如何なる交渉を有するであらうか。

何人も知るやうに我國の小作問題は大正十年を劃して新時代に入つた。小作人盲從時代から激烈なる小作爭議時代に赴いた。而して小作爭議の内容としては小作料の減免が壓倒的なる大部分を占めて居る。内務省並に帝國農會の發表する小作爭議原因を見るに、經濟的原因と時代思潮的原因とが相混じて居る。併し近年漸く不作又は米價下落等の例外的なる經濟的窮迫を緩和するための一時的なる小作料の減免に對して、永久的なる減免を主張するものゝ割合が增加しつゝある。米價は昂騰せざるに非ず、收穫は增加せざるに非ず、而も之等の經濟的並に技術的なる有利なる條件も、租稅の增徴による貨幣の必要、特に時代の風潮である生活程度の急激なる向上に原因する增加せる欲求を十分に滿足し得ない。

併し如斯く小作人が小作料の輕減によつて必要なる所得を得んとする時、地主は之に應ずるか又は應ずる能力あるかと云ふに大なる疑問であると云はねばならぬ。我國に於ては小作地のみに關する所有地並に耕作地の面積の分類を知るために信頼す可き統計を持たないけれど、前記の一般的統計から推察して小作人の耕地面積が其增加せる欲求をば從前の小作料（主要收穫物の五割五分の平均）を大に動かさずして充し得る程度から ず、他方に於て地主の所有面積が其生活程度に大なる影響を及ぼさずして著しく小作料を輕減し得る程度からざることを結論し得る。玆に我國の小作問題の最大なる難關が潜んで居る。勿論例外として新潟秋田山形の如き大地主の存在する場所に於ては小作料の輕減は單純に地主の遊蕩費の一部を割くことを意味するであらうが、大局より觀察すれば小作料の輕減によりて小作人の生活程度を向上せしむることは、地主の從來の、而も余り高からざる生活程度を脅威することゝなる。果して然らば小作料の永久的輕減の問題は解決し難き性質を有する。妥協の望は甚だ少ない。併し之がため小作人は生活程度の向上を斷念す

ることは[illegible]さら[illegible]地より生まれたたので[illegible]而して[illegible]合に於て[illegible]の土地改良主義の地代私有に對する否認を利用せられるであらう。勿論我國の小作人が地代を悉く國家に提供する程、私心無き者であるとは思へない。併し目前其消極的方面に於て即ち地主の地代私有の權利を否認する場合に己を利する武器が、他日其積極的方面に於て即ち凡ての地代を公有とする場合に、己を傷ける惧あればとて、始めより之が使用を斷念する程民衆は論理的であり得ない。況んや其際に於て地代は勞働所得と混同し、全く世人の注目を惹かざるに至る望あるに於てをや。

然しながら私は土地改良主義並に其我國小作問題への應用を其儘是認するものではない。

先づ我國の小作料が前述の事情の下に決定されるならば、地主は單にリカードの地代のみならず、小作人が自己の資本の利潤並に勞働賃銀として受く可き部分も亦地主の手に渡るであらう。此意味に於ては小作料を非認する二重の理由がある。併し他方に於て農地の收益の增加が土地改良等の資本財貨又は勞働の利用によつて生じた限りに於ては、之は『土地の原始の破毀し得可からざる力』によつたものでは無い。農地の殆んど凡の經濟的性質は絕えず回復改良せらるゝ必要があり、之がために地主

ここ[illegible]土地改良[illegible]は[illegible]つてつる、小作料の中に[illegible]り地主に之を所得する權利があり、而して此に永く許されたる農地に於てリカードの地代をば小作料から區別して計算することは全然不可能である。如し農地が絕えず消費せらるゝ時、農地の資本價値をば、現在の地主が蓄積せる資本を以て支拂ひたる場合、其者に取りては、地代は實質上利潤に代るものでは無いか。

尚土地改良論者が所得の分配とは其成立に貢献せる程度に於て生產の三要素に分取りせらるゝを意味すると云ふこと、並に勞働のみが所得の正當なる權限となり得ること、地代のみが不勞所得であること、土地の私有を認むれば文明の進步の恩惠は悉く地主のみが私し貧富の差は之によつて生ずると云つたことは悉く誤つてゐるか、若しくは誇張されて居る。

前述の如く過去の投資の結果が永久的に土地の原始の力と結合したる場合を度外視しても、若しも生產物が生產の三要素の協働によつて生じたものであつて、其の何れもが必要條件であるならば、其貢献の程度を算出することは尙一片の紙片を切るに當つて鋏の兩刃の各が如何程役立つたかを知らんとする如きものである。加之斯かる、リイフマンの所謂分配に關する物質的見解によつては貨幣經濟に於ける所得を理解する譯には行か

ぬ。此場合生産物の價値より其資本立の費用を控除せるものが純所得となり、勞働、資本財貨、並に土地使用の價格が個別所得となるが、之等の數量を決定するものは市場に於ける其等の財貨に關する總需要と總供給との關係であつて、個々の生産經濟に於て各の生産要素が其結果に對し如何なる貢獻をなしたるやと云ふことゝは無關係である。從つて所得が提供せられたる、現在又は過去の勞働量又は其貢獻度に比例するものではないのである。

更に土地改良論者の分配論は勞働のみを正當なる權限と認めて居るが、此主張を徹底したる場合、老人小兒病者の如く勞働能力なくして必要多きものは當然慈善的基礎の上に生活を維持せねばならぬ。從つて此原則は論理的見地からは「各人が能力に應じて生産に貢獻し必要に應じて消費する」と云ふ分配の原則になるものである。故に單に苦痛を伴ふ勞働を利己的動機を與へて刺戟するものとして認めらるゝに過ぎない。又前述の如く斯かる原則が支配するには全然現在と別種の經濟組織を打ち建てねばならぬ。單純に地代をのみ徴收したのでは足らぬ。利子は顯著なる不勞所得ではないか。今日資本の蓄積が其をば企業に於て利用するに依つて生じ、株券債券に投資するが如き利用方法が存在する時、禁慾説によつて資本蓄積の勞働的性質を辯護し得るか。又需給の不調和或は其他の如き社會的要素が一定の企業に所謂准地代と呼ばるゝ餘剰の利潤を與ふるを如何に見るか。

最後に現在迄に於て地主階級と資本家階級とが完全に混合したことを見れば、少くとも實際問題としては、地代の増加によつて資本家階級の所得が減少せられ其貧窮を齎らすとは云へ無い。特に地主は絶對的には尚頗る多數であつて、土地の需要者の間に競爭が行はれる如く、其供給者の間にも常に多少の競爭が存在するから、彼等が利潤並に賃銀として最低限度の生産物を殘し、他の全部を提供する迄土地の使用の許可を差控へ得るものでは無い。而して今日の如く生産經濟を營むために大規模資本財貨又は其に相當する資本金額を必要とする場合資本家階級こそ勞働者階級に對して、土地改良主義者が地主階級に認むる如き獨占的地位を主張し得るものではないか。

要之に地代は不勞所得の中で、最も顯著なる且つ最も永續的なるものであるとは云へるであらう。而して地主階級が農夫である小作人階級に對する時には、工業的資本家階級が勞働者階級に對して有する如き經濟的に優越せる地位を主張することが出來るであらう。從つて土地改良主義は幾多の缺陷と誇張に拘らず、否寧ろ其偏したる且つ誇張されたる點が反つて民衆の心を捕ふるが故に、前述の如き事情にある我國の小作爭議に必ず利用されるであらう。「進歩と貧困」の邦譯が我農村に愛讀せらるゝ曉には、我國現行の經濟組織の原則が脅かされる時であらう。我國に於ける社會的地震帶は實に都會に存せずして農村に存する。工業勞働者問題に存せずして小作問題に存する。カール、マルクスに存せずしてヘンリイ、ヂョウヂに存するであらう。

失業問題の由來

法學博士 渡邊鐵藏

(一)

失業問題は歐洲大戰爭後の經濟界の不況と共に少しづゝ我國でも其萌芽を見るやうになつたが、大震災後の我經濟界の大打擊と之れに伴ふ政府の可なり徹底した財政緊縮方針の影響を受けて、啻に工業界のみならず、一般の經濟社會並びに官公の職業の方面に於いて多大の整理淘汰が行はれて、益々失業の聲が喧しくなつた。加ふるに學生の就職難の問題は我國に於いて特別の意味に於て失業問題の反響を大ならしめる傾向がある。此失業問題は產業革命の發達の古い國では、之れに伴ふ缺陷の一重要現象として、最近數十年來この問題の解決は啻に國家や資本家が頭を惱すのみならず、社會一般が其前途の安全のために、擧つて頭を惱ます問題である。殊に戰爭終了後生產界の大激動と共に驚くべき失職者數を出した英國では、最も此問題の解決に頭を惱め、一時全力を盡した住宅政策よりは寧ろ此失業問題の解決こそ英國の、否世界の資本主義生產組織の發達した總ての國の最大の難問題と思惟するやうになり、終に千九百十一年に失業保險の制度を設ける迄に立ち到つたのである。

失業問題は近世產業國家の內部に潛むスフインクスである。近世文明は此謎を解決するか、然らざれば破滅するの外はないとまで云ふ者がある。併し昔の經濟學者は此問題を餘り重要視して居ない。彼等は單に經濟學の所謂「節約の方面」のみを見て居た。即ち國全體としての富の蓄積を主眼として考へた。經濟學の鼻祖と稱せられるアダム・スミスを初めとして、其後數十年の間經濟を論ずる者は主として國家間の競爭に就いて攻究論議し、國家が他の國家との競爭に就いて富強である間は其他の事は左程重要でないやうに考へた。當時の政治家は國の富強のために計畫し活動したが個人勞働者の幸福と繁榮は彼等の眼中には一些事に過ぎなかつた。國富の增進を計る事が主眼である以上は、寧ろ勞働時間の出來得る限り長い事、勞働賃金の出來

賃銀の低い事が希望された。經濟學者と雖も勞働時間の短縮、賃金の引上を考へる者はなかつた。政治家は元來恒産家ではない。而も當時の政治家は支配階級より出た者であるから、彼等の利益は國家の利益と一致し、又勿論彼等の階級の利益と一致したのである。

古典派の經濟學者は失業は經濟上の問題ではなく、道徳問題であると考へた。機械の發明は多くの勞働者をして仕事を失はしめるが、一般の生産の増進に依つて結局は其仕事を附すものであると考へ、現在の生産組織より見れば失業は避け難き事であつて、從つて只之れに對しては道徳的の救濟をすればよいものであると考へて居たやうである。アダム・スミスに次いで現はれたマルサスは其人口論の特種の構想よりして、失業者は常に勞働者の過剩より生ずるものである、從つて自然淘汰が遠慮なく進行する事に依つて此問題が解決される。生れながら所有せざる者は其慣習がこれを扶持せざる限り、又其政府が其勞働を要求せざる限り何等の賃も仕事をも請求する權利がない。神は彼に何等の惠みを與へぬ。其同類の同情に依つて生きるのみである。と云ふやうな言ひ現はしをして居るが、勿論これはマルサスの過剩人口論の理論から來るものであつて、彼の議論は上流階級に依つて熱心に支持せられ、彼等は貧乏に對する責任を免れたのみならず、社會改良のために積極的に努力する義務もなきかの如くに感じた。併しマルサスの言と雖も固より世上の常識に依つて影響を受けるのであつて、彼の著書「政治經濟の原則」に於いては意外にも可なり詳細に然も割合に新らしい見方を以て失業問題が取扱つてある。ナポレオン時代の歐洲の大戰亂の後を受けた千八百十五年以後の勞働者階級の貧困狀態を説明するに當つて、彼は其原因を戰爭の影響に依つて資本と收入が破壞され、且つ生産物に對する購買力が減少し、他方に其以前の時期に於いて過剩の生産のあつた事と、且つ海陸の軍人が戰場より歸來した等の事實に基くものとして居る。此見方は大分歐洲大戰後の英國の失業問題の原因に當嵌るやうに思はれるが、百餘年も前にマルサスが此言を爲した事は寧ろ當時の經濟學者中に於いて最も群を抜いた識見を持つて居たものと云ひ得る。但彼は當時の失業問題の救濟策として是等失業者を非生産的の勞働、或は少くとも勞働の結果が市場に於て販賣せられる種類のものでない勞働に從事せしめる事を主張した。斯くの如く特に非生産的勞働を選んだ事は寧ろ最近の失業問題に對する意見とは反對であつて、彼の特殊の立場から生じたものであらう。而て彼は此種の仕事として公共營造物の建築並びに土地の改良工事、及び富者が從僕として雇ひ入れる事等を指

[illegible]場合には、[illegible]に對して[illegible]を與へる事は出來ぬ、產業の變動は勞働階級に對しては利益よりは寧ろ多くの害を與へる、此故に政府は出來得る限り平和を維持し、且つ其支出を均一にすべきであると主張して居る。彼の思想が前の著者より大に變化して居る事は注目に價するのみならず、百年の昔に於て產業界の變化が勞働階級の不利益であるとし、失業より生ずる不幸の救濟に就いて、假令現代の解釋とは異るとは雖も具體的の救濟策まで指示して居ることは寔に炯眼と云はねばならぬ。

ダビッド・リカルドは、マルサスの人口論を其儘に取入れて居るが、貧民を公共の資金に依つて救助することに就いては激しく之れを非難し、當時の貧民救助法を猛烈に攻撃して居る。而して人口の增加は必しも當然之を失業の原因とは考へ無いが、之によつて賃銀を自然價格以下に引下げるものとなし、たゞ貧困の結果貧民の減少により賃銀は再び回復し得るものとしてをる。要するに之等の學者及總てのマンチエスター學派の特長は近世の產業組織を必然のものとして、之れに基く貧窮は止むを得ざる結果と認むるのである。

當時の經濟學者は失業に就いて此樣な考方をして居たが、實際に於いても斯かる考で道德的の救濟手段が執られた。救世軍[illegible]動、[illegible]無[illegible]段である。而て一般吾人は失業の原因を不具、疾病、[illegible]怠惰、訓練の不足等にありとして、結局之れは個人の無能の結果でありとし、殊に資本主義の生產組織の中に發生して居る者は此組織自體の中に多くの同類の不幸の原因が潜んで居るのではないかと考へて見る事さへもなかつた。

現在の資本主義の時代に於いては其組織自體の中に勞働を欲し、又其能力ある者の失業を生ぜしめる原因を包藏して居る。景氣、不景氣の變化、外國貿易上の關係、生產と消費との不適合、個人利益の無限の集積を妨げざる主義、之等は總て勞働者自身に於ける訓練と能率の如何に拘らず、勞働の需要供給を左右するものである。且つ現今勞働者は職業的に、地方的に鞏固な組織を有し、進んでは全國的の團結を爲して有力な指導者を有し、明確な階級意識を持つて居る。即ち彼等の苦痛は最早個人的のものではなく、階級的の苦痛である。此苦痛を除くためには彼等は階級として活動するのである。從て失業問題の原因を探究し、其對策を講ぜんとするに當つては種々の複雜困難な問題に逢着するのである。

近世文明は其既に成就した所に依つて其功績を決すべきではない。其未だ爲すべくして爲さゞる所をも見て其功過を論ずべ

きこある。産業革命は其輝々たる成功と共に之に伴ふ禍害を持つものである。繁栄の傍に不幸と貧苦が潜んで居る。殊に最近数十年来の工業的生産と商業交通の発達の結果として大都市に集中した人口は、多数の住民をして不潔と不安の巷に呻吟を続らしめ、ますます中世紀の最貧農奴にも劣る状況にある者を見出すのである。人の良心は此種の不幸の原泉を除かんとし、国家は又其社会のために絶えず此問題の結論を得んとして努力をして居る。

（二）

先づ問題に対する考方及之れに対する対抗策は時代に依つて自ら異る事は自然の理である。時代に依つて不幸の原因で、所在や、程度が異る事は勿論、社会組織の変遷は自ら同一事情に対しても異つた解釈を見へしめるやうになるのである。百年前と大差のない行為、施設をしても其動機、功果に就いて全く異つた理解をとられることもあり得る。従つて貧窮問題、失業問題についても多少歴史的の観察を必要とする。

資本主義の経済組織の成立する以前に於ては、孰れの国でも人口が稀薄であつて最も早くより世界各地に富を求めた又産業革命の発祥地である英国は殊にさうである。西暦千五百年時代には英国の人口は僅かに二百五十萬、人口密度は一平方哩に十三人に過ぎない。勿論此時代は彼の英国でも純然たる農業国に過ぎないが、千六百年には彼の有名な東印度会社が設立され、英国が重商主義を執り、商工業の進行に向つて突進した時期であり、其翌年は折々其貧法が新形式を現はした年であるが、当時の英国の人口は僅かに四百八十萬、其人口密度は僅かに八十三人に過ぎない。而て産業革命前期時代といふべき千七百五十年に於いても英国の人口は僅かに六百五十萬人であつて、目下の我東京府及び大阪府の人口を合計した程度のものに過ぎない。又之れを現在の大ロンドンの人口に比すれば百萬人も少いのである。即ち当時の全英国の住民は現今の一大ロンドン市よりも遥かに少かつた。そして其人口密度は百十二人である。然るに此稀薄な人口も其後二百年足らずの間に激増して千九百二十一年には三千七百八十萬、人口密度、八百四十九人となつて居る。産業革命の当初から見れば人口密度は約八倍強に増加して居る次第である。

人口稀薄な農業時代には、孰れの国でも各個人は相当の自然を支配し得る故、直接に食糧を得る途もあり、労働の機会がないといふことはない。少くとも其単純な生活を維持し得ないといふ憂は少い。固より人口密度の低い時代には一人当りの土

[illegible]つたことは[illegible]が行詰き、[illegible]其他各文明と共に業組織の用ひられる現代に於いては、人口の増殖多しと雖も收穫の結果に於ては昔に比較して、一人當りの必しも少いとは云へまい。若しさうなれば現代人は昔の人より少量の且つ不味いものを食べて居ねばならぬ筈である。併し現代の農産は世界的に移動するものであるから、複雜な分業と、分配の組織の下に生活する現代人にとつては、屢々倉庫にある米や果物を眺めながら、資力なくして家族の空腹を嘆かねばならぬことが生ずる。此點に於いては日常の第一次の必要品、殊に生命を維持するに足る食糧に就いては昔の人の方が各自自然に接近して棲んで居る丈け、安心な境遇にあつたと云ひ得る。彼等には學校を建て、軍艦を造り、鐵道を敷くことに就いて努力を必要としなかつた。然し此自然を支配する農業時代に於いても、道路の不完全なこと、車輛の不足、盗賊の横行等は屢々當時の經濟生活を不十分ならしめ、且つこれを動搖したこともある。從つて中世紀時代には住民各々多くの部落に一つの自給單位として割居して居たのであるがソロルド・ロージャースは十三世紀頃の部落は通常其人口は六十人乃至八十人位に過ぎなかつたと論[illegible]す、[illegible]なく、[illegible]時代には其生活は現代より簡單であり、失業もなく、生活苦もなかつたであらうか。時として悲むべき運命に苦しんだのである。之れに反して現代の經濟組織においては、前記の如き理由で飢饉として之れを見れば、食糧の分配も亦品質も各個人が容易に生活し得る丈けの生産をなし得て居るに相違ないが、現今の組織中にある分配の不完全なることが個人的の貧窮、生活難を生ぜしめるのである。現代の生産組織は頗る強力であり、且つ巧妙に自然を利用して居るのであるから、現在の個人的生活難は決して其責任は生産組織にあるのではない。物資は世界中到る處より其供給を續けて居る。失業貧窮の原因は、寧ろ分配組織の缺陷に在ると云はねばならぬ。彼の工業の方面に於ける生産制限、價格協定其他の獨占的行爲に對する非難もあるが、これ等に基く生産の減少はそれが表面的に見えるやうに失職の眞因となるものではない。一時的には其事實はあつても根本的には矢張り分配問題の解決によつて此問題も眞の解決が出來る。

農業時代の人民は、失業がない代りに恐るべき飢饉の外に各種の病氣に惱まされ、自ら人口淘汰が行はれた。天然痘、ペスト

く、現代各國は歐々ヨーロッパの人民を富かして、彼の十四世紀中ばに於ける猛烈な黒死病が同國の人口の三分ノ一を奪ひ去つたと稱せられて居る。此點に於ても近代の科學衛生の實際の發達は人類を之等の不幸より救濟し、而て近世の事業は實に教育の普及衛生の發達に就いても間接ではあるが最も有力な援助者となつたのである。

農業國より近世商業國に轉化した事は、所謂一般的には人類社會に文明生活を出現せしめたのであるが、それにも拘らず、食住の第一次生活に就いて屢々不安を感ぜしむる事實が殘つて居る。分業生活の現在に於ては人は職業を得れば安全といふ程の生活は出來ずとも、少くとも生活を脅威されることはない。然るに失職の問題は屢々食ふことをさへ脅かす、獨り國家の米價や果樹を狙ふことも出來ず、又近隣に採るべき果實も生物もない場合が多い。職業を失ふこと、職業のないことは、直ちに生活の脅威である。從つて職業といふ意味は單に働くといふ意味ではなく、生活維持の手段である。從つて此の失職の問題を研究することは單に或個人の仕事の有無といふ單純な問題ではなく　個人經濟の生活問題であり、從つて其關する處は生産分配の全般に渉り、之れを研究するに就いては經濟學の全般に亘る問題であることを留意せねばならぬ。

議會に於いては政治の重大問題として論議されるが、議會に失業問題が常に多い時、若くは勞働者又は無產階級に關する權威となる場合に於てのみ之れを論議する。而も其問題は社會生活の根底に觸れるのではなく、個人の不幸の救濟の意味で論じられるに過ぎない。單に道德の立場よりする議論が公の席上で行はれるのに過ぎないのである。而も分配に關する一局部より之れを見る故、單に問題になつた個人に金を與へて之れを救濟すれば足ると簡單に考へるやうである。而て此種の國家の救濟が生產界に對して如何なる不良の影響を與へるかといふことも十分に考へない。此重要問題に就いて斯かる偏見的の取扱ひがされたことは最初の時期に於いては失業に依る個人的貧窮の救濟は單に消極的義務であると考へたが故である。併し後には少し進歩した考を持つ者は、此種の救濟は國家の自衛策であると考へるやうになつたが、併しそれでも支配階級の多くの者は人民中の或個人の貧窮はそれが擴大して國家を脅威し、彼等の階級に對する反抗の生じない間は頗る冷淡な態度を持つて居た。動機は時代に依り解釋を異にするが、英國の議會は最も率先して貧困失業に對して救濟策を講じ初めた。其五百年以上に亘る貧民救助法の歷史、及二十年來の失業救濟の立法は特に英國の議會及び其社會の貧窮及失職に對する觀察の變遷と對策の變化を示すも

[illegible]

[illegible]自由に自然を利用し得る時代に於ては[illegible]、總て、[illegible]に依つて各人は其一日の糧を得、總ての人が「土地の自由使用」を樂しんだ。乍併彼等は相互に、又は部落其他の社會より自ら働くべき社會的義務を負荷せしめられて居た。從つて働かざる者は其貧困に就いて道德的の請求權なしとせられた。彼の救貧法の最初の時代の嚴酷な規定や、英吉利の古典經濟學者の初めの思想には自ら此思想が現れて居る。最初の救貧法は貧者を救ふといふよりは寧ろ怠惰者、浮浪人を罰する規定であるといふ方が其當を得て居る。乍併單に土地の利用に於てのみならず、一般に所有權の觀念が發達し、其法規が嚴格細密となると共に、個人が自然を利用し得る自由は漸次に縮少されて來る。少くとも煩瑣な手續きや多くの時間や對價を必要とするやうになる。而も經濟組織に於ける分業が驚異すべき發達を遂げるのであるから、孤立無援の狀況に於ける個人は、假令一時的と雖も一般の生產分配の連鎖より隔離された以上は其獨立の努力のみでは到底生活の維持は出來ぬ。唯一人數日の生活は何とか出來るとも、其家族を長く養ふことは出來ぬ。所有權と分業は生產の增進と文明生活の發達を刺戟したものであるが、時にとつて個人の自活を困難ならしめるものである。現在の社會は[illegible]と言はねばならず、[illegible]する一面である。之れは單に[illegible]社會學上の[illegible]して單に論議すべきことでなく、我々の經濟生活及日常の生活に根本的の關係を與へるものである。此新たな關係の成立に依つて個人及社會の權利義務の關係は重大な變動を受けるのである。此變動の程度並びに新な權利義務の性質に關しては固より人に依つて見る處を異にするが、之は單に政治的の便宜の問題のみではなく、寧ろ政治的の道德の問題が主要なる地位を占める。そして倫理的の問題であると同時に實際的の問題である。從つて之等の變化に對する意見は人に依り各々見る處を異にし、一般に是認さるゝ論據の下に一定の政策を進めることは困難であつて、時に依り變化の生ずることは當然の事と認めねばならぬ。

元來富裕階級は貧困者の働くべき義務を確信するが、之れに對する社會の義務は認めない。而も其社會自體に存在する原因に依つて、或る個人が働き得ない場合があるには拘はらず個人を責めても社會の缺陷を顧る事をしないことが多い。彼等は自由競爭が萬事を解決するものと考へ、不足の點は慈善（チヤリテー）を以て補ひ得ると考へる。但し人若し職を得ざれば自暴自棄となつて恐るべき害惡をなす惧れがあるから、時々施與を行つて疾病の傳播を防ぐのと同じ意味で貧困者を救ふのである。彼等の態度

に道德と綜合した價値である。之れと異つて他の存在でない。團體は即ち社會は個々の單位の集合ではない、一の有機體である。個々は依存關係にあり、各部は全部に對して義務あると共に全部は又各部に對して義務を有する。全部は各部のために存し、各部は全部のために存する。社會は最も廣義に於て個人を保護する責任がある。外部の攻擊に對して全部を保護し、他の個人の侵害に對して權利を保護し、個人の生活維持に對する保障を與へ、個人に仕事を與へて之れをして其社會に對する義務を遂行せしむる責任のあるものだといふのである。之等の主張は總て美しい事である事は萬人の認める事であらう。但し其中には實際出來ない事もあり人性が事實上自ら之れに反して居る場合もある。故に此種の個人と社會關係に關する理論は容易に實際政策の根據とはなし難いものである。之等が總ての個人に依つて道德的の要求と確信せられ、又實際上必要と確認されるに至る迄は、此種の理想は實現し難いことである。但し此の理想に近よることは個人相互の努力すべきことであるに相違ない。要するに個人と社會との關係に就いては自ら種々の觀察があり、又目前の事實を見る眼についても自ら判斷の差異があるものであるから、餘りに偏見的局部的の見方に依つて獨斷的論步を進めることは慎むべき事ではあるが、よく現在の社會組織の主要構成を解剖し、其中に個人の失業に就いて如何なる原因が潜んで居るかを考へねばならぬ。

（三）

失業問題の起源は機械の發明にある。機械の發明によつて多數の勞働者が其の職を失つた當初に於いては丁度電車の用ひられた最初に人力車夫が之に反對したように機械使用に對して失業勞働者が反對し之を破壞せんと企てたこともある。一七六九年に機械の破壞者は死刑に處する旨の法律が制定されたほど反抗が烈しかつた。しかし是等の勞働者を漸次に他の方面の職業に轉向することを得た故に、機械の使用による直接の失業問題は間も無く鎮まるやうになつた。然しながら私益を基礎とする工場に於ける大量生產は一方に資本家階級の發生を促すと共に他方に間々失業と收入不足に苦む勞働者の階級意識を發達せしめ、其の共同利益に對する觀念の益々高まると共に資本主義生產組織の改善を希望するやうになつた。

或限局されたる社會を想像すれば十人の勞働者中の一人が機械を使用するに至れば他の九人は其業を失ひ罪を犯しても新生活を維持するか社會に生計を依賴するの外は無い。機械の發明が一面を繁榮する富者と失業に惱む貧者を生ぜしめた事は疑無

い。これらの機械は一面に急行しつゝある故に益々富の要求の受付を多くすると共に勞働界を混亂せしむる原因を作る。[illegible]機械の普及は男子に代ふるに婦人小兒の勞働を以つてすることにもなる。即ち男子失業の一大原因となる。しかも發明は生産のあらゆる方面に間斷なく普及し、機械はあらゆる方面において勞力に代る故にもし限局されたる社會を想像する時は結局機械の所有者のみが購買力を有し多くの他の人民は失業者となつて其の購買力を失ふ狀態を現出することになる。

然らば機械の所有を共同的にする方法を考案すれば機械の使用による失業を消滅せしむることが出來よう。國有とか社會化とか大袈裟に言はずとも或程度の共同所有の案も考へられよう。機械を其の産業に從事する者の共有にするといふ考もある。組合社會主義（ギルドソシアリズム）式の考方である。ロバート・オウエンのニユーハーモニーの共同村の考や、フーリエーのファランステリーの思付きなどもそんなものであらうが、是等の實行案を考へて見れば産業組合と大差はない筈である。何れにしても是等の考は私益のみを主眼とする生産組織の弊害の方面を看過することが出來ないので思付いたものであらうが かゝる團體所有の組織がうまく運用出來れば個人の利益は其の團體内に於ける公共の利益の從屬的のものとなる故誠に結構の事である。しかし

[illegible]の手工業者は[illegible]についての[illegible]かゝる事を与へ[illegible]使用の為に[illegible]資本主義の生産界を支配してから後の事である。ここで然しながらかゝる團體は必しも團體として、個人を成就せしめた利用、創造力及び競爭的精神及び熟練等を有し得ざるものであり、又かゝる團體自體は他の強迫力勢力に對して其の特權を維持することに個人以上に熱心である事がある。又かゝる團體に加入する者に對して可成り強い嫉視を以つて之を制限せんとする傾向もあり又他人が同一産業を設立することに對して猛烈な反對運動をすることもあらう。從つて有利なる地位を占めた是等の産業團體以外の社會の者はむしろ不利益を蒙むることがある。政府會計に於いて國營事業其他の特別會計が特殊の利益を獨占することがあるのと同一であらう。

個人資本家の場合と同じく、此種の産業團體についても、公共の利益の維持はやはり國家の監督に俟つの外は無い。結局國營又は社會的經營を必要とする場合が想像されるのである。そして或國家が孤獨に存在するものと假想すれば生産手段の社會的管理といふことは必しも夢想では無く或場合にはそれほど困難無く行ひ得るものもあらう。

然しながら近世の機械生産、資本主義生産組織は小さな局限

された結果、假へば一國とか、一地方とか一小地域に局限的に考へたやうな小さな區域の問題では無い全世界を綜合として行はれてをるのである。全世界には多數の國家が對立してをる。失業の結果を考ふるに當つても此の政治的に對立し經濟的に交通する國家間の關係を考へねばならぬ。是等の國家は互に財貨を交換し、特殊の原料を有し、特殊の生産を行ひ、其の生産組織と貿易は各自の法律と慣行によつて各特色を有してをる。是等の國家は各々異りたる程度において人口の増加を生し、其の支配する殖民地の範圍も著しく異る。限局された之の社會を考ふれば利益主義を本位とする機械生産の影響は割合に明瞭に想像出來るが、かゝる複雜なる關係においては失業の原因を生産手段の私有に置く事も出來ないのみならず、國家間生産能力の相違と密接なる交通とは歐洲の一角より資本主義を世界に傳播したると同時に其の欠陷殊に失業問題の發生を逼近せしめたものと言ひ得る。

失業問題に就いて正當な解釋を與へることは、初めに述べたやうに今日の社會の政治的觀察を必要とすると共に、殆んど經濟學の全般に亘つて種々の要點に觸れて考へなければならぬ。例へば利潤と賃金との關係、賃金制度、勞働時間、價格の變動、技術の變化、企業の競爭、外國貿易、貨幣信用制度、農産の變化、不時期作、勞働爭議、其他あるべき事は枚擧に遑がない。

現在の生産組織に伴ふ資本集中の弊害を匡正するために、利潤統制論が唱へられ、少くとも現制度に於ても出來得る丈け利潤を少くして賃金收入の増加を計る主張が勞働者側を中心としてできた勢力となつて居るが、出來得る限り利潤を引下げ一方勞働者殊に生産的事業に從事する勞働者の收入を増加せしめることは、其生活を向上せしめ、失業を防止する效果があるに相違ないが、他方に資本に對する利子と企業危險と企業家報酬の正當なる要求も認めねばならぬのであるから、今の生産的勞働收入増加の一般的理論は是認されるにしても、實際の問題としては歴史的の慣習と利害の打算に依る勞資間の正確な算盤の上の計算と、勞働者の團結の力とを外にしては具體的に勞働者の賃金利得を多數に増加せしめ得べき見込もない。他方に資本家側においては賃金引下げを行へば多數の勞働者を使用することが出來る故失業者を少くすることが出來るといふことを主張し之れが實地に於いては賃金引下げの通常の論據になつて居る。併し之れは少數者を救ふために多數の生活費の低下を來すものであるから、一般に是認し難い事である。失業の問題と別に物價殊に生計費の低下を理由としての賃金引下げならば理由は立

[illegible]害に反意なでもなきをき[illegible]其他には賃金引下げ[illegible]が行はたる故之れに對して勞働者側は最低生活標準の維持、最低賃金の制定を主張し、是等の事は英國では或る特種の産業については國法に依り、又他の大産業には勞資間の協同契約に依つて可なり一般的に實現されるやうになつた。勞働者は一國の産業は利潤を上げるに先立つて先づ第一次に其國民の健康と生活を維持する責任があるといふ論據に依つて進んで居るのであるが、此最低賃金が事實上維持され殊に生産的産業に就いて普及するならば、之等の勞働者の購買力が増加して其購買力が奢侈品を避けて生活の第一次の必要品に向けられるならば——勞働者は事實奢侈品を買ふ餘力はないが——必要品の産業が勃興して勞力も資本も多く此方面に用ひられ、有用産業に於ける勞働者の需要を増加し、此種勞働者の失業の機會を少くし、一舉兩得の結果があり得ると云ひ得る。

勞働時間を短縮することは多數の勞働者を使用する結果となつて失業者を少くする所以であるといふ意味で時間短縮を主張する者がまゝある。併し時間短縮を行へば通常は收入を減少するものであるから、それは前と同じ理由で少數のため多數の不利益になる。從つて通常の場合に時間短縮と賃金値上が必ず同時に[illegible]實行することを目的として[illegible]が、斯かる方法は畢竟一時的のものとして[illegible]こともあるが、それは勞働者數の増加に依つて何等生産増加を來さず。企業の經營の點よりみて永く之れを實行することの困難なるは勿論。一般的に絶えず此理論で失業者を救ふことは事實上勞働階級の收入標準を維持することを不可能ならしめることになる。此理論が正しければ、絶えず工場法の改正を行ひ又實行上に於いても或場合には法律の規定を超えてまで時間短縮を行つてゐる英國に於て失業者を見ざる譯であるが、失業者の數は事實に於て時間短縮と全然無關係の結果を示して居る。單に現在の職業を一般に分布したとて根本的の失業救濟の手段とはならぬ。危急の場合には一食を二人で食ふこともあらうがそれを續けることは出來ぬ。時間短縮を失業問題と關聯せしめたることは一少局部の臨機の處置としての外、一般的の理論としては理由をなさぬ。

價格の變動は産業の經營を不安ならしめて屢々營業縮少、失業の原因を生ぜしめる。需要供給の狀況が絶えず變化する以上は價格を不變ならしめることは不可能である。人或は一時代に價格なき自由消費の經濟を想像する者もあるが、[illegible]

りではないが、自由消費といふのは文字通り痴人の夢であつて、寧ろ斯かる社會を想像することは結果に於いて生産不安消費不安の状況を生ぜしめるものである。さて購買力に對する即ち需要に對する供給の行はれる以上は其處に價格が生ずるのであつて、此價格は變動こそすれ事實に於いて需要供給を適合せしめる最も重要なる作用を爲す者である。交換價格の成立せざる經濟に於いては需要供給の適合は殆んど不可能である。數千萬數億の人間の生産消費を合目的に適合せしめる必要のある世の中では何んな精密な大組織に依る且つ正直な生産統計も、及び消費要求統計の報告も僅々一つで自働的の綜合結果を世界中に報告し得る價格變動の驚くべく不可思議な且つ最も精確な作用に到底比較し得べくもない。交換經濟も價格變動も止むを得ないとすれば、個々の生産事業の危險は全然除去される譯には行かぬ。價格變化のために各種の生産業が生産制限を行ひ工場閉鎖、休業を行ふことは止むを得ぬことで、時々、又部分々々に斯かる情況が生ずれば資本家の損失と共に勞働者は又失業の苦を嘗めなければならぬ。價格變動が生産額の減少に至らない間は損失はただとして生産者が負擔し、勞働者に及ぶことは少い。併し價格の下落は多くは生産制限に導く。此故に勞働者も亦損失を共にするのである。企業の聯合及び合同は生産の自衞策として屢々價格協定、生産協定を行ふ。これに對しては獨占利益及び國民の需要品生産を故意に減縮すること等に就いて此種の生産者の組織及び行動を非難する者もあるが、私は其非難も常に當つて居るとは思はぬ。併しこれは茲で論ずる問題でないが、少くともカーテルの如き組織に依つて生産が計畫的に行はれ、自由競爭と世界の經濟的景氣の變化より生ずる生産者の損害を豫防する手段は同時に一般の生産狀態を安定ならしめ、勞働者の職業並に收入に對して安定の地位を與へ、突然の失職の機會を少からしめるものと云ひ得る。

現在の如く無數の事業單位が對立して其資本能力、技術、經營能力、從つて其生産費、販賣費等に差異があり、販賣價格計算に自ら差異ある狀態に於て絶えず新な競爭者が加はり、加之不斷の發明に依つて生産方面に種々の變化がある狀態に於いては、企業者間の自由競爭に依つて浮沈興廢代謝の絶えざる如く、これに關係する勞働者にも收入の減少又は失業の苦境に沈む危險は常に存在するのである。加ふるに一般的の景氣變化の大潮流は斯かる傾向を益々増大せしめ、小規模にして資力弱き者程危險が多い。産業革命の結果大規模生産が行はれるとは云へ總ての産業が大規模に行はれて居る譯でもない。殊に我國の如きは工場總數五萬の九割以上は小規模經營（職工數五十人未

[illegible]

[illegible]小規模事業の[illegible]小規模事業に[illegible]事上の困難。[illegible]變化[illegible]しない。從つて[illegible]にも[illegible]の機會が多い。又大規模事業と雖も如何に勞働組合が勞働者を支持しても事業の財政上到底平常の定員數の勞働者を維持することが困難なる事情が生じ得る。從つて企業の自由競爭と景氣の變化は單獨に又は相重つて企業家を苦しめ又失業の機會を多からしめる。此點より見てもカーテルの組織は勞働の需要の安定の效果があるものと云い得る。カーテル、トラストが獨占的暴威を振ふことに對しては自ら對抗の策がある。又企業家が斯かる聯合を利用して若くは別に傭主聯合を作つて自己の利益のみを計り勞働者の不利益を計らんとしても、それには勞働者も亦自己の組合運動を以て對抗し得る。要するに失業問題の點から見ればカーテルの成立は固より歡迎すべきものである。

生産事業の浮沈の甚しいことは事業家に不安定を感ぜしめると共に、勞働者にとつて又最も恐るべき問題である。資本家は或事業の資本を全損する程の打撃を受けても必しも直ちに生活を脅かされない。金融の手段も或程度迄は容易に得られる。之れに反して勞働者は職を失へば直ちに生活を脅かされる。此故に不景氣と恐慌は寧ろ勞働者にとつて痛ましい影響を與へる。

[illegible]

[illegible]難い事である。[illegible]點を[illegible]して、他の協同的生産組織に依れば此弊を除き得る理くを唱へる者があるが、假令それに依つて變動をなくし得たとしても――それも出來ぬと思ふが――生産の一般的に減少することは疑なきことである。此問題も茲で論ずる暇はないが、恐[illegible]産業界の浮沈は到底免れ難い事實である。金融組織の改善、生産企業の内外の組織の改善に依つて所謂恐慌といふ程度の不利な激變は或程度迄避け得られやうが産業の浮沈は到底免れ難い。米綿の産額、世界の小麥産額、日本の米の作柄、魚獲、鑛産物の不意の増産、其他常時的、世界的、或は區域的、臨時的に種々の原始的生産界に於ける變化が生ずる。世界通商、價格經濟の現在に於いては之等の變化だけでも廣く狭く、或は強く弱く他の生産界に對して直ちに影響を與へる。それに依つて或國の農家の購買力が増加し、或國の紡績業、生産工業が繁榮し、建築、土木、機械工業、化學工業、交通機關、總ゆるものが變動を受け、此經濟界の變化は個人の會計、國、公共團體の財政に影響して此財政の變化は直ちに事業界に反映して限なき變化の連鎖を作る。今茲に景氣の變化を説く時間を持たぬが、それは戰爭や又自然の大變化がなくとも不斷の現象である。試

みに米國の最近の景氣の變化の一例を見ても、米國の主要産業の生産率統計を千九百十九年の平均を一〇〇%として見た數字に依つても千九百二十四年十月は一〇九%であるが、二十五年十月には一一六%になつて居る、僅か一年の間に全生産平均率に一割弱の變化がある。それのみならず千九百二十五年一月には實は一二七%に上つて居たのであるから、四ケ月間に一割弱の變化があつたのである。殊に最も浮沈の甚しい製鐵業の如きは一九百二十四年九月の一〇〇%に對し翌年一月は一五一%十月は一三〇%といふ大變化を示して居る。勿論失業者の數は斯くの如き産業の生産率と絶えず伴つて屢々變動するものではないが、（米國の製造工業の就業率は千九百二十四年九月全産業平均九一・二%から漸次増進し、浮沈はあるが千九百二十五年十月には九七%になつて居る）大體に於いて好景氣に伴つて就業率が増し不景氣に伴つて失業者が増すのである。

殊に一層注目すべきは所謂不規則産業に就いてである。一般産業に浮沈あるは前記の通りであるが、殊に建築事業。造船業。製鐵業。機械製造業。炭坑鑛山等に於いては最も其變化が甚しい。勿論生産界に於ける此種の要求は必ず何等かの方面から起る事業に對する需要となつて顯はし來るものであるから好景氣の時代に於いては之等の事業は驚くべき繁榮を來す。しかのみならず之等の事業は巨額の固定資産、即ち建設資金を要し、優秀なる技術家と多くの熟練職工とを必要とするものであるから、多少の景氣の變遷があつても企業の新設を行ふこと容易ならざる反面に於いて、一旦施設をなした以上は固定資金の多い丈け事業の制限は甚だ不利益とする處である。然るに生憎之等の事業は右の如く最も浮沈の甚だしいものである。而も沈滯の際事業を休止制限することは資本利子の損失を償ひ得ざるのみならず、切角養成した勞働者を失ふ恐れもある。茲に於て企業者自身は事業の盛衰と勞働者の去來に就いては最も著るしく頭を悩ますものである。併し沈滯の期間が長ければ結局止むを得ず勞働者を解雇するに至るのである。然るに普通の戸外勞働又は不熟練勞働であれば他に相當の職を求めることが必しも困難でないが、熟練職工は技術が一方に偏し生活の程度が高い丈に、一旦失業すれば就職難を感ずることが甚い。英國の千九百十一年の國營保險の中に失業の目的事業として特に之等此種の不規則産業のみをとり來つた事は大に意義のあることである。

若し資本主義生産組織が極く狭い地域内で行はれたら其の弊害は最も早く現れ、利害相反する者の事は早く激しくなつたに相違ない。併し生産組織の變化と同時に一方政治組織に大變

[illegible]
[illegible]し、進んで我國も[illegible]盛んに行はれる樣になつたこ
とであるから、産業革命以後の資本主義生産組織はヨーロッパの
一隅から全世界に侵入したのである。斯る状况がなければ經濟
上商業上の先進國である英國ですら既に一層早くより失業に苦
しんだに相違ない。マルサスやリカルドの出た後五十年を出で
ずして現在の如き苦しみをしたかも知れぬ。我國と雖も明治維
新以來破竹の勢を以て新な生産組織を輸入したのであるが、生
糸工業が世界に覇を唱へ綿糸紡績品がマンチエスターの同業者
をして特別の會議を開催せしむる程までに日本品の脅威を感ぜ
しむるやうな發展をしなかつたならば、失業問題は歐洲戰爭後
の恐慌、震災後の行政整理を俟たずとももつと早く起つたかも
知れぬ。要するに外國貿易の旺盛な事は、確に生産上の優秀國に
對して失業問題の激成を緩和して居ると云ひ得る。但し輸入國
の産業にとつては固より外國品の侵入は不利益であるが、之れ
に對抗するには又自ら關税其他の手段がある。自由貿易を理想
とする國でさへも實際に於ては其産業の維持のために保護關税
を設定せんとする世の中であるから、産業上の優秀な地位を失
はんとするもの丶みならず、斯かる地位を持たざる國は自ら其
關税政策に頭を悩して其國の工業を維持發達せしめんとすると

に[illegible]
時に[illegible]
ーテルは生産者と共に勞働者にも安定の地位を與へる[illegible]
あると云つたが、外國のトラストやカーテルが内國に侵入し來
る時はそれは又大なる脅威となる。自國の自然的生産條件が優
秀であれば外國のトラスト、カーテルは其國境を犯して侵入す
ることは不可能であるが、それでも彼等は屡々投資の政策を以
て他國の産業を脅かし或は之を破壊することを計畫する。米國
の石油トラストや戰後に獨逸の化學工業の行つた世界的の投
賣りの如きは世界の同事業を脅威したものである。固より前者
は純然たる資本主義の横暴に基き、後者は自滅を防ぐ手段であ
り、其動機において相違はあるが被害者には同一の影響を與へ
る。此故に諸國で投賣り防止策を構じ、我國も亦之れに倣つた
のであるが、其對策の主要なるものは矢張り關税である。斯くの
如く國際貿易關係の頻繁なことは生産上優秀な國の産業と勞働
を保護する利益があるが、其劣等な國は之れに依つて脅威を被
る。一般的に見ても輸入の増加は物價の低落を來し内地産業を
不振ならしめ、勞働者の失業の機會を多くするものである。
　外國爲替の關係は或は輸出を有利にし、或は輸入を有利に
し、譬へば我國に於いて最近爲替の下落のために寧ろ米國の生

糸購買力を弱くし我國の生糸工業が世間の不景氣をよそに繁榮する事情を生じ、一般に輸出を促進した影響があつて、其點からのみ見れば輸出産業の刺激、失業防止となつたとも云ひ得る。但し之等は部分的の利害で、時と共に自ら變化するものであるから異常の場合の外直ちにそれ程重視すべき程のものでもない。

貨幣と信用制度は資本主義經濟組織の神經系統をなすものであるが、此交換の媒介具を無用視するやうな迂遠な議論は到底論ずるに足らぬ。が、併し此種の手段は便宜であり且つ其作用の重大なだけに各階級に種々の利害を生ぜしめる。今世界の貨幣制度の中心になつて居るものは金であるが、金の産額は世界的に増加する故金價は從つて下落する傾向にある。殊に各國の中央銀行、發券銀行の組織が發達するに伴ひ生産資金の需要、並びに各國の政費の膨脹のために通貨膨脹の傾向は今回の大戰中なくとも阻止し難き大勢である。通貨膨脹は貨幣價値の下落と物價の騰貴を促し、一定の貨銀收入を得る勞働者にとつては多少の名義上の賃金率は増加すると雖も實質收入は減少する結果となり、益々不利益な狀況に置かれる次第である。殊に他方に物價騰貴が伴ふとすれば勞働者の購買力は益々不十分になる。此點は直ちに生産に關係ありとはよい難いが勞働者の生活に對しては重大なる損失である。但し最近の我國の事情に於いては大正七年の所謂米騷動以來勞銀の騰貴著るしく、物價の騰貴率を超へ、大正九年の恐慌以後と雖も世界の大勢に反して勞銀は物價の下落に拘はらず騰貴保合を繼續して居る故、我國の勞働者は此點に於いては一般的には比較的有利な地步を轉回せしめ得たものと云ひ得る。

信用の利用は生産と交易を助長する上に於いて缺くべからざるものであつて、殊に需要と生産を適合せしめる點に於いて重大な効果がある。今日總ての生産と取引に中介業者と金融業者の介在することは多くの場合に殆んど絶對的必要であり、殊に組織的の取引に於いては其傾向が益々增大するのであるが、之等の機關の介在は益々信用の利用を增大せしめる。現金取引に於ては投機を行ふ機會が少いが、信用を利用して中介者が大規模取引をなすに至れば、著るしく投機を助長する結果になる。投機は固より部分的、一時的其間的の取引に伴ふ價格變動の於合と齟齬を減少せしめ、不變的、經濟的の需要供給を見越して價格の平衡と取引の圓滑を助長する効果はあるが、之れに信用を濫用することに依つて種々生産界を攪亂し、勞働者、消費者に損害を與へる恐れがある。不健全な投機に依つて助長される價格の變動と、不自然な産業の浮沈とは勞働者の地位に著るしき

[illegible]へ、[illegible]この時には生產者に有利な打擊を與へるが、不景氣に際しては銀行が信用の回收に急なることゝ、金利の引上げの劇なることゝは益々事業家の財政を窮迫せしめる。要するに信用利用は生產を助長するが又景氣の變化を迅速にし又强大ならしめる恐れが潜んで居る。斯くの如き便利な併し屢々危險な制度の存在は產業に働く勞働者をして屢々意外な失業に陷入らしめる。設備も原料も其のまゝであるに拘らず、勞働者を解雇せねばならぬ會社が多々生ずる實狀は屢々人の注目を引く所である。若し勞働者の蓄へた資本の大部分が通常の商業金融機關を通じて正當に健全に生產に利用せられて居るならば好いが、若し不健全に利用され又殊に投機的投資に利用せられるならば勞働者は二重の損をするものである。徒らに利殖を願ふて反つて不必要な生產の膨脹、泡沫會社の成立、產業界の攪亂を見るよりは寧ろ或程度迄資本自用の組織を利用する方が勞働者自身の利益である。組合、通常保險、勞働保險、失業保險其他現在及將來に於いて健全な貯蓄の途は多々あり得る。

勞働爭議は之れを豫防し得れば此上もないが、英國のやうな勞働組織の發達した國でもそれを避け難い。區々たる感情、個人的事情に依る爭のために勞働爭議の起るやうなことは殆んど[illegible]依る爭議に[illegible]失業の危險を伴ひ得るものである。之れを防止するためには[illegible]用人代表制度、(工場委員制度)其他の手段が考案され又爭議を破裂に至らしめないために種々の調停仲裁の方法が行はれ、機關が設けられるが、それでも爭議の破裂、失業の發生は免れ難い。此故に爭議の豫防及び穩和な解決手段の促進を計ることは假令一時的部分的の失業問題であつても最も直接に效果のある問題である。

（四）

失業救濟の手段は最も困難とせられる處であるが、產業革命以前に於いては失業問題は寧ろ小自作農が農業勞働者となり又浮浪人となつて貧窮に陷入つたために、之れを救濟するといふ以外には今日の樣な失業問題はなかつた。英國の救貧法は既に十四世紀時代から初まつて居るが、千三百八十八年の法律では乞食にパンと水とを與へるやうな簡單なものであるが、千五百三十一年の法律は乞食に特許を必要とし、之れに反した者は身體から血の出るまで笞刑に處せられた。オックスフォードやケムブリッヂの大學教授でも認可なく大學の名儀で寄附を求めれ

ば罰せられることになつて居た。千五百四十七年、七十二年の法律では刑罰が益々苛酷になつて、怠惰な放浪者は烙印し又は其子を奴隷とし或は死刑に處すると云ふやうな酷刑を課することになつて居た。併し千六百一年のエリザベス法に依つて英國の救貧法は一轉機を來し、此法では一方不具者　老人を保護すると共に、生計を得ざる者をも保護した。各教會區は住民に對する强制賦課によつて基金を作り、各々授産場を設けた。千七百八十二年のギルバート法に依つて救貧法支給金が開始されたが、之れはマルサス其他の初期の經濟學者が擧つて批判したものである。何人と雖も働き得且つ其意志のある者は救貧法委員に依つて其能力に應じ其住居の附近に於て職を與へられる。それ迄は十分の給養を與へられる。其結果として被救助者が反つて普通勞働者より間々多くの收入を得る樣な事實が生じ、一般に勞働階級の墮落を來す惧があつた。其結果として千八百三十四年に救貧法勅命委員會の報告に基いて新な法律が制定され從來の方針とは全く正反對に當時の經濟學者及び政治家を支配した自由放任の學說に基く制度が行れる樣になつた。之れに依つて働き得る者及び其家族に對する戶外救助は廢止され、單に授産場（ワークハウス）に於いて働かせる事にした。但し獨立勞働者よりは少い賃金を與へることになつて居た。即ち千八百三十四年の委員會の政策の根據は、個人の失業は全く其個人の缺點に基く者である。能力あり勤勉なる者は必ず其勞働の市場を求め得る者であるといふ論據に基いて居る。猶當時英國内には眞の勞力過剩があつたのではない、其前に無限の生活保障をしたゝめに、勞働階級に於いて不謹愼の結婚が增加したゝめであると云つて居る。其後屢々救貧法の改正があつたが、最も著るしい政策の變化を見たものは千八百八十六年の内務大臣ジョセフ、チャンバレーンの布達（サーキュラー）である。之れは其後の總ての失業救濟策に對して最も重大な意義を有するものである。此法は明に働き得る失業者と働き得る貧窮者とを區別して居る。チャムバレーン氏は勞働者にとつて一般の産業不況のために職を失ひたる者は之れを救貧法に依つて救助を受けしめるべきものではない、貧民に對しては授産場で勞働試驗を行ふが、失業勞働者に對しては他の方法をとると聲明して居る。併し最初の案には其賃金は一般の方法より稍々低いものを與へるべきだと云つて居る。此方針は千九百五年のロングの失業勞働者法の基礎になつて居る。即ちチャムバレーン以來初めて失業の根本は個人以外にあり、産業組織それ自身の中にあるものであるといふ精神が是認されて千九百五年の法律が明かに此方針に進んだのである。

千九百五年の失業勞働者法に依ればロンドンの各區及び人口

[illegible]と無關係である。此救濟施設は[illegible]にして一時[illegible]た者には救濟委員會が次の方法で救助する。一、移民。二、一時的仕事を與へる。三、農園移住地の設置。四、勞働者を求める傭主勞働を求める勞働者のために登錄の組織を設ける、即ち公共の勞働紹介所を設ける。此法の制定者は全國を通じて勞働分配の報告機關の設立を考慮して居たのであるが、此法の豫想した勞働紹介所は單にロンドンに設立されたのみであるが、千九百九年の法律に依つて全國的に紹介所の設置される基礎となつた。農園移住地は多少成功したものもあるが、多くの費用を要し且つ余り繼續的の效果がなかつた。

次いで千九百九年に勞働紹介所法を制定されたが、此法律に依つて全國に勞働紹介所を設けることゝし、傭主及勞働者の双方の代表者より成立する地方代表諮問委員會を各地に設置して其地方の勞働紹介を援助せしめた、此勞働紹介は無料で行はれ且つ勞働者が就職地に向ふ旅費を貸與することゝして居る、次いで千九百十一年十二月に英國の國民保險法案が通過し、翌年七月十五日から實施されることになつた。此國營保險は疾病保險と失業保險を含むものであるが、其失業保險の要點は、一、建築、建造、機械工業、造船、製鐵、車輛製造、製材等に從[illegible]に[illegible]たやうに[illegible]に依り[illegible]機關丈けでも英國の工業勞働者の六分の一が保險に參加することになると稱せられて居る。二、管理機關としては勞働紹介所及び失業共濟金の支拂を行ふ現存の勞働組合を利用する。三、毎週各勞働者に就き二片半の強制拂込を傭主と使用人の双方に賦課する。四、勞働者と傭主の拂込金の總額の三分の一即ち全體の四分の一の金額を政府が基金中に拂込む。五、機械工業に對しては一週七志、建築事業に對しては一週六志の支給金を最高限十五週間の失業期間丈け支拂ふ。六、強制保險參加を指定された事業に屬する勞働組合にして失業救濟金を支拂ふ者は國營保險資金より其支拂金中より右の金額の拂戾しを受ける。

歐洲戰爭前には二百萬の勞働者が一九一一年の法律によつて失業に對して保險せられてをつたのであるが、英國政府は大戰終了後失業者の激增に鑑みて一九二〇年の夏には失業保險を賃銀勞働者の大多數に適用せんと企て、遂に一九二〇年八月の法律を以つて失業保險を農業と家庭勤務を除きたる殆んどすべての事業に從事する勞働者に擴張適用することゝし其の結果として失業保險參加者一千二百萬人を算するに至つた。保險料金は使用人一人毎に男四片、女三片、男兒一片、女兒一片半の割で

拂込義務を負擔し、雇主は之に對し四片、三片半、一片、一片をそれ〴〵拂込み政府は二片、一片三分二、一片三分一、一片をそれ〴〵拂込むことになつてをる。保險支拂金は男子一週十五志、女子十二志、男兒及び女兒はその半額を支給されるのである。

（五）

今茲に各國の失業救濟に關する各種の具體的手段を論ずる考はないが、我國に於いても最近數年來失業問題が喧しく論ぜられ、勞働爭議の頻發と小作爭議の續發と相共に識者の頭を惱ます問題になつて居る。併し我國の失業問題は英國其他に於けるものと余程趣きを異にした點があると思はれる。英國の失業問題は固より工場勞働者を中心としての問題である。殊に嘗てマルサスが指摘したやうに大戰爭後の商業の破壞と戰場よりの歸來者の多かつたゝめに、一時特に釀成された問題である。一時失業數が二〇%以上にも上つた事は從々英國の上下を驚かし、失業保險の適用を擴大せんと企てしめるやうになつたのであるが、我國の工業は平素に於いては割合に浮沈少く、歐洲大戰爭に依つて殆んど革命的の大膨脹を來したゝめに戰後の不況とゝもに一般に殊に造船業、化學工業の如きは多數の失職者を出さねばならぬ状態に陷つたのである。工業方面に於ても失業救濟の必要が我國に於いても突然發生したことは爭はないが、他方に於ては戰後の一般的不況と震災の打擊に依つて所謂知識階級方面に多大の失業者を生じて居る。政府の行政整理の影響と高等教育を受けた學校卒業生の過多は相俟つて此傾向を助長して居る。從來の我國の教育方針が余りに形式的で實社會との聯絡が少く、學校卒業者は職業的の技術訓練に缺けた感があり、一般父兄と子弟の單純なる誤つた名譽心のために徒らに大學の門に走る状況が永く續いた結果として社會の要求せざる多數の所謂指導階級になるべき人物が學校から作爲的に産出されて居る。即ち大學教育の濫用、指導者の過剩生産といふ状況は求職者自身を悩ますのみならず社會問題として最も考慮を要する問題である。將來教育の方針を職業的實際的に改め、修業年限を短くし學資の負擔を輕くすると共に學校卒業者が直ちに世間の要求に適合すると共に自らも又職業を求むるに困惑する如き状態からも救はれる方針を考へねばなるまい。工業勞働者の問題と共に廣く失業保險の問題を考へる事も一策であるが、失業保險は先づ工業の一部より初めて漸次に及ぼし、次いで商業使用人其他に及ぼすべきものであつて、危險率、保險料の算出に最も困難を感ずる此の失業保險は俄にこれを完全に實行することは困難である故、一方此制度の研究を爲すと共に他方に現在既に數年來我國で發達し來つて居る職業紹介所の組織作用を完全にし普及せしめることが卑近な具體的の手段であらう。其他農村の振興、植民地との關係も論じたいが時がない故機に讓る。

時評

英國炭坑爭議と我國小作問題

吉野作造

本誌前號に於て、英國勞働爭議の起因經過等に關する諸家の說明を研究せられた諸君は、我國の小作問題が種々の點に於て頗る彼國の炭坑爭議に似て居ることに氣付かれたであらう。其の本質に於て頗る相似たる所あり、從つて其の解決の方針に付ても結局彼れに倣ふべき多くの理由を有つと私は考へる。然るに官憲や地主などの態度はといふ段になると、彼と我と實に霄壤も啻ならざる相違がある。こゝが英國と日本との異る所といへばいへる。併し何れにしても、英國に於ける炭坑爭議の經過が我國小作問題の解決に一大暗示を與ふるものたるは疑なく、英國坑夫の主張が漸を以て着々聽容せられ行くの形勢には、また大に吾人の意を強くせしむるものがある。

× × × × ×

第一に事業が土地に定着し、且つその土地が少數所有者の壟斷に歸して居る點に於て、英國の炭坑業と我國の小作農業とが甚よく似て居る。只彼に在ては外に企業家といふ中間階級があるが、我にはそれがない（ありとすればそは小作人彼自身だ）。之が一つの相違といへばいへる。

さてこの土地所有といふことは、本來其上に行はれる生產業に對して何れ丈けの發言權を有し得るものか。遠く其土地を所有するに至つた因緣に遡るまでもなく、單に土地台帳に自分の名が登錄されて居ると云ふだけで、他人の粒々辛苦の結果を大半掠め取るといふは、どうしても今日の倫理觀念が承知しない。英國に於て土地所有權が今日如何に取扱はれんとして居るかは玆に管々しく論ずるまでもなく、我國にても少くとも學者間の論究には、此點に關し、自ら略ぼ一定する所があると考へる。只實際の取扱如何といふ段になると、今猶ほ土地所有權は

他の一般所有權と同じく、絶對的なものとして神聖視されて居る。我國の小作問題も實は、この傳統的思想に一大轉囘の來ないうちは――殊に地主階級自身が其の頑迷なる態度から醒め目社會に對する道徳的責任に反省しない限りは――容易に好ましい解決を見ること、はむづかしいと思ふのである。

×　×　×　×　×

次に富の直接の生産者は、彼に在ては坑夫であり、我に在ては小作人である。此點も似て居る。若し企業家をも直接生産者の一人に數ふべくんば、この資格をも兼ねる我國の小作人は、彼の坑夫よりも、富の生産者としての意味に於て、一層強いと謂はねばならぬ。從て生産された富に對する權利に於ても、我國の小作人は決して彼の坑夫よりも劣弱であつてはならぬ道理である。

英國に於ては、坑夫の賃銀は優先に支拂はれる。我國に於ても、事實に於ては（明瞭に認許されてゐるのではないが）小作人の收得は地主に先んずると云つてい丶。但し其の收得額に至つては如何にも低い。近年小作料の段々下がつて行くことは事實だ。下がる度毎に地主は[illegible]採算上[illegible]を訴へる。斯くて小作料の決定は時代にとらはれなく地主小作人の協議に依るのではあるが、其際に標準とされるのは、常に地主側の採算としての採算であつて、決して小作人の生活ではない。[illegible]小作人は生活が苦しいからとて小作料の引下を哀願する。地主はまた勢に迫られ、實際の採算上どうかかうか忍び得る範圍までは讓歩もする。併し採算といふことは要するに小作人の要求を拒絶する當然自明の障壁となつて居り世間も亦之を當然の事と認めて怪まない。が、よく考へて見ると、元々の小作料のきめ方が不當に地主に厚かつたのだから（地主が主人で小作人はその奴隷とされた時代の惰性と觀れば之も致方がない、一概に思ふ存分の引下げをやらぬ限りは、何度之を繰り返しても小作料引下げの必要の絶まざるは當然だ。と云つて、小作料の引下げが今なほ地主に對する哀願と云ふ形で要求されて居る間に、思ひ切つた引下げの實現を見る筈も絶對にない。

英國では、富の直接の生産者として坑夫は、生産されたる富に對して第一の要求權ありとされる。從て彼等の生活必需品は何事を措ても絶對に保障されねばならぬとされて居る。坑夫の生活の必要が十分にみたされて後、企業家や地主は始めて若干の分配に與り得る。是れが實に英國産業界の正義なのである。地主といへども之に對しては、一言の異議を挿むものはない。

我國でも本來なら、第一に小作人の最低生活線といふものがきめられ、之を標準として其の最低收得額が最初にきめられねばならないことになつたね。此邊のことは、森本博士や那須博士

[illegible]ことと考へる。

× × × ×

假りに小作人の最低收得額といふものがきまつたとしても、其を取り去つた殘りの全部が當然地主に歸すべきものかといふにさうではない。英國では、坑夫の所得に對して企業家の所得（此の中に地主の所得も含められてゐる）なるものが決定される。之を拂つて猶ほ剩餘あれば、亦之を一定の割合で双方に分ける。即ち英國の正義は、殘りの全部を企業家の所得に許さないのである。我國の地主の地位が理論上英國の企業家よりも猶ほ薄弱なものなることは前にも述べた。然らば英國の企業家以上の要求權を地主に認め難きは云ふまでもなからう。假りに姑く一歩を讓つて、英國の企業家同樣の地位を認めてやるとしても、その所得は、姑く英國の例を以てするなら、小作人のそれの一割五分でいゝわけだ。卒然として斯んなことを云つたら、地主も役人もびつくりするかも知れぬ。固より私にも英國の炭坑業の例が其儘我國の小作問題にあてはまると言ひ張るつもりはない。只大體の理論の筋道を示すに止まるのであるが、兎に角冷靜に考へられたなら、私のこの假定にも多分の眞理あることは認めらるるであらう。

[illegible]れたにしても、[illegible]

[illegible]つがある。[illegible]

ことは云ふまでもない。

× × × ×

そこで我國の小作人が生活權確立の旗幟の下に小作料の低減を叫ぶのは當然だといふことになる。從て小作爭議の今後益々面倒になるのも怪むに足らぬ。漫然之を困つたものだなどと愁ふるのは、時勢に盲目にして徒らに惰眠を貪るものの繰言に過ぎず、我々はどこまでも公平なる第三者として、滿を以て正しき解決に達するやう事態を適當に導くことに心掛けねばならぬ。殊に斯うした態度は最も切に官憲の人達に要求されねばならぬと私は思ふ。所が我國の官憲はどう云ふものか今仍ほ所有權を絶對萬能とするの觀念に捉はれて、地主小作人を主從關係と視る昔ながらの封建的因習から今以て脫け切らず、甚しきは小作人の地主に對する強要は一種の恐喝だなどといふ謬想にこだはつて、地主の保護は即ち正當なる所有權の保護、加ふるに是れ正に社會的秩序を維持する所以だなどと考へ、切りに小作人に不當の干渉を加へんとする。この點になると、彼我官憲の

思想には實に天地の差がある。英國の保守黨政府でも、理に於て時代の正當なる要求は決して見のがさなかつた。處が違へば斯くも思想の違ふものかと、正しきことの中々に行はれ難きを歎ずる次第である。

× × × × ×

かく云へばとて私は、我國に於ける總ての小作爭議を現にみな正しいと主張するのではない。我國の小作問題の本質を明にするのがこの小篇の目的で、幾多現實の小作爭議に對する私の批判は自ら別問題だ。現實の問題としては其の要求の不當なるものもあらう、又不當なる方法を以て要求の強要されてゐるのもあらう。どんな正當な要求でも、之を貫くに正當な方法を以てすることを怠つては、この要求に自ら歪みのなくなるのは已むを得ない。不當なる方法を擇んだといふ點に道徳的缺陷を暴露するの誘因を作り、之に基く社會的不信が禍根となつて、遂には社會をしてその當然の要求にさへも耳目を掩はしむるに至る。斯の如きは世上に決して珍らしいことではない。さういふ所から、現實の問題に對してはまた種々別種の批判を加ふるの必要はあるが、一般的概論としては、何と謂ても、我國今日の小作人の立場は、之を極度に且つ無條件に擴張する必要があると信ずる。官憲も、地主も、時としては一般世人も、小作問題に於ける「正義」をば餘りに低く評價し過ぎて居る。英國炭坑爭議の經過を見て昨今ことに此の感を深うして居る次第である。

宮島資夫君の「金」を讀む

未見の友宮島資夫君よりその著「金」の惠贈を受けたのは五月初旬のことだ。病後未だ充分に體力を恢復せず其の際可なり忙しい生活を送つて居る私のこととて之を讀み終るに一週間ばかり掛つた。大變面白かつたことをお禮代りに申しておく。併し私に取てこの本は單に面白いばかりでは濟まされぬ。其外に本書のもつもう一つの價値が大に私をひきつけたことを云はずには居れない。私のやうに現代を一歴史事實として研究せんとするものに取て本書は一つの重要なる參考文獻を寄すと考へたか

らつてゐる。この意味で[illegible]の一に算へて感ずに[illegible]することにした。かくて私は宮島君に向つて一事に感謝する義務があるやうに思ふのである。

誤解を避くる爲に豫めことはつて置くが、私が右の言を爲すのは、近頃の作物中宮島君の本だけがとくにさうした特色を獨占するといふ意味ではない。外にそんなのが澤山あるかも知れぬ。併しあるといふことも私に斷言は出來ない。蓋し小說などのことに就て私は全く門外漢だからである。一體私は文藝方面の作物などを金を出して買つたことは殆んどない。讀むのは必ず只で頂戴したものに限る。それも寄贈本の大部分はそれぞれ私の専門に關するものなので、偶に小說などがあつても手が廻り兼ねるのである。専門關係のものですら、近頃は心に掛りながら他日に繰り延べてゐるものが多く、常に友人の好意に背き勝なのを苦しとして居る。だから宮島君の本に就て云々するのも、實は偶然これだけを見てふと感じたことを其儘云ふに止まるので、多少でも斯の方面の消息を知つて居る者の言葉と取られては困るのである。

讀んで一言の返禮を述べねばならぬ書物が机上に堆いのに、いつもなら一番後廻しにすべき筈の小說「金」を一番先きに讀んだのはどういふわけか。そは包を解いて見返しを見ると、特に[illegible]あつた方ではない。それだのにわざわざ署名までして一本を[illegible]つたとすれば、必ずや此中に特に私を[illegible]ふべき何ものかを包藏して居るからに相違ない。乃ち何事を差措いても讀まずんばある可らずと、ひまを見てはしきりに讀み耽つた。宮島君はこの本に依つて必ずや或事を私に告げんとしたのだとは私の今以て信じて居る所である。而して私の此本に對する理解が果して著者の豫期に中るや否やは分らないが、せめて私の解し得ただけの事を率直に述べるのは、是亦同君の好意に酬ゆる所以でもあらうと考へつゝ、茲に拙き筆を執るに至つた次第である。

× × × × ×

私の觀る所では、著者の此書に依て世間に紹介せんとせるは、杉中なる一青年で、此の青年の短き一生に對する著者の解釋が實に一篇の眼目ではないかと考へる。私はこの點に本書の重點があり、又この點に本書が現代と交渉する社會的意義が存し、從て此の點で本書は私共の後々の研究にも大に參考になるものと思ふ。但し第三者たる讀者にこの事を明にする爲には、少しく話の筋を述べておく必要があるかも知れぬ。

× × × × ×

磯部といふ株式仲買人がある。散々にやり損つて破産に瀕してゐたのを、栗川といふ資産家が見つけて之を利用することになる。栗川の背後には安達といふて天下に誰知らぬ者なき大立物が控へて居る。安達は時の相場に乗ずるといふよりは、寧ろ我から相場を作つて大儲けをするので有名だ。たゞ世の怨府となるを恐れて滅多に表面へは現れない。これだけ悪辣陰険を極めて居るといふ評判が高い。そこで彼はいつも困つてゐる奴をこつそり手なづけては大芝居を打つ。之が彼の常套手段だ。世間は之を薄々承知で居ながら毎時彼にしてやられるのだから面白い。時は大正九年の春だ。戦後の空景気に世間が陶酔し切つた潮時を見て、安達は栗川に旨を授け、栗川は即ち磯部を物色し得て、突如世上の期待に逆行し、猛然として売りに出た。其の為に相場は俄に崩れた。やがて大恐慌が来る。すると安達は例の手を出し、其の管下の銀行網に発令して急に手を引き締めさす。仕出しが崇れば相場は益々下るばかりだ。斯くしてこの三人は大小の差こそあれ、みな一挙して巨額の富を作つたのである。だが他方にはまた此の激変の犠牲となつて大傷を受けたものは非常に多い。大小の銀行は到る處に閉せられる。

この一つとして池田家の没落が数へられる。病の床に臥して最後のやまを張つた父は、百計盡き、さらでも迫れる死期を待ち得ずして遂に自殺する。一家は離散し、勝気の娘は自暴自棄の極我から堕落の淵に我身を堕した。この娘は名を鈴子といふ。實は磯部の娘房子の親友で、其の兄茂のひそかに戀々の情を寄せた相手であつた。

磯部の長子茂に一人の親友がある。之が本書の主人公とも見るべき杉中だ。之がまた房子と相思の仲とある。やがて将来を契るの約束が二人の間に成立する。

杉中は一つには茂の為に又一つには房子から頼まれて、一家没落後行衛不明になつた鈴子を捜すべく奔走する。やがて鈴子を堕落の淵から見出す。捨て鉢の鈴子はあべこべに杉中を陥れようと挑む。杉中は何となく彼女の魅力を感じつゝも房子の手前一旦厳しく之を刎ねつける。其の為に彼は鈴子の為にはかられて一度事を以て警察に留置さるることになる。先是池田家の親戚に長森といふ青年があつた。池田一家の破滅後感ずる所あり、身を本所深川方面に隠して労働生活をやつて居る。之を訪ねた杉中は、その純真無垢な行動に非常な感激を覚える。警察に於ける数日の拘留は、更に彼を促して大に考を深めさせる。

かくて彼はますく長森のやうな生活様式に強き憧憬を感ずるに至つた。併し顧るに彼の通つて来た途は新しい時代の兒長森のとは丸で違ふ。要するに自分は亡ぶべき前期に属した人間

ぞらう。[illegible]に至ち、只實行上の第一歩として土地所有權の廢止を主張する者である。故に理論的には之等の人々と社會主義者とを區別する必要は無く、單にタクティックの見地より特別の批評に値するのみである。(一)と(三)は資本主義經濟組織の社會的害惡が土地制度のみの根本的改革によつて免れ得られることを信ずる者である。而して實に(一)に於ては土地所有權を廢止し、之を公有に移すによつて、(三)に於ては土地所有權を其儘に認め、只何等かの形態の地租を賦課し地代を徴收することによつて七分其目的を達し得ると云ふ。私の考ふる所では、法律的見地よりは兎もあれ、經濟的見地よりすれば、此兩者を別箇のものとして取扱ふ理由に乏しい。經濟的見地からは土地所有權が土地の生產的又は消費的なる直接の使用權と地代收得權との集合であると考へることが出來る。然らば土地所有權を認めて地代の私有を許さざることゝ、土地を公有として地代に等しき使用料を以て之を私人に貸與することゝは名義上の差に過ぎない。強いて其區別を求むるならば、地代は租税として徴收することゝ、土地の使用料として收納することゝ何れが手續上簡便なるかを問題とするに止まるであらう。故に結局ディールの所謂本來の土地改良主義者のみが兹で論ぜられることになる。

[illegible]である。土地と勞働であるが、故に土地と[illegible]みならず、凡ゆる自然の原料並に勞力を合せる。其他に於て資本財貨は其れ自身勞働と土地との結合によつて成り、單に勞働の生產力を増加する手段に過ぎない。併し生產の時間を考慮に入れる時には、無視し得ざる生產の要素となる。

生產物又は其價額は前記三種の生產の要素を以て生產に協力したる報酬であり、勞働には賃銀が支拂はれ、資本には利潤が與へられ、土地には地代が割當てられる。

然るに生產の要素中に於て土地は生產し得可からざる、從つて増加し得可からざるものであるから、其獨占的地位によつて、生產物又は其價額の中で、資本並に勞働が忍び得可き程度の報酬を得たる以上のものは凡て土地所有者が横取りすることが出來る。從つて經濟並に技術の進步によつて生產力が増加すればする程地代も亦増加し、小數の地主の手に文化の恩惠である富が集積する。而も彼等は何等其所得に値するものに非ず、土地が獨占的位置を占むるに至つたのは、人口の増加の結果であり、土地を利用して營まれる生產額の増加は矢張り凡ての人人の協働によつて生じたものである。何人も自己の勞働によつて生產したる物は自己の所有とすることが出來る。賃銀は正當

た所得である。資本は云はゞ過去の労働の蓄積である。其資本に於ける利潤の取得は是認さる可きものである。獨り地代は作付の労働の結果を横取りするものであると云ふのである。

土地と其他の財貨との間に存する根本的區別に氣付いて土地が小人數に獨占せられ、彼等地主が多數の者の生活の機會を獨め、土地の使用を許可する條件として生産物の大なる割合をば拱手して取得することを禁止するため、土地に對し特別の法制を認めねばならぬと云ふ見解並に實行は、獨逸の土地改良主義者の耆宿アドルフ、ダマシュケの云ふ所によれば『經濟史』並に『土地改良』最古の人文とも云ふ可きハムラビの法典に見出すを得、其後如何なる民が如何なる時代に於ても其思想は保存せられ、且つ多少の實行となつたと云つて居る。併し工業の發達が大規模なる資本財貨を出現せしめたる以前に於ては、土地は全部の生活の機會を意味して居たものであるから、土地改良主義者の意味に於て土地と他の財貨との本質的なる差を知つて居たかは疑問である。與ふる生活の機會を平等ならしめるための實際政策が當時の經濟事情に於て偶然土地政策たる内容を有するに至つたのでは無いか。併し斯かる性質の思想若しくは實行並に「或權利の土地に就て絶對的權利を有する者は唯のみである。土地を利用する權利は自然權の一内容である」等の法律的性質を有する思想を別として、近代土地改良主義の經濟學的根據を築いたものは何と云つてもダヴイツト、リカードの近代地代論である。彼は有名なる定式的説明に於て肥度の異れる種々なる農地が存在する場合、人口が増加し最早第一等の農地より與ふる穀物を以てしては不足なる場合に、第二等の農地が耕作せらるゝが故に――一定の技術を前提し、同一の農地に或程度以上の労働並に資本財貨を利用すれば、所謂報酬漸減の法則の支配によりて、益々割合悪しき數量の生産物より外收得し得られざるが故に耕作は劣等の農地に移る――同量の労働並に資本財貨を利用して、兩農地の與ふる生産物數量の差が、第一等の農地の地代となる。何となれば常に市場に於ける穀物の價格は其生産費によつて一様に決定せられる。其際價格は第二等の農地に利用せられたる資本並に労働に相當なる利潤並に賃銀を與へ得る程度に定まるであらう。何となれば其より低ければ第二等の農地の耕作は拋棄せらる可く、穀物の不足に價格を騰貴せしなるであらう。反對に其より高ければ第三等の農地が耕作せられ穀物の供給が過剰となるからである。斯くして耕作せられる、最劣等の農地――之を耕境の農地と云ふ――に於ては利潤並に賃銀より外得られないが優等の農地に於ては、其れ以上に餘剰が殘る。これ『土地の原始の且つ破壊し得可からざる（優秀な

[illegible]生産費の一部である」其後人口が一層増加し、穀物の價格が騰貴し、第三等の農地が耕境の土地となれば、第二等の農地にも地代を生じ、第一等の農地の地代は其れだけ増加する。

斯かる地代の發生並に増加は農地の位置に差がある場合にも、亦報酬漸減の法則の支配に依て相次で利用せる資本財貨並に勞働の各單位の收益力に差がある場合にも認められる。尚土地が生産の要素として或は事業財貨として優劣の差を有する限り農業のみならず、他種の生産に於ても、並に土地を事業財貨として——例へば住宅地として——利用する場合にも認られる。

今、當爲問題の立場にあつて前述のリカード地代論を考察すれば、二つの顯著なる地代の性質が直に眼を射るであらう。即ち第一は地代が不勞所得であることであるし、第二は地代の取得に當つて何等の新しき富の生産を伴はないことである。地代は自然的、社會的事情によつて生じ、地主は寢ながらにして之を受ける。賃銀並に利潤が取得せらるゝ前には、必ず其に相當する有要なる勞働が提供せられ、又は資本財貨が蓄積される。獨り土地については昔より今日まで一定不變の量をもつて存在して居る。併しリカード自身は、技術の進歩を無視したる一定の假定の下に地代が利潤並に賃銀に對し如何なる割合をもつ

[illegible]廢止せる社會政策を英國へ移さりしが故に、[illegible]るも小作人が之を取得するだけであるとし、之を社會に歸屬せしむる點に氣付かなかつた。彼は寧ろ自由貿易政策の實施により海外より多額の穀物が輸入せられ、穀價の下落により地代の甚しき増加を阻止することを期待して居た。

英國正統經濟學派の中でも既にジヨオン　スチユアート、ミルは其『經濟原論』に於て地代論の應用に氣付き、土地増價税を起し、少くとも地代の將來の増加を徴收することの社會正義に適合する所以であることを論じて居る。併し斯かる主張の普及と共に基く土地改良主義運動と云ふ實際勢力の發生に殊動を立てた者はヘンリイ、ヂヨオチである。彼は其名著『進歩と貧』に於て、リカードの地代論から分配に關する法則を演繹し、利潤と賃銀は常に最も不利益なる生産條件を有する、從つて地代を生ぜざる土地に於て營まれたる生産の收益によつて決定せらる。故に人口増加して益々劣等なる土地が利用せらるれば、利潤と賃銀として國民所得より受くる分け前は少くとも相對的に絶へず減少する。否遂に最劣等の土地すらも悉く占有せらるゝに至れば、此生産の要素を使用するための許可を得るために、資本と勞働とは忍び得可き最小限度の報酬を受けて他を悉く地

主に献ずる。従つて文明進歩の恩澤は悉く小數の地主が獨占し、玆に巨富が集積せらるゝに對し、利潤と賃銀とは一定の程度に限局し、玆に貧を生ずる。従つて進歩と貧とは地代の私有を認むる間は避け難き社會の病患として現はれると述べて居る。

彼の著は人間愛の熱情に充ち、其實力は宣傳的效果を有し既得利益に最も苛酷であつて、且つ地代の徴收方法として有名なる地租單税論を提唱した。

（五）　我國小作爭議と土地改良主義

然らば前述の如き土地改良主義は我國現下の小作問題と如何なる交渉を有するであらうか。

何人も知るやうに我國の小作問題は大正十年を劃して新時代に入つた。小作人盲從時代から激烈なる小作爭議時代に赴いた。而して小作爭議の内容としては小作料の減免が壓倒的なる大部分を占めて居る。内務省並に帝國農會の發表する小作爭議原因を見るに、經濟的原因と時代思潮的原因が相混じて居る。併し近年漸く不作又は米價下落等の例外的なる經濟的壓迫を緩和するための一時的なる小作料の減免に對して、永久的なる減免を主張するものゝ割合が増加しつゝある。米價は昂騰せざるに非ず、收穫は増加せざるに非ず、而も之等の經濟的並に技術的なる有利なる條件も、租税の増徴による貨幣の必要、特に時代の風潮である生活程度の急激なる向上に原因する増加せる欲求を十分に滿足し得ない。

併し如斯く小作人が小作料の輕減によつて必要なる所得を得んとする時、地主は之に應ずるか又は應ずる能力あるかと云ふに大なる疑問であると云はねばならぬ。我國に於ては小作地のみに關する所有地並に耕作地の面積の廣狹を知るために信頼す可き統計を持たないけれど、前記の一般的統計から推察して、小作人の耕地面積が其増加せる欲求をば從前の小作料（主要收穫物の五割五分の平均）を大に動かさずして充し得る程度ならず、他方に於て地主の所有面積が其生活程度に大なる影響を及ぼさずして著しく小作料を輕減し得る程度ならざることを結論し得る。玆に我國の小作問題の最大なる困難が潜んで居る。勿論例外として新潟秋田山形の如き大地主の存在する場所に於ては小作料の輕減は單純に地主の遊蕩費の一部を割くことを意味するであらうが、大局より觀察すれば小作料の輕減によりて小作人の生活程度を向上せしむることは、地主の從來の、而も餘り高からざる生活程度を脅威することゝなる。果して然らば小作料の永久的輕減の問題は解決し難き性質を有する。妥協の望は甚だ少ない。併し之がため小作人に生活程度の向上を斷念す

[illegible]おら此立より生ずれにたいし[illegible]の土地改良主義の地代に作に對する否認を利用せられるであらう。勿論我國の小作人が地代を悉く國家に提供する程、私心無き者であるとは思へない。併し目前其消極的方面に於て即ち地主の地代私有の權利を否認する場合に己を利する武器が、他日其積極的方面に於て即ち凡ての地代を公有とする場合に、己を傷ける惧あればとて、始めより之が使用を斷念する程民衆は論理的であり得ない。況んや其際に於て地代は勞働所得と混同し、全く世人の注目を惹かざるに至る望あるに於てをや。

然しながら私は土地改良主義並に其我國小作問題への應用を其儘是認するものではない。

先づ我國の小作料が前述の事情の下に決定されるならば、地主は單にリカードの地代のみならず、小作人が自己の資本の利潤並に勞働賃銀として受く可き部分も亦地主の手に渡るであらう。此意味に於ては小作料を非認する二重の理由がある。併し他方に於て農地の收益の增加が土地改良等の資本財貨又は勞働の利用によつて生じた限りに於ては、之は『土地の原始の破毀し得可からざる力』によつたものでは無い。農地の殆んど凡の經濟的性質は絶えず回復改良せらるゝ必要があり、之がために地主[illegible]り地主は之を取得する權利があり。而して更に[illegible]農地に於てリカードの地代をば小作料から區別して計算することは全然不可能である。[illegible]改良地が絶えず賃貸せらるゝ時、農地の資本價値をば、現在の地主が[illegible]せる資本を以て支拂ひたる場合、其者に取りては、地代は實質上利潤に代るものでは無いか。

尙土地改良論者が所得の分配とは其成立に貢献せる程度に於て生產の三要素に分取りせらるゝを意味すると云ふこと、並に勞働のみが所得の正當なる權限となり得ること、地代のみが不勞所得であること、土地の私有を認むれば文明の進步の恩恵は悉く地主のみが私し貧富の差は之によつて生ずると云つたことは悉く誤つてゐるか、若しくは誇張されて居る。

前述の如く過去の投資の結果が永久的に土地の原始の力と結合したる場合を度外視しても、若しも生產物が生產の三要素の協働によつて生じたものであつて、其の何れもが必要條件であるならば、其貢献の程度を算出することは尙一片の紙片を切るに當つて鋏の兩刃の各が如何程役立つたかを知らんとする如きものである。加之斯かる、リイフマンの所謂分配に關する物質的見解によつては貨幣經濟に於ける所得を理解する譯には行か

ぬ。此場合生産物の價額より其費用迄の費用を控除せるものが純所得となり、勞働、資本財貨、並に土地使用の價格が個別所得となるが、之等の數量を決定するものは市場に於ける其等の財貨に關する總需要と總供給との關係であつて、個々の生産經濟に於て各の生産要素が其結果に對し如何なる貢獻をなしたるやと云ふこととは無關係である。從つて所得が提供せられたる、現在又は過去の勞働量又は其有効度に比例するものでは無いのである。

更に土地改良論者の分配論は勞働のみを正當なる權限と認めて居るが、此主張を徹底したる場合、老人小兒病者の如く勞働能力なくして必要多きものは當然慈善的基礎の上に生活を維持せねばならぬ。從つて此原則は倫理的見地からは「各人が能力に應じて生産に貢獻し必要に應じて消費する」と云ふ分配の原則に劣るものである。故に單に苦痛を伴ふ勞働を利己的動機を與へて刺戟するものとして認められるに過ぎない。又前述の如く斯かる原則が支配するには全然現在と別種の經濟組織を打ち建てねばならぬ。單純に地代をのみ徵收したのでは足らぬ。利子は顯著なる不勞所得ではないか。今日資本の蓄積が其をば企業に於て利用するに依つて生じ、株券債券に投資するが如き利用方法が存在する時、節慾說によつて資本蓄積の勞働的性質を擁護し得るか。又需給の不調和並に變化の如き社會的要素が一定の企業に所謂准地代と呼ばるゝ餘剩の利潤を與ふるを如何に見るか。

最後に現在迄に於て地主階級と資本家階級とが完全に混合したことを見れば、少くとも實際問題としては、地代の增加によつて資本家階級の所得が減少せられ其貯蓄を減らすとは云へ無い。特に地主は絕對的には尚頗る多數であつて、土地の需要者の間に競爭が行はれる如く、其供給者の間にも常に多少の競爭が存在するから、彼等が利潤並に賃銀として最低限度の生產物を殘し、他の全部を提供する迄土地の使用の許可を差控へ得るものでは無い。而して今日の如く生產經濟を營むために大規模資本財貨（又は其に相當する資本金額）を必要とする場合資本家階級こそ勞働者階級に對して、土地改良主義者が地主階級に認むる如き獨占的地位を主張し得るものではないか。

要之に地代は不勞所得の中で、最も顯著なる且つ最も永續的なるものであるとは云へるであらう。而して地主階級が農夫である小作人階級に對する時には、工業的資本家階級が勞働者階級に對して有する如き經濟的に優越せる地位を主張することが出來るであらう。從つて土地改良主義は幾多の缺陷と誇張に拘らず、否寧ろ其偏したる且つ誇張されたる點が反つて民衆の心を捕ふるが故に、前述の如き事情にある我國の小作爭議に必ず利用されるであらう。『進步と貧困』の邦譯が我農村に愛讀せらるゝ曉には、我國現行の經濟組織の原則が脅かされる時であらう。我國に於ける社會的地震帶は實に都會に存せずして農村に在る。工業勞働者問題に存せずして小作問題に存する。カール、マルクスに存せずしてヘンリイ、チョウヂに存するであらう。

失業問題の由來

法學博士 渡邊銕藏

(一)

失業問題は歐洲大戰爭後の經濟界の不況と共に少しつゝ我國でも其萠芽を見るやうになつたが、大震災後の我經濟界の大打擊と之れに伴ふ政府の可なり徹底した財政緊縮方針の影響を受けて、啻に工業界のみならず、一般の經濟社會並びに官公の職業の方面に於いて多大の整理淘汰が行はれて、益々失業の聲が喧しくなつた。加ふるに學生の就職難の問題は我國に於いて特別の意味に於て失業問題の反響を大ならしめる傾向がある。此失業問題は產業革命の發達の古い國では、之れに伴ふ缺陷の一重要現象として、最近數十年來この問題の解決は啻に國家や資本家が頭を惱すのみならず、社會一般が其前途の安全のために、擧つて頭を惱ます問題である。殊に戰爭終了後生產界の大激動と共に驚くべき失職者數を出した英國では、最も此問題の解決に頭を惱め、一時全力を盡した住宅政策よりは寧ろ此失業問題の解決こそ英國の、否世界の資本主義生產組織の發達した總ての國の最大の難問題と思惟するやうになり、遂に千九百十一年に失業保險の制度を設ける迄に立ち到つたのである。

失業問題は近世產業國家の內部に潜むスフィンクスである。近世文明は此謎を解決するか、然らざれば破滅するの外はないとまで云ふ者がある。併し昔の經濟學者は此問題を餘り重要視して居ない。彼等は單に經濟學の所謂「卸貨の方面」のみを見て居た。即ち國全體としての富の蓄積を主眼として考へた。經濟學の鼻祖と稱せられるアダム・スミスを初めとして、其後數十年の間經濟を論ずる者は主として國家間の競爭に就いて攻究論議し、國家が他の國家との競爭に就いて富强である間は其他の事は左程重要でないやうに考へた。當時の政治家は國の富强のために計畫し活動したが個人勞働者の幸福と繁榮は彼等の眼中には一些事に過ぎなかつた。國富の增進を計る事が主眼である以上は、寧ろ勞働時間の出來得る限り長い事、勞働賃金の出來

得る限り低い事が希望された。經濟學者と雖も勞働時間の短縮、賃金の引上を考へる者はなかつた。政治家は元來資本家ではない。而も當時の政治家は支配階級より出た者であるから、彼等の利益は國家の利益と一致し、又勿論彼等の階級の利益と一致したのである。

古典派の經濟學者は失業は經濟上の問題ではなく、道德問題であると考へた。機械の發明は多くの勞働者をして仕事を失はしめるが、一般の生産の増進に依つて結局は其仕事を附すものであると考へ、現在の生産組織より見れば失業は避け難き事であつて、從つて只之れに對しては道德的の救濟をすればよいものであると考へて居たやうである。アダム・スミスに次いで現はれたマルサスは其人口論の特種の構想よりして、失業者は單に勞働者の過剩より生ずるものである、從つて自然淘汰が遠慮會釋なく進行する事に依つて此問題が解決される。生れながら所有せざる者は其兩親が之れを扶持せざる限り、又社會が其勞働を要求せざる限り何等の職も仕事をも請求する權利がない。神は彼に何等の惠みを與へぬ。只同類の同情に依つて生きるのみである。と云ふやうな言ひ現はしをして居るが、勿論これはマルサスの過剩人口論の理論から來るものであつて、彼の議論は上流階級に依つて熱心に支持せられ、彼等は貧乏に對する責任を逃れたのみならず、社會改良のために積極的に努力する義務もなきものの如くに感じた。併しマルサスの言と雖も固より世上の實際に依つて影響を受けるのであつて、彼の學説「政治經濟の原則」に於いては意外にも可なり詳細に然も割合に新らしい見方を以て失業問題が取扱つてある。ナポレオン時代の歐洲の大戰亂の後を受けた千八百十五年以後の勞働者階級の貧困狀態を説明するに當つて、彼は其原因を戰爭の影響に依つて資本と收入が破壊され、且つ生産物に對する購買力が減少し、他方に其以前の時期に於いて過剩の産生のあつた事と、且つ海陸の軍人が戰場より歸來した等の事實に基くものとして居る。此見方は大分歐洲大戰後の諸國の失業問題の原因に當嵌るやうに思はれるが、百餘年も前にマルサスが此言を爲した事は實に當時の經濟學者中に於いて最も群を拔いた洞察力を持つて居たものと云ひ得る。但彼は當時の失業問題の救濟策として是等失業者を非生産的の勞働、或は少くとも勞働の結果が市場に於て販賣せられる種類のものでない勞働に從事せしめる事を主張した。斯くの如く特に非生産的勞働を選んだ事は寧ろ最近の失業問題に對する意見とは反對であつて、彼の特殊の立場から生じたものであらう。而て彼は此種の仕事として公共營造物の建築並びに土地の改良工事、及び富者が從僕として雇ひ入れる事等を指

[illegible]に[illegible]は、[illegible]階級に對して[illegible]を與へる事は出來ぬ、產業の[illegible]階級に對しては利益よりは寧ろ多くの害を與へる、此故に政府は出來得る限り平和を維持し、且つ其支出を均一にすべきであると主張して居る。彼の思想が前の著書より大に變化して居る事は注目に値するのみならず、百年の昔に於て產業界の變化が勞働階級の不利益であるとし、失業より生ずる不幸の救濟に就いて、假令現代の解釋とは異るとは雖も具體的の救濟策まで指示して居ることは寔に烱眼と云はねばならぬ。

ダビッド・リカルドはマルサスの人口論を其儘に取入れて居るが、貧民を公共の資金に依つて救助することに就いては激しく之れを非難し、當時の貧民救助法を猛烈に攻擊して居る。而して人口の增加は必しも當然之を失業の原因とは考へ無いが、之によつて賃銀を自然價格以下に引下げるものとなし、たゞ貧困の結果貧民の減少により賃銀は再び回復し得るものとしてゐる。要するに之等の學者及總てのマンチエスター學派の特長は近世の產業組織を必然のものとして、之れに基く貧窮は止むを得ざる結果と認むるのである。

當時の經濟學者は失業に就いて此樣な考方をして居たが、實際に於いても斯かる考で道德的の救濟手段が執られた。救世軍[illegible]、[illegible]であるし、而て一般には[illegible]不具、疾病、怠惰、惡性、訓練の不足等にありとして、結局失業は個人の[illegible]の結果でありとし、殊に資本主義の生產組織の中に榮えて居る者は此組織自體の中に多くの同胞の不幸の原因が潛ん居るのではないかと考へて見る事さへもなかつた。

現在の資本主義の時代に於いては其組織自體の中に勞働を欲し、又其能力ある者の失業を生ぜしめる原因を包藏して居る。景氣、不景氣の變化、外國貿易上の關係、生產と消費との不適合、個人利益の無限の集積を妨げさる主義、之等は總て勞働者自身に於ける訓練と能率の如何に拘らず、勞働の需要供給を左右するものである。且つ現今勞働者は職業的に、地方的に堂固な組織を有し、進んでは全國的の團結を爲して有力な指導者を有し、明確な階級意識を持つて居る。即ち彼等の苦痛は最早個人的のものではなく、階級的の苦痛である。此苦痛を除くためには彼等は階級として活動するのである。從て失業問題の原因を探査し、其對策を講ぜんとするに當つては種々の複雜困難な問題に逢着するのである。

近世文明は其既に成就した所に依つて其功績を決すべきではない。其未だ爲すべくして爲さざる所をも見て其功過を斷すべ

きである。産業革命は其赫々たる成功と共に之に伴ふ害悪を持つものである。繁榮の傍に不幸と貧苦が潜んで居る。殊に最近數十年來の工業的生産と商業交通の發達の結果として大都市に集中した人口は、多數の住民をして不潔と不安の巷に膏血を絞らしめ、まゝ中世紀の放浪農奴にも劣る状況にある者を見出すのである。人の良心は此種の不幸の原泉を除かんとし、國家は又其安全のために絶えず此問題の結論を得んとして努力をして居る。

（二）

失業問題に關する考方又之れに對する對抗策は時代に依つて自ら異る事は自然の理である。時代に依つて不幸の原因や、所在や、程度が異る事は勿論、社會組織の發達は自ら同一事情に對しても異つた解釋を與へしめるやうになるのである。百年前と大差のない行爲、施設をしても其動機、功果に就いて全く異つた見解がとられることもあり得る。從つて貧窮問題、失業問題についても多少歴史的の觀察を必要とする。

資本主義の經濟組織の成立する以前に於ては、孰れの國でも人口が稀薄であつて最も早くより世界各地に富を求めた又産業革命の發祥地である英國は殊にさうである。西暦千六百年時代には英國の人口は僅かに二百五十萬、人口密度は一平方哩四十三人に過ぎない。勿論此時代は彼の英國でも純然たる農業國に過ぎないが、千六百年には彼の有名な東印度會社が設立され、英國が重商主義を執り、商工業の進行に向つて突進した時期であり、其翌年は抑々救貧法が新様相を現はした年であるが、當時の英國の人口は僅かに四百八十萬、其人口密度は僅かに八十三人に過ぎない。而て産業革命前半時代といふべき千七百五十年に於いても英國の人口は僅かに六百五十萬人であつて、目下の我東京府及び大阪府の人口を合計した程度のものに過ぎない。又之れを現在の大ロンドンの人口に比すれば百萬人も少いのである。即ち當時の全英國の住民は現今の一大ロンドン市よりも遙かに少かつた。そして其人口密度は百十二人である。然るに此稀薄な人口も其後二百年足らずの間に激增して千九百二十一年には三千七百八十萬、人口密度、八百四十九人となつて居る。産業革命の當初から見れば人口密度は約六倍弱に增加して居る次第である。

人口稀薄な農業時代には、孰れの國でも各個人は相當の自然を支配し得る故、直接に食糧を得る途もあり、勞働の機會がないといふことはない。少くとも其單純な生活を維持し得ないといふ憂は少い。固より人口密度の低い時代には一人當りの土

[illegible]
つたことは[illegible]を必要とし、[illegible]
[illegible]其他各文明と大事

業組織の用ひられる現代に於いては、人口の繁殖多しと雖も收穫の結果に於ては昔に比較して、一人當り必しも少いとは云へまい。若しさうなれば現代人は昔の人より少量の且つ不味いものを食べて居ねばならぬ筈である。併し現代の農産は世界的に移動するものであるから、複雜な分業と、分配の組織の下に生活する現代人にとつては、屢々倉庫にある米や果物を眺めながら、資力なくして家族の空腹を喫かねばならぬことが生ずる。此點に於いては日常の第一次の必要品、殊に生命を維持するに足る食糧に就いては昔の人の方が各自自然に接近して棲んで居る丈け、安心な境遇にあつたと云ひ得る。彼等には學校を建て、軍艦を造り、鐵道を敷くことに就いて努力を必要としなかつた。然し此自然を支配する農業時代に於いても、道路の不完全なこと、車輛の不足、盜賊の横行等は屢々當時の經濟生活を不十分ならしめ、且つそれを脅威したこともある。從つて中世紀時代には住民各々多くの部落に一つの自給單位として割居して居たのである。ソロルド・ローチャースは十三世紀頃の部落は通常其人口は六十人乃至八十人位に過ぎなかつたと謂

[illegible]
[illegible]の時期には
す、限りなく、交通機關の不完全な時代には、

其生活は現代より幸福であつた[illegible]であらうか、時として恐るべき饑饉に苦しんだのである。之に反して現代の經濟組織に於いては、前記の如き理由で[illegible]として之れを見れば、食糧の分量も亦品質も各個人が樂に生活し得る丈けの生産をなし得て居るに相違ないが、現今の組織中にある分配の不完全なることが個人的の貧窮、生活難を生ぜしめるのである。現代の生産組織は頗る強力であり、且つ巧妙に自然を利用して居るのであるから、現在の個人的生活難は決して其責任は生産組織にあるのではない。物資は世界中到る處より其供給を續けて居る。失業貧窮の原因は、寧ろ分配組織の缺陷に在ると云はねばならぬ。彼の工業の方面に於ける生産制限、價格協定其他の獨占的行爲に對する非難もあるが、これ等に基く生産の減少はそれが表面的に見えるやうに失職の眞因となるものではない。一時的には其事實はあつても根本的には矢張り分配問題の解決によつて此問題も眞の解決が出來る。

農業時代の人民は、失業がない代りに恐るべき饑饉の外に各種の病氣に惱まされ、自ら人口淘汰が行はれた。天然痘、チブ

ス、黒死病等は屢々ヨーロッパの人民を惱かして、殊の十四世紀中ばの猛烈な黒死病は英國の人口の三分ノ一を奪ひ去つたと稱せられて居る。此點に於ても近代の科學衛生の實際の發達は人類を之等の不幸より救濟し、而て近世事業は實に教育の普及衛生の發達に就いても間接ではあるが最も有力な援助者となつたのである。

農業國より近世的世界に進化した事は、所謂一般的には人類社會に文明生活を出現せしめたのであるが、之れにも拘らず、食住の第一次生活に就いて屢々不安を感ぜしむる事實が從つて居る。分業生活の現在に於ては人は職業を得れば幸福といふ程の生活は出來ずとも、少くとも生活が脅威されることはない。然るに失職の問題に屢々逢ふことをさへ所かよ、猥りに國家の米倉や果樹を狙ふことも出來ず、又近隣に採るべき果實も生物もない場合が多い。職業を失ふこと、職業のないことは、直ちに生活の脅威である。從つて職業といふ意味は單に働くといふ意味ではなく、生活維持の手段である。從つて此の失職の問題を研究することは單に或個人の仕事の有無といふ單純な問題ではなく　個人經濟の生活問題であり、從つて此點に關する處は生産分配の全般に亘り、之れを研究するに就いては經濟學の全般に亘る問題であるのことを留意せねばならぬ。

議會に於いては政治の重大問題が論議されるが、議會に失業が異常に甚しい時、若くは社會又は或階級に對する脅威となる場合に於てのみ之れを論議する。而も其動機は社會事相の根底に觸れるのではなく、個人の不幸の救濟の意味で論じられるに過ぎない。單に道德の立場よりする議論が公の席上で行はれるのに過ぎないのである。而も分配に關する一局部より之れを見る故、單に問題になつた個人に足を與へて之れを救濟すれば足ると簡單に考へるやうである。而て此種の國家の救濟が生産界に對して如何なる不良の影響を與へるかといふことも十分に考へない。此重要問題に就いて斯かる偏見的の取扱ひがされたことは戰爭の時期に於いては失業に依る個人的貧窮の救濟は單に道德的義務であると考へたが故である。併し後には少し進歩した考を持つ者は、此種の救濟は國家の自衛策であると考へるやうになつたが、併しそれでも支配階級の多くの者は人民中の或個人の貧窮はそれが擴大して國家を脅威し、彼等の階級に對する反抗の生じない間は頗る冷淡な態度を持つて居た。動機は時代に依り解釋を異にするが、英國の議會は最も率先して貧困失業に對して救濟策を講じ初めた。其五百年以上に亘る貧民救助法の歷史、及二十年來の失業救濟の立法は將に英國の議會及び其社會の貧窮及失職に對する觀察の變遷と對策の變化を示すも

く[illegible]る。
[illegible]に自[illegible]し[illegible]時代に於ては住民、土
[illegible]作に依つて各人は其一日の糧を得、總ての人が一土地
の自由使用」を樂しんだ。乍併彼等は相互に、又は部落其他の
社會より自ら働くべき社會的義務を負擔せしめられて居た。從
つて働かざる者は其貧困に就いて道德的の請求權なしとせられ
た。彼の救貧法の最初の時代の嚴酷な規定や、英吉利の古典經
濟學者の初めの思想には自ら此思想が現れて居る。最初の救貧
法は貧者を救ふといふよりは寧ろ怠惰者、浮浪人を罰する規定
であるといふ方が其當を得て居る。乍併單に土地の利用に於て
のみならず、一般に所有權の觀念が發達し、其法規が嚴格細密
となると共に、個人が自然を利用し得る自由は漸次に縮少され
て來る。少くとも煩瑣な手續きや多くの時間や對價を必要とす
るやうになる。而も經濟組織に於ける分業が驚異すべき發達を
遂げるのであるから、孤立無援の狀況に於ける個人は、假令一
時的と雖も一般の生産分配の連鎖より隔離された以上は其獨立
の努力のみでは到底生活の維持は出來ぬ。唯一人數日の生活は
何とか出來るとも、其家族を長く養ふことは出來ぬ。所有權と
分業は生産の增進と文明生活の發達を刺戟したものであるが、
時にとつて個人の自活を困難ならしめるものである。現在の社

會は[illegible]
[illegible]
遇すべきこととてなく、我々の經濟生活は日常の生活に根本的
の變化を與へる事實である。此新たな關係の樹立に依つて個人
及社會の權利義務の關係は重大な變動を受けるのである。此變
動の程度並びに新な權利義務の性質に關しては固より人に依つ
て見る處を異にするが、之は單に政治的の便宜の問題のみでは
なく、寧ろ政治的の道德の問題が主要なる地位を占める。そし
て倫理的の問題であると同時に實際的の問題である。從つて之
等の變化に對する意見は人に依り各々見る處を異にし、一般に
是認さるゝ論據の下に一定の政策を進めることは困難であつ
て、時に依り變化の生ずることは當然の事と認めねばならぬ。

元來富裕階級は貧困者の働くべき義務を確信するが、之れに
對する社會の義務は認めない。而も其社會自體に存在する原因
に依つて、或る個人が働き得ない場合があるには拘はらず個人
を責めても社會の缺陷を顧る事をしないことが多い。彼等は自
由競爭が萬事を解決するものと考へ、不足の點は慈善(チャリティ)を以て補
ひ得ると考へる。但し人若し職を得されば自然自棄となつて恐
るべき害惡をなす惧れがあるから、時々溝淩ひを行つて疾病の
傳播を防ぐのと同じ意味で貧困者を救ふのである。彼等の態度

に直營し融合した使命業である。之れと異つて他の資格でない階級は曰く社會は獨立の單位の集合ではない、一つの有機體である。相互は依賴關係にあり、各部は全體に對して義務あると共に全部は又各部に對して義務を有する。全部は各部のために存し、各部は全部のために存する。社會は最も廣義に於て個人を保護する責任がある、外部の攻撃に對して身體を保護し、他の個人の侵害に對して權利を保護し、個人の生活維持に對する保障を與へ、個人に仕事を與へて之れをして其社會に對する義務を遂行せしむる責任のあるものだといふのである。之等の主張は總て美しい事である事は爲人の認める事であらう。併し其中には實際出來ぬ事もあり人性が事實上自ら之れに反して居る場合もある。故に此種の個人と社會關係に關する理論は容易に實際政策の根據とはなし難いものである。之等が總ての個人に依つて道德的の正義と確信せられ、又實際上必要と確認されるに至る迄は、此種の理想は實現し難いことである。併し此の理想に近よることは個人相互の努力すべきことであるに相違ない。要するに個人と社會との關係に就いては自ら種々の觀察があり、又目前の事實を見る眼についても自ら判斷の差異があるものであるから、餘りに偏見的局部的の見方に依つて獨斷的論歩を進めることは愼むべきではあるが、よく現在の生産組織の主要構造を解剖し、其中に個人の失業に就いて如何なる原因が潜んで居るかを考へねばならぬ。

（三）

失業問題の起源は機械の發明にある。機械の發明によつて多數の勞働者が其の職を失つた當初に於いては丁度電車の用ひられた最初に人力車夫が之に反對したように機械使用に對して失業勞働者が反對し之を破壞せんと企てたこともある。一七一七年に機械の破壞者は死刑に處する旨の法律が制定されたほど反抗が烈しかつた。しかし是等の勞働者も漸次に他の方面の職業に轉向することを得た故に、機械の使用による直接の失業問題は間も無く靜まるやうになつた。然しながら私益を基礎とする工場に於ける大量生産は、一方に資本家階級の發生を促すと共に他方に間々失業と收入不足に苦む勞働者の階級意識を發達せしめ、其の共同利益に對する觀念の益々高まると共に資本主義生産組織の改善を希望するやうになつた。

或限局されたる社會を想像すれば十人の勞働者中の一人が機械を使用するに至れば他の九人は其業を失ひ罪を犯しても新生活を維持するか社會に生計を依賴するの外は無い。機械の發明が富を集積する富者と失業に惱む貧者を生ぜしめた事は疑無

い[illegible]かも發明は[illegible]
を多くすると共に[illegible]しむる[illegible]。[illegible]
の普及は男子に代ふるに婦人小兒の勞働を以つてすることにもなる。之も男子失業の一大原因となる。しかも發明は生活のあらゆる方面に間斷なく普及し、機械はあらゆる方面に於いて勞力に代る故にもし限局されたる社會を想像する時は結局機械の所有者のみが購買力を有し多くの他の人民は失業者となつて其の購買力を失ふ狀態を現出することになる。

然らば機械の所有を共同的にする方法を考案すれば機械の使用による失業を消滅せしむることが出來よう。國有とか社會化とか大袈裟に言はずとも或程度の共同所有の案も考へられよう。機械を其の產業に從事する者の共有にするといふ考もある。組合社會主義（ギルドソシアリズム）式の考方である。ロバート・オウエンのニユーハーモニーの共同村の考や、ブーリエーのファランステリーの思付きなどもそんなものであらうが、是等の實行案を考へて見れば產業組合と大差はない筈である。何れにしても是等の考は私益のみを主眼とする生產組織の弊害の方面を看過することが出來ないので思付いたものであらうが かゝる團體所有の組織がうまく運用出來れば個人の利益は其の團體內に於ける公共の利益の從屬的のものとなる故誠に結構の事である。しかし

[illegible]
[illegible]ある。[illegible]
[illegible]
必しも團體として、個人を[illegible]せしめた[illegible]
及て[illegible]。又かゝる團體自體は他の競爭勢力に對して其の特權を維持することに個人以上に熱心である事がある。又かゝる團體に加入する者に對して可成り強い嫉視を以つて之を制限せんとする傾向もあり又他人が同一產業を設立することに對して猛烈な反對運動をすることもあらう。從つて有利なる地位を占めた是等の產業團體以外の社會の者はむしろ不利益を蒙むることがある。政府會計に於いて國營事業其他の特別會計が特殊の利益を獨占することがあるのと同一であらう。

個人資本家の場合と同じく、此種の產業團體についても、公共の利益の維持はやはり國家の監督に俟つの外は無い。結局國營又は社會的經營を必要とする場合が想像されるのである。そして或國家が孤獨に存在するものと假想すれば生產手段の社會的管理といふことは必しも夢想では無く或場合にはそれほど困難無く行ひ得るものもあらう。

然しながら近世の機械生產、資本主義生產組織は小さな局限

された時代、例へばオーウエンや、フーリエーが十九世紀の始に考へたやうな小さな區域の問題では無い全世界を背景として行はれてをるのである。全世界には多數の國家が對立してをる。失業の結果を考ふるに當つても此の政治的に對立し經濟的に交通する國家間の關係を考へねばならぬ。是等の國家は互に財貨を交換し、特殊の原料を有し、特殊の生産を行ひ、其の生産組織と交易は各自の法律と慣行によつて各特色を有してをる。是等の國家は各々異りたる程度に於いて人口の増加を生じ、其の支配する殖民地の範圍も著しく異る。限局されたる社會を考ふれば利益主義を基礎とする機械生産の影響は割合に明瞭に想像出來るが、かゝる複雜なる關係に於いては失業の原因を生産手段の私有に置く事も出來ないのみならず、國家間生産能力の相違と密接なる交通とは歐洲の一角より資本主義を世界に傳播したると同時に其の欠陥殊に失業問題の發生を促進せしめたものと言ひ得る。

失業問題に就いて正當な解釋を與へることは、初めに述べたやうな此等の政治的理論を必要とすると共に、[illegible]經濟學の全般に亘つて種々の要點に就いて考へ合はさねばならぬ。例へば利潤と賃金との關係、賃金制度、勞働時間、價格の變動、景氣の變化、企業の競爭、外國貿易、貨幣信用制度、農産の變化、不規則作業、勞働爭議、其他考ふべき點は枚擧に暇がない。

現在の生産組織に伴ふ資本集中の弊害を匡正するために、利潤絶滅論が唱へられ、少くとも現制度に於ても出來得るだけ利潤を少くして賃金收入の増加を計る主張が勞働者側を中心として大きな勢力となつて居るが、出來得る限り利潤を引下げて勞働者殊に生産的事業に從事する勞働者の收入を増加せしめることは、其生活を向上せしめ、失業を防止する效果があるに相違ないが、他方に資本に對する利子と企業危險と企業家報酬の正當なる要求も認めねばならぬのであるから、右の生産的勞働收入増加の一般的理論は是認されるにしても、實際の問題としては歴史的の慣習と利害の打算に依る勞資間の正確な基盤の上の計算と、勞働者の團結の力とを外にしては其の前的に勞働者の賃金判斷を有效に増加せしめ得べき見込もない。他方に資本家側に於いては賃金引下げを行へば多數の勞働者を使用することが出來る故失業者を少くすることが出來るといふことを主張し[illegible]引下げの通常の論據になつて居る。乍併之れは少數者を救ふために多數の生活費の低下を來すものであるから、一般に是認し難い事である。失業の問題と別に物價殊に生計費の低下を理由としての賃金引下げならば理由は立

つた、失業救濟の代りとして[illegible]事實上此意味で失業者多き時代即ち勞働過剩の時代には賃金引下が行はれる故之れに對して勞働者側は最低生活標準の維持、最低賃金の制定を主張し、是等の事は英國では或る特種の產業については國法に依り、又他の大產業には勞資間の協同契約に依つて可なり一般的に實現されるやうになつた。勞働者は一國の產業は利潤を上げるに先立つて先づ第一次に其國民の健康と生活を維持する責任があるといふ論據に依つて進んで居るのであるが、此最低賃金が事實上維持され殊に生產的產業に就いて普及するならば、之等の勞働者の購買力が增加して其購買力が奢侈品を避けて生活の第一次の必要品に向けられるならば——勞働者は事實奢侈品を買ふ餘力はないが——必要品の產業が勃興して勞力も資本も多く此方面に用ひられ、有用產業に於ける勞働者の需要を增加し、此種勞働者の失業の機會を少くし、一擧兩得の結果があり得ると云ひ得る。

勞働時間を短縮するとは多數の勞働者を使用する結果となつて失業者を少くする所以であるといふ意味で時間短縮を主張する者がまゝある。併し時間短縮を行へば通常は收入を減少するものであるから、それは前と同じ理由で少數のため多數の不利益になる。從つて通常の場合に時間短縮と賃金値上が必ず同時に[illegible]に依つて[illegible]に、[illegible]維持することを條件として失業者を割込ませようとするのであるが、斯かる方法は部分的一時的の失業救濟として効果のあることもあるが、それは勞働數の增加に依つて何等生產增加を來さず、企業の經營の點より見て永く之れを實行することの困難なるは勿論。一般的に絕えず此理論で失業者を救ふことは事實上勞働階級の收入標準を維持することを不可能ならしめることになる。此理論が正しければ、絕えず工場法の改正を行ひ又實行上においても或場合には法律の規定を超えてまで時間短縮を行つてゐる英國に於て失業者を見ざる譯であるが、失業者の數は事實に於て時間短縮と全然無關係の結果を示して居る。現に現在の職業を一般に分布したとて根本的の失業救濟の手段とはならぬ。危急の場合には一食を二人で食ふこともあらうが永くそれを續けることは出來ぬ。時間短縮を失業問題と關聯せしむることは一少局部の臨機の處置としての外、一般的の理論としては理由をなさぬ。

價格の變動は產業の經營を不安ならしめて屢々營業縮少、失業の原因を生ぜしめる。需要供給の狀況が絕えず變化する以上は價格を不變ならしめることは不可能である。人或は「財貨に價格なき自由消費の經濟」を想像する者があるが、茲に說明の限

りではないが、自由消費といふのは文字通り「痴人の夢」であつて、寧ろ斯かる社會を想像することは結果に於いて生産不安消費不安の狀況を生ぜしめるものである。さて購買力に對する即ち需要に對する供給の行はれる以上は其處に價格が生ずるのであつて、此價格は變動こそすれ事實に於いて需要供給を適合せしめる最も重要なる作用を爲す者である。交換價格の成立せざる經濟に於いては需要供給の適合は殆んど不可能である。數千萬數億の人間の生産消費を全般的に適合せしめる必要のある世の中では何んな精密な大組織に依る且つ正直な生産統計も、及び消費要求統計の報告も電報一つで自働的の綜合結果を世界中に報告し得る價格變動の驚くべく不可思議な且つ最も精確な作用に到底比較し得べくもない。交換經濟も價格變動も止むを得ないとすれば、個々の生産事業の危險は全然除去される譯には行かぬ。價格變化のために各種の生産業が生産制限を行ひ工場閉鎖、休坑を行ふことは止むを得ぬことで、時々、又部分々々に斯かる現況が生ずれば資本家の損失と共に勞働者は又失業の苦を嘗めなければならぬ。價格變動が生産額の減少に至らない間は損失は主として生産者が負擔し、勞働者に及ぶことは少い。併し價格の下落は多くは生産制限に導く。此故に勞働者も亦損失を共にするのである。企業の聯合及び合同は生産の自衞策として屢々價格協定、生産協定を行ふ。これに對しては獨占利益及び國民の需要品生産を故意に減縮すること等に就いて此種の生産者の組織及び行動を非難する者もあるが、私は其非難も常に當つて居るとは思はぬ。併しそれは茲で論ずる問題でないが、少くともカーテルの如き組織に依つて生産が計畫的に行はれ、自由競爭と世界の經濟的景氣の變化より生ずる生産者の損害を豫防する手段は同時に一般の生産狀態を安定ならしめ、勞働者の職業並びに收入に對して安定の地位を與へ、突然の失職の機會を少からしめるものと云ひ得る。

現在の如く無數の事業單位が對立して其資本能力、技術、經營能力、從つて其生産費、販賣價等に差異があり、販賣原價計算に自ら差異ある狀態に於て絶えず新な競爭者が加はり、加之不斷の發明に依つて生産方面に種々の變化がある狀態に於いては、企業者間の自由競爭に依つて淘汰新陳代謝の絶えざる如く、それに關係する勞働者にも收入の減少又は失業の苦境に沈む危險は常に存在するのである。加ふるに一般的の景氣變化の大潮流は斯かる傾向を益々増大せしめ、小規模にして資力弱き者程危險が多い。産業革命の結果大規模生産が行はれるとは云へ總ての産業が大規模に行はれて居る譯ではない。殊に我國の如きは工場總數五萬の九割以上は小規模經營（職工數五十人未

[illegible]に屬する[illegible]
[illegible]は小規模事業の從業者であつて、小規模事業に[illegible]下上の困難。景氣の變化にも堪へ難い。從つて勞働者に失業の機會が多い。又大規模事業と雖も如何に勞働組合が勞働者を支持しても事業の財政上到底平常の定員數の勞働者を維持することが困難なる事情が生じ得る。從つて企業の自由競爭と景氣の變化は單獨に又は相重つて企業家を苦め又失業の機會を多からしめる。此點より見てもカーテルの組織は勞働の需要の安定の效果があるものと云い得る。カーテル、トラストが獨占的暴威を振ふことに對しては自ら對抗の策がある。又企業家が斯かる聯合を利用して若くは別に傭主聯合を作つて自己の利益のみを計り勞働者の不利益を計らんとしても、それには勞働者も亦自己の組合運動を以て對抗し得る。要するに失業問題の點から見ればカーテルの成立は固より歡迎すべきものである。

生產事業の浮沈の甚しいことは事業家に不安定を感ぜしめると共に、勞働者にとつて又最も恐るべき問題である。資本家は或事業の資本を全損する程の打擊を受けても必しも直ちに生活を脅かされない。金融の手段も或程度迄は容易に得られる。之れに反して勞働者は職を失へば直ちに生活を脅かされる。此故に不景氣と恐慌は寧ろ勞働者にとつて痛ましい影響を與へる。[illegible]避け難い事であつて、資本主義の生產組織[illegible]點を重視して、他の協同的生產組織に依れば此弊を除き得ると說く唱へる者があるが、假りにそれに依つて變動をなくし得たとしても――それも出來ぬと思ふが――生產の一般的に減少することは疑なきことである。此問題も玆で論ずる暇はないが、兎に角產業界の浮沈は到底免れ難い事實である。金融組織の改善、生產企業の內外の組織の改善に依つて所謂恐慌といふ程度の不利な激變は或程度迄避け得られやうが產業の浮沈は到底免れ難い。米綿の產額、世界の小麥產額、日本の米の作柄、魚獲、鑛產物の不意の增產、其他常時的、世界的、或は區域的、臨時的に種々の原始的生產界に於ける變化が生ずる。世界通商、價格經濟の現在に於いては之等の變化だけでも廣く狹く、或は强く弱く他の生產界に對して直ちに影響を與へる。それに依つて或國の農家の購買力が增加し、或國の紡績業、生產工業が繁榮し、建築、土木、機械工業、交通機關、化學工業、總ゆるものが變動を受け、此經濟界の變化は個人の會計、國、公共團體の財政に影響して此財政の變化は直ちに事業界に反映して限なき變化の連鎖を作る。今玆に景氣の變化を說く時間を持たぬが、それは戰爭や又自然の大變化がなくとも不斷の現象である。[illegible]

みに米国の最近の景気の變化の一例を見ても、米国の主要工業の生産指數統計を千九百十九年の平均を一〇〇として見た數字に依つても千九百二十四年十月は一〇九％であるが、二十五年十月には一二六％になつて居る。僅か一年の間に合衆生産平均約に一割以上の増化がある。それのみならず千九百二十五年一月には實は一二七％になつて居たのであるから、四ケ月間に二割前の變化があつたのである。殊に最も浮沈の甚しい製鐵業の如きは、千九百二十四年九月の一〇〇％に對し翌年一月は一五一％十月は一三〇％といふ大變化を示して居る。勿論失業者の數は此くの如き工業の生産率と違ふた作つて愈々増減するものではないが、（米国の製造工業の就業者數は千九百二十四年九月〜十一平均九一・四から漸次増加し、浮沈はあるが千九百二十五年十月には九七％になつて居る）要は大體に於いて好景気に伴つて就業者が増加し不景気に伴つて失業者が増すのである。

殊に一層注目すべきは調節不可能事業に就いてである。一般事業に浮沈ある事は前述の通りであるが、殊に建築事業、造船業、製鐵業、鐵鋼業、採鑛業、製材業、瓦斯電氣事業等に於いては最も其變化が甚しい。是等の事業に於ける種々の需要は必ず何等かの方面から其他の事業に對する需要となつて顕はれるものであるから、好景気の時代に於いては是等の事業は極く大き繁榮を來す。しかのみならず是等の事業は巨額の固定資本、即ち構造設備を要し、優秀なる技術家と多くの熟練職工とを必要とするものであるから、多少の景氣の變遷があつても企業の新設を行ふことは容易ならざる反面に於いて、一旦施設をなした以上は固定資本の多いだけ事業の制限は甚だ不利益とする所である。然るに生活必需等の事業は右の如く最も浮沈の甚だしいものである。而も此種の諸事業を休止制限することは資本利子の損失を償ひ得ざるのみならず、切角養成した勞働者を失ふ恐れもある。故に於て企業者自身は事業の經營と勞働者の失業に就いては最も苦るしく頭を惱ますものである。作併沈滯の時期が長ければ諸局止むを得ず勞働者を解雇するに至るのである。然るに普通の不熟練勞働又は不熟練勞働であれば他に職業の途を求めることが必しも困難でないが、熟練職工は技術が一方に偏し生活の程度が高い丈に、日々雇はれば熟練を失ずることが甚い。英國の千九百十一年の國民保險の中に失業の目的事業として特に此の部類の不規則作業のみをとり來つた事は大に意義のあることである。

若し此の十産業生産規模が極く狹い地域内で行はれたら其の繁榮は最も早く過ぎ、利用すべき者の作は早く激しくなつたに相違ない。但し其利用者の變化と同時に一方政治組織に大變

かくして手工業組織はヨーロッパに於ても漸次衰亡して新に一定の秩序が確立し、進んで國際的分業が盛んに行はれる時代になつたのであるから、産業革命以後の資本主義生産組織はヨーロッパの一隅から全世界に侵入したのである。斯る状況がなければ經濟上産業上の先進國である英國ですら既に一層早くより失業に苦しんだに相違ない。マルサスやリカルドの出た後五十年を出でずして現在の如き苦しみをしたかも知れぬ。我國と雖も明治維新以來破竹の勢を以て新な生産組織を輸入したのであるが、生糸工業が世界に覇を唱へ綿糸紡績品がマンチエスターの同業者をして特別の會議を開催せしむる程までに日本品の脅威を感ぜしむるやうな發展をしなかつたならば、失業問題は歐洲戰爭後の恐慌、震災後の行政整理を俟たずとももつと早く起つたかも知れぬ。要するに外國貿易の旺盛な事は、確に生産上の優秀國に對して失業問題の激成を緩和して居ると云ひ得る。但し輸入國の産業にとつては固より外國品の侵入は不利益であるが、之れに對抗するには又自ら關税其他の手段がある。自由貿易を理想とする國でさへも實際に於ては其産業の維持のために保護關税を設定せんとする世の中であるから、産業上の優秀な地位を失はんとするもののみならず、斯かる地位を持たざる國は自ら其關税政策に頭を惱して其國の工業を維持發達せしめんとするとには、この時に於てすら、失業後に於いてトラストは事業の改良と時に失業者救濟の一手段となり得ることを云ひ得る、又自國に於カーテルは生産者と共に勞働者にも安定の地位を與へる一手段であると云つたが、外國のトラストやカーテルが內國に侵入し來る時はそれは又大なる脅威となる。自國の自然的生産條件が優秀であれば外國のトラスト、カーテルは其國境を犯して侵入することは不可能であるが、それでも彼等は屢々投資の政策（ダンピング）を以て他國の産業を脅かし或は之を破壞することを計畫する。米國の石油トラストや戰後に獨逸の化學工業の行つた世界的の投賣（ダンピング）りの如きは世界の同事業を脅威したものである。固より前者は純然たる資本主義の横暴に基き、後者は自滅を防ぐ手段であり、其動機に於いて相違はあるが被害者には同一の影響を與へる。此故に諸國で投賣り（ダンピング）防止策を講じ、我國も亦之れに倣つたのであるが、其對策の主要なるものは矢張り關税である。斯くの如く國際貿易關係の頻繁なことは生産上優秀な國の産業と勞働を保護する利益があるが、其劣等な國は之れに依つて脅威を被る。一般的に見ても輸入の増加は物價の低落を來し內地産業を不振ならしめ、勞働者の失業の機會を多くするものである。

外國爲替の關係は或は輸出を有利にし、或は輸入を有利にし、譬へば我國に於いて最近爲替の下落のために寧ろ米國の生

米購買力を弱くし我國の生糸工業が世間の不景氣なよそに繁榮する事情を生じ、一般に輸出を促進した影響があつて、其點からのみ見れば輸出産業の刺激、失職防止となつたとも云ひ得る。但し之等は部分的の利害で、時と共に自ら變化するものであるから異常の場合の外直接にそれ程重視すべき程のものでもない。

貨幣と信用制度は資本主義經濟組織の神經系統をなすものであるが、此交換の媒介具を無用視するやうな迂遠な議論は到底論ずるに足らぬ。が、併し此種の手段は便宜であり且つ其作用の重大なだけに各階級に種々の利害を生ぜしめる。今世界の貨幣制度の中心になつて居るものは金であるが、金の産額は世界的に増加する故金價は從つて下落する傾向にある。殊に各國の中央銀行、發券銀行の組織が發達するに伴ひ生産資金の需要、並びに各國の政費の膨脹のために通貨膨脹の傾向は今回の大戰少なくとも阻止し難き大勢である。通貨膨脹は貨幣價値の下落と物價の騰貴を促し、一定の貨銀收入を得る勞働者にとつては多少の名義上の賃金率は増加すると雖も實質收入は減少する結果となり、益々不利益な狀況に置かれる次第である。殊に他方に物價騰貴が伴ふとすれば勞働者の購買力は益々不十分になる。此點は内外に多少に關係ありとは云ひ難いが勞働者の生活に對しては重大なる損失である。但し最近の我國の事情に於いては大正七年の所謂米騷動以來勞銀の騰貴著るしく、物價の騰貴率を超へ、大正九年の恐慌以後と雖も世界の大勢に反して勞銀は物價の下落に拘はらず騰貴保合を繼續して居る故、我國の勞働者は此點に於いては一般的には比較的有利な地步を轉回せしめ得たものと云ひ得る。

信用の利用は生産と交易を助長する上に於いて缺くべからざるものであつて、殊に需要と生産を適合せしめる點に於いて重大な効果がある。乍併總ての生産と取引に中介業者と金融業者の介在することは多くの場合に殆んど絶對的必要であり、殊に組織的の取引に於いては其傾向が益々增大するのであるが、之等の機關の介在は益々信用の利用を增大せしめる。現金取引に於ては投機を行ふ機會が少いが、信用を利用して中介者が大規模取引をなすに至れば、著るしく投機を助長する結果になる。投機は固より部分的、一時的且個的の取引に伴ふ價格變動の抗爭と範圍を減少せしめ、不變的、繼續的の需要供給を見越して價格の平準と取引の圓滑を助長する効果はあるが、之れに信用を濫用することに依つて屢々生産界を攪亂し、勞働者、消費者に損害を與へる恐れがある。不健全な投機に依つて助長される價格の變動と、不自然な產業の浮沈は勞働者の地位に著るしき

不[illegible]へ、[illegible]の[illegible]に[illegible]者に[illegible]たな[illegible]を與へるが、不[illegible]に於しては銀行が信用の回收に急なること〻、金利の引上げの[illegible]なること〻は益々事業家の財政を窮迫せしめる。要するに信用利用は生産を助長するが又景氣の變化を迅速にし又強大ならしめる恐れが潜んで居る。斯くの如き便利な併し屢々危險な制度の存在は產業に働く勞働者をして屢々意外な失業に陷入らしめる。設備も原料も其のまゝであるに拘らず、勞働者を解雇せねばならぬ會社が多々生づる實狀は屢々人の注目を引く所である。若し勞働者の蓄へた資本の大部分が通常の商業金融機關を通じて正當に健全に生産に利用せられて居るならば好いが、若し不健全に利用され又殊に投機的投資に利用せられるならば勞働者は二重の損をするものである。徒らに利殖を願ふて反つて不必要な生産の膨脹、泡沫會社の成立、產業界の擾亂を見るよりは寧ろ或程度迄資本自用の組織を利用する方が勞働者自身の利益である。組合、通常保險、勞働保險、失業保險其他現在及將來に於いて健全な貯蓄の途は多々あり得る。

勞働爭議は之れを豫防し得れば此上もないが、英國のやうな勞働組織の發達した國でもそれを避け難い。區々たる感情、個人的事情に依る爭のために勞働爭議の起るやうなことは殆んどな[illegible]でも、[illegible]に依る爭議に絶えず繰返され[illegible]失業の危險を伴ひ得るものである。之れを防止するためには使用人代表制度、(工場委員制度)其他の手段が考案され又爭議を破裂に至らしめないために種々の調停仲裁の方法が行はれ、機關が設けられるが、それでも爭議の破裂、失業の發生は免れ難い。此故に爭議の豫防及び穩和な解決手段の促進を計ることは假令一時的部分的の失業問題であつても最も直接に効果のある問題である。

(四)

失業救濟の手段は最も困難とせられる處であるが、產業革命以前に於いては失業問題は寧ろ小自作農が農業勞働者となり又浮浪人となつて貧窮に陷入つたために、之れを救濟するといふ以外には今日の様な失業問題はなかつた。英國の救貧法は既に十四世紀時代から初まつて居るが、千三百八十八年の法律では乞食にパンと水とを與へるやうな簡單なものであるが、千五百三十一年の法律は乞食に特許を必要とし、之れに反した者は身體から血の出るまで笞刑に處せられた。オックスフォードやケムブリッヂの大學教授でも認可なく大學の名儀で寄附を求むれ

ば罰せられることになつて居た。千五百四十七年、七十二年の法律では刑罰が益々苛酷になつて、怠惰な放浪者は烙印し又は妻子を奴隷とし或は死刑に處すると云ふやうな酷刑を課することになつて居た。併し千六百一年のエリザベス法に依つて英國の救貧法は一轉機を來し、此法では一方不具者、老人を保護すると共に、生計を得ざる者をも保護した。各教會區は住民に對する强制賦課によつて基金を作り、各々授産場を設けた。千七百八十二年のギルバート法に依つて救貧法支給金が開始されたが、之れはマルサス其他の初期の經濟學者が擧つて批難したものである。何人と雖も働き得且つ其意志のある者は救貧法委員に依つて其能力に應じ其住居の附近に於て職を與へられる。それ迄は十分の給養を與へられる。其結果として被救助者が反つて普通勞働者より間々多くの收入を得る樣な事實が生じ、一般に勞働階級の隨落を來す惧があつた。其結果として千八百三十四年に救貧法勅命委員會（ロイヤル・コンミッション）の報告に基いて新な法律が制定され從來の方針と全く正反對に當時の經濟學者及び政治家を支配した自由放任の學說に基く制度が行れる樣になつた。之れに依つて働き得る者及び其家族に對する戶外救助は廢止され、單に授産場（ワークハウス）に於いて働かせることにした。但し獨立勞働者よりは少い賃金を與へることになつて居た。即ち千八百三十四年の委員會の政策の根據は、個人の失業は全く其個人の缺點に基く者である。能力あり勤勉なる者は必ず其勞働の市場を求め得る者であるといふ論據に基いて居る。猶當時英國内には眞の勞力過剩があつたのではない、其前に無限の生活保障をしたゝめに、勞働階級に於いて不謹愼の結婚が増加したゝめであると云つて居る。其後屢々救貧法の改正があつたが、最も著るしい政策の變化を見たものは千八百八十六年の内務大臣ジョセフ、チャンバレーンの布達（サーキュラー）である。之れは其後の總ての失業救濟策に對して最も重大な意義を有するものである。此法は明に働き得る失業者と働き得る貧窮者とを區別して居る。チャムバレーン氏は勞働者にして一般の産業不況のために職を失ひたる者は之れを救貧法に依つて救助を受けしめるべきものではない、貧民に對しては授産場で勞働試驗を行ふが、失業勞働者に對しては他の方法をとると聲明して居る。併し最初の案には其賃金は一般の方法より稍々低いものを與へるべきだと云つて居る。此方針は千九百五年のロンダの失業勞働者法の基礎になつて居る。即ちチャムバレーン以來初めて失業の根本は個人以外にあり、産業組織それ自身の中にあるものであるといふ精神が是認されて千九百五年の法律が明かに此方針に進んだのである。

千九百五年の失業勞働者法に依ればロンドンの各區及び人口

[illegible]と全然關係である。其救濟組合は常用の勞働者にして一時[illegible]た者は救濟委員會が次の方法で救濟する。一、移民、二、一時的仕事を與へる。三、農園移住地の設置、四、勞働者を求める傭主勞働を求める勞働者のために登錄の組織を設ける、即ち公共の勞働紹介所を設ける。此法の制定者は全國を通じて勞働分配の報告機關の設立を考慮して居たのであるが、此法の豫想した勞働紹介所は單にロンドンに設立されたのみであるが、千九百九年の法律に依つて全國的に紹介所の設置される基礎となつた。農園移住地は多少成功したものもあるが、多くの費用を要し且つ余り繼續的の効果がなかつた。

次いで千九百九年に勞働紹介所法を制定されたが、此法律に依つて全國に勞働紹介所を設けることゝし、傭主及勞働者の双方の代表者より成立する地方代表諮問委員會を各地に設置して其地方の勞働紹介を援助せしめた、此勞働紹介は無料で行はれ且つ勞働者が就職地に向ふ旅費を貸與することゝして居る、次いで千九百十一年十二月に英國の國民保險法案が通過し、翌年七月十五日から實施されることになつた。此國營保險は疾病保險と失業保險を含むものであるが、其失業保險の要點は、一、建築、建造、機械工業、造船、製鐵、車輛製造、製材等に從[illegible]に述べたやうに時期に依り著しき[illegible]範圍丈けでも英國の工業勞働者の六分の一が保險に參加することになると稱せられて居る。二、管理機關としては勞働紹介所及び失業共濟金の支拂を行ふ現存の勞働組合を利用する。三、毎週各勞働者に就き二片半の強制拂込を傭主と使用人の双方に賦課する。四、勞働者と傭主の拂込金の總額の三分の一即ち全體の四分の一の金額を政府が基金中に拂込む。五、機械工業に對しては一週七志、建築事業に對しては一週六志の支給金を最高限十五週間の失業期間丈け支拂ふ。六、強制保險參加を指定された事業に屬する勞働組合にして失業救濟金を支拂ふ者は國營保險資金より其支拂金中より右の金額の拂戻しを受ける。

歐洲戰爭前には二百萬の勞働者が一九一一年の法律によつて失業に對して保險せられてをつたのであるが、英國政府は大戰終了後失業者の激增に鑑みて一九二〇年の夏には失業保險を賃銀勞働者の大多數に適用せんと企て、遂に一九二〇年八月の法律を以つて失業保險を農業と家庭勤務を除きたる殆んどすべての事業に從事する勞働者に擴張適用することゝし其の結果として失業保險參加者一千二百萬人を算するに至つた。保險料金は使用人一人毎に男四片、女三片、男兒二片、女兒一片半の割で

拂込義務を負擔し、雇主は之に對し四片、三片半、二片、一片をそれ〲拂込み政府は二片、一片三分二、一片三分一、一片をそれ〲拂込むことになつてをる。保險支拂金は男子一週十五志、女子十二志、男兒及び女兒はその半額を支給されるのである。

（五）

今茲に各國の失業救濟に關する各種の具體的手段を論ずる考はないが、我國に於いても最近數年來失業問題が喧しく論ぜられ、勞働爭議の頻發と小作爭議の激發と相共に識者の頭を惱ます問題になつて居る。併し我國の失業問題は英國其他に於けるものと余程趣きを異にした點があると思はれる。英國の失業問題は固より工場勞働者を中心としての問題である。殊に嘗てマルサスが指摘したやうに大戰爭後の産業の破壞と戰場よりの歸來者のをかつたゝめに、一時的に釀成された問題である。一時失業數が二〇%以上にもなつた事は益々英國の上下を驚かし、失業保險の適用を擴大せんと企てしめるやうになつたのである。が、我國の工業は平素に於いては割合に浮沈少く、歐洲大戰爭に依つて殆んど革命的の大膨脹を來したゝめに戰後の不況とゝもに一般に殊に著しく、化學工業の如きは多數の失職者を出さねばならぬ状態に陷つたのである。工業方面に於ても失業救濟の必要が我國においても俄然發生したことは疑ひないが、他方に於ては戰後の一般的不況と震災の打撃に依つて所謂知識階級方面に多大の失業者を生じて居る。政府の行政整理の影響と高等教育を受けた學校卒業生の過多は相俟つて此傾向を助長して居る。從來の我國の教育方針が余りに形式的で實社會との聯絡が少く、學校卒業者は職業的の素養訓練に缺けた憾があり、一般父兄と子弟の單純なる誤つた名譽心のために徒らに大學の門に走る状況が永く續いた結果として社會の要求せざる多數の所謂指導階級になるべき人物が學校から集團的に産出されて居る。即ち大學教育の濫用、指導者の過剩生産といふ状況は當事者自身を惱ますのみならず社會問題として最も考慮を要する問題である。將來教育の方針を職業的實際的に改め、修業年限を短くし學費の負擔を輕くすると共に學校卒業者が直ちに世間の要求に適合すると共に自らも又職業を求むるに困難する如き状態から救はれる方針を考へねばなるまい。工場勞働者の問題と共に廣く失業保險の問題を考へる事も一策であるが、失業保險は先づ工業の一部より初めて之を一般に及ぼし、次いで商業使用人其他に及ぼすべきものであつて、危險率、保險料の算出に最も困難を感ずる此の失業保險は俄にこれを完全に實行することは困難である故、一方此制度の研究を爲すと共に他方に現在既に數年來我國で發達し來つて居る職業紹介所の組織作用を完全にし普及せしむることが手近な具體的の手段であらう。其他移民の振興、殖民地との關係も論じたいが紙數がない故他日に筆を措く。

時評

英國炭坑爭議と我國小作問題

吉野作造

本誌前號に於て、英國勞働爭議の起因經過等に關する諸家の說明を硏究せられた諸君は、我國の小作問題が種々の點に於て頗る彼國の炭坑爭議に似て居ることに氣付かれたであらう。其の本質に於て頗る相似たる所あり、從つて其の解決の方針に付ても結局彼れに倣ふべき多くの理由を有つと私は考へる。然るに官憲や地主などの態度はといふ段になると、彼と我と實に霄壤も啻ならざる相違がある。こゝが英國と日本との異る所といへばいへる。併し何れにしても、英國に於ける炭坑爭議の經過が我國小作問題の解決に一大暗示を與ふるものたるは疑なく、英國坑夫の主張が漸を以て着々聽容せられ行くの形勢には、また大に吾人の意を強くせしむるものがある。

× × × ×

第一に事業が土地に定着し、且つその土地が少數所有者の壟斷に歸して居る點に於て、英國の炭坑業と我國の小作農業とが甚・よく似て居る。只彼に在ては外に企業家といふ中間階級があるが、我にはそれがない(ありとすればそは小作人彼自身だ)。之が一つの相違といへばいへる。

さてこの土地所有といふことは、本來其上に行はれる生產業に對して何れ丈けの發言權を有し得るものか。遠く其土地を所有するに至つた因緣に遡るまでもなく、單に土地台帳に自分の名が登錄されて居ると云ふだけで、他人の粒々辛苦の結果を大半掠め取るといふは、どうしても今日の倫理觀念が承知しない。英國に於て土地所有權が今日如何に取扱はれんとして居るかは玆に管々しく論ずるまでもなく、我國にても少くとも學者間の論究には、此點に關し、自ら略ぼ一定する所があると考へる。只實際の取扱如何といふ段になると、今猶ほ土地所有權は

個の一般所有權と同じく、絶對的なものとして神聖視されて居る。我國の小作問題も實は、この傳統的思想に一大轉回の來ないうちは――殊に地主階級自身が其の頑迷なる態度から醒め且社會に對する道徳的責任に反省しない限りは――容易に好ましい解決を見ること、はむづかしいと思ふのである。

× × × × ×

次に富の直接の生產者は、彼に在ては坑夫であり、我に在ては小作人である。此點も似て居る。若し企業家をも直接生產者の一人に數ふべくんば、この資格をも兼ぬる我國の小作人は、彼の坑夫よりも、富の生產者としての意味に於て、一層强いと謂はねばならぬ。從て生產された富に對する權利に於ても、我國の小作人は決して彼の坑夫よりも弱者であつてはならぬ道理である。

彼國に於ては、坑夫の賃銀は優先に支拂はるる。我國に於ても、事實に於ては（理論上許されてゐるのではないが）小作人の收得は地主に先んずると云つていゝ。併し其の最低額に至つては如何にも低い。近年小作料の段々下がつて行くことは事實だが、下がる度毎に地主はきまつて採算上其の再び騰きを喚へる。斯くて小作料の決定は形式上はともかく地主小作人の協議に依るのではあるが、其際に標準とさるるのは、往に地主側の投資としての採算であつて、決して小作人の生活ではない。無論小作人は生活が苦しいからとて小作料の引下を要求する。地主は來た勢に迫られ、實際の採算上どうかかうか忍び得る範圍までは讓歩もする。併し採算といふことは要するに小作人の要求を拒絕する當然自明の障壁となつて居り世間も亦之を當然の事と認めて怪まない。が、よく考へて見ると、元々の小作料のきめ方が不當に地主に厚かつたのだから（地主が主人で小作人はその隷屬とされた時代の惰性と觀れば之も致方がない、一概に思ふ存分の引下げをやらぬ限りは、何度之を繰り返しても小作料引下げの必要の熄まざるは當然だ。と云つて、小作料の引下げが今なほ地主に對する哀願と云ふ形で要求されて居る間は、思ひ切つた引下げの實現を見る望も絕對にない。

彼國では、富の直接の生產者として坑夫は、生產されたる富に對して第一の要求權ありとされる。從て彼等の生活必需品は何事を措ても絕對に保障されねばならぬとされて居る。坑夫の生活の必要が十分にみたされて後、企業家や地主は始めて若干の分配に與り得る。是れが實に彼國產業界の正義なのである。地主といへども之に對しては一言の異議を挿むものはない。

我國でも本來なら、第一に小作人の最低生活線といふものがきめられ、之を標準として其の最低收得額が理論上きめられねばならないのではなかつたか。其邊のことに、森本博士や那須博士

[illegible]
ると考へる。

× × × × ×

假りに小作人の最低取得額といふものがきまつたとしても、民を取り去つた殘りの全部が當然地主に歸すべきものかといふにさうではない。英國では、坑夫の所得に對して企業家の所得（此の中に地主の所得も含められてゐる）なるものが法定される。之を拂つて猶ほ剩餘あれば、亦之を一定の割合で双方に分ける。即ち英國の正義は、殘りの全部を企業家の所得に許さないのである。我國の地主の地位が理論上英國の企業家よりも猶ほ薄弱なものなることは前にも述べた。然らば英國の企業家以上の要求權を地主に認め難きは云ふまでもなからう。假りに姑く一歩を讓つて、英國の企業家同樣の地位を認めてやるとしても、その所得は、姑く英國の例を以てするなら、小作人のそれの一割五分でいゝわけだ。卒然として斯んなことを云つたら、地主も役人もびつくりするかも知れぬ。固より私にも英國の炭坑業の例が其儘我國の小作問題にあてはまると言ひ張るつもりはない。只大體の理論の筋道を示すに止まるのであるが、兎に角冷靜に考へられたなら、私のこの假定にも多分の眞理あることは認めらるるであらう。

[illegible]おあり、地主に對しては[illegible]
併し我國小作問題の現狀はこの[illegible]の要求と相[illegible]のがある。且近き將來に於て好ましい改革を見るの見込もないことは云ふまでもない。

× × × × ×

そこで我國の小作人が生活權確立の旗幟の下に小作料の低減を叫ぶのは當然だといふことになる。從て小作爭議の今後益々面倒になるのも怪むに足らぬ。漫然之を困つたものだなどと憂ふるのは、時勢に盲目にして徒らに惰眠を貪るものの寢言に過ぎず、我々はどこまでも公平なる第三者として、漸を以て正しき解決に達するやう事態を適當に導くことに心掛けねばならぬ。殊に斯うした態度は最も切に官憲の人達に要求されねばならぬと私は思ふ。所が我國の官憲はどう云ふものか今仍ほ所有權を絶對萬能とするの觀念に捉はれて、地主小作人を主從關係と觀る昔ながらの封建的因襲から今以て脱け切らず、甚しきは小作人の地主に對する强要は一種の恐喝だなどといふ謬想にこだはつて、地主の保護は即ち正當なる所有權の保護、加ふるに是れ正に社會的秩序を維持する所以だなどと考へ、切りに小作人に不當の干渉を加へんとする。この點になると、彼我官憲の

て時代の正當なる要求は決して見殺しなかつた。國が違へば斯くも思想の違ふものかと、正しきことの中々に行はれ難きを歎ずる次第である。

× × × × ×

かく云へばとて私は、我國に於ける總ての小作爭議を現にみな正しいと主張するのではない。我國の小作問題の本質を明にするのがこの小篇の目的で、幾多現實の小作爭議に對する私の批判は自ら別問題だ。現實の問題としては其の要求の不當なるものもあらう、又不當なる方法を以て要求の強要されてゐるのもあらう。どんな正當な要求でも、之を貫くに正當な方法を以てすることを怠つては、その要求に自ら重みのなくなるのは已むを得ない。不當なる方法を擇んだといふ點に道德的缺陷を暴露するの誘因を作り、之に基く社會的不信が禍根となつて、遂には社會をしてその當然の要求にさへも耳目を掩はしむるに至る。斯の如きは世上に決して珍らしいことではない。さういふ所から、現實の問題に對してはまた種々別種の批判を加ふるの必要はあるが、一般的概論としては、何と謂ても、我國今日の小作人の立場は、之を極度に且つ無條件に擴張する必要があると信ずる。官憲も、地主も、時としては一般世人も、小作問題に於ける「正義」をば餘りに低く評價し過ぎて居る。英國炭坑爭議の經過を見て昨今ことに此の感を深うして居る次第である。

宮島資夫君の「金」を讀む

未見の友宮島資夫君よりその書「金」の惠贈を受けたのは五月初旬のことだ。病後ただ充分に體力を恢復せず其の癖可なり忙しい生活を送つて居る私のことゝて之を讀み終るに二週間ばかり掛つた。大變面白かつたことをお禮代りに申しておく。併し私に取てこの本は單に面白いばかりでは濟まされぬ。其外に本書のもつモ一つの價値が大に私をひきつけたことを云はずには居れない。私のやうに現代を一歴史事實として研究せんとするものに取て本書は一つの重要なる參考文獻を爲すと考へたか

ら[illegible]。この意味でも[illegible]一に[illegible]へて感重に保存することにした。かくて私は宮島君に向つて一席に[illegible]謝する義務があるやうに思ふのである。

誤解を避くる爲に豫めことはつて置くが、私が右の言を爲すのは、近頃の作物中宮島君の本だけがとくにさうした特色を獨占するといふ意味ではない。外にそんなのが澤山あるかも知れぬ。併しあるといふことも私に斷言は出來ない。蓋し小說などのことに就て私は全く門外漢だからである。一體私は文藝方面の作物などを金を出して買つたことは殆んどない。讀むのは必ず只で頂戴したものに限る。それも寄贈本の大部分はそれぞれ私の專門に關するものなので、偶に小說などがあつても手が廻り兼ねるのである。專門關係のものですら、近頃は心に掛りながら他日に繰り延べてゐるものが多く、常に友人の好意に背き勝なのを苦しとして居る。だから宮島君の本に就て云々するのも、實は偶然これだけを見てふと感じたことを其儘云ふに止まるので、多少でも斯の方面の消息を知つて居る者の言葉と取られては困るのである。

讀んで一言の返禮を述べねばならぬ書物が机上に堆いのに、いつもなら一番後廻しにすべき筈の小說「金」を一番先きに讀んだのはどういふわけか。それは包を解いて見返しを見ると、特にも[illegible]者には[illegible]あつた方ではない。それだのにわざ／＼署名までして一本を贈つたとすれば、必ずや此中に特に私を誘ふべき何ものかを包藏して居るからに相違ない。乃ち何事を差措いても讀まずんばある可らずと、ひまを見てはしきりに讀み耽つた。宮島君はこの本に依つて必ずや或事を私に告げんとしたのだとは私の今以て信じて居る所である。而して私の此本に對する理解が果して著者の豫期に中るや否やは分らないが、せめて私の解し得ただけの事を卒直に述べるのは、是亦同君の好意に酬ゆる所以でもあらうと考へつゝ、玆に拙き筆を執るに至つた次第である。

×　×　×　×　×

私の觀る所では、著者の此書に依て世間に紹介せんとせるは、杉中なる一青年で、此の青年の短き一生に對する著者の解釋が實に一篇の眼目ではないかと考へる。私はこの點に本書の重點があり、又この點に本書が現代と交渉する社會的意義が存し、從て此の點で本書は私共の後々の研究にも大に參考になるものと思ふ。但し第三者たる讀者にこの事を明にする爲には、少しく話の筋を述べておく必要があるかも知れぬ。

×　×　×　×　×

磯部といふ株式仲買人がある。散々にやり損つて破産に瀕してゐたのを、栗田といふ資業家が見つけて之を利用することになる。栗田の背後には安達といふて天下に誰知らぬ者なき大立物が控へて居る。安達は時の相場に乗ずるといふよりは、寧ろ我から相場を作つて大儲けをするので有名だ。たゞ世の怨府となるを恐れて滅多に表面へは現れない。それだけ悪辣陰険を極めて居るといふ評判が高い。そこで彼はいつも困つてゐる奴をこつそり手なづけては大芝居を打つ。之が彼の常套手段だ。世間は之を薄々承知で居ながら毎時彼にしてやられるのだから面白い。時は大正九年の春だ。戦後の空景氣に世間が陶酔し切つた潮時を見て、安達は栗田に旨を授け、栗田は即ち磯部を物色し得て、突如世上の期待に逆行し、猛然として賣りに出た。其爲に相場は俄に崩れた。やがて大恐慌が來る。すると安達は例の手を出し、其の督下の銀行網に發令して急に手を引き締めさす。作出しが來れば相場は益々下るばかりだ。斯くしてこの三人は大小の差こそあれ、みな一躍して巨額の富を作つたのである。だが他方にはまた此の激變の犠牲となつて大傷を受けたものは非常に多い。大小の悲劇は到る處に演ぜられる。

その一つとして池田家の没落が點綴される。病の床に臥して居たのやまを張つた父は、百計盡き、さらでも迫れる死期を待ち得ずして遂に自殺する。一家は離散し、勝氣の娘は自暴自棄の極我から墮落の淵に我身を墜した。この娘は名を鈴子といふ。實は磯部の娘房子の親友で、其の兄茂のひそかに種々の情を寄せた相手であつた。

磯部の長子茂に一人の親友がある。之が本書の主人公とも見るべき杉中だ。之がまた房子と相思の仲とある。やがて將來を契るの約束が二人の間に成立する。

杉中は一つには茂の爲に又一つには房子から頼まれて、一家没落後行衛不明になつた鈴子を探すべく奔走する。やがて鈴子を墮落の淵から見出す。捨て鉢の鈴子はあべこべに杉中を陥れようと挑む。杉中は何となく彼女の魅力を感じつゝも房子の手前一旦厳しく之を刎ねつける。其の爲に彼は鈴子の爲にはかられて一度事を以て警察に留置さるることになる。先是池田家の親族に長森といふ青年があつた。池田一家の破滅後感ずる所あり、身を本所深川方面に隠して勞働生活をやつて居る。之を訪ねた杉中は、その純眞無垢な行動に非常な感激を覺える。警察に於ける數日の拘留は、更に彼を促して大に考を深めさせる。

かくて彼はます〳〵長森のやうな生活様式に強き憧憬を感ずるに至つた。併し顧るに彼の通つて來た途は新しい時代の兒等のとは丸で違ふ。要するに自分は亡ぶべき種類に屬した人間

[illegible]
事が出來る。[illegible]しこれは[illegible]る事とはならない。
それに依つて自分は生きた事になるであらう[illegible]と。彼は遂に安
[illegible]
杉中は暖部の紹介狀を僞造して八十に近い老人の安達に會ふことが出來た。彼は靜かに過去の數々の罪惡を數へて安達に死を命じた。匕首はやがて老人の胸を貫く。そして杉中自身も亦其場で直に立派な自殺を遂げたのである。

小說としての筋を辿れば、まだ色々のことを云はねばならぬが、私の目的からいへば、以上の話だけで澤山だ。そして讀者は直にこの話から、先年安田善次郎翁を殺した一青年朝日平吾を連想するだらう。著者の眞意の何に在りやは別問題として、私は兎に角あの異常なる事件の一解釋として、實は本書を歷史研究の一文獻と見做して居るのである。

× × × × ×

先年朝日平吾なる一青年が安田翁を殺したといふ報道を新聞で讀んだとき、私には何となく之が普通の殺人でないやうに思はれた。寄附を求めて應ぜず怒りに任せて殺したといふ風に報じたのもあつたが、それにしては朝日の態度が立派過ぎる。事柄の善惡は別として、之には何か深い社會的乃至道義的の意義
[illegible]
[illegible]
一[illegible]としか考へられなかつた。[illegible]く私は朝日といふ人物に就ては[illegible]かに一個の勝手な解釋を有つて居たのであつた。

其後朝日の遺書なるものが秘密の間に發表された。私も之を讀んで私の解釋の甚しく見當を外れて居なかつたことに滿足した。やがて又一部の人の間に朝日を激賞するの聲があがるのを聞いた。併し其の言ふ所は、朝日の古武士的な犧牲的の精神を揚ぐるに偏し、その思想の社會的由來に關しては殆んど全く口を掩ふて居るかに思はれた。之では彼に封建時代の衣物を着せて舞台に立たしめただけに止まり、斷じて現代の活社會に彼を活かす所以にはならない。この點に頗る遺憾の情を懷いて居つたのに、今宮島君の新解釋に接し、始めて私は快心の共鳴を感ずることを得た。是れ同君の好意に酬ゆる以外の意味に於て、別に又こゝに蛇足の紹介を試みるに至つた所以でもある。

改めて云ふ。「金」の主人公杉中が朝日平吾をモデルに取つたものなることは、安達殺害の光景の叙述から觀ても明了だ。更に篇中にちよい〱出る安達のやり口を見ると、之は永く世上の噂に上つた故安田翁のやり口そつくりではないか。田舍銀

行の頭取であつた杉中の父親も安廷にしてやられて悶死したといふ。之も杉中が安廷を殺すに至つた一原因になつて居るが、さてどう云ふ風にして田舍銀行を乘つ取るのかといへば、先づ放慢な貸附に多額の資金を固定し四苦八苦に惱みあぐんで居る田舍銀行に向つて救濟と出掛ける。即ち依頼に應じて若干の融通をするのである。期限が來る。ぐん／＼解決を促す。此際一刻の猶豫も與へず、冷酷を極めて一點の涙を示さぬは、普ねく人の知る所だ。而して困憊の極に押し詰めた揚句が、之を二束三文に買ひ潰すことになる。斯くしてその全權を握ると、今度は豐富なる資金にまかせて、殺つくり貸金の同收につとめる。力ある者の手に歸すれば、二束三文の證券もみな活きあがる。元の株主が切齒扼腕してももう追つ付かない。之が安田翁のやり口だと誰しもが云ふのである。此手で全國各地の小銀行は續々として彼に買ひ潰され、かくして所謂安田の銀行網が全國到る處に張り詰められる。彼が居ながらにして金融界の大覇王と仰がるるに至つた秘訣はこゝにあるといふことだ。

啻に之ればかりでない。本書の冒頭に現れた株式市場の攪亂の如きも、正に是れ安田翁の常套手段と見做されて居る。私の聞知する所に依れば、無事平穩の際に在ては、彼は潤澤を以てじきりに金を使つて吳れと賴み廻る。斯く諸方に資金をおろせば、自然株の値段が上つて來る。値段が上れば更にまた貸出をふやす。斯くて景氣が進んで最高潮に達した頃、彼は擔保に取つた株式を上手に賣り始める。之と同時に全國各地の自家系統の銀行に號令一下して急に貸出を引き締めしむる。これ丈でも反動安が來ねばならぬのに、賣り始めた持株の數が馬鹿に多い。「金」にも書いてあるやうに、誇張していへば『賣らう、賣らう、いくらでも賣つてやる』といふわけになる。そこで相場は、俄然として暴落せざるを得ない。貸出しを停止した銀行は、株式の暴落に乘じて増擔保をせまる。ぐん／＼押し詰めて敵を追究する手際は、宛も勝に乘ぜるはやり男の無人の野を走るが如きものがある。斯の際彼が何人に對しても又如何なる情實にも斷乎として耳を傾けざりしことは、亦普ねく人の知る所である。とどのつまり、彼はかねて擔保に取つた株式を（實は好景氣の時高價で賣り放して莫大の利益を收めたのだが）二束三文で引き取ることにする。之等の手管は無論上手に運ばるるのだから、人に尻尾をつかまるやうなへまはせぬ。けれども騷動のある度毎に、また安田かと財界の人は誰しも老翁を怨の的にしたものだといふ。只何分財界に絶大の勢力があつたので迂つかり之に衝突くことが出來なかつたまでのことだ。「金」の中に說いてある大正九年の大變動も、無論安田のいたづらから

[illegible]
た〔ば〕、あの騷動に[illegible]安田の[illegible]場に、[illegible]に[illegible]も、[illegible]きに及び、海山千年の[illegible]人物も之の[illegible]川沒[illegible]なき[illegible]院には否を抱いて驚いたものだらうた。獨りあの時ばかりではない。あの前歐洲大戰中にもすでに一度程大きな芝居を打つて居る。何せ勢力が大きいので、相場に乘するのではない、自分でおのづから相場を作ることになるのだから、百戰百勝は受合なわけだ。この點に於て彼は實に財界の神樣であつた。加之彼は他のすべての實業家と違ひ、毫末も政府の保護に賴らない。眞に獨立獨行であれ丈けの地歩を築き上げたのは、何と謂つても一代の偉人である。其の代り金を以て人を助けるなどいふことは、爪の垢ほどもしなかつた。金の爲には親類緣者と絕つて毫も之を苦とせなかつた。彼から不思議に無理な金を借り出し得たものは跡にも先にも淺野總一郞翁たつた一人位のものだらうといふことである。

彼は實に金を作ることに於ては稀代の天才であつた。併し金を作らんが爲に故意に人を陷れたといふ者あらば、それは少しく誣妄の言たるを免れまい。彼の行爲には法律上の犯罪を構成すべき底の要素はみじんもない。即ち常に正々堂々の方法に依つて儲けたのである。只彼の機を見るに敏なる、どこかに乘ずべ[illegible]一[illegible]て、[illegible]とつこ戰に基くものではないやうだ。世間[illegible]人に迷惑をかけ、その混雜に乘じて不義の金もうけをしようといふのでは斷じてない。金を儲けよう、斯くすれば屹度儲かると見込んでやつたことが、自然市場の攪亂ともなり、又之から迷惑を蒙る人も出て來るのである。損をするのはその人の不明の致す所。此方の知つたことではない。人の事には構つて居れぬ。現に角自分は儲かりさへすればいゝといふのが、安田翁の處生哲學であつたらしい。少くとも世人一般は彼の人柄をさう識て居る。さうした處生哲學には、固より多くの異議を挿むべきものあるは云ふまでもないが、彼を以て富を作らんが爲に識て人を傷けたものとするは、聊失當であらうかと考へる。彼が彼のために直接損害を受けた人々からは極度に憎まれ乍ら、而も一般世人からは左までに惡聲を浴せられなかつたのも、恐らくは斯うした所からであらうと思ふ。

併し考へて見れば、彼は決して世の風上における紳士的人物ではなかつた。法律上何の罪も構成せなかつたとしても、德義上彼は果して良心に少しの愧ぢるところがなかつたらうか。洵

洲の張作霖は、自ら濫發した紙幣に依て安い米を無理に買ひ上げ、濫發した紙幣の値段が下り物價の馬鹿に上つた頃合を見斗つて、先き買つた米をいゝ値で賣るとやら。斯くて莫大の富を作り而も人民の困苦を顧みなかつたとすれば、彼に民の愛慕を受くる資格なきは明だ。安田は實に財界の張作霖であつた。株の値段を百圓にするも三十圓にするもそは彼の意の儘であつたのだ。百圓の値をもつ株を貯金の擔保に取り、之を百圓に賣つて先づ儲ける。夫から無理やりに三十圓に下げる。そして三十圓のものとして之を自分に引渡さしめる。引渡してしまふとすぐにまた元の百圓の値に復へす。もぎ取られた者の切歯扼腕するも尤である。法律上缺くる所なしとしても、斯の如きは一體默認し得べきことかどうか。之を默認して居た政府が抑も怠慢であつたと謂ふべきではなからうか。尤もあの時代は、まださうしたことどもを八釜しく責むるやうな時代ではなかつたかも知れぬ。三越の賣品の斤量が少いの、有田ドラックの廣告が詐欺的だのと騒ぐ今日なら、無論安田翁のやり口の如きは到底官憲の目こぼしに安んじ得る代物ではない。それだけ彼の富は不義の富と謂はれても仕方があるまい。この事に氣付かなかつたのは、何としても故善次郎翁の不徳と云はざるを得ぬ。今更死屍に鞭つつもりは毛頭ないが、冷靜に考へれば、大學に講堂を寄附したり、市政調査會に巨額の金を提供したりした位で償へる罪ではないやうに思ふ。私が彼の後嗣ぎなら、少くとも財産の半分位を公共事業へでも投げ出さなくては、とても寝ざめがわるくて生きて居れぬ。一つには故翁の罪滅しのため又一つには一族の名譽の爲め、安田家としても何とかせねば銘々の心も安んぜまいと察せらるる。安田家一族の方々は今果してどんな考で居らるるだらうか。

×　×　×　×　×

斯くいへばとて私は、安田翁を殺したのを當然だなどといふのではない。朝日の行動には徹頭徹尾反對だ。ことに一安田翁を除くことに依て直に社會を救ふを得べしと考へた短見は憫笑の至りに堪へぬ。けれどもあの時代に朝日平吾が生れたと云ふその社會的背景に至ては、深く我々を考へさせずには置かぬものがある。日本の青年には今日なほ幾分古武士的精神が殘つて居る。不義を懲らす爲には時に一命をすてゝ惜まない。加之一方には富の配分に關する新しき理想にも動いて居る。此時に當り社會の上流に金の爲には何事を爲すも辭せぬといふ貪慾な實業家があるとしたなら、この古武士的精神と新時代の理想との混血兒たる今日の青年が、物に激して何事を仕出來すか分つたものでない。斯かる形勢は我々よく之を理解しておくの必要が

あるが、又貴人をしてよく之を了解せしめておかなければならない。こゝに「金」の材料が、今日の時代に當り、文藝的作品としての外に、更に一つの特殊なる使命をもつ所以があると考へるのである。

之を書いて居る中に、本書に對する高畠素之君の批評を東京日々新聞で見た。また下田將美君の批評を時事新報で讀んだ。孰れも本書が藝術品として有つ價値を明にして居られたやうだ。私にも同感が出來るが、併し此の方面のことは私に本當には分らない。株式市場の内幕といふ常人の容易に窺知し難い方面を詳に教へて呉れた點に、兩君とも多くの興味を有たれたやうだが、このことにも私は同感だ。題材を變つた方面に取つた點でも、本書には意義あるものらしい。不得手な方面ながら其外更に私の感ずる所を有りの儘にいはしむれば、登場人物のすべての性格が無理も誇張もなく大體能く描かれて居ると思ふ。株屋の磯部もそこらに澤山ありさうな人物だ。其子茂が、一方には新時代の空氣に觸れて自らの家業を呪ひながら、他方斷乎として之から脱け切れもせず、力の入らない煩悶にフラ〳〵して居る所、丁度斯んなのが私の知つてゐる金持の息子に澤山ある。妹の房子に至ては杉中から惚れられる程の資格が何處から來るのか一寸私には分り兼ねる。杉中が鈴子の誘惑に魅せられて、[illegible]全生命を抱き得るだけのものを作つてゐないことは明白であると考へれる。鈴子の境遇に依る心境の變化も、心理の變化を外に[illegible]にして内面の本質に觸らさる人間味を一讀して[illegible]なども、實によく分る。長森のやうな青年も、此頃としては珍らしくない。十年前なら架空の人物としか受取れなかつたらう。斯くして此間から杉中の出て來る徑路は當然の歸結となるのだが、强て難をいへば、この杉中の性格が少しく書き足りなくはないかと考へられる。あれ丈の大事を決行する人間だ。而も一時の憤激に出づるのではない。然らばも少しそこに深い煩悶があつていゝ筈だと思ふ。殺さねばならぬ道理上の決心と益々之を實行に移すまでの間には、偉い人程、又本當の人間であればあるだけ、そこに深刻なる煩悶がなければならない。考へたことをすぐ實行するやうな者に碌な奴はない。蓋し不義を除いたといふことそれ自身に偉いものがあるのではなく、已むに已まれずして不義を除いたその血涙滴るばかりの内面的爭鬪に貴いものがあるのである。斯く考へると、杉中に對する著者の解釋は少しく安價に過ぎはせぬか。別の言葉でいへば、大體の見當は誤らざるも、描寫に深刻味が足りぬといふべきではないかと考へる。併し畢竟斯れ素人の僻言、自ら敢て當れりと自信する程

の言ひ立てではない。

いづれにしても私は、本書を朝日平吾一件の一解釋として私だけの價値づけをして滿足して居る。固より本書を朝日平吾の心事の疏明を目的とせるものとは思つて居ない。あの事件をどんな風に觀れば當時の社會は成程と首肯したであらうかの、謂はゞ一社會的解釋といふのが主眼であらう。斯の立場から云へば、本書はよく當時の財界と社會狀態と又青年の心理とを敎へて呉れるものといふことが出來やう。尤も著者が果して朝日平吾を念頭において書いたのかどうかは、聞いて見ねばはつきりは分らぬ。事實さうでないと云はるれば、私の立言は丸で空になる。それでも本書が大正九年頃の浮薄な東京を描いた記錄としての價値は全く消滅はすまい。況んや外に藝術品としての價打もあるといふに於てをや。たゞ私としては、私の立言恐らく著者の承認を得べきを期待して、ひとり密に悦に入つて居る次第である。

毎日の新聞から

内閣改造、總務雅頭の任命等に關連して、憲政會に内訌が起る。百戰錬磨の老將安達謙藏氏は、その官邸に役員諸氏を召集し頻りに慰撫につとめる。その言草の一端に曰く、黨内に意思疏通を缺くものありとの風聞は、既に反對黨に依て各國に宣傳せられて居る。斯くては世間の疑惑を招くの恐れがある。此際何とか愼重の態度を執つて貰ひたいと。

兄弟牆に鬩めけども外其侮りを禦ぐといへば體裁はいゝが、自分の不了見をば棚に上げ、無理に反對の批評を責めんとて、ソレ敵に乘ぜらるるぞなぞと威かすのは、由來橫着な政治家の常套手段である。門を出づれば七人の敵ありなどと假想の敵を立てねば人心は緊張せぬものと考へるのは、幸にして封建時代には限らぬものと見へる。曾て日本の某政治家は、この流儀で大亞細亞同盟を說いて、見事に支那の人達から嘲笑されたことがある。それにも懲りず今でも尤もらしい顏をしていろいろの「敵」を私共に告げる先輩が澤山ある。之を說くものの老猾はどうでもいゝとして、若し斯の如き手段が少しでも成功するもの

とせば、我等はむしろ易々として之に要する我が國民の[illegible]を思はすには居れぬ。

×　×　×　×　×

私が學生時分、ある耶蘇教會に往つて聖書の講義を聽いたことがある。富める者の天國に入るは駱駝の針の穴を通るよりも難しと云つた一節に打ツつかつて、聽衆中の質朴な金持の隱居らしい老人が眞面目臭つて起つた。「さうすると私などは絶對に天國には參れませんのですか」との質問だ。牧師先生何と之に答へるかと片唾をのんで待つてゐると、針の穴から富士の山だつて見へるではありませんかと云つた。老人は靜によく分りました、安心いたしましたと座に就いた。

これは之れとして頗る面白い話であるが、併し理窟を捏ねて見ると、之で問題の釋けたといふのが解らない。處が世間には斯うした珍推理の案外に多いばかりでなく、之に基いた實行もあるのだから驚く。昨今新聞でよく見る政友會一派の新護憲論の如きは正にこれだ。

清浦內閣に對する三派合同の護憲運動。之も一種變なものではあつた（拙著「現代政治講話」參照）。併し之にはまだ一つの理窟は通うつてゐた。而して之は一つの政黨が上院の一派と通じたといふだけで起つたものでないことは論を待たない。して見ると政友會の新護憲論[illegible]閣にも內閣にも無[illegible]る。

若槻內閣のだらしのないには我等も[illegible]開口してゐる此際だ。政友會には一人や二人氣の利いた策士も居る筈だ。有力な反對黨として少しは溜飲の下る樣な痛快な腕の冴えを見せて貰ひたい。如何に微力な若槻內閣でも、新護憲論の如き鈍刀では往生すまい。

×　×　×　×　×

東京の市政は頗る支那の政界と似て居る。碌でもない者が市會議員でござると威張る。市民は彼等に信頼もせねば尊敬もせぬ。彼等の干與を寧ろ却て有害と見て、獨力でせッせと自家の發達向上を工夫する。是れ正に官吏軍人に對する支那民衆の態度そッくりではないか。殊に民衆がその最も輕蔑する職業的政治家の跋扈にまかせて而も進んで其の力を組織するの勇氣を缺く所、彼と我と全然符節を合するが如きものがある。

聞く所に依れば、支那の心ある商人は最近如何にして其力を結束組織し、良民を窘め良民を欺くことの上に揭々亂舞する政治家輩を除くべきかに目醒め始めたとやら。我か東京の市民も、この點に本當の覺醒を遂げなくては、平氣で支那を笑ふの

資格はない。

×　×　×　×　×

私の知人で或る縣の役人をしてゐるものがある。此間遇つた時の話に、民間にも一つ二つ公民教育を標榜する團體が出來たので、縣でもいよ／＼之を始めることにしたといふ。民間に出來たのなら、縣の金でわざ／＼同じものを始めなくともいゝではないかといへば、いや民間で始めたからこそ縣でもやるのだ、民間でやる位のこと縣でやらぬといふ法はないからといふ。これ程の熱心があるのなら、助成金でもやつて民間の仕事を完成さしてやり給へとすゝめて見たが、肯かれなかつた。

役人の斯かる態度の思想的根據は、思ふに(一)には民間のやることには信用が出來ぬといふ考である。すべて自分でやるか又は完全なる監督權の下に服せしめねば承知が出來ぬのである。(二)にはすべて必要な事は一から十まで役所でやらなければ氣が濟まぬといふのである。斯く／＼の事項に對して如何なる措置を執れりやと訊かれて、これは民間で斯く／＼に行はれて居るとより答へ得ないのは、お上としては無責任の話だと考へて居るのである。斯の如きは悉くこれ封建時代の餘習ではないか。

新聞に報じて云ふ。明年度の豫算に文部省は公民教育のため更に多額の増加を要求すべしと。出來れば之もわるくはない。が、同じ目的の達成の爲め必しも之が一番いゝ方法でないといふことは、能く心得ておく必要がある。

×　×　×　×　×

五月末の新聞に、北京特電として、對支文化事業の實施に關する英國の意見なるものが出て居つた。英國も亦團匪事件賠償金を以て斯の事業を始めるのだといふ。其のために英本國はわざ／＼人を支那に派遣し調査研究せしめて居るが、此人が支那側の人々と相談して決めたことは次の如しといふ。(一)英本國の委員會は、賠償金の使途に關し一般の原則と計劃を指示する。(二)前記の指示範圍内に於て如何に用途を割當てるかは、別に支那に於て設けらるべき管理委員會に一任する。(三)支那側委員會は毎年會計報告を英支兩國政府に呈出する。

尤も之は調査主任の一私案に過ぎぬと云ふ。併しどうせ支那の爲めにするのなら支那の人にまかせてしまへといふ此原則は、多分結局採納を見るだらう。孰れにしても英國の人は、淡泊でもあり且つ頭がいゝ。

×　×　×　×

高い金を出して雇つたのだといふ樓主の權利を徹頭徹尾保護して來た警察の態度は、本年になつて俄然として變つた。聊か

遲きの憾みはあるも、正義に目ざめたことは兎に角うれしい。是れからは娼妓が逃げ出しても警察でひどい目に遇はされることはなくなる。救世軍も大手を振つて遊里に廓清の運動を叫ぶことが出來やう。

さて此次の番は勞働運動か。雇主や地主の權利が女郎屋の主人の權利と似た所があるに警察が氣のつくのも、遠いことではあるまい。ストライキをやつて虐められるのも、應援演説をやつて中止を喰ふのも、雇主に掛合に行つて檢束の浮目を見るのも、モウ少しの辛抱だらう。公娼問題にあれ丈の聰明を見せた日本帝國の警察だ。いつまでも昏迷境裏に惰眠を貪り續けるものではあるまい。——功を急いで短慮性急ならざるが肝腎だ。

× × × ×

甘粕大尉が出獄するとて世間が騒ぐ。騒ぐ者にあの奴を活かしては置けぬといふものがあり、又折角出してやつても危害を加へられては氣の毒だとするのもある。後者に向つては餘りに神經過敏なるを戒むるを要し　前者に向つては單なる復讐は大杉の爲にもひいきの引倒しになることを忠告しておきたい。

甘粕大尉に制規以上の特典を與へ期に先立つて出獄さするのなら、之は一寸問題になる。是れ暗に甘粕の行爲を是認するものにして、かの有用ドラツタの愚擧と其の性質を同うするを以てである。併し彼の罪惡では、彼は[illegible]所だ因であり、どの點から見ても、非常の刑罰に値すべきだけの罪魁であつたらうと思ふ。從つて今出獄すると聞いても、私は急も不思議とは思はない。而して此事に關連して若し問題とすべきものありとせば、そはそれ程に物の分つた男がなぜあんな大罪を犯したかの一點であらう。答へて曰く、之は二つの重大な誤解があつたからだ。一つは大杉を大逆無道と妄信したことで、も一つは害を除く爲には手段を顧慮せざるも可なりと信じたことである。斯くして彼はその執る所の手段が法に觸るるならいさぎよく其制裁に服さう、併し良心に於て我は俯仰敢て天地にはぢる所なしと自負したのであらう。一部の人士がひそかに彼に同情を寄せてゐるといふのも　畢竟は皆この同じ考からであるに相違ない。

良い事をしたのだ、手段はゆるせ。換言すれば目的は手段をきよめる。支那では昔からこれを覇道と呼んだ。古來英雄の士がこの謬見に誘はれて如何に多くの罪を犯したかは、多く說くを要せぬだらう。聖人君子は之を一身の一大誘惑として戰々兢々其の陷る所とならざるやうにと、非常に苦心したものださうな。詰り問題はこゝだ。且思ふに社會の進歩は、一概に目的を達した處に發端するのではなく、正しい目的を達すべく正し

い手段で一歩〱踏みかためて行く全體の行程の上に存する。我々が平素所謂軍國主義を排斥する理論上の根據も一つには亦こゝに由來するのである。

再び甘粕のやうな奴が現はれては困る、不祥を未前に防ぐ爲には甘粕に一撃を加ふるも亦必要だと云ふものあらば、假令その動機が復讐に在るのではないとしても、矢張り目的の爲に手段を擇ばざるの發現として、私共は極力之を排斥する。敵を愛せよとは單なる感傷的な氣持の表示ではない。私が若し大杉の友人であつたなら、彼の爲に手向けんが爲め、私は必ずや甘粕の悔改めたる眞實復正の魂を得んことに苦心するだらう。甘粕を苦めることに由て大杉を慰めんとするが如きは、斷じて私の採らざる所である。

× × × × ×

研究の自由を壓迫する文部當局の頑迷もさる事ながら、彼人の不當の壓迫に反抗することのみを知つて、眞に良心の自由を攻學の上に保持するを知らざる青年に對つては、此際とくに一言の警告を與へておくの必要を見る。

研究自由擁護の爲に鬪はんとする熱情に於て我は敢て人後に落ちないといふ。それはいゝ。一旦斯く宣明したからとて、之に拘泥して心にもなき空騒ぎをしてゐる人は、之を眞の自由の士と謂ふことは出來ぬ。從來執り來つた態度の誤つてゐることに氣附いても、變節の汚名をおそれ、心中多大の煩悶に惱み乍らも外面勇猛を裝ふもの世上決して稀ではない。若し夫れ名利と行掛りに頓着せず眞に良心の自由に足場を置いて勇敢に行動するものに至ては、寥として實に曉天の星も啻ならない。

自由の尊重と附和雷同とを今日の青年の間に見分けることは、青年に接する機會の割合に多い私にも頗る困難事だ。

× × × × ×

偏つた教育を受けた結果として飛んでもない頭の持主となり、世間から始末に負へぬものと看做さるゝ者に第一軍人がある。幼年學校時代から偏頗的教育を受け、從て軍界に於て秀才の譽ある者ほど、始末に負へぬとされて居る。軍人に次いで司法官が擧げられ、時としてまた師範學校出の教員が問題に上る。

斯くいふの當否は固より私の知らざる所だが、近き將來に於て所謂精神科學研究家も或はまたその仲間に數へられはしないだらうか。私は獨り密かに之を憂へ、今から大に研究しておくの必要を見るものである。蓋し變な頭になるそも〱の源は、ある固定した原則の信條を強いられたり、又かくして頭に特定の傾向が無理に捺し付けられたりし、以て思索の柔軟性を失は

しめらるゝ所に存する。能く考へたらば、或る種の思想に目的信奉を捧げ、違つた思想に對してはとかく寛容の精神を失ひ勝の一部の社會思想家に、果して變な頭にならないといふ保證は出來るか。何でも新奇物珍らしの今の中はいゝ。暫くすると變物は變物相當のボロを出す。やがて軍人司法官等と同じく、何れは始末に負へぬ代物となるの運命は、モウ既に見え透いて居る様にも思ふ。

社會思想の正しい發達の爲に、我々此處に反省警戒するは、今が正に潮時ではあるまいか。

× × × × ×

東京市會議員選擧の結果は我々に何事を敎ふるか。(一)人が選れたのではない。政黨が選れたのだといふこと。(二)一定の組織を以て臨む者は、どんな下らぬ者でも勝つといふこと。この二つは實に我々に取て貴い經驗だ。普選になつても今の儘では、「政治」は決して我々のものとはならぬ。今の中より公民敎育をする、又は青年團其他の團體と連絡を取る、[illegible]必要とすべき事ではあるが、差當りの方法としては、[illegible]く眞切り、そこに狭き目かたき同志の力を結束することが最も肝要である。

無産政黨の如きもこゝに深く思を致すの必要はないか。地方的結束を忽諸に附して全國的大政黨の旗揭げに急ぐのは、宛かも支那の中央政府のやうなもので、何時まで立つても天下を左右するの實力は備らない。

× × × × ×

此頃飛んでもないものが小作爭議や勞働爭議の調停に割り込むのがはやる。彼等はきまつて其鋒先を小作人や勞働者の方に向ける。そして其の言ふことに少しでも嫌な顏をすると、誠意がないの一言で直に尻を捲くる。之等を少し警察で取締つたらどうか。と云つて眞實の誠意に動く調停者をも邪魔もの視する考は毛頭ない。

小題雜感數則

白虎隊墳墓改修問題

白虎隊墳墓の改修問題に關し、山川健次郎先生と杉村楚人冠氏との間に面白い論戰があつた。五月中ば過ぎの東京朝日新聞に出てゐる。

順序をはつきり覺えて居ぬが、杉村氏はその會津紀行のうちに白虎隊墳墓の改修を難じたものらしい。之に對して改修事業の主たる當事者の山川先生は辯明の書を寄せ、杉村氏また之に答へて居る。枝葉の點を去り問題の根幹だけをいへば、杉村氏は從來のまゝで結構だといふに對し、山川先生はそれでは白虎隊の精神が國民に傳はりにくいと主張さるるものの様である。

白虎隊の墳墓には獨立の入口がない。何とか神社の境内を通らなければならぬ。そこで獨立の入口がつく樣に改修した。墳墓の現在場所は狹くて多數參拜に不便だ。それで小高い廣い形勝の地に移した。そこにはまた外の色々の人の墓があつた。之は白虎隊に關係がないから他に移す。詰り外の者とゴタ〳〵雜居してゐたのを、之が白虎隊の墓だと別のきれいな處に移し。そこへは他の雜物を交へないといふのが、改修工事の趣旨らしい。而して斯くすることが白虎隊を崇敬する所以であり、斯くして我々國民も亦一層深く白虎隊の感化に浴することが出來るといふのが、山川先生の立場である。之に對して杉村氏の立場はそんな事は餘計のことだ、元の儘でも白虎隊の精神を偲ぶことが出來る、假令善意でも無用の虛飾は本來の尊嚴を傷けるといふにある。

× × × × ×

私は山川先生の爲人を熟知し、其の忠誠純眞に無限の尊敬を拂ふものなるが故に、先生の斯く主張さるる心持はよく分る。野に咲いた一輪の花も鉢に移して立派な座敷に飾れば一段の光りを添へる。孝子節婦は永く田夫野人の間に伍せしむるに忍びない。之れを立派に着飾らせて衆人環視の裡に表彰することが、一には彼等を待つ所以であり、一には眞に民心を鼓舞奬勵する所以だとさるるのだ。禮服を着用しなければ殿中の氣分を味はれないと云つた形である。併し斯く考へらるるのは詰り敎養の然らしむる所で何とも外に致し方がない。漢門の識者に孔廟に偶打解では行けなかつたと同じ樣に、山川先生の樣な敎養をもつ人々に取て、白虎隊の墳墓をあの儘にしておくのは何としても忍びなかつたことであらう。併し山川先生並に先生と同じ樣な立場の人々の希望をみたすといふだけの問題なら無論之でいゝが、白虎隊と國民の精神的訓練とを結びつけ樣として の問題なら、現代の靑年は如何なる形情の下に感激を覺える

か、自然科學の教育は如何に研究するのが一層合理的な途かを、もつと冷靜に考究するの必要になからうか。

この點に於て私は遺憾ながら山川先生の所見に贊同することが出來ない。私の知人で最近勲七等瑞寶章を頂戴した人がある。何月何日何時服着用で郡役所に出頭しろとの召集狀を受けて彼は頗る迷惑に感じた。郡長から斯んな有り難いものを頂戴した時は、一日位家業を休み、親類朋友を招いて祝宴を張ても然るべきだ、斯くしてこそ他にも君を眞似るものが出來て、それ丈けお上に御奉公することになるのだと論されて、遂に彼は憤慨した。この迷惑この憤慨が、只官憲に反抗する爲に又は徒らに奇を衒う爲になされるのなら、固より一顧の價値もない。眞摯そのもので滿足し、無用の外形的粉飾を厭ふ所に出づるものとすれば、是亦味うべき態度だと思ふ。外形などはどうでもいゝ。乃木大將は那須の百姓としておいても貴いのだ。わざ〳〵大禮服を着せて馬車で市中を乘り廻させなくとも、內在の光りは自らにして照りかゞやく。殊に古い歷史のあるものなどは、其儘にしておいた方が却て本當の貴さが光り出す。後世の手入れに碌なもののないことは、古美術玩賞家に聞くまでもなく明白だ。親切な干涉ほど物の本質を傷くるものはない。

私共の學生時代には、役人は高等官になれば必ずフロックコートに限るといふ內規があつたと聞いた。ホテルでも、夜會でも宴會でもの宴席殆んど全部フロックコートであつた。晩餐ばかりではない、其外一寸した式日などでも紳士はみなフロックと極まつてゐた。今はフロックなど誰れが着ても見られない。背廣にソフトカラアで何處へでも行けるといふ世の中だ。之がいゝか惡いかは別問題として、少くともこの時代好尙の變化は考へておく必要はあらう。現代の青年は無用の粉飾に對しては却て過度の反感をさへ催ほすを常とする。

×　　×　　×　　×　　×

私は山川先生の現に企てられて居る改修工事の具體的內容は知らない。從て實際の問題としては之を是とすべきか非とすべきかを判斷することも出來ない。その改修は案外當を得たものかも分らない。故にこの點の判斷は他日に留保しておくが、只兩氏の論爭に現はれた說明に基き、各々其の執らるる所の主義を抽出して見ると、玆に明に兩者の考方の根本的相違に氣がつくのである。而してその現實の適用は別として、根本の主義そのものに至ては、私は無條件に禁人冠氏の立場に共鳴せざるを得ないのである。

英國保守黨議員の露國訪問

四月十九日のジャパン・タイムスに、十七日倫敦發の國際通信の電報として、次の樣な記事が載つて居つた。

…………革命後はじめて露西亞を視に行く下院保守黨議員の一行は本日出立した。顔觸れはサー・フランク・ネルソン、ロバート・フースビー代、ブールン大尉、ラッセル・ムーア中佐の四人。目的は露西亞に於ける生活狀態の徹底的調査であつて、研究の結果は大に兩國關係の改善に資するだらうと期待されて居る。ソヴィエット政府は、半官的使命を有するこの一行に對し、完全なる自由行動を保障した…………

この記事を讀んだ時、私は斯んなことを考へた。(一)若し之が日本の事であつたら議員の露國視察の如きは寸毫も我々の注意を惹くものではない。彼等の西洋旅行は田舍者の都見物の類たるを常とし、特に露西亞に行つたからとて格別骨折つて研究するとは考へられぬからである。(二)歸つて來て彼等が若し何等か露西亞に就て說く所ありとすれば、之は我々の疾うの昔に知つて居るやうなことを、何かの本を人に飜譯さして我物顔に吹聽する類にきまつて居る。(三)然らざれば、冷靜公平な視察に基いて斬新な見解を立つるにあらず、かねて抱懷する所の偏見を確むる樣な方面の材料ばかりを掻き集め、之が露西亞の眞相でござると說く位のことに止まるであらう。(四)現に數年來多額の國帑を使つて澤山の名士(?)が各國に派遣されたのだが、今日まで一人として本當の研究らしい報告を國民の前に提供した人はないでないか。(五)そこへ行くと英國はえらい。今までの例によると、派遣されたものは皆眞面目に調査研究をする。而も調査研究を爲すに當ては、彼等は完全に白紙に還り、決して從來の偏見に囚へられまいと努むる。(六)偏見に囚へられないのは調査員ばかりではない。之を聞く政府も又民間も同樣である。故に政府は調査の結果が從來の方針を覆へす底のものであつても苦としない。民間でも亦之を以て政府の過去の過りを責めぬ。只新らしい調査に基いて更に正しい方針が立てばいゝと滿足する。(七)斯ういふ見地から觀察して、今次の露西亞視察團の行動は、特に大に注目すべきものがあると。

×　　×　　×　　×　　×

一九二一年の英露假通商協定は一九二四年英國の勞働黨內閣に依つて承認せられ、續いて英露基本條約及び通商條約の成立を見んとしたのだが、此年十一月保守黨內閣が代り立つに及んで形勢は一變し、基本條約は破棄され、爲に兩國の關係が頗る險惡なものとなつたことは人の知る所である。之に由て觀ても、英國保守黨の露國觀が分るだらう。保守黨は仕方がないとして、自由黨や勞働黨だつて實は露國に對しては從來幾分何等

が報せたところによると、露國の經濟狀態が漸次整頓して各國の銀も、英國の經濟界は露國からの註文を得ることだけは斷つたといふ噂もあつた位だ。假りに之が誤傳であつたとしても、それが輕々しく信ぜられる所に英國人の特殊なる露國觀を想ふべきである。それだけ我々は保守黨議員達の視察調査の結果如何に多大の注意を拂つて居つたのである。

× × × × ×

六月はじめの時事新報紙上で、私は倫敦特電として掲げられた「露國歸りの保守黨議員の報告書」なるものを讀んだ。一行四名が倫敦へ歸來するや直に新聞へ發表したものなさうである。電報だから詳しいことは分らぬが、調査研究の結果彼等は政府に對し次の三ケ條を建議したといふ。

(一)現政府の對露態度を改めること。

(二)英露兩國の密接な通商關係を設定する爲め、前マクドナルド內閣の政策を復活すること。

(三)露國に對する貸付を盛にすること。

猶その報告中には次の樣なことも述べてあるといふ。(一)ソヴイエツト制度は、非難さるべき點も多々あるが、露國には頗る適當なものであること、殊に商工業の複雜な問題を處理するには比較的有效なものであること。(二)又此制度は今や既に堅固な永久的基礎の上に確立されて居るらしいこと。(三)露國の人々の生活狀態は、革命前よりは遙に幸福になつて居ること。(四)教育事業に付ても一般に向上の傾向を示して居ること。

更に電報に附け加へて報道する。曰く、保守黨の有力な議員が斯かる大膽な結論を下したことに、英國人一般は大にその視聽を聳動させて居ると。さもあるべきことだ。何れにしてもこの報告の結果が兩國關係の實際上に今後如何の影響を與ふるかは、吾人の刮目を要する所である。

報告の內容の批判は今避ける。只私は斯の如き囚はれざる意見の發表を許す英國の政黨を羨しく思ふ。正直に物を視て正直に所信を語る四人の議員に對しては、無限の敬意を表するの外はない。

人を活かす取締と人を殺す取締

私の知人に或る種の怖るべき不穩文書を軍隊在營の友人に送つたと云ふ廉で數ケ月の懲役に處せられたものがある。事は七八年の昔に起り、其後彼は善良なる青年としてその當然の途を立派に踏んで來た。其間彼は暫く身を俗界から遠ざけて居つたのだが、警察并に憲兵の頻繁なる監視が如何に彼の生活を不愉快にし、又如何に周圍の人達に不安を與へたか分らない。私の

知る限り、本來之は罪になるべき性質のものではなかつた。或る出來事に關する彼れの少年らしき憤激が少しく穏當を缺く文字になつて現れたといふまでで、彼れに法廷が判定したような事實の意識の斷じてなかつたことは、今以て私のかたく信ずる所である。その事は裁判官も全然認めないわけではないやうだ。現に之を裁いた司法官も、情狀に酌量すべき餘地ありしことを後に私に語つたこともある。併し一旦罪の裁きを受けたが最後、官憲の監視が何處までも又何時までもつきまとふ。何時になつたら彼れに枕を高くして安眠し得るの時期が來るだらう？ 斯く限りなく追求するの結果は、遂に彼を促して本當の罪人になり了ふせしむるに至らぬだらうか。眞に寒心のいたりである。

數年の隱忍に堪へて彼は最近東京にやつて來た。一人の老母を養ふ爲に若干の糧を働く必要に迫られたからである。常人でさへ例の就職難だ。況んや前科ある彼に於てをや。否、前科の有無の人にわかる前に、警察と憲兵との頻繁なる訪問は、單なる滯在をすら困難ならしめる。けれどもさる人の好意に依つて彼はやつと或る仕事を見付けた。雇ふ方でも十分にその事情を理解し、同情を以て陰ながら彼を庇護することにした。その爲に警察でも或る程度の諒解を與へたが、憲兵の方が構はず無遠慮にやつて來るので、とうとう周圍の者がおそれを抱き、餘儀なく其處を去らねばならなくなつた。斯して彼はこの唯一安住の地にも留り難く、今や再び絶望の旅に漂浪せんとして居る。社會の無情も茲に至つて極れりと謂ふべきではないか。

× × × ×

子供のとき學校の讀本で私は斯んなことを讀んだ。

……アルコール大捷の即夜、ボナパルトはこツそり獨りで陣營を見廻つた。不圖一人の歩哨が疲れ切つて居眠りしてゐるのを見付ける。彼はその歩哨の目を覺さぬやうにと靜に武裝を解き、樂にやすむことの出來るやうにしてやつた。そして交代時間の來るまで代つてそこに立つて居た。軈て歩哨は目をさました。自分の代りに大元帥が立つて居るのを見て大に驚いた。『どうしよう！もう駄目だ』と彼は叫んだ。『わが友よ、靜かに！』と大元帥は答へた『あんな烈しい戰ひのあとだ。君のやうな勇敢な人に居眠り位は仕方がない。だが、此の次に眠るときは時を擇んだ方がいゝね』……

この話は本當にあつたことかどうか私は知らぬ。併し規律の嚴格なるべき戰場に於ても、時に法を破つて人を活かすは亦名將の徳だと崇へることもある。動機の不純なる者に對しては、涙を揮つて馬謖を斬つた孔明の態度を以て臨むことも固より必要

[illegible]

すべきにも非ることは[illegible]明であらう[illegible]

所謂思想問題犯の取扱に關し。今日の我國の官憲は殆ら無用に良民を殺して居るかわからない。

×　×　×　×　×

私は切に局に當る者に望む。願くは

(一)法規の嚴格なる强行のみが社會的秩序を維持する所以でないことを

(二)曾て一定の罪名を課せられた者に對し、事件發生當時の情況如何に頓着せず、其の罪名と連想さるる總ての屬性を勝手に附與して、永久に之を惡人扱ひすることの、如何に多くの不祥なる結果を生みつゝあるかを愼重に省慮せられんことを。

所謂人口問題の解決策

六月はじめの新聞に、政府では人口問題解決の一策として移植民政策の確立を急務と爲し、今度次のやうな方策を講ずる積りだとある。

(一)海外移民の保護奬勵

(甲)奬勵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と「補助金の増額」と「一定範圍の補助」とによるか[illegible]針を取るといふ。

(ロ)移民輸送港に於ての保護施設に對する助成金の交附

差當りこの條項に均霑するのは移民宿泊所である。是亦移民奬勵の一手段である。

(ハ)移住地の實狀調査

(乙)保護

(イ)移住地に於ける移民指導者の養成

(ロ)在外兒童の教育設備に對する助成

(二)內地植民の奬勵

(甲)朝鮮移住　併し之はあまり餘地はない。

(乙)北海道移住　人口密度まだ至て薄い。內地同樣の密度に達するまでには、猶一平方里に五百人を包容し得ると云ふ。併し總面積六千平方里として總數三百萬人に過ぎぬから、さう大した收容力あるわけでもない。

×　×　×　×　×

之を讀んですぐ私共の頭に浮ぶことは、(一)內地植民には殆

んと望をおけぬことである。朝鮮移住の好ましからざるは云ふまでもなく、北海道だつて焼石に水の程度のものだ。(二)如何に民間の移民會社を奬勵したつて、海外にどん／＼人口のはけるものでなし、餘程注意してやらないと、補助した金は一部の人の私腹を肥やすに過ぎないことになる。(三)今日の急務は新に移民を送り出すよりは、既に折角出掛けた移民の追ひ歸されぬ様に世話を見てやることであらう。之が爲には實情調査も必要であり、指導者の養成や教育設備の助成も必要であらう。之もやり方に依ては却て益々嫌はれる因にならぬとも限らぬから、如何なる精神で之をやるべきかは、最も慎重なる考慮を要するのである。而して之がうまく成功すれば、移住地に於ける移民の生活を落ち付け、間接にまた移民を奬勵するの結果ともならう。要するに私の考では、政府の提示した科目の中、條件付ではあるが賛同を表し得るのは只右の第三點だけで、内地植民とか移民會社の助成は恐らく勞して功無きに終るだらうと考へる。云ふまでもなく、之れ丈にはやつても良からうといふ右の第三點は、直接に移植民を奬勵する事柄ではない。

それでは人口問題は解決出來ぬではないかと云ふ人もあらうが、事實その通りである。移植民政策で我國人口問題は今の所到底解決は出來ぬと思ふのである。人口は夥しき率で毎年殖える、外へでも出さねばやり切れない。是れ誰しも考へる所であるが、之が實際政策として採らるるには、實は(一)人口の安全なはけ口がなくてはならず、(二)人民に進んで外へ出る意思がなくてはならず、(三)又好んで外へ出ることを誘引する設備がなくてはならぬ。然るに我國の現狀に在ては、(一)と(二)とが殆んど全く缺けて居る。そこへ獨り(三)を整へたつて何になる。海外移植民。出來れば洵に結構だ。出來ぬまでも之を試みる値打はあらう。併し之で人口問題の解決が出來ると思ふのは大間違である。

×　×　×　×　×

移植民政策が人口問題の唯一の(又は主要の)解決策であるといふ說を、理論上成り立たしむる爲には、内地に於ける人口給養の途は既に極度に達し、此上之を増して行けぬといふを前提せなければならぬ。少くとも斯の事の比較的困難な事情を豫定して、始めて移植民が問題に上る順序になる。この點に關し人はよく云ふ、日本は土地が狹いから食料品の生産には限りがあると。併しこの際食料品は問題でない。經濟交通は世界一家の今日だ。金さへあれば何處からでも持つて來れる。故に着眼點は、食ふものではなくて一般の富の増殖である。耕地の大小でなくして富を作る機會の多少でなくてはならぬ。之れさへ潤澤

で[illegible]必要はない事でもある。この事は西洋諸國の例を見てもわかる。

ここで問題は、我が日本の今日に於て富を作る機會が國際に惠まれて居るか如何に轉向する。簡單に云へば、仕事があるか否かの問題だ。仕事があるのになまけて之を勵まない、そして食へぬからとて一攫千金を夢みて海外に飛び出さうといふのなら、それは自ら別問題だ。併し私の考では、實際日本には仕事が少いのだと思ふ。即ち何處を見ても就職難で、働く意思があつても働くべき仕事が見付からないのである。そこで人は海外にでも飛び出さうかといふ氣になり、政治家輩までが、之に依て困難なる失業問題の緩和をはかり得んかと考ふるに至るのである。果して然らば是れ實にこの多難なる日本の爲に誠に悲むべきことと謂はねばならぬ。

然らば何が一體日本を仕事に惠まれぬ國にしたのか。之もついでに考へておく必要がある。天惠の乏しいことも一因であらう。併し目前一番の大原因は、いつも私が主張することではあるが、民間經濟に對する財政的壓迫であると信ずる。租税も高いが、それ貯金だ、それ保險だ、それ公債だと、民間資金を絞り上げる高も夥しいものだ。田舎の金は中央に集められ、中央の金は一部は無用有害なる政爭に徒費され、大部分は種々の隱た[illegible]向けらるる。[illegible]、故ことも周知の事實だ。斯くて民間の[illegible]り取られた巨額の金は、使はれずに散して利を生まぬ。[illegible]に事業の起らざるも怪むに足らぬではないか。併し斯れは今日の日本に於て皆必要缺くべからざる事だといふ。之を缺く可からずとすれば、暫く仕事の不足を忍んで、せめてもの息付き口を海外に見出さうとするも已むを得ぬだらう。併し海外移植民などいふことは、軍國的傳統觀念に慣らされた俗耳には一寸響きが良いやうだが、事實今日の難局に何等の光明を與ふるものではない。政府がこの先きどんな施設をしやうが、所謂人口問題はいつまで經つても永久に殘るのである。

そこで人口問題の解決は結局斯ういふことに歸すると思ふ。(一)仕事の欠乏といふ現象の主因たる公私の軍國的施設經營は、立國の必要上已むを得ぬものとして、此の上引續き我々國民は貧血と榮養不良とに甘んじて行くべきものか。(二)又は此處に斧鉞を加ふるの必要に立脚して、大英斷を廣義の財政計劃に加へ、民間の産業を振興さすことに依て新に百年の大計を確立するか。斯ういふ細かいことになると、私にも判斷はつかない。只單純な理論としては、人口問題が本來自國内だけで解決さる

べき筈のものたることだけは疑ない。之に相當の自信をもつ者が唱へるので、始めて各國移民自由交通說なども重きを爲すのだ。自分で食ふ丈けの仕事も有たないで只金を貸して呉れいでは、誰も安心して貸しては呉れぬ。何事に於ても、先づ獨自の力を養ふことが第一の急務だと思ふ。

內閣改造に伴ふ研究會の內訌

研究會より井上子爵を入閣せしめたことに依て內閣は改造された。この改造に付ては研究會にも憲政會にも不平がある。研究會の方は別に之を說くとして、憲政會自身の方は、大臣を他に求めたと云ふ點に不滿があるのである。この不平は始めから豫見されてゐた。然るにも拘らず、研究會から一人の大臣を取つたのは、斯くすることを大に必要とする實際的理由があつたからであらう。

然らばその理由とは何か。研究會幹部の推擧する人に內閣の一椅子を與へて其の歡心を買ひ、以て他日の政策遂行上大に便宜を得んとすること是である。此際研究會の幹部に若槻內閣を援助する意思あることは推測するに難くないが、只問題は、現幹部にその意思を確實に遂行するの實力ありや。換言すれば、所屬議員は果してよく幹部の統率に服するや否やの點である。折角幹部の歡心を買ても、多數がいふことを聽かぬのでは何にもならぬ。

× × × × ×

從來の研究會は大抵幹部の命令に服從して居つた。但し玆に私共は、從來幹部が多數議員を纏め得たのは、下院の政友會と相應ずるが爲であつた事實を記憶せねばならぬ。淸浦內閣以來研究會と政友本黨との關係は特に深くなつたけれども、永年の行掛り上政友會と緣故の淺からざるものも頗る多い。昨今幹部は漸く憲政會と相親むやうにはなつたが、外の人達までを此の方に引つ張るのは、今日決して容易のことではない。是れ從前の如く幹部の統率が意の如く運ばなくなつた所以である。

斯くて我々は、現在の研究會員中には幹部に倣うて輕々に憲政會內閣を助け難いと云ふものが尠くないことを知らねばならぬ。一刻も速に現內閣を倒壞せでは居れぬといふのもある。但しこの中でも有爵議員と勅選議員とは其地位必しも同一ではない。有爵議員の多くは、例の互選規則の結果幹部のお蔭でやつと議員になつた者であり、從てどうしても幹部の意に反すること能はざるものである。之等の人々は何と騷いでも、イザといふ場合には必ず幹部の言ふことに折れてしまう。勅選議員に至ては左うは行かぬ。議員たる地位に永久の保障があるので中々

暴息が覺い。現に今度も改選の最中に騒ぎ出したので、[illegible]傷に幹部も弱つて居る次第である。有爵議員中にもえらさうなことを言ふ者はあるが、之等は動選團に對する幹部の勢力の強からざるを見越し、其の尻馬に乘つて騒ぐものに過ぎぬ。

いづれにしても、動選團が中心であるといふことは、[illegible]の內訌が相當に根蔕深く又相當に續くものたるを思はしむる。外形上一旦おさまつたとしても、事に應じて今後しば〳〵動發するものと觀ねばなるまい。

× × × × ×

幹部の態度に不平なら、赤池濃氏が先蹤を示したやうに斷然脫會したらよからうと考ふる人もあらうが、さうは往かぬ。有爵議員の斯くし得ざるは言ふまでもなく、動選議員とても、研究會を背景としたればこその勢力で、之と絕つて從來の如き重みを保てるや否やは覺束ない。幹部の態度に不平をもちつゝ猶且つ會に對して十分の未練がある。是れ即ち斷然たる破裂に到らず、ながく陰慘なる內訌を續くる所以である。

さうすると結局問題はどうなる。私の觀る所では、幹部の方は、井上の入閣は個人の資格だとか何とか云つて不平組の鋭鋒を避け、漸次思ふ壺に全體の空氣を導かんとするだらう。不平組の方は、何處までも井上の入閣を個人關係に押しつめ、今後[illegible]些こも政府と交渉に立たざるを得ざらしめたことにきまつたい。共に從來の行掛りと實際の利害から打算し、虚々實々の政策を弄して相手方を自分の思ふ壺にはめ込まんとするのである。全然利害の爭ひであつて、理論も何もあつたものではない。

× × × × ×

尤も一ト通りの理窟は双方でならべ立てて居る。併し其のならべる理窟は、双方とも筋が通うッて居ない。幹部派は曰ふ。若槻に代ふるに誰を持つて來たつて、今日の政局は安定するものでない。そんなら現在の內閣を助けて國策を遂行せしめた方がいゝではないかと。併し助けるといふことは、入閣するといふことではない。入閣しなくつたつて助ける道は幾らもある。況んや個人の資格に於ての入閣なりといふに於てをや。不平組は曰ふ。わが研究會は是々非々を傳統的の主義とする。如何なる政府に對しても不即不離の關係に立つのが本筋だと。會として不即不離の關係に立つべしといふことが、何故に個人の資格に於ける會員の入閣を非とするや。且是々非々主義といふことは、本來上院議員たる各個人の正に持すべき當然の態度で、團體としての是々非々主義はその從たるべき筋のものである。然

るに研究會に、會としての是々非々主義にも實はあまり出會でなかつたが、特に各會員に對つては、殆んど是々非々の自由なる態度を許さなかつたではないか。此點に於て私は、今更是々非々などいふを聞いても、その誠意を信ずることは出來ぬ。時としてはその眞の意味を了解して居るかをさへ疑ひたくなる。

要するに研究會の内訌は、正々堂々たる理義の爭ひではない。下らぬ利害の爭ひに外ならぬものと觀ていゝ。

× × × × ×

貴族院の使命は本來嚴正批判に在る。從て貴族院議員は絶對に是々非々でなければならぬ。衆議院は制度上立法豫算の協贊を任務とし、政治上政務執行の責に當るの使命をも有する。從て小異をすてて大同に合し、一大政團を爲すの必要がある。統制上各人に是々非々の自由なる立場を許し得ざるも致し方がない。而して研究會在來の態度は、表に是々非々を標榜して、その實全く政黨的統制にまねて所屬議員の自由を甚しく拘束してゐたではないか。固より上院の團體に在ても、便宜上多數の一致する意見を豫めまとめておくは妨げない。多數者の決議を以て少數者に服從を迫るのは、根本的に貴族院本來の使命に矛盾するものである。

× × × × ×

何れにしても最近の研究會の態度に、餘りに上院本來の使命と遠ざかるものであつた。今度の内訌にした所が、下院の政黨を學び不當の勢力を弄ぶことに興味を感じた連中が、その不當の欲望を都合よく達せんが爲めの爭ひに外ならぬから、何れを何れと判斷するわけにも行かぬ。所謂五十歩にして百歩を嘲るの類として、全く之を一笑に附して可なりと考へる。たゞ若槻内閣が世の期待を裏切つて上院の一派に醜き秋波を送れることは、多くの批評家のいふが如く、何と云つても近來の一大恨事である。

× × × × ×

附記　研究會の規則には、會の決議に從ふを會員の義務とし、而も萬已むを得ざる場合には除外例を認むるとあるさうな。併し除外例を求めても幹部が認諾を與へなければ何にもならぬ。從來之が全く空文に屬して居つたといふので、一部の間には個人の自由意思をもつと尊重しろと主張するものもあるとか。併し之も現幹部に反對する爲めに援引せらるるに過ぎぬので、万逆規則が改められ、議員自身が本來の使命に覺醒せない限り、結局幹部專制と從てまた幹部爭奪とはや今の所容易に熄まぬであらう。

獨逸 ショーペンハウエル著 富增平藏譯

三版

人生達觀

▼四六判總布製・貳圓七拾錢・郵稅十二錢

最高等の占ひであり、豫言であるのは、偉大な哲學者の人生觀である。そこには運命の大きな底流れが示され、不可測の消息が明斷され、人生の根本的なからくり、仕掛けが解體され、現實と未來に對してどう歩み、どう進むべきかゞ敎へられ、失はれたもの、搜されて居るものゝ何處にあるかゞ指されてゐる。

獨逸 ショーペンハウエル著 增富平藏譯

七版

處世哲學

▼四六判總布製・貳圓八拾錢・郵稅十二錢

ショーペンハウエルの處世論は類書中の最尊である。偉大なる哲學者「人間を知れる」者としての著者が晩年に於ける深遠の觀察と老熟の思想とを擧げて人間處世の妙諦を說き人世に於ける明闇、幸不幸、安危、得失等の根源を論じて一大秦鏡を懸ぐるが如く、譯文亦明快を極む。

白耳義 マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

二十版

死後は如何

附錄「交靈術とは何ぞや」 壹圓九拾錢 郵稅十錢

人間の死後は果して如何、絶滅か、永生か、將た『醒むる無きの睡眠』か、既成宗敎は其の權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し、而も闇黑の中一道の光明あり、泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し將に輪廻轉生の眞理を說かんとす。現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議な心靈の現象に動かされ、其神祕的幻想と、聰明なる理智との高潮に乘じて此大問題を解決せんとしたる者即ち此書也。

駒澤大學教授 高橋五郎譯

ベーコン論文集 十六版 貳圓參拾錢 郵稅十二錢

セネカ論文集 訂正再版 參圓 郵稅十二錢

エピクテタス遺訓 訂正再版 壹圓九拾錢 郵稅十錢

東京本鄕西片町 玄黃社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

文學博士 幸田露伴先生著

洗心廣錄

川村清雄畫伯裝幀

四六判六百五十頁 總絹裝幀箱入

定價金三圓八十錢也（送料十二錢）

新刊

巨匠の手に成る隨筆の完璧―清興俗腸を洗ふ

文境の巨材露伴先生、こゝに博大の識と、清高明朗の風懷を渾然珠玉の文に流露して「洗心廣錄」の一卷を世に示さる。全卷六百余頁、古人を評してその面目を躍如たらしめ、風物を談じては自然の眞美を描出し、修養を說きては人世の樂地を指示し、繪畫文章の道を論じては藝術の秘奥を傳ふ。廣汎多面の趣味才識、絢爛百花の妍を競ふが如く、壯美一望に萬景を賞するに似たり。

その滾々たる興趣は洒然として讀過人間の俗腸を洗ひ、始めて人生の至樂に會するの感あらしむ。實に現代隨筆の完璧、先生を措て他に求むべからざる名著にして裝幀亦優麗善美を極め正に書齋の光輝たり。切に一本を薦む。

東京日本橋

至誠堂

振替東京一七一圖



明治煽情文藝概論

大衆文藝の種類變遷及藝術價並
藝術小說の通俗價及非藝術性

日夏耿之介

○名稱の詮義

以前は通俗小說と云つたが近頃では多分作家側から稱へはじめて大衆小說、大衆文藝といふ。

ポピユラーといふ言葉には善惡二種の意味がある。ピープルと語源を等しうする事實から推測しても考へられる通り、いはゆる民衆的のといふ程の意味と、も一つは民情に媚態を呈したがるといふほどの意味である。辭書によると英譯プルタルコス英雄列傳のカイウス・グラツクスの條に於けるポピユラーの用語例がそれであるといふ。

そんな詮義は何れにしても、今日のわれらの用語例及び語感から考へてこのポピユラーの譯語として普通使用せられる通俗云々といふ語を聞けば、價値低下の感情の方が良い意味よりも強い。民衆的云々といつても、如何に合理的立場を與へて考へても、ともすると（かの文化云々と等しいやうに）反語的に安つぽいあくどいもろい粗雜な一夜漬の速製品を指したがる。民衆藝術といへば、ロマン・ローランの飜譯が背景を與へる以上に實際の鄕土提供品から來る聯想で通俗的なる腰を下しすぎたる、お粗末なる小說やら繪畫やら演劇やらを漠然と考へたがる。民衆詩人といへば、拙劣、なお粗末すぎる、無知で、無反省で押しばかり強い「小說家以前」の下端文士を聯想する。根本の語義から考へて實によろしくない聯想ではあるが、これ亦現實の

郷國の提供品が正しくさうなのだからこの聯想には現在のところ、理も二理もあるといはねばならぬ。

・切り叫ばれた民衆主義や民衆藝術が下火になつたのは飽き易い民性のためのみではなくて、その表看板をかゝげて專門家面をして突ん出た連中にそも〳〵藝術價が缺ける虞が餘りに多すぎたからである。文化主義に清新にして高雅、思索的にして穩當なる思想上の本質性のひゞきを感じたのも束の間であつたとひとしく、民衆云々の形容に一味の嶄新を感じたものも忽ち又失望を感じて退いたのは一にこの自稱專門家輩の愚劣に基くのである。更に進んで云へば民衆一般そのものの教養人としての資格の低劣に基くのである。

ここで、右のやうな誤解を避け民衆文藝の名字を忌んで、大衆云々としたは賢いけれど、畢竟これは名目の上の改稱で內容の吟味ではない。否、若干のその方面では新企圖が現在多少は覗はれるけれども、大體から見てそれ程とり立てゝ論議すべきほどの新味はない。若しありとすればそれも今日只今以后の問題である筈だ。

か、民衆にしても大衆にしてもそれらの文藝が、在來の名稱で通俗文藝に屬するものであることは、今日の狀態から見て事實である。この通俗たるべきポピュラーたる言葉に二樣の意があるとさきに云つたは、詮ずるに所謂通俗文藝の內容にも亦右の兩極があるといふ事に外ならぬ。

さて、更に又煽情云々の語を並べて見よう。これは近く東日煽情文藝云々のごとき坪內博士の用語例もある通り一部の人には用ひられてゐる言葉で、煽情小說はすなはち黑淚香の口癖にした Sensational Novel の譯語であるか、大衆云々が對象の質量から命じた名稱であり、通俗の語が對象の容積とその質の低下とを示唆する名稱であるかの如くに感ぜられる言葉であるに對し、煽情はセンセイショナルにして、それ自らの特質を最も端的に熾烈に云ひあらはした言葉で、これ亦センセイショナル即質の低劣といふ聯想が必ず伴ふもののあるは止むをえない。

しかし、煽情的なるもの穴勝ちに悉く質の低下を意味するとは云はれない。こゝにもいはゆる通俗小說の妙味が含まれてゐるものである。すなはち、所謂エ・スリー・デイズ・センセイションにすぎないのか、永久のセンセイションとも云はるべきものを持つてゐるのかどうかといふところに最高の意味のセンセイショナル・ノヹルの價値批評のカン所があるのだが、事實はその樣な高所を目指してゐるのではなく、凡そセンセイショナルなる文學中の低劣的要素を集成して見る事にすぎないのである

[illegible]
[illegible]たる要件を[illegible]に[illegible]一の目的として場面の轉化、人物の置換、題材の目新しさ等に腐心するが故に、又、民衆的大衆的若くは通俗的といふ如き性質指稱にも煽情的といふ形容に於て一層概括的にして本質的説明が可能であるを思ひ此場合此語を假用する事にしたのである。

○煽情文藝の種目

先づ明治文學史を縦斷してこゝに所謂煽情的なる文學の分野を明らかにして見よう。

あらゆるセンセイショナルなる文學が畢竟何等かの意味でキュリオシテイー・ハンテイングを一圖に直截に目的とする事は明白であるが、その廣い意味のキュリオシテイーの種類によつて煽情文學にも異同がある。たとへば、冒險小説といい、探偵小説又は犯罪小説といひ（この兩者を一視するは不當であるが今の日本では殆どそれが同一種に考へられてゐる）家庭小説といひ立志小説といひ、戀愛小説といひ、少女小説といひ、悲哀小説といひ撥發小説といひ傳奇小説といふ、これらのさまざまな名目の中には當然合併せられるべきものも交つてゐるが、多くこのやうな名前で在來呼び慣はして來たものの大部分は總

[illegible]
[illegible]小史と[illegible]

が、たとへば戀愛小説といふ名目の如き、如何なる[illegible]小説とて戀愛が作の[illegible]になつてゐる時は、他の[illegible]小説の、社會的關心を生命とせる社會小説に對して、これは戀愛小説であるには相違ないのであるが、煽情小説種目における戀愛小説とは、例へば特更に「戀愛小説 血染のハンケチ」といふごとき割註をあたまに被らせた程度の戀愛實感のキュリオシテイーを必要以上に極端にあくどく誇張したものを指すのである。從つて、右の悲哀小説とか冒險小説とかいふ種類分けは性質の一部分によつて命名せられたから生じたのであつて、その種類分けの名稱が直ちに作の本質を説明するほどの重要性を持つてはゐない。

そこで、右のやうな通俗なるさまざまの文藝を大體次のごとくに分類し主なる作者又はある作品の作者をこれに配當する事は可能であらう。

明治煽情文藝種目表

附作者概表

一　冒險小說

- 探險談
- 腕力小說
- 考古小說
- 海洋小說
- 山岳小說

作（譯）者

井上勤　森田思軒　押川春浪　磯萍水　江見水蔭　櫻井鷗村　大澤天仙　福田琴月　黒田湖山　武川櫻机　宮崎來城　菊池幽芳　水田南陽

二　探偵小說

- 犯罪小說
- 怪奇小說
- 戰時探偵
- 外交奇譚
- 探偵實錄

作（譯）者

黒岩涙香　遠藤丸亭　菊亭笑庸　榎本破笠　二柴生　江見水蔭　水田南陽　千原伊之吉　森澤浩大　伊原青々園　徳富蘆花　長田偶得　山田美妙　須藤南翠

半井桃水　高島藍泉　假名垣魯文　條野採菊　河竹默阿彌　須藤南翠　塚原澁柿園

三　傳奇小說（戯曲）

- 歴史小說
- 怪異譚
- 撥髮小說
- 草雙紙

作（譯）作

村上浪六　石[illegible]之助　松原二十三階堂　西村天囚　武田仰天子　饗庭篁村　宮崎三昧　石田寅彦　岡本綺堂　伊原青々園　福地櫻痴　渡邊霞亭　宇田川文海　遅塚麗水　松村春輔　依田學海

- 戀愛小說
- 立志美譚
- 滑稽小說
- 諷刺小說

山口湘汀　緑川克徳　三宅青軒　川村西男　徳田秋聲　岩谷小波　高橋太華　木村小舟　武田櫻桃　田山花袋　山田美妙　前田曙山　柳川春葉　小栗風葉　伊原青々園　山田旭南　福地櫻痴　生田葵山　中村春雨

[illegible]（[illegible]、少年小說、少女小說、宗教小說、教調小說）[illegible]者

[illegible]　[illegible]　[illegible]　村井弦齋　小杉天外　半井桃水　堀口新泉　南新二　幸堂得知　瀬戸半眠　武田仰天子　德富蘆花　亭村北星　大倉桃郎　大橋乙羽　黒田湖山　竹貫佳水　泉斜汀　渡邊温　尾崎紅葉

五　政治小說（政治小說、社會思想小說、社會主義小說）作（譯）者

藤田茂吉　木下尚江　尾崎庸夫　井上勤　牛山鶴堂　須藤南翠　矢野龍溪　東海散史　服部誠一　織田純一郎　末廣鐵膓　宮崎夢柳　小室案外堂　中江兆民

右の表を見て、逍遙、紅葉その他の加はるを異とするものがあるかも知れぬが、逍遙はリツトンが小說「リエンチ・ゼ・ラスト・オブ・ゼ・ローマン・トリビユーンズ」の譯本「慨世士傳」の譯者として、又、紅葉は少年小說「俠黑兒」の著者として參加せらるべきである。（少年小說は[illegible]以上の少年主人公の小說である。）

通俗文藝を分つて右の如くにしたは、いふまでもなく明治のそれを分類したのであつて、一般大衆文藝そのものの本質を述べてこれに適當の分類を本質的に行つたのではない。

若し、讀者多き作者と然らざる作者との二方面よりこの分類を試るとすれば、夏目漱石の如きは當然第一の種類に加つて通俗作者の一人とするが至當であり、森林太郎のごときは後者の運命的なるものの代表人物であらう。

が、問題は如何の點までポピユラーであるならば通俗的であるとするのか、讀者の鑑賞理解の程度を如何の點に置いて通俗非俗を決定するのかにあるのだが、その時代として進步した藝術の形式內容を完備した作者なら、この時代の進步させる藝術

味解者即ち不完全たる文化人の大多數によつて占領せられる最も閑暇の小說讀者、文學讀者の世界には不向きであることはいふまでもないから、結局は高級作者ほど非讀者向で、低級作者ほど一般的であるに相違はないので、この場合讀者向き、非讀者向きに讀者を對象としての目安があるわけはなくとも藝術作品の高下の判定の上に標準が混れてその高下に準じて讀者のたかが反比例すると思へば間違はない事になるから結局は讀者の數及びその質を考察して一應を辨別しうるわけである。

が、かくいふと次の如き常識的質問が出るだらう。漱石は明治文壇の巨人であり、文豪である。然るに讀者がかくも多いのは何故か。沙翁は世界の詩聖である。然るにかくも夥しき讀者を世界各國各時代にわたつて有するはこれ又何故かと。沙翁が各國各時代にわたつて讀まれるのは眞に傑作であるからだ。沙翁の大は一人のトルストイの反駁によつて微動だもしない。が、大部分の各國各時代の讀者がもてはやすは、一には世界の大詩聖の傑作であるといふ先入見により無批判的に盲從的に流行に追隨する如き心理で喰らひ試みるにすぎないので、二には沙翁のテクストのコンストラクションのメロドラマ風の形態に隨喜するので、このメロドラマ風の個所をのみ淺薄にも味つて見て、以て沙翁を味了してしまつたやうな盲目的安心と誤ひられ

たる知識的虚榮心を滿足してをるもの、これが昔から今日に及ぶ大部分の沙翁の讀者の本體なので、一般の讀者にとつては沙翁は依然としてスフインクスであり、未知の世界である。さればこそ、眞摯なる一人の沙翁文學の研究者トルストイによつて投げられた大膽な宣言が、一たびは歐洲の評壇に少からざる動搖を與へたので、よしんば難語を了解し得ても故事に卒業しても沙翁の難解は依然として些かも除去されはしない。此處は少數の文學の正解者のみがよく正しく味解しうる聖地である。

漱石の作品が明治から大正にまたがる小說の中で卓れたものの一つであるに相違はないが、かれの世界は鏡花のごとく詭異でもなければ荷風のごとく逍遙的でもない。かれの思想は當年の自然主義者のごとくに自ら新見地に立つたと意識せられたものでもなければ、かれの文學趣味は新興詩歌に冷評を浴せる以外に鮮明な態度を決しえなかつた程度に尋常であり保守的であつた。かれの小說が面白かつたから流俗に弘通したのであるが、面白かつたのは一般教養階級に判り易かつたからで、判り易かつたのは明快の文脈と趣味の傳統性と低徊的遊戲性と眞摯の觀照態度とが卓れてゐる上に何等異常の立脚地に孑立したものではなかつたのが條件の一つで、われわれは、明治的なるものの判定の重要部分をかれの細緻な心理描寫と神經質な感情思

男の説明を[illegible]た新感情、苦悶時代の新思想の発生を深刻にあの小世界の中に描寫することは出來ないのである。すなはち、古きもの一般的なるものを最も鮮明に懇切に穏當に而して同時代的に解釋した人の記録として卓れた位相を持ちうるけれども、漱石には創作の筆をとり初めた最初からいつも古い殻がこびりついてゐたのである。甘い會話をする當世風（三四十年代風）の書生や令嬢が出て來るが、それが悉く一時代古い香を持つてゐた。同時代になり切つてゐなかつた。にもかゝはらず同時代的らしく考へさせて粗笨な讀者を感心させたのは、かれの忠實な熱心な緻密な心理描寫のおかげに外ならぬ。だから、漱石は日本のあの時代でこそ卓れた一人であつたが、此頃誰ぞやが愚劣にも考へるやうな同時代の歐洲文壇に出したら非常に卓拔な一人の作家であらうなんぞ決してありはしない。漱石の諸作よりも鷗外の「高瀬舟」の方が卓れてゐる。「高瀬舟」の文體の妙致は一般讀者には一寸判りにくいが、漱石の「心」や「彼岸過迄」の缺陷を指摘する事は難事ではない。

啻に漱石のみではない。紅葉も亦さうである。此二人のみでない、逍遥もさうである。かの鋭感なる二葉亭すらも「其面影」では極端に凡下に墮俗してゐる。逍遥や紅葉や漱石は、作家[illegible]二立つと、どうして[illegible]鷗外及びその他お情卓れてゐて、逍遥その他[illegible]ふのではなく、ひとしく明治文學者中の卓れた作家等であるが、一は普遍的にして一は特異的な世界と思想と趣味と感情との生息者、所有者であつたといふところから明らかに區分されうるのである。紅葉、漱石等はその「金色夜叉」や「我輩は猫である」の類型描寫手法の作品によつて代表せしむると最も廣義の意味にひろげて明治の大衆文藝の系統にとり入れられるものであるとしても必ずしも見方によつては失當ではないのである。

が、爾く明治大衆文藝をひろく考へてしまふと何時しか何處までが大衆物で何處までが藝術物かその間の差別を判然と立てることが難かしくなる怖れがある。同じ紅葉のものにしても「多情多恨」や「不言不語」は厳然たる卓拔な藝術物であるが右の「金色夜叉」は大衆物に近いといはれぬだらうか。筋の運び方、その筋を運ぶ精神、人物の描寫の重點の置き方等を見ても後者が新聞物であるといふ關係もあつて、性急にして藝術的に無知無神經な、只徒らに刹那の低級興味の轉換と續出とを希ふ讀者をつひ念頭に置いてゐるところから自づとさういふ傾向

の作品になつてゐるのは止むを得ない。紅葉一代の作集を見て、新聞小說に執筆した彼を考へれば誰もさうなる方が自然だと思ふであらう。その「金色夜叉」は紅葉の中斷せられた將來を幾分の失望に導きかけたものでこそあれ決して佳作ではないのである。して見ると、藝術小說も書き大衆物も書け、寧ろ一歩あやまつ時は決定的にその方に陷つてしまひさうな紅葉ではあつたが、（今日迄生存したと假定して嚴乎たる藝術小說の領域に高踏しうる幸福なる明治の所謂文壇は何人あるだらうか。）少くとも殘されたる作品だけによつて判斷をして彼は嚴密な意味の大衆作家ではないが大衆作家の素質夥しき藝術的作家だつたとはいはれよう。而して「金色夜叉」は、今日のいはゆる藝術物の小說作者が敢て試みてゐるやうな大衆物的素質の勝つた作品であつたのである。紅葉を去つて同時代の諸作家に到ればその危惧が一層甚しいに驚く。

秋聲のごときは運命的に大衆物の拙劣な作者であつたが、生存上の必要から新聞物をしばしば試みたに係はらずその方面では悉く失敗してゐる。荷風の如きも外遊もせずに詩韻的素質を養の手法と柳浪小波櫻痴等の師友を心のたよりにして三十年代の文壇に空しく書き且遊んでゐたら立派な田村西男の兄弟分になつて今日の閑雅と高技との妙境に達しはしなかつたらうし、よしんば西男程度でないにもせよ、著しく見劣りせらるる地位にしか落付けなかつたに相違ない。荷風にとつて外遊は內なるあるものを生かし出す絕好の機會であり、內なる他のあるものを亡ぼしつくす唯一の手段であつたのである。苦心して自ら花柳小說と名のつて反抗的反語的隱人的心境から「おかめ笹」の類を書いても、譬へば水心ある者が投身しても本能的に身を泳がせて死ねないごとくに、到底典型的なる大衆物は書けないのである。

鏡花は生れて特異の心境の所有者であつたから當年流行の通俗物に走りはしなかつたが、驚くべきその天分と同時に微笑まるべき無知と淺みと時代錯誤とを同時に持つてゐたから、その讀者は風葉のごとき書生でも抱汀ごとき丁稚でも幽芳ごとき女書生でもなかつたけれど、圈外のそれのごとき高級の讀者は寥々たるもので多くはこの特異の作風に讚美する高下甲乙打ち交ぜた雜多の讀者の中からいはゆる鏡花好きなる讀者のみが選び出されたので、當年に於ても今日に於てもさうだが、謂ふ所の鏡花信者は日蓮狂の善男善女と同程度で一流の怪談興味と一風變つた江戶趣味と下町情調と任俠好きとに只もうわけもなく隨喜の淚を流す鏡花イチス患者で、最もよき意味で鏡花を買つて居る高級讀者は、當代何人もよく表現しえざるユニークのロマ

ソチック[illegible]しながらも一種[illegible]お好愛して他の一面は吾と自分でお念頭に置いて去りながら鏡花を好愛してゐるのである。鏡花物の中には藝術小說の天質と大衆物の素質とが渾然と同居しながら、これが彼の特異の異色で蔽はれてゐる。彼の通俗性は不思議な因縁中に介在してゐる。

以上の例を擧げて知るごとく、通俗物は興味中心の筋の運び方、人物の出し入れ及びその創造法を敢てするのでなければよく滔々たる天下大衆の一顧をも希ふわけにはゆかないのであるから、勢ひヤマ澤山になりケレン多しとなつて無益な洪や贅肉のごとき道德思想やとつてつけた樣な宗教觀が這入らざるを得なくもなり、通俗物といふ世界の埒内でよく成功すれば、變轉する難場面とカメレオンの如くに筋のために變化を强要せられる性格人物と藥味澤山の涙崇とサツカリンと宗教道德任俠義憤のピリリと來る唐カラシとの間に在つて巧みに自然性を保ち現實性を支へ持つてロマンチツクなる一種の類型の藝術を作り上げることに成功する。寫實的にロマンチシスト、又はロマンチツクの寫實小說家にこれが多い。（後章坪内逍遙の「小說の主派」の項參照）

普遍的であるといふ事、これが先以て通俗物作者の中心生命であつた。今後とても決して大衆作家はこの的だけははづすわ[illegible]味に溺を追ふごとくに[illegible]しながら、或は作[illegible]に或はプロテスタントに或は惡魔主義に或は國粹主義に或は社會主義に或は江戸趣味に或は人道主義に舵を握りかへ／＼して變遷を重ねた。その變轉の間に煽情文學そのものの本質の上に幾分の變化又は進歩の跡があつたらうか。

○煽情文藝の展開

一　政治小說

明治文學は翻譯とその影響史とであるが、その最初の何頁かを擔任したものは政治小說であつた。

彼等プロシヤ軍政の憧憬者やフランス文明の謳歌者やイギリス政治組織の嘆美者などがとり入れた新輸入品のなかで、政治軍事產業の施設の方法精神と物質科學の知識とが特に長足の進歩をしたのは、新興國のならひでもあり、十九世紀中期文明の吸收者として當然の歸結でもあるが、それにしても德川文明の殆ど一時は表面的にでも跡方なく崩れてしまつた觀があつた程の維新當初から鹿鳴館時代に及ぶ歐化主義時代に殘つてゐる文

學は化政度から維新明に入つた德川王朝の爛熟文學で、假名垣魯文を代表者とする山々亭有人・二世柳下亭種員・笠亭仙果等が生殘つたといふのみであるから、新時代の生れた讀者の愉悦をかふことが叶はぬのみか新時代の青年者流の憫笑の對象となることと固より思ひもよらず、たゞ一般民衆はその俗惡の臭味と諧謔の諷刺とを喜んでこれを當代の代表作家とし、これを當年の代表的民衆文學家と稱した。が、これらは、俗趣味に淫して開化思想に遠くから冷嘲半分に迎合したのにあるから、その諷刺その皮肉は諷刺のための諷刺か、皮肉のための皮肉で、その諷刺には大なる熱情もなく、その皮肉に鋭い批評があつたわけではない。

しかし、これを新興の政治文學に比べると如何かといへば措辭の巧妙に於て、曲折ある感情の自由（あるひは放恣すぎる）の表現に於て、新しき民權文學は舊き戲作文學に遠く及ばぬのである。

たとへば魯文が明治になつての作「西洋膝栗毛」といひ、「安愚樂鍋」といひ、「胡瓜遣」といひ、その諷刺はくすぐりの程度を出でず、その精神は理想も主張も定かならぬものである上に、三馬を眞似ても一九をしたつても馬琴に流暢をそゝいでも種彦によつても、その何れにも及ばず、しかもその何れも就中一九・三馬を倣ひ試み、福澤諭吉を文字り、「西洋事情」を基礎とし「窮理圖解」を藍本とし岡丈紀の譯本を手にし常に

「牛肉を食ビールを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ます」（「膝栗毛十一編の序」）

の流儀の文章をば書いてゐたのである。今、「魯文珍報」第五號（明治十一年一月二十日發行）を檢するに、

○日本劇場の幕面附り水戸黄門略記
○和澤上假兒末晴又寄魯文翁　竹柏子
○奴人車頌詩　同氏
○詩歌狂文
○造物機關　前號の續き
○長夜の怪夢　竹田早苗
○敗果の話　中坂まとき
○土井兵衛史第二回政治の部
○怪惡娘與傳第四回俗永齋女作江翁新綴

等の目次で、第一のは演劇史。造物機關といふは漢文のつゞき物小說で淸々道人と署名しており、

若得絶世美人一而作雌房一　何死也甘心　左思右想　不覺下三更一　青衣乃進臥房一　把手撫之　種々出來過日多事一　到二此間所在一云々。

のごとき文體[illegible]一は

日本一數（テハナイ）裏店社會の男女不同權なるは未だ開化の熟せざるものあらん何ンだ此奴ら辨羅迷我利々々亡者のスットコ野郎が横着放縱無礙無茶苦に喧嘩するのを自由自由と心得たるは未だ知識の熟せざるものあらん云々

のごとき下手な諷刺文、「土耳其通史」はトルコの歴史で、「春窓娘學校」は爲永張りのつゞき物小說である。

戲文及びその一派の社會的關心はその諷刺の淺薄なると比例して輕浮を極めてゐるが、これが一般讀書界の夥しき歡迎をうけたのは、その表現法や文體に感情や趣味に舊來の因習が多く容易に解しやすきがためと、新たに採り來る材料が「西洋事情」やら新歸朝者の談話やらを骨として見たところ珍らしさを衒に誇つたのでその皮肉やくすぐりやとともに俗耳に入りやすく俗解を招き易かつたために外ならぬ。畢竟戲文一派は德川末期頽滅文學の最後の殘黨であり殿將であつた、しかも決して力量卓れた殘黨殿將ではなくして、當時の風俗畫の說明、文明史の側面觀としての土俗學的興味以上に出る文學史的重要を持つてはゐなかつた。

德川末期文學殘黨でかの戲文と對立し然も戲文より遙かに藝術心の卓れたものがあつたのは河竹默阿彌であつた。

[illegible]になつての作は特にいはゆる「散切物」または一名を[illegible]はもなる物が明治六年から二十七年までの間に（河竹繁俊の記錄によると）十九篇あり、十九年の「西洋噺日本寫繪」とか十年の「女書生繁」とか十二年の翻案物「人間萬事金世中」とか十八年の「水天宮利生深川」とか二十一年の「音聞淺間幻燈畫」とかはこれ亦土俗的興味以上の何ものをも、默阿彌劇史に於てすらも、持ちえないもののみで、時勢に追隨せんとする彼の企ては外態だけで内部これに伴ふには彼はあまりに德川的であり完成せられたメロドラマの巧妙家でありすぎた。

これら殘黨文學者の社會的幾分の關心から去つて新興政治文學者のそれに移ると遽かに全く變つて、西南役後フランス自由思想が急激に輸入せられて、ルウッソオ、ボルテイル、モンテスキウが祖述せられ國會開設の大詔に勢ひづけられた青年者流の政治的夢想は、實際政治の論評を試みることの自由を奪はれてゐるところから、文學の形式をかりてこれを表現しやうとしたもので、こゝには舊來文學に對する不滿が新政治文學の形式を喜びうけ入れた事實もその原因の一をなしてゐる事を見のがしてはならぬ。

松村春輔が戊辰役やら井伊閣老事件やらを取材して一種の戲

夜物語を書いたのに明治八九年の交であるが、その「夜占夢物語」といひ、「新世櫻田紀聞」といひ一般讀者の歡迎をうけたのは單に事實の興味に基くもので職作に新解釋を與へた譯でも採菊の史眼があつたわけでもない。さきの魯文が「假名讀八犬傳」の作は恰も明治元年で、かの種彥が「白縫物語」の續稿が出た時であるが、二年には「西洋膝栗毛」と「胡瓜圖解」が出、五年には「百代物語西洋機械」や「大洋新話」が、六年には「世界都路」が七年には「佐賀電信錄」が八年には「現今支那事情」が、又、高畠藍泉の「日本女教師」や「權兵衛種蒔論」やは七年に、「與形價物名實令」は八年に、佐伯白米の「極端開化」は八年に出てゐる。この松村春輔が作の出た八年頃までに既に南部義籌の「修國語論」が出て洋字採用論あらはれ、西周が「明六雜誌」にローマ字論を掲げてもゐれば、スマイルズの「自助論」譯本や神田孝平の演劇改良論などが出てもゐる。西南役前後から自由思想の横溢と官憲の壓迫との具體例は既に八年末廣鐵腸が曙新聞在社中禁例に處せられた時にはじまり「采風新聞」や「めさまし新聞」の發刊は新聞紙條例の發布と前後し、「穎才新誌」「花月新誌」の刊行は紀尾井坂の變と隣りし、村上佛山の死は新約聖書の完成と時を等しうし、中村正直の「西國立志編」に啓さまされた少年はやがて、ルウッソオの「民約論」やスペンサーの「社會平權論」やに刺戟されて、「萬國新史」、「泰西新論」、「西洋輿地誌略」、「西洋事情」、「人身窮理」、「萬國公法」、「博物新論」、「政體大意」、「立憲政體略」、等の政治歷史地理學上の新著による智識が根本となり明治十二年リットンの著書織田純一郎が「通俗花柳春話」の譯者となつた。同じリットン小說では坪内逍遙遊人譯「開卷悲憤慨世士傳」(十八年)、磯野徳三郎譯本「サクソン王の名殘ハロルド物語」、尾崎庸夫、藤田茂吉同譯「繫思談」(十八年)、その外「ポンペイ最後の日」の邦譯本「綺想春史」、政治小說ではないが同じリットンの「夜と朝」(二十一年)は森田思軒の譯になつた。

その「夜と朝」に森田思軒が序をものしてゐる。曰く、

近ニ我邦小說ノ趣向將ニ一變セムトスル乎。織田氏譯スル所ノ「花柳春話」之レガ端ヲナセリ。而シテ是レ實ニリットン氏ノ「マルトラバース」ナリ。而後西洋小說ノ我邦ニ譯サル、モノ紛然群起セリ。然レドモ其ノ文體ハ率ネ東洋ノ舊ニ仍リテ。未ダ生面ヲ其間ニ開クモノアラズ。藤田氏ノ「繫思談」ヲ譯スルニ及ンデ。造句措辭別ニ一機軸ヲ出ダシ。或ハ艱奥ニシテ通ジ難キモノ無キニ非スト雖モ。其ノ原本ヲ臨ル諸嚴精微。今日無數ノ周密文體ハ其ノ紀元ヲ此ニ遡求セザルヲ得ズ。而シテ「繫思談」ハ亦タ實ニリットン氏ノ「ケネルム

チーンダリー」ナリ。何ゾ其書ノ[illegible]ナルヤ。[illegible]氏ガ政治世界ノ大勢ヲ觀ルニ。ビーコンスフォールド伯ヲ少年ノ日ニ知リテ。之ヲ愛國黨ノ首領ニ置ク。グラッドストーン氏ヲ下院ヨリ拔テ。アイオニアン群島に使セシメ。其ノ識鑑毎ネニ常人ノ先ニ居ルナリ。然レドモ復タ安ゾ其ノ著作ガ身後遠ク我邦ニ入リテ毎ネニ文學世界推移ノ先ヲ爲スヲ知ラムヤ。云々

右の序文中に見えるビーコンスフィールド伯ディズレーリの作は關直彥譯本「春鶯囀」と十九年の「三英雙美政界之情波」（渡邊治譯）とがあり、スコットはアイヴアン・ホーの譯本が牛山鶴堂譯「梅蕾餘薫」があり外にはディズレーリ傳の「經世偉訓」（尾崎學堂著）があり、逍遙の沙翁譯「自由の太刀餘波鋭鋒」一名該撒奇談」が出たのは十七年であるが、和田垣謙三は十二年の夏箱根に暑を避けて漢文譯のキング・リヤ「李王」を完成したが出版はしなかつた。十九年には同じシーザ劇が篤林學人、天香逸史戯譯「羅馬盛衰鑑」となつて上梓せられてゐる。

フランス小說はデューマの譯本が「自由の凱歌」、「西洋血潮（ニシノウミ）小暴風」等となり、小川忠武譯「佛蘭西二人皇后」とあらはれ

一[illegible]
り、作者は宮崎夢柳、[illegible]、二十年には[illegible]
學海居士評點の「慨世史談斷蓬奇縁」四巻が上梓せられたが、これはエルクマン、シャトリヤンの「マダム・テレーズ」の譯本で、卷頭にフランス國歌の譯歌を揭げたのはこの種の國歌譯の嚆矢であらうか。その外にエーンスウォスの「倫敦塔」の譯本「悲風慘雨」は愛花仙史の意譯で、鐵腸居士の譯述小說「雨中花」やヂユール・ヹルヌの譯本井上勤が「政治小說作人之血淚」、モアがユートピヤの譯本「良政府談」、本多孫四郎の譯述小說「鮮血日本刀」があり、二十一年には沙翁のコリオレエナスの譯本「自由之答 恩愛之繫 豪傑一世鏡」（板倉與太郎譯）等あるは、多く政治思想上の興味が基本となつての飜譯仕事で固よりいふ迄もなく原作や作者の詮索や考證をした上の學問仕事でもなければ創作に準ずる熱情を持つての純文學的の仕事でもない。また「政教小說 泰西 蒙異西物語」や「泰西 美聞 共和之色旗」は大石高德の譯本で右の範疇に入るべき種類のものである。

右の長々と述べ上げた飜譯物は凡て政治的正義又は自由への憧憬に出立する青年政治家政論家又は政治上の野心家の手間仕事でかれらにとつて文學は經世の一助たるにすぎんのであるから藝術上の苦悶も内省もなければ技巧上の斬新も妙趣もないの

だが、在來の文學は日にこゝに廢れて古書再刻の業なほ起らず、心ある少數の學匠、美術家、藝術愛好家は頑迷徒らに堆き帙架の古板本を翻して悠々とその鑑賞家たり說明家たり考證家たる立場に晏如としてをるにとどまり、古文學の普及や、テクステュアル・クリティシズムの促進や、統計批評の展開などに心忙がれるものが無かつたから、江湖の無知性急の大衆は低級俗陋の興味と歡性と慰安との手段としてこの新開地時代の新開化文明の新聞業文學として直接に猛烈に實生活的に興趣と射利慾と射倖心とをさへそゝる新興政治文學に當代のあこがれを寄せたのでリットンといひディズレーリといひ文學者としては三流四流の人物でしかも政界に一方の將者たりし人の政治興味背景の低級たるローマン文學を讀んだのは當然である。モアの「良政府談」は入手せぬから批評は出來ないが從來しばしば翻譯の嚆矢と稱せられ、さきに引いた思軒文も亦それを證としてゐる。

「花柳春話」を見ると、その叙に、

序史錄曰く史に三種あり一に法律史と曰ひ二に戰爭史と曰ひ三に風俗史と曰ふ（中略）制度の事は沙爾氏之を記し戰爭の蹟は比由氏之を載せ風俗人情は則ち蘇格氏之を述ぶ英國一般の史は此三書を併せ讀で始て知るべきなり（中略）此書は英人李頓氏の著にして英國近世の風俗人情を寫して剩す所なく政事家の內秘、黨派の密情、親子の親、夫婦の愛、貴賤の別、貧富の差其事は皆人の視て而して未だ見ざる所を載せ人の知りて而して未だ識らざる所を記す（中略）余嘗て英國より還の後此書を譯して以て世に之を公にし以て英史を讀む人をして其近世の風俗人情を知らしめ且英史の本闕を完備たらしめんことを望めり云々

而して十二年の飜譯本は漢文體で婦女兒童に解しがたいから此平易文章の飜譯を出すてふことはり書きを十七年版の新刻書に叙してゐるのだが、最初の版は

第四十一章　十一月逢佐々木議 十年紅涙氏出來

「ペンタドア既に衣を乾かして室に入り來れば只マルツラバース一人なるを以て胸中悸々滿面に紅を潮す　マルツラバースも亦心穩ならずペンタドアを顧て曰くハーバート去て馬車を送らんことを約して去れば幾くもなくして馬車來るべし時に知らず侯は何れの所に去りしや言ふて又曰く僕唯だ望む君が身雨のために害せらるゝたからんことをペンタドア曰く憂ふ勿れマルツラバース問ふて曰く僕明日龍動に行んとす君若し命ずる所あらば僕幸ひに之を奉ぜん。」の如き文體だが右の個所を新聞寄稿第三頭から拔いて見ると

第二十八章一節[illegible]

「斯て其翌日は朝まだきより化粧し[illegible]ドルにドニン、テイもと其子ハーバート、マルツラバース、ペンタドアの四人は連立各馬に跨りて川行野邊は夏草の繁れる上を踏ならし行手急がぬ道なれば各意に馬を立て（中略）ペンタドアは衣を乾かし前の書院に入来ればマルツラバースの唯一人消然として座して居れば胸中に何とやら羞らう色の面に現れ少女にあらぬペンタドアも戀しといへば時ならぬ紅葉に顔を照しけるマルツラバースも心中に穏かならぬ思ひやありけんペンタドアを顧視てハーバードは驟雨の晴間遲きを憂く思ひ馬車を迎に送らんとて今しも獨歸りたり僕は何處に行たまひしか昨夜の眠の足ざるゆへか僕少時眠みて無禮の所爲してけりと言了ては又問やう和君の雨にそぼ濡て身體に害はなかりしやとペンタドアは打微笑否ほども害はなし必ず心に懸たまうなとマルツラバースは又言やう僕明日は前驅に行まく思ば何にまれ和君の貴命を便ずべし朕で告させたまひなば此上なき幸に侍るかし」

即ちさきの直譯演舌文章は全く馬琴風の七五調讀本もどきに變つてゐる。その第一章を今一度援引すると、

一第一章[illegible]は[illegible]聞くものは[illegible]響へんやうぞなし況て明しも冬の夜の[illegible]の時の折柄降しきる雨を誘ふて吹風に野末の草の間隙より遥に見ゆる燈は誰が住む家か知らぬども滅ては明る其状は燐火の光に異ならず最と凄然状景なり」

こんな拙い定文句の羅列であるが不思議に内容と調和して一種のスタイルを構成してゐる。この如く初版と再刻とは文章が一變してゐるからこれを一緒にして論ずるわけにはゆかぬが、以前の更に拙かつた生硬文章に於てすらもその原作の新と奇と妙とが如何に歐化の第一階段に當時の一般民衆の異邦趣味をそそり新派體小說のさきがけたるを感ぜしめたかは推測するに難くない。或は再刻文章の方は譯者以外の人の加筆かとも推されるふ節がないではないが、何れにせよ「花柳春話」の影響が其後續出した政治小說や傳奇小說に及ぼしてゐる度合は今日吾等が漫然と臆測する以上のものがあつたらう。此書の內容の如き政治小說の純なるもではないが、さきに引いた序文に見ゆる譯者の期待によつて判る通りの第一義的目的によつて、企てられた

仕事であるから、しばらく此書を以て政治小説の第一指とするはその影響範圍性質から考へても至當である。

「梅雨餘聞」は前書よりも注意の點で卓れ情緻の乏しい點で劣つた馬琴調で「慨世士傳」は

第一套　豪傑の肉を截る金鐵の太刀風　大丈夫の骨を碎く米斷の箭の雨

往にすぎし往昔を忍ばるる。羅馬は都の名のみにて。陵谷河は今も尚、滔々として昔のごとく。都城に沿ふて流るれども。往て還らぬ河水の。世の盛衰の不可思議なる。

式の文體であるが、もと伴水果が自娯あまりを譯したものを土台にして訂正潤飾したもので大筋に於て同然して此種傳奇文章として最も確實なこれが馬琴體に外ならぬ。譯者は序して泰西の小説はひとしく勸懲といふもそを首位に置き人情を専ら粉すが和漢のそれは大れとは正反對で今日尚その影響が多いから泰西正傳奇の標本として之を譯した、本集第七集女丈夫に逢ふ條の如き豪邁なる俠氣ちいと女々しい女を抱くは「いと不思議なるに似たるものから是なかく／＼に人の情に一顧をとどめて讀みる時には不可言の妙を覺ゆべきなり。」云々と云つたは「小説神髄」の主旨を前言するに外ならぬ。

「繫思談」尾崎庸夫の譯作を丹鶴藤田茂吉が潤色したものらしく、思軒が賞美せるは「然り、予はしかく信ず」風の文體が氣に入つたのであらうが、名譯でもなければその感化は思軒以外多くを見ぬ。只思軒のみはこの文體に於て一家をなしこの文體に於て獨自の小説文章を完成したけれど、その「鍊名氏」（三十一年）を最後に、政治文學の翻譯文章に於てこの種の影響は打ち絶えてしまつた。（加波政之助譯「英國名士 回天綺談」は小説ではないがこの期のこの種の興味から生れた特産物である。又、ツルゲーネフの「父と子」が早く紹介されてゐると聞いたが詳かにしない。）

創作的政治文學では矢野龍溪が報知社員佐藤藏太郎に演述略記せしめ後龍溪に訂正を加へた「齊武名士 經國美談」が十六年三月に出てゐるが、龍溪編述の俗史談で創作とも小説とも云はれぬが、内容の珍奇と文章の明確とが讀者を呼んで生中の小説以上の興味と感化とを與へた。但し、著者自らの意圖は「正史實事ヲ專ラ記載スルノ本意」（「凡例」）に基いて「人情滑稽ヲ加テ小説體ト」（同上）したものであるが結果として見れば政治小説的興味と感化とを惹起した注目すべき作品となつたのである。同じく藤田鳴鶴の「文明東漸史」が純小説の埒外にあつて大衆の讀物となつたのは一にその内容文體の所爲である。外にはやゝ趣は異るが坂崎紫瀾「汗血千里駒」を初め柴東

未來史の「[illegible]」[illegible]一[illegible]の[illegible]の一[illegible]將來」、未來鐵道の一事は[illegible]一[illegible]、[illegible]專門家の一[illegible]一戰記の「大海原」、乙羽の一[illegible]の「東洋」等が著名であり、紅葉散史の「一聲」はその序に、

揮り乍ら謙遜ながら第二十世紀日本社會の未來記で。前古未曾有の自治制度のスツパ抜きで御座る。出版すれば乾度賣れます。東京中の帋価を買切つても足りますまいから。云々

と述べたてた際物にすぎず、二十五年の「明治の花」(城南逸史)流の淺薄な政治小說が探偵任俠の通俗ものにとつて替られてから、この種の素人文學はぐつと少くなつて、いつの間にかその姿をかくしてしまつたが、三十五年に出た內田魯庵の「社會百面相」に凡る社會相の側面觀的縮圖が見られるとともに續いていはゆる社會主義小說木下尙江の「良人の自白」や「火の柱」が現れた。この魯庵文や同じ人の「暮の二十八日」や「社會詩人」(卅五年五月「文藝界」)や右の尙江文は直ちに通俗小說煽情小說とする事は出來難い純藝術小說にして社會的關心に立脚したものであり、「社會百面相」は昔からある氣質ものの轉生であり、且その立場にあつては注目すべき作品で、尙江の小說は傾向小說のあくの强いもので、社會主義文献の一としても明治小說史中の異色としても巧拙は別問題としてやはり注目すべき[illegible]花の未完の著書「[illegible]」もこ[illegible]に[illegible]ないが[illegible]これも割愛しておく。前に戾つて「雪中梅」を見ると、その文章の拙さ、結構のまづさ、何故にこの作が有名の政治小說かと訝かしく感ぜられるが、上篇九十四頁國野基の武田某に與へた手紙中にダイナマイトと印刷して明らかに判る程度に縱斜の線を引き檄にダイヤモンドとしてあるは書き違へといふ趣好になつてゐるが、之を評點で「暗ニ近日ノ一事件ヲ擧ゲテ之ヲ翻案シ半部ノ趣工ト爲ス何等ノ才思ゾ」など賞め上げてあるのを見ても評者作者の態度力量は知られる。之が一知半解の政治志望の生書生にもてはやされた事はいふ迄もない。「佳人之奇遇」は散士が府の獨立閣に到るに初まり、

「清人アリ杯盤ヲ周旋ス其應對擧止ノ凡ナラスシテ尋常ニ異ナルヲ觀ル齡大凡五旬ヲ超ユ幽蘭紅蓮ノ談ヲ聞キ眉宇激スルカ如ク傷ムガ如ク襟ヲ正シテ進ミ幽蘭ヲ拜シテ曰ク今ニシテ初テ兩孃ハ國家ノ忠臣烈女ナルコトヲ知レリ老奴モ亦亡朝ノ孤臣漫ニ自ラ料ラス前朝ノ恢復ヲ志ス者ナリ」云々

の筆法であり、「東洋の佳人」は僅かに三十頁內外の同趣異文である。「浮城物語」は冒險興味と政治興味を結びつけた長篇で結構も雄大で科學的道具立を用ひ想像力の豐富は前記の諸著遠く

及ばぬ。「緑蓑談」や「新粧之佳人」は南翠の出世作で後者は歐化社會の寫眞畫であり前者は序文でソーパーの「セルフ・ガバメント」にヒントを得たと斷つてあるが、その中に扱はれてある地方農民生活の問題は自治制確立に伴ふて當然叫ばれねばならぬ問題で、本書はその最初の作として見られる。尚他に豫想記的雜著を附加するならば春の屋の「内地雜居未來の夢」や鐵腸居士の「明治四十年の日本」までをも名前丈けは云つておく必要があらう。

かくの如き政治文學、社會思想の文學の見るべきものは煽情物方面に於てのみではない、戲作物の中にすらもつひに見出されなかつたのであるが、特に社會主義思潮の文學といふほどのものは固より刊行を許されるべくもない（兒玉花外の「社會主義詩集」は殆ど編輯によつて發賣禁止を命ぜられた）から、クリスチャン・ソウシャリスト的の尚江小說以上に深く對象の問題を掘り下げるわけにはゆかない。大正改元後近年社會講談など稱するものが出たが、社會思想の弘通の立場から見ても、大衆文學の見地から見ても何等注目すべき文獻には接し得なかつたし、その作者の元祖ともいふべき白柳秀湖の町人物は社會思想を弘通する以上に作俳もどきの香氣が勝つてゐるのは社會主義よりも通俗文藝の興味の方が作者に於てより強い爲であらうか、何れにしても稀薄なる「哀愁」の文學がこの作者では作品である。石川啄木の歌は大衆煽情の詩歌とはいへぬからこゝにはあげぬが、たゞ、彼のあの調子の歌作のみが啄木の代表的なるものの如く世間多く解釋して疑はないが、その以前の長詩などにもたとへば「吹角」の如きは當時の青年詩人の何人もが歌ひ得なかつた妙境で、この方面を見のがして啄木を觀察するは生地と死處だけを知つて生育の地を後ろにする評傳家のやうなもので半解の說たるを失はぬことを云つておきたい。その「吹角」時代が過渡期なれば、社會主義時代も亦かの態度で感受性の強い、從つて模倣の巧みな啄木にとつては過渡期でなければならなかつたので、たまたまあの歳に生を絕たれたが故に最終晩年の思想、素材をもて代表的たらしむるは一理ないではないが、彼の性癖やら性格の特長やらを考へて更に經歷を重ねた彼を想像すると今日想像で造型せられてゐる啄木よりも亦やや異つた彼の全形が浮び出て來る。花外はあの當時の浪漫的社會詩人の好典型でこの詩は純情の特長が年齡と共に深化されずに終つて、大衆的なる浪漫社會主義のラッパ卒となつたは彼として順道である。

單に政治文學の回顧はわれらに失望を感ぜさせるにすぎなかつたが、元來政治的自覺の漸く生じた青年國家の常態として致

治が世が漢文文化の新舊相伴つてゐた對心の對象の最高潮にありしの文に相寡く之に習熟するといつた方へ近現代になつての熱心な而して淺薄な政治談義であるから性の問題でも農村問題でも社會問題でも宗教問題でも取扱つた非事に歴史的一臠の價はあるがそれを打ち眺めるわれらの立場はどうしても生俗學的興味を出でがたい。單純といへば則ち單純、簡單といへば則ち簡單、文化の哲學的意義は如上の政治小說の何れにも見はれない。翻譯家として思軒の後塵を拜する力だもなかつた原抱一庵は「聚芳十種」中「闇中政治家」をものしたが藝術小說とも通俗小說ともつかぬ愚作で、形式の上からは前者に入り作者の主觀の出鱈目さ加減から云へば煽情小說とすらも云はれない。斯うした形式やら筋の運びやらの上だけで藝術小說階級中に坐し、事實は煽情小說家以下の天分しかなかつたものが明治から今日にかけて仲々多い。藝術小說の非藝術性と煽情文學の藝術性を同時に論じなければならぬ所以である。(半山鶴堂著社會小說「日本の未來」(春陽堂發行) 右の書に就いて記述する事を忘却せりこゝに附記す。)

二 探偵小說

越前守忠相の「大岡政談」は久しい間裁判的興味の對象として殆どひとり占めの人氣を背負つたが、尙遠く西鶴の「本朝櫻陰比事」のごときがあつて[illegible]この時の文學には少くなかつた[illegible]於ても「藤陰比事」、「日本桃陰比事」の類はその一であるし明治に入つて、それが不相變で活字本の新版双紙となつて讀まれ、[illegible]り擴れたが、名判官の種切れのせいか新種は何と現れず、轉じて探偵的興味に移り、コーナン・ドイルの如き原抱一庵や山縣五十雄に紹介されたのが古い方であるが雜誌類を漁つたら尙古く必ずあつたらう。抱一庵はモツパスサンをも「女探偵」、「再び女探偵」(「泰西奇文」)等にこの種の興味を以て紹介してゐる。蘆花の「外交奇譚」は事實を脚色して小說的結構とした探偵的興味の讀みものであつた。思軒の「探偵ゆーべる」はユーゴーが「隨見錄」中の最長文字長愛文字にして凡て事實一點の小說的粉飾がないと譯者自ら辯護してゐるのは譯者の興味の奈邊にあるかを知りうる。

神田孝平の探偵譯本に「揚牙兒(ヨンゲル)奇獄」あるは本誌昨年十一月誌上で知つたが、外にも探偵談の紹介はあつたかも知れぬ、私が本誌二月號で「小丑那藤三」を最初に讀んだと記憶すると書いたが查べて見るとそれは三十三年の初秋から「時事」紙に連載せられた伊原靑々園のつゞき物であつた。

その外のあり來りのものは凡そ二月號の「嗜讀依發端」の中

に書いたから再び之れを繰返さないが、書き忘れ書き落した資料と意見とを簡單に附加しておかう。

二十一年出版の翻譯に米國マクウアッテルス氏原著日本千原伊之吉譯述「摘發奇獄」がある。非薔薇の收錄で假死假葬、麻睡藥、遺書狀等二十一篇が收めてあるが、日本同盟法學會といふ所の發行丈けに、二十四號で說いた「探偵淵帳」などと同じく小說を餘りに遠ざかつてゐる探偵實記である。

五寸釘寅吉の死刑は恰も其前年であるから、つづき物的情話文學の興味に探偵的好奇心の誘發が加はつて、撫文の「高橋阿傳夜叉譚」や芳川春濤の「夜嵐阿衣花仇夢」や須藤南翠の「茨木お瀧」、「新藥おみな」等の毒婦傳や久保田彦作の「鳥追阿松海上新話」やが出たのも同じ時代圈の出と見て大差はない。長川國得が「戰時大探偵」に戰爭興味と探偵興味とを結びつけたのは日清役前後であるが作としは拙劣であつた。金櫻堂の「長屋捕ニ」(中井桃水)や「荒磯際」決死女の剛膽な女子が「樹上の死體」や水田南陽の「ふしぎ」、「生靈」、大川堂の「川上行義」、「決死の少年」、「九寸五分」、「うこんしごき」、「蝶が罪」、「罌粟人」、「あかへし」山野芳雄、「櫻井一郎」、「名物豊吉」、「ピストルお袖」、「腕嘆紳士智光坊」、「一柳不芳雄」、「早見のお辰」、「馬丁丹次」、「因果應報」、「名人勝九郎」、「南京松」、「大盗僧」、「銀座洲巷早殺」、「淫藤使殿」、「酒癖やす」、「浪花節お千代」、「大井川殺人」、「横濱三人殺」、「振袖お仙」、「蠣殻町血の雨」、「玉乘の娘」、「大蔭敗館千阪光子」、「かる業武太郎」、「横濱小件殺」、「お茶の水婦人殺」、「澁谷村殺人」、「白菊御殿」、「眞士村騒動」、「武川兵部」、「白狐お仙」、「紫波布お蓮」、「山賊祭首」等は多く當時評判の三面記事をつづき物にしたものの單行本化で、菊亭の「耳と腕」といふ翻譯小說に丸亭が序して

海外先進國の小說として予が最も愛して讀む所のものは、佛國稀英國種の激情小說なり、而して今ま予が好む所のものをきけば卓ら獨逸種の小說なるが故に、予と予の小說思想に稍々其の奇雅を異にせるが如しと雖とも、併し其の凄慘奇想に囚て産み出されたる激情小說といふに至つては均しく一なり。云々

と書いてあるを見ても推される通り、お茶水事件の引延しや千阪光子のロマンス化つゞき物化の腕前識見と大差はない立場の作者らであつた。探偵小說時代りの餘波として一時は新聞小說が右のピストル強盗清水定吉や坂本慶次郎のつゞき物で壟斷されたことであつたが、「早稻田文學」明治二十七年一月號所載「明治二十六年文學一覽表」八月の項に

「春陽堂探偵小說前後廿集を了へ更に「高等探偵小說」を出だ

十四年頃から其熱は漸く衰へに向かへり一

とあるから、二十年前後から七年間位の流行と見てよい。尤も、今古堂からも毎月一回の豫定で「探偵文庫」を出しはじめたのが矢張りこの年からである。

涙香は當時連載の「萬朝報」紙上「人外境」の序に

余等の業徒了見にては人の智の暇々として進み、學問の理の日々に新なる今の世なるを以て、小説も世と共に進んと欲せは幾分か「智」に訴ふる分子の有るに如くは莫かるべし、云々

といひ、

新聞紙の續き物といふ者は、余の考へにては、其の巧妙よりは事實と事理とを尙ぶべし。

といつたが、恰も同じ時に村井弦齋は「冢の兜」の序に

小説を編まば富に人心を高うするものを編むべし云々

といひ

余が物を讀まん人は傾はくは形骸を讀まずして精神を讀まれよ云々

と云つたのを捉へて雜誌「青年文」記者が

彼が所謂徴妙なるものゝ存するが故に、其記する所純潔にして勸善懲惡的の意を寓し、之を天下學者に讀ましむるも、其害を流すこと探偵小説の如くならず

と評し、「早稻田文學」はこれを否定して云つてゐる

又、「國日報」の序で涙香が

予心と逐ひ徒に人をして族を小説中の幻影に呼ぶに至らしむ云々

とあるを捉へて「早稻田文學」記者は涙香の事實と事理云々と云へる説と對象し

或はこれ讀物作者が幾多の經驗より得來れる新聞小説の要諦か、純文學の立脚地以外攻究すべき問題也

と云つてゐる。

島村抱月の探偵小説論は當代ほとんど唯一の探偵小説論で、しかも流俗に阿諛して能くところを知らぬ通俗小説の代表的なるものとして探偵小説を捉へ來つて

「發端第一に或疑問を掲げ來たり、讀者をして好奇の心を起さしめ、譬へば數學家の或る問題を解釋すらん時の如く、逐次同を追うて疑を解き、竟に結局の答案に達せざれば止まざらしむ。随つて第一に望む所は單に疑團の氷解に」

ある「案研的快樂を興味の根本とすること是れ也」と斷じ、

「作者に多少の小說的技術ある限は、幾分か人物の性格をも描き得べきが故に。探偵吏が機敏の働き、若しくは局面の變調變化等の上に、若干脚色的面白味以外の面白味を共へしむ

ることなきにあらねどこはむしろ附屬的條件、即ち二の町の面白味にして低脈を來たさゞらんの用意のみ。」

といひ、疑ふ人に、

「一部の探偵小說を取り、讀むこと半にして殘餘を翻し、結尾の一節を讀了せよ、必ずや前に感じたる興味の多分は忽然として消失し、更に後半を讀み續がん心なきに至るべし」

と論じ、更に追敍して、

「既に疑問の說明以外に詩的快樂を與ふる探偵小說ありとするも、そはこゝに謂ふ純粹の探偵小說にあらずして、そは只事件の性質配合等に於てのみ探偵小說的なるものなるものなり、而して其の本質は已に探偵小說の領域を脫したるものなり。されど詩的快樂即ち世態人情の趣味に伴ふ快樂と探究的快樂即ち秘密の解釋に伴ふ快樂とは、互角の勢力を持して並立すること難し、假令客觀なる小說其の物の上には、兩者の元素相當して存するとも主觀なる讀者の心は必らずや何れかに偏せざるを得ざるものなり而して探偵小說の精髓は此の探究的快樂を主とし、詩的快樂を從とす」云々

ときめつけて居るが、これは前述の通俗小說の代表としての探偵物そのものの歷史を知る心と探偵小說の高級なるものを當時抱月が親しく見る事がなかつた無經驗とより直ちに探究的快樂そのものを第一に探偵物の重要性と斷じて他の重大なるものを見のがしてしまつたからより生じた當然の歸結であるが、何も是が非にでも探究的快樂に性急するあまり、その所謂「詩的快樂」を斥け去つてまで考へなくともよい事である。當時の涙香が如何に幼稚な文學觀に晏如たりしかは、さきに引いたその序文の一節で明らかに判然するがその涙香が唯一の作品の供給者で他は遙かに之れに及ばなかつたのであるから抱月の右の如き論が出でたのも無理はない。

が、探偵小說の中でも、例へばポウのチュパン物など讀めば探究快樂以外の詩的快樂を多分にたたへた標本に出合ふであらう。ロマンテイツクの精神の迫るところ、冒險物に於てステイーヴンスンを見、少年物に於てリウキス・カロルを見、怪異談に於て「ドリアン・グレイの繪姿」を見るごとくに、われらは、探偵ものに於てもポウ以外の多くの近代作者を所有するのである。探究といふ一點から見れば畢竟、冒險物も怪異談も探偵物と甲乙するところはないが、只探偵ものに於ては殺人强盜等の犯罪や性慾なる事件やが題目をなすが故に勢ひ筋の運びに第一の重心が傾いて、その作者本來に存する探偵物創作心理の中心生命をなすものの全部を現はすが如き緻密の精細の悠容迫らざる藝術的描寫を、ともすれば蔑ろにするので若

[illegible]にあつてしかも立派な探偵小說を書きうるのが本筋でなければならぬ。「罪と罰」まで持つて來なくとも、性格性格の[illegible]から異常心理の異常ならざる解義に到る特長を自然なる現實性ある背景に立たせてロマンチクなる雰圍氣を躍々と作り出すことに成功したものにチエスタトンの「師父ブラウン物語」があり、コーナン・ドイルの小說のあるものがある。要は、當時なほ（今日に至るまでと云つてもよい）それ程の作家がなかつたから斯る結論を投げられたので、罪はむしろ抱月になくて作家にある。

高山樗牛は「太陽」増刊（明治三十年六月十五日發行）の「明治の小說」に於て

　撥發小說漸く衰へて探偵小說行はれし頃に到りて小說は其墮落の極に達したり。

といひ、その發生原因を訊ねて二十年から二十五年に及ぶ「狹隘なる主觀を有せる寫實家」紅葉一派の小說が、「作家の主觀をば自己の貧少、且偏頗なる閲歷に倒照したる小人生觀」に外ならなかつたから、その「無味放埒に浮艷淫靡なる製作に」社會は倦んで來て、撥發小說からつづいて探偵小說に新興味を求め轉じて鏡花、眉山、天外の觀念小說に移つたのである

[illegible]してゐるが探偵小說についてはほとんど[illegible]してゐたない。何の價値なしとたかをくくつたのであらうし、讀んでもみなかつたかも知れぬ、いや、多少は讀んでゐても讀者としての林次郎と評者としての樗牛との興味の厚薄の關係を念頭に置き得なかつたのかも知れない。

われらが涙香に興味を有するは二月號にも述べた通り主として土俗學的興味の個所多きを喜ぶの情に基くのであるが、われらの少年時代の放肆なる空想を、かくも天外の彼方にまで飛ばしめる力のあつたのは、明治一代を通じてうごめいた異邦趣味の香氣と抱月の所謂探究快樂とが不思議にもとけ合つて一つになつて又新たに微妙な魅力あるあるものとなつてわれらの幼き胸に迫り來つたからであらう。しかも、それにはなまぢ國文學の智識も鑑賞のセンスも他の外國文學の準備もなかつた、而して、場面の變轉を心掛け、智力の活力を尊崇する一新聞記者黒岩涙香のたどたどしき傳奇文體の中に、成語の臭味から來る要素や、文學知識が指圖することの場合は餘計なあんばいの心配が皆無であつたため、簡單な着色の通俗煽情文學としてかへつて成功したのであらう。紅葉、眉山、水蔭らが經濟的必要もあつて毒をもて毒を制する風の戰法だと稱して書いた春陽堂の探偵文

所は文章に於て、內容に於て、よしんば創作と翻案や翻譯との相違こそあれ、到底涙香には及びもつかなかつたのである。

又、小主觀寫實小說の反動現象とのみ說明せる樗牛の行論も（卽ち、鏡花は「活人形」を水蔭は「女の死骸」「四本指」「火中の美人」を作つてゐる）粗漫のそしりは免れない。成程、二十歳越えた許りの少年樗牛の集りであつた硯友社派の文學が、その狹隘の知見の範圍と囚はれたる取材上の趣味とからして、狹隘なる小世界に跼蹐せる觀述主義と江戸前の洒落文學主義との混淆せる狀態を持しながらも、例へば紅葉は「娘博士」（二十年「我樂多文庫」）や「[illegible]」（二十一年同上）ことを著作に始まつて、「色ざんげ」（二十二年「新著百種」）「おぼろ舟」（二十三年「讀賣」）「伽羅枕」（同年同上）「[illegible]」（二十四年同上）「二人女房」（同年「都の花」）等の作作から、失敗の傑作「紅白毒饅頭」（同年「讀賣」）を既に發表してゐる。此等をしも一圖に狹隘といひ淫靡といふべくんば樗牛當年の批評心は幼稚に非ずんば盲目であつたか、左もなければ囚はれたる道德上の偏見を以て文學の世界に強押しはめんとしてゐたのに相違ない。

尤、硯友末派に到つては乳臭と粗笨と稚拙とを露骨に表はしてゐたから樗牛の評の必ずしも中らざるには非ざるのみか、首領の紅葉さへ「三人妻」（二十五年「讀賣」）を禁止せられたりした事があるのであるから、時に浮艷時に淫靡時に無味時に放埒に陷つたはいふ迄もないが、當時讀者の傾向を見れば粗雜なる政治文學に養はれ、一度び春の屋が「小說神髓」の一喝に眼覺されたといへ、全く覺醒せしは一部の識者のみ、多くの小說讀みは依然として興味本位倫情本位の經世眼教訓文學眼といふ矛盾せる立場に立つて、意識するもせざるもひとしなみに面白いもの勝ちで漁つたのであるから、硯友一派に係念したといはんより、その指針、その凝り方は寧ろ低級なる一般讀者には難解であつた所へ、井上侯の鹿鳴館狂舞の歐化政策の餘燼なほさめず、條約改正問題生じて反動的國粹主義は勃然と起つたが、早晩來るべき內地雜居の新問題は眼前にひかへて居る、火車のひびき遠き都の地には反動運動旺盛となつた頃漸く異邦情緒のときめきを、その假面の如き固定表情の細紐枝に仄めかし初めたので、涙香物の赴く所人は怜好の氣はひもなくて門督取の發音を高聲したのである、その泰西舞臺とその刺戟的開展の場面とは大岡政談の探偵興味で養はれた人々には僅かに「高等」でハイカラで長時らしい讀物であつたに相違ない。政治文學の趣味の素地からこの探偵文學の處女地に移るは僅かに一歩である。たま〳〵一人の氣まぐれがガボリオの探偵奇譚を反譯して上梓したにせよ、下地は既に出來上つてゐるのである。定吉、學次郎等の百盜にふ

ら[illegible]の[illegible]に[illegible]、[illegible]一[illegible]若還六の[illegible]はこの[illegible]業の要求に[illegible]ないのであるにすぎぬ。

涙香、丸亭、菊亭、南陽、二葉その他の探偵談は一時燎原の勢ひあつて諸國に蔓延したが、つひに一人の純藝術探偵談の作家をも生むことなくして明治はついに大正に推移つてしまつた。その原因は何故か、キユリオシテイ・ハンテイングをあまりに安價に見すぎたためである。ロマンスの意義をはきちがへたがためである。探偵のための探偵に跼蹐したがためである。藝術的希求と自己の本質とを一致させて深刻に思惟する事が出來なかつたからである。（三十五年の交山田美妙は「女裝の探偵」を南翠は「大探偵」を公けにしてゐるがともに未見の書であるから意見は略く。）

三　冒險小說

冒險の精神は昔から昌んだつたが責任感的基本の冒險で爽快にして邪氣尠きスポート精神風の冒險意識は發達してゐない本邦であるから、西洋中世風の武者修者や復讐にまつはる冒險は多いがそれも餘りに儒教的堅苦しさがあつてフエミニズムの色彩がないから痛々しかつた。明治に及んで初めて泰西風の冒險談に新天地を打開せられた明治少年は幸福であつた。かの三木愛[illegible]も・二も[illegible]三十五日間空中旅行」もあれば、大平三次の「[illegible]旅行」があり、森田思軒居士は「大東號航海日記」やら「大氷盤」やら「十五少年」やらを譯してゐる。井上勤にも「學術妙用造物者驚愕試驗」「月世界旅行」があり紅芍園主人の「歐世界」も同川直彥譯「萬里絕域北極旅行」も川島忠之助譯「八十日間世界一周」も亦同じ原作者である。高橋雄峯の「ロビンソンクルーソー絕島漂流記」や松居松葉の「錦機翁冒險譚」は博文館の「世界文庫」の內から小說ではないが探險談であるスタンレー「闇黑阿弗利加」（矢部五州譯）やマルクハム「大氷海」（幸田露伴譯）とともに刊行せられた。同じく小說ではないが冒險讀物として水交社譯「ケピテンクーク世界三周航海記」が博文館から出、水田南陽譯の「ホワイト・デギル」譯本である「魔法醫者」、牛山鶴堂のデフオーが「魯敏遜漂流記」は前者は博文館、後者は春陽堂であるが、中村敬宇序蔭山廣忠譯の「世界未來記」は未見の書であるから原作者は判らない。ライダー・ハツガードには「キング・ソロモンスマインズ」が二種譯本があり一は宮井卯の花庵で博文館、一は菊池幽芳で駸々堂、ともに「大寶窟」といふ名前と記憶する。「アラン・クオーターメン」は幽芳により「二人

女王」となつて現れ、スティーブンスンの冒險奇談「寶島」は卯の花庵主人に、アイヘンドルフの著名なる浪曼小説は「なまけもの」として阪田寄山人に抄譯せられ、ポウが冒險怪異の興味は内田魯庵の譯文集「乃留好語」中の、「黒猫」や思軒の「間一髪」やが最初の移植であらう。森鷗外のホフマン譯「玉を抱いて罪あり」は探偵奇談流行の事實に直面した彼が、抱月の如く叱咤せず、樗牛の如く無視せず、その方面の興味を最高の程度に助長せしめん目的でポウに至りし者はホフマンに遡らざるべからずとて「マドモアゼル・スキュデリー」の一篇を紹介したのである。この點を見ても鷗外が識見は流石に高かつた。

上島笑山の「釋凡恭」も現代某學術を理想として幾分の事實に小説的脚色を施したものと言はれた。政治文學的興味の冒險奇譚として少年に喜ばれた。

その外、月刊誌上に現れたマーク・トウエインの「乞食王子」、カロルの「不思議國巡迴記」、「鏡世界」の類を加へたら切りがないが初期の「少年世界」にはこの種の浪曼的冒險奇談の類がしばしば記載せられた。「學窓餘談」、「今世少年」亦この種譯文を掲載した少年雜誌である。

井上勤の「全世界一大奇書」即ちアラビヤンナイトや片山平三郎の「鵞瓈皤兒回島記」即ちガリヷーストラヱルズや井上勤の「禽獸世界狐乃裁判」（ゲーテ原作）などもこの興味に於て紹介せられたもので、就中、「一大奇書」の古拙にして浪曼的風趣豊かなる文體は、やはり馬琴種彦の脈を引いてはゐるが獨得の奇古なる好文章でかつて木下杢太郎君も此譯文體を諳誦したと言つてゐたが同君邊りの年輩から小生頃までの少年であの拙劣なる名文を愛誦せぬものはなかつたらう。アラビアンナイトだけは今日と雖實際はあの文體でなくては眞面目に讀む氣にはなれない。涙香を回顧する以上に此の一種奇異なる飜譯者井上勤の奇異なる文功を銘すべきである。

龍溪の「浮城物語」思軒が「十五少年」に刺戟せられ其後輩出した冒險談譯文は小書庫をなす程多かつたが中に就て記しおくべきは櫻井鷗村の飜譯冒險小説の上品で快活、無邪氣で少年らしい文章である。「二勇少年」といひ「朽木の舟」といひ「決死少年」といふ「世界冒險譚」の叢書がそれである。押川春浪も亦前後して「武侠艦隊」の系統に屬する多くの冒險小説をものした以外に「銀山王」、「ヘーグ奇怪塔」、「塔中の怪」等夥しき飜案抄譯の類がある。何れも粗荒の拙文だが通俗文學の立場にあつては一切りこの春浪に比肩するものが一人もなかつた事は近年の事實だから云ふ迄もなからう。

春浪の飜案物は純なる少年文學の一種で青年に及べばもう誰

も愛讀をされたものであつたが、例へば一葉山[illegible]一ごとき涙香小說や冒險物の翻案は年若い一般少年讀者の間にも好み讀まれた。

さて、冒險物の讀物文藝ともいふべき純創作には何だあつたか。上に述べた通り、高級作品をも時代の要求又は讀者の低級の原因により冒險的興味の一般讀物として推薦したのが多かつた割りに、純創作の作品に至つては僅少をきはめて居た。日清役の當時續出した戰爭小說は戰爭題材の藝術物を志して作者の未熟から內容そのものの精神は煽情文藝としても拙劣な煽情小說になり了つてしまつた、弦齋の「朝日櫻」はそれである。「血の淚」はそれである。遲塚麗水の「南蠻大王」もこの種のものではなかつた乎。さきにあげた偶得の「戰時大探偵」も探偵と冒險の兩興味にわたつたそれである。南翠が「荒海實一」もそれである。末廣鐵腸が政治興味に冒險的波瀾を加味したる「南洋の大波瀾」と「あらしのなごり」の二書を後に潤飾し訂正した「大海原」もそれである。眉山が「大村少尉」の如きも前述の諸篇には優る藝術物であるが決して彼の價値をより重からしめるものでない。弦齋の「沖の小島」はル・サージュが「ジル・ブラス」の拙ない翻案であり、「小猫」はむしろ冒險物の筋を行つた立志小說畑の弦齋物である。「少年文學」中の眉山が「寶の山」もそれに近い。「少年文學」[illegible]（小波）「[illegible]の日ぐらし」[illegible]あつた。江見水蔭の「水雷艇」、「速射砲」、「[illegible]大探偵」等戰爭小說は凡作であり、宮崎來城の「從軍人夫」、三宅青軒の「水雷士官」もそれに準じる。その他二十八九年にわたつて夥しく續出した軍事小說の殆ど大部が劣作に外ならなかつた。

しかし正面から少年冒險讀物と名乘つて出現した中での作品はなかつたか。上述の「少年文學」は傑作多き叢書だが冒險興味は稀少で御伽噺興味が勝つてゐた。さきにも云つた春浪の「奇人の旅行」、「世界武者修行」「空中大飛行艇」、「怪人奇談」「魔島の奇跡」、「續空中大飛行艇」等の「世界怪奇譚」叢書とこれに繼續する「武俠之日本」、「武俠艦隊」、「海底軍艦」その他の一大長篇は結構は雄大と云へば雄大だが行文餘りに拙く粗莽なる「痛快壯絕」の趣は即ちあるも科學知識覺束ないのに想像力とても貧しくて正統少年文學としては到底論ひするには足らぬ。只、當時の冒險物としてはいとせめて優秀であつた事は疑はれぬ。癸山の「小英雄」でも宮崎來城の豪傑小說でも水蔭の海洋小說でも春浪だけの人氣も興味も魅力もなかつた。その中に最も初期に出て後進の範となり眞實に布置結構の雄大豪快と科學的知識の豐富と想像力の天惠とを當時としては

兼備へてゐた逸篇が矢野龍溪の「浮城物語」（二十三年六月）である。作者の感想を引くと、

「吾輩が報知新聞へ再び入社したのは、明治十九年か二十年と思ふが、それから間もなく吾輩は同紙上へ「浮城物語」と云ふ小説を書いた。今日から見れば何でもない事であるが、當時の出來事にしては、それは新聞界のレコード破りであつた。即ちそれは大新聞が紙上に小説を書いた最初の試みであつたのだ。ただし、これは我報知新聞の獨立を確保せんとする經濟上の企圖から出たものであるが、從來日本の大新聞が永年把持し來つた信條を打破するものとして、カナリ斯界の注目を惹いた。

「浮城物語」と云ふのは、比較的高級の小説ではあつたが斯界一般の論調は、之を批難するに傾いた。果然毎日新聞は、其雜報に於て大に之を批難した。大新聞の墮落なりと云ふて、大に皮肉に嘲つた。今日から見れば誠に可笑しい事であつたのだ。

『明治文化發祥紀念誌』

作者自らは高級小説と稱してゐるが新聞小説としては既に販賣政策上行はれた事でもある通り藝術小説としては低級であつたが讀物としては殆ど劃期的の功蹟を有するのがこの一篇である。バタビヤ附近一帶の大海洋及諸島を舞台とし一生歸國せさる決心の一種のユートピヤン達、文武兼備の豪富の秀才作良某を首領とし立花以下專門各家を列ね浮城海王の二艦を世界に既成列國の大艦隊と戰ふ筋で、六十三回で了つてゐるが明らかに作者は「附言」の通り二百回迄筆を進め南極アフリカ、アラビヤ南米諸國に彷徨し明治十七年馬島女王バナバロ第三世即位し越えて二年佛人馬島と講和する迄はつづける所存らしかつたが感興作はなかつたのか世評自己の期待に反したためか未完の儘で了つたが、後三十五年有名な「新社會」を出して本邦には珍しいユートピヤ思想を披瀝した稀有の人だけに、（明治文學、文明史に於て龍溪の位置は、實に不可思議なる偉大を持つてゐる。更に史的位相を究訊すべきである）。國際的布置の背後に伏在する無何有郷的幻夢の香氣がこの小説の現實的骨子と相まつて特異の風色を生じてゐる。特に面白いのは當年あり勝な利己的帝國主義の立場から徒らに侵略思想を桃太郎的に發現したのでなくて、祖國は祖國でそのまゝそつと殘しておいて、その骨肉と縁を切つて新しく自由で知識的な新天地を創造せんとする意志の下に各人が働いてゐる事である。戰爭中一方の隊長を承るべく餘儀なくせられた植物學者が激戰最中森林で珍種を發見して夢中になつてゐる中に敗戰の憂目にあふなど誇張は誇張であるが、

[illegible]すぎた[illegible]ことは著しい[illegible]少年の[illegible]に與へたずにその影響[illegible]たものが割合に生れ出なかつたは一客であるが、事實はこの悪化の空想を創作上に具體化するだけの浪漫精神がなかつたのであらう。只、記憶するに足る佳篇では與謝野鐵幹の詩的少年文學の美文小説「海王百詩の跋」の逸作がある、又、これよりは遙かに劣るが木村小舟の「新敷島」がある。一は「うもれ木」に收録せられ、一は少年世界増刊「祝砲」に掲げられた。浮城畑の詩的ユートピヤである。鐵幹は、外に朝鮮事件を背景にして可憐なる政治興味の少年冒險小説「小刺客」を書いてゐる。（「うもれ木」三十五年。）

三十年代の數多い少年冒險談中には外に櫻桃、作水、小舟、湖山、天仙、水蔭等の短篇中にお伽噺に非ず、冒險小品にも非ず明らかに冒險的少年文學と認むべきがあつたが記憶朧にして來出の方法もつかないからあつたといふ事實だけを記しておかう。冒險的ならざる少年文學は小波初め若干の佳篇があるがそれは少年文學の項に詳説しなければならぬ種類である。その冒險少年小説中記憶に殘る佳篇は「少年世界」の「紀元節」「祝砲」「春遊び」「海と山」等の増刊によく掲げられてあつたがその一篇に今春も一寸説いた福田琴月作「白薔薇館」（少年世界増刊一[illegible]」）[illegible]軍と戰ひ海中科學の實驗を[illegible]下の[illegible]台に冒險と詩美と科學興味とを聯絡させて[illegible]つた。が、結局、「浮城」以外に冒險小説として一代のセンセイションを惹起したものはなかつた。遙かに質を低下させて前述の武俠小説群が横つてゐる計りである。ライダー・ハツガードの如きジュール・ヱルヌの如き作家が一人あつて當然よい時代であるが、張三李四己が身も知らずに高上りて純藝術の殿堂に泥足を踏み込み、ただ形式だけその約束を守つて内容は煽情小説のそれにも及ばぬものを作つて不遇を嘆じ僥倖を私せんとする輩があまりに多すぎたのである。この島國にかの小説家づれがあまりに多すぎたのである。

四　傳奇小説

明治初期に於ては泰西の高級文藝を一般的の讀物として紹介することがせめての仕事であつたから、沙翁をも沙翁として見るよりは讀物化したる沙翁として見る必要がある。外國文學紹介の方面の先驅としては明治五年中官許としてある渡邊温の「通俗伊蘇普物語」六卷に初まり、さきに述べた「通俗花柳春話」に十三年のスコツト譯本「春風情話」（橘顯三實は坪内逍遙譯）やフエヌロンのテレマツクの譯本二種、「哲烈禍福譚」と

「鐵烈奇談」とがあり、尚外に「繁夜物語」（アラビヤンナイト）があり「西洋歌舞伎葉武列土」あり、木下新三郎譯「仇結奇の赤繩西洋娘節用」や赤川氏譯「衣洲奇遇 誠之鏡」や「鐵妙胡利般曲 春情浮世之夢」（河島敬藏譯）やいつの頃の譯か分らぬが外山丶山譯「西洋浄瑠璃ハムレット 嬢驗皇子の仇討」がありスコット譯には既にあげたもの以外になほ「湖上の美人」の散文譯「春江奇緣」（坪内雄藏、高田早苗、天野爲之合譯」と原作は分らぬが「春窓綺話」とがあり、ディズレーリの「慨世春話」（牛山鶴堂譯）は當時の刊本に近刻豫告を見かけたが現本の在否は知らぬ、大石高徳の「花情粹話」は意國ビトリオペルセジオー著述、佛國アメデー・ルー佛譯とあり人情小說と割注が入つてゐる。「歐洲情話」は中村御鳩の譯本で佛國セルバント氏著と稱してある。

「春宵玻利御婚期」はシルラのマリ、ステユアートの院本譯で「想夫戀」はボカチョの「十日物語」中の一話の意譯であるがこの「想夫戀」（十九年）ごときは佛譯からの重譯ではあるがボカチオ最初の紹介として又奇古なる佛本よりのエッチング挿畫を摘み糸綴の古雅好みを殘した體裁で、高瀬鐵?、篠島蜻洲、田島任天等の時代錯誤的珍妙の評語を加へた翻譯史上の珍品、装幀史上の異稀として珍重するに足る出版だが、その緒言に「チヤンブル氏の智恵の論」（エンサイクロペヂア）を引いて原作の價値を紹介し、

「吾國のお染久松の狂言に類してやゝ高尚なるものあるが如し」

と述べてゐる處を見れば原著を如何に解してゐたかは想像せられる。同じ緒言中小說の文體については支那小說翻譯體、横文翻譯體、固有假名文體、新聞紙等色々あつて

「何れが最も時好に適するやは尚ほ時論一定せざるが如し」

とあるによつても當年の文體の雜駁は推測せられる。この書出て翌々年には早く既に二葉亭がツルゲーネフの名譯「あひびき」（二十一年七月「國民の友」）や「めぐりあひ」（同年十月「都の花」）が出てゐるのであるから面白い。尚右の書の卷附廣告に同じボカチオの「佛國女皇春遊傳」が見えるが出たかどうかは今尚不明である。

春の屋が「ふたごゝろ」といふ米國小說譯本や良媛家主人譯ドンキホーテの一節「赤繩奇聞化吹雪」の事は此外も書いておいた。「こゝろ」は「感激の原素に富み、脚色も面白く、俗に悦ばるべき節多ければ」翻案して新世話劇にしようと考へて「繪入新聞」に掲げたもの。佛俗小說の翻案には別に関鈴の「歐洲小說 黃薔薇」がある。「改良小說 奇遇春國夫談」は大石高徳の翻譯であり、瀧江保の「西洋妖怪奇談」はグリム、デーナ及び一千一夜譚の拔萃で、「シンドレラ嬢奇談」（即ち奈西皿々奇談）の翻

「[illegible]」

[illegible]口語で一足もなくことに死を決しましたに[illegible]文體であるは注目してよい。十九年ホワイト自譯と註し佛教雜誌も新聞社刊行版權所有新報社印刷の「天路歴程」譯本は布教弘通の方便として通俗文學の使命を帶びしめたもの、丁髷武士が十字架を拜する插繪があり

「我れ現世の曠野を辿り行き只ある洞穴の邊に憩ひぬる間に、眠氣催ほしつ、打臥せし假寐の夢に……」云々

の譯文體で事實誰の手になつたかは判らぬが射重奇古の一寸面白い文體である。アプレイウスの「愛と心」（戸澤姑射譯）が出たのも元良勇次郎の小引を見ると古文流布の意圖に基いたものらしいが文章は全く非俗である。さりとて高級といふのでもない。

通俗非俗はまだ口語と文語とで分ける事は出來ない時代で、かへつて流布の文語の方が時として通俗の結果を來してもゐた。十五年二月中刊行の「有喜世新聞」を見れば口語と文語とは雜然と共に使用せられてあるを見る。顧ると、明治四年の「西國立志編」や六年の「伊會保物語」以來、二十年初頭「浮雲」に到る時機は文章史と見れば暗中の模索時代、新文體の搖籃時代であり、文藝思想史と觀れば傳來のロマンテイク・スピリツ

[illegible]とする[illegible]時代になし、文明の[illegible]、[illegible]時代、新文學の[illegible]時代であつた

この開拓時代の[illegible]民衆の[illegible]對象となつたものは、必ずや保守的なる民衆の姑息なる感情思想に根ざすものか迎合するものでなければならず、又は急進的なる民衆の輕浮なる感情思想に根ざすものか迎合するものでなければならぬ。民衆はある時は極めて保守的であり、ある時は極めて急進的であり、ともに俗解を要求して曲釋をも厭はず、平明を宗として錯誤をも念とはしなかつた。されば、急進か守舊かその何れかに多少の信念と理解とを有して、しかも平明俗釋を本義とし、道義又は宗教又は政治又は社會思想等の方面に幾分の狂信的熱情あるものが最よく民衆の歡迎を受け又は愛撫を蒙り、作者それに恬然と應じて媚態をつくし又は威儀をととのへた。凡てが甘い中に一脈の辛いもののあるを要としたのは期せずして民衆本來の弱點に突入つた觀がある。

が、此等俗衆の歡迎を生命とする作者等も意識的にその立場を擬するものもあれば、殆ど運命的にその條件を生來具有して文壇に入り來つたものもあり、媚情的文藝の藝術的要素の探究は主としてこの種の作家の作品に檢討のメスを加へる事に因て

初まるべきであり、事實上第一流の位相にある作品も多くは亦この種のものに外ならなかつた。
　飜譯本の全盛、立志篇の重版と堅い方面は堅い方面で盛んな流行を見せてゐるその間、昔ながらの合巻趣味は、戯作者上りの新聞記者の一手專賣となり、魯文、有人こゝに時機をつかみ得た。「釋迦八相倭文庫」や「白縫譚」が慶應から明治にまたがつて書きつゞけられた如く、丁髷か散切頭になつても頭の中の趣味性悉くが衛替へをしたわけではない、牛鍋もするが會席料理も時花つたのである、（食べものへの執着を見れば民衆の嗜慾の保守性と急進性とは具體的に判明する）。魯文が一九三馬によつたとすれば、「江戸繁昌記」の寺門靜軒によつたは、成島柳北の「柳橋新誌」であつた。靜軒に嘲笑の聲を絶たざるがごとく、柳北に諷刺の吟嘯たさかんを極めた。幕吏上りの洋行がへり、十八世紀嘲笑の文學の今なほ燻る而も普佛戰役後の十九世紀中葉文明今を靑葉と生ひ繁る歐羅巴を見て來た彼、徳川の洗練を極めた趣味性の台閣や文學やに日夜ひたつた事のある彼、その彼に鯰と猫と權妻との三角關係の頂點に立つ明治新開地文明が諷刺の對象となつた事はいふまでもない。嚴めしい漢文もどきの硬文章で俗風流を嗤ひ混堂會話を叙し猫兒何厭然を說いて表に滑稽を裝つて裏に讀者とモデルとを一緒にして嘲笑するのは彼である。嘲笑し乍らも時代の荒波に卷き流され潮に漂ひ拔手を切り乍ら實は一面決して流俗の流眄の快美を忘れなかつたのも彼である。默阿彌ごときは散切物の題材に新奇を迎合しても白浪物の根元調子に死ぬまでも忘れ得なかつた單純の人である。魯文一派に至つてはこの新店のだらしなさを大上段からうがつてかかり思想に於ては新派に向ひ乍ら趣味の本體は依稀として化政度の衛を守る民衆の戯作文學好きに首尾よく迎合した。花笠文京も芳川春濤も伊藤專三も二代目種彦も一筆庵可候も二代春水も江戸の艸草紙をそのまゝ明治に引入れた人である。明治も十五六年までは依然として江戸式綴りの通俗小說が出たが、それが例の色刷口繪の表紙は一卷と二卷二卷と三卷とは續きものの畫になるといふ體裁の新しい江戸趣味が復活してもそれも間もなく一樣に亡び去つて「小說神髓」や「浮雲」をきつかけに十年頃から勢ひづいた政治文學の絶頂期に入り、それも亦束の間、大衆は更にその飽くなき興味の新方向を求めたが、これに迎合したるはちぬの浦浪六の撥鬢小說と涙香の探偵物とであつた。
　撥鬢小說は、徳川この方連綿と系統をつづけて來た傳奇物語類の一支脈なること論なく、同じ傳奇派の畑なる僞作作家がただ末期文學の後塵を拝して新しき生命に蘇生するの力なく、所

[illegible]こそこしきのみか、[illegible]文藝[illegible]であ[illegible]八[illegible]かしかつたのである。須藤南翠は[illegible]深く[illegible]ることを忘れなかつたから、「有喜世新聞」に起つて毒婦傳に筆を練り政治小説に名をなしてから俗間の讀者愈よ多くその「[illegible]探」に大法官[illegible]乃世[illegible]殺事件を取材とし「濁世」に當年の政育界の内狀を描いたり、龍溪、學堂の先著に倣つて政治小說、就中「緑簑談」に成功したが同時に春水張りの「雛黄鶯」も書くといふ風に八方に手を出し而も何れもに執さなかつたから生涯九十餘篇の作風は明治末期の親鸞、空海、法然、蓮如等の諸傳に到る迄の、通俗小說期とこの諸僧傳小說期との二期とすべく、その二十年代の傳奇小說は傳奇派に異彩を放つ何ものをも持ちえなかつた。宮崎三昧は漢文育ちのきびきびした文體にも剛柔よく使ひ分けて「塙團右衛門」「鬼一口」「鳩の浮巣」の類の歴史物語は南翠溪水よりもより多き程度に藝術小說の域にあつた人故通俗物の史的批判の場合には算へない事とする。

が、傳奇的なる藝術小說も新聞通俗小說もともに行き詰りの狀態にあつた事は、龍溪の「浮城物語」の獨創性を以てしても、將た、依田學海、饗庭篁村、宮崎三昧等專門のこの派の作者の努力を以てしても、漸く讀書界に倦怠の情をみなぎり渡らし

[illegible]臨とすべきで、只作者自らのかの作に對する[illegible]化の二點から觀察すると正しく冒險物[illegible]張文學として說くを妥當とするのである。

二十三年「讀賣」紙上で坪内逍遙は「小說三派」を論じて、一を固有派又主事派又物語派、二を折衷派又性情派又人情派、三を人間派と名づけた。第一派は人が客で事柄が先に主人公を必ずしも設けない。設けても脈絡關係の爲であり、事變は性情から生ぜず偶然外から來る。三世因果說又天命說を理想とし、曲亭、種彥、スモオレット、フイイルデイング之に屬す。第二派は人が主で事柄が客に性情を活寫せんとする。人物は主觀であるが事と人との間には主客後先ある丈け故必ずしも人物が主觀ともいへぬ。サツカレエ之に屬す。スコツト、デイケンスは第一第二の中間に跨る。第三派は人が因で事が緣で、其因は性情だが、其緣は事變其物である。即ち人因事緣で一果を寫し此果又は他事變をも合せ緣と更に一果を描き斯くて終に大詰に到るゲーテ、沙翁之に屬す。惟獨近世派亦同じとの主旨である。「しがらみ草紙」の鷗外之を「文苑」中に評して（二十四年）八、

マンが禁欲主義も一その哲學上用語例を借り來り、第一派は如想、第二派は個想、第三人間派は小天地想也とし、逍遙が作者あはれ嘆賞しと感じて今の文壇の衆生のためにこの小乗教を說法したのだらうと云つた。

とにかく、當年文壇が主觀の狭隘と視域の狭小とに陷して遂に元祿文學の卑猥を學ぶに至つたは坪内始め一部批評家の取り上げて斥けんとした事で卑猥の背後に横はる主觀に自然派文學的解釋を施すものは未だなかつたが、寫生の立場に就ての論評は既にちらほら見え初めてゐた。何れにしても、寫實派は寫實の實と法の問題に接して仆れんとした觀がある。其様なこちたき論争に無縁なる渇々たる衆生讀者等も漸く無變化と狭量と無活氣とに倦怠たる趣があつて、大勢は何時しか久しく見た目面白く、場景變轉して波瀾多彩しき痴情小說の新形式を要求し、この欲求に應じた如くに現れたのは、さきに自滅に瀕した傳奇派源から作家を唯一の典型に終始として出でた所謂撥鬢小說の大本營ちぬの浦浪六、村上信である。

紅葉等寫實派の立場は「小說神髓」の提唱に促されたのであるが、その寫實精神の反發作用から見れば此れは一時的の反動派であり其本質は通俗興味で藝術派の風上には置けない痴情の大衆與文學である。「三日月」（二十四年）に初まり、「井筒女之助」・「一文字」、「奴の小萬」、「斯波傑」、「砂太波」、「斯親子」、「深見笠」「夜風」、「髭重」、「千利休」、「俤ノ自休」、「後の三日月」、「局御能」「安田作兵衛」、「新小說」、「たそや行燈」、「鬮卯盃」、「魚屋助左衛門」、「當世五人男」、「古賀市」、「十文字」、「海賊」、「後の海賊」、「日米助左衛門」、「化卓」、「大阪城」、「鬼劍」、「一狂歸」、「新兵衛」、「武者氣質」、「阿字門」、「しなさだめ」、「女ちどり」、「蔦の細道」、「浮世草紙」、「花房助兵衛」、「原田甲斐」、「浪花名物男」、「赤蜻蛉」、「三人兄弟」、「伊達振子」、「虛飾」、「時雨笠」、「落花浪枕」、「伽羅若衆」、「やみの闇」、「男山」、「武士道」、「なみ枕」、「雪だるま」、「金剛盤」、「うやむや日記」、「死に犬」、「石田三成」、「夜叉男」、「一軒屋」「吉田雄鐵」、「やまと心」、「日本武士」、「岡崎俊平」、「大悪魔」、「海賊大臣」、「高佐長右衛門」等の如く自然派文學の勃興した三十八年に到る迄の彼の目錄を年代順に並べて見ても、浪六の一本調子と通俗性痴情性は明らかにならう。この大衆文學が一般文學の冒瀆を受けた事は逍遙の「小說學校撥鬢科の教則」の相手にあげられた一事で瞭然だが、水谷不倒は「文學界」が浪六小說を「物語らしく評して Romance の類といひしは新しきに似て新しからず日本固有の金平本といふ恰好の名詞あるを忘れられしとおぼし、」と揶揄し、二十六年九月二十七日の「改進新聞」が浪六に俠奴と名け、俗町の親方と云はれる男伊達と四谷の御前とい

ふ[illegible]した[illegible]た、六月六日の「讀賣」は、我れ身を文苑に委して已に十有年[illegible]ばノ\〜空しと雖未だ甞て斯くの名に襲はれず」云々と元祿男の氣焔を紹介してゐる。而もその翌年には「萬朝」より非行（？）をあばかれた事もあつたほど話題を供した人物であつた。二十七年の早稲田文學一月號は前年を回顧して「探偵小說浪六小說の流行せしが如きは、此の長き幕間の Interlude（間劇）たるに外ならず。さて昨年の末に及びて次第に著くなり來りしは時代物（歷史小說）を要求するの聲なり。」と論じてゐるし、樗牛も同趣旨を「明治の小說」中に反覆してゐて此等の說は評壇の定說であつたと見て略誤りはないのである。後藤宙外が「浪六が作は自然に遠しと云はんより寧ろ人工に過ぎたる街道なり」と云つたは自明の理を述べたのみで、その人工性の中心に迫つて浪六の缺陷長所を上げなければ評家東道の役は果されない。

浪六が作は、「三日月」に初まり「女之助」「小萬」などを佳品とする。悉く異材同工の衒氣滿々たる詭激な任俠小說で場面の轉化と一回每の新趣好とを專ら主眼とした故「千篇一律。文字の洒落、脚色の斬新を衒ひ、又情操の掬すべきもの少し。」（樗牛「明治の小說」）と云つたはほぼ妥當の說明であるが、情操は即ち市井任俠兒家男女の情操、味もそつけもない所涙を見せてつゐこには[illegible]樗牛文の缺點に[illegible]を捨ふものあり」と云つたは大隈[illegible]當時の寫實派の方が寧ろ詞に於ても內容に於ても淡しく且多かつた、これ樗牛文の缺點の一、「文字亦杜撰蕪浪、生硬を以て意氣となし、晦澁を以て餘情となす」と云つたはただ一面の理で、浪六がしばしば出放題の粗笨な表現をする事は固より事實で興に乘つて一氣呵成を試るせいであらうが斷じて罪すべき惡癖である。が、生硬を意氣とし晦澁を餘情とは必ずしもしてはゐない。樗牛の所謂「瀾達物に拘らず、倜儻情に泥まない」任俠の野客の舉措を描寫し、今ならばそのまゝ活動寫眞にもせまほしきヤマ澤山の場面を屢々重來せしめる必要から、

涙と共に閑居たる於萬俄かに顏ふりあげて膝おしよせ「その方の御姓名は、御承知なされぬか」「何はいで宜いものか」「それでは、その方の御名を、何と」「貴様「ゑッ」

× × × × ×

まてば人の心いらちて一日の暮も長けれど、過れば三年の春秋さながら梭を投るに等しく、於萬こゝに歲を重ねて十九となりぬ……

の如き描法を時あつて飽氣なくせられたので、生硬を實氣上したのでなく所謂を餘情としたのでもなく斯る場合は生硬用意氣、所謂即餘情の奇異な境致を招來せしめたので、詳らかに讀めば深川深山の迷文句だが、筋に引かされて讀みもて行けば思はず片唾を呑むカン所も尠くはない。生來氣けづり通俗向きのこの作者をアトケス・ロケンジイの藝術的に安置せんとするは漁師雅五郎を顯音寺城の大廣間に押し上さうよりも不似合である。これ樗牛文第三の缺點である。

が、問題はこの大業物のみに含まるゝ作俠的ハツセイチズの藝術味にある。全體は悉く問はず、部分々々、又は數ケ所諸箱場面の藝術境にある。浪六の前に誰か小商の小商茶屋如き表性と性格の女將ぶりをかくも生々と描寫したものがあるか。昭和の御中島には幾分の厭味と下品とがあるが、正路小商と元祿小商とを打つて一丸とした浪六の小商にはこの昔だけの別境があり、その異所性を径尾の一二ケ所で一はけに描き出した所には他の同時代作家の企て及ばぬ獨自の詩境があつた。「帝國文學」記者は三昧の作中の女俠な浪六と激稱したが、此彼各特異の別境あり、三昧の人物は浪六とは自ら異り、浪六のそれは根本の缺點はあれど特殊の風趣を持つてゐた事は事實である。斯る俗小說中の藝術境致は他の一二三の作作に就ても云ひ得られる。が其小商も「十七の滿き內」も、思へば生命」の御殿女中時代描いた遊りは何だか竝んで源之助が性格に扮したやうなグロテスクと翻人形の無生動とがあつて感興が來ない。讀者が作家の半生を知つてゐる爲めと作者その人の役ちがひの不勝手とに基くからであらう。融通がきかぬといへば浪六程一本調子の通俗作家は外に一人もなかつた。その一本調子の音調で國民に傳說的に受ける本質の作俠肥を見せる所も、若い內の浪六には只青春の賜物である幾分の感激と幾分の夢見心地とがあつて無機的な內包の部分々々に溌剌たる生命を溢らしめたから、一篇中必ず二三ケ所の純藝術境があつたけれど、齡加はり世路を踏んでかの感激が漸く薄らいで只俗性で浪漫を重ね、いつまでも源之助型に義一押し通さうとなると俳優ならば山猿家の左場格ら許されもしようが、創作藝術家たるべき小說作者とあつては縱す下落するより道はない。撥鬢派廢れて大阪朝日に續きものを續ける頃は既に業に通俗作者としての眞價をすら疑はれるに至つて居た。

今この浪六を、その門下稻岡奴之助が五十餘篇の亞流通俗小說と較べるに、かれには時あつて藝術があるが、これには時の谷はこびがある丈である。かれには時あつて腹からの感激の喚息を吐くが、これには無意味な咳嗽があるのみである。かれの

文壇に一時獨自のスタイルを形成しかゝつたが、これは二面且來もどきの擬文である。背にこの二人のみでない、ひとしく通俗といひ煽情といふも待つて生れた賦性の才能の高下に甚しい距離ある事は兼めよく知つておく要がある。

これのみでない、形式は高級也とて藝術小說と他人もいひ我も許す作品でも只夫れ弓矢の把り方が法を眞似てゐるといふだけで、我流自慢の野育ちにはくらべ弓では力及ばぬへなへな武士が所謂文壇の片隅に生存するのは昔も今も變りはない。觀照の眼は少しも冴えず、固より語彙は貧弱で想像力さへいとど乏しく經驗もなければ學問もない青年作者の藝術小說の非藝術性は「小萬」の浪六や「小弓御所」の弦齋は愚か半井桃水が新聞小說、默阿彌、仰天子、新泉の通俗煽情小說家の佳品の妙趣なる藝術性には遠く及ばぬものである。只、前者が自己の所有する一片の性向をおほし育んで一倍の精進努力を續けたならば天才者の領域にはよし達せざるも一流の型を殘す事は或ひは不可能の事ではない。文章下手の感傷家少女病の田山花袋が自然派運動後今日に至る業績は正にその好例證である。後者は一部分の卓れし特長を有するも誤られたる藝術觀を自ら正誤する好機を失し、流俗の流眄の甘味にひたつて藝術上の苦心と藝術家としての精進をなほざりにする爲めその通俗性すらも一時の榮花で、多くは人知れず何處にか消失し顧みもしこてゐる風の事が重なることある。即ち一は條件附きの未來を有し、一は殆どこれに缺けてよる。通俗家の藝術性は、たとひろい藝術圏内の下部に屬するものの卓れた部分を闡明することが、同時代文學史研究の上から、俗文學史攷究の立場から、又、側面觀的時代史觀の見地から將へて（その通俗作家が一般文學史の相當の位置にある時はその作家に就てのあるモノグラフ研究の上から重大の部分となる事はいふまでもない。）一顧二顧の要を認めねばならない。若し又、昔よりの講談落語の類漸く飽かれ、新しき大衆文學が新聞や通俗雜誌の上で必要となる度合が將來ますます強いとすれば、大衆物の價値はそれ自ら異種の傾向文學としての地歩を堅める上からも、興味と性格と、激情と場面と等諸種の戰鬪に卒業した上で、獨自の立場を拵へ上げる必要がある。その時、昔の浪六、浪六及びその後に生じた蘆花幽芳等家庭小說の踏んだ轍を踏むことに滿足するか、少年の文學（ジュベニル・リテラチュア）といふが如き本質的の頂上でなくとも一種新領土を發見してゆくか、何れにせよ岐路をかりかけた人間は轉落する事でなければ進む以外に道はないのである。

撥發小說の次期に立つて通俗物と藝術小說との中間にあつた歷史小說家は塚原澁柿園である。村井弦齋もその一人であつた事があり、遅塚麗水も正しくその一人であつた。麗水、澁柿の

位置は弦齋よりも高級に算へられたけれども、作品そのものの價値から見て三人の位置は大同小異である。三昧や學海の努力は漸く過去のものとなつた。新歴史小說の要求は、前引文の如く、「早稻田文學」に現れ樗牛之に聲援してゐるが、その直接の民衆側からの要求の所因は奈邊に存したか。あまりに惡しく扱はれたる古代への再生であるか、回顧の風潮の文壇的感化であるか。

須藤南翠は二十五年「朝日」に招かれて大阪に移り、京阪讀者を對手となつて徒す流俗に阿諛するのみであり、福地櫻痴は任俠昨花りを見込んで二十七年「俠客春雨傘」を書き、史的興味の横溢を觀取して三十年「大森彦七」を書いた。場當り場受けを覘つた典型的の通俗劇作家であるが右の二編は作品にぞくする。續いて出た三十二年の「敵討嗟我院ケ原」は無味乾燥と機械的轉換との劣作で初期の「春日局」と呼應するかれの缺陷の曝露であつた。麗水が「照日の松」「半月城」は藝術的歴史小說としても通俗物としても有價値の作でない。雙柿園は史實の詮議が疎かならんことを欲した上に幕臣の出で相當故實に通じ、歴史的な雰圍氣の描出には恰好の知識の所有者であつたから、地形史實の細密な關心が極端にあらはれてともすれば讀者を混迷に導き勝ちなる上に文章やゝ晦澁で且地味であるから筋や文章の上から見ても通俗物ではない上に、新要求の歴史小說の性質を備へるべくあまりに舊風を墨守する既成作家であつたから、かれが生涯無慮一百編の小說多くは史譚小說といふ種の舊型にすぎず、又、その位置に於てのみ必ず明治文學史の一隅に殘存しなければならぬ作家ではあつたが、かれによつて新史譚小說の展開はつひに求め得られなかつた。二十八年の「最上川」の如き作品の一ともいはれたが、「東京日々新聞記者識す」と記名した櫻痴（？）の序に脚色の奇を說き山を出て實景を初めて見るをうべしといふ意味を云つてゐるが山を領する柿園翁での人にも判らぬ位に錯綜してゐる結構である。通俗文壇は柿園によつて何ものをも惠まれなかつたが將來の歴史小說家は何となくこの人や三昧の作、作の記憶に心引かれるに相違ない。「帝國文學」記者評して浪六浪香の文字なき床屋に讀まるゝに對し櫻痴雙柿は文字ある紳士紳商の間に讀まるゝは一段と上位ではあるが「長々しき雜報」程度のものにすぎずとの意をもらしたるは當時の批評を代表するものと解してよい。弦齋に至つては、「櫻の御所」、「小弓御所」、「衣笠城」、「鬼の兜」、「沖の小島」、「渡宋の船」、「松が浦島」、「鎧の風」、「關東武士」等の歴史小說の外洛陽紙價を高めた現代小說十數種を著してゐるが、これが浪六と共に典型的の運命的通俗作家として知られ、批評家はつひに彼を

[illegible]
版された時の[illegible]を引くと、
「一段の[illegible]、讀むに堪へず、[illegible]を偲ばする家庭の[illegible]本といふべし、古河の公方足利政氏の次男朝若丸、後に義明と名のりし明將が、家の動亂に逢ひて安房にさすらひ、舊業を恢復せんとして兵を起こしたれど成らず、佛門に歸するといふ筋、玉照姫といふ賢にして美なる婦人を點出して、因緣錯綜干戈殺伐の間に嫉妬、戀愛の綺艶を配したり、對話の文體は謠曲などの呼吸を取れるが多し、（定價三十錢）

——「早稻田文學」二十九年九月號——

とあり、ある雜誌の合評は更に突込んで筋の運びと作者の觀念のやり場との爲に生じた性格描寫上の荒唐無稽や事件推移の上の不自然を笑つた。畢竟新聞小說家にすぎぬとの下心に出た嘲評である。

浪六が任俠で國民昔乍らの共鳴を買つた如く、弦齋は諦念と可憐趣味と正義觀とで俗衆の日本魂を釣つた。此兩人を代表的通俗家とし、麗水櫻痴碧柿共上に位し、三昧篁村等一方の雄として又其上に位したが歷史小說はつひに新展開に至らなかつた。野心ある蝸牛の「瀧口入道」も散文の抒情詩に外ならぬ。即ち、擬贊小說後の史識的要求は、一面二十年代から盛んになつた[illegible]しめた事[illegible]した以上に、[illegible]國史を[illegible]たい欲望が[illegible]小說の[illegible]上に[illegible]にて[illegible]めであるが、時運未らず需要のみで依然たる[illegible]の反覆にすぎず、文壇主流に新しく觀念小說と稱された[illegible]小說の領土に出直したのである。

さて、弦齋の「小弓御所」には多くの缺陷と極少數の美所があり、この美所が弦齋小說中の殆ど唯一とも稱すべき藝術味となつて殘つてゐる。既に弦齋畢竟新聞小說家にすぎずとすれば、この通俗編情小說中の藝術境は如何の性質であらうか。新歷史小說出現の期待と風馬牛にあるは勿論だが、彼の俗受けは浪六の後を繼いで彼等よりも廣く長かつた。「小弓御所」の里見義明と鳩づかひの玉照姫の薄倖なる情事に纒綿する白瀧姫の嫉心や北條氏康の野望やの叙述の間に仄見ゆる例の可憐趣味と正義感と諦念との情趣の美である。部分を凝視すれば必ず描く全體を通讀すれば斥けがたき一種自然の快感がある。正に通俗小說の極致である。性格描寫の如何場面の轉化の不自然など詳かに見れば夥しい缺點をあげ得られる中に、この快感は斯る缺陷を萬々承知した上の快感で、而も捨棄てがたき秋日草花の風趣がある。これを藝術小說家の表看板めしい傾友末節の一

夜話に比べると或は觀念小説の跡を追ひ深刻小説のひそみに倣ひ、或は紅葉戲作の後塵を拜するにすぎぬ駄作の無責任と無感激とよりはこの稚い感激と單純な新聞小説めいた陳套な用語と習慣的な筋の運びの面白さの方が寧ろ優つてゐるものがある。固より河原に砂金を漁る流佞の快感にすぎぬが、かの倨傲なる拙劣よりはこの我と身を隳した俗文學の思はざる風味美の方が快い事は爭はれぬ。

弦齋がその作の出た後にも、奴之助、默阿、鷗月、探菊等に俗文學の作家は多いが稱るもの極めて少く、後年の蘆花は早くも同年の四月「恐ろしき一夜」(「國民小説」)を三十年一月「漁夫の娘」(「家庭雜誌」)を、同年一月の「國民之友」に「河島大尉」を翌三十一年の十一月「國民」に「不如歸」が連載せられた。尤も彼の初陣は二十四年臘月「國民」紙上に「夏の夜話」を掲げたに初まり、「夏」(二十九年「家庭雜誌」)「不思議の家」等を公けにしてはゐたのであるが。

その蘆花と菊池幽芳とは殆ど時を同じうして出發すべき新小説を新聞に掲げて新しき家庭小説の基礎を作つた。

五　家庭小説の序論

「家庭小説に含まれる種類、政治、探偵、軍事少年、宗教等の

諸他の俗文學に就ては少くとも三章程の紙幅を要する故こゝには序説の一部を摘記するにとどめる)

俗文學が民衆の最大多數と交渉を生じうる機會は、新聞と劇部とによる外はない。

半井桃水の記録によると、前田香雪が明治八年の「平假名繪入新聞」に「金之助話」といふを連載した事がある。これが「大新聞」に小説らしいつゞきものが載つた少くとも最初らしい。專ら政論を掲げるのが「大新聞」で艶種つゞき物のみを主とし政治は斥けて官海の異同などを報じるのが「小新聞」である。

十九年一月二十一日の「有喜世新聞」に、(露國の虚無黨は今度又風船よりダイナマイト(激烈の破裂彈)を下しガッチナなる露國の宮殿を破壞せんと企てしか事ならずして發覺し捕縛されし者數名なりといふ記事があり、情事殺人の珍らしきは續きものにして掲げてあるのなどそれである。

その「大新聞」に小説らしいものが公然と載つたのは上述の「浮城物語」が「報知」に掲げられた時に初まると矢野龍溪の談話がある、(「明治文化發祥記念誌」)

[illegible]には、[illegible]ことなる。
と、[illegible]「[illegible]人言[illegible]」に[illegible]の西南戰爭を揭げたのが十一年二月新富座に上つた時であるといふ。「續々歌舞伎年代記」を見ると同年二月二十一日から「西南雲晴朝東風」が新富に上演、これは守田勘彌が西南芝居の種に苦心し中井弘伊集院兼常光明寺三郎秋月種樹等から取材したと誌し、役者は宗十郎左團次菊之助半四郎仲藏菊五郎團十郎の一座で、團十郎の西條高盛（西郷隆盛）を見物した假名讀新聞社の魯文が南洲に因んで團洲と云ひ初めたのを團十郎も面白いと思つて自らも亦團洲と稱したと誌してある。

更に今一度桃水文に照すと、「東京繪入」には爲永眞水の人情噺が、「繪入自由」には櫻田百衛の馬琴體翻譯小說が、大阪の「魁」には桃水が小說を、十八年の頃「改進」に南翠が、十九年頃「讀賣」に加藤瓢乎が翻譯物を、廿一年「東京朝日」に桃水が小說を連載した。又、新聞小說が販賣高に直接影響し初めたのが二十年前後からで、翻譯の黑岩淚香、杉山藤醉、思軒、その外探劍、露柿、眉山、水蔭、柳浪、莎燈、筱亭、綠雨、三昧、篁村、半牧、眼八、文海、嵯峨の屋、霞城、得知、幽芳、仰天子、忍月、紅葉、露伴悉く筆をとつた。又、朝日社長村山龍平は常に「大家になるな、成るたけ骨折るな」と注意してゐた[illegible]

[illegible]物といはず、[illegible]物といはず、[illegible]といはず一般[illegible]物といはず新聞小說の世界に入れば[illegible]はこのいふだけ管である。場所の變化も取材の珍奇も凡て新聞社に必要である。民衆が衆愚と云はれねばならぬ限り、新聞は小說の作法上常に讀者への刺戟の程度を考慮しつゝ作者に煽情の注文は絕やさぬ。衆賢の無差別時代、思想上貴人の時代が出現せぬ限り如何に經濟上政治制度上の無差別觀が唱道せられても新聞を知識の唯一の機會とする一般讀者は絕えぬから、新聞小說が最多の讀者を背景として經濟上有力を持してゐる間、文學の一傾向として新聞小說は民衆教育の普及に從ひ極めて遲々と進步はし乍らも最も平俗の下級の水平線を占めて數に於て最上を示し且社會教育の方針精神と關聯して、人文教育の展開に伴ひ文藝教育が今後益す精緻に神經質に論究せられねばならぬ點から考へても、新聞小說の問題は等閑に附す事の出來ない重要問題の一で、その新聞小說は即ち通俗大衆的の煽情文藝の性質を當分變更する機會は當然あるまいから、俗文學に於ける藝術味、藝術心の俗文學的表現、作家自らの眞劍な問題として此等諸問題にからまる個人的考慮等につき考へてゆくと、單に大衆物だからとして棄てゝおく氣にはなれぬのみか、大衆物だから考へなけ

ればならぬ心持ちが反撥的に強くなる。藝術小說の作者にも通俗文藝の作者にも生存上及藝術良心上の個人問題にからんでこの問題は根強くのしかゝつて來る。少くとも、派の人々は左樣であるだらう。其等の問題を普遍化してゆくと、吾等は過去の俗文學中の作品についても今迄以上に愼重に綿密に考察する必要を感じなければならぬ。

明治通俗の娛樂文學の本流は、冒險物でなく政治物でなく主として傳奇小說と家庭小說とにあつた。就中、讀者の數の方面から見れば、所謂家庭小說が弦齋の「日出島」等よりけはひして蘆花、幽芳の出世作とともに勃興し、蘆花の「不如歸」が三十一年十一月に「國民」へ、幽芳の「己が罪」が三十三年一月「大阪每日」へ出たに初まり、爾來改元に至る迄、「緣の糸」といひ「曉風殘月」といひ「伯爵夫人」といひ「露子夫人」といひ「相思歌」といひ「妖ケ淵」といひ「女夫波」といひ「富美子姬」といひ「長恨歌」といひ「月魄」といひ「小華族」といふ著名の家庭小說が相次いで刊行せられたが、傳奇物語も家庭物もともに明治初期から中葉かけては凡ての小說家がこれを試作擬作して、殆ど凡ての藝術作家が同時に通俗家で、又、通俗作家が同時に藝術小說家であり、極めて新聞小說家的なる人々「例へば中間にあつては、桃水のごとく春葉のごとし」亦新聞小說家、通俗小說家として差別せられてゐたが、後又次第に變化を生じ來つて、文壇の變遷に伴ふて時勢の爲にふるひ落される者が續々と生じ初めに藝術小說家として立つたのが、其作家の晚年又は明治末期にはいつの間にか立派な通俗小說家として我れ人ともに認めるやうになつた人もあり（例へば天外のごとく眉山のごとく鏡花のごとく春葉のごとく紅葉のごとく風葉のごとし）、又新聞小說を踏出して時あつて通俗家に墮せんとしては作じて持ち耐へ結極藝術家として終始するに至つた人もあり（例へば秋聲のごとし）、且俗文學の地平線下に沒入となり忽然と藝術小說戲曲に復活した人もあり（例へば霜川のごとく靑果のごとし）人々の性格と境遇と事變と條件によりそれぞれの立場はあるが、明治終焉に近づくに從ひ新聞通俗家と藝術小說家とは判然と差別を生じて來て、一は多作して惰性の間に生き、一は自重して新生命を持續するのが大體二つの型となつてしまつた。

最初に殆ど一筋であつたものが終りに二筋を判然と劃するに至つた理は、文壇本部の進步と批判の峻嚴と通俗文藝の魅力性の增加とに基くものであり、讀者の增加と及びその二種類の差別の一層明瞭になつて來た事實を物語るものであり、而して、之れは普通教育の進步普及と文藝の讀物性絕對性の一般の間に

篇く[illegible]
往々[illegible]しつゝあるとはいへ、或る時代、或る期間に於ては文化的現象的傾向は直ちにその時代の青少年の智識の水準を低下させる。二十世紀に生れた少年も棄てゝをけば退たる原始人の智識とは異るものでない。文藝に於ける讀者も亦さうである。自棄時代、維新時代の讀者の低級は、しば〳〵一昔前の讀者の洗練せられた趣味識にも劣る事があるを發見する。一進一退して時代は展開をつゞけてゆくからである。われらが通俗煽情の文學に對する懸念はこゝにもある。蘆花の「不如歸」は類型を描いて個型に及ばざる俗小説の典型であつたが、同じ作者の新聞小説「思ひ出の記」は等しくこの缺點に立ち乍らも熱情高き主觀の高調でこれを救つて通俗畑にあつて、所謂藝術畑の二流作以上の藝術味を發揮した。これ、通俗文學の一つの勝利であらうが、新聞小説そのものの程度の向上が作者と作品とに幸ひした事實も否却する事は出來ぬ。しかもこの勝利は一に作者の天稟が飽くまでも生來この種の通俗畑に適合してゐる事を證據立てるものであり、今までの習慣的手法を去つて素人らしい取材と取扱ひ方とによつたのが成功の直接誘因となつたのに外ならぬ。幽芳以下に就ては他に閑を俟つて細論し蘆花と照應せしめ風葉春葉以下との關係と變遷の跡と其藝術性とを論じ、合せて

▽見世物研究　朝倉無聲

右一篇は筆者が前後十數年に亘つて調査研鑽したる三百枚に近き長篇にして本號より掲載の豫定なりしも頁數の都合にて次號へ割愛したり此旨筆者並びに讀者の御諒恕をこふ

大衆文藝の本質

千葉龜雄

民衆の發見と民衆文藝

わが國で、民衆藝術の名が始めて叫び出されたのは、もう十年か、或はもつと先の事であつたらう。今日では、誰も民衆藝術とは云はない。十人が十人まで、大衆文藝といひ、大衆藝術と呼ぶ。この大衆文藝の標語が、わが國で耳新らしく叫び出されたのも、何でも大震火災の後の現象であつたやうに記憶する。さらば、民衆文藝が、大衆文藝までに推出するには、そこに何等かの、内在的必然があつたのか。そして民衆文藝と、大衆文藝の定義の相違が何であるのか。

いはゆる民衆文藝なる叫びが、何に暗示されてわが國に叫ばれ出されたものか。これは恐らく十年も前に呼び起されたデモクラシイの運動が、「民衆」なる言葉に、新らしい血液と營養を吹き込み、民衆の胸に、強い自覺と自信をかき起したことも、一つの原因であつたに違ひない。デモクラシイが、現實の改革運動であることの先きに、先づ、思想改造運動であることを本とするならば、それが藝術の流れに注ぎ込まれた刹那に、藝術の新らしい一角面に、民衆藝術が現はれて來るのは自明の理だからである。が、わが國の民衆文藝が、あれほど文壇當面の、敵についた運動となるには、まだその外に、もつと直接な衝動を、外から期待せねばならなかつた。その衝動を與へたものが、即ち、古くはトルストイの「藝術論」であらうし、また、新らしくは「民衆劇場」のロマン・ロオランであらう。次いでは、その後に來たところの、無産階級藝術の高揚であらう。

ロマン・ロオランに從へば、欧洲でも「最も貴族的であるフランスの藝術が」、「大衆を認める」などといふ「不思議な現象」を見たのは、わづかこの「十年前のこと」であると云ふ。彼は、一九〇三年著の「民衆劇場」でそれを云ふのだから、今日からは卄餘年前と書き直されねばならぬ。が、もちろんフランスの藝術家とても、その前に、民衆の存在を知らぬ譯はない。

たゞ民衆を、[illegible]、[illegible]ところのみ從つて居たので、生きた一つの[illegible]として、對等の地位に依り上げやうなどとは、夢にも思ひ付かれなかつたのだ。詩人ロオデンバッハが「藝術は民衆のために作られるものでは無い。……もし民衆向きの藝術を作るとしたなら、藝術の本質を、彼等の居る地面まで引き下げねばならないから」と歌つたのが、いかにもよくその氣持を言ひ現はして居る。

然るに「社會主義の進長が、新らしい君主の存在を」藝術家達に注意させることになつた。そして、作家や俳優は、始めて「民衆を發見した」とロオランが斷言するのである。

時間と文華の交渉

が、その後がいけない。ロオランは說くのである。彼等が民衆を發見したのは、まことに結構なことなのだけれども、その發見は、云はゞ探檢家が、生產物を賣りつけるための、新市場を發見するやうな仕方の發見であるのが可けなかつたと、なぜなら作家は、この新華主へ、爭つてその制作を賣り込まうとあせり、國家はまた、貯藏物の捌け口を、何でもそこに見出さうとする。それにかゝはらず、民衆自身の生存力は、ぐんぐんと伸びて行く。それに連れて、この公衆的な利得を、自分だけの私有に[illegible]手して進む、そこで、二つの[illegible]、その中[illegible]ばならなかつた。それは、民衆の[illegible]に[illegible]、[illegible]に而もなものになつたことがその一つである。他の一つは、チ[illegible]チック藝術の本質が何であるかに關して、意見が少しも一致しない。と云ふよりも、意見が、つなぎ合せられぬほど、どれもが不同であり、種々雜多に分裂して起つたことである。そこでロオランは、民衆劇場についての、二つの代表意見と見られるものを並べる。それは全く正反對なものである。前者は、「劇場なるものがかりにも劇場として存在する限り、今あるやうな劇場を、民衆に與へやうとする」のであり、後者は、この新生力たる民衆そのものによつて、その中から、全く新しい劇場を生み出さうと企てるものである。前者は劇場に依賴し、後者は民衆に依賴する。二つの間に、共通な何ものも存在しない。前者は過去の代表者であり、後者は未來の先驅者である、云々。

そこでロオランは、理論の順序として、どんなよい藝術も所詮は抽象した永遠性を持ち得るものでないことを、改めて說明せざるを得なかつた。彼は說くのだ、なるほど古い藝術で、今日でも相應に尊ばれ、またわれ等の上に、多少の魅力を投げかけるものはあるにはある。が、それがたとへ在るにしても、

この魅力が、正しい効果を含んで居るものかは、たやすく断言されない。なぜなら、どんなすぐれた藝術でも、時間と空間の約束を受けずに存在し得るものは無いからだ。で、どんなに美しくどんなに良いものでも、それが絶對に流轉せぬ存在だと思つたら大きに違ふ。先づ、表現の方式が、人間心理の變化と比例して移つて行く、また、或る世紀で、ひどく高尚で雅致な文學だと讃美されたものなどは、それが他の世紀になると、恐ろしいほど、時代錯誤に見える、それは、誰れも知るところだ。中世紀の彫刻家達は、裸體は、醜形そのものだとして跳ねつけて居た。彼等によれば、「着衣こそは、肉體を雅美にする要具だ」と信ずるのであつた。新らしい時代には、だから前代と型の全く違つた、新藝術が起らねばならない。民衆藝術の如きは、明らかにその使命を持つものでなければならない。

大衆文藝とは何ぞ

そこで、民衆藝術や、もしくは民衆文藝は、上に述べたやうな使命の下に生れて來たときめて置いて、さて、民衆文藝は、大衆文藝とどう違ふのであるか。大衆文藝の定義が何であるか。それは、人々によつて種々にも説明されるのであるが、まだ、これで充分だと云はるべき定説もほとんどない。たゞ、大衆作家自身の、制作する形式がおたがひに異なり、また大衆文藝に對する、意見はたとへそれぞれに違つて居ても、それが民衆のために新しく生れたところの、藝術の一面であり、從つて、どんな程度でか、過去の既成藝術意識に對する反抗と革命であると思惟されて居る。そこに、民衆文藝と、根本的に共通する信條があることは確かだ。トルストイも、ロオランも、People とも云ふし、Masses とも云ふ。People を民衆とし、Masses を大衆とするならば、その意義はたしかに共通する。

けれども、もう一度眺めて來ると、わが國の大衆文藝作家が、定義としては、たとへどんな信條をいだいて居るにせよ、これを作品の上で現はすところによると、それは、いはゆる民衆文藝とは、よほど筋の違つたものになるのではないか。むしろそれは、ポピュラア・ノベル、もしくは、「通俗小説」もしくは、新らしいロマンスなどの項目に並べて討檢されてこそ、然るべきだらうと考へられるものも多い。もしそれが本筋であるならば、大衆文藝は、少くとも民衆文藝と、可なり合ふ個所では決してない。それについては、更に後章で考へて見る。

で、こゝでは、民衆小説と大衆小説とを、同じ意味をもつた。違つた命名であるとして解釋してかゝる。

さて、國民を民衆の名で數へる時には、そこにある社會の成

目は、[illegible]、三
るに、そこに[illegible]に、民衆や大衆の名[illegible]せねば
ならぬとしたら、それは民衆や大衆の外に、それとは違った、
どんな部類かが別に存在して居るからであらう。それなら、民
衆や大衆と違った部族とは何であるか。階級とは何か。ロオラ
ンは、それを民衆とブルジョアジイに差別する。「民衆劇場が起
された！なるほど？それは、ブルジョアジイの劇場の名を、民
衆劇場と變へただけぢや無いか。それだけの話だ。あらゆるも
のが流轉する世の中に、古い藝術のみが、固着して殘されて居
る。かくてわれ等は、思想にも、様式にも、演出にも、何一つ
生氣が見られぬやうな劇場、生命の無い、腐敗した傳統のみに
こびりついて居るやうな、そうした劇場に縋りついて居ねばな
らぬことに、われ等は久遠に罪なはれたのである」と彼れが高
唱するところを見ても、民衆とブルジョアジイに對する彼の意
見がわかる。次にトルストイは、民衆の文藝を、上層階級のそ
れと差別する。上層階級には、貴族と、富有者と、有閑階級の
すべてを包含して居る。それなら、上層階級の文藝がもつ缺陷
は何であるか。トルストイは、それは、歐洲のすべての上層階
級を浸す毒素だとして、文藝における三つの缺陷を數へる。第
一は、文藝の主題に當然缺けてはならぬところの、無窮で、變

化に富み、[illegible]
その[illegible]、それには式
の美も無い上に、附け焼刃で、[illegible]が無い。第二には、これが
一番の要素と見るべきものだが、それは、現代の文藝が、自然
なところ、純眞なものが悉く失はれて、すつかり人工的にな
り、やくざな思ひ付きのみで出來て居ることであるといふ。一
體眞の藝術が何であるかとなら、また何人にも試みられてない
新經驗な文藝で報告し、その新經驗の中にひそむ苦の、新鮮な
感情を、讀者に移入することにあるのではないか。この素らし
い感情によってこそ、民衆は、始めて生き生きした、ほがらか
な、生の觀びを鼓舞される。しかるに上層階級が求めるもの
は、いつもたゞ久遠の歡樂であるが、歡樂といふものほど古び
て、疲れて居るものは無い。ガンチャロフは、ツルゲニエフの
「獵人日記」を讀んでそこに在る農民生活は、何一つ書殘した
ものが無いほどに書き盡されたと云ふことから、農民や勞働者
の生活は、それほど單純なものであると推論した。そして、富
有階級の生活こそは、無盡藏な材料をひそめて居ると云ふ。一
人の男が貴婦人の手の平に接吻すれば、次の男が肘に、三人目
の男が、またどこかへ接吻する。一人の男が、暇で困る。それ
が不平だといへば、次の男は、人に愛されぬのが怪しからぬと

經驗する、かういふのが彼等の生活に、無限な變化を持つて居るなどと云ふのだ。が、トルストイはそれをかう否認するのである。われ等上層階級の生活に、何の生甲斐ある變化があらう。彼等の情緒は極めてやくざなもので、それに單純極まつたものだ。云はゞ、誇りの感情、性慾の感情、人生に疲れた感情と、たゞこの三つの情緒だけが、彼等の藝術の主題となるに過ぎない。が、實際この三つの情緒は、ほとんど動物の境界まで墮落したやうな、最低の性的慾望なのである。で、大衆や民衆がもとより斯うした文藝を、生産しないのは云ふまでもないし、また、こんな文藝をえらばうなどとは少しもせぬのだが、文藝の方が、いつも彼等の通り相な往來に立ちはゞかつて、しやにむに押賣りをしやうとする。ところが現代の藝術は、第一彼等にとつて高價なために近よれない。また近寄れたにしても、富有階級の娛樂なんてものは、勞働者などにとつて、まつたく沒交渉であるばかりか、反對に、嫉惡と公憤をひき起す役目をつとめるだけだ。それならトルストイが云ふやうな、個人と人類の福祉と進步に缺き得ないもので、個人と個人とを、共通した感情で結びつける最高の大衆文學とは、一體どんな内容を含んだものであるべきか。その要件の第一は、際立つて深い個人性であり、第二は、記述の明晰なことであり、第三は、藝術家の誠意であるとトルストイが斷定する。が、かれは續けて說くのであるが、凡そこの三つの條項は、最後の「誠意」の中に悉く含まるべきものである。なぜなら、作家が誠意に燃え立つならば、彼は體驗した通りの感情を、そのまゝそつくり、如實に表現する筈だから。また、作家が一人一人、誰とでも違つて居るならば、その感情は、誰にとつても全く獨立した個性的であるべきである。で、その深い個性人が、その個性の深みを、强くひき出せば出すほど、その藝術は、なをと同情に富み、まごころに燃えるであらう。藝術家が、その傳達すべき感情の表現を、もつとも明晰な叙述で現はさざるを得ないわけは、實にこの同じまごゝろがあればこそである。で、以上三つのものを通じて、一番重要なのがまごゝろである、誠意であるとし、農民藝術が、いつも力强い内性をふくむのは、このまごゝろが含まれて居るからであるとトルストイは云ふのだ。

ノルドオと貴族文學

これは插話だが、これほど叙述の明晰を高調するトルストイが、ノルドオや、ド・ヴオグユエによつて、トルストイは、極端にだらしの無い叙述をする作家だときめつけられたのは、いさゝか興味が無いでも無い。ヴオグユエはトルストイの「戰爭

ところを一について、[illegible]、一[illegible]かれたと見られて良い[illegible]に云ふのだ、この小說を讀んで、もし[illegible]求められるものなら、それは[illegible]山の樂しみのやうなものでもあらうか。[illegible]しくてひどく披れる。折には道をはぐれねばならぬ。一とをりの[illegible]じやない。何もかも選擇無しにたゝき込む、この作家は、題材に對する分析の義務がどうもわからぬものらしい云々。マックス・ノルドオが、またそれを批判する。トルストイには、ツルゲニエフの持つて居たやうな、構成上の釣り合ひの觀念が全く缺けて居る。それはトルストイの飛切りの禮讃者さへも認めるもので彼は、下らぬ瑣事を長々と說明する。あまり肝要でない部分を、好い加減に切りつめる事などは一向思ひつかない。ヴォギユエは、トルストイが、なぜこんなだらしの無い作家であつたかの理由は結局見破れなかつたらしいが、自分から見れば、それは集注力の缺乏といふ事に歸されると思ふ。集注力の缺乏は、現代貴族文學の一病兆であるところの、神秘主義病の明らかな徵候だ。この集注力があればこそ、始めて渾然たる現象の中から、描くべきだけの題材を擇び出し、その突角をはつきりと讀者の心象に印銘させることが出來るのだ。ところが、集注力が缺けて居るなら、宇宙はたゞ見通しの利かない一望の謎と[illegible]、[illegible]き[illegible]ない[illegible]云云ふ、ノルドオは、神秘主義の一患者として、[illegible]トルストイをきめ付けて居る。もともノルドオは、藝術に、民衆文學の對象として、藝術上の神秘主義や、自我病や、寫實主義を攻擊して居るわけでは無い。たゞ十九世紀末の世紀末病が、時代文學の主潮にまで浸潤して、時代頽敗の前衛をつとめて居るのだと見る。そして、トルストイ、ワグネル、イプセン、ゾラ、ニイチエその他を、片つ端から俎上に上げて居るのである。

で、たとへトルストイがノルドオにひどく叩かれたにしても、彼が藝術表現における明晰と簡明を理想とした目標は買つてやらねばならぬ。もともと文學が高踏的になり、神秘であり、民衆がたやすく近づけ得ぬやうになるには、二つの立て前があるらしい。一つは作家の惠まれた天才が常人のとてものぞき得ぬほど深奧なものである場合に、表現が誰にもわかり易くなり得ぬのはもとより許せる。たゞ、文藝をしいて實人生から遊離した特殊な營みとし、藝術のための藝術に入り込み過ぎた時に單に難解であるものに神秘があるとして、自己優越をほこらうとする文藝が出來る。或は、自分で意識しないで、さうした雰圍氣にまき込まれて居る時もある。とかく世紀末の世界は、感受性

の鋭どい。藝術家達を、白日夢のやうに曖朧な、氣分にひたらせるだけの要素に富んで居た。かくして世紀末の文藝に、病的な藝術の特殊化が生れた。そこで「健全」な文學は先づその貴族的な思ひ上りと、病的妄想から分離し、明晰なもの純眞なものに立ち返らねばならぬとノルドォが說くところに、どこかトルストイの主張と、投ずるものがあるではないか。

ここでわれ等はトルストイの上層階級と民衆文藝との對比、ロオランのブルジョアジイと大衆文藝との對比の外に、ノルドォの貴族氣分を充した、頽廢的文學といはゆる民衆の意識を健全にすべきところの非世紀末文學との對照を眺めることが出來るのである。

それならわが國の大衆文學は、前に擧げた人々が、來るべき文學だとして約束したやうな、さうした定石を踏んで居る傾向を持つものであらうか。さうだ、或るものは、或る點までその法則を踏まうとして居る。けれども、或るものは、ほとんどさうした法條には沒交渉なもののやうに、全く思ひも掛けない方角に動いて居るやうにも見える。

二種の大衆文藝

一體民衆文藝には、二つの制作上の立場がある。一つは、民衆みづからが作る文藝である。現代までの民衆は、自分を發表すべき口も、ペンも、乃至は知識をも、立ち場をも持たなかつた。然るに今日は、それと反對な地位に置かれる。民衆は、彼等がそれぞれの自分の環境に即して、自分の生活を語り、詠嘆し、もしくは訴へ、批評する自由が與へられた。農民文藝や、勞働者階級からの、文藝がそこで生れ出ねばならぬことは自然である。そしてそれ等は、みなそれぞれの自己の生活に即した表現であるからもとよりトルストイのいはゆる貴族富有階級や、ロオランのいはゆるブルジョア階級や、ノルドォのいはゆる、世紀末文學のやうな、疲勞と灰白色に滿ちたもので無いのはもちろんだ。その意味で、はつきりと階級的、生活的な色彩を可なり濃く表現して居る。われ等が現代の文藝の範圍で、何ほどかでも、いはゆる新民衆文藝の芽生えを發見するのは、半分はこの方面においてである。またあらねばならぬ。それは將來において、藝術の權能を特殊な藝術階級から奪つて了ひ、藝術を大衆のものに引下げる時代を約束するものでなければならぬからでもある。

民衆文藝の他の一つは、民衆自身が作る文藝では無くて、民衆のために作る文藝の側である。作家、戲曲家の世界である。民衆は解放されたといつても、まだ自身を語るべき充分な用意がない。民衆の言はうとするもの、または、民衆が言はねばならぬものを、藝術家が代つて語り、或は指示するのである。大

[illegible]らう[illegible]か、現代の[illegible]大衆文藝、[illegible]へば、作者[illegible]衆文藝は、その一線で、どれほどの要素を擧げて居るのであらうか。それを突きつめて來ると、どうも現代の大衆文藝たるものは、やはりいはゆる民衆文藝の法則とは、いちじるしく變つた規範を持つもののやうに思はれる。すると、いはゆる、大衆に代つて代言すべき筈の大衆文藝とは、民衆文藝と全く違つたところの、別な要素から生れる筈のものだらうか。先づ疑問點を附けねばならぬのはそれである。

大衆文藝の三特性

さらば現代のわが大衆文藝が、一體、どんな要素と約束の下に生産されつゝあるか。先づ現はれて居る傾向の上から見れば、大體、三つの特性をえらび出すことが出來やう。第一が、ロマンチックなことである。第二に、啓蒙的である。第三に、作家が物語作家であり、作物が「讀み物」であり、そこで大衆文藝は、いはゆる高級藝術に對して、別に何等かの、違つた地位を要求して居るかに見えることである。

先づ第一の條項を眺める。現代の大衆文藝を、取材の上から大きく分れば、時代物と探偵物とし、その上に新聞小説や娛樂雜誌の讀み物に屬する世話物を含めて、大體三種類とすることが[illegible]で、[illegible]として、[illegible]い。想像力を自由に働かして、思ひのまゝの[illegible]讀者に働らきかけることが出來るからである。次に探偵物は、人類が持つ限りの悪魔性と、狡智と、好奇心と、想像力の[illegible]を複雜に交錯して、どれがどれを征服するかの闘爭の過程に、極度に讀者の好奇心を釣り込んで行く。また、讀物としての世話小説では、現實に有り得ない偶然の事實をむやみとこね合せて、現實にあり得ない戀の喜悲劇や人生の假象を示すことによつて、讀者の麻痺された理想世界に滿足を與へる。

第二に啓蒙的であるとは何か。大衆作家は意識すると、しないとにかゝはらず、みなロマンチックな主題を採る。それは差支へがないにしても、それが理知よりも、より多く情操に訴へるところから、わり合に、教養の低い階級に入り易い。理知は教養によつて育くまれるが、情操は生れながらに何人も持つて居る。がおそらく大衆作家は、共通な想像力と、ひきつけられるやうな技巧によつて、さうした階級の、弱々しい感傷性のみを煽つたり、或は原始人のやうな烈強な闘爭感情を、現代人に過度に昂奮させることなどの陶醉のみに、自分を投げ込んで居る積りでは、まさかなからう。たゞ、大衆を、さうした教養の

低い階級の中に見出し、先づ手近い所から途をつけて行つて、だんだんと崇高な藝術までに彼等の手を引いて行く積りらしい。たとへ事實はどうであるにせよ、どの大衆作家も、大衆文藝を、かうした過程の階段にあるものとして信じてゐるのは爭へぬやうだ。

そこで次の問題が、前の論理をひきついで考察される。すなはち大衆作家は、たとへ現實の大衆文藝を、完成の過程にあると見るにしても、これから完成した曉に、他の高級藝術の内胞に全く抱き取られて、大衆文藝が、そこで消滅するものだとは思はれてゐないやうだ。たとへ大衆文藝が完成しても、これはまた完成した大衆文藝として、他の完成した高級藝術と別に、同じやうな王座を占めやうとするのらしい。たゞ今日はまだ不完にして、完成したいはゆる大衆藝術の典型なるものが示されて無い。従つて、大衆藝術がもし民衆藝術と型を異にしたものであるとしても、さてこの大衆文藝の概念なるものが、どんなものであるかを確實に摑むことが出來ない。そこで差當つて大衆文藝を考察するには、たゞ當面した現實により、そこから以て功過狀を認める外は無いのである。

通俗小説と大衆文藝

で、もし、當面の大衆文藝だけについて率直に言ふならば、これは讀み物の名において、一つの通俗文藝に墮する危險を認めないわけに行かない。或は、始めは通俗なものから行つて、高級なものまでに引上げるのだと辯護するであらう。それについては、われ等は、歐洲大戰前後の歐洲劇場を想ひ出す。歐洲大戰當時においては、どの國でも、劇場の觀客ががらりと變つた。即ち座席は、重に歸休した兵士や、新たに職業を得た婦人達によつて占領された。搾取に鋭敏な劇場主たちは、早くもそれを見てとり、さうした低卑な趣味のみを迎合するために、戲曲を、むやみと激情的で、下品なものに取りかへたところが、素的な當りをとつたのである。然るにその一方には、極めて少數の通俗劇場、或は民衆劇場がある。そこでは、觀劇料を極端に廉くすることによつて、無產階級の觀劇に機會を與へた。これと同時に、最高の藝術價値をもつた名作のみを撰んで興行し、藝術に觸れる機會の無かつた民衆に、藝術への憧がれを誘發したのである。それは先づ獲物を與へて置いて、それから高價なものまで引き上げることでは無かつた。始めから、まじりのない價値を與へるのである。なぜなら、もともと教養の無い民衆に、純眞な藝術味を吹き込むのは可なりむづかしい。どうかすると、彼等は、理解のとゞかない崇高なものよりも、自分達の

も[illegible]
このために、[illegible]
に引き上げた事は、[illegible]
作家の役目を[illegible]、方、[illegible]
い危險を持つのもそこにある。

さらば通俗小說とは何であるか。いはゆる「成功した」と呼ばれる性質のものである。「成功した」とは、「評判がよく」て、よく「賣れる」ことを指す。それなら、成功する小說の條件が何であるか。それを數へやう。第一には、割合に教養のない人達にもわかるやうな、言葉や、文章やをうまく支配する才能を持たねばならぬ。次に、誰でもが共通に持つ筈の、「感情」を狙ひ、かつ感情に訴へるものでなければならぬ。そして、その感情も、文章も、脚色も、思ひきつて強烈な色彩と挑發力を持たねばならぬ。教養の缺けて居るものには、現實の姿を、いかに如實に、また微妙に藝術的に描いて見せたところが、自體、まことの現實そのものに向つて居る彼等であるから、それでは何の興味もないのだ。そこで飛切り現實と分離した手法によつて、彼等の感覺を衝動させねばならない、「人生の事實が、たとへ文學といふ硝子を通して現はされたにしても、通俗人は、それに見馴れない。だから、ただぼんやりと眺めるだけだ。で、それを彼等に

[illegible]
[illegible]
して日限前に名を知られた。彼女の成功の[illegible]
[illegible]
問題を摑み、誰でもが自ら言つて居ることを、もつと明瞭に、もつと力強く、もつと修辭的に述べただけの話だ。彼女の重な長所は生氣と熱烈である。彼女の重な缺點は、騒々しい挟瞞主義が、充分思想の代りになると思つて居た傾向である。われ等は、彼女の才能をも尊敬しないし、また彼女の想像力の熱光に眩かされもしない。しかし、彼女が戰鬪的であつたことだけは許されねばならぬ云々。

わが大衆文藝の傾向においても、かうした傾向が多分に含まれぬと誰が斷言し得るが。

けれども、いはゆる大衆文藝が、たとへばそのやうなものだとしても、それが、ロマンチックの氣分を、多分に含んで居ることを、決して時代錯誤だと非難するものでは無い。むしろ現實主義が大宗である時代においては、なぞとロマンチックな氣分や、藝術が要求されるからだ。

われ等は、どんな科學の世界に生きても、いつも潜在意識に縛られて居る。いつも原始の自然と神秘をあこがれて止まない。まだ、現代は、資本主義崩壞の末期に瀕したためか、[illegible]分が、あまりに焦燥して居る時代である。神經も感覺も尖つて來て居るのでもあつた。この上に、生活の恐怖と不安が伴なう、絕望の實在でもある。そこで現實に生きる人にはせめて、空想の上にでも、かくあるべき樂園を求めやうとするであらう。或はまた闇みのやうた絕望に押し伏せられたから、なを强い希望を未來に望んで居るものもあらう。そこにもまたロマンスの世界がある。また人類の現實は、意識においても、行動においてもすべてが有限と行がい中に棲む。そこで人人は、その煩はしい一切の限界を打破つて、意識界を超絕したところの、超人的な行爲をやつて見たいとも望むであらう。そこにまた傳奇的な、一つのロマンスの殿堂が建つことにもなる。思ふに大衆文藝の主とする劍戟物や、探偵物や、もしくは怪談ものは、大抵これ等の條件から生れるところの、必然な作物でなければならない。いかなる時代にも、ロマンチックな精神の愉びはあるが、ことに現代文明が、なぞとこうしたものを、反射的に要求するものである點から見れば、現代において、かうした大衆文藝の存在することも、あながち不合理ではないであらう。ただ、存在の理由から見ると云ふことが、存在するものの本質までに立ち入つて、その一切を肯定することであつてはならないまでだ。

大衆文藝の誕生

次に、大衆文藝が叫ばれ出してからこの方、どれほどの年月を經たものか。われ等はそこに、量においての、または材料の幅においての擴がりを見るのではあるけれども、質においての開展がどれほど成功したかを知らない。それは第二次元の世界である。まだ第三次元までに進展しない、そこで大衆文藝が、何のために、大震火後の流行となつたかを振りかへつて見やう。

思ふに、大正十二年九月の關東大災の直後において、一つの題榮が文壇に提出された。災後の文壇がいかなる動搖と變化を受けるかと云ふのだが、その答へには、娛樂物が全盛であるべきことを豫言した人々が中々多かつた。理由としては、民衆は、いま、あまりに傷ましい辛酸に押しひしがれ、ひたすらに精神の慰樂にあえいで居るからだと言ふのであつたが、豫言はお手の前であつた。やがて娛樂物全盛の世紀が來た。どんなわけからか、大衆文藝の叫びも、またこの頃からぼつぼつ聞かれ出して來た。これは誰にも共通して、面白く、分り易く、肩の凝らない平易な文藝といふ意味もあり、また、それが要求されるだけ大衆

の時代に一ばん好まれたものだといふ無邪氣さ[illegible]たた。そ[illegible]して以下のものが、何れにも無邪氣に[illegible]であつたさげられ[illegible]が、とにかく劇には[illegible]が流行した。大衆文藝の主潮は、武道時代の武士や俠人や劍客がえらばれた。それは、一つは、自然力復活の心理とも見られやう。なぜなら、地震と大火といふ自然力のあらびは、文化人の胸に、とつさに、原始の自然性と、闘爭性とを復活さした筈だからだ。そこで殺伐が一つの趣味となつた。そうした無氣味なサド趣味が、一般の好みとなつた。もつとも他の一つは、超人のやうな劍客の飛躍などが、民衆の無邪氣な想像力をそゝり、彼等の理想するものがそこに滿たされて、佛教と法悦の滿足を與へられたためもあらう。また一つは、自分等に關係の無い古い時代の歷史だから、それがどんな殘忍なものであらうと、現實に實害や交渉がないといふ、時間の觀念も一つは宿つて居たであらう。

けれども、大衆文藝が、單にこの境地に止まつて滿足して居られるものなら、それはやはり一つの安易な「娯樂」を提供したのに過ぎない。娯樂もとより結構である。トルストイは、藝術に於ける娯樂や慰藉の分子を極端に排斥したのであるが、藝術の一職能が慰樂にあることは、トルストイが何と云はふと動かせない眞理だ。で、問題は娯樂が惡いのではない。娯樂の中に、いふ[illegible]である。[illegible]も、[illegible]に、人生に[illegible]人間の心理を、深い深い眞理と[illegible]の殿堂にまで引き上げてゐく。で、大衆文藝が、娯樂の底に、その[illegible]といふ作を持つてゐるか、どうか。それが唯一の問題だが、おそらく、大衆文藝のあるものは、それを缺き、或は忘れて居はしまひか。

浪曼文藝と理想

ロマンチシズムを主潮とする大衆文藝が、もし、民衆文藝と或る繋がりを持つとすれば、それはそれがロマンチシズムの約束として、そのロマンチシズムの中に、一つの理想を含むものであることでなければならない。もとよりどんな藝術も作家の理想を現すものだといふ意味ではどの文藝も一つの理想である。或は現實主義の作物は理想を含まぬと云ふ。それならトルストイの「復活」はどうであるか。それは立派に現實主義として通つて居るのにかゝはらず、他方に完全な理想小說なのである。それは現實の人性が、新約書の敎義によつていかに再造さるべきかを語るからである。たゞ現實主義の理想と、ロマンチシズムの中の理想が違ふところは現實主義がたへと理想を含むにしても重に現實の描寫に力點を置かれるのに比べて、ロマンチツクなもの

は、題材や人物の選擇に於いて、積極的に作家の理想の力に自由に依頼されることである。かのノベル賞は、重にかうした傾向を持つた中の、優秀な作品を目がけて贈られるらしい。またたとへば、わが中里介山氏の「大菩薩峠」は、氏が机龍之助の性格に興味をもち、ほとんど彼一人の性格のために、あの大小說を構成したかにも見られるが、しかも全篇を通して、一貫した氏の理想や人世觀が、絕えず隱見して現れて居る。多くの大衆小說が、大根を切るやうに八つあたりに殺人する劍人を、無條件で偉大だと禮讃し、その時代性を肯定して居るかに見えるが、中里氏の机龍之助は、たゞ一人の心理異常者として現はれて居る。意識や後天的なるものがどうともし得ない惡みを持つたところの、自然現象として眺められて居る。そこに、傾向小說でもある雄大な異色と、現實主義である諸人物の個性が對立し、融合するもので、こゝに「大菩薩峠」が人をひきつける魅力の一面が說明される。もちろんそれだけに深入りして、それ以上動きの取れぬやうな形に見えるのは好もしくもないが、それを別問題にしても、もし現代の新らしい大衆作家が、その自由無碍な想像力を働かせるならば、そこに新しい大衆の行くべき途を示唆し、それを制御するやうな理想を充す材料はどこにもあらう。と云つて、それはよくある理想鄕物語の類ではないのはもちろんである。

現實とネオ・ロマンチシズム

理想鄕物語が藝術でないのは、その性質として、極端に現實性を反撥し、無視するからである。かりに、大衆文藝にその理論を應用すると、現代大衆文藝の地位が、純藝術から見て一段の卑さに置かれるのは、それはロマンチツクだからでは無い。そのロマンチツクなものが、思ひ切つて現實離れがして居るからである。尤もこの批難は一見矛盾のやうに見えやう、けれども決して矛盾ではない。たとへば、劍人小說なり、講談なり、新聞小說なりを見ると、いかに、ロマンチツクなものであるにせよ。それがどんなに人類の經驗世界を無視し、必要な現實の分子までを取りのけて、いかに亂雜極まる場景と人間性の捏ね合せをして居ることか。しかるに自然主義以來、實驗や分析に親しくなり、それは洗煉された現代人は、いかに何でも、かうしたあまりに馬鹿々々しい空想の遊戲に滿足されなくなつたのである、たとへば同じ大衆小說と呼ばれるにしても、トルストイと、ドストエフスキイと、ユウゴオとを一緒くたにする譯にはいかない。なるほどユウゴオは、想像力の自由と豐富において、眩ゆいほどの躍動を持ち、かつ、理想小說としての役目をどの一つにも勤めさせる。それに伴なう感情の高潮も、また藝

[illegible]
らにたるべき筈の、トルストイの「[illegible]」も、ドストエフスキイ
の「罪と罰」に比べると[illegible]下る。そしてユウゴオ
は、通俗小說の標準までに下つて行く。あまりに都合のよい讀
色と人間の配合が、不自然なのにうんざりさせられるのであ
る。然るにロシヤの二作家は、どこまでも現實主義である。現
實の中から、しみじみと、人生悲劇の眞理を摘出する。それで
立派に大衆文藝として讀まれる價値を持つ。現代文藝は、たと
へロマンチツクなものすらも、必らず必然な程度の、現實性の
上に立つべき眞理を教へるのである。然るに現代の大衆文藝
が、ユウゴオの理想さへをも持たずに、ユウゴオの、不自然な
脚色の花やかさだけを持つとしたらどうであらうか。それが救
はれるのは、たゞそのロマンチシズムが、リヤリスチツク・ロ
マンチシズムまでに進出し、或はネオ・ロマンチシズムまでに
躍進することにある。

　で、第三項としてネオ・ロマンチシズムを高唱する、たとへ
ば、イギリスの海の作家ジヨセフ・コンラツドを見やう。コン
ラツドの前にも海を捉へた作家はもとより多い、たとへば、へ
クリユウトからマリヤツトまで、みな傳奇的な歡喜に燃えて、
航海と、海の冒險を書いたのではあるが、彼等はさてその歡喜

[illegible]
に酔つた。然るにコン[illegible]
ばれるもの[illegible]作家[illegible]つた。[illegible]
よの[illegible]出して、[illegible]様の[illegible]
せる。海や、船舶や、潮流や、風や、それはみなわれらが共通
に觸れ得る官能の世界なのである。

　けれども、それが場所により、時間によつて、特に働らき
かける感覺になると、コンラツドならずして、どうしてそれを
測り得やう。海も魂を持つ、風も生きかへる。けれどもそうし
た生命を知ることは、科學の力では不可能だ。丁度今日の進步
した醫學も、生命を作り出すことの出來ぬやうに。コンラツド
に從へば、一陣風さへも面相を持つて居るのださうだ。有窮の
中に無窮の生命をさぐるのだ。いかめしい機械にすらも、か
くて祕められた生命の線條がある筈だ。そこにネオ・ロマンチ
シズムの捉まへどころがある。たゞそれが、有窮の中から無窮
を探り出すのであつて、出たら目な空想から、無窮を引つぱり
出す事では無い。ロマンチシズムが、ネオを冠する意義がそこ
にある。つまりは嚴肅な現實の底にロマンスを求めるのだ。自
[illegible]、現實を極端に無視したものに、現代人を引きつけるロマン
スが生れるわけはない。わが今日の講談が、もう若い現代人の好

奇心を引きつけることの出來ないのや、新聞小説が、純藝術から見て異端だと下げすまれるのは、それらがみな、馬鹿々々しいほど、現實と人間性をゆがめ、もしくは無視するからだ。たとへば白井喬二氏が、豊富な想像力による材料の創造と、構造の發見と構成の奇拔なことにおいては、僅に大衆文藝の世界に獨歩するのではあるが、さて、その材料が思切つて現實と飛び離れ、一人の人間も、足が地上について居ないやうなのを見るといくらか反感が起る。トリックと、奇才のモザイックを見るだけでは、われ等に多くの力強さを感ぜしめるものでは無いからだ。

次に探偵小説は、罪惡の生國（クライムランド）アメリカを連想することによつて、ますますその繁昌が豫想される。或る作家は、探偵小説が、特權階級の生活を肯定するものであり、無産階級を、不正に導けるからくりの見本であるのが怪しからぬと、その概念の作りかへを要求したやうに記憶するが、要するに探偵小説は現代までの社會組織にあつては必然に生れる作物である。社會組織がそんな風である限りは、かうした罪惡性も、探偵術もいつまでも永續し、探偵小説はやはりこのまゝで繁昌するものだらう。だから探偵小説を、今更別な形式に作りかへることは出來ない。惡ければ、社會組織をどうかするか、探偵小説を無くする外は無いのである。そこで探偵小説はこのまゝで生長するとしても、そこにもネオ・ロマンチシズムへの躍進はたしかに求められる。それは、罪惡が、現實においていかに犯され、誰れが犯したかの外に、何故それを犯したかを、心理の神秘と、社會性のどん底までに掘り下げることである。そこでまた探偵小説は、大衆文藝の一面として、始めて復活することが出來るであらう。

大衆文藝と純文藝

最後の問題は、將來の大衆文藝が、純文藝もしくは高級文藝と、どんな交渉を持ち、どんな地位に立つかである。すでに大衆文藝のきまつた定義がない、從つて、その運命を結論する材料もないわけで、それがどうなるかは、一に大衆文藝作家の意圖に依頼する外は無いのであるが、差し當つてのところでは、大衆文藝もしくは讀み物文藝は、純文藝に引寄せて考へられるよりも、社會の觀念にはむしろ通俗小説の一部だとして映じてゐる。ところがどこの國でも、文藝は純文藝と通俗文藝とに分れて居る。そして通俗小説の方が、出版物としても數限り無く賣れ、讀者の數も、純文藝の作品に何千倍して居る。スペインの作家ヴルデスが、かつて以下のやうに嘆息したことがある。

[illegible]る、それがらもたいのである。面白い事件を組み合せても、[illegible]らこの日まで[illegible]させるやうな[illegible]と技巧とて、讀者を面白がらせるのに夢中である。特に一方には、人生の日常茶飯に眞[illegible]をもち、純眞な人間的な性格によつて、[illegible]とする作家は十人ともない」

然るに前のやうな通俗作家達は、大抵文學史に一行をも占め得ぬやうな、そうした藝術的氣分の稀薄な作家達なのである。その上、この二つの流派は、大抵固定して了つて、移動せぬやうに見える。或は、純藝術家が通俗作家までに墮落することがあつても、通俗作家が純藝術までに漕つけることは、極めて稀なもののやうに見える。だから、わが國の現代作家が、今まで、たとへ心境小說を離れたからとて、すぐ通俗作家になれるかと云ふに、それは出來ない。出來ると見るのは正しく論理の飛躍である。そこで彼等がたとへ心境小說を離れて長編小說に移つたにしても、その長編小說が、通俗小說であるとは斷言されない。もし心境小說から、直ぐ通俗小說に何の苦悶なしに移動し得る作家だといふならば、その心境小說が、すでに藝術的で無かつた證據だ。たゞ長篇は短篇よりも、脚色が複雜になり、人物が多く出るので、そこだけでは通俗小說に似通つても、それ

[illegible]目の[illegible]いはゆる一面[illegible]的な長篇小說大衆の「通俗」小說となるまでに、大衆の[illegible]

純藝術的であると共に、同時に、大衆的になるといふことである。しかし、これは今日のわが長篇小說なるものが、みんなそうした藝術味を含んだものだと肯定するものでないことはもちろんである。ところで現代のいはゆる大衆文藝の將來は、一體、どちらの方角を指すものか、差當つての頁は空白である。

が、それにしても長篇小說が、わが國においてこれほど乏しく、それだけわが大衆が、歐米におけるやうな、優秀な無數の長篇小說を惠まれなかつたことは、大きな文化の上の不幸でなければならない。だから、わが國ではまづその作物の量の長さに氣を呑まれ、長くさへあればそれで優秀な長篇小說のやうに考へる傾きがある。けれども今日の長篇には、藝術として見ていろいろな苦情が入れられる。たとへばそれが、新聞雜誌の續き物であつたものが多數を占める故に、その日その日の思ひ付きに煩はされて自然を缺き、全體の構圖において技巧的な無理が多い。また意識して人氣を狙はねばならず、その爲に、あ

る部分の脚色が蛇足したり、或る部分が急に飛躍するなどの缺陥がおそろしく目につく。どうして將來を指さすやうな理想の狂介や、一意純藝術の練成に突きすゝむやうな、靈感がその間から求め得られやう。明治時代における尾崎紅葉などは、その意味から見て、やはり技巧を取柄とするだけの、通俗作家に過ぎなかつた。長塚節氏の「土」などが、やゝ記念さるべき作品だらう。賀川豐彦氏の「死線を越えて」は、意義はあるが藝術を失つて居る。

大衆文藝の視野

最後にわが國現代の大衆文藝は、大衆の名を冠するにかゝはらず、その見渡す繩張りが、もしくは分野が、殘念なほど狹い事實を見落すわけには行かない。大衆は綜合された統一であつても、大衆の生きる生活相は數かぎり無く分化して居る。文學が人生の表現であるからは、その人生の種々相が、環境により、時代により、國境により、知識によつて、いくつにでも違つて來るは當然である。然るに大衆文藝は、その主題とするものが、前に述べたやうに狹く限られて居る。先づ縱に見れば時代は封建時代が斷の山である。或は場所が文明罪惡の渦である歐洲であり、米國である。横に共通するものは、戀、慾、罪、殺戮陰謀、そんなところである。然るに、歐米の文藝を見れば、そこには、何種でもの違つた文學の姿が細かく分類されてある。地方色の作物である。地方語の作物である。技巧の妙で見るべき作物である。戲曲的興味の作物である。性格描寫の作物である。心理分析の物語である。空想の作物である。情緒の作物である。怪奇小説である。滑稽小説である。家庭生活の作物である、兒童小説である。探偵小説である。神秘小説である。農民小説である。無産階級小説である。結婚離婚の主材である。女性悲劇の作物である。男女の鬪爭である。政治小説である。社會小説である。その他、等、等である。それはわが國にあつて、みな、大衆小説が、新たに氣を入れねばならぬ無邊の領野である。そしてこの事は、純藝術小説よりも、より多く大衆小説の使命に屬する。なぜなら、藝術小説は、求心的である。個人から出立するのに對して、大衆小説は、より遠心的だ、廣く大衆を見渡すからである。藝術小説が凝視する時に、大衆小説が遠く展望する。大衆小説は、いはゆる大衆の生活に終始せねばならぬ。そして人類の有する限り、どの家庭にも、どの地にも、どの階級にも、乃至どの生活にも惜みなく侵入して、その生活における、靈的高揚を完成し、集大成するのが、おそらく大衆文藝の使命であるべきだからである。

明治の新聞小說

伊原青々園

一

わたしは關西の生まれだから、子供の時には東京の新聞よりも大阪の新聞を多く讀んで居た。隨つて新聞小說も東京のよりも大阪の方が餘計頭にしみ込んで居る。その記憶を土臺にして此の稿を書くのだから、話題の前後することは讀者諸君にもゆるしてもらはなくては成らぬ。

大阪の新聞といつても、わたしがその頃讀んだのは「朝日」だけであつた。それには宇田川文海の小說がいつも載つて居て、翌日を待ち兼ねるほど愛讀したものである。題號も內容も今では大かた忘れてしまつたが、忘れないのは「巷說二葉松」と「錢世中」との二つである。その頃から新聞小說を劇場で演ずることは、大阪の方が盛んであつて、此の二作とも上場されたが、手許にある番附を操つて見ると、前者は明治十七年の三月、後者は翌十八年の六月、いづれも道頓堀の戎座である。だから新聞に掲載されたも同時であつたらう。

「二葉松」の方はお家騷動で、若松三左衞門といふ奸物の家老が國を傾けようとする。宮津左京といふ忠臣の家老がこれに對抗して迫害を受ける。妙子といふ六部に化けた女丈夫があつて、最初は惡人の味方だが、後に返り忠をする。そんな筋で、芝居がかりな、變化に富んだ、隨分面白い讀物であつた。芝居でも此の狂言が大當りで、其の後も諸方で演ぜられた。東京でも其れから十年たつた明治廿六年ごろに、淺草の吾妻座で、尾上多見丸や市川紅車などいふ役者で上場したのを見物した覺えがある。ひとしきり、大阪の劇場では此の狂言さへ出さば乾度大入を取るとまで言はれて居たさうである。それほどの當つた小說だつたのである。

「錢世中」は沙翁の「ベニスの商人」の翻案である。第一回の書出しは、心齋橋で二人の書生が行合つて、一人は種彥の正本仕立を買つて來たといひ、一人は沙翁の翻譯書を買つて來たと

いひ、日本の文學がいゝ、西洋の文學がいゝと議論する。そこへモウ一人の書生が來かゝつて、これは佐藤時代の裁判の記錄を買つて來たが、沙翁の筋に自分の買つて來た記錄の實說を交ぇ、筆法は正本仕立のやうに書いて見せる、といふので、三人は別れてしまふ。

これから本題に入るが、すべて脚本の體裁である。伊法村の與兵衛といふ金持が死んで、獨娘のお梅は叔父の桝屋五兵衛といふ高利貸に財産を奪はれ、當人は郭へ賣られようとするのを、中川貫齋といふ國學者の娘の玉榮が救つて自分の下女にする。與兵衛がシャイロックで、玉榮がポウシャ、お梅がネリッサに當るのである。

アントニイの役は紀の國屋伊次郎で、バッサニオは貫齋の門人の青木庄太郎といふ與力の落ぶれ、その庄太郎が玉榮の婿となる持參金の三百兩を、伊次郎が五兵衛から借りて間に合せる。庄太郎と婿の競爭者は同門の川島市之丞で、金と銀と鐵と三つの鑵の當て物になり、庄太郎の力が勝利をしめて玉榮の婿になる。そこへ伊次郎から船が難破したといふ知らせが來るので、玉榮はお梅に三百兩を持たせて遣るを、これも恩人の伊次郎を救はん爲め、網打の伊三郎が途中で其の金を奪つてお梅を殺す。伊三郎は捕まつて與力の中三次郎の調べを受ける。

此の三次郎も、元は惡黨で、伊法村で隱亡をして居た時、玉榮の父の中川貫齋を殺して金を奪つた自分の舊惡を告白するが、殺されたのは貫齋でないといふ事が、伊三郎の口からわかる。また伊三郎が殺したと思つたお梅も助かつて居る。その邊は原作と違つた入れ事がある。

白洲で、シャイロックの五兵衛と、アントニイの伊次郎とを捌くのは、戀敵の川島で、そこへ「やゝ待て」といつて、玉榮の男裝した米川小三郎が出て來る。其れから指環をねだる事まで大かた原作の通りである。番附で見ると、芝居では路人の宗十郎が伊次郎、弟子の琥珀郎が五兵衛をつとめて居る。

同じころ「大阪朝日」に出た小說では「朧月小松原」といふのがあつたが、筋は忘れた「三枚物語」といふのは信州の義民傳で、殿樣が遊興の爲めに洪水を起して、自分はこれを見ながら高樓で酒もりをして居る。そんな畫面を覺えて居る これから鳥取藩で執事佐藤の軋轢のあつた事や、秋月藩での同じやうな騷動や、小田原藩足輕兄弟の仇打や、そんな題材が取扱はれて居る。

同じころ、大阪では「朝日」のほかに「此花新聞」があつた。宇田川文海氏は後に「朝日」を去つて其處へはいつたやうに聞いたが、何ういふ小說が出て居たかは覺えて居ない。

これまでは大阪の新聞の話であるが東京の新聞も全く[illegible]い

[illegible]のは[illegible]自由[illegible]と一自由[illegible]何[illegible]ておいた[illegible]といふ[illegible]て居たのを[illegible]

[illegible]

る。[illegible]の[illegible]を題材にして、國事犯の罪人を同志の人たちが獄から奪ひ出す、讀んで居てハラハラするやうな事が書いてあつたと思ふ。これればかりでなく、一面にロシヤの虚無黨とかフランスの革命とかを取扱つた小説が多かつた。世間では自由黨の政治運動がいよ／＼熾然となつた。十六年には福島事件があり、十七年には加波山と秩父の事件があり、十九年には大阪事件があり、陰謀とか暗殺といふ事に興味をもつた時代であるから、その影響が小説にもさういふ題材を選ばしめるやうになつたのである。

二

新聞記者の古老たる野崎左文翁の追懐談によると、新聞に小説を載せるやうになつたは、「繪入新聞」が事實報道的挿繪の版木が間に合はない爲め、半空想的雜報の讀物を載せるに始まり、明治九年に前田夏繁の書いた「金之助の話」といふのが其の嚆矢ださうである。明治十一年に「かなよみ新聞」が久保田彦作の

[illegible]覧せた[illegible]ただけであ[illegible]小説[illegible]のであつたかとい

[illegible]

[illegible]殺して所刑されたのは明治九年である。近年の出來事を半ばは雜報的に、半ばは小説的に書く事だけは明らかである。[illegible]お絹も大かたさうであつたらう。

それ等とは違つた形式の單行本で「今淨海六波羅譚」といふのがある。これも元は新聞小説として掲げられたもので、當時の富豪であつた岩崎彌太郎の妾が俳優の片岡我當と向島で密會したことが顯はれて、妾の目附役であつた六波羅なにがしといふ岩崎の家來が申譯に切腹をした。さういふ事實を骨子にして、六波羅といふ名前から、岩崎を淸盛に見立てゝ、暗に其の成金ぶりを諷つたのである。自由黨が其の政敵たる改進黨と及び改進黨に緣故の深い岩崎家を攻撃したのは明治十六年であるから、この小説は其ころの自由黨の機關紙がさういふ政治的の意味で掲げたものであらう。

同じ頃の新聞小説で、後にやはり單行本となつたものに「[illegible]尾岩桐眞實競」といふのがある。岩桐といふ書生と戀仲になつた女が、男に貢ぐため[illegible]といふ娼妓になる情話である。[illegible]

に似た事實は多少あつたかも知れぬが、「梅暦」を明治化した人情本といつても宜い。しかし當時に評判の高い小説であつたと見えて、坪内さんの「書生氣質」のうちに此の作が引合ひに出て居る。それは第十三回の妾宅で、藝者の田の次が小町田粲爾に語る所に、

「……絵入新聞で名高かつた岩鹿のよし江のはなしを御覧。しがない藝妓といひながらも、今の薄情の世の中には、實にめづらしい貞實もの、それなればこそ末を遂げて、岩桐といふいい人と、一所になつたとかいふぢやアないか。……」

此の「書生氣質」は十八年の作であるから、從つて岩桐の情話はその前の「絵入新聞」に載せられたのである。

土屋―後に須藤―南翠の「千代田刃傷」が「開化新聞」に出たのは明治十六年である。松本外記が御殿で同僚たちを傷害した事實を書いたのであるが、浄瑠璃本の「有職鎌倉山」を借りた所が多い。しかし之れも當時の當り作で、今の片岡仁左衛門―我當―が中島座で之を演じ、大評判であつたさうな。

序にいふが、東京で新聞小説を劇にしたのは此れが最初である。大阪では十七年の「二葉松」より前にも既新聞小説を上場して居る。しかも其れが中島座のやうな第三流の劇場でなく、新富座の大芝居で、宗十郎や福若のやうな一流の俳優がして居る。

わたしは自分が眼を通した明治初期に於ける東京の新聞小説を茲に擧げたが、それと前に述べた大阪の新聞小説と合せて、全體を考へて見ると、最初は最近の事實を報道する新聞記事らしく雜報の形式であつたのが、次ぎには過去の事實をも報道する讀み物の體裁となり、それには事實が空想よりも多きを占めて居るものと、空想が事實よりも多きを占めて居るものと、全く空想ばかりなるものと、此の三つがチャンポンに載せられて居たことが分る。

其の題材からいふと、講談のやうに赤穂や盗賊や俠客や義民の傳記があり、お家騒動や勤王佐幕の時代物があり、また人情物があつた。自由や民權の政論が盛んになつてから、其人氣に投ずるやうに、革命運動や虚無黨を書いた外國物が載せられるやうになつた。また政敵を攻撃する目的で此の私事を發いた寓意的小說も見かけた。

其の外國物のうちには、翻譯と翻案との二つがあつた。これは新聞小説でなく、單行本であるが、織田純一郎がリットンの「アーネスト、マルトラバス」を譯した「花柳春話」の出たのは明治十二年である。これから翻譯小説は次第にはやつたが、外國の人名や地名は、一般の日本人に親しみのない上に、

今日で[illegible]
されたいなおもつてゐる[illegible]
らしい。そこで人物や地名を日本に替へた翻案物が續出された。前にやゝ詳しく述べた「[illegible]世中」の如きは其の例の一つである。

以上は新聞小説が謂はゆる小新聞にのみ載せられた時の情態である。しかし大新聞にも小説が載せられるやうになつてから形勢が一變した。こゝに註を加へるが、大新聞とは政論と政治記事とを専らとするもの、小新聞とは艶種と社會記事とを専らにするものである。

三

大新聞で小説を載せたは「報知」に於ける矢野文雄の「浮城物語」が始めであるといふ事を何かで見た。それは明治廿三年だつたと覺えて居る。しかし「日々」に福地櫻痴の「もしや草紙」や「燒芋の烟」を出したは其の前の廿一年である。同じ「日々」に塚原澁柿園の「昆太郎物語」が出たは、それよりもマダ前だつたとおもふ。尤も此れはヂスレリイの「コンタリニ、フレミイング」を譯したので、創作では無かつた。

飜譯小説の單行本が流行しだしたことは前に述べたが、此の[illegible]
[illegible]
用ゐたおもむきである。しかし[illegible]翻譯小説を[illegible]せるやうになつた理由は其れだけでは無かつた。國民の政治思想がいよ／＼高くなると共に政治小説を書く事が流行して、末廣鐵腸の「雪中梅」、尾崎學堂の「新日本」、東海散士の「佳人之奇遇」といふやうに、有名な政客までが政治小説に筆を執るやうになり、同時に翻譯物でも關直彦がヂスレリイの政治小説「コニングスビー」を譯した「春鶯囀」が大いに歡迎され、それにつゞいて、譯者は忘れたが「ピーアン、グレー」を譯した「政海の情波」が出で、「經世偉勳」と題してヂスレリイの傳記を尾崎學堂が譯するといふ景氣で、翻譯小説といへば軟い方でリツトン、硬い方でヂスレリイが當時のはやりつ兒だつた。以上はいづれも單行本であつたが、ヂスレリイ物が持てはやされる世間の風潮に乘じて大新聞の「日々」が「コンタリニ、フレミング」の翻譯を載せたのであつたらう。それと原作者を同じうする「春鶯囀」を譯した關氏は當時「日々」の主筆であつたから、それが當つたのに味を占めて、社員の塚原氏をして更に「コンタリニ」を譯さしたのかも知れぬ。事によつたら其れも實際は關氏が譯して、塚原氏は字句を修正しただけだつたのかも知れぬ。

とにかく「日々」には早くから翻譯小說が載つて居る。後に「浮城物語」を載せた「報知」でも、「新坡（シンガポール）通信」といふ欄を設けて翻譯小說を出して居る。譯者は森田思軒氏であつた。しかし思軒氏の選んだ材料は、リツトンの人情物でも、チスレリイの政治小說でもなくて、ジウル・ベルヌやアラン・ポーの科學小說もしくは冒險小說であつた。

一番評判になつたのがベルヌの「ミケール、ストロゴツフ」を譯した「瞽使者」で、芝居でも新派の川上音二郎がこれを上場した。このほかに「炭坑秘事」といふのが面白かつた事を覺えて居る。後に矢野氏の創作した「浮城物語」は此等の科學小說若しくは冒險小說から其のヒントを得たのであらう。

しかしベルヌの科學小說は「報知」が載せてより前に、單行本として「八十日間世界旅行」だの「海底旅行」だの、「空中旅行」だのといふ翻譯が出て居た。譯者は大かた井上勤といふ人だつたらう。「報知」に載せた思軒氏の譯は其等よりも原作に忠實で、且つ文學的であつた。

かくの如く「報知」に譯出された科學小說もしくは冒險小說とは別に、「都」では黑岩淚香氏が盛んに探偵小說の翻譯をした。この頃の「都」は「日々」や「報知」のやうな大新聞でなく、謂はゆる小新聞に屬して居たから、其の翻譯も思軒氏のやうに原作に忠實ではなくて、只通信を旨とした抄譯であつた。そこで稿中の人名は原作の音をもぢつた日本名であつた。例へばルコツクを禮克とするの類である。その他の筆法が翻譯と翻案との中間を行くやりかたであつた。かやうにして淚香氏の探偵小說は「都」の呼び物となつて居たが、明治廿五年に同社を退いて、新たに「萬朝報」を創刊するに及び、更にその紙上に掲げて讀者を悅ばせた。そのうちでもデユマの「モントクリスト」を譯した「巖窟王」と、ユーゴーの「ミゼラブル」を譯した「噫無情」とは、今でも單行本となつて不斷の愛讀者をもつて居る。

四

わたしは大新聞にも小說を載せるやうになつた事をいひたい爲めに、翻譯小說のことをいひ、其の序に小新聞の探偵小說へ話が外れてしまつたが、さて本道へ戻つて、かやうに大新聞が今までの格を破つて、たとひ翻譯物でも小新聞と同じやうに小說を載せ出した其の次ぎには、前に述べた通り、「日々」では櫻痴の「もしや草紙」と「嫖客の娟」、「報知」では龍溪の「浮城物語」、いづれも創作を載せるやうになつたのである。これまでは政論家であつた櫻痴居士が小說を書くといふ事が讀者の好

奇心を煽つたし、内容については[illegible]なかつた。一方の「浮城物語」は、これも作者は經國と同じく政治家であるけれども、文章の方面でも既に「經國美談」といふ作品で世間に名を賣りこんでゐるし、何しろ翻譯でない冒險小說に政治の興味さへ加はつて居るのであるから、智識階級の讀者には歡迎されたらしい。

そこで大新聞に小說を載せた結果は、これまでオモに女子供を相手にして居た新聞小說が、智識階級を相手にするやうになつたのである。調子が高くて上品になつた代りに硬くてムツカしくなつた。しかし通俗や平易の分子は失せたが、其のなかには藝術味のある作が現はれるやうになつた。露伴や紅葉のやうな其の頃の新らしい文士が新聞小說を書くやうになつたは、さういふ變化が起つて居たからである。

その露伴と紅葉とのことは後へ廻して、これまでの新聞小說家でも、エラい人が全く無いではなかつた。そのエライ人を代表するものは前に「開化新聞」へ「千代田刃傷」を書いて須藤南翠と、「讀賣」で雜報的小說から叩き上げた饗庭篁村とであつた。このころ南翠は土居の性を改め、その新聞も「開化」をよして「改進」と改題して居た。南翠の作は能く世間の流行と共に推移つて、政治小說のはやる頃は、國會開設後の未來を描いた「[illegible]」や、[illegible]「[illegible]」を書いた。[illegible]内さんや[illegible]。今まで[illegible]であつたしお[illegible]をやめて「[illegible]」や「[illegible]」を書いた。前者は矢野龍溪の「經國美談」がギリシヤの英雄を描いて居るのに倣つて、明治の維新を書き後者は當時の出來事であつた三乃大審院長の自殺を中心に、三浦の軍隊と伊藤の政黨派との軋轢を描いたものである。

南翠の作は大かた趣向を美しく波瀾に富み、其の分量も長編が多いが、一方の篁村は其の反對であつた。大かた短篇で、其の筋は單純であるが、江戸前のユーモアがある。南翠にはコクがあつて、篁村はアクが拔けて居る。彼は馬琴である、此れは三馬である。

篁村が書いた新聞小說は後に「むら竹」といふ叢書となつて出版されて居るが、其のうちの傑作は「駈落の駈落」であらう。馴染の娼妓と駈落ちの約束したが自分で盗み出しては探がし出さるゝ虞れがあるから、友達に連れ出させる。すると其の友達も其の女の馴染なので、連れ出して自分が同棲して居ると、今度は女ひとりで逃げてしまふ。ほかに深間があつたので、二人とも踏臺にされたのである。すべて篁村の新聞小說は其んな喜劇味に長じて居る。

鏡村がかういふ小説を書いて居た「讀賣」へ、明治廿三年ごろから紅葉や露伴をはじめ新文士が寄稿するやうになつた。大かたは短篇小説であるが、其のうちで紅葉の「おぼろ舟」は最もすぐれた作であつた。そうして其の次ぎに「伽羅枕」といふ長篇を出した。佐太夫といふ遊女の一代記を西鶴の文體で書いたものである。同時に露伴も「髯男」といふ歴史小説を書いたが、これは僅かばかりで筆を中絶した。新聞小説が藝術的になつたは此の時からである。

思軒の翻譯小説や、龍溪の「浮城物語」を載せた「報知」で、廿四年に週刊附錄を出して、それに載せられた村上浪六の「三日月」が大評判になつた。紅葉はじめ其の一派の小説が大かた纖弱なる戀物語であるのに反し、勇壯なる俠客の傳記を書いたのと、其の文體に一種の氣骨あることが世間をして矚目せしめたのである。後に「朝日」へ轉じて「髯の自休」や「井筒女之助」など、やはり俠客物を書いた。

同じく「報知」の週刊附錄に「新聞記者」を書いた村井弦齋も、後に「都」へ轉じて歴史物の「櫻の御所」で讀者を熱狂させた。此の小説が一日だけ休載された時、半天を着た勞働者が新聞社の受附へあばれこんで「なぜ、休みやがるんだえ」と罵つたさうな。「櫻御所」はそれぐらゐ世間に受けた小説だつた。

それは明治二十七年である。日清戰役が終つた後、弦齋は再び「報知」へ歸つた。その書いた小説は何時も好評であつたが、なかんづく「日出島」(明治廿九年)が大當りで、いつまでも書き續けた。

新聞小說家として、浪六と弦齋とは其の頃の兩大関であつた。これが紅葉と露伴とは其の作品が藝術的である點に於て其れよりも尊敬された。ことに紅葉は、前と同じく「讀賣」へ廿五年に「三人妻」を出し、廿九年に「多情多恨」を、三十年に「金色夜叉」の前編を出した。それを新聞に載せはじめた時、辻々へ此の小説を宣傳する新聞社のポスタアが貼り出されて居た。新聞小説もポスタアを利用したといふ事は大かた前例にない事であらう。如何に紅葉の人氣作者であつたかゞ此れでも想像される。そうして「金色夜叉」は暫く書いては中絶し、又書き出しては休み、漸く三十六年に續々編をポツチリ書ききりで、永久に出なくなつてしまつた。このやうに紅葉の筆が休みがちなので、本田社長は作者をしば〳〵退社させようとしたが、もし他の新聞社へはいつて「金色夜叉」のつゞきを書かれては「讀賣」の讀者を其の新聞社に奪はれてしまふといふので躊躇して居るといふ事を其の頃に聞いた。しかし紅葉は終に「金色夜叉」を書き了らないで「讀賣」を退いた。そうして

「二六」ににいつてまたく記事でしまつた。

紅葉が「多情多恨」を書いた二十五年に、露伴は「國會」で「五重塔」を書いた。此の「國會」は「東京朝日」と兄弟關係の新聞で、其れよりも賣れなかつたから、紅葉の作ほどは世間の評判にならなかつた。つゞいて十九年から「小說微塵藏」といふ大きな題で「さゝ舟」をはじめに、「きくの濱松」「獨鈷」「雲の袖」などの諸編を途切れ〳〵に書き、廿九年に及んで、これも完結しないで其のまゝになつて居る。文學を好む讀者には歡迎されたが、紅葉の作ほど一般の俗受はしなかつたやうである。

此の間に紅葉門下の泉鏡花が、廿七年の「讀賣」に「義血俠血」を出して、思軒の飜譯文體に新しい內容を盛つたやうな作で新聞小說に異彩を放つた。

三十一年には「國民」へ德富蘆花の「不如歸」が出で、三十三年には「大阪每日」に菊池幽芳の「己が罪」が出で、三十六年には「讀賣」に小杉天外の「魔風戀風」が出た。明治三十年以後に新聞小說で一代を風靡した作といへば此の三つであつた。

「日々」で「コンタリニ」を飜譯した塚原澁柿園が何時しか歷史小說を書き出したのは其れより前であつた。題目が硬いから女子供には顧みられなかつたが、戀愛小說を毛嫌ひする潔癖の讀者は其の史實に興味をそゝられて、此の方を歡迎した。

大新聞にも小說を載せるやうになつてからの歷史は今述べたことも大體右の通りであるが、其等の作品を分類すると、大きく次のやうになる。

A　通俗的のもの。

B　藝術的のもの。

C　通俗的でも藝術的でもなく、史實に興味あるもの。

南翠や弦齋の作はAに屬し、紅葉や露伴はBに屬し、澁柿園はCに屬する。

わたくしは通俗的の新聞小說として南翠と弦齋の作を擧げたが、それよりも一層通俗な講談速記が新聞小說に代用されて、現に今日でも人氣のあることを書き落しては成らない。それには日本に速記術の出來た事から述べる必要がある。

五

速記術といふものを創めたのは田鎖綱紀といふ人であつたが、それが實用に役だつたは明治十六年あたりかららしい。「報知新聞」が第一につかひはじめて、それから演說會の筆記に利用さる。矢野龍溪は其の「經國美談」の原稿を、自分は口でしやべつて速記者に書かせたといふ事である。それで十七年になつて三遊亭圓朝の「牡丹燈籠」を田鎖の門人の若林玵藏に速記

よつて、講釈的に出版した。これが古來の落語講談を文字に寫した始めで、同年の末には、同じく圓朝の「鹽原多助」が出版された。二つとも圓朝の最も得意な人情噺であつただけ世間一般歓迎した。これを見て、圓朝の他のものを新聞へ連載したのが十九年に「やまと新聞」を改題した「やまと」で第一條から芳年の挿繪を加へて掲げた。同新聞には山々亭有人といふ小説家で、今の岡本綺堂氏の父に當る條野採菊が居て、其の採菊と圓朝とは昔の三題噺時代よりの友達であるから、さういふ縁故で圓朝との交渉が出來たのだらう。圓朝が採菊と一所に箱根へ行つて、其處で速記にとらすのを、綺堂氏は父の側で聴いて居た」とは同氏がわたしに語つた所である。

「やまと」に載せられた圓朝の人情噺は澤山あつて、何時までもつゞいた。單行本になつて居る「鏡が池操松影」や「榛名の梅が香」や「美人の生埋」や「怪談乳房榎」や「粟田口霑笛竹」や、みんな「日々」紙に出たのだと思ふ。さうして「やまと」は圓朝といふ人氣者を捉へたので讀者が殖えた。このころの軟かい新聞で、歓迎されたものはこれであつた。

講談を速記して出版されたのは、松林伯圓の「安政三組盃」であつた。これは圓朝の「牡丹燈籠」よりも少し後だと覺えて居る。さうして講談もいつの間にか新聞の讀物として連載されるやうになつたが、何れも大衆的で、何といふ作であつたかは分からない。今日では落語家の人情噺よりも講釈師の講談の方が新聞の讀物としては優勢である。

とにかく「やまと」は圓朝の人情噺で愛讀者を得た。其の向ふを張つて「都」は芝居の筋書を内容の讀物とした。これは當時に於て劇界の大御所であつた守田勘彌が同社に關係があつたからである。さうして「やまと」の愛讀者は此の方へ走つた。下町向きの新聞として「やまと」が衰へて「都」が頭を擡げたのは此からである。即ち芝居の筋書を新聞小説に代用して成功したのである。「都」には同時に涙香の探偵小説があつて世間に喜ばれたことは前に述べたが、廿五年に涙香が同社を去つて「萬朝報」を起すと共に、探偵小説も捨ててしまつた。其の代りに「都」へ現はれたのが探偵實話であつた。涙香の探偵小説が外國の犯罪を取扱つたと違つて、此れは日本現代の犯罪を取扱つたのである。作者は匿名であつたが、實は、高谷信々といふ司法官吏から新聞記者に轉じた人で、文章の素養はなかつたが、一種の天才であつた。最初は「探偵叢話」といふ題で、犯罪探偵について面白い逸話を一三十行づゝに書いたのが好評だつたので、次いで「二人探偵」と「二[illegible]の探偵」を二三回つゞきに書き、更に「探偵實話」と割書をして、「清水定吉」といふ六

十九日つゞきつゞ[illegible]
四月から七月にかけてゞあつた。

ピストル強盗の清水定吉が巡査小川を害せる爲めに[illegible]町の往來で捕まつたは明治十九年で、其の際に小川巡査は重傷を負うて死んだ、定吉も翌年に市ヶ谷監獄で絞殺せられた。高谷は同僚であつた刑事巡査たちから聞いた當時の實況談と豫審調書と及び自分の經驗とによつて書いたのが此の探偵實話であつた。處々に編者の空想も交へてはあるが、犯罪人を調べる手順や、刑事部屋の有様は大かた寫生であるから、それまでの講談や小說にある盜坊物とは違つた新しさがあつた。そして讀者はこれを歡迎した。それから「探偵實話」は「都」の呼び物となつた。

次いで赤子殺しの「中川吉之助」、靜岡の自由黨事件の「岡事探偵」、麻布永坂の女殺しの「山田實玄」、信州の俠客の「木件富五郎」、下谷の亭主殺しの「洗衣屋お熊」、男に殺された竹本紋清の「娘義太夫」、谷中の人殺しの「笠森團子」、神田淡路町の「蒲鉾屋殺し」、破獄囚の「馳小僧」、女賊の「蜆のお政」、そういふ刑事被告事件を次ぎから次ぎへと書いて愛讀者を引きつけた。半ばは雜報半ばゝ小說といふ點に於て、明治初期の續き物と同じであるが、それよりも描寫が具體的であつた。

此の「探偵實話」の筆法をまねて、わたしも同新聞に「海賊房次郎」や「五寸釘寅吉」や「新比翼塚」を書かされた。又「新講話」といふ總題の下に、小說を口述體にし、後に「都講話」と改めて、週刊附錄に讀みきり物を書いた。それは講談の一種[illegible]るゝ事に[illegible]が、しかし其の講談は今でも[illegible]新聞紙の[illegible]返されて居る。

新聞紙の講談については大きな[illegible]な逸話がある。歌舞伎座で「慶安太平記」を演じた時、「報知新聞」の劇評家であつた杉贋阿彌君がそれに對して非難を加へた。今ごろ古くさい「慶安太平記」を舞臺へ持出すのは時世後れである。紙上に其う書いたのを、歌舞伎座の田村成義氏が讀んで、贋阿彌君に一本捻込んだ。

「だつて杉さん。あなたの所の新聞にもその古くさい慶安太平記の講釋が今ごろ出て居るぢやありませんか。」

さすがの贋阿彌も一言がなかつたので、頭を掻いて笑つた。

でも、近ごろの新聞には講談の影が次第に薄くなつて來た一しきり東京の新聞紙は「都」を除いて、講談を載せない所は無いといふ有様であつたが　今では講談を載せない新聞紙が、チラホラ見えるやうになつた。それは大衆文藝といふ事がカナリ重要な問題とされたのと、藝術的にそれに筆を執る人たちが多くなつた爲めであらう。

今日の狀態から推して行くと　新聞紙の講談は早晩姿を隱すだらう。其の代りに、「太閤記」や「西遊記」の書直しが現に紙上に出て居るやうに、昔の名作を新しい文章に書いたものが其の跡つぎになる時代が來るかも知れぬ。それも廣い意味でいへば一種の大衆文藝である。

大衆文藝と新聞小說

菊池寛

大衆文藝

最近に於て、文藝的讀書界に於て目ざましい現象は、大衆文藝の擡頭である。擡頭であると云ふよりも、むしろ創生であり發生である。

その文學史的原因は二つあるだらう。一は、創作の平板化したことである。純粹な創作が、殆ど興味を排斥してゐることである。私小說的傾向が多くなつて、小說に小說らしい事件が、何もなくなつたためである。現在の芝居なり、小說で一番イヤがつてゐることは、芝居らしいこと、小說らしいことである。從つて、純粹な小說戲曲に事件の變化なく、趣向の面白さなく、空想なくロマンスなく、讀者の求めてゐる慰樂的分子は、殆ど跡を絕つに至つたと云つてよい。むろん、その中に藝術的感興がないこともないが、しかし、よほど稟性の秀れた人の心だつて、いつでも藝術的感激丈を求めるやうに緊張してゐるものではない。況んや普通一般の讀者は、常に藝術と共に慰樂を求めてゐるものだ。純粹な文藝から殆ど慰樂を求められなくなつたとき、讀者は自然に大衆文藝なるものを要求してゐたと云つてもよいのである。

もう一つの原因は、講談の衰亡であらう。無學な教養のない講釋師の話す講談などが、相當教養のある今日の民衆にとつて、だん／＼魅力を失ふことは當然である。殊に、いろ／＼な雜誌に同じ講談が、幾度も掲載され、大抵の講談の筋は分つてゐる以上、講談の興味の中心である筋の發展につながる興味などは全然なくなつた。新しい感覺も感情も心理もない事件情景の描寫など、現代の民衆に飽きられるのは當然であらう。現代の講談は、大衆文藝に依つて、壓倒的に活字の上から驅逐されかけてゐると云つてもよい。

大衆文藝發生の他の原因は、人の問題であらう。現代ほど、文藝的教養に富む青年才子の多い時代はない。これらの人々

は、一度は文壇に殺到した。しかし、文壇は先客で滿員である。必ずしも、才能的に先客が後客に勝つてゐるわけではなくとも、少くとも座についてゐる先客は、自分と同格程度の後客のためには、容易に席をあけるものではない。かくて文學的教養のある多くの才人は、空しく腕を拱いて髀肉の嘆を洩して居るのである。彼等はかくて、あるべきにあらざれば、とにかくその鬱勃たる才氣を、手輕な讀物文藝の上に試みたのである。讀物文藝が勃然として起つたのは、當然である。彼等は文學的才能に於て、教養に於て、現代の文壇人と殆ど何の徑庭もない位である。白井喬二、國枝史郎、直木三十三、江戸川亂歩、長谷伸、土師清二、正木不如丘、本山荻舟などは、その才能に於て、筆力に於て、教養に於て現代の小説家と何等遜色のない人達であると云つてよいだらう。

しかも現代の小説家が、文壇的傳統と小姑的批評家の存在とのために、手も足も出ないやうに、おとなしく型にはまつてゐるとき、大衆文藝は、何等の傳統も羈絆もなく、各自が得手勝手に奔放なる構想と描寫とを試みてゐるやうにさへ見えるのである。

現代の小説は、昔の小説が持つてゐたアクや飾りや趣向を、所謂小説らしいものを捨てゝだん／＼平板になり心境的になり、淡くなり光澤消になつてゐるが、現代の大衆文藝は、純文藝の捨てたそれらの小説らしいもの芝居らしいものを拾ひとつて、自由にそれを利用してゐる形である。

才能のある文筆の士が、文藝的拘束乃至は羈絆を捨て、興味中心を製作のモツトーとしてかゝつてゐる以上、宛も容色秀れたる女性が、貞操觀念を捨て男子に接してゐるやうで、その魅力が讀者を惹き得るのも當然である。

創作家が、文藝的名分なくしては、一行も書けないのに反し、興味だけでも物を書き得るのは、なまじい純文藝を標榜しない人々の利點であると云つてもいゝのである。

白井喬二、國枝史郎、小酒井、正木兩博士の讀物などは、前者はこの歴史小説でもなく講談でもなき新境地の創造に於て、後者はその學問的な背景に於て、讀物界の新興國であることは、何人も否定し得ないだらう。

要するに現在の大衆文藝は、文壇人と同程度の教養あり才華ある人々が、開拓した文壇以外の別天地であり、文藝的名分や傳統から自由である丈に、いろ／＼の面白いことのやれる世界であると云つてもよいだらう。

自分は雜誌「大衆文藝」は毎號愛讀してゐるが、同人の才華構想の豐かさは、沈滯し切つてゐる今の文壇をある意味で脅威

し得るものだとさへ思つてゐる。

だが、しかしながら、大衆文藝の讀者と云へども、彼等が私の分つてゐる人達である丈に、現在の興味中心、描寫本位の作品に慊らないで、彼等の書く物の中で文藝の正道を求め出しはしないか。そのかいてゐる物の中に、自分自身の藝術と人生を求めはしないか。そして、結局は、純文藝的な作品をかき出しはしないか。純文藝的になつてしまふと、結局現在の文壇の作品乙の上あたりと同じ物になりはしないか。雜誌「大衆文藝」の中で、二三眞面目な作品が、純文藝の作品に近づき、そして純文藝としては、さう特色もないものであつたりする場合、自分はこんなことを考へる。其處に大衆文藝のなやみがありはしないか。

さはれ、大衆文藝は、かびの生えた講談から來る退屈と私小說流行の文壇から來る倦怠を救つてくれる點に於て、智識的讀者階級からも充分歡迎されていゝものだと思ふ。

新聞小說

新聞小說は、今の讀物の中では行きつまつてゐるものゝ一つである。各新聞紙は、それを多少とも持てあましてゐる感じである。最近報知新聞が、四作家を招聘したるが如き、新聞小說に對して、積極的に出た證左の一つであらう。さう言はなくても、消極的な側には手をつけてゐないやうであるが、

各新聞紙が、新聞小說に對して力を入れるでもなく、と云つて輕視するでもなく、不徹底な態度をつゞけてゐるのは、要するに各新聞社の幹部が、新聞小說に對する態度が、定まつてゐないからであらう。

新聞小說が、新聞紙にとつて、どれ丈重要なパートであるかと云ふことは、容易に測定しがたいことだらう。何人にも測定しがたいことだらう。しかしながら、その新聞紙上に於ける傳統的な位置から考へ、過去に於て多くの小說が、呼物として數へられたことから考へても、そんなに輕視すべきパートではないだらう。少くとも、現在の新聞紙にとつては必要品に近い裝飾品であらう。

だが、その必要さに比べて、新聞紙が充分の手當をしてゐないことも、明かな事實である。新聞小說は、大抵全三段乃至四段を埋めてゐるが、現在の新聞小說の一回分の報酬は、挿し繪を入れて普通二十圓乃至四十圓だらう。從つて、新聞小說の一段について新聞社は僅々十圓内外の費用しか拂つてない譯である。それに比べて、社會面なり政治面なりに對して、一段につき何百圓乃至何千圓の巨費を投じてはゐないか。新聞社の編輯

費を各頁に割つて見ると、一日一段幾何に當るか算定しがたいが、新聞小說欄の如く一段十圓程度の少額でないことは明かだらう。

新聞小說を單なる埋草として、無用の長物として扱つてゐるのなら、何にも云ふことはないが、新聞小說を新聞の表道具として扱つてゐるものなら、もう少し新聞社が力を入れるべきではないだらうか。

百萬部に近い發行部數を誇つてゐる大新聞紙が、その貴重な三四段を埋めさせてゐる小說に對して、拂ふ原稿料が婦人雜誌や娛樂雜誌の稿料以下であることは、どう考へてもをかしいことだと思ふ。

一體新聞小說の稿料は、十年以前には、もつとも割のよい稿料であつた。當時最高の稿料を拂つてゐた中央公論の一圓に對し、新聞社は二圓若しくはそれ以上を拂つてゐた。然るに、雜誌の稿料が時勢に連れ十倍乃至二十倍に增加したに反し、新聞紙は三倍乃至四倍にしか上つてゐないのである。

その上、新聞小說執筆と云ふことは、その執筆期間中その作家の全執筆生活を占領してしまふのである。新聞小說執筆中は、その責任感とその勞力とで、他の仕事は何も出來ないと云つてい〻位である。その上準備のために、少くとも半年の日時は要するし、いろ〳〵な意味で、新聞小說ほど責任の重い勞苦の伴ふ仕事はないと云つてもよい。それに對して報酬が、これに伴はないのであるから、勢ひ仕事が無理になり、い〻加減なやつつけ仕事になりがちである。

よく新聞小說に對し、もつと社會の諸相をとり入れた、いろいろな生活の窺はれる作品を見たいと云ふやうな希望を聞くことがあるが、しかしそんな小說を書くためには、ゾラがやつた準備のやうに、一年や二年の研究は必要であると思ふ。少くとも、百五十回前後の長篇をかくためには、準備を入れて二年位の時日を傾倒しなければならないのだが、現在の新聞小說に對する報酬では作家は、生活上それほどの時日を割き得るものではないと思ふ。

資力の豐富な大新聞紙にして、新聞小說なるものを、相當重視するならば、新聞小說に對し、今少し考慮を拂ふべき必要も餘裕も充分あると思ふ。

現在のやうな狀態では、結局兒女の讀物程度以上の力作大作は、到底新聞紙上には出ないと思ふのである。

現在の新聞小說は、さう云ふ意味から、全くだれ切つてゐると思ふ。職業的作家の職業小說以上の何物でもないやうな氣がする。新聞小說が、日本の社會でこれほど重視されて居り新聞

社が、大抵[illegible]であるは上、新聞小説は現代一流の作家の晴れの舞台であり、いづれも傑作大作であつてほしいと思ふのである。が、しかし、新聞社当局が新聞小説は、ほんの惰力でのせてゐるものであると、云ふのならば何も云ふことはない。

と云つて自分は新聞小説が、単に藝術的な力作大作であることを望むものではない。藝術的であると同時に、興味があり、清純で、理想があり、一代の民衆を藝術的に向上させると同時に道徳的にも陶冶するやうなものでありたいと思ふのである。

現在の程度の新聞小説では、新聞小説はだん／＼馬鹿にされて結局婦女子だけの読物になりはしないだらうか。夏目漱石の小説が、智識階級から愛読されてゐたやうに、新聞小説の位置を、もう少し向上させたいと思ふのである。そして各作家が新聞小説を執筆することを名誉とし、よい仕事とするやうにしたいと思ふのである。

大勢力と大資本とを擁して、此の世をわが物のやうに栄えてゐる大新聞社などは、その位なことをするのは、何でもないことゝ思ふが、各新聞社の現在の態度は甚しく消極的であると思ふ。それなら、いつそのこと新聞小説を否定しのせなくすればいゝのだと思ふが、さうもしないところを見ると、新聞小説の価値を認めてゐるやうに思ふのである。

[illegible]、一[illegible]たものは、[illegible]の[illegible]として、ストリイより大[illegible]はないだらう。いゝストリイなど云ふものは、[illegible]にたつて、さう[illegible]ない。日本の小説で、いゝストリイと云ふのは、殆ど数へるほどしかない。いゝストリイを創作することなどは、なか／＼生やさしいことではない。清新なるストリイは、清新なる主題と思想とを持つてゐなければならない。どんなに描写のうまい作家でも、ストリイの準備なしに新聞小説をかけば失敗するに定まつてゐる。いゝストリイなど云ふものは、どんな作家だつて一生に三つか四つしか得られないものである。新聞小説は、何よりも先に、いゝストリイが必要なのであるから、いゝストリイを発見し創作する準備として、一二年の日時はどうしても必要である。そんな点から云つても、作家に二三年の生活保證を与へずして、よい新聞小説を求めるのはムリである。菊池幽芳氏が、新聞小説家として長く令名を保つてゐるのも、氏が専心新聞小説の構想に当つてゐるためであらう。とにかく、現代の作家の狭い書斎生活からだけでは、よい新聞小説などは、到底期待し得られないだらう。現在の新聞小説は、いゝストリイなどは殆どなく、いゝ加減な筋を、随筆者の作者がかきなぐつてゐると云つたやうなものが、一番多いやうだ。

新聞小説などは、文藝が社會と接觸する大關門であるから、作者と新聞社とが協力して、最も意義のある關門にしたいものである。

最近報知新聞が、四作家を聘したことは、自分がその一人に加つてゐるから、賞めるのではないが、新聞社が新聞小説に力を入れる一つの場合として欣びたいのである。

それから、かう云ふ場合に、一言したいことは各新聞社が、もつと懸賞小説を優待して貰ひたいことである。わづかの懸賞金で、著作權全部を取つてしまふなど云ふやり方は隨分亂暴である。たとひ、應募の條文にはどうあらうとも、著作權などは當然作者のものであつて然るべしだと思ふ。

それから、懸賞應募者に百五十回なら百五十回を全部書かせるなど云ふことも、新聞社の都合丈を考へて、無名作家をいたはらなさすぎると思ふ。その作家の筆力など云ふものは、二三回よめば澤山だ。いな、原稿紙一枚よめば分るのだ。アトは筋丈の問題だから、梗概を書かすればいいのだ。大事を取つて、二十回分位と、全體の梗概とを書かせ、それで豫選した上で、撰まれた十人位に、全部書かせて見ればいいのだ。さうすれば、もつといい作品が得られると思ふ。今のやうな條件では、懸賞に應募するのには、何よりも根氣が必要だと云ふことになる。そして、天分がすぐれてゐても怠け者は應募しないことになる。とにかく、百五十回を全部かかせた上、梗概を添へさせ、梗概をよんでよかつたら、よんで見ようなど云ふ條件は、あまりに無名作家の血のにじむやうな努力に敬意を拂はたすぎると思ふ。自分の主張するやうな方法をとれば、無名作家のいたはしい努力を救ひ、その上、天分ある人々に書かせ得ると思ふ。現に、その方法を採つた時事の懸賞小説は、池谷信三郎君の「望郷」、貴司山治君の「紙幣鳴動」など、よい作品を得たではないか。

何故に大衆文藝はよろこばれるか

生田長江

何故に大衆文藝はよろこばれるか——編輯者から課せられたこの問題は、換言すれば、玄人向きの文藝に對する素人向きの文藝としての大衆文藝は、それの有する如何なる性質の故に素人によろこばれるか、といふ問題であらう。そして此問題は結局に於てまた、素人向きの文藝としての大衆文藝が、その理想と現實とに於て、そもそも如何なるものであるかの問題の中に歸納するであらう。

乃ち、私は先づ素人向きの文藝が如何に立派なものであり得るか、特に玄人向きの文藝に比して、如何にそれがより健全な、より眞純の藝術であり得るかと云ふ方面を述べ、次ぎには今日の如き最惡の時代に於てすらも、素人向きの文藝が眞に素人向きの文藝であり得る爲めには、少くともどれだけの條件を具へてゐなければならないかといふ、謂はゞ現實的方面について述べて見ようと思ふ。

今日、大衆文藝を斥けるよりも寧ろ迎へる意味に於て、おとしめるよりも寧ろかつぎ廻る意味に於て、大衆文藝の問題を論じてゐる人々は、大體二樣の立場に立つてゐる。

一の立場に立つてゐる人々に云はせれば、無産階級（少くともそれに近いもの）としての大衆へ解放思想、もしくは革命的精神を宣傳する手段として、大衆文藝は甚だ有効なものたのである。

今一の立場にゐる人々、謂はば買ふためによりも寧ろ賣る爲めに、半ばきまり惡げに大衆文藝を口にしてゐる人々に云はせれば、文藝に對する特殊の教養ある階級の爲めに、特殊の文藝があらねばならぬ如く、大衆の爲めにはまた大衆の文藝があらねばならないのである。

この二樣の立場に立つてゐる人々が、大衆文藝を必要とするに就いての理由や根據は、それぞれに異つてゐる。それにも係らず、大衆文藝の藝術的價値を十分に重要視してゐない點に於

て、少くとも大衆文藝ならぬ今一つの文藝、謂はば文人向きの文藝に比し、全く同程度以上に藝術的であり得るといふことを確信してゐない點に於て、彼等は所謂同一水準に立つてゐることとを免れないのである。

かくて、大衆文藝の要望者主唱者等は、大衆文藝が藝術的價値に於て何等か低級なものであるやうに思ひ乍ら、尚ほ且つ大にやれと言ひ、大にやらうと言ひ、或は大にやつてゐると言ふのである。これに對して特に所謂藝術家的習癖（それが本物でないのは改めて言ふまでもない事だ！）を有してゐる人々は、それ故大衆文藝が、少くとも彼等自身にとつて、痛切な興味を感じ得ないもの、どうでもよいものであると云ふ風に見てゐるのである。

•

そもそも大衆の爲めの文藝が、文藝に對する特殊の教養を有する者の爲めの文藝に比し、必然に藝術上一段劣つた價値を有しなければならぬと考へるのは、文藝についての特殊の教養なるものの効能を高く買ひすぎてゐるからである。

なぜと云つて、單に文藝に於してのみならず、一般に藝術に於て、特殊の教養を加へると云ふことは、本當に藝術家的天分を有する、謂はば天才者にとつてこそ、一本に關係なくその資質力と創造力とを展開させるものであるけれど、さうした素質を惠まれてゐない人々にとつては、彼等の藝術觀をより廣くするよりも寧ろより狹くし、より深くするよりも寧ろより淺くし、より偉大にするよりも寧ろより病的にする場合の方が、ずつと、ずつと多いのである（勿論、かうした事の故に、藝術についての特殊の教養を不必要無意義であると言ふのではないけれど）

換言すれば、文藝についての特殊の教養なるものは、一方に於てほんの指折り數へるばかりの少數天才者に、めざましき仕上げをかけてゐる時、他方に於てその數百倍乃至數千倍の凡庸者をなごたらしくも邪路に引き入れ、取りかへしのつかない出來損ひにしてしまつてゐる。しかもさうした不幸なる凡庸者等が、文藝についての特殊の教養を加へるにつれて、身の程をもわきまへず、十中八九までが、專門的職業的文藝家に、所謂文士にならうと志して來る故に、彼等の災厄は一層甚だしきを加へるのである。

即ち、文藝についての特殊の教養を有する階級の爲めの文藝なるものも、詮じつめれば、僅かに指折り數へるほどの少數天才者を相手に書かれるか、それとも文士的群衆と云ふ出來損ひ達を相手に書かれるか、二つに一つでなければならぬ。しかも大抵の場合が後者、即ち文士的群衆を相手に書かれたもので

[illegible]

[illegible]

何[illegible]に於て・[illegible]

として、文[illegible]に比して、[illegible]劣つてゐるといふことを意味するではないか？ そして大衆即ち、[illegible]的[illegible]衆が意外にも、文學的[illegible]衆に勝るとも劣らないほどの鑑賞力理解力を有するといふことと、のみならず、天才者達の前にも天才的な作事をさへ普通に考へられてゐるよりもずつとずつと餘計に、より善く了解し得るといふことと、これらの事にして明らかにされるならば、大衆文藝の藝術的價値に對する理由なき蔑視の如きは、たやすく一掃されてしまうではなからうか？

曾つてある處に書いた如く、そもそも文藝上の玄人が書く人として生れて來たのは、畢竟書かないではゐられない人間として、ただ書くことによつてのみ文藝の醍醐味を享受し得る人間として生れて來たのである。これに對して文藝上の素人が讀む人として生れて來たのは、一面から見れば、書く人が書くことによつてでなければ得られない生命の充實を、本當の生甲斐を、單に讀むだけで以て、やすやすと體驗することの出來るやうな、幸福な人間として生れて來たのである。

[illegible]

[illegible]

書く人と[illegible]な人に、[illegible]

[illegible]すに過ぎない。[illegible]い陸へ到達したかについては、何等の[illegible]るところもないのである。

しかも、これまで大抵の場合、書く人々は讀む人々に對して理由のない優越を感じ、讀む人々は書く人々の前に謂はれなく卑下して來てゐる。そして所謂文藝好きな年少者等は、各自の天分素質の如何を顧みもしないで、濫々相率ゐて、專ら書く人にばかりなたらうと志すのである。

從て、自己の天分素質が甚だ書く人たるに適當してゐないにもかかはらず、尚ほ且つ闇雲に書く人にならうと志すのは、一見極度にまで文藝好きのやうであるけれども、實際は文藝そのものを好きであるより以上に、文藝に附帶したさまざまな華はしきものを、特に書く人としてのみ獲られるところの、名聲地位勢力なぞを、ずつと餘計に好きであるのを常とする。

文藝その物を本當に好きな人々は、文藝に附帶したさまざまな華はしきものに對して割合に冷淡である。時としては、書く人としてのかなりな天分を有つてゐて、そしてはたから「書いて見ては？」とすすめられた場合にすらも、尚ほ且つ書く人と

して立つことに、甚だしく躊躇する位である。

萬事が皮肉に、「お生憎」に出來上つてゐる此世の中では、一つ書かして見たらと思ふ人々が、つひに書かないでしまふ場合も少くないと共に、書く人としての格別の天分も持合さない人々が、構はず書く人になつてしまふ場合は更に一層多いのである。

格別の天分も持合はさない癖に、構はず書く人になつてしまつた人々は、精一杯の精進努力をした場合にすらも、恐らくは書いた方が善かつたか惡かつたかも知らないやうな物を、寧ろ多量に書き過ぎる位が關の山であらう。しかも彼等は、その書いた物がともかくもして活字になり出した頃には、早くも既に遺憾なく擦ずれて居り、努力も精進も過去の話になつて居り、單に書くことと、書いた物を賣込むこととにのみ沒頭するやうになつて居り、從つて明白に、書くことを少しも早くやめてしまつた方がいいやうな人間になつて居るのである。

書く人としてのかなりな天分を有つた、僅かに一人の人を文壇に見出し得る時、私達は單に虛榮と功名心とからのみ文藝に志しただけの、餘りにもみじめな天分を有つた人々の或は數十人を、或は數百人をも我慢して同一の場所に存在させ、跳躍させ、喧噪させなければならないのである。

この割合に於て夥しき低級文壇人――これが總締な言葉遣ひに於ての文壇的群衆である。

文壇的群衆と『文藝についての特殊の教養を有つた階級』とを直に同一視するのは、一應穩當を缺いてゐるやうに思はれるかも知れない。しかし乍ら、文藝についての特殊の教養たるものが、結局書く人になることへの修行を意味し、或は少くとも、書く人になることへの志望を起させずには置かない限り、實際上、文藝についての特殊の教養を有つた階級と文壇的群衆との間に、たいした距りもないと言つて差支はないやうに思ふ。

文壇に於ける批評の効果は、議會に於ける言論の効果と相近い。文藝上の作家及び作品はつねに、その時その時文壇的群衆の一般投票が決定したところの、思ひ切り出鱈目な文壇相場に從つて、高くも低くも賣り買ひされてゐるのである。

それでも文壇的群衆の作り上げるところの輿論は、一般群衆の作り上げるところの輿論に比べて、まだしも何程か出鱈目が少いと、人のいい一部の人々は考へてゐるかも分らない。

これらの人々は文壇的群衆（文藝についての特殊の教養を有つた階級と言ひかへてもよい）が如何に畸形兒的な、如何に變質腐敗した存在であるか、及び一般的群衆が如何に意外に信頼すべき鑑賞者であるかについて、餘りにも知らなさすぎると云

[illegible]

ただと云つて――

本當の、偉大なる、天才者的文藝家は、他のさまざまな方面に於ける天才者的な人物と同様、一面どんなに專門家的に生きてゐやうとも、尚ほ且つ他面それぞれの專門を超越した、人間としての、より普遍的な、より本質的な生活をもちやんと有つてゐる。そして彼等の仕事も專門家的なところへ來てはじめて仕上げがかかるのではあるが、しかし其土臺は專門家としてでない、人間としての彼等の生活の上に置かれてゐる。

一般的群衆は、それぞれに色々の專門家であるにもせよ、文藝の享受者として文藝上作品に對する場合には、もはや如何なる專門家でもなくして、寧ろ單なる一個の人間たるに過ぎない。

然るに、藝術家であるよりも寧ろ輕業師であり、甚だしきに至つては單なる玄人ぶりたい虛榮人、單なる文壇通、單なる樂屋話的ゴシップ的智識の所有者たるに過ぎないところの文壇的群衆は、總ての個性的充實を有たない空虛な人間が、如何なる場合にも其階級的制服を脫ぎ得ない如く、ついに暫く人としての職業的專門的態度を超脫することが出來ない。即ち、彼等には單に專門家としての生活があるだけで人間としての生活が全[illegible]

ところで、如何なる[illegible]門家としてのみなり得るといふことは、[illegible]もの、[illegible]なければならぬ。

これと對立して、如何なる方面の仕事にもせよ、何等の專門家的態度を取り得ないで、單に人間としての普遍的な立場からのみ接して行かうとするのは、どんなに齒がゆさ物足りなさを感じさせることがあらうとも、とにかく大體の方向を過らなかつたもの、その故も本質的な部分だけはつかまへたもの、從つてどうにか我慢の出來る位のものではあり得るのである。

要するに、何等の專門家的なものを有しない一般的群衆が、先づ人間であり、次ぎに又專門家でもあるところの、本當の、偉大なる、天才者的文藝家と丁度同じほどの、廣く、深い文藝の世界へはいつて行くことは出來ないかも知れない。たゞ私達はそれにもかかはらず一般的群衆が專門家としてのほかに全く生きることを知らない文壇的群衆に比べて、ずつとより健かな文藝觀と文藝上鑑賞力とを有つてゐるといふことを承認しなければならないのである。

次ぎには、總じて正しい物の見方をする人々は、まづ全體の

姿を見渡して置いて、**つぎにその部分々々のこまやかな吟味に移る。これが大抵の場合に於ける堅實な順序である。**

そして兎も角も先づ全部に注意したものは、やがてまた部分部分の窮鑿にも**はいつて行くのを常とする。**少くとも部分々々の窮鑿にもはいつて行けないことはない。よしはいつて行けなくとも、はいつて行かなくとも、單に全體に注意したといふだけでも、尙ほ且つ既に何物かであり得る。

これに反して、全體からはじめないで、部分々々からはじめたものは、その後愈々より部分的な、より小さな、より些末的なものに興味を有つやうになるのが通例であつて、逆により全體的な、より大きな、より根本的なものへ心を向け出して來るといふやうなことは極めてまれである。

そして、全體的なものをお留守にして置いて、部分的なものにばかり拘泥するといふのは、最善の場合に於てすらも、あまりに有用なことであり得ない。より惡しき場合には、不用の事であり、有害の事であり、甚だ危險な事である。

隨で、文藝上の作品などを鑑賞し評價する場合にも、まづその全體に包有されてゐるところの意義と、全體から與へられるところの効果とを問題にする。そして彼等の中なる或るものは、全體的なものから部分的なものへ、更により部分的なものへとつぎつぎに、かなり細かい處にまでまいつて行くことが出來、又實際にまいつて行つてゐる。

これに反して、いかなる場合にも專門家顏をしたり、玄人ぶつたりすることを忘れないところの文壇的群衆は、まづ重きを出來るだけ部分的細部的なものに於て、創作したり批評したりする。さうした態度を取ればとるほど、愈々專門家らしく玄人らしく見えるといふことを意識し、乃至意識してゐるからである。

乃ち、まづ全體を、從つて內的なものを、又從つて所謂本質を問題にする點に於て、一般的群衆は本當の、偉大な、天才的な文藝家へ、かなり近づいて行くことの出來るものであり、まづ部分を、從つて外的なものを、又從つて所謂外觀を問題にする點に於て、文壇的群衆は、文藝の上のまことに救ひがたき異端外道であり、本當の、偉大な、天才的な文藝家からは勿論のこと、單に「讀む人」としての一般的群衆からさへ、指斥され、侮蔑され、乃至擯斥されねばならないところの組成分子である。

更に又、文藝に於ても、專門家としてでなく、むしろ人間として、部分からよりもむしろ全體から、外的なものからよりも寧ろ內的なものから、所謂外觀からよりも寧ろ所謂本質から見

[illegible]

[illegible]

のは、實か思合はしからぬ、ありさうにもない、不自然な事ではないだらう。

　これに對して、如何なる場合にも專門家的制服を脱ぎすてることの出來ない、そして全體と、內的なものと、本質的なものとをあと廻しにして置いて、先づ部分と、外的なものと、外觀的なものとへ跳びついて行からとするところの文壇的群衆が、單に所謂藝術の爲めの藝術、換言すれば遊戲的娛樂的藝術をのみ、本當の藝術らしい藝術と考へるといふのも、また同樣に似つかはしく、ありさうな、自然な事でなければなるまい。

　そして普通に考へられてゐるのとは大に相違して、一般的群衆は、單なる娛樂を得るつもりで劇場へ出かけたり、讀物をよみ出したりした場合にすらも、いつとはなしに、知らず識らず單なる娛樂以上のものを要求するやうになつてゐる。或は自分では、單なる娛樂を享受してゐるのだとよりほかに意識してゐない場合にすら、實際には單なる娛樂以上に人生的意義を有つた本當の藝術、本當の文藝に執着してゐるのである。

　これに對して文壇的群衆は、人生の爲めの藝術を愛してゐるやうに、他から見られてゐる場合にも、否自分自身へさへ言ひ

藝術の方へ、[illegible]のである。

　私の所謂一般的群衆が文壇的群衆に比して、より健全な文藝觀及び文藝上の鑑賞力を有するところの、むしろ少くともより健かな、より信賴すべき文藝觀及び文藝上の鑑賞力を有するといふことは、以上の說明によつて一應明白にされ得たであらうと思ふのであるが、尙ほ念の爲めに一般的群衆が、何故に、文藝上作品に對する其理解力を、實際よりずつと低く見られてゐると云ふ問題に關して、二三の事を言ひ添へて置くのもまんざら無用の沙汰でもなささうに思はれる。

　先づ人々が一般的群衆の理解力をむ暗にあやぶんだり見くびつたりする時、彼等は第一に藝術の樣式と其マンナリズムとをはつきり差別してゐたのである。

　樣式はそれぞれの內的含蓄にともなつて千變萬化するところの、またそれぞれの內容が自からにして産むところのそれぞれの形式である。これに反してマンナリズムは、內的含蓄に關係なく、固定的に用意されてゐるところの、そしてどんな場合にもお構ひなく、外側から押しつけられるところの、個人的の、或

は集團の型であり、習癖である。どうしても書かずにゐられないといふやうな、本當の内的要求の爲めよりも、むしろ單に書くことの爲めにのみ書かれるやうな場合の内容不足に、形式過剩にきまつて附隨するところの、病的な、エセ様式であり、反様式であり、様式破壞である。

私の所謂文壇的群衆は終始一貫して マンナリズムのほかなる何物をも知らない。彼等にとつてはマンナリズムが藝術に於ける最も藝術的な要素であり、彼等に専門家面をさせ、玄人ぶらしてくれるところの最高のものである。

一般的群衆はマンナリズムを面白がらない。彼等は本當の藝術家と同じやうにマンナリズムを憎悪することは出來ないかも知れない。又本當の藝術家と同じやうに、正しい藝術様式を積極的に、藝術的に享樂することは出來ないかも知れない。ただ、マンナリズムに對する一般的群衆の無關心を、その儘正しい藝術様式に對する彼等の無理解をも示してゐるかのやうに判斷すべきでない。むしろ、反様式としての、様式破壞としてのマンナリズムに對する思ひ切つたよそよそしさが、丁度それだけ正しい藝術様式への内的親密さを暗示してゐるかも知れないことを想ふべきである。

更に、人々が一般的群衆の理解力を、無暗にあやぶんだり見くびつたりする時、彼等は第一に、一般的群衆の教養程度と學術的智識との距りを問題にしてゐる。しかし乍ら、二の場合こそは、必要上止むを得ずして訴へられたる學術的智識が、何等の必要もなしに、ただ衒學的衝動からのみ浮薄に振りまわされたる學術的智識ほど、一般的群衆にとつて近づきがたく親みにくいものでないといふこと、又作品全體が、その最も本質的なものが、恐ろしい力で引きつけてゐる限り、かなり小むづかしい學術的智識を織り込んだ表現すらも、尚ほ且つ一般的群衆から割合に面白く讀まれるものであり、少くともどうにか我慢してもらへるものであるといふこと、これらのことに想ひ到らないでゐるのである。

更に人々が一般的群衆の理解力を、無暗にあやぶんだり見くびつたりする時、彼等は第二に、暗示的なもの、象徴的なものの解りにくさを問題にする。或は、こまやかなニユアンスが、シェエドが、一般的群衆にとつて餘りにこまやか過ぎるやうなことを言ふ。

しかし乍ら、私達の見るところを云へば、一般的群衆が煙にまかれたり、退屈を感じたりするのは、暗示的なもの、象徴的なものに對しての場合よりも、むしろ文壇人の樂屋落的な合言葉に對しての場合である。又、一般的群衆は出來損つた藝術及び

[illegible]エドに對して無感覺ではないのである。

[illegible]往々にしてあるからである。[illegible]

――以上の如く論じて來れば、私の所謂一般的群衆、即ち大衆が普通に考へられてゐるよりもずつとよりしつかりしたより信頼すべき文藝觀及び文藝上鑑賞力を有つてゐるといふこと、加之、所謂文壇的群衆、もしくは『文藝についての特殊の教養を有した』階級より、少くともより健かな趣味性を有つてゐるといふこと、從つて素人向きの文藝としての大衆文藝が、玄人向きの文藝としての所謂『文壇的』文藝に比し、藝術的價値に於て（他の價値はこの場合の問題にしないのだ）單に遜色を見ないのみならず、むしろ一段と立ちまさつた物でさへもあり得るといふこと、これらのことは大抵の人々から首肯して頂くことが出來ると思ふ。

勿論、大衆文藝が所謂文壇的文藝に比してずつと本當の藝術であり得るといふのは、大衆の直に理解しないやうな文藝が、間違つた藝術であるといふことを意味するものではない。

なぜと云つて、天才者的藝術家は、その時代を生活するより以[illegible]がるといふのは、隨分あり得るところの事柄であるからである（結局に於て、一般大衆に容れられる容れられないとが、全た本當の藝術と、假的のウソの藝術とを差別する最上標準になるといふやうな、トルストイなどの考へ方も決して根據のないものではないやうに思はれるではないか！）

又、一般大衆の比較的健全さを如何ほど強調するにもせよ、尙ほ且つ私共は大衆その物が時代の推移につれて、或はより善くなり、或はより惡しくなり得るといふこと、例へば今日の文明世界に於ける大衆の如きが、かなり從前の健全さをなくしてゐるといふことなぞを、決して認めまいとするものではない。ただ、さうした事情にもかかはらず、所謂文壇的群衆より以上に一般的群衆の惡化するといふやうなことが、到底あり得ないことを忘れたくないと思ふだけである。

處で、これまでに私の述べて來たのは、素人向きの文藝とし

ての大衆文藝が、その本來の性質として、どんなに立派なものであり得るかといふ、謂はばその理想的方面に關する考察であつた。これまでのゝ及び今日の讀書界に於ける現實の大衆文藝が、そもそもどれだけの藝術價値を有つたものであるかと云ふ如きは、自ら別個の問題である。

前にも言つた通り、今日の文明世界に於ける大衆は、過去に有つてゐた健全さをかなりなくして來てゐる。その上、本來書く人」に對する「讀む人」としての大衆は、昔の人の何から如何なる作品を與へられやうとも、一應は默つて素直に受け容れる位に受動的である。十年經ち、二十年經ち、五十年百年と經つ内には、個人的にでなくとも集團的に、何等かの形で、だんだんとはつきりした價値批判を下し、批判を下したところを又はつきりと表白するやうになつて來ることも勿論ながら、作品を押しつけられた當座には、ただ朧ろげに、しかも心もとない批判をしただけで、批判をした限りをさへ條々表白し得ないでゐるといふやうな有様である。

さればどんなに空虚な、どんなに偏つた、どんなに拙劣な文藝上作品でもが、今日の如くさまざまな露骨を極めた宣傳手段、押賣手段によつて、不自然なる流行を支配して行くマアカンテイリズムの全盛時代に於て、一般民衆の間にすばらしい一時間の人氣を博するといふのは、聊かも不思議な事ではない。

そして、今日實際に多く讀まれてゐる、といふよりも寧ろ、多く買はれてゐる、買はされてゐる所謂大衆文藝を今日の大衆文藝として許すならば、殆んど如何なる物でも大衆文藝になり得るといふことになり、結局卑陋なる販賣手段その物を問題にするよりほかに、問題も何もなくなつてしまふであらう。

乃ち私は、さうした卑陋な販賣手段なぞを須たないでも、自らにして今日の大衆によろこばれるやうな文藝は、少くとも一時間になりとも面白がられるやうな文藝は、少くともどれだけの條件を具へてゐなければならないかといふことについて、稍や具體的な考察を少しばかり試みようと思ふ。けだし、今日の大衆文藝その物を具體的に見るためには、之が最も必要な事であると共に、また必要な事の殆んど全部でもあるからである。

先づ第一に、大衆としては恐らくかなりに頽敗したものであらうところの今日の大衆も、倘ほ且つそれが文壇的群衆でなくして一般的群衆である限り、文藝鑑賞の上に、細部的部分的な物を全體的なものより重要視するやうなことはない。從つて彼等は部分的細部的には隨分缺陷があらうとも、全體として有意義に面白く出來てゐる作品ならば、歡んでこれを迎へるの

[illegible]

所謂文壇的文藝に於ては、相當に手腕を認められる作家にして、大衆文藝の作品を書く時、お話にもならないほどの不成績を示すといふのは、何よりも先づ彼が全體よりも部分を重要視するやうな、間違つた、デカダン的傾向になつてしまつてゐるからである。

次ぎには、今日の惡化せる大衆といへども、尙且つそれが文壇的群衆でなくして一般的群衆である限り、實質的なものより外觀的なものに、思想的內容より表現的形式により多く興味を有つといふやうなことはない。むしろ所謂技巧といふやうたものはどうでもよいから、切れば血の出るやうな、本當に生きてゐる、生命のはちきれるほど充實した作品に接したいと願つてゐるのである。この事實その物は大抵の人々が見てゐる事乍ら、しかし、そこに大衆のより健全な鑑賞力の一證據がそこにあるのだと氣附いてゐる人は、餘りにもまれである。

[illegible]

と大差はないのである。

大衆は昔も今も、作家と本當に一つ向きになつてゐたのである。作家を獨占した讀者になつしてゐたのである。

されば今日といへども、大衆文藝に於ける大の禁物は作家等の樂屋落である。苟くも樂屋落的なものを感じさせる一切の內容一切の形式である。

從つて大衆文藝は、『君達に面白いかどうかは知らないが、とにかく僕自身面白いから之れでいゝのさ』といふやうな態度——所謂主觀詩人の獨りよがり、獨合點なそれを絕對に斥けると共に、一方では又、『僕自身には面白くも何ともないが、たゞ君達をよろこばしてやるんだよ』といふやうな態度、謂はゞ餘りにも露骨な職人根性、せうばい氣をも、一般に考へられてゐるより、ずつと以上に、捨てあまさなければならぬ。

乃ち、今日といへども本當に大衆によろこばれる作品を書かうとする人々は、實際上どうしても大衆を悅ばせると共に自分自身をも悅ばせることの出來るやうな素質を持ち合はせてゐな

ければならぬ。

特に、自分自身で面白がるといふ・面を強調して言ふならば、作家が『なあに金がほしいから書くだけのものだ』と言ひ目つむへてゐる場合にすらも、實際はやはり懸命の努力をも拂ひ、またその努力の中に無意識的の大きな悦びを經驗してゐるといふ位でなかつたら、決して大衆に受けるやうなものは出來ないのである。

最後に、けれども最も重要な事として擧げたいのは、つねに所謂『藝術の爲めの藝術』でなくして、『人生の爲めの藝術』であらねばならぬといふ大衆文藝の根本條件である。

げに、文壇的作家が自分では人生の爲めの藝術を創作してゐるのだと思ひながらさへ、その實藝術の爲めの藝術、即ちエセ藝術、娯樂文藝の製作に堕つてゐる如く、一般的群衆は單なる娯樂を求めるつもりで讀み出した場合（それが主として通則である）にすらも、いつとはしらず單なる娯樂以上の物を、本當の、人生の爲めの藝術を要求して來るのである。

偖て大衆が、文藝上作品に於て、單なる娯樂以上のものを、『人生の爲め』に役立つものを要求する場合、その要求の一は勿論、所謂世態人情についての智識を與へられることとである。

しかし　大衆は所謂世態人情についての智識がその作品の中に十分具備化されてゐるか、或は單に抽象的概念としてのみ說述されてゐるかといふことについて、かなり無頓着である。されば斯うした種類の要求が、『ありの儘』もしくは『ありさうな事』の描出としての、所謂寫實主義文藝を愛好することの原因になるといふやうな場合は稀れである。

のみならず、世態人情についての智識を得たいといふやうな、謂はば智的な要求は、一部少數の人々に於てはとにかく、一般大衆に於てそれほど根強いものではない。そして彼等が如何なる場合にも、最も熱情的に要求して止まないものこそは、彼等の情意生活に直接働きかけて來るところの人生的功利である。精しく云へば、この人生、この世界に對する適切な價値批判を下して貰ふことである。

大衆は文藝上作品を貫通せる價値批判、とくに道徳的價値批判が、自分達自身から下されたもののやうに思はれることをよろこび乍ら、他方に於ては、その批判が自分達を高く引きあげてくれるやうなものであることを願ふ。そして斯うした批判のどちらかの一面が缺けてゐるとき、それは所詮物足りない作品であり、その兩面が缺けてゐるとき、それは結局、讀むに足りない、もしくは讀むに堪へない作品であらねばならぬ。

[illegible]あさせるやうな、十分に適切なものにする限り、道徳的價値批判も亦、必ずしも作品の全體に具體化されずして居ることを要しない。時には作者自身が（形式上作中人物の口を通して）語ることもあるが）演説者説教者として其道徳的價値批判を、思ひ切り抽象的概念的に宣傳してゐるにもかかはらず、大衆はさうした表現の仕方を聊かも不滿に感じないで、たゞその批判の思想内容の痛切さに隨喜の涙をこぼしてゐる。

又、作者の道徳的價値批判が作品の全局にいくらか具體化され、彼の道徳の支配してゐるやうな一の小宇宙が創造されてゐる場合にも、倘ほ且つ凡庸未熟の藝術にあつては、その小宇宙の内に動く人物を、所謂善玉にしたり惡玉にしたりして、とかく概念的に片附けてしまふことを免れないものであるが、一般大衆はかうした善玉惡玉的な拙劣さをもそれほど氣にしないものである。むしろ、人間性をあるが儘に、親切に描出したやうに見えながら、作者の道徳的批判のはつきりしない、稀薄な、生ぬるい所謂玄人向き文藝なぞよりも、却つてさうした拙劣ながらきびきびした批判の示されてゐる善玉惡玉物の方をよろこぶ位である。

[illegible]ミゼラブル[illegible]、又、トルストイの[illegible]あれほど大衆に受けてゐる作品なども、その中へ出てくる人はそれほど善玉的惡玉的に片附けられてはゐないのである。そして、ああした作品の大衆の心を捕へる第一の點は、これらの作品の全體に漲つてゐる、洪水の如き作者の道徳的熱情である。その作品につつまれてゐる、或はその作品を包んでゐるところの、燃え輝いてゐるところの道徳的理想である。

（私がユウゴオ、トルストイなぞの作品を大衆文藝の好典型であるかのやうに言ふ場合、讀者諸君は、それらの物の出質なる逐字譯よりも、涙香氏の飜案的飜譯の方がより大衆的である、露西亞人佛蘭西人等にとつての原著が更により大衆的であるべきことを想見して頂きたいのである。）

世間多数の人々は（その内に自ら大衆の作者を以て任ずる人人すらもあることを注意すべきである！）、一般大衆を最も先づ悦ばせるところのものは、所謂好色的な、風俗壞亂的な事件や光景の描寫であると考へてゐる。だが大衆の心理に對する、從つて大衆文藝の根本要件に對する、これより大きな穿きちがへ

はないのである。

けだし、大衆自身は随分好色家でもある、また所謂風俗壊乱的な生活をもしてはゐる。しかし乍ら、それ故その程度に於て彼等が好色的、風俗壊乱的な生活の再現を、文藝上作品の中に要求してゐると考へるのは、何等の根據のない事である——丁度泥棒が泥棒芝居を好きだらうと速断することの理由なきが如く！

勿論、好色的、風俗壊乱的な生活の近くには、人間性の底の底が見すかされ、込み入つた、大きな道徳問題が起つて来易いものである。言ひ換へれば、厳粛な道徳問題は甚だ屡その人間性的な生活を中心に起つて来るのである。そこで作者の道徳的價値批判を濃厚に示さうとする大衆文藝の作品が、甚だ屡々人間の性的生活に於ける事件を題材の内に取り入れるといふことと又大衆がさうした作品を大に面白く讀むといふことは十分にあり得る。

しかも、かうした場合にも大衆が性的な事件その物をそれほど面白く感じてゐるのでない證據には、單に好色的風俗壊乱的であるより以上に、何等の意義を有しないやうな新作物が、大劇場なぞに上演される場合を注意して見るがよい！如何に不機

前も正直な大向ふから愛せれることぞ—！

性的な生活と云つても、非常に醇化された、品のいい、美しい戀愛であるならば、それの表現描寫は、單にそれだけでも大衆によろこばれないことはない。しかし、所謂好色的風俗壊乱的な事を書きさへすれば、單にそれだけでも大衆から興味を有たれるだらうと考へるなぞは、その愚及ぶべからずである。

所謂講談は本来口の藝術であり、それを無造作に筆の藝術にねぢ曲げてしまつた講談本が、文藝上作品として甚だ變な物たるを免れないのは自然の事である。でなくとも、現在の大衆藝術であるより以上に過去の時代の大衆藝術である。

それにもかかはらず、大衆がべたべたした好色的描寫に引きつけられるよりも、寧ろきびきびした作者の道徳的批判により強く動かされるものだといふことは、所謂講談本があれほど好色的描寫をお留守にしてゐながらも、尚ほ且つ忠臣孝子貞女烈婦なぞの物語によつて、あれほどのすばらしい人氣を呼んでゐることの事實からして、かなりよく想見されるであらうと思ふ。

近視眼者流によつて大衆が受けてゐるところの今一の誤解

ことである。

更に一部の人々について云へば、或人殺しを見て或人殺ふといふやうな野蠻的な意味を作つてゐる場合、かなり殘忍な天國的場面の描出されることを好ばないではない。又、更により少數の人々について云へば、例へば今日の一部のプロレタリアの如く、自暴自棄的な氣持から、或は反逆的な氣持から、無暗に血なまぐさい事件や光景の再現を痛快がるといふやうな事もまんざら無いではない。

しかし乍ら、一般大衆にあつては昔も今も、殘忍なる行爲が所謂好色的事件なぞと同樣、色々の込み入つた道德問題をひき起し易き故、從つて作者の道德的批判を具體化するに便利な題材となり易き故、さうした殘忍行爲をも描出してゐるところの作品をよろこぶといふに過ぎないので、殘忍行爲その物だけをきりはなして面白がつてゐるのではない。少くとも、さうした切りはなされた殘忍さ其物だけに對しては、物凄さ、恐しさ等をこそ感ずるだらうが、嚴密な言葉遣ひに於ていゝ氣持になることはなささうに思はれる。

（愛の爲めに、或る愛人の爲めに如何なる犧牲的な苦みをも堪へ忍ぶといふ女主人公なぞが、さうしたけなげな行爲によつて大衆に好意を有たれる如く、所謂殘忍な行爲の中にも、行爲者[illegible]れてゐる場合、[illegible]ふつは不思議ではないと共に、[illegible]といふことの何等の故障にもなるものではない。）

要するに、特別に腐敗したデカダン的趣味人か、無意味な所謂「殺し場」なぞを、切りはなして享樂してゐるのを見て、一般大衆がやはりさうだと速斷する如きは、この上もなき大きな穿きちがひである。

外的皮相的な生活に於て、敗北すればするほど、それにつれて、或はそれ故に內的心靈的に愈々勝利者になつて行くといふ經過を示すもの、これが嚴密な言葉遣ひに於ける悲劇的又は悲壯劇的藝術の本質である。そして大衆が悲劇的又は悲壯劇的作品に魅力を感じるのは、そこに悲しく哀なる、陰氣臭い生活の表現があるからではなく、むしろ、さうした生活に包まれてゐる崇高偉大なる道德的英雄の潑溂たる生活の再現に胸のすく思ひを、乃至それ以上のものをさへ經驗し得るからである。

色々な意味に於て低劣な人間が、その低劣さを遺憾なく發揮することによつて、謂はば最も痛快な刑罰を受けるといふ經過の再現―これが嚴密な言葉遣ひに於ける喜劇的藝術の本質であ

る。そして大衆が喜劇的文藝をよろこぶ場合、それは低劣な性格や行爲の描出その物をよろこんでゐるのでなく、さうした性格や行爲を作者と共に神様の如く高い處から見下しながら、道德的に批判して行くこと、そしてそれによつて、現實の自分達の生活へ自らにして、善き影響を及ぼすやうな情態に置かれることを、少くとも無意識によろこんでゐるのである。

——以上、道德的價値批判と云ひ、道德問題と云ひ、道德的意識と云ひ、『道德』と大衆文藝との交渉を、私はかなり强調力說して來た。けれども、この點については、私自身聊かも言ひ過ぎてゐないどころではなく、寧ろまだ〱言ひ足りないことを悶かゆく思つてゐる位である。

私をして今一たび反復せしめよ。道德が單に現前のそれであると、將來のそれに近いものであると、乃至來るべき時代のそれであるとを問はず、とにかく大衆は、何よりも先づ道德的興味の濃厚なものを要求する。そして作者の道德的批判を自分自身のものと感じることの出來ないもの、總じて道德的價値批判のぼんやりしたもの、稀薄なもの、生ぬるい物である限り、他に如何なる『技巧的』手段が講じてあらうとも、恐らく大衆は一顧をだも與へないであらう！

さうだ、この場合『忠臣藏』と『千代萩』とが何故、今尙ほ大衆の大なる興味をひき得るかを、今一度考へて見るといふのもよい事である！

——一九二六年六月——

大衆文藝家總評

村松梢風

一

大衆文學と云ふ熟語は誰が何時から使ひ始めたのか知らぬが、一二年このかた屢々耳にしたり活字で見受けたりするやうになつて、近來では文壇の流行語の一つになつてゐるやうだ。此の名稱に對して適切な註解を與へて發表した人も既にあるだらうが私はそれを讀んでゐない。今度本誌の編輯長から、大衆文藝家の作品に對する批評を書けと云ふ註文を受けたので、いつたい大衆文學とはどう云ふものなのであらうかと考へて見た。或作品がたまたま社會の大多數の人の感興を惹起して非常に廣い範圍に亙つて讀まれた、それが大衆文學であると云ふならば、いつの時代にも一つや二つはあることで珍らしくはない。それでは單に結果から云ふたに過ぎなくなるが、更にこれを積極的にいつて、大衆(無條件に此の熟語を使ふ)に向つて共鳴を求め、彼等の感興を激發せしめるやうな目的を以て書かれた文藝、かういふ風にも考へられる。猶云へば、社會の大多數の民衆の思想に基調を置いて、それらの生活上の欲求や苦惱を表現するところの文藝、とでも云ふのかしらとも考へられる。あるひはまた、簡單明瞭に、高級文藝に對する通俗文藝を意味するものかとも受け取れる。けれども、これだけの考へ方ではまだどれもこれもぼんやりしてゐる。そこで、私が今云つたやうなことを全部ひつくるめて條件にかなつてゐるものとしてもよい。さうすると少しは分つて來たやうな氣がするが、しかしよくよく考へて見るとそれでも矢張り曖昧だ。何も彼も抽象的だ。いつたい文藝的作品に對して、鑛物の標本や商品の見本箱の中のやうに截然たる區劃分類をつけて總括的名稱の下に統一してしまはふと云ふことは、無法なはなしである。それができる位なら人間に對しても同樣に本質的の區別をつけることができる筈だがもとよりそれは不可能だ。われわれは、職業や、租稅の高や、わずかなる容貌や體格の相違や、或ひは智能の高低

によつて各種類の區別をつけられることはできるけれども、其の各人が人間である點に於ては皆一樣で奈何共變へ難い。名譽を欲し、金錢を喜び、異性を愛する點に於て萬人に共通の心理がある。文藝の作品が人類の本能に根源を發し、眞理を描くものである以上は、これと同じ意味に於て分類が困難である。

だが、字義の解釋は實を云ふと今の私の場合には餘り重大でない。一つの名稱の下にいろんな異つた種類の物が集つてゐたところで別に差しつかへはない。私は大體前に述べたやうな諸點を目安に置いて、所謂大衆文藝と目さるべき物や、或ひはみづから大衆作家を以て任じてゐる人達の書いた物を讀んで見て、それらの作物の價値や特質に就いて考へて見ようと思ふ。但し、題名は「大衆文藝家總評」と云ふけれども實は一部分の批評である。たゞ一方に偏せざる意味に過ぎない。筆者も讀者も共に時間の經濟を思はなければならない。

二

十二三年前、私にまだ書生の血が多くて遊里に沈溺したことがあつた。さういふ家で朝眼を醒ますと枕頭に必ず都新聞が置いてあつた。其の當時の都新聞は普通の家庭や下宿屋などへは滅多に入らなかつたから、さういふ機會をのぞいては私の眼に觸れることは少なかつた。花柳新聞と云はれた都新聞の記事ほど後朝の氣分にふさはしい讀物はなかつた、同紙の記者で先年亡くなつた伊藤みはるの書く花柳界の艶種は評判のもので是を讀むばかりに都新聞をとつてゐた人も少くない。所謂藝者氣質に精通して、しかも不思議な文才だつた。これと同時に其の頃から「大菩薩峠」が載り始めた。中里介山と云ふ名前は當時にあつては少しも世間的ではなかつた。が大菩薩峠は確かに面白い讀物だつた。全體としては講談風の趣向だが、文章に異樣なる魅力があり、作中の人物の特徴も在來の講談みたいに類型的でなかつた。此の小說は花柳社界では最初から大受けだつた。机龍之介だのお濱だのと云ふ名前は、遊女や藝者や茶屋女などの間で屢々話題に上つてゐた。が文藝批評家でない彼女達の好評を博し得てもそれは一向性好へ響かない。さうして中里氏の勞作も數年續いた。私も久しからずして狹斜の巷から足を絕つやうになり、同時に伊藤みはるの名文をも中里介山の小說をも愛讀する機會を失つてしまつた。讀みたければ、下宿屋でも家庭でも都新聞をとつて讀んだらよかりさうなものだが、なぜだか私は今でも其の氣になれないのである。身を花街に置き乍ら此の新聞を讀む時は何とも云へぬ親しみがある。が、新聞を讀んで花柳の時事に思ひを遣ることは私の心持として許はゆかつ

た[illegible]へ
ろくに載つてゐなかつた。實に新聞[illegible]だつた。すると、いつ頃のことだつたかハッキリ年代はおぼへてゐないが、大菩薩峠が本になつた。たしか日本紙の活字本で上下二冊位と思ふが、これは中里氏の自費出版で根津の小さな本屋から發賣した。何處の書肆でも出版を引き受け手がなかつたからだらう、中里氏はやはり根津の小さな印刷工場で自分で活字を拾ひ版を組んで職工の仕事をしながら漸く本を作つたと云ふことがたしか序文の中に書いてあつたやうに思ふ。丁度其の頃或日の都新聞を見ると、遲塚麗水氏（？）が署名をして、單行本『大菩薩峠』を紹介してあつた。それには矢張り著者自から活字を拾ひ版を組んで漸く本を作つたといふことが述べてあつて「文章としては取るべきものでもないが著者の苦心に對して同情を禁じ得ない」と云ふやうな意味のことが書いてあつた。私はそれを讀んで紹介文筆者に對して可成り不滿と侮蔑の氣持を持つたと同時に作者中里氏に對して氣の毒な感がした。餘人はとにかく都新聞の記者中だけは大菩薩峠の眞價を認めて載せてゐたのかと思へばさうでもなささうな樣子がそれで知れる。假りに全く價値を認めないにした處で、新刊紹介で「文章は取るに足りない」と書くのは例がなく無禮である。さう思つて私は此か[illegible]

しかし中里氏も遂に[illegible]は痛快だ、文壇のいろんな人達がこれを賞讚するやうになつた後に聞くと馬場孤蝶氏などは最初からの愛讀者で大菩薩峠を讀むためになが年都新聞をとつてゐた組だと云ふはなしだつた。それならば猶更のこと馬場氏などがもつと早く此の小說を社會に推薦して吳れたらよかつたと思ふ。

今度初めて縮刷本の『大菩薩峠』第一卷だけ讀んで見た。開卷數頁を讀んで第一に思つたことは、中里氏の技藝は最初から完成してゐたといふことだ。東京日々へ連載されてゐる近來の大菩薩峠と、都新聞へ載り始めた頃の大菩薩峠とは全く同一筆力を有つてゐる。これは當然のことのやうでもあるが、其の間に十幾年の差があることを考へると必ずしも當然だとは云へない、きく處によると同氏は現在四十位の年齡ださうだ。果して四十とすれば大菩薩峠の起稿時代はまだ廿臺に屬する、私などは十年前に自分の書いた物を今讀んで見ると非常に恥かしいことがある。と云つて現在も未熟極まる。好惡は別としても進步若しくは變化の來るは當然だ。處が中里氏は十餘年前も現在も全く同じ調子で書いてゐる、これは中里氏が早くより完成の域に到達してゐたことを證明して餘りある。私にはそれが異常の

ことに感じられる。これは技巧の問題ではない、態度の問題だ。大菩薩峠は腹で書いてゐる小說だ。ほんたうの腹藝だ、と云ふ氣持がする。文章としての表現の上には隨分ぞんざいな投げ遣りがあり、其の他凡百の缺點があるにしても、なほかつ『大菩薩峠』が立派な大衆文學として多くの人の心を掴み得てゐる所以はこゝに在る。そして、此の種の讀物の中にあつてひとり嶄然として群を壓し磐石の搖ぎのなさを示してゐる理由である。

三四年前になるが私は馬場孤蝶氏や其他の友人と同行して、樋口一葉の故鄕なる甲州の大藤村と云ふ土地へ行つたことがある。鹽山から四五里山奧へ入つた處で、或る篤志家が其所へ一葉の碑を建設したについて、除幕式を賑はすべく私達は招待を受けたのだつた。大藤村は遙か眼下に鹽山を瞰る山上の村で、村を貫通してゐる街道は、これが所謂甲州裏街道なのかどうかそこはハツキリ知らないが、人家の趣もすべて故態を存してゐた。なにがしと云ふ僧院で除幕式の事果てたる後、講演會に臨むべく私達は小學校へ行つた。其の時、小學校の運動場から望むと、東北の方までかく雄大な連山が峰をつらねて秋の空高く屛風を引き廻したやうに待つてゐた。その中に一際高い墨のやうに黑い山肌をした峰があつた。「あの山は何と云ふ山ですか」と居合せた土地の人に尋ねると、其の人が「大菩薩峠です」と答へた。私は感慨にうたれたやうな氣持で大菩薩峠をいつまでも眺め入つたものだつた。

大菩薩峠と呼ぶ山は中里介山の小說によつて天下に名が現れたが、介山の小說『大菩薩峠』は、甲州や北武藏の自然を舞臺に持つことに依つてはじめて生彩を帶びてくる。著者の言によれば此の小說は佛家の言ふ人間の『業』を描くことが目的ださうだ。それはそれとして、甲州から武藏野へかけての自然の姿ほど陰慘なものはない。何となく直ちに宿命的な暗示を胸に迫らせることでは、日本の何處の土地とも異つた色をもつてゐる。去年の冬も私は青梅街道のほとりに住む友人を訪問した時、今でも昔の儘の形を處どころに殘してゐる古風な其の街道を步いて、路ばたの竹藪だの、草屋根の人家だのを見て、其草深さと暗さとにおどろき、何だか其の邊一めんに悲しい運命を了へた人々の靈魂が啾々としてすゝり泣いてゐるやうな氣持がした。机龍之介、お濱、お松、兵馬、裏宿の七兵衛、さう云つた人間がみな宿命の糸にあやつられて、人を殺したり、戀をしたり、盜みをはたらいたりするのも、此の土地でなくてはならないといふやうな氣持がした。

『大菩薩峠』は文學として後世に殘るべき資格と可能性をほゞ

そなへてゐるか、中里氏が今後これ以上の大作をなし得るや否やは疑問である。氏の書はした短いもの（たしか某文の京都の事を書いたものだつたと思ふ）を一寸讀みかけたことがあつたが、大菩薩峠の作者の筆とは思はれぬほど平凡無氣力な作だつたので、一寸讀んで見て止めてしまつたおぼえがある。机龍之介の性格と甲武の自然の背景とをもとめえたことによつて傑作『大菩薩峠』は完成したが、此の人が文藝の士として、往く所に適應すべき才能を有するや否やは未だ豫測ができない。私のこの言を裏切つて中里氏が更に大菩薩峠以上の傑作を現はす時が若し來れば、私は作者の前に低頭して自己の不明と非禮を謝するであらう。

要するに『大菩薩峠』が現代の大衆文學の中で最高位に置かれるべきものだといふことについては、私のみる處も世評と一致する。しかし『八犬傳』と比較すると、まだ〱餘程の距離がある。馬琴は數世紀間に一人在る人で、中里介山はどの時代にも在りうる人だ。

三

大衆文藝と云ふ雜誌が本年一月から生れて、多勢の同人が此の牙城に據つて作品を發表してゐる。此の人達こそまさしく大

藝術家なんだらう。しかし畢竟は、自分から文藝作家の看板を掲げたり旗を立てたりする人々は、時に對してはなはだしく疑を寄せる。これは一つの解釋によれば時代の見方だと云へるし、他の解釋に從へば自らを低うし卑しめることになる。文藝の仕事は主義主張の爭が目的ではない。社會運動家が『民衆』の旗を押し立てるやうな眞似をしたくない。大衆に投じようが投じまいが自家の持前、時の運だ。大衆なんどを念頭において小說を書く奴があればそいつは外道だ。原稿紙に向つて物を云ふ時、其の聲は誰に向つて聞かせようとする？誰でもない自分自身に聞かせる聲だ。公園の廣場に人を集めて怒號したり、議會の壇上でテーブルを叩くのとはわけがちがふ。自分の書いた物を一人でも多くの人に讀んで貰ひたいとねがふのは誰しも當然の人情だが、智識のある讀者を感心させて見度いだの、無智な民衆の興味をそゝらうだのと對照を置いて野心の筆を執るのはあやまつてゐる。名人尾上松助の藝談として傳ふる言葉に「私は芝居をする時只の一度も客に見せようだの聞かせようだのと考へてしたことはない」と云ふ言葉があつた。至妙の域に到達した人の言葉として味はふ價値がある。文士は文章を書けばいゝ。小說家は小說を書いたらいゝ。自分の力一杯思ふ存分のものを書くだけさ。大衆もくそもあるものか。

昨年の暮に旅行をしてゐる時、汽車の窓から文藝の何月號を買つて讀んだ後まで、心にくゝ私の心に殘つた作は本山荻舟の「妖女人面人心」といふ王朝時代に材を取つた怪奇小説だつた。本山氏の作品はやゝ堅い感じはするが、其の缺點を補つて餘りある剛勁の技巧であつた。本山氏が從來報知紙上に發表した「名人奇人」や「日本」に「新小説に連載した「劍客傳」等は皆まで讀んでないがどれもそつのない整ひ切つたものだつた。「名人奇人」は特に好評だつたやうに記憶するが、簡潔な筆致に得もいはれぬ趣味がある。此の人の文章は譬に例へると狩野派の水墨みたいで、省筆が巧で、峻峭斬然たる中におのづとうるほひもあり、上品な気風である。譬をいへば矢張り狩野派の網みたいに形式に囚り過ぎてゐる。融通自在さに於て缺くる嫌がある。立派ではあるが、結局が小さく見え、現代としては立派の中に入れられても仕方があるまい。

報知新聞には本山氏と並んで矢田挿雲がゐる。矢田氏も一大衆文藝」の同人だ。此の人は「江戸から東京へ」の連載に依つて有名になつた。これは何も小説でも物語でもない。從つて大衆文藝と云つていゝかどうかは知らない。兎に角新聞で好評を博し續いて本が出れて矢田氏の文名が一時に高くなつた。近年外國を廻つて來てから頓に箔を付けた。でまづ矢田氏を知るにに「江戸から東京へ」を一讀しなければならない。が此の書然し私は此れを少ししか拾ひ讀みをしてゐない。いつかも本誌で吉野博士が推賞してゐたほど、文學としての價値があるか否か私には判斷が出來ないが、現代の大多數の人には既に非常に懐かしい資料のやうに思はれてゐる舊幕の江戸の状況を殆んど一つも餘さず蒐集して地理的に區劃整理をしたのは確かに大衆向だ。何百何千の役人に高給を拂つてゐるが、月給では足りないで砂利を食つたり地所をかじつたりしてゐる役所局などにしてみれば、矢田氏などには此所から勳一等位を授ける價値は十分ある。但し文學としてはさう大した物とは思はれない。これを若し永井荷風の「日和下駄」と比較したならば月とすつぽん程の違ひは確かにある。それは比較する方が無理で作者の性質も立場も異ふ。「江戸から東京へ」が報知新聞の三面記事の讀者に受讀された理由の一つは、文字に餘り含蓄がないことである。新聞の多數の讀者は何も深遠なることを云つたつて含蓄のある文章を讀ませられる程眠なることはないらしい。新聞で受けた小説でも讀物でも調べて見ると存外甘くてそれで辻褄の合つてゐないものはないのだ。高級とか低級とかいふ問題とは別だ。辻褄があつたならつて必ずしも高級とは限らない。甘い低級な話だつてある。これでも駄目だ。そこへいくと新聞記者で叩き上げて來てゐる矢

田挿雲の文章は晩年の落語家のやうにきたいに淨瑠璃の臭を衒ひ落してしまつてゐる。そして其の代りに、ネバリ氣のないユーモアを無限に點綴して讀者を喜ばせてゐる。同じ著書の中でも第一卷の文體と近頃『大衆文藝』に連載されてゐるあたりとでは大分趣きが異つて來た。近來は折り〳〵詩が混つてゐる。寂びた隨筆風の處がある。根が俳人だからむしろ此の方が本領かも知れない。けれども、報知新聞へ書き始めの頃今のやうにやり出したら到底ものにならなかつたらう。

矢田氏の物では矢張り報知へ連載した『澤村田之助』を最近本で讀んで見た。死んだ瀧田樗陰君は博讀家だつたので常に眼光を炬にしていろんな物を漁り讀んでゐたが、矢田氏の田之助には餘程注意を拂つてゐて「中々いい所がある」と云つてゐた。瀧田君は矢田氏を評して、「矢田さんは矢つ張り江戸から東京へを書いたんで腕が上つたんですね、あゝ云ふ纒つた仕事をすると云ふことは大變力のつくものだ、」さう云つて「あなたなども畫人傳をミツチリ骨を折つて御覽なさい、タメになるから」と私に云つたことがあつた。田之助については「いい所がある、が、もう一といきといふ氣持もする」とも云つた。とにかく瀧田君が矢田氏に大に着目し始めたのは田之助以後のことだつた。

『澤村田之助』には纏まつて完成したものになつたといふではないがまつたくいい所がある。江戸から東京への著者としての敏感を拂ふが、澤村田之助の作者としての矢田挿雲に對しては專業家としての矢田氏は初めて文藝家として獨自の境地を開拓して一家の風を示した觀がある。澤村田之助の事は由來いろいろな書物に書かれてゐるが、これを小說風に書き綴つたものとしては、明治十一年頃に出た岡本起泉の『澤村田之助曙草紙』だけであらう。これは私も先年古本屋で手に入れて持つてゐるが、五六冊續きの繪入りの草双紙である。矢田氏の田之助も全篇の筋をこれから取つてゐる。だから嚴密な意味で創作とは云へないやうな點もあるが、しかし矢田氏の田之助は、曙草紙に出て來る人物に對して一人々々個性を着色し心理描寫を加へた處に價値がある。が矢張り此の小說も詩味が無くて枯れ切つたユーモアを一めんに撒き散らしてゐる。

煎じ詰める處、矢田挿雲の特色は其のユーモアに在るらしい。時には駄洒落が混つて折角の氣分をぶちこはすこともあるが、全體としてアクが拔け切つて脂氣がなく、いかにも苦勞人の伯父さんらしい矢田挿雲が、田之助でも觀止院の和尙でも小静でも千代吉でも岩吉でもお喜和でも、其のほか登場する人物と云ふ人物に對して、みんな一樣に滑稽味を加へて、泣くにも笑ふに

も怒るにも可笑味たつぷりに振る舞はさせて、筆の尖で自由自在におやつツてゐる書き振りがたまらなく面白い。だから、失戀した女が歎き悲しむ場面でも讀者は決して悲しくはなく幽默が出て來てもそんなに恐くはない。何時でも可笑しさが先に立つてゐる。矢田氏はあれで花柳氣質などにも大に精通してゐるらしいから、斯道にかけての薀蓄も或ひは畏る可きものがあるかも知れぬが、花柳小說家並みの氣障ツ氣や藏前粹士式の通を見せず、何處までも家主何兵衞で押し通してゐる所が面白い。

報知新聞の『太閤記』はまだ一回も讀んでゐない。中央公論へ載せたアメリカの觀察は感心したものではなかつた。見物記としてはあれ位は普通だらうがあの程度の觀察なら何も偉大なる新聞記者矢田挿雲の筆をまつほどのことはない。生活が現はれてゐず、感じ方が斷式で固かつた。

四

白井喬二の文章を私が讀んだのは、一昨年の秋頃新小說に載せた『鳳凰を探す』と云ふ短篇だつた。私はそれまで高をくゝつて讀まなかつた白井氏の文章に對して此の一篇でもつてすつかり傾倒してしまつた。それは竹の講釋から始まり、支那の竹林の事を敍し、鳳凰といふ鳥は其の竹林に棲んでゐる。が古來誰も鳳凰を實見した者はなかつた。ところが、支那では大昔此鳳凰を探すことを以て一生の事業とした人が二人あつたと云つて、其の二人の鳳凰探險の記事を書いたものだつた。文體が洗練されてゐて用ふる言葉の豐富なこと驚くべきもので、殊に冒頭の竹の性質から說き出すあたりの筆法の妙は堂に入つてゐた。

さア私は感心してしまつた。今に始まつたことではないが、私は持前で非常に感心する男だ、感心すると同時に無暗に賞め度い性だ。で、一朝私が物に感心したとなると、友達中を驅けずり廻つて、眼の色を變へ、口角泡を飛ばし、相手が納得するまでは賞めてしまはないと、どうも氣色が惡くて御飯が旨しく食べられない。さういふ性(さが)だ。そこで、例に依つて其の時も人の顏さへ見れば、鳳凰を探すを持ち出していや賞めたの賞めないのつて、丁度いゝあんばいに瀧田樗陰君と平福百穗氏と私の三人で玉川へ遊びに行つた。賞めて賞め甲斐のある樗陰君が前に居ることだから、玉川行の電車の中から、私は此處ぞとばかり日頃に百倍して、鳳凰を探すを激賞した。瀧田君もそれまで白井氏の物を一つも讀んでゐなかつた。けれども瀧田氏は少しつむじ曲りだつたから、人が賞めると容易に賛成しない人だつた。何の彼のと云つてケチを付けやうとする。私はそれが口惜しい

のでどうでも[illegible]に君を承服させるために一頁半を降りさいと云ふ返氣で益々賞めてやまなかつた。百穂畫伯が驚いたやうに「そんなにいゝんですか。ぢやあ僕も讀んで見やう」と云つたほどだつた。

無論それは行き掛りで賞め過ぎたに違ひないが、しかし事實『鳳凰を探す』は面白かつた。文品もよし、架空的な不思議な話に現實味をもたせた手腕は確かに敬服に値した。其の頃から白井氏はメキ〳〵賣り出してついに大衆作家中の大立物になつた。けれども私はどういふわけだつたか鳳凰を探す以後同氏の作物を讀む機會がなかつた。そこで白井喬二が話題に上ると、私はいつでも御贔屓のやうに鳳凰を擔ぎ出して、鳳凰一本槍で白井氏を賞めてゐた。すると、今年になつてから、親類の者が『富士に立つ影』を買つて讀んだと云つて、恐ろしく面白い小説だからあれは文壇の批評はどうかと私に尋ねた。「文壇の批評は知らんが無論いゝ物さ」と私は言下に答へた。私は實はそれを讀んでゐなかつたが、何しろ鳳凰が頭にあるので無條件に賞めて置いた。親類の男は運送屋だが文藝の理解はない。「さうでせうね、處であんたもあゝいふ物を書くと本が賣れるがなあ」と幾らか私をさげすむやうな口調で云つた。なが年賣れない本ばかり拵らへてゐる私は「ほんとにさうだ」といふ氣がして其の本を借りて讀んで見た。

われ〳〵がよく、たつた一度チラッと出逢ひ見た女の顏にうたれて、其後は世に其の女ほど美しいものはないやうに思ひ込んでひそかに想ひこがれてゐたところが、二度目に逢つてしみじみ眺めると、全く別人かと思ふほど醜い女であつたりすることがある。つまり目違ひと云ふことがある。私の『鳳凰を探す』の作者がそれだつた。くだ〳〵批評するまでもなく『富士に立つ影』はとても馬鹿々々しくて讀めた代物ではなかつた。全篇單なる出鱈目で其の出鱈目に何等の面白さもない。人物にも事件にも少しも必然性が現はれてゐない。狸の化けたやうな變手古な人間がピョイ〳〵飛び出して出鱈目を云つたりしたりするばかりだ。私は呆れた。眼をこすつて見たけれども同じ事だつた。さうとも知らずに運送屋の親類がやつて來て第二卷を置いて行つた。今度若し「あんたもかういふ物をお書きなさい」なぞ云はふものなら私は彼の頭をぶん撲つて大喧嘩をするところだつたが、いゝあんばいに何も云はなかつた。二卷目は本を手に取つても見なかつた。

それにしても、これ程思ひ切つて詰らぬ物を一年も二年も連載してゐる新聞社の了見が知れない。一方では矢田挿雲の澤村田之助を愛讀しうる頭腦のある讀者が、富士に立つ影を辛抱し

て讀んでゐる根氣と無見識も能くに堪へたるものだ。尤も一ケ月八十錢の報知新聞は、これ一つ讀まないからつて高くはないから講讀を中止するやうなこともあるまいが。藝術の匂ひなどは藥にしたくともないのはいゝとしても、さりとて講談の人情味も洒落つ氣もない。私も多年讀んだり書いたりして來てゐるが、評判の物でこれ程馬鹿氣た物を讀んだことがない。矢川挿畫だの本山荻舟の如き日本有數の讀物作家を記者に持つてゐる報知新聞が何の必要あつてこんないかものを擔ぎ込んで來たのか譯が分らない。

同じ作者の『寶永山が出來た話』と云ふ短篇集を最近讀んで見た。長篇では愛想を盡かしたが短篇は飄逸で味を占めてるからよもやで讀んだが、果して相應に面白かつた。飄逸ほどの物は無論ないが、とにかく一流の妙味だけはある。だが、それも最初の二三篇を讀む間だけで、四つ五つと重なるともう慣用手段が鼻につく。種が分つてしまへばまことに詰らない。此の人の取柄は、着想の奇拔なのと文辭の豐富なる點に留まる。それから先は何にもない。例へて見ると猿がらつきやうの皮を剝いてゐるやうなものだ。剝いて行く道中が樂みで、剝いてしまへばポカンとする。

だが公平にみて、白井喬二の作物には何等かの特色はある。一種の藝だと云ふ氣持はする。處で、其の特色なり藝なりを例へやうなら、さしづめ縁日の見世物と云ふ處だ。あの見世物の木戸番の吹聽、それから松井源水こま廻しの口上、輕業女太夫の藝當、それらの熟練と面白さの中に一脈の哀感がアセチリン瓦斯の匂ひと共に漂ふてゐる。それが白井喬二の世界である。

五

此の外に大衆文藝の同人中で眼につくのは長谷川伸と平山蘆江の二人だ。どつちも古くからの都新聞の記者だ。平山氏の長篇物は以前新小説で讀んで面白かつたが、大衆文藝へ連載してゐる『唐人船』を新年號だけ讀んで敬服した。少年と少女の世界を描いて、ともかくも大人の心を惹くだけの背景を見せ、全體に春の朧夜のやうな幽艶な氣分を漂はせてゐるのは、平山氏の手法でもあらうが持味でもあらう。長谷川氏の物では、小便の藝當をする男の事を書いたのと、俳人と泥坊との事を書いた人情噺風の物（どちらも新小説に載つてゐた）が私の讀んだ中では面白かつた。最近『どろんの道』と云ふ短篇集を讀んだが思ひの外詰まらなかつた。旅役者の事を書いた物は長谷川氏の得意の方面だと聞いてゐたが、それにしてはあつけない氣のす

これらはみんな[illegible]だらうか。長谷川氏の初期の作品などにも[illegible]になかつ[illegible]ないだらう。さういふ話題の演藝が十五年位前迄の文壇雜誌の雜録によくあつたものだ。旅役者の話、吉原の話、木賃宿の話、誰でもそれを愛讀したものだつた。けれどもそれがいま長谷川氏の讀物文藝となつて現はれても私達の感興を惹く力がない。長谷川氏は才筆だが、筆だけの才人のやうに感じる。獨特の世界といふがなく書いた物が單なる話にとどまつてゐる。

大衆作家として近頃賣り出してゐると云ふ國枝史郎も矢張り此の雜誌の同人だが、これはヘヤ何とも弱つた代物だ。上手下手はさて置き稚氣滿腹で鼻持がならない。白井喬二は見世物の中にも、香具師らしい謙遜と浮世の波風に叩き上げられて來た苦勞の味があるから厭味に落ちないが、國枝史郎の書く文章は大阪の落語家がカツポレを踊るやうで氣障で見てゐられない。大衆文藝の創刊號へ載せた「石川五右衛門」はまだよかつたが、其の後改造へ載つた『笑へぬ光秀』や、大衆文藝六月號の「穏亡堀」に至つてはこれがほんとの場違ひと云ふものだ。此の人はどうやら藝術がかつた讀物を書かうとして一生懸命になつてゐるらしい處だけを無理に買へば買ふのだが、全然素質がないんだから、逆立ちをして踊つたつて無理だ。まあ早く諦めて講談でも書いてるがいゝ、品の惡さに於て直木三十三と好一[illegible]ますだ。[illegible]自身これ[illegible]てゐるらしいが。[illegible]ないが、[illegible]ガチヤ／＼掻き鳴し、[illegible]でつぶれた聲を張り上げて、[illegible]な唄を歌つて歩くあの道路の藝人の[illegible]れた度胸と下品さ。直木氏の持てる特色である。

正木不如丘の物は少しゝか讀んでゐない。が此の人の特色は前二家と反對に品のよさにある。何處迄も醫學博士正木先生で八字髭をひねつてゐる處が身上だが、其の代りたゞそれだけで面白味も匂ひもない。至極家庭向きに出來てゐる。新婚の會社員の夫婦か何かゞ新しい長火鉢の側に向き合つて暇潰に讀んだり聞かせたりしやうと云ふには恰好の讀物だ。さういふ幸福な家庭では餘り面白い物や深刻な物は要求しない。さういふ文學の作物は時とすると其の人達の甘い夢を傷つけるおこれがある。が、我が正木氏の文藝は、上品で且つ考へるべき何物をも持たないから、さういふ家庭の作偶としての役目を最も深切に適當に果して與れるものである。

私は探偵小說を餘り讀んでゐない。否、一般の人に比べると殆んど讀んでゐないと云ふ位のものだらう。が、所謂探偵小說の缺點が、其の中に生活のないこと、人生のないことだと云ふ批難は往々耳にする。是れは一應尤もだが、しかし探偵小說家

の立場になると、人生を描く小說は他に幾らもあるのだから、いきほひ人生拔きの探偵のトリック一方で興味を惹くよりほかに武器はないと云ふことになるだらう。私はそれでもいゝと思ふ。けれども、それならそれで、トリックが鮮かであることと、觀察が銳敏であることを必要とする。事件の仕組が淺かつたり、觀察が遲鈍だつたりした日にはいかに人生があつても倦怠を感じてしまふ。

江戶川亂步の『屋根裏の散步者』と云ふ作は面白かつた。主人公が下宿屋の屋根裏に上つて大蛇のやうな梁木をつたふて這つて步いてゐると、自分も大蛇になつたやうな氣持になるあたりの病的な感覺描寫は光つてゐた。此の作は刺戟もありトリックもあつて探偵小說として確に成功してゐる。只難を云へば全體の文章に力がない。それで餘程損をしてゐる。

同じ文集の中から『白晝夢』『踊る一寸法師』『毒草』の三篇を拾ひ讀みした。白晝夢はお終ひの處がよかつた。踊る一寸法師は道具立の仰山なわりに手品の種が淺くて最後の一寸法師が生首を提げて踊る處もちつとも迫つてゐない。毒草は小篇だつたが反つて無理がなくて面白くもあるし、文章の運びが他の作に比べると餘程落ち付いて來て練熟してゐた。尤もどれを先に書いたのだか私は知らないが、此の人はエドガワランポと名乘るだけあつてどの作を見ても普通の探偵小說以上にグロテスクな世界へはいつて行かうとする努力を示してゐるしまた其の方面に於ける素質も相當認められるが、しかし本物のポーまで達するには矢張り橫濱からニューヨーク迄の距離があるし、ポーの追從者としても谷崎潤一郎や佐藤春夫に及ぶべくもない。江戶川氏には肝心の詩が皆無だ。谷崎氏が以前書いた小說の中には探偵小說としても日本では第一位に置かるべき作が澤山ある。

六月の大衆文藝で甲賀三郎と云ふ人の『古名刹奇談』と云ふ探偵小說を讀んだが全體に古臭くて筋の運びにも破綻が隨所に見えて物になつてゐなかつた。江戶川氏にしても甲賀氏にしても探偵小說家たるべく社交人としての教養が、不足してゐることが大なる弱點だ。探偵小說家に必要な敏感な常識と廣い觀察がないから局面が小さく限定されてしまつて到底外國作家の物を讀むやうな興味が惹かれない。現今の日本の探偵小說作家の中では私の知る處ではたゞ一人松本泰の書く物に如上の期待を掛けることが出來る。松本氏は三田派の作家として水上瀧太郎氏と並んで夙くから名があつたが外遊後探偵小說に局面を轉じて近來は探偵文藝と云ふ雜誌を自分で發行してゐる。此の人の書く物には病的な神經や奔放な空想はないが、作家としての手法

お[illegible]で、[illegible]の人[illegible]『[illegible]』と云ふ
長篇探偵小説を讀んだことがあるが、當年のロンドンの生活を
描寫してゐる部分が特に優れてゐたと思ふ。近頃の物は一つも
讀んでゐないが、此の人などが眞劍になつて世界三界を舞台に
したやうな大探偵小説を書けばいい物が出來るかも知れない。
かう拾つて見ると、大衆文藝の同人中で目ぼしいのは漸う三四人しか居ない。もつとも三四人目ぼしいのが居れば澤山だとも云へる。先達て大衆文藝の新聞の廣告文を見ると、『本誌は同人が各自一番自信のある傑作ばかりを發表する。表紙が美しく、紙質は上等で印刷も高級だ。分量が豐富で而も定價が莫迦々々しく廉だ』と云つたやうな良いことばかり並べたまでは無事だつたが、其のあとへ持つてつて『若し以上の言葉に只の一つでも嘘があれば同人一同切腹をしてお詫びをする』と書いてあるのを讀んで私は腹を抱へて笑つたが、さてかうして雜誌を手に取つて調べて見ると、他の點はともかく、內容の段になると今月などは殆んど讀める物はない。一つ大衆文藝同人廿幾人だかを呼び出して望み通り切腹を申し渡したら面白からう。

六

大衆作家と名乘つてはゐないが、面白い讀物を書く人に澤田

[illegible]があることを[illegible]
に裁判所等の舊状を書いて[illegible]になつたが、其の[illegible]
扱つた情話を書くやうになると特色がなくて面白くなかつた。
古い人ではあるし私も今度危ふく見通すところだつたが、偶然に『春宵島原巷談』と云ふ最近の作品を集めた本を手に入れて讀んで見て其の非凡な手腕に一驚を喫した。卷頭の春宵島原巷談は就中佳かつた。濟七と云ふ年の若い美男である呉服屋の手代が店の使で島原の太夫の處へ行つて、太夫を慕ふ氣持になるあたりの、島原の置屋の情景を描寫する處なぞの文章は、長田幹彥のやうに派手なものではないが、銀いぶしをかけたやうな落ち付きがあつて完成し切つてゐる。此の人の文章は一口に云ふと老熟だ。少しも誇張しないで何處迄も地味に〳〵と心掛けながら、輕いユーモアを混へて幽艶な世界を寫し出して行く處を讀んでゐると、廓で育つた老妓が、昔遊びの客に望まれて調子を低くして唄ひ出した寂びた古曲でも聽いてゐるやうな氣持がする。まことに得難い文品だ。此の本の中では島原巷談と『明月蟋蟀橋』の二篇がとりわけよかつた。全體の趣向から云つて島原巷談には最後の場面に大きな山があつて讀者を『あッ』と云はせる。塗籠の壁が倒れて、壁の中から二つの死人が露はれる處へ來ると竦然たるものがある。

同じ人が新小說へ連載した『人獸爭鬪』と云ふ長篇を飛び飛びに讀んで矢張り其の表現に感心した記憶があるから今度通讀して見度いと思つたが時間がなくて讀めなかつた。澤田氏の作物の難を云へば、穩やか過ぎて迫力の乏しいことだ。これに迫力が添うて來れば更に立派なものになりうる。

以上で所謂大衆作家の名だたる人だけは物色して妄評を加へたつもりだ。そこで、まだ沒に取り殘されてゐるのを舉げると、田中貢太郎、大泉黑石などのやうな種類の作家だ。手もなく私も其の一人だ。絕えず本誌の說苑欄に據つて作品を發表して來てゐる其の仲間にはアメリカに居る佐々木指月なども數へられる。けれども此の人々は果して大衆作家と云へるかどうかは甚だ疑問だ。興味中心の物を書いてもそれに適合する讀者の階級や範圍が前記の人々とは異つてゐるらしい。だから相手にする讀者の數だけできめることにすると大衆作家の仲間にははいれさうもない。早いはなしが私は『騷人』を發行して清水の次郎長だの上海だので稍々骨を折つてゐるが、どんなに次郎長で一生懸命になつてはり扇を叩いて見ても、はり扇の叩き方が違ふかして一向大入りが取れない。で近頃は觀念して定連だけを相手にしてやつてゐる。それでも、自分のやるべき場所で自分の藝を賣つてる方が氣持がいゝ。客の頭數ばかり多くたつて活動寫眞の餘興に雇はれてやるのでは仕方がない——とから佗け惜みを云つてゐる。

大泉黑石が最近本誌へ連載した『人間廢業』は傑作だつた。終篇の『天狗にならうか』に至つては息もつけぬ面白さだつた。しかし大泉氏の物は、好く人は非常に好き、反對に嫌ふ人は極端に嫌ふ傾向がある。處が、嫌ふ人に聞いて見ると大概讀んでゐない。大泉氏に限つて何故さう敵と味方(?)を持つてゐるかと云ふと、それは此の人の個性が餘りに强過ぎるからだ。今の日本の文壇で大泉黑石ほどの强い個性を不遠慮に縱橫無盡に振り撒いてゐる人は先づ無からうと云つてよい。げに恐るべき天才だ。けれども此の種の天才が往々にして陷り易い無反省な態度を以前の大泉氏はまゝ示したことがあつた。それが一時は少なからず彼の聲價を傷つけた。しかし最近の大泉氏は漸く圓熟の域に入つたと見えて調子がぐツと高くなつて、文章もはるかに引きしまつて來た。聞く處に依ると、以前は一夜に五十枚の原稿を十日間もぶつ通しに書いてしかもまだ綽々たる餘裕を見せてゐたと云ふ勇猛無類の大泉氏だが、近頃では蓬頭垢面晝夜原稿紙に向つて呻吟して漸う四五枚しか書けなくなつたさうだ。私は其の消息を聞いて大泉君もいよいよ本物になつたわいと思つて大に君の爲めに欣んだ。天狗にならうかのあの

〔?〕の極意を示してゐる。探偵文學の作者が、青年期に於ける苦心修業したる努力に對して何人と雖も深く敬意を表して讃意を拂はずには居られないだらう。此の人の將來は廣大無邊の曠野である。

田中貢太郎は村松梢風の兄貴分かなんぞのやうに見られてゐる人だから、私の筆で賞め上げたりこきおろしたりすることは一寸遠慮しなければならない立場だが、しかしこれだけ多數の人の月旦を試みて來た後で、物語作家の大先輩たるわが田中貢太郎に筆をそめないのは非禮でもあるし卑怯にもなるから簡單に私の見る所を記して置く。

田中氏が中央公論に物を書き出したのは私より二年位古い。私は彼の作物を讀んで、自分も一つ眞似をして見やうと思つて書き習つたのが始まりだつた。しかし當時は私は彼と面識もなかつた。田中の書く物が堂々と一家の風を示して來て他人の追從を許さなくなつたのは、主に江戸時代の隨筆の中から材を取つて怪談風の物を書くやうになつた頃からだつた。彼は根が俳人畑の出だから寫生文の妙を得てゐた。在來の怪談などに全く見られなかつた其の淸新な筆觸を以て怪奇な事柄を平明に寫生する處に、珍らしい文學が生れて來たのだつた。普通の小說を書いても少しも危なつ氣のない手法を見せた。晩餐の故事を書いた『〔?〕』と云ふ小說も本當に擬つた構想が面白かつた美しい優れた作だつた。彼の文章の特色は、神秘的な所にある。文章の中を血液が流れてピタ〳〵と動いてゐる。眞に生き物の感じがあるのが田中貢太郎の文章だ。ひと頃は怪談專門家のやうになつてお化ばかり書いてゐた。支那の怪談の燒き直しも書いたが、彼の筆に掛ると、さういふ物にも妙に神經が通つて來る。一種の創作になつて來る。しかし田中氏の怪談小說の中でも一番傑作は『黑影集』一卷だらう。これは純粹の創作怪談ばかり集めたものだが、黃燈だの黑い蛙などの作は奇妙不思議の域に入つてゐる。黑影集は大正年代の代表的怪談小說として後世に殘るだらう。

田中貢太郎についてはまだ〳〵書くべきことは多いが、あるひは讀者のはふが私よりもよく知つてゐるかもしれないから此の邊で中止する。

以上なが〳〵と凡庸な觀察眼をもつて諸大家の作物を褒貶したが、褒めるもくさすも觀かたの一つである。毀譽褒貶の區々たる處が面白いので、眞價は棺に蓋してはじめて定まる。不幸にして私の惡罵を買つた人々も寛大な心を以て此の文を讀了されんことを希つて置く。――六月十日記――

マツダランプ

不斷の研究は又二つの改良を齎しました

一、總てのマツダランプ（眞空電球）の尖端を除きました。

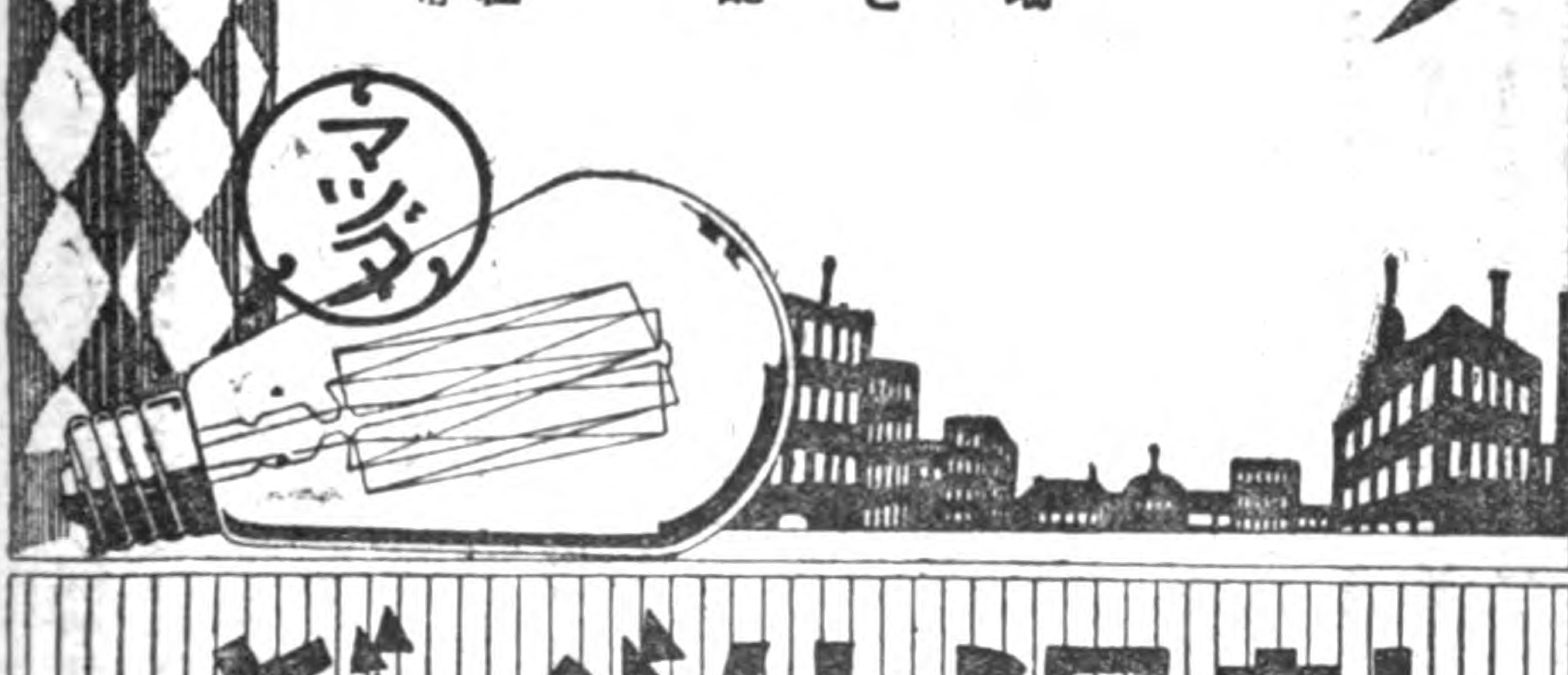
二、硝子球の寸法形狀は萬國標準寸法と致しました。

かくて体裁は愈々優美に、尖端で御怪我の心配無く、取扱も便利になりました、

皆様の御愛用を！

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎市



ギバ体温計

我國に於ける民衆文學の過去及將來

本間久雄

一

歴史は武士たちを記憶してゐる。彼等は破壊者であつたから。藝術は民衆を記憶してゐる。彼等は創造者であつたから。…………ウイリアム・モリス

民衆の力が認められ、民衆本位に、一切の事象が考察されるやうになつた近代の社會に於ては、民衆と藝術との交渉、關係といふことが、云ふまでもなく、吾々に取つての最も興味ある研究對象の一つである。私は、こゝに、いさゝかわが國近代の民衆對藝術の交渉關係の一端を述べて、并せて、現在及當來のそれに考へ及んで見ようと思ふ。

民衆と藝術との關係は、二重の意味で不可離である。一つは民衆そのものが、その時代の藝術の中に、善くも惡くも反映するといふ意味に於てである。今一つは、その藝術によつて、民衆は更に新しきものにされるといふ意味に於てゞある。前者の意味については、改めて說明を要しないであらう。「藝術哲學」の著者テーヌが夙に云つてゐるように、いかなる藝術も、その時代の生活及び思想に準據することなしには生れない。時代の思想、感情、好尚、風潮、習俗――時代そのものが、藝術の中に具現される。近來、あらゆる學問の分野に於て藝術を、その時代の最も正しき鏡として、又その時代の唯一の研究資料として取扱ふやうになつたのは當然なことである。

しかし、藝術は、民衆の單なる鏡だけではない。單に民衆そのものゝ僞らない反映だけではない。單に鏡であり、反映であるといふこと以上に、民衆に取つての激勵である建設的力である。民衆の藝術として、少くも、その名に値するものである限り。それは一面に於て、たしかに民衆の力となり喜びとなり、民衆に更に生きることの意志を與へるものである。この點に、近代の民衆藝術の論者は力點を置いてゐる。モリスがさうであ

る。ロマン・ロオランがさうである。カアペンタアもエレン・ケイも何れもさうである。

しかし、藝術が又、どういふ意味で、民衆に力を與へどういふ意味で、それに喜びを與へ、どういふ意味で、それに生活意志を與へるかは、その時代々々によつて異つてゐる。といふのは、それは時代々々に民衆そのものが異なつてゐるからである。であるから、民衆藝術そのものゝ意義は、何時の時代にも同じではあるが、その藝術としての現れかた、または藝術としてのすがたは時代と共に異つてゐる。

民衆藝術としてのこの異つたすがたは、わが國の近代において、二つの著しい典型となつてあらはれてゐる。そしてこの二つの異つた典型を比較し研究することによつて、民衆と藝術の關係究竟のいかに密接であり、いかに不可離であるかといふことが、いよいよ明かになるであらう。この意味で、私は、先づ民衆藝術としてのこの二つの典型を考察することゝする。

二

わが國近世の民衆藝術――こゝでは研究の對象を便宜上文學に限ることゝする――の二つの典型とは、何であるかといふに、一つに、元祿期を中心とした文學であり、他の一つは、文化文政期を中心とした文學である。言葉を換へていふと、一つは元祿時代の民衆を代辨して、その思想感情を吐露し、彼等の生活のさまざまのすがたを反映した文學であり、他の一つは、文化文政時代所謂化政度期の民衆のそれを代辨し、その生活の諸相を反映した文學である。そして、ここに興味のあることは、この二つの時代の文學がさまざまの點で、互ひに相反した諸特質を持つてゐることである。そして、この相反した二つの文學は吾々の、現在並びに當來の民衆對藝術の問題を考へる上に、甚だ意味深い暗示を提供してゐることである。

さて、民衆藝術としての元祿文學の特質はどこにあるか。

その第一の特質は、生活享樂の情趣の横溢してゐることである。このことは、例へば西鶴の浮世草子や近松の淨瑠璃やその他所謂元祿歌舞伎といはれる台本の中などによく窺はれる。西鶴の「一代男」の主人公世之介が、十四の年から戀の修業に浮身をやつし、日本の津々浦々まで、經めぐつてあらゆる階級の女を漁り、六十餘歳までに關係した女の數が三千七百四十二人、小人の數が七百二十五人といふ多數に上つてゐるが、それでも尙足りないで、同じ遊び仲間五七人と好色丸といふ船をつくり、女護の島へ渡つて更に「摑み取りの女を見せん」と、「戀風に身を任せ、伊豆の國より日和見すまし」て、つひに船

[illegible]も、この[illegible]よ[illegible]、現に
したものて、この時代、實にて國文學第一の時代である。
この生活な樂の樂趣は、自ら戀愛の世界に於て、最も高潮に達してゐる。彼等は、戀愛の下に、充實した自我を見出さうとした。全身全力を擧げて、その中に自我を實現しようとした。一切の束縛を脱して、自由に、大膽に、戀愛の中に浸り潰らうとした。そして、かくすることによつて、解放の喜びを味はふとした。近松の世話物の中の戀愛もまさにこれであつた。であるから、近松の心中物なども、決して、悲劇ではない。環境の何等かの支障によつて、戀愛が十全な發達を遂げ得ないところに原因するわけであるから所謂心中は、悲劇でなければならない。それにもかかはらず、近松心中物の味ひは決して悲劇ではない。これらの作の男女の主人公は、何れも喜んで死んでゆく。死を見る歸するが如しと云ふ態度で死んでゆく。少しも死といふものを苦痛とは感じない。といふのは、彼等は、死によつて、更に自分たちの戀愛を擴充させようとしたからである。生きてその戀愛の阻止されるのを悲しむよりも、先づ、死によつて、その擴大されることを喜んだからである。

戀愛の中に、解放の喜びを味はふとすることは、又、たとへば、その當時の「くるわ」といふ特殊な世界などにも、鮮かに

[illegible]
愛の對象である遊女は、女子のやうに[illegible]
も、家老でも皆この遊里に足を入れるのは、[illegible]の如き
でさへも、わざ／＼遊女を訪ねて、戀の道を聞き、男から愛されされる方法を研究してゐる。例へば上方の、元祿歌舞伎の集大成の作と云はれる『けいせい曉の鐘』の中の、やがて結婚しようとしてゐる姫君が「そのお方も、常に傾城町に女郎好かせ給ふと聞く。常の風俗では、お氣に入るまいによつて、どうせ、女郎風を見覺え、お氣に入らうため」に、名高い遊女を招いて「傾城衆も、常の女も、男を可愛がるに違ひはあるまいに、なぜ殿たちは女郎をお好きなさるゝぞ。男に飽かれぬ仕樣があらば教へて下され」と云つてゐる如きその一例である。單に、男ばかりでなく女まで遊女を尊敬したといふことは、西洋の中世紀の所謂婦人神化時代（ディフィケーション・オブ・ウーマン）などと同じく不思議な現象と云はなければならない。だから、武士でも町人でも、金の入用のことがあれば、女房や娘を、すぐに遊女や禿に賣ることを何とも思はず、又、賣られてゆくことを何とも思はず、むしろ喜んでさへ行くといふ傾きがあつた。『苦海』とふ言葉は、とにかく、元祿期に於ては、たゞ言葉だけで、氣分、情趣の上では決して苦海ではなかつた。そしてかやうに「くるわ」を享樂の中心たらしめ

たのも蓋し當時の解放された生の悦びが、當然に導いた結果に外ならない。

第二に、元祿文學の特質として擧げたいのは、負けじ魂即ち下剋上的精神の横溢である。言葉を換へていふと、階級意識の强烈さである。民衆的階級意識が、恐らくこの時ほど潑剌としてゐたことは、わが國の歴史には、嘗つてないであらう。さて元祿期にどうして民衆が、それほど潑剌としてゐたか。これは、文化史的研究と相待つべきことであるが、私は、嘗つて、拙論『解放の詩人・近松門左エ門』の中に、元祿期に於ける民衆勃興の經路を次のやうに約説したことがある。

「民衆の勃興といふことは、直ちに、貴族乃至上流階級の頽廢乃至沒落を意味する。家康や秀忠が天下を治めた慶長元和の頃こそ、當時の貴族乃至武士階級が勢力を逞うしてゐたのであつたが、寛永、正德から明暦萬治を經て、世が次第に泰平に馴れて來るに從つて、必要であつた武士階級が次第にその存在理由を失ひ、當時の平民階級である町民階級がこれに取つて代るようになつた。そして五代將軍綱吉の治世、貞享、元祿の頃となるに及んでは、事實に於て町人階級が全く武士階級を壓倒した。

町人階級が武士階級を壓倒した唯一の武器は富であつた。「町人は太平うち續くに從つて富裕なるもの多く、殊に元祿中に至りては請負用達にて俄分限となる者多く、當江戸に昨今の富商一町毎に二三人づゝはありきといふ」と『日本風俗史』の著者は云つてゐるが、これは江戸ばかりのことではない。大坂に於ては尙更のことであつたらしい。江戸の紀文、奈良茂、大坂の茨木屋幸齋等は當時の俄分限、今日の所謂成金の尤なるものであつた。

かういふ町人階級の分限者があちらでもこちらでも豪遊を極めて驕奢を競うた。つまり彼等は、これまで認められなかつた自己階級の存在を金錢の力、富の力に依つて認めさせようとしたのである。そして武士階級は、町人階級のこの豪遊驕奢を羨望するの餘り、いつとはなしに町人階級を模倣するやうになり、ひたすらに奢侈淫逸に流れた。乍然武士階級は、富の力、金錢の力に於て到底町人階級のそれに及ばなかつた。從つて彼等は驕奢に流れゝば流れる程、逸樂に赴けば赴く程、彼等は從來蔑視してゐた町人階級からその驕奢逸樂の資を迎ぎ求めなければならなかつた。その結果武士階級と町人階級との從來の關係は轉倒した。『春台獨語』の所謂「世の治まれると久しきによりて人皆佚樂して、近頃は有祿の士より上つ方國郡の主まで殊の外貧困して、凡て商賈を賴みて内外の事を營む故に、位ある人も商賈を恐れ敬ふと甚だしければ、商賈もこれに乘じて士太夫をも輕しめ侮る」といふ現象が生じて來た。言葉を換へて云へば武

士階級即ち上流階級と平民階級との間の戰々たる一種の階級鬪争に於て、後者がつひに前者を征服したのである。

わが元祿時代は、かくの如く、武士階級と平民階級（當時の民衆）との階級戰争に於て、最も鮮かに、後者の勝利を示した時であつた。元祿文學の第一の特色として上に舉げる生活享樂の情趣の如きも、結局當時の民衆が解放された悦びの自ら溢れたものに外ならない。

三

上に舉げる生活享樂の情趣と、下剋上的精神の横溢とは、更に自ら次の二つの特色を導き出して來る。一つは、金錢又は富の讃美と、同時に金錢や富を持つてゐる町人、即ち民衆そのものゝ讃美であり、今一つは、町人自らの生活意志の強烈といふことである。

西鶴でも近松でも、町人を讃美してゐる。そして、町人を讃美するとは反對に、武士階級をおとしめてゐる。尤も近松は、表面的には武士階級を、更により高い階級として尊敬してはゐる。しかし、心の中では、或ひは無意識ではあらうが、武士階級を決して羨んではゐない。『長町女腹切』の中で、零落してゐる半七が家重代の刀を今は町人の妻になつてゐる伯母に見せらたい、ことたらこて。家來の重代ぞや。親の長兵衛が手を離れ、めぐり來るも不思議なり。二度武士に立かへる瑞相ならん嬉しや」と推し戴いて悦ぶのを、伯母が引とつてからりと投げ「なう情なのさふらひや。武士になれとて見せはせぬ」と云ひながら、その刀の因果話を長々としたのちに「武士業しと思やんな。一言の咎より、親祖父の命を絶ち、子孫までおちぶれしは、前世の業とは思へども、愚痴な心に淺ましい」と云つてゐるなども、見様によつては、作者の近松が、窮屈で、義理や名え明に囚はれてゐる武士階級よりは、寧ろ、自由な、氣まゝな町人階級を讃美してゐると考へられないことはない、少くも武士階級を羨むに足るものとしてゐないだけは確かである。

西鶴では、武士階級以て羨むに足らずとする情趣が、一層濃厚である。例へば『武道傳來記』や『武家義理物語』などを見ても、その中には、個々武士階級を讃美したやうな個所もないではないが、全體としては、武士階級の惨めさ、哀れさ、果敢なさといふやうな哀愁感がそこに漂つてゐるのを見落すことが出來ない。『武士の身ほど定めがたきはなし』とか「人間定命の外義理の死をすること、これ弓馬のならひ」とか「侍は住居定めがたし。奉公ざかりの花の時、俄かに落花のごとく、浪人ほど悲しきはなし」とか「武家の義理ほど是非なきものはなし」な

どいふ作者の挿入した文句によつても作者の西鶴が、いかなる態度で武士階級に對してゐたかゞわかる。

西鶴は、實際、武家の誇りを描くことの代りに、武家の悲しみを描いてゐる。

佐渡の國に三千石を食む侍の某甲が、ある日、殿の急お召で、早馬に乗つて御殿に驅けつける途中、三百石を食む乙某に出逢つた。甲は「某殿、おゆるされませい。鐙を外しました」と云ひ捨てゝ通つた。この斷りを聞きつけなかつた乙は「とかく堪忍なりがたし」と甲に決鬪狀をつけた。甲は潔くそれに應じた。しかし「もと〲意趣なき遺恨なれば、自今以後兩人ともに遺恨さしはさむことなかれ」といふ殿樣の扱ひで、その場は濟んだが、二人の意氣地は、それでは濟まなかつたと見え、甲は妻子を連れて國を逐電し、江戸の淺草に來て、門柱に甲某と「花太に張札して」乙の尋ねて來るのを待つた。やがて乙も妻子を連れてそこに尋ねて來て、互ひに快く酒を酌み交し、甲の娘と乙の息子とを娶はせる契約までして二人は差ちがへて死んだ。

これが『武道傳來記』卷五卷の『不斷心懸の早馬』と題する物語である。そして、二人の死際の悲しみを

「互ひに涙に沈み、されば武士の義理ほど是非なきものはなし。兩人が最後は何の遺恨もなく、世間の思はくばかり耻て、身命捨る修路の友、けふをかぎりなれば、うき世の名殘酒心よく酌みかはし、二人が妻もうちまじり、古里には、あひ見ぬ㒵を、思ひもよらぬ娶に近づき、昔を語り、今を歎き、一人の男、一人のむすめ、この行すえの思ひやられて、今果て給ふ人々の身の上より、なほ悲しきは、女心に道理なり。」

と云ふやうな哀調に充ちた文句で書いてあるところから推しても、作者がこの一篇にどういふ感情、情趣を裏づけてゐるかを容易に推測し得るのである。

序でに今一つ『武家義理物語』第一卷の『死なば同じ波枕』を擧げて見よう。

播州伊丹の侍の甲某は、東國巡遊の若殿のお供役を仰せつかり、十九になる自分の一人息子と共に出立した。その時同僚の乙某は、十六になるその子をして、若殿のお供をさせるために、途中一切の監督を甲に頼んだ。やがて、若殿の一行が大井川に差しかゝると折柄の雨で水勢増し、同勢には溺れて死ぬものも多かつたが、乙某の子息もついに今一息と云ふ際で溺れ死んだ。甲は、自分の息子をちかづけ、乙の息子は、乙から預つたものだから、「こゝにて最後を見捨て、汝世に殘しては、武士の一分立ちがたし。時を移さず相果てよ」といさめたので、息子は武士の道理をわきまへ「引かへして立波に飛び入り、一

[illegible]
人間の[illegible]はさきはなし。[illegible]を出し時、人もあきに我を[illegible]むとの一言そのまゝには捨ておかたく、無事に大川を越えたる一子をわざと最後を見しこと、さりとは恨めしの世や」と、身を悶えつひに歸城の上、暇をねがひ、夫婦とも剃髮して、さる山深くわけ入り佛道に入つた。このこと、いつとなしに乙の耳に這入ると、乙夫婦もその志に感じて、これも俄かに退身して、「妻子も同じ墨衣」と姿をかへ、甲夫婦の跡を慕つて同じ山に分け上つた。そして「憂世の夢を、松風に覺し、泪を子どもの手向水となし、ふしぎの緣にひかれて、菩提に入りし山の端の月、心の曇らぬ語らひ、たゞたぐひなき後世の友」となつて、行ひすまして年月を送つてゐたが、「その人ものこらず、今又世にある人ものこらず」といふのが、この一篇である。西鶴がいかなる眼を以て武士階級を見てゐたかは、この簡單な筋書でも想像し得るであらう。

すなはち、これらの作品によつても窺ひ得るやうに、西鶴は、決して武士階級を羨望すべきものとしては描かなかつた。むしろこれを憐れむべき階級として描いてゐる。新興階級である平民階級と比べると、やがて崩壞し、衰滅すべき氣の毒な階級として、挽歌を奏してゐるのである。そして、それとは反對

[illegible]

■

西鶴の町人觀ともいふべきものは、その『日本永代藏』や『世間胸算用』などに最も端的に窺はれる。これらは「人の家にありたきものは、梅、松、櫻、それよりも金銀米錢ぞかし。庭山にまさりて庭藏のながめ、四季折々の買置。これぞ喜見城の樂しみ」(『日本永代藏』)と云つたり、「士農工商の外、出家神職に限らず、始末大明神の御託宣に任せ、金銀を溜むべし」(『同上』)と云つたり、「公家は敷島の道、武士は弓馬、町人は算用細かに、針口の違はぬやうに手まめに當座帳つくべし」(『同上』)と云つたりして、一面、金錢を謳歌すると共に、他面町人としての處世の途を說いたものである。

何故に町人が金錢を謳歌するかといふに、それは外でもない。前に一言したやうに、金錢の力によつて町人が武士階級を凌駕し得るからである。富の力によつて生活を享樂し得るからである。町人としての富めるものを殆んど無條件に渇仰してゐるのはこのためである。

町人は金銀の力、富の力によつて、武士の出來ない奢侈な享樂をも贏ち得る。武士が、いかほど階級的に町人の上位にあつ

ても、天下の町人の眞似は出來まい。俺達には、お前たちの持たない富の力がある。かういふ負けじ魂から、當時の町人である平民階級は、これ見よがしに我儘一ぱいの振舞ひをした。『世間胸算用』第三卷『都の顏見世芝居』の中で「今日の三番叟所繁昌と舞納め、天下の町人なれば、京の人心何ぞと云へば太氣なる事、これまことなり」と云ふ書出しで、その顏見世芝居が「木戸口は夜のうちに、見る人山の如し」といふほどの繁昌であることを述べて後に、一人の江戸の男の豪奢な遊び振りを西鶴は次のやうに書いてゐる。

「我一人見るために、銀十枚の棧敷を二間取りて、猩々皮の敷物、道具置の棚を釣らせ、屏風、枕箱、その後に料理の間、さまざまの魚鳥、髭籠に折節の水菓子、次の棧敷に、風爐釜を仕かけ、都島の杉手桶に、宇治橋芹羽川と書附して並べ、醫者、呉服屋、儒者、唐物屋、連歌師など入交り、そのうしろの方には島原の揚屋、四條の子供宿、都に知られたる太鼓、按摩取、兵法仕の浪人まで揃えたり。棧敷の下は供駕籠、假湯殿、假雪隱、何にても不自由なること一つもなきやうに揃へ、榮華なる見物、此心は何となく豐かなり。」

いかにも榮華な遊び振りである。かういふ榮華な遊び振りは町人なればこそ出來るのである。そして作者はこれを賞めたゝへて「此人大名の子にもあらず、只、金銀にてかく成るなれば、何につけても銀儲して心まかせの慰みすべし」と云つてゐる。すなはち、作者は、この大盡遊びをする江戸の男を賞めることによつて、同時にさういふ大盡遊びをなし得る町人ヽ階を賞めたゝへ、且つ、何につけても金錢をまをけて心まかせの樂しみをすることを、すゝめてゐる。

作者のかういふ感じ方は『一代男』の世之介の晩年の豪奢振りの描寫の中などにも明ら現はれてゐる。父親が亡くなつて、母親から「心のまゝに此銀つかへ」と二萬五千貫を渡され、もろもろの藏の鍵を渡された後の世之介の氣儘な遊びは、蓋し、生活享樂の情趣に從つてゐる當代民衆の憧れを象徴化したものと云ふべきであらうか。或時は、「世之介風呂をとめて、もろもろの太鼓を集め、今日、樂遊びと定め、羅紗の揃浴衣、指捌髮になつて、下帶をもかゝず、彼此九人一筋に並びて、八文字屋の二階に上りて騷げば、一町の鳴をやめて可笑がる」といふ京の馬鹿遊び。或時は「昨日は新町の粹を見捨て、その日をすぐに今日、島原の朝明」のその朝眺の面白さ――「西行は何知つて、松島の曙、象潟の夕を聚めつるぞ」といふ程のその面白い遊興。或時は「車三輛の上に花氈を敷かせ、太夫樣方へ申遣はし、一樣に水色の鹿子、白縮緬の投頭巾を着て、四人づゝ二挺に乘りて、樽、折、重箱、枕箱、燭臺に大蠟燭を立て」て好

[illegible]へと誘ふもあり、手おこて一雙手九人、事終めて、風林の松、夜更つもてなした、京より幾つか布團持たせて、草の戸の中に置火燵を仕かけ、括枕もあつて、こゝに一寢入とは、夢をすゝめられ、銀の間鍋に銘酒のかず〳〵、木具拵への茶漬飯、雁の板焼に赤貝を置合せ、しほらしき事どももありて、跡には名々呑の色服紗、呑捨の煙草盆、何れか殘る所もなし」といふ風流遊び。或時は、長崎丸山の「遊女三十五人思ひ〳〵の扮裝、紅の網前垂、縷金の玉襷、文彩の思案を盡し、岩井の水は千代ぞとて、亂遊の大振舞」——蓋し、これらは、所謂元祿兒である町人の享樂の理想境であると共に武士をして羨望措く能はさらしめた境地であつたであらう。

五

轉じて、實在の人物、例へば紀の國屋文左衛門や茨木屋幸齋や、淀屋辰五郎などいふ當時の豪商の生活振りを見ても、この頃の町人が、どういふ生活態度でゐたかといふことがよく窺はれる。

山東京傳の『近世奇跡考』には、紀の國屋文左衛門を次のやうに書いてゐる。

「[illegible]にして、[illegible]なげうちて[illegible]し。その頃本八丁堀三丁目、すべて紀文が屋となり。毎日定りて[illegible]ざし七人づゝ來りて髪をさす。これ客を迎ふる爲に、あたらしき櫛を取りかへる故とぞ。此一事を以て、その豪富なるを知るべし。又、或時揚屋町某屋中四郎がもとにて、時に小粒金を入れて[illegible]へしと云傳ふ」

茨木屋幸齋は、大阪の遊女屋の主人で、その豪奢なさまは夙く近松巣林子の『傾城酒呑童子』の中にひらぎの長として描かれてゐる。

「月も日も、庭より出でて庭に入る。くるわの内の武藏野や、ひらぎの長が廣庭の、光琳風の築山を、見渡す眼さえはる〲と、谷の岩組九十九折、筑波の山も恥かしの、森と繁りし植込は、華麗を盡す物數奇の松の作木作枝、庭の松風三味線の天柱に通ふ網廊下、數奇屋が軒の南天に、珊瑚樹つなぐ玉簾、萩は宮城野躑躅が岡、梅や櫻の花紅葉、天より四季の仕着して、手形の外の色づくめ、金づくめなる身の榮華、金の冠を着ぬばかり。」

近松は幸齋の榮華をかう書いてゐる。西澤一鳳の『脚色餘錄』にも幸齋の事跡について、

「茨木屋幸齋事、身の程をしらぬ奢を極め、己が居間は、金襖、水晶の障子輝きわたり、恰も宮殿の如く、朝夕掛盤にて饗膳の式に等しく、日々に獻立を以て料理を伺ひ、庖丁人山海の珍味を盡て是を饗す。數多抱への傾城禿等にて配膳給仕す。おのが心に叶はざる

料理をば、足を以て踏を蹴返し、身には錦繍を衣とし、豹虎の敷皮菓子地の皿數、その過奢高位の人にも越ゆ。」

と書いてゐる。同じ書はつゞけて云ふ。

「我家の内に、公儀地の有りしに、それへ能舞臺を建て、常に猿樂を翫ぶ。かやうの事、重々超過して、享保三年に闕所へ召呼るるところ、虚病を構へて出でず。仍て先づ手錠をかけ、所へお預けに成る。辛齋家内を改めらるゝところ、金銀財寶の高は未考、傾城の抱へ太夫三十七人、引舟三十七人、禿三十七人、雜人四十二人、禿四十二人、その外局女郎など大勢有之、凡そ家内人數五百人ばかりなり」

そのいかに豪奢を極めたかは、この一節でも推測することが出來る。尙、同書が、辛齋の邸内に、築山が多いために山屋敷と呼ばれてゐること、及び庭中の美をたゝへて「庭中の佳景任レ使ニ康樂殿ニ不レ及レ談目不レ及レ勝築山の景最美なり」と云つてゐるところを、上に擧げた近松の文章と比べて見るとき一層の興味があるであらう。

淀屋辰五郎も、同じ西澤一鳳の『傳奇作書』によると寛永年中「奢に長じて莫大の金銀を費せし料にて、家内闕所となり、城州八幡へ引退き古く持傳へたる寶を始め有金地面古證文まで殘らず闕所仰付けられ」たといふことであるが、彼れは百間四方二萬坪の地を占め三千八百坪の家屋を有し、四十餘戸の土藏を列ね別邸四戸を有し、奴婢百四五十人に及ぶといふ大世帶であつたと傳へられる。

これらの豪商の奢侈に流れたのは、無論その持つてゐる富の力の當然に導いたところではあるが、それは又一面、明らかに武士階級に對する彼等の負けじ魂ひの發露でもある。徳川政府が辛齋辰五郎等を闕所にしたのは、單に彼等が奢侈に流れるといふのみではない。それは表面で、恐らくは、彼等が武士階級にこれ見よがしの、人もなげな寛濶振、横着振りに對する反感にも、大ぶ起因するであらう。現に『傳奇作書』の傳へるところによると、辰五郎の闕所の裏面には、彼の所持する壺を公儀が求めてゐるにもかゝはらず、それを差出さなかつたゝめだといふことである。又、時の權勢柳澤美濃守の借金の申出をさへ、彼れは斷つてたと傳へられてゐる。何れにしても、彼れはその富の力によつて武士階級を眼下に見下してゐたことは推測するに難くはない。前に擧げた太宰春台の所謂「商賈も士太夫を輕しめ侮る」といふ風潮を、恐らく辰五郎や辛齋やが最もよく代表してゐたと見ることも出來るであらう。

かういふ負けじ魂に根ざした町人氣質は、單に對武士の場合ばかりではなく、町人同士の間に於ても或ひはその他の場合に於いてもさまざまのすがたに於て現はれてゐる。彼等が何をす

[illegible]技巧を弄せず、すべてに寫實的であることや、從つて又情熱的であることや——一言で云へば、生活意志が深刻として強烈であることが、とりも直さず、この當時の町人の性格的な大きな特徴であつた。このことは大近松の作を心して讀む者などには、直ちに肯けることである。私は嘗てこれについて、前にも擧げた拙稿『解放の詩人、近松門左衛門』の中で、大體次のやうに書いて置いた。

情痴感情の強さ、烈しさは、近松の作中人物の戀愛のさまぐのすがたに遺憾なく、それ自らを現はしてゐる。例へば『冥途の飛脚』の忠兵衛が、今まで親友と思つてゐた八右衛門に、馴染の女梅川の前で、惡しざまに罵られ、「忠兵衛元來惡い蟲、抑へかねてずんと出て、八右衛門が膝にむんずと居かゝり」ながら『措いて下され、氣遣ひすな。五十兩や百兩友たちに損かける忠兵衛ではござらぬ。アヽ八右衛門樣、八右衛門樣奴、サア銀渡す手形戻せ」とわめきつゝ、前後の思慮なく、かつとなつて、大切の包み金の封印押し切り「これ龜屋忠兵兵衛が、人に損かけぬ證據サア請取れ」と投げつけるその烈しさは、とりも直さず彼れの戀愛の烈しさであつた。又例へば『長町女腹切』の半七が、情人お花の前で、彼女の繼父から「此娘女房に持てば小判[illegible]花を女房[illegible]切れ」と嘲罵されてぐつとせき上げ、[illegible]は持たねども小判といふもの持つてゐる」と[illegible]人から廿兩取り出して「サア小判といふもの近付になつて置け」と眞向に投げつけると云ふその烈しさは、とりも直さず半七の戀愛の強さ、烈しさであつた。

この烈しさ、強さは單に戀愛の場合ばかりではない。それは例へば『天の網島』の治兵衛が、女房おさんの心づくしに感心して「この治兵衛には親の罰、天の罰、佛神の罰は當らずとも、女房の罰一つでもようない筈、許してたもれ」と手を合せて男泣きに泣くその感激の涙の中にも現れてゐる。『堀川波の鼓』の小倉彦九郎が、不義をした女房のお種を一刀の下に切つて棄て、男らしく勇んで女敵討に出立しようとして取縋る妹や子の嘆きに、猛き心も急に打萎れ、「さほど母、姉を大切に思ふほどならば、なぜ最前に衣を着せ、尼にせんとて命をば、なぜに貰うてはくれざりし」と、空しき女房の體に抱きつきて、わつと叫び泣くその執着の涙の中にも現はれてゐる。又『女殺油地獄』の主人公で、殺人罪を犯した極惡人の遊蕩兒與兵衛が、最後に囚へられて「思へば二十年來の不孝無法の惡業が、魔王となつて

與兵衛が一心の眼を眩ます。お吉殿殺し金を取りしは河内屋與兵衛」と立派に男らしく白狀したその覺悟の涙の中にも現はれてゐる。

實際、かういふ性格上の、烈しく、強く、一本氣な味ひは、近松作中人物の齎らす特殊な味ひであると共に、實に又、元祿文學そのものゝ齎らす特殊な味ひでもある。この味ひを鑑賞することなしには、元祿文學と並びにそれを産み出した元祿の民衆的精神とは恐らく理解しがたいものであるであらう。

六

轉じて文化文政時代に移ると、時代を代表する民衆的精神と、その發露である文學とは、元祿期のそれとは全然異つてゐることを見出す。

元祿民衆が、解放された生活の喜びに浸り漬つてゐるに比べて、文化文政の民衆は、抑壓された生活の苦しみに喘いでゐる。前者が力一ぱいに振舞つてゐるに比べて、後者は、振舞ふべき力を持つてゐない。前者では、生活意志が甚だ强烈であるが、後者では生活意志が頽廢してゐる。前者の自然的なのに比べて後者は技巧的(アーテイフイシャル)であり、前者の眞劍なのに比べて、後者は遊戯的であり、前者の信仰的で嚴肅的なのに比べて後者は無宗教的で、惡魔的である。

かういふ風に、文化文政の民衆は元祿の民衆に比べて、全く別な傾向にある。そして、このことを最もよく說明するものは、山東京傳其他の黄表紙や洒落本や鶴屋南北等の戯曲であり、更に實在の人物としては所謂十八大通などの通人生活である。

黄表紙や洒落本には、人も知る通り、よく遊里が描かれてゐる。又、所謂通人がよく描かれてゐる。洒落本については、『小說史稿』の著者關根正直博士は「遊里洞房の癡情を寫し、嫖客のたはれ言などに、滑稽を寓しゝ小冊子」であると云ひ、明和年間に丹波屋利兵衛といふものが「浮世師といふものゝ事を綴りて『遊子方言』と題して開板したのが、その始めであると云ひ、更に浮世師とは、今、俗に通人とか粋客とかいふものゝことにや」と云つてゐる。

黄表紙又は洒落本などに描かれた遊里は、民衆享樂の巷である點は同じであるが、少くもそこにゆく嫖客の氣性やら遊女の情趣やらは、元祿のそれとは餘程趣きを異にしてゐる。

遊里の嫖客を俗に通人と云つたことは何時頃のことかを明かにしない。京傳の弟の山東京山の『蛛蜘の糸巻』には「天明の頃、花柳風流を事とする者を大通、又は通人、通家などゝ呼へ

一、[illegible]
遊里にには

「大通は人の心を第として、よろづの事の要とぞなれりける。花に行く無駄人、月に通ふ通者も、いづれか通を知らざりける。夫れ、大通といふ文字は、然の俗語にて、大に人情に通じたるを稱したる字の通りの詞なり。近頃世上一般の通語となりて、童三貫の意氣人より、切店そこりの伏者に至るまで、假にも通を唱へざるはなし。」

と云つてゐるし、又、明和二年に五代目團十郎が演じたといふ『助六由緣江戸櫻』の中にも通人が出て來るから、文化文政は無論のこと、天明よりは可なり前から通人といふものがあり、「通」といふことが流行してゐたことがわかる。而も「通」は、たゞに當時の町人ばかりではなく、やはり『六々部集』に「夏は登庭して座敷まで屋根舟が着かぬとの小言を云ひ出し、冬は巨燵の前へ芝居があるいて來ればよいとの我儘、只いきな事をのみ尊み、扶々洒々として、鮫鞘のお太刀は煙管より輕く、蒔の紙入は七ツ道具より重し」と云つて、當時の武士が惰弱になつたことを記して「役者の身振を學ばずんばいかんぞ者の腹をへらさんと、息憐放佚の心より、親仁の尻は祖父樣より重く、息子又父樣より弱し。只通を以つて義として口を以て男とす」と云つてあるところから見ても武士階級も通を以て

[illegible]
遊[illegible]
ない。

さて、通といひ通人といふのは、どういふことであるか。『六々部集』には「かの通に差別あり。極質の七通は上方の伊達衆にひとしく、くつきり立ちし水際は、水道の水の名物男、意氣地の立引男氣は、くだ〳〵いふも餘蘊なり」と云つてゐるが、意氣地とか男氣とか云ふことも「通」の眞義としては重大な要素であつたにはちがひない。しかし、同じく遊里に遊ぶにしても、元祿時代の人々が何もかも一切を忘れて、戀愛の中に浸り漬るとは自ら異つて後の人々はまづ十分に相手の遊女を考へ、翻つて自分の境遇を考へ、利口に立ち廻つて遊ぶといふ功利的な態度の、そこにあつたことは明かである。だから『六々部集』は、親の讓の家を潰し居屋敷を打ちこんで、深はまりはいらぬもの」と云つてゐる。深はまりは通には大の禁物である。

「女郎は遊び物、遊君遊女の遊の字は、あそぶといふ文字なれば、一歩ならば一分だけ、二朱ならば南鐐だけ、客といや字の位を齊さず、買といふ字を心に込め、惡穴を言はず、空をつかず、氣を專らとして、座敷の數を重ぬる時は、需めずして通となり、通とならざる仕内の中に、自づと出づる面白みには傾城もおもひ付き、世間でも有難がるべし。」

『六々部集』の著者は、通の眞髄を上のやうに述べてゐる。すなはち、一歩ならば一步、二朱ならば二朱、客であるといふこと、買ふといふことゝを忘れず、深はまりをしないで、適度に遊ぶといふ唯物的、功利的な境地を說いてゐるのである。山東京傳もその『富士之人穴見物』(天明八年)の中で「止まるとき止らざるは通の道にあらず」と云つて、程度を知つて遊ぶことを通だと云つてゐる。元祿期の生一本で、眞摯でまつしぐらに戀愛を追ひ求めるのに比べて、そのいかに遊戯的であり功利的であるかは、改めて說する迄もないであらう。

七

文化文政の民衆が、いかにこの「通」を無上のものとし、いかに通人たることをこれつとめたかは、黄表紙や、洒落本がよく說明してゐる。而も『六々部集』の著者源内の「精めずして通となる」といふやうな極上の通人ではなく、似而非通人とならうとして力めてゐたものもずゐぶん多かつたであらう。京傳の有名な黄表紙『江戸生浮氣樺焼』(天明五年)などは、當時の町人生活、民衆生活がいかに通人たらうとして腐心したか、その所謂通人とはどういふものであつたかといふことを示す興味のあるもので、而も當時の寫實を示すものであらう。

百萬兩の分限者の仇氣屋の獨息子の艶治郎といふ浮氣な若者は、一生の思ひ出に、どうか浮名を歌はれたいといふ馬鹿らしい望みを起し、それには通人になるに如かないと考へて、いろいろ通人の修行をする。そして、或時は、役者の内へ、娘等の驅け込んで評判になるのを羨しく、どうかさういふ浮名を自分も立てゝ見たいと思ひ、近所で有名なある藝者を、五十兩で雇つて、自分の家へ驅けこませ、あまつさへ、其とを、讀賣をたのみ、板におこさせ、人前一兩づゝで雇つて、江戸市中を無代で賣らせて見たり、或時は、遊女買ひをして家にかへつても、やきもちをやく者がゐなければ張合がないと云つて、「どうかやきもちさへやけば、容貌にのぞみはないからとの注文にて、二百兩出して妾をかゝへ、内にかへればこづき廻されるを此上もない樂しみ」にして見たり、或時は、とかく色男といふものは、よく打擲されるものだといふことを芝居で見て、自分も打たれて見たくなり、地廻りの若い者を、人前三兩づゝで四人をたのみ、吉原仲の町の人通りの多いところで、打たれる計畫を立て、而もたゞ打たれたゞけでは面白くないといふので、近所の茶屋の二階で、その道の人を雇つてめりやすを歌はせ、亂れた髮を馴染の女郎に梳かせようとしたりする。尤もこの時は、打たれどころがわるく、片息になつて、髮梳どころではなく、氣つけよ醫者よと大

[illegible]が、いまだ[illegible]ることに寒心してゐる[illegible]。

これはかりではない。其れは、やがて、心中の眞似事をして浮名を立てゝ見たくなり、南無阿彌陀佛を相圖に留めさせる注文で、相手の女郎を千五百兩で身請けをなし、心中の折の着物として一兩にかなてこ、綿にはいかり、しちにおいても流れぬ身といふお歌の心」を意匠にした對の小袖を着て、さて、すなはに身請けをしては面白くないと、駈落ちのつもりで、大金を出して故意と櫺子窓を壞し、梯子をかけて二階から逃げ出し、心中の場所も、意氣な、ぱつとした所を選んで向島三圍の土堤と定め、時刻も夜が更けては氣味がわるいからといふので、宵の中とし、さて道行には、これまで敗れに贔負になつた茶屋、船宿、幇間、末社、藝者など、何れも揃羽織で「だい／＼講の送りのやうに」大川端まで送るといふ前代未聞の心中を計畫し且つ實行する。

「江戸生浮氣樺燒」の主人公の氣持は、今日の吾々から見て、たしかに噴飯に値する。しかしすべてを狂言化し、技巧化し、遊戲化せずにはゐられない彼れの氣持は、當時の江戸民衆の如何なるものであるかを知るには非常にいゝ參考資料である。事實、この作が非常な勢ひで讀まれたことは、當時、自惚者を艶[illegible]といつたといふことに[illegible]が、或る程度迄、この艶次郎に共鳴してゐた[illegible]。即ち、當時の江戸民衆は、この艶次郎によつて、自己の遊戲的な、技巧的な、不眞面目な、駄洒落的な思想感情又は生活態度を代辯させたものとも見られる。

翻つて、民衆の實際生活例へば所謂十八大通と呼ばれた通人の生活などを見ても、このことがよく肯かれる。十八大通のことは、前に擧げた京山の『蜘蛛の糸卷』にも出てゐるが、十八人の通人でその頃の通人の尤なるものであつた。彼等の多くは或ひは札差であつたり、豪商であつたりしたので、金錢を湯水のやうにつかつた。しかし、彼等の遊び振りは、表面は、たとひ豪奢ではあつても、元祿時代の紀文や奈良茂や辰五郎などゝは自ら別種に屬するものであつた。元祿時代の豪商達の驕奢放逸は、內に充ち／＼てゐる力が自らにしてその捌け口を見出したものであつた。だから遊びではあつてもそこには眞剣さがあつた。天明以後文化文政のこれらの豪商達のそれは、たゞ遊びのための遊びであつた。日頃アンニュイを感じてゐる者の退屈凌ぎのわざくれであつた。十八大通の一人利倉屋庄左衞門がある日髮床の前を通るとき店の中で自分を笑つたものがあつたといふの

で大に怒り、その店に驅け上り上板を取つて床を打ち壞し、器物を破壞し、亂暴狼藉を働いた末に、狼藉料として二十兩の大金をその髮床の主人に投げ與へたと傳へられてゐるが、これは元祿の紀文が、小粒金を升に入れて衆人に撒き與へたのとは、氣分の上で非常な相違である。前者の仕打は飽くまでも狂言であり遊戲である。怒もしないのに怒つた風を裝つて狼藉を働いたのである。だからこの狂言に對して狼藉料を支拂ふだけの餘裕を彼れは持つてゐたのである。元祿期の人には、さういふ餘裕はない。彼らは、怒るにも笑ふにも泣くにも喜ぶにも、すべて情熱的であつた。直情徑行的であつた。ひたむきであつた。まつしぐらであつた。全我的であつた。

八

更に文化文政の文學と民衆生活とを考へるものゝ、見落すことの出來ないのは、櫻田治助、並木正三、鶴屋南北等の歌舞伎劇である。就中南北は、前にも擧げた一風の『傳奇作書』に「文章猥褻にして、所謂江戸狂言とて一部の趣向立たるもの稀なれども、近世の痴情にやかなひけん。南北風とて一時作名を高くせり」とあるやうに、當時の人氣にかなつて、化政度を代表した江戸作家の随一であつたゞけ、そこに描かれた時代相には、文化史的に重大な意義の認められるのは云ふ迄もない。

吾々が、南北を讀んで第一に感ずる興味は、そこに描かれた人物が多く、無宗教的で、惡魔的だといふことである。彼等には、人生を明るくし、生活に光りを與へる何等の宗教もない。たゞ、現在當面の刹那的意欲の命ずるまゝに衝動してゐる生活である。何等の希望もない。理想もない。從つて彼等は極端に唯物的である。又、何等の希望なく、理想もないから、自暴自棄的である。そしてその極、彼等は殘忍を愛し、非道を喜び、猥褻を好んでゐる。善玉よりも惡玉を貴んでゐる。所謂惡魔的傾向である。

これらの人物の中には、殺人や姦淫を平氣でしてゐるものが多い。兄妹相姦の畜生道なども珍らしくはない。彼等は、これを以て必ずしも恥とはしてゐない。殺人の場合の徹底的に殘酷であつたり姦淫の場面の徹底的に猥雜であつたりするところは、今日の人の、全く面を掩はざるを得ない程である。孕み女の手足を戸板に釘づけにして、その生膽をゑぐり取つたり（『獨道中五十三驛』）乳呑子を抱へた病婦に、不義の汚名を着せ、あまつさへ足蹴にして、衣類や蒲團を强奪したりやがてその病婦の悶死するのを見て、それを戸板に釘づけにして川に流したり（『四谷怪談』）するやうなことは血なまぐさい、血みどろな殘

[illegible]
[illegible]することとなく、[illegible]したものとしては、[illegible]の直助と[illegible]で出逢ひ、直助が「働きかけた[illegible]、どうで仕舞た身を裂かれ」と云ふのに対せて、首が飛んでも動いて見せるわ」といふあの有名な白を云ふ主人公民谷伊右衛門の如きが好適例である。又『勝相撲浮名花觸』の中で、友人の仲間の盗んだ賣刀を奪つてその仲間を殺し、その仲間の主人――主人が仲間をして盗ませたといふ退引させぬ弱點を握つて、その主人に大金で刀を賣りつけようとしたり、里子に預つた乳呑兒を、下駄の歯入箱に一しよに入れて歩いて、粗末な一物品でもあるやうに、どんざいに取扱ふのみか、里親の前では、そつと乳呑兒を抓つて故意と泣かせながら、空涙を流して巧みに金をゆすつたり、その賣刀を、殺されても手放すまいとしてしつこく固執したりする歯入屋権助なども、たしかに南北物の市井の一惡漢の典型である。これらの人物を、例へ近松『女殺油地獄』の主人公と比べて見ると、たとひ同じ無頼漢ではあつても近松の方にはすぐに悔悟して眞人間に立ちかへらうとする人間的のところがあるが、南北の方には全然それがない。飽くまでも惡に徹底してゐる。

南北から受ける第二の興味は、無論第一の興味と連關してこ[illegible]
[illegible]になつてゐる[illegible]
[illegible]貧、雲助、折助、按摩、浪人者、[illegible]女、地獄、夜鷹といふやうな下層社會の人々を描いてゐる。[illegible]面にも荒れ果てた浪宅、貧民窟、墓場、人里離れた野中の一軒家といふやうな無氣味なところが多い。前に擧げた『傳奇作書』にも「この人常に棺桶を狂言につかふ事を好み、棺を用ひたる狂言を見れば、作者は南北なり」と云つてゐるが、南北には實際無氣味な場面が多い。そして、これを近松の諸作乃至はその他の元祿歌舞伎に比べて見るとき、そこに描かれた社會的雰圍氣のいかに異つてゐるかゞ誰人にも容易に肯かれる。元祿の世界は解放された世界、生活享樂の情趣に浸つてゐた賑かな華やかな世界であつたが。南北の世界は、虐げられた世界、閉塞の殘忍な世界、生活倦怠の氣持ちを何等かの方法で刺戟しなければならなかつたから起つたエロチックな猥雑な世界、希望のない暗い陰鬱な世界である。

尤も、南北の中に描かれたさういふ世相を以て、直ちに文化文政期のそのまゝの描寫であるとするのは或ひは早計であるかも知れない。少くも、表面的には、南北に見るやうなブラッデー・シーンやエロチック・シーンは、必ずしもその時代の實相で

あるとは云へないであらう。しかしながら、徳川政府の崩壊に先つ目かとなる潜在的な動亂的氣運が澎拜としてゐたので、人心が皆安定を失ひ、その結果人心の中に潜在意識となつてゐるさまざまの殘虐性や性的本能やらが、南北の口を藉りて、自ら現はれたものであると見られないことはない。この意味で、西鶴、近松が元祿民衆の代辯であるやうに、南北は又、化政度民衆の一面の代辯であると云へる。

九

以上で、わが國近世の民衆文學の二つの典型——元祿文學と化政度文學との特質、並びに民衆と文學との交渉についての時代的意義は、大凡そ明かになつたであらうと思はれる。

さて、如上、民衆文學の二つの典型に對する考察から、當然考究の對象となるものは、元祿期の民衆が、どういふ經路を經て化政度期の民衆となつたかといふことである。言葉を換へていふと、あれほど生の享樂と解放の喜びとを感じ、生活意志の強烈であつた元祿の民衆が、或ひは生の倦怠を感じ、或ひは自暴自棄となり、或ひは生活意志の衰耗したものとなつたのは、どういふわけであるかといふことである。これは、文化史上の重大な問題であるから、何れ、稿を改めて論ぜらるべきことであるが、こゝで、たゞ結論だけを云へば、それは要するに徳川の階級政策のためであるといへる。

徳川政府は、そのそもそもの始めから、士農工商といふ階級を設け、士以外の農工商は、「雜人」として、侮蔑してゐた。慶長年間の規定にかゝる『武家法度』にも、「衣服の品混雜すべからざること」「雜人恣に乘輿すべからざること」等が明記してあつた。しかしながら、前にも述べたやうに、町人階級が、世が泰平になるにつれて、經濟上の權力を手中に收め、表面はとにかく、實力上では次第に武士階級を凌駕して、却つて逆に武士を侮蔑するやうになつて來た。武士階級は、これを遺憾として、その政權を持つてゐるのを幸ひ、それを利用して町人階級を抑壓しようとかゝつた。さういふ抑壓政策の具體的に現はれたのは、家光以來、代々の將軍の奢侈禁止令である。尤も、これは町人にばかりのものではないが、その適用の對象は、主として町人であつたことは推測するに難くはない。瀧本誠一博士はその『日本經濟史』に於て、承應元年に幕府の發布した町觸として「一、町人召仕絹布着し申間敷事、一、町人羅紗の合羽着し申間敷事、一、町人蒔繪の家具拵へ申間敷事、一、町人作事に金銀の箔付申間敷事、一、三階仕間敷事、一、町人蒔繪之乘物[illegible]仕間敷事、一、乘掛蒲團紬木綿毛氈之外無用之事、一、

町人[illegible]仕間敷事、一、町人[illegible]

一、町人かぶきたる體仕間敷事」といふ禁令を擧げ、この禁令は、單に奢侈の禁止ばかりを目的としたのではなく、卑しき商人の身分に相當なる格式を定めたものであると云つて居られるのは、いかにもと肯かれる。そして、町人相當の格式を定めようとしたのは、一つは、明かに、その當時の町人が、その經濟の力によつて武士を輕しめ侮る傾きがあつたから、逆に出てかういふ禁令によつて武士の權力を示さうとしたものだとも想像される。事實元祿の富豪等は、大抵かういふ奢侈禁止令に觸れて、家財を沒收されてゐる。前に擧げた茨本屋幸齋でも淀屋辰五郎でも皆さうであつた。

德川政府は、かやうな奢侈禁止令で、町人の富の使用に制限を加へてゐる他方に、常に、町人階級をして、武士階級を尊敬させるために、あらゆる手段を講じた。既に家光の時に『市人等武士に對し無禮をなさば曲事たるべし』といふ令を發したのは、偶々以上の政策の一端を語るものであるが、寛政元年に、淺草藏前の札差共(この中には前に述べた十八大通の連中もある。)に令を下して『身分の奢侈は勿論、下代共に至迄種々遊興のみ致し、甚敷世上町家の風俗迄崩れ候樣に成り、不屆に候。奢を極め、其上用事達候御旗本御家人に對し候て、失禮成事も有之候趣[illegible]と云[illegible]が武士階級を尊重すると同時に、平民階級を輕蔑したさまを證明するものである。

かくの如くして我國近世の民衆の中堅をなしてゐる町人階級は、一番惨めな目を見ることゝなつた。彼等には經濟力があつた。富があつた。しかしそれを思ふまゝに使ふことが出來なかつた。されぱと云つて彼等には政權がなかつた。いかに青雲を望んでも、功名に憧れても、彼等はいかにともすることが出來なかつた。元祿時代には、武士階級との階級戰爭に於て、一度勝利者となつた彼等も、文化文政頃には、再びもとの敗北者となつて奴隷の境遇に墮ちざるを得なくなつた。太田南畝はその『假名世說』で

> 二本さしたる人と見れば、隨分いんぎんに敬ひて、假りにも無禮なすべからず。町人の無禮、德のゆく事ひとつもなし。にくいやつとて切り倒されずば、あまいやつとて借りたふさるゝなるべし。いづれにも怪我のもとなり。

と云つて町人を誡めたのは、いかに町人がその當時惨めに取扱はれてゐたかを裏書きしたものに外ならない。

そして文化文政期の民衆文學は、實に、かういふ虐げられ、抑壓された民衆から自ら生れた文學であるところに、今日から

見て興味深い文化史的意義があるのである。

十

以上、餘りに多く紙數を費したゝめに、當來の民衆文學については、僅かに一言するにとゞめなければならないのは遺憾であるが、さて、わが國近世の民衆文學についての上來の論述は、今日の吾々にどういふことを暗示してゐるか。

第一に、よき民衆文學の出現のためには、ロマン・ロオランがいみじくも云つたやうに先づよき民衆がなければならないといふことである。元祿文學と化政度の文學との相違は、結局それを生んだ民衆の相違である。元祿文學から、今日の吾々が、偉大生命力の強烈な味ひを感得し得るのは、一に元祿の民衆が、前に述べたやうに生活意志が強烈であつたからに外ならない。民衆そのものを離れて民衆藝術や民衆文學を考へることは全く無意義である。

さて、それならば、今日の民衆とは何であるか。彼等は何を思ひ何を惱み、何を憧れてゐるか。又、彼等は何を思ひ、何を惱み、何を憧るべきであるか。從つて、かういふことが現在並びに當來の民衆文學を考へるものの、先決問題でなければならない。

民衆といふ言葉も、それを使用する人によつて、さまざまの内容を含み得る。トルストイはこれを一般人類といふ意味に用ゐてゐるが、ウイリアム・モリスやロマン・ロオランやエレン・ケイなどの近代における民衆藝術の論者はこれを第四階級といふ限られた意味に用ゐてゐる。吾々の今日云ふ「民衆」とは、まさにさうでなければならない。すなはち、言葉を換へて云ふと、今日の第四階級が、何を目標としてゐるか、又、何を目標としなければならないか。その目標を中心として醸し出される今日の民衆的精神はどういふものであるか。當來の民衆文學は、先づ基調をこゝに置かなければならない。言葉を換へていふと當來の民衆藝術又は民衆文學は、今日の第四階級である民衆的精神又は民衆的精神そのものゝ發露でなければならない。更にモリスの言葉を借りて云ふと、それは飽くまでも「民衆によつて」(by the people) 創造されたものでなければならない。

第二に、當來の民衆藝術又は民衆文藝は、民衆そのもの、又は民衆生活そのものゝ如實の描寫であるばかりでなく、民衆そのものに更に、更新的力を與へるものでなければならない。このことは本稿の冒頭でも述べたことはであるが、藝術は、元來イギリスのタウデン教授が云つたやうに、それに接するものの感情を刺戟して、彼等をして、「更により高い意識」に向上させるものであるが、民衆藝術は殊にさうでなくてはならない。すなはち、民衆の力となり、悦びとなり、慰藉となり、生活意志を更に強固にするものでなくてはならない。こゝでもモリスの言葉を借りれば、「民衆のため」(for the people)のものでなくてはならない、すなはち、民衆藝術は、民衆によつて創造されると共に、民衆のためのものでなくてはならない。かういふ藝術にして、始めて、又、モリスの所謂「それを作つた人にも、そ

れに接する人にも、共に幸福を與へる」要素であり得る。ロマン・ロオランが、その『民衆劇場』の中で、「民衆劇場で上演さるべき戯曲は、民衆の心に更新的な力を與へるものでなければならぬ。否、一歩をすゝめて云へば、民衆は常に、より高き目的を狙つてゐるやうな偉大なる精神の潑溂たるさま〲の例證や、かゞやかしい獻身的精神や、不屈不撓の意志の力などを提供する戯曲を持たなければならない」と云つたのは至言である。

第三に、民衆藝術又は民衆文學の作家は、一面に民衆そのものでなくてはならないと共に、他面に、民衆の目標を――民衆のまだ意識しない先に意識する一種の先覺者であるべきだといふことである。

民衆と藝術との關係、交渉は、上來述べたやうに、不可離な密接なものであるから、藝術は、――それが傑れたものである限り、民衆から生れると共に、又新しい民衆を生む作用をなすのである。かういふ藝術を、ロマン・ロオランは「新しい時代と共に、それ自らを新たにする藝術」と云つてゐる。そして彼れはさういふ藝術を以て又、「現代の頽廢しつゝある社會を防ぐ一個の武器であり、且つ、將に來るべき時代のための叫び聲でなければならぬ」と云つてゐる。

ロマン・ロオランは、尙、現代の民衆の要求する戯曲について、次のやうに云つてゐるが、これは云ふまでもなく戯曲以外の他のあらゆる藝術に移して云はるべき言葉である。すなはち曰く『現代の民衆が、眞に欲求し、且つ必要とするところのものは、既に古典劇ではない。何となれば現代には、もはや十七八世紀の悲劇の材料となつたやうな矛盾葛藤や、又は、古典劇中の英劇に描かれたやうな事件とは、餘りに縁遠くなつてゐるからである。しかし、さうかと云つて、現代社會の中流階級のさまざまな困難と惡德とを赤裸々に描いたものも亦、民衆劇物で上演することは、尙更、好ましからぬことである。現代の民衆の、眞に必要とするところのものは、偉大なる目的を喚起し、意志を強固にし、生活に對する見解をひろめ、人々の情緒を純化し、又、深化するやうな戯曲的藝術である』と。

ロマン・ロオランは又、現代における民衆劇について、大體次のやうに云つてゐるが、これは吾々が今日の民衆文藝を考へる上にも充分當て嵌まる言葉である。

今日の民衆劇には二派がある。一つは、今日、あるがまゝの劇を、何劇でもかまはず、民衆に與へようとする。他の一派は、現代においての新しい努力である民衆から、藝術の新しい一樣式を造り出さうとする。一つは劇を信じ、他は民衆に望みを抱く。その間には、何の共通點もない。過去のための鬪士と將來のためゆの鬪士である。

民衆文學の作家は、先づ民衆であることが必要である。民衆を信ずることが必要である。當來の民衆のための鬪士であることが必要である。かういふ作家によつてものされない民衆文學は、文學として他に、どういふすぐれたところがあつても、結局魂のない人形に過ぎない。

文藝的作品の映畫化

近藤經一

前置き

文藝的作品、即ち小說とか、戲曲とか、詩とかいふ樣な所謂旣存の文學的形式をもつて書かれた作品を映畫化するといふことに就ては映畫批評家の間にはいろ〳〵と反對議論のあることの樣だ。けれども、その總ての反對議論にもかゝはらず、それは行はれてゐる、過去及び現在に於ては世界のあらゆる國々の映畫化に於て盛んに行はれてゐる事實だ。そして恐らく未來に於ても、少くともさう遠くない未來に於ては益々盛んに行はれる事實であらう――假に一つの例をあげてみるならば、例の『十誡』を作つて有名なアメリカ一の大監督シー、ビー、デミルを棟梁とする大會社プロデューサース、デイストリビユークース、コーポレーションが千九百二十六年八月一日から千九百二十七年七月中に作るべき四十一本の作品の中、その二十二本が評判になつた小說、八本が舞台で成功した狂言、四つが雜誌に連載されて人氣のあつた物語といふわけで、純粹に映畫の爲めにかゝれた原作によるものは僅かに殘りの七本にすぎないといふことになる――そして云ふまでもなく日本と雖も此の例にはもれない。紅葉山人の「金色夜叉」德富蘆花の「不如歸」の如きは幾度繰り返えしてフイルムに作られたか分らない。而して、最近「文藝」が日本社會に於て一般化され、從つてその勢力が擴がり、殊に新聞小說なるものが社會の各方面に向つて非常な勢力を有する樣になるとともに此の文藝作品の映畫化もつと露骨に云ふと新聞小說の映畫化といふことは益々盛んになり、又ならんとしつゝある有樣だ。此の時に當つて中央公論社から私に「明治、大正年間の小說映畫化の歷史」を求められた。私、もとより映畫界に身を投ずること淺く、その任に非ざるを知るも、又同誌がかくの如き記事を求むるに至つたといふことは日本の映畫界の爲めにも賀すべきことと思ふので、敢て斯界先進の敎へを請ひつゝ此の一文をつゞることにしたのである。

一　向島前期

明治三十一年から明治四十五年まで。

我國に於て活動寫眞の撮影といふものが始めて試みられたのは、記錄によると明治三十一年の春のことで、これは今の雁次郎の芝居を撮つたものだといふ。が、この撮影は見事失敗に終つて、ともかくも映寫機にかけて寫して見ることの出來る樣な映畫が出來たのはその同じ年の十月柴田常吉といふ人によつて成就された藝者の手踊をもつて始めとするとされてゐる。

極く試驗的な試みは別として、ともかくも活動寫眞といふものがフランスのリユミエル兄弟とアメリカのエヂソンとによつて偶然にも殆んど同時に行はれた、即ち活動寫眞といふものが此の世に現れた最初の記錄が明治二十八年、二十九年の候であつたことにみると我が日本の有する前記の記錄は實に我國が當時如何に早く此二十世紀の世界を支配せんとしつゝある驚くべき文明の發明を輸入したものであるかといふことを示すもので、我が國の活動寫眞の歷史といふものはその古さに於てはアメリカ、フランスと並んで恐らくは世界各國中の最なるものの一に居ると云つてもいゝのであらう。

斯く古き歷史は有しながら、その後に於ける我が國の活動寫眞發達は甚だ遲々たるものは、じつに遲々として進まず、明治三十七年七月、東京市外目黑行人坂に日本最初の映畫撮影所（スタヂオ）吉澤撮影所が設けられ、翌八年九月京都に横田撮影所が設立さるゝに至つても、日本映畫は未だ依然として實寫の範圍を出なかつたのである。（此の時分までに撮影されたものの中で今日なほそのネガが保存されてゐるものの中で珍とすべきは團菊の「紅葉狩り」梅彩の「二人道成寺」仁左衞門の「七段目（？）」等がある。常陸山と梅ケ谷のヒストリカルな勝負もあるかも知れない。それから全く方面の變つたものでは北淸事件や、旅順開城のときの乃木大將や、ステッセルなどの實寫もある。まだ私の知らないもので珍らしいものが隨分あるのだらうと思ふ）

それから數年たつた明治四十一年になつて吉澤撮影所に於て、初めて日本の演劇映畫が製作發表された。つゞいて翌四十二年京都に於ける横田撮影所の横田永之助氏は當時大阪の何處か場末の小屋で芝居を打つてゐた名もなき役者を連れて來て定期、連續的に演劇映畫を製作、發賣し始めた。そして此の當時無名の一役者こそは今日日本に於ける最も高名にして富有なる俳優兼日活重役尾上松之助と中村仙三氏であつたのである。

演劇映畫は作るやうになるにはなつたが、當時の演劇映畫には

その名の示す通り、舞台の上で演ぜられる芝居をそのまゝフィルムに撮つたといふにすぎず、從つて辯士は映畫の中で役者の云つてゐる或ひは云ふべきセリフをそのまゝしあべり、おはやしは舞台の芝居の通りのおはやしをしたものであつた。

さういふ風であつたから、日本の所謂歌舞伎劇中の有名なるものゝ殆んど全部は此の松之助一派の手にかゝつて映畫化されたと云つてもいゝであらう。

かく京都に於て横田系の手によつて舊劇の映畫が一歩一歩その勢力を増してゆきつゝあつた間に、一方東京に於ては吉澤系の手によつて新派劇が舊劇に比して多少遅れてはゐたが徐々にその勢力を増しつゝあつた、そして此幾年かの新派劇映畫――現代物――の發芽時代に於て恐らくは今私が此處でそれに就て述べることを課せられてゐる明治、大正年間の有名なる文藝的作品の幾つかゞ幾度か映畫化されてゐる事實があるのであらうと思ふけれども、今、私にはその間の消息を詳かにすべき材料と時間とがない。であるから、甚だ無責任の様ではあるが、その間の出來事については他日何人かの御教示をあをぐことゝして、今回の私の記述は明治四十五年、即ち大正元年の十月今日の日本活動寫眞株式會社――創立の當初は日本フイルム商會と云つたのだが、その「フイルム」といふのが「フイになる」といふのと音が似つてゐて縁起がよくないといふので改名したのださうだ――が一千萬圓の資本を擁して立ち、吉澤、横田、Mパテー、福寶堂と當時の日本映畫界を四分して立つてゐた四社を買收合併し、翌大正二年十月、今日も倚ほ徒らにその殘骸を存する向島に日活關東撮影所を作つてその關西撮影所の松之助一派の舊派に對抗して所謂新派劇フイルムの製作を始めた時に筆を起すことにさせていたゞく。

二　向島初期

大正二年ヨリ六年終マデ

向島の日活撮影所には方々から可なり多くの俳優、技師が集つた。然し監督としては小口忠、桝本清、細山喜代松の三氏だけで、しかも後二氏はその後間もなく職を辭し、その後數年の間、つまり向島初期の全盛時代の大半といふもの監督としては實に小口氏一人しか居ず、氏は一人で月四本位づゝの作品を作つたのださうである。これは實に松之助映畫の監督者が十年の長きに渉つて殆んど牧野省三氏一人であつたことと東西相對する我が映畫監督界の記錄だ。而して、その記錄保持者の一人牧野氏が今日、日本の映畫界に於て儼然として傑出せる製作者、殆んど唯一の眞の製作者として内外の信任を得てゐるのにくら

べて、僅の一寸小口忠氏が徒らにその才を抱いて一寒寺院の經營者として眠れるは氏自身の爲めには或ひは賀すべきかも知れないが日本の映畫界の爲めには殘念なことだ。

餘談はさておき、いよ〳〵本題に入つて、此向島撮影所で作つた最初の所謂文藝的作品、有名なる文藝的作品の最初の映畫化は「不如歸」であつた。そして、その役割は浪子が立花貞次郎の（勿論當時は全部女形で女優といふものはなかつたのだ。ついでに書いておくけれど大正六年に至るまでは一台のライトすらなかつたといふことだ）武男が秋月邦武、お豐が土方勝三郎、片岡中將が關根達發、千々岩が藤川三之助といつた樣なもので、なほ當時は例の藤澤淺二郎が顧問格として此の撮影のみではなかつたであらうけれども向島に於ける新派の製作に關與してゐたさうである。

それはさておき、私が何故此處に不如歸に就て、こんな詳しい役割まで擧げてみたかといふことに就て一言しなければなるまい。それは今私が此處に述べつゝある向島初期の映畫の全部が今述べた人々によつてのみ作られたからで、中でも立花、秋月、土方の三人の人氣は素晴らしいもので、その幾年間かの向島映畫は勿論、松之助の舊派に對して日本映畫界に於て新派の人氣を一手に引きうけてゐたといふからである。話が又多少横道に外れるが、此の立花貞二郎といふ人は實に惜しい人であつた。たしか大正九年頃）二十六才を一期として此の世を去つてしまつたのであるが、その人の死ぬ少し前に恐らくは最初の映畫の一派として一所に働いた田中榮三氏の言によれば氏が今日まで知つてゐる映畫俳優中最も優れた天分を有して居た人であるといふことだ。そして、もし氏をして今日まであらしめば獨り松之助のみをして今日の盛名を得せしめはしなかつたであらう、日本の新派劇——現代物——も、もつと大きな、強い人氣を作つてゐたであらうといふことだ。

閑話休題。然し、此の立花等の素晴らしい人氣も、さう始めから出たものではなかつたらしく、向島設立最初の一年位は一千萬圓の資本を擁してゐた日活にもかゝはらず財政上の非常な苦痛があつて、あはや日活破産といふことまであつたのださうだ。而して、此の日活の危機を救つたものは實に大正三年になつて現はれた細山喜代松作品「カチユウシヤ」の一篇だつた。

その年の四月松井須磨子の藝術座が此の狂言を帝劇で演つて評判をとつてゐたことと、劇の中に例の「カチユウシヤ可愛いや……」の小唄のあることと、それにセツテングがその當時としては非常にきれいだつたこととで非常な當りをとつて、此の一本によつて日活は息をふきかえしたのだといふ話だ。

此「カチユウシャ」の成功に乘つてプーシャンの「士官の娘」をつゞいて撮つたが、これは非常に不入りだつたといふことだ。

なほ此の期間に同所で映畫化された所謂文藝的作品には德田秋聲氏の「誘惑」村井弦齋氏の「小松島」がある位だ、が兩者とも興行成績は餘りよくなかつたらしい。

たゞ大正六年になつて日活を離れた小林喜三郎氏の小林商會で井上が作つたのと同時に作つた菊池幽芳氏の「毒草」は淺草でなか／＼當つたらしい。

斯くて此の年、監督として當時新劇界の新人田中榮三氏が入社し、俳優としては山本嘉一、藤野秀夫、東猛夫、衣笠貞之助、島田嘉七が入るに及んで此處に向島第二期の盛時が來つた、と同時に此の記錄の主題である文藝物の映畫化も著るしくその數を增して來ることになつたのである。

三　向島中期

大正六年ヨリ大正九年マデ

田中榮三氏の入社第一回作品は當時萬朝報に連載中の長篇小說「曉」であつたといふから文藝的作品と云へるだらう。つゞいて同氏はトルストイの「生ける屍」を飜案せずそのまゝ映畫化したさうだ。然し、これらのものは興行的に成功しなかつたためか大して問題にされないでしまつた。が、これから後間もなく大正七年四月になつて向島の、否、日本の新派映畫劇製作上に特筆大書すべき映畫が現はれた。それは小口忠氏監督の下に次の如き配役をもつて作られた「金色夜叉」であつた。

お宮　衣笠貞之助。荒尾――山本嘉一。貫一――藤野秀夫。滿枝――東猛夫。

此の「金色夜叉」は同年四月十五日淺草オペラ館に封切されて、その日の淺草の全興行物を一手に喰つてしまひ、特料金十五錢（當時普通興行の入場料八錢であつた）をとつて滿員をつゞけ一日よく二千圓以上の金をあげたのみならず、づつと長くその成績をつゞけたといふことである。

此の「金色夜叉」の成功に味をしめて、これ以後大正十一年の十一月二十五日藤野秀夫以下十三人の主腦俳優が一齊に國際活映に去るまでの間に明治、大正年間の重なる通俗小說は大てい全部映畫化してゐると云つてもいゝ位である。

即ち七年五月に長田幹彥氏の「續金色夜叉」を撮し、つゞいて初期のそれとは全く異つた配役で、「不如歸」を撮り、つゞいて「松風村雨」「生さぬ仲」「蘆葉流し」「渦卷」「片思ひ」「乳姉妹」「己が罪」「潮」「櫻の家」「俠艷錄」等を大部分田中榮三氏監督の下に撮つた。そして皆相當の成績をあげ

た……その中で「[illegible]」の一篇にその當時[illegible]中であつたダグラス・フエアバンクスのセクレタリーと稱する田中欽六氏の手によつてロスアンゼルスに持つてゆかれダグラス・メリー等の前で試寫されたさうだ。が、殘念ながらその映畫の中に現はれる女が皆女形だつたので此輸出計畫は失敗するよりなかつた。

輸出と云へば同じ此の期間内に誰の發議であつたものか、日本の映畫は大いに支那に輸出しなければならないといふ譯で、先づその手始めとして支那の有名な小説を映畫化しやうといふことになり、「西廂記」と「豹子頭林沖」との二篇を撮つた。中でも前者の如きは當時としては可なりの費用をかけ寫眞もなか／\きれいな、いゝものださうだ。

それから此の期間の文藝映畫として、川上眉山の「觀音岩」が映畫化されたといふことは特にこゝに別につけ加えておいてもいゝことではないかと思ふ。

斯くて大正九年に入つて、我が映畫界に一大革命の時期來り、淺野良三氏の大正活映は谷崎潤一郎、栗原トーマスの諸氏を擁して、國活は歸山教正氏を通して當時劇壇に眞面目な運動をつゞけてゐた村田實、靑山杉作一派の踏路社を引き入れ所謂純映畫劇——女優を使ひ、舞臺の演出とは異つた演技による——の創設を試みることになり、つゞいて同年の秋には、それまでキネマ俳[illegible]のなかつたことは[illegible]松竹合名社がわざ／\アメリカより非常な高給をもつて招聘した小谷ヘンリーの手によつて又一段と進んだ映畫劇が製作、發表せらるゝに及んで舊大日活も終に時勢の變遷には打ち勝ち得ず同年の暮もおしつまつて向島に中山歌子、酒井米子等の女優と森英治郎とを入社せしめ所謂純映畫劇の製作を試むるやうになり、こゝに翌々十一年の秋まで形の上でこそ向島に止つてゐた藤野、衣笠等所謂向島中期の諸氏の時代は去つて、向島の末期に入るわけである。

四　向島末期、蒲田初期、大正活映全期

大正十年ヨリ十二年九月マデ

向島の中期までは私の此の記事もたゞ向島にだけ眼をむけてゐればそれでよかつた。勿論、他にも幾つかの小さな會社なり、製作團體なりがあつたにはあつたが、それらは向島にくらべて殆んど問題にする必要がない程度のものであつた、と同時にそれらの小會社なり小製作所で、たとえ幾つかの所謂文藝映畫を作つたとしても、それは向島で作つたものの範圍を出でることはなかつたのだから……。

然し、その向島の中期をすぎて末期に至ると、もう、さうは

ゆかなくなつて來る。我々はそこに松竹キネマ蒲田撮影所の設立を見、大正活映の活動を見出す。そして、少くとも我々は今や、此の二者に對して同時に眼を配てゆかなければならなくなる。

が、然し、さういふ樣に問題となすべき會社の數は增えながら、實を云ふと、此の期の少くとも最初の半年乃至一年といふものは、私が今此處に書いてゐる文藝的作品の映畫化の歴史から云へば非常に無事閑散な時なのだ。と云ふのは丁度此の期の最初期に於て我が國の映畫製作界には、一つの新しい、強い運動として所謂「純映畫劇」なるものの製作といふことが高唱せられ、實行される樣になり、此の所謂「純映畫劇」製作の開拓者達は云ふまでもなく其等の作品のストーリーを他の文藝の作品などに書かれたものからもつて來るなどといふことは怪しからんことだと思つて居たから……。そして彼等は皆、映畫の爲めの映畫的ストーリーを創作した。そしてそれを念頭にしたから。

だからこの期間の初期に於ては向島でも蒲田でも大活でも全く所謂文藝作品の映畫化といふことは企てられなかつた。たゞ僅かな例外として、當時未だ向島に殘つてゐた衣笠、藤野の一派によつて長田秀雄氏の『緑色の夜叉』『白鳥の歌』『露』『呼子鳥』の數篇と、それから、これは一寸異色ある試みとして故鈴木泉三郎氏の『八百屋の娘』――同氏の『ラシャメンの父』といふのもシナリオだけは作つたさうだ――とが映畫化されたことを除けば……。

所が、どういふ譯か此の形勢はさう長くつゞかなかつた。恐らくは見物が、その所謂「純映畫劇」なるものに滿足しなかつた、ついてゆかれなかつたか、とにかく客足を引くことが出來なくなつたのだらう、「お金」がもうけられなくなつたのだらう。そこで一番營利主義の日活が、先づ節を折つて、折角いろ〱の困難を排して「純映畫劇」を作るために一世の人氣女優中山歌子を中心にして作つた向島の所謂第三部といふものによつて、再びこゝにもうそれまでに向島に於てだけでも少くとも二度づゝは繰り返えして作られてゐた『不如歸』や『金色夜叉』をもう一度繰り返えして作り始めることになつたのであつた。

つゞいて松竹の蒲田も、これは向島程に「純映畫劇」を放棄してしまいはしなかつたけれど、とにかく岩田祐吉、諸口十九、勝見庸太郎、川田芳子、栗島澄子、五月信子などで『思ひ妻』『己が罪』『琵琶歌』『生さぬ仲』『金色夜叉』『不如歸』『白蓮紅蓮』『乳姉妹』『想夫憐』『月魄』『惡魔の舞』『永遠の謎』等の所謂「新派劇」を次から次へと撮り出したの

つあつた」つたりにこれら向島で既に二度も三度もやつたものを用たメンバーでやりかへしたといふことにも見られるわけであらう。が、此の時分蒲田で撮つたものの中で一寸別に書きとめておいてもいゝと思はれるものが二三ある。一つは岩田、三村の主演で賀古殘夢の作つた獨歩の『酒中日記』又は岩田、栗島、川田主演で池田義信の作つた久米正雄氏の『赤光』又は諸口、川田主演で賀古殘夢の作つた菊地寛氏の『火華』である。なほ此の外一寸注目すべきは吉屋信子氏の『海の極みまで』井手訶六氏の『新らしき生へ』伊原青々園氏の『自活する女』、舊派として作つた德富氏の『自然と人生』の中の『灰燼』などであらう。

さて、大正活映は三者の中で「映畫劇」に對しての節を一番強く持ちつゞけてゐたので、従つて、その經濟的損失は一番大きく、此の期の後半になつては、既にはやくも氣息えん〳〵たる有様になつてしまつたのである。但し、此の大活で作つた文藝的作品（恐らくそれはこゝで作つた唯一の文藝的作品であるのだが）に特筆大書すべきものがある。それは鏡花氏の『葛飾砂子』であつて、その作品の出來榮えについては私は不幸未だその作品に接するの機を得ないので知ることを得ないが、此の當時にあつて既に鏡花氏の作品の映畫化を思ひ立ち、それを實行したといふことは流石谷崎潤一郎氏を有してゐた大活ならではと思はしめることである。

さて、此の期の記述を終るに當つて、もう一度向島のことを一言述べる必要がある。といふのは、此の期の前半に於て、その不振の極に陥つてゐた向島に於て此の期の終りに近く即ち大正十二年の春から夏にかけて田中榮三氏の一世の傑作として紅葉の『三人妻』が映畫化され、もつて僅かに日活をして日本の映畫界に氣をはかしめたといふ出來事が起つたからで、此の『三人妻』は今日に於てもなほ且つ相當すぐれた映畫として推すことが出來るものである。

以上で私は私の此の記事の大震災前の部分を終る。

五　大震災後

大正十二年ヨリ今日マデ

こゝに至ると、もう歴史ではない、眼の前の事實と云つた方がいゝ位だ。誰でも知つて居ること、あるひは一寸云はれゝばすぐ思ひ出す——少くとも多少とも活動寫眞といふものに注意を拂つてゐる人ならば——ことだ。だから、私もそれに就て今までの様なくど〳〵とした説明記事を書くことはやめにして、成るべく多くを表にものを云はせやうと思ふ。

大正十二年の九月から以後は、殆んどどこの撮影所も仕事はしなかつた。そして、その間に特筆すべき事件としては松竹の蒲田撮影所が場内の破損修理の名の下に京都の下加茂に移されたことと、日活の向島撮影所が、これも同じく破損修理且つ帝都回復を待つと云ふ名の下に京都の大將軍に引きうつつたことである。そして前者はその後一年ならずして再び蒲田に歸つて來るだけの意氣と力とを有してゐたが、後者は三年後の今日になるも、未だ京都の隅にうづくまつて東京はおろか柿根の山までもかへつては來ない。それは恐らく今後も永久にかへつては來ないだらう。そして此處に私をして敢て一言を云はしむるならば、今後いつの日にか今全盛をほこる日活の映畫の上に何か致命的な打撃の來ることありとせば、その原因は此の撮影所が東京にないと云ふことにあるであらうといふことを私は一種の豫言として云つておきたいのである。

つい話が横道に行つてしまつた。

さてその引つ越して行つた松竹加茂では大正十三年中に次の如き所謂文藝的作品を作つてゐる。

『乳姉妹』
『己が罪』
『月蝕』
『彼女の運命』
『冬木心中』　額田六福氏作

それから京都に引き移つた日活では

『彼女の運命』
『清作の妻』　吉田弦二郎氏作
『曉鐘』　小山内薫氏原作脚本
『冷火』　久米正雄氏作
『金色夜叉』
『たけくらべ』　一葉女史作
『本牧夜話』

それから早くも蒲田にかへつた連中で

『嬰兒殺し』　山本有三氏作脚本
『青燕み』　廣津柳浪氏作
『無花果』　中村吉藏氏作
『茶を作る家』　松居松翁氏作

以上に見ても、此の時に至つて、それまでは殆んど全く所謂通俗小說にのみ限られてゐた映畫化作品の對照が幾分とも『純文藝作品』の方にも向いて來たといふことが觀取し得るであらう。なほその例として此の期間、即ち大正十三年中に帝國キネマの手によつて菊池寛氏原作の脚本『時勢は移る』が映畫化せ

られたことをもあげることが出來る。

ついで大正十四年に入ると

松竹蒲田では

『淚の上』　長田幹彦氏作

×『大地は微笑む』

『女難』　國木田獨歩氏作

『坂崎出羽守』　山本有三氏原作脚本

京都日活では

×『大地は微笑む』

東亞キネマでは

『恩讐の彼方へ』　菊池寛氏作

『お艶殺し』　谷崎潤一郎氏作

×『大地は微笑む』

帝キネでは

『星は亂れ飛ぶ』　沖野岩三郎氏作

×『大地は微笑む』

妻三郎プロダクションでは

『異人娘と武士』　今東光氏作

聯合藝術家協會では

[illegible]作つてゐる。

有の中、『大地は微笑む』といふのは大阪朝日新聞が五千圓の賞金をかけて募つた懸賞映畫脚本の第一等に當選したもので文藝的作品ではないが、特にこゝにあげておいたのには特別な理由があるのである。

といふのは、此の『大地は微笑む』といふ一篇の映畫は或る意味で日本の映畫製作者の方針に一つのエポックを作つたと云つてもいゝ位の影響を與へたものだからである。

即ち此の映畫劇が東西の兩朝日新聞紙上に現はれるや、朝日新聞社は非常に巧妙なかけひきをもつて此のシナリオを臺本として映畫を作ることを現在の日本の四大會社たる日活、松竹、帝キネ、東亞に承諾させてしまつたのであつた。

四社は承諾後になつて一寸一パイ喰はされたなとは思つたが今更どうすることも出來ないので、半ばしぶ／＼ながらそれを作つて市場に出した。所がこれが大變な人氣をあほつて毎日毎日どこの會社のどの小屋も『大地は微笑む』の出てゐる所は大入滿員といふことになつた。

勿論それまでにだつてこれに似た樣な例はないことはなかつたのだらう。けれども新聞に出たものを映畫化することの効り

がこれ程明つきりとこれ程強く、これ程大きく現はれたのは此の時が始めてだつたのである。

　そこで或る一つの手で勝つと次にその手で負けるまでその手しか用ひないといふことに於て回向院の角力取りとよく似てゐる所の今日の日本の映畫製作者達は此の「大地」以後所謂大新聞に連載されたものさへ作つてゐれば間違ひない樣に心得て朝日、日々等の朝刊夕刊のあらゆる讀物はひつぱり合ふ樣にして皆これを映畫化するといふ樣な有樣になつて來たのである。

　又一方新聞社の方としても「大地は微笑む」の一件では朝日新聞は非常ないゝ宣傳になつたことがこれ又實に明つきりと分つたので、今日では新聞の方からも自分の所に載つてゐる小說なり何なりをなるたけ方々の會社に映畫化させやう、させやうと努力する樣になつて來、こゝに益々世はあげて新聞小說の映畫化に熱するやうになつて來つゝあるといふわけである。と云つて、私は決して此の傾向を非難するとか、よくないことだとか云ふのでは毛頭ない。映畫といふものが一般化されてゆくためには、これも大いに利用すべき一つの手段でもあるし、方便でもあると思つてゐる。但し、のぞましいことには、かうなつた上は一そのこと新聞社でも今後讀んで面白い形式のシナリオをも時々は紙上に出すやうにして、日本の映畫監督に明けても暮れても『映畫にはならない』樣な新聞小說を如何にして映畫にするかについて苦勞するときを少しづゝでも減らしてやつてもらひたいといふこと位のものだ。

　さて、大正十五年、即ち今年に入つてからの分では今までの所日活と松竹と聯合藝術家協會とで撮つた菊池寛氏の『第二の接吻』と、日活と聯合藝術協會とで撮つた三上於菟吉氏の『日輪』位なものだ。なほこの外に目下日活で製作中のものに菊池寛氏の『陸の人魚』松竹で製作中に同氏の『受難華』がある。

挿畫に就いての漫談

水島爾保布

溪齋英泉、一勇齋國芳、香蝶樓國貞——初め五渡亭、後年豊國を襲名し二代目と唱ふ。尤も彼より先に豊國未亡人に取り入つて二代目豊國と稱した男があるから、事實の長系統の順序からいへば三代目に當るかも知れない。——といつた一流の大家連が競つて活躍した時代、錦繪とさうしてくさ草紙全盛時代の名殘はドンデンがへしに世が改つても相當に續いた。勿論前期の目覺ましさ絢爛さ濃艶さは殆ど見ようにも見られない。いはゞ亡魂の尾がボケ込んだやうなものである。が、でも舊習一新を標榜してお正月まで廢止しようとしてかゝつた、お先まつくらなハイカラ政府、江戸をカツ散らかして東京とした田舍ツペイのガサツ者の手の下で、よくもペシヤンコサランパンにされて了はなかつたものである。——この田舍ツペイの傳統が今日のアメリカニズムに續く。生活改善などと稱してロクでもない事ばかりたくらんでゐる。

閑話休題、近頃活字本になつて再び浮世の風に當られた假名垣魯文の「高橋阿傳夜叉譚」なんていふものは維新後に出たくさ草紙名殘の一つ、その外の作者としては、柳下亭種員、笠亭仙果、何れも當時の戲作者の純粹、英語は出來なかつたらうが、少くとも日本語のジズイエの發音はそんじよそこらの手合よりは、たしかだつたらしい。その頃の畫工の名は一々數えてもゐないが、羽振りのよかつたのは月岡芳年に落合芳幾、どつちも國芳門下だ。國貞の後には大した人もない。强ひて數へれば大阪朝日の創刊當時に筆を執つてゐた三谷貞廣ぐらゐなものだらう。それから枕草紙ばかり書いてゐた國丸といふ男もゐた。

チヨン髷がザン切りに改り今迄は往き來ることが角袖ばかりだつた中に筒ツポの洋服が交る。髭を生やして高帽子鳴り物入りの靴なんて先生がのさばり出した。街道の立場には駕籠の代りに人力車がならぶ。銀座に煉瓦が燒けてオムニバスなんて乘合馬車が走り出した。行燈がランプに更り、辻番が巡査の定と更

る。女房の衣服はいつか廢れて「可愛さうだよ內腑でみもち」なんて唄の文句のやり場がなくなつた。風物萬般著しく日新らしくばかりなつて行く。坂東彥三郎なんか迄が「こいつは宗旨をかへざアなるめえ」とばかり、率先してザン切頭で舞台に立つといつた具合、とにかくに、どこもかしこも「開化」の風が吹きまはる。

しかもかうなる前提には明治維新の大變革がある。江戶を中心にいへば大地が生血を吹き出したやうな騷動だ。いよいよ御一新の幕が切つて落される迄の殺伐さ。幕が落ちても直に一陽來復つてわけには行かない。歷史の頁と頁の移り目にはどれ程慘憺たる事實、罪惡や災害が縱橫してゐたか判らぬ。關東大震災朝鮮人虐殺どころぢやない。自然の威力なんて甘いもんだ。これが當然人心にも世相にも精神にも思想にも影響する。何も時よ時節である。讀みものの內容にも自然開化とそれからもう一つ荒廢した人氣は推し及ぶ。形はくさ草紙でも趣向筋立て、活躍する人物それぞれの性格や好みやそれに絡まる事件の段取りや背景等、すべてに時代の影はつき纏ふ。自覺無自覺の間に自らその支配を受けてゐるのはどうも止むを得ない。

しかも困つた事にはこの間尙少からぬ矛盾が挾まるんだから面白くもあればやゝこしくもある。世の中は御一新でもさう何もかにもが御一新ではない。殊に戲作者や諸工手合はその全部が江戶の生き殘り時代をまたいで來てゐる。少くとも江戶の市井人として市井の文明人として育つて來てゐる。惡くいへば古い袋だ。あたまはザン散りでもひやかしやまゝよなんかと、口では吞氣にいふが、そのひやかす先の花の郭が薩摩や長崎の田舍ツペイ共に蹂躪され、素性も不確な野暮でイケゾンザイでどこもかしこも通り拔け無用といふやうな國訛りが、艶にやさしいありんす國の國語を蹂躪してゐるのを見たり聞いたりすると甚だしく愉快ではない。人は武士何故傾城にいやがられだの、何が何やらで淺黃裏なんて往年の嘲笑が殆どその價値を失はんとしてゐるのを現在に目擊する段になると、先生大分不安だ。不安ばかりではなく壓迫迄感じて來る。江戶の一邊境吉原に於いて既に然り。他事百般推さずとも知れてゐる。勢ひ反抗して見たくもなるがアケスケにいふ度胸がない。神經衰弱內訌の形だ。とはいへまた一面牛肉つてものも食つて見れば中々うまく、西洋眼鏡も覗いて見ればとても美しい。ランプの明るさ瓦斯燈になると愈々すばらしい。文明開化が齎すそれこれにはいつも非常の驚異が附帶する。しかも新政府のプロパカンダ中々に手練があると來てゐる。白眼側視さうさうひがんでばかりゐては到底生きてはゐられないし、惡くぐれるとお目玉を食ふ。このと

[illegible]

お人の話も皆ヒテンナリンナン取りとめもない。さうしておく

なる前一時には、傍惶たる恐怖時代があり殺伐な時代があつたんだから、このコグラカリが解けたところで決して善良で醇美で高尚な人情風俗にかへりやう筈はない。

前にあげた發文の高橋お傳にせよ、又澤村田之助にせよ、前期のくさ草紙作者が好んで取りあつかつた超自然的な趣向は殆ど絶無といつてもいゝ。同じく生世話もの人情の葛藤乃至は性の紛糾を編述したものであつても、化政以降天保度へかけての作物には輕さと和らかさが緯となり經となりして文章の絢になつてゐるが、高橋お傳や霜夜鐘十字辻占なんてものになると、陰慘でさうしていやにリアールな傾向を多分に帶びて來てゐる。最早志度六魔度六の妙々車、兒雷也豪傑譚に於けるが如き大時代なさうして愉快な怪力亂神思想は見られない。又田舍源氏や梅暦なんかで見るやうな、模樣化された濡れ場振り事式媚態象徴味たつぷりな性的魅惑——といつたものはテンから問題にはされてゐないのである。

この傾向は挿畫の上にはより一層著しく現はれてゐる。たとへば芳年のかいた霜夜鐘十字辻占の挿畫の如き、按摩を描き金比羅參りを描くにしろ、往年の浮世畫師達が非常の興味をもつ

[illegible]

[illegible]ではなく、[illegible]

形な線と形のそれだ。だんまりの大百日を描くに似た荒唐の細部はそれに似て非なるザン散り頭の代よにどれ程辨説をしたか、なんて事をおもふと全く歴史は繰り返へされても必ずしももとと同一でない事實を物語つてゐるかの觀がある。提灯を[illegible]に構へ角燈をかゝげて佇む巡査の帽子に服にズボンに、すべてに、奇才芳年が一種のエキゾチックに惱まされて微な苦笑ひを洩らしてゐる樣が見えるやうだ。

芳年、芳幾の合作になる「英名二十八秀句」といふ血だらけの錦繪がある。全二十八枚を一組としてそのどれもが凄慘極る人殺しの場面だ。直助權兵衛が主人の死骸の顏の皮を剝がしてゐるところだの、尾花屋美代吉が屋根船のみよしで乳の間から脊中へ刀を突き徹されてのけぞつてゐるところだの、——前がはだけて露出した内腿に糸のやうな血が筋を引いてゐる。——その外矢を負ひ石にうたれ白裝束を血に染めて死にもの狂ひになつてゐる出羽寺馬場の遠藤治右衛門だの、太り肉の美女を腰卷一つにして、後ろ手つこがんぢがらめに縛り天井の梁へ逆に釣るして刃逆手になぶり斬りにしてゐる何とかいふ博徒の兇惡な姿だの、そんなものばかり題材にしてゐる。その何れにも眞

赤な朱紅の血がえどつてある。しかもその赤さあくどさを一層あくどく生々しくさせよう爲めに上から松脂が塗つてある。夜のあかりの下などで展げると、そいつに火光が映じて一種の腥氣をさへ浮べる。かういふものが板木に彫られさうして賣り出され町々の繪草紙屋の店頭に揭げられたのであるから當時一般の人心のどんなだつたかは略推測される。

世の傾向も勿論變態ではあつたに違ひないが、芳年つて人は特に著しく變態であつたやうである。氣違ひになつて死んだといふ事であるが、殘された多くの作品を見れば偶然ではないやうに思はれる。いはゞ時代の一面を代表してゐた人ともいへやう。尙又時代が生んだ畸形兒だともいへやう。もう少しつけ足せば、かうした殺傷事に對する殘虐的な快感を求める心理は既に江戸の末期にかなり旺盛だつた。殊に芝居の殺し場などでは加害者被害者ともにそれぞれに工夫して隨分と微に入り細を極めたものがある。勿論かうした要求の大部分は性的嗜慾が加はつてゐるに相違ない。既に國芳などの口繪や繪本にはこの傾向に影響されたものが大分ある。芳年はつまりその遺傳だともいへやうし、又芳年によつて江戸殘虐劇に與へたデカダン藝術の心理が遺憾なく形化されたといつてもさのみ過言であるまい。とにかくに何かといへば血みどろの畫を書いたんだ。日日新聞の

附錄、繪入朝野の附錄、それ等の表紙はいつも芳年によつて淋漓たる鮮血で色どられるのが常例のやうになつてゐた。芳年の肉筆ものに特に性的畫圖にはそれこそ變態の極度を見せたとても慘虐なものがある。

くさ草紙の挿畫も彫刻も、もと一人の手になつたものは殆ど無いといつてよい。「國芳ゑがく」「國貞ゑがく」の名題は打つても、實は分業である。表紙の極彩色もの及び卷頭一二度摺り三度摺りの大見出しなんかは大師匠お手を下して念入りに認めもしたらうが、——それ等の構圖は何れも作者の注文乃至下畫に準據したものと見てよい。早い話が作者が舞台監督畫工は役者といつたわけ合ひになる。だから、時にこの舞台監督と役者とが衝突した。歌麿と一九と衝突をし、馬琴と北齋と仲違ひをし、三馬と英泉とがいがみ合つたなんかは、つまりそれだ。俺の畫で賣れるんだ、いや俺の作が受けたんだといふところがいつも爭ひの焦點で、何れも人氣が立つて大當り大當りの場合だが、尙これの逆に大いに不人氣で興行殊の外面白くなくなつた際などにも、お互の責任のなすり合ひは隨分行はれた事だらう。殊に版下畫々工の通性として仲間相互に中傷陷りかなり盛だつたさうだから、無論これやこれが原因になつたに違ひない。

で、人物の顔だけを師匠がかいて、着物の模様、身の廻りの小道具、背景、等は何れも弟子の手に廻る。定規描き専門といふのがある。着つけの模様柄がらばかり受持つたのがある。對遠見の書き割り、荒磯、山路、岩組みの趣向なんかにかけては師匠も三舍を避けるやうなのがゐた。これ等の手合になると丁度渡り職人といつた風で、一昨年迄は茅場町にゐたが、當時は龜井戸の方で手傳をしてゐる。あすこも近頃はハンチクなコミ仕事ばかりでカラツキシよ。なんて渡し場でひつこり舊友と出合つてボヤいてゐるのなんかもある。水鬢につつこみ、月代の上へペツタリ濡手拭をおいて朝つぱらからくはへ楊子、藍みじんの浴衣に吉原つなぎ三尺、そいつを尻つこけに結んだ姿は、北齋の藝術には這入るかも知れないが、生地そのまゝぢやアどう見たつて「藝術家」ぢやアない。こんなのが版元へすり込んでオモチヤ繪なんかの注文にありつく。當時だつて版下畫工中々樂ぢやなかつた。

彫りの方も同様、頭彫りに胴彫り、定規方に模様方人々それぞれに小刀と鑿の使ひ分けをやつてゐる。くさ草紙全盛時代には頭及び主要部分丈は親方が手がけたが、あとの雜端なところは凡て下職に廻した。字彫は大てい器用な御家人が内職にやつたものだといふ話である。錦繪でもすみから隅迄一人の手になつたものはなかつた。若し大家が[illegible]で仕上げたものを求めるといつたら、それは[illegible]胴彫り等くらゐなもの、神社や寺等で買つてゐるあれだ。あれ丈は確かに取つかゝる前に[illegible]から潔齋して酒だち女だち本當に六根清淨の身で作り上げたといふ話。

挿畫の分業は明治になつてからも、新聞に雜誌に單行本に教科書に、連綿として行はれた。一例をいへば當時の新聞の連載小說の大部分は佳人才子を以て主人公とし、さうしてその主人公は百難萬難を闖して遂に結婚するのが紋切形である。結末が紋切形であるやうにその大團圓を飾る挿畫も亦新郎新婦の晴れやかに相對してゐる場面を以てするのが紋切形になつてゐた。或は斜めに配置された二枚の扇紙の中に各半身を現はし下に銚子盃島台等を大きく表はしてあつたり、或は男が座れば女が立ち身、女が下にゐれば男が立つてゐるといつた要領で、何れにせよお芽出度い限りをかいたものだ。その男女及び結婚必需品の背後にはいつの場合も細い砂子模様を現はしてそれで金銀の燦爛たる有様を想像させる、その「砂子かき」に迄當時は専門家があり彫り手にも同様専門があつたのである。

當時新聞雜誌の挿畫製版は木版の一手よりなかつた。畫家へ描いた版下を櫻の板へ貼りつけ小刀で彫り鑿でさらふ。或る意

味でに挿畫の死活を関つてゐるともいへる。だから畫工と彫工とは互にコツとコツを呑み込む必要があり、暗默の裡に共同の作業をしてゐるやうなものでもある。俗畫工からいはせれば木版下を書くといふのは畢竟は慣れといふやうなものの、その間一種特殊の技術に俟たねばならなかつたことは云ふ迄もない。畫さへかければ誰にも出來るといふわけのものぢやない。にも係らず、版下かきといへば同じ畫工のうちでもひどく安手に取り扱はれた。

版下畫工（主に新聞小說の挿畫に携る）の間の符牒にカブるといふことをいふ。歌舞伎がかるといふ事がつゞまつたものらしい。人物の姿態形狀動作等に充分な誇張を加へ大仰、つまり芝居式に形附切らした圖をいつたもので、或る場合には否定的の意味にもなり或る場合には必要條件にもされた。要するにカブるとカブらざるとの間に挿畫の價値が置かれたと見ればよい。西洋くさい畫に於けるが如く徹頭徹尾カブつてゐるものと、寫眞のやうに全然寫實に即したものとの間に、然るべき獨立境地を見つけ出さうつてわけにも取れる。いはゞ役者や人形がナハリに乘つて動く場合見たいなもので、斷つてはいけずさうかといつて單純な動作では尙いけないといつた意味合にもならう。

からいつた傾向は明治中期の挿畫、水野年方、小林永濯、富岡永洗、稻野年恒、武內桂舟、太田年英、尾形月耕、梶田半古なんて人々の挿畫を見ると殊に明かに判る。

江戸名物の錦繪は日清戰爭當時の戰爭畫を一さかりに、以後漸くに凋落して了つた。僅に豐原國周の似顏繪、橋本周延の御殿女中の三枚續き、それに尾形月耕の風俗畫、小林清親の滑稽ものなどが時たまそこらの繪草紙店の軒頭に飾へる位ゐで、時代の眼は當時切に濫發された色ざしの石版畫、——美人彈琴の圖とか美人沐浴の圖とかいふ風俗畫や、新羅三郎足柄山に秘曲を授けるところだの楠公父子櫻井の別れのところなんて歴史畫の安價で且つ派手なものの方に好感を持つて來た。それもこれも時代だから致し方はない。といふ間にもこの石版畫も漸次に飽きられていくばくもなく跡を絕ち、今度は繪葉書が非常な勢ひで流行り出した。それも日露戰爭の前後數年にして一時衰退しさうして今日のこの狀態だ。今後何が勃興するかは判らぬが、いかに當今「江戸もの」が流行つても、もう錦繪の再興はむづかしからう。當時の繪草紙屋はすべて本屋となり雜誌屋となつた。

年方、永洗、桂舟、なんて人々が中心になつてゐた明治三十年前後の挿畫界も今から思へばかなりな潑剌さはあつたやうだ。

[illegible]まづこれにしても初めて自然に、顔の表情手足の動き等も、つとめて無理を見せまいといふところにそれ〳〵の苦心と味噌がある。つまり新派役者のねらひ所心意氣が同樣挿畫々工にもあつたわけだ。同じ今樣ザン切り頭をかいても芳年芳幾當時の挿畫には餘り文明開化のにほひもしてゐない。いはゞ市川何某の舞臺と同じやうに、かつらつけで眼ばり迄這入つてゐる。世話と時代を七三で極らうといふ寸法だつたが、それが漸く地頭素顔で板について來た勘定だ。同時に木版の技術も非常に器用になり頓に氣が利いて來た。昔はあんまり使はなかつた筆のかすれ目を見せたサビといふものが、無闇と濫用されそこに彫工の巧拙が評價されたり何かした。これなども當時の挿畫に於ける特色の一つと見てよい。

挿畫畫工の評判は重にそのかくところの美人の容姿に關係してゐた。富岡永洗の美人といへば當時に於ける流行の一型式をなしたかの觀さへあつた。ぽつてりと和くあだつぽくて尙且滴るばかりの愛嬌がある。もとより深窓育ちの奥床しさとか聰明さや淸新さは缺くが、何しろ艶麗たぐひなく性的魅惑が特に濃厚なところがひどく人氣に投じたらしい。この畫の美人によつ

[illegible]つたり新聞社であつたりしたといふ話だ。[illegible]中々痛快な程度である。尤もさうならなくとも[illegible]は今でも大分ある。

この永洗は都新聞に日々健筆を振つてゐた。それと相對してやまと新聞には水野年方がゐた。兩者共に人氣は高い。本當に紙價を高からしめたといふ事だ。そのやまと新聞が年方の挿畫によつて發行停止を食つた。どんな畫だつたかは見ないから知らないが、何でも男女の嬌態を蚊帳の内部に描いたもので當時「こんな畫を出してまア……」と見るものの誰もが眼を見張つたといふ事であるから、隨分と如何はしいものであつたに違ひない。こゝ迄行つてしまへば最早お上の手にかゝるより致し方はないが、さうならぬ迄にもかなりの際どさと危さとは、當時の新聞の挿畫には屢々見受けたものださうだ。實際に見てゐるんでないからそれこれと例はあげかねるが、大阪朝日新聞の創刊當時のものなんかを展げると思ひ半ばに過ぎるものが餘りに多いのに驚く。その著るしいのになると、藝妓が車からころげ落ちたなんて三面記事の中に迄殊更に下がゝつた畫を入れたのである。

武內桂舟も當時素晴らしい人氣畫家の一人だつた。輕快でさうしておつとりとした筆の意氣、殊に清婉で上品な美人が受けたものらしい。博文館の雜誌の賣れ高の大部分は桂舟の挿畫に負ふものとさへ評判された。事實とすれば今日の大橋家の財產の半分は武內桂舟の面相の先から生れたものと見てもよい。從つてそれを春秋流にいへば桂舟出でずんば共同印刷の爭議もなかつたわけだ。かうなると文藝倶樂部の口繪のひよろ長い女の姿にも相當深い意味がある。そのふくよかな片頰に靡く後れ毛の一本だつてあだやおろそかには見逃せなくなる。寺崎廣業なんかも版畫についてこの桂舟に教を乞ふた事がある。

梶田半古の名が女學生間に喧傳されたのは前三人から見ると少し遲れる。何でも讀賣新聞に連載された小說「魔風戀風」に挿畫をかいてからだと記憶する。小說としての「魔風戀風」も凄まじく受けたが半古の挿畫の評判も亦とても素晴らしかつた。作の內容が時代の風氣に投じた事から非常な歡迎を受け、惹いては挿畫に迄及ぼしたものともいへようし、又清新で明快で且一種甘いセンチメンタルの横溢した點から筆の振り、特に新派和歌流行時代の青年男女の特殊の感情を表はすのに殊更に興味と好感をもつてゐたらしい畫工の態度が、ひどく當時の一般文化人に喜ばれ、やがては小說に食ひつく動機ともなつたともいへやう。とにかくにこの間頗る微妙な消息があつて兩者の間をつないでゐると見ればよい。挿畫は小說に對する伴奏見たいなものだなんて事もいふが、伴奏にもいろいろある。クロイツチエル・ソナタなんかになるとどつちが伴奏でどつち主奏だか一寸判らぬ。この「魔風戀風」に於ける場合も同様だ。近頃では「大菩薩峠」といふいゝ例もある。

この「魔風戀風」の挿畫によつて女子大學をはじめ當時の女學生の服裝や髮の振りに一つの變化と流行を來したといふ事も聞いた。挿畫が時世粧に變化を與へ流行の基調となつたのは昔はとにかく、明治以後今日迄はこの半古と竹久夢二があるばかりだ。風俗史の上にも繪畫史の上にもこれ丈は特筆すべき事項だ。

この半古先生「魔風戀風」の評判に乘つかつて今度は改良服なんてものを案出した。筒つぽの袖口をリボンで結んだり何かしたとてもハンチクなものだつたが、それでもまるまる顧られなかつたわけではなく、ものずきな女學生の中には派手な筒つぽの改良服で押し歩いたり戀をしたり寫眞を撮つたりしたものが無いでもなかつた。現に私の女房の友達の中にもこの梶田式改良服でレンズの前に立つた度胸のいゝのが二三人ある。

[illegible]

ドじ的だつたかに思ふ。[illegible]によつて[illegible]銅版式の細かさと鋭さとをより一層纎細に巧緻にさうしてより一層洗練した筆致で見せたともいつてもよからう。[illegible]が[illegible]した寫眞もその評判を大分に助けてはゐやうが、とにかくに當時の挿畫界には固抜けて目新らしい行き方でもあつた。尤もその畫の大部分はサロンのカタログやスクジオ或はドイッチエ・クンストなどの挿畫をそつくりその儘模寫したものに過ぎなかつたが、これ以來、雜誌のカットや挿畫が急に洋化され且次第に創作的になつて來たのも事實だ。今迄コマ畫とか見出し畫とかいつて畫家側も編輯側も餘り注意を拂つてゐなかつたものに相當の權威が加はつて來たのも亦この成美以後に屬する。いはば挿畫界に一紀元が劃された次第で、成美の功勞も決して沒するわけには行かない。

この種の創作挿畫々工として成美の後には小杉未醒が評判された。特に日露戰爭當時の近事畫報に從軍先から寄せてゐた畫信(?)の如きは實に放膽未醒先生を今日の地位にまで築き上る第一梯梯をなしたものだと云つてもよからう。又その畫からは今日漫畫といつてゐるものの前派と見れば見られない事もない。今の漫畫といふ名目も、古い北齋漫畫や狂齋漫畫のそれを

[illegible]にも[illegible]

つゞいては竹久夢二がゐた。美人のある型に對して「夢二式」といふ言葉が代用されたのは誰の記憶にもまざまざしいものがあるに違ひない。デパ趣キンプラなんかと一しよに明治の末から大正の初めにかゝる流行語として辭書に編入しておく必要がある。

この夢二式美人が我等の都會に非常の注意と感興とを惹いてゐた當時、ニューヨルクではチヤッチナア式美人といふのが大そうな評判になつてゐたそうだ。これはパリ歸りのチヤッチナアといふ肖像畫家によつて描き出された輕快瀟洒な、たとへば薄い黑絹の靴下を透いてすんなりとした脚の肌色がにほひ出してゐるといつた風な細さと美しさによつて出來上つてゐる——先まアとんぼの羽根のやうなすつきりとした明るい細の美人が大評判になつたのである。日本でも時々このチヤッチナアの畫の三色版をレターペーパーの表紙なんかにしてあるのを見かける。レターペーパーの表紙とは誠に思ひつきだ。さのみ特色のある畫家、さう大した畫家とも思へないが、とにかくにその明るさと小意氣な點が、ニューヨルクの社交界特に婦人連に大變に受けたのである。以來そのチヤッチナア型の美人といふのが

無闇と案出した。劇場の廊下に地下鐵道の階段に矢鱈無性に人々の視線をそゝり立てた。――といふ話、この話と我が夢二式の美人とを對照して考へる。

思ふに夢二式乃至チヤツチナア式共に畫家によつて作られた一つの流行であると共に、畫家によつて新らしく發見された或は創造された婦人の美でなければならない。つまり、世の多くの人々は夢二乃至チヤツチナアによつて新らしい女性美の感じ方を教へられたわけで、新らしい美を見るべく新らしい眼を開かれた事にも當る。この事は昔の歌麿式美人豐國風の美人といふ言葉に對しても同樣の意味を持つ。何も歌麿豐國が各自の筆で特殊の形容の美人を描いたが爲めに急に世の中に歌麿や豐國の畫風を模ねる女が殖えたんでも何でもない。歌麿が出でず豐國が出でず、又夢二チヤツチナアが生れなくとも、歌麿の畫いたやうな瓜實顏の眼の細い女は澤山居たらうし、又夢二がかいたやうな眼の大きな女はバセドウ氏病の患者でなくつたつて隨分居たに違ひない。只世人はそれ等の婦人に對してその婦人が持つ美しさに對して美くしく感ずる藝術的能力を缺いてゐた丈の話である。時代時代で美人の容姿が變るといふのだつて、必ずしも美人そのものに流行りすたりがあるわけでなく、人間の顏や形がさう矢鱈に丸くなつたり長くなつたりするいはれもない。いつも何等かの目標があつてそれに準據して好尚が推移する迄だ。人氣役者の舞台顏が標準になる場合もあれば活動俳優のフイルム上の或る姿態が多くの感覺を支配する場合もある。夢二の畫が多くの夢二式美人を案出させたのもチヤツチナアの水彩畫の人氣が忽ちに數多のチヤツチナア式美人を世に送り出したのも道理は略同樣である。藝術の眩惑から來た記憶と感覺のなすわざだといへる。勿論さういふ畫を生み藝術を作り出す事にはいつも時代の意識や感覺が因動をなしてゐるに相違ない。理屈はとにかくに挿畫を民衆藝術として論ずる場合、これなどは民衆に對してかなりな功績の一つと數へなければなるまい。要するに女性に對して新らしい美しさと新らしい時代が作り出されたといふ事は少くとも吾人の感覺世界がより豐富になつた意味にも當るからである。

挿畫が今日のやうに寫眞銅版になり凸鉛版になりしてからまだ十年とは經つてゐない。今迄百十數年の永の年月持ちつ持たれつで同じ歩みをつゞけて來た木版を科學萬能主義時間主義の犠牲にして了つたのは殊に遺憾千萬な事であると同時に誇るべく崇敬すべき技術の代りにチンクや蝋版を以てするなんかは餘りに面白からぬ事實だといはなければならない。かうなる變遷

のやうに正写に移しつゝ畫工に…ことを不幸にさせたといふ事も
考へる必要がある。

木版が閑暇になり平凡版に迫る。當然版下の様式も今迄とは別の様式のものに迫らねばならない道理だ。それに要する材料も製作の要領も亦自ら違つたものになる。自然畫工も新陳代謝といつた形だ。で又こゝで挿畫の紀元が一劃された勘定になる。

一體挿畫をかく者の生命は若さと色氣にある。これは浮世繪師の昔から永い間の條件、重要な問題になつてゐた。その上もう一つ附け足せばセンチメンタルである事、以上何れも通俗的であらうと乃至は純藝術的意味でゝあらうとこれは問はないが、畫を見る者の凡てが畫工でなく藝術家でない限り、少くとも一般民衆を目安にする本來の性質上、そのエロチツクである事乃至センチメンタルである事が、最近であればある程大向ふの受けはよい道理だ。少くとも書く者自身が書くところの題材に興味を持たなくなつたり、或は同情も好感も持たなくなつたりしてはもう脈が上つたも同様だ。たとへば若い女の嬌艶な姿のそれよりも白髪の老爺に特殊の美觀を感ずるやうになつては挿畫としての目的は甚だしく範圍の狹いものになつて了ふ。玆に於いて挿畫々工にも野球の選手のやうに停年があり時期があ

さるにたつ…
現…の挿畫は平凡に…になつた

くさ草紙時代の纖密さと濃艶さ、人物の着物の端から模様は勿論什器道具立て小道具の一切、隅から隅までたんねんにかき現はしてある。さうしてその人物の動作表情配置にも一場面一場面劇的要素を多分に取り入れてある。といつた風のものがすつかり廢れて、次第にさらりとしたもの明るいもの、瀟洒なもの輕淡なものが受けるやうになつた。筆觸の輕快さが問題になつたり、意匠の洒脫が喝采されたりした。彫りにはサビが切りに用ゐられる。强ひていへばデツサンとスケツチの持つ味ひと技巧が挿畫の價値ともなり重要の使命ともなつて來たのである。木版が寫眞版になつてもかうした挿畫意識にさしたる變化は見られなかつたやうだ。畫工が變りかき現される人物の感情容姿それ〴〵に變つた特色は見えもしたし、又畫風の様式に大なり少なりの相違こそあれ、歴史的に問題とするやうな問題は無いといつても差支へはない。

凸版が取り入れられてから以後の挿畫は全く面目一新の形だ。毛筆がペンと代り雁皮海栗が製圖用紙のケントに更へられ

た。凸版そのものの性質上畫風も筆致も自然纖細に繊密になつた。神經過敏な時代相はどうにも仕方がないが、構圖の樣式這其立て題材の取扱ひ方、勿論形の上では同一でないが、その精神や意識はくさ草紙時代の浮世畫師の心意氣と大分に共通して來た。中に極端なのは因襲を向ふ面にかなり臭くカブつたものもないではない。それから何もう一つの傾向としては滑稽なほど性的な所だ。要するにその人の本質的問題だから兎や角はいひ惡いが、藝術的にも精神的にも今少し訓練するところがあつてもよささうだ。

木村莊八、河野通勢、石井鶴三この三人が轡をそろへて乘り込んで來たのは近頃での目覺しさだ。釣られてあちこちにいゝ氣な模倣家が大分現はれて來た。挿畫界丈もやこゝらで一轉がり轉がるのかも知れない。

大衆ものにくさ草紙讀み本の息が通つて來てゐるやうにその挿畫にも當年の浮世畫師の意識がかなり働いてゐるかの有樣だ。共に時代のふるひに漉された時代の藝術精神を通過してゐる事は云ふ迄もない。そして何注意を要するのは、浮世畫師以降今日迄、殺挿畫々工の間に既に重要視されてゐた觀念、特に文をかく上に就いてもつた通俗的な美意識だ。今迄は殊に影響的に美しく描き現はす事を問題にしさうしてそれを實感的に乃至は性的意識の上に批判してゐたのが、どうやら別の取扱ひを受けてゐる。畫面全體が持つアトモスヒエル乃至微妙な諧調的情緒によつて解決されやうとしてゐるこれだ。くさ草紙式の妖艷さ乃至凄美さ、或は耽美的なあるものは常に其の精神として多分に働いてはゐるが、その精神には必ず陶酔が伴はれてゐる。從つて今迄の挿繪の要領から見ると大分に遠い。高級なものだともいへやう。とはいへ、挿畫といふものが全部これに倣つて「大菩薩峠」とそれから「窗上に立つ影」になつて了つては除りに色氣がなさ過ぎる。前にもいふ通り、挿畫といふものは藝術家丈が見るわけのものぢやないんだから。何も同業諸作折角のいゝ腕を殊更不器用にするにも及ぶまい。

偖、當今の挿畫々工の各人に就いて何くれと思ふところを書き立てると具合よく注文された丈の紙數には違しやうかしばらくそれは差し控えて最後に少々自分のことをいはせて頂かう。

今でも時折聞く、變だが、以前はよく私の畫とビアズレとが比較された。自分では些も似てはゐないつもりだつたにも拘らず、人は何かと言へばこのビアズレを引合ひに兎や角いつてくれる。少し縮し探しの形だ。その抑も最初は當[illegible]小說雜誌に[illegible]掲したペン畫の人物について、[illegible]にビアズレ[illegible]

らた[illegible]ところがお[illegible]の畫など[illegible]なんて[illegible]畫でお無裝飾だかも判らないへたくてあるから吾にお[illegible]出たい。友達にビアズレつて一體何だねとやつたものだ。君に似てゐる畫をかいた畫かきだと敎へられて世の中には太てえ奴があるものだと思つた。その後大阪へ行つた。當時道頓堀にキャバレエ・ド・パノンと稱するカフエがあつた。西洋畫のやうな頭をしてビロード服を着てマンドリンを抱えたのや、釣鐘の化物のやうなマントの女なんかが旺に出入りした。あつちのテーブルでは五色の酒を盛つた杯を前に原稿紙をひろげて何か書いてゐるのがある。こつちのテーブルには眞赤な風呂敷ネクタイと土耳其帽とが吸ひ口の長い細巻きのロシア煙草をくゆらしながら、大に藝術を論じてゐる。といつたとても淋い家だつた。初めそこへ連れられて行つた時、何氣なく後ろの壁を見ると細い金緣の額の中に細い線の版畫が入れてかゝげてあつた。サロメか何かの畫らしい。何だと聞く迄もなく友達からあれがそのビアズレさと指示されこれが自分の人魚のどこに似てゐるんだか皆目判らない。强ひて云へば一種の執拗さぐらゐなものだ、と思つた。

その後、今度は友人達と別府へ行つた事がある。一日自動車を驅つて地獄廻りといふ事をやつた。ある山間を走せ貫けて向ふに眞靑な海が展がつてゐるところへ出た。一しよに並んで腰をかけてゐる一人は突然大きな聲を出して逢坂山から琵琶湖を見た景色に似てゐる。が實にいゝなアと絶叫した。その人は滋賀縣の生れだ。だから自分の郷里の某所に似てゐる所がある事に[illegible]も逢坂山に[illegible]山の嶺を走つた。今度は別の一人がそこの景色が岩木山の裾野に似てゐるといひ出した。いひ出したのみではなく私に迄賛成を求めて來た。この先生は去年その岩木山の下へ旅行したのださうだ。その時の記憶を偶々大分縣別府の郊外某所で挽回したわけなのである。それから又しばらくすると今度は山と山との間に廣い田圃の展開したところを見た。それが信州姨捨山の邊に非常に能く似てゐるといつて、別の一人が、これも私に向つて肯定を迫つて來た。この人は信州人だ。どうも別府がいろんな所に似てゐるので私はひどく困つた。いや似てゐるのなら大して困りもしないが、事實姨捨山にも亦岩木山にも亦近江の湖水にも、そのどれにも對照すべく餘りに因緣のない景色ばかりだつたのである。少くとも私の眼には——

で、思ふ。姨捨でもない別府の景色によつて姨捨を想ひ、琵琶湖でもない別府の海を見て琵琶湖を頭に浮べる。要するに記憶と感覺の錯誤だ。私の畫のあるものがビアズレに似乃至ビアズレの模倣視されたのも、つまりは別府の海が琵琶湖に見え鶴見嶽が岩木山に酷似したりしたのと同じ理屈になるんぢやあるまいか。と、この事はその時その自動車の中で思つたんではない。今、その兩方の事實を思ひ出してふとその兩つを結びつけたわけではあるが、とにかくに人間の記憶といふもの感覺といふもの、何れがその一つの場合か知れないが余り當てには出來

ない。殊にそれに智識的な意味を持たせやうとするのは別府にとつても鋳捨てにとつても困るやうに、私にも亦ピアズレにも迷惑に相違ない。と同時に、この漫談も、要するに感覚的記憶と記憶的感覚との上に出来上つたものである以上、若いては迷惑を人に及ぼさないとも限らぬ。さう氣の付いたのをしほに筆を擱く事にする。

と、こゝの處をつけて了つてから、ふと氣がついたことがある。追つかけて書き足す。

神経衰弱は時代病だといふ。文明病だなんて事もいふ。勿論「時代」や「文明」の責任ではなからうが、とにかくに世界一般どこかしこを問はず病的にはなつてゐる。この原因の大部分は戦争といふ大騒亂が何つてゐるに相違ない。戦争そのものを題材にした藝術らしい藝術が何の フランスにもドイツにも只の一つも生れなかつた代りに、その戦争に支配され或は刺戟された思想や精神は砲弾のやうに炸裂してどこの國にもまんべんもなく散らかり、さうしていろいろの藝術の形にも内容にも凄まじい影響を及ぼしてゐる。無闇と辛辣で無闇と刺戟的になつた事はいふ迄もない。特に通俗的な方面に著しい。通俗通俗と深山さうにいひはするものゝ、時代意識を闡明する或は傾向を批判する故も確實なバロメーターを備るんだから意味は中々重い。探偵小説の物凄く激な發達なんかはその最もいゝ證據だ。世人の怪奇的脅迫的神秘的さういつたもろもろに對する一種の探索的快感はどれ程著しい要求と歡迎とをチャンポンにしてゐるか、或は女性的な魅惑的なさうして野蠻過る迄變態な彼等の心理によつて、如何に多くの血みどろな世界が創始されたか。まるで世をあげて地獄の觀光團を組織してゐるといつた状態だ。

この波紋は海を隔てた日本にも傳はつて來てゐる。そして邦譯諸國物語のロマンチツズムがアーサー・リーブの科學的怪奇思想と混線したり何かしてゐる有様、それは兎に角に、この傾向は自然にだつて少からぬ變化を及ぼして行く。極度に刺戟的にもならうし、女性的にもなるわけだ。あるものは理智的に鋭くあるものは努めて幻怪的に走る。同じ殺し場は殺し場でも近頃のは仕方なしのツケばかりといつた形だ。活動寫眞式でもあれば新國劇式でもある。どつちも惡くとつては困る。

突つこんでゑぐつて、これでもかこれでもかつていつた鹽梅。興行を見れば納まらない。おつつまくつの中に個々鶴三が出で來醒が出た。出た場合もいゝ。見る側ではホツと一息といつた形だ。あんまり適當な例ではないやうだが先まア國芳國貞の絢爛さにのぼせた眼が廣重の五十三次で思ひもかけぬ清新さを感じたのに近からう。何れにせよ、挿畫に一生面が展かれたわけだが、心理的にいへばそれだつて變態的意味で歡迎されてゐる點もないでもない。やがては更に今よりもつとグロテスクな或はもつと現實的なものが要求され出すに違ひない。どういふ形をとるかは今のところ判らないが、とにかくに各方面ともに何等かの刺戟なしでは生きて行けない世の中になつたんだから仕方がない。

大衆文藝に表れたる國民性

馬場孤蝶

一

一口に國民性と云へば、直ぐ何ういふものだか分つてゐるやうな氣が誰でもするのだが此の言葉くらゐ危險なものはない。時代、時勢が變はるに從つて、人の考へもいろ〳〵と變つて來る。從つて、風俗、習慣といふやうなものなぞは、ヅン〳〵變つて行く。唯一時的の周圍の狀態で、その時だけの現象であるやうな風俗、習慣までも國民性の發現のやうに思つて、それを大事がるなぞは、飛んでもない馬鹿げたことだ。或る施政上の考察からなぞ、さういふ一時的のものでもを、現存してゐるものとして、酌量して行く必要はあるだらうけれども、それを永遠な、その國民にはなくてならぬもの、若しくは、その國民が何うしても脫却することの出來ないものと考へると、途方もない間違ひに陷るわけだ。

ところで、何ういふのが、或る國民の永遠的の國民性であるかといふことになると、餘程議論が複雜になつて來るだらうから、此の稿で謂ふところの國民性なるものは、そんな重い意味に取らないやうにして貰らひたい。まづ何々國民の氣質ぐらゐにして置て貰らへば、それで結構なのだ。

佛蘭西人と英吉利人とが同じ車室に乘り合はせたが、外に乘客もなかつたので、佛人の方からは英人に話しをしかけるのであるが、英人の方は『さうだ』、『いやさうでない』ぐらゐな一語だけの答をする程度以上には、少しも話相手にならない、しかも、その返辭だつても如何にも不承々々であつたので、佛人の方はしまひには言葉の續ぎ穗がなくなつて、しばらく默んまりでゐたけれども、ふと見ると、英人の飲んでゐた煙草の火が落ちたものと見え、英人の直衣（チヨツキ）から煙が立つてゐる。其所で、佛人は最も丁寧な言葉で、

『甚だ失禮ですが、煙草の火であなたのチョッキが燒けてゐますんですが』

といふ風に注意を與へると、英人はムッとした顔で、

「他人の事なんぞはうつちやつて置てくれ給へ。全く餘計なお世話だ。僕の方では、先つきから君の上衣のテールがボン／＼燃えてゐるのを知つてゐるけれども、君のことになんぞ干渉はしないでゐるぢやアないか」

自分のことは自分ですることにして、他人のことには一切干渉しないといふ英吉利人の獨立の精神の強いところを極端に誇張した笑話であるが、これは、可なり名高い話だと見えて、いろ／＼な書に載つてゐるやうである。

ポール・ブルジエーの『鳥人』といふのは、滑稽の作物ではないのだから、所謂る大衆文藝のなかへ數へ込むわけには行かぬが、それでも、此の描寫は如何にもよく片意地な英吉利人を書いてゐるので、今一寸その梗概を紹介して置きたい。

巴里が獨逸軍に圍まれてゐた普佛戰爭の時のことなんだが、佛蘭西の或る士官が城へ忍び込まうと思つて、獨逸兵の街への手薄な方へと廻はるのだが、それでも、獨軍の哨兵の一隊に見付けられて、追つ駈けられるが、巧みに其處を拔けて、隠れ場所をさがしてゐるといふと、一寸とした小倉があつてあかりがさしてゐるので、其所へ逃げ込んで行くと、其所には、無愛想な痩せ衰つた老人がゐて、犬を一匹飼つてゐる。それは英吉利人で、獵犬屋であつたのだが、巴里が包圍に陷つたので、商賣どころではなくなつたのだ。それでも、其所に居殘つて、犬の世話をしてゐたので、丁度その時は一匹の犬が病氣で死にかゝつてゐるものだからその口へ藥をつぎ込んだり何かして、手當てをしてゐる眞つ最中であつた。佛蘭西の士官が一寸かくまつてくれと頼むと、始めは不承知であつたが、それでも、士官が九死一生の場合だからと云つて強て頼むと、到頭承諾して、犬の手當てをしながら、獨逸人が教養がなくつて、犬を愛するといふやうな心持などは少しもなく、ともすれば、面白づくに、犬を鐵砲の的にして撃ち殺すことなども度々で、獨逸人などゝいふ奴は全くの野蠻人なんだ、といふやうな話を、ぶつきらぼうな口調で話す。そのうちに、獨逸の哨兵の一隊がその小倉へやつて來て、戸を叩いて、此所へ佛蘭西の士官は逃げ込んで來はしないかと訊く。犬屋の老人はその前に佛蘭西の士官をベッドの下か何かへ隠れさしてしまつてゐたので、無愛想な口調で、そんな者は一向に來はしないといふ。それでも、猶ほ此の邊を捜したんだから、足音ぐらゐは聞いたらう、何つちへ行つたか知らないかと訊く。犬屋は、わしは此の通り、犬が死にかゝつてゐるのだから、一晩を介抱するために全くそれに取られてゐたので、足音はしたらうけれども、そんなものには一向氣がつかなかつた

[illegible]つぎ込んでゐるきりで、傍に怪しい様子といふのも見えなかつたので、その旨を行なに報告して、何の事もなく行つてしまつた。しばらく外の様子を窺つてゐた佛蘭西の士官はもう危險が去つたことを見極めてから、立ち去らうとして、老人に厚く禮をいふと、別に恩に着せるやうなところもなく、お前さんさへ來なかつたら、此の犬の手當が十分にできて、生命を取りとめたかも知れないのに、お前さんのお蔭で、獨逸兵の奴らに威かされて、それで肝腎の手當がロクにできずにしまつて、とうたう犬を殺してしまつた。もう直ぐ歸つてくれと云つたきりで、士官の方は見向きもしなかつた。包圍が解けてから、その士官は、犬屋にもつと禮をしたいと想つて、犬屋の小屋のあつた邊へ行つたけれども、犬屋の居た小舍なんぞはもう其所にはなかつた。犬屋の爺さんは獨逸兵の銃丸に生命を落としたのか、それとも、もう佛蘭西の土地を見切つて、海峽のむかふの故國へ歸つて行つたのか、一向に分らなかつた。冷々たる心の底に人情があり、人間としての義務を行ふのは寧ろ當然なこととして、少しも誇らない、海峽のむかふの島國の人間の氣質は、如何にも面白いものとして、長くその士官の心に殘つた。

[illegible]

[illegible]

或る人が、或る亞米利加人のところへ行くと、ホイツスラアか畫かの何村の時計といふ小畫幅がある。それは、その賣出前、或る家のせり賣りで呼び物になつた品なので、何うして、そんな稀品が手に入つたかときくと、主人は、それが手に入るに至つた一奇話を物語つた。

主人曰く、私はもう餘程前にモナコへ行つた時、慰さみに賭博場へ行つて、少し賭けたのだが、其時、自分の勝ちになつて、賞金から私の方へと拂つてくれた金のうちを、横から少しさらつた者がある。直ぐ振り返つて、四邊を見ると、極く若い男が私のそばに立つて、私の憐れみを請ふ樣な如何にも悲痛な顔つきで立つてゐる。見れば亞米利加人に相違ない。金は額にしても僅かな者ではあり、目前で勝つた者なのだから、其に就ては、さう損害を感じはしなかつたが、自分の同國人がさういふ破廉恥な行爲をしたといふことに、ひどく義憤を覺えて、其場では事を荒立てはしなかつたけれども、其者を館の外へつれ出して、その男がそんな亞米利加人の面汚しになるやうな、さういふ卑劣な行爲をしたことを罵り、取つた金を取り返して、そのうちの幾らかを與へ、將來を戒めて、ゆるしてやつた。私は、後では、そ

の若者は人品を見ては決して惡漢ではなく、モナコの誘惑に勝ち得ないで、持て居つた金を皆賭博場で負けてしまひ、その結果せつぱ詰つて、他人の金に手を出すやうになつたのらしかつたので、それに對しては、もう少し寛大な心を持つて、せめてもう少し金を與へるべきであつたと、思つたことが屢々であつた。

しかし、そのうちに年月が餘程經つたので、何時とはなしに、モナコに於けるそんなエピソオドなどは、殆んど忘れてしまつた。ところが、數日前、あのせり賣りで、此の繪を見たので、私の金の許す限りせつてみたのだが、誰だか知らぬ競爭者があつて、その方へおとされてしまつた。私はひどく落膽して歸つて來たが、今朝になると、此の畫に手紙がついて、私の手もとへとどいた。その手紙は、勿論無名ではあつたけれども、先年モナコで會つた若者から來たものであつた。その若者はその時の私の罵倒と訓戒ですつかり眼が覺めて、何處かの鑛山へ行つて、死にものぐるひの奮闘の結果、極めて有利な鑛山の持ち主になつて、豐な生活をしてゐるといふのだ。ところで、さういふ風に正路な生活に入ることが出來たのは全く私の訓戒のお蔭だと感謝してゐるので、商賣を始めた時分から、私が與へた金と同じ額を、私の出資したものと見做し、それに利益分配を加へることにして今日までズツと續けて來たのだが、その額は可なり大きいものになつてゐる。そこで、今度、私がホイッスラアの畫を買ひたがつてゐるのを見て、わざと競爭者になつて、それをせり落し、私に寄贈するのだが、これは唯報恩の爲分の一だと思つてくれ、さういふ風にその手紙には書いてあつた。

亞米利加人には、何んなドン底からでも自ら奮闘して上へ上へと上ぼりあがつて行く勇氣がある。此の勇氣こそ亞米利加人の特徴だ。さういふ勇氣がまた亞米利加の都會を立派なものにして行くのだ。亞米利加人は何處にゐても、決局は自分の故郷を忘れない。私の如きも、今はかうやつて、歐洲にゐて、自分の生れた町を嫌つてゐるやうだが、私が死ぬ時になれば、私の貯めた富などは皆私の生れた町へ寄附しようと思つてゐる。

これで、佛蘭西人の見た英人氣質、米人氣質が大體分るだらうと思ふ。

二

探偵小說中の大立物は、英國ではコナン・ドイルのシヤアロツク・ホームズである。佛蘭西ではルブランのアルセエヌ・リューパンであることはいふまでもなからう。ホームズの陰慘な、頑強なブルドツグ的な印象を與へるのに對して、リューパンの

讀んで[illegible]な、[illegible]な、[illegible]
[illegible]英人型、一は付焼までも佛人[illegible]
今。ホームズにもユウモアーはある。けれども、それは、幾分可笑しい、皮肉に過ぎたものである。リユーパンの生々した[illegible]しさとは、少くとも後者の陽氣な點に於て非常な差がある。

餘程英人氣質とドイル式探偵法とを誇張した形はあるけれども、ルブランの書いたヘルロツク・シヨルムズとアルセエヌ・リユーパンとの爭鬪――知慧競べ――は、ひどく面白い。ルブランはそれによつて、英人型と佛人型とを對照して描くといふ考であつたらうと思ふ。勿論、探偵小説に於てははるかに先輩たるドイルに對して、幾分の皮肉を感じながら、着筆したものではあらうと察せられるけれども。

短篇の、リユーパンが城の拔け路を知つて、それを逃げ出すと、後から探偵を頼まれて來たシヨルムズが直ぐその拔け路を發見する。が、其所には、シヨルムズならば、直ぐ發見するにちがひないと思つて退却したといふやうな意味のリユーパンの置き手紙があると云つたやうな物語も、面白いにはちがひないが、まだそれでは、シヨルムズをヘンに重くるしく陰鬱な人間にばかり書いてあつて、術策くらべの興味といふのは、それ程に喚起されない。

[illegible]
[illegible]
[illegible]中で本がないので、[illegible]分ウロ覺えで間違[illegible]、あつ[illegible]は大凡次のやうな話のものであつたと記憶する。

或る大學の教授が古道具屋で、古雅なデスクを買ふのだが、金を拂つて、いよいよ買ひ取つたことになつて、店を出て來ると、見ず知らずの人に呼び止められる。その男は、教授の買つた卓子が兼ねてから欲しいと思つてゐて、今買ひに來たのだが、教授のために一足ちがひで買はれてしまつたので、殘念でたまらないから、何分か高くつていいのだから、讓つてくれぬかといふ。勿論、その男はこれだけで讓つてくれないかと、その金額まで云つたのだが、さうなると、教授は物堅い片意地な人であつたので、他人の既に買ひ取つたものに對し、商人にでも對するやうに値を買ひ上げるから賣らぬかといふ申し出は如何にも無禮至極だと憤つてわしはそんな商人じみたことは斷じてしないといふ劍もホロゝな返答をして、その男からの相談を撥ねつけてしまふ。

ところが、その男がアルセエヌ・リユーパンであつたので、それからといふものは、種々の手段を廻らして、その卓子を取らうとする。教授の方も意地になつて、何うあつても取られ

ないやうに用心する。其所で、到頭リユーパンが教授の愛嬢を誘拐して、リユーパン自身の戀人であるところの金髪美人に托す。教授の方はそれですつかり弱つてしまつて、卓子をリユーパンに渡してしまう。リユーパンが教授の愛嬢を攫つたのは、唯教授を降參させて、卓子を渡たさせるやうにするだけの目的であつたので、金髪美人の手もとで大事に保護してあつた娘を、無疵のまゝで、教授の手もとへ戻す。

卓子は那翁が使つたといふ道具なので、それ自身に於ても十分な價値があるのだが、その上に、その卓子の何處かに寶石が隱くしてあつて、それがリユーパンの手にはいる。

其所で、その寶石を取り返すことを頼まれてショルムズが英國からやつて來る。ショルムズは助手の賢者か何かと一緒に密屋へ閉ぢ込められたり、何かしてリユーパンの爲めに可なり翻弄されるのだが、金髪美人の身元を調べた結果、その美人が有名な老建築師の娘であるといふ點から、リユーパンが若い時分、その建築師の助手になつてゐた時代に、自分が建てた家には、離れてゐるやうに見えてゐる家と家の間に隱くれた通路を造つて置いたので、今大盜になつて、その通路を利用して、出沒自在の行動をとるのだといふことを知り、先づ金髪美人を捕らへて、次ぎにリユーパンを擒にしようとするのだが、待たせて置いた自動車の運轉手がリユーパンの仲間と入れ變はつてしまつたことに氣づかないで、反つてリユーパンの擒になつて、リユーパン所有のヨツトに乘せられて、英國へ送り歸へされることになる。リユーパンがショルムズに、君は何うしても逃げないことを約束するかといふと、ショルムズはそんな約束は斷じてしない、機會があり次第、きつと脫出して、直ぐ巴里へ歸つてくるといふ。リユーパンが、君が脫出を計かるやうだつたら、船員が君を海へはふり込むがいゝかといふ。ショルムズはその時は俺は泳ぐから構はんといふ。ショルムズのその邊の答へは、非運に少しも落膽しない、頑強な英國氣質を表はすつもりで、ルブランは書いてゐるのだと思ふ。

そこで、リユーパンは、君のやうな逆境に立つても少しも勇氣のたゆまない人は、油斷がならないから、念のためにといふので、船員に命じて、ショルムズを船室の寢台へ縛りつけてしまつた。そして、尙用心のために船員が一人絕えず船室の中で見張つてゐることにした。それから、船員にはサザムプトンを出て佛蘭西へ來るその日の最後の汽船がこれ〳〵の時間なんだから、その船が出た後に英吉利へ着くやうにしろ、決してその船が出ないうちの時間に英國へ着いてはならぬと嚴に云ひつける。リユーパンの考では、ショルムズのために自分の隱れ家や、

この船の秘密を發見された[illegible]、[illegible]、ショルムズ[illegible]て[illegible]國から引へ返して來ないうちに、何處かほかへ隱れてしまはうといふのであつたのだ。

リユーパンは巴里へ歸つて來て、隱れ家へ入ひつて、逃亡の準備を十分に整のへ、逃げ路の秘密戸の開き具合をもためしてから、さアいよ〳〵脫出しようとなつてゐると、その家へ警官が大勢踏み込んで來る。これは、ショルムズがその前の晚に、リユーパンを捕へて、寶石を受け取つてしまつてから、佛蘭西の警官にリユーパンを引渡すつもりで、警官出張の時間を豫めうち合はしてあつたのだ。リユーパンは警官が部室の戸口まで來た音を聞いて、直ぐ脫出しようと、秘密戸のボタンを押す。けれども、四五分前には、輕る〳〵と開いた秘密戸が何うしても開かない。急き込んで、捻ぢつたり、叩いたりしてゐると、耳の傍で、君具合が狂るつたかねといふ落ちついた皮肉な聲が聞える。ハッと思つて振り返へると、ショルムズが平然として立つてゐる。何うして、そんなに早く引返へして來たのかと、リユーパンが訊くと、サザムプトンからの船が出ぬうちに英國へ着いたので、直ぐその船で引つ返へして來たのだといふ。何うしてそんなことができたのだといふと、無論、ヨットの船員の助けを借りて、ヨットを早く英國へ着けて貰らつたのだが、それは、

ヨ[illegible]は[illegible]て、この船員はリユーパンに[illegible]ふつて、次のやうな說明をした。

ショルムズはリユーパンから盗ませの寶石を掴ませられたことがあつたのだが、ショルムズはその寶石を寶物のやうによつて、船室のなかでシャアズい番をしてゐる船員に、

「わしはお前たちの首領から、かういふ寶石を取つて來たのだが、今英國へなるべく早く着きたい用がむかふにあるのだから、むかふへ着く時間を早くしてくれゝば、此の寶石をお前に渡す。お前はこれをお前の首領のところへ持つて行けば非常な手柄になる」

さういふ風に說きつけたので、その船員は成る程、その通りで、此の英人は英國に用があるといふのだから、早く向ふ地へ着けてやつたところで、一向こちらの事には影響はない譯なんだが、自分の方は、唯それだけのことをしてやつたがために、首領の手に入れば、非常に喜ぶにちがひない寶石をば首領のところへ持つて行くことができるのだ、とかう考へたので、ショルムズの申し出を早速承知して、ショルムズの指圖通り、船室にある時計の針を少しづゝ進めて行つた。船長はその時計によつて、船の速力を加減してゐたのだから、時々來てみて、その時計の

時間を正確なものと思ひ、船の速力を控へずに進んだので、サザムプトンの船の出ぬうちに英國へヨットが着いてしまつたといふ譯であつたのだ。

リューパンはこれで拔け路が開かないので、警官に捕へられるが、其所へ丁度、リューパンが何處かへ隱れさしてあつた金髮美人から電話がかゝつて來る。すると、ショルムズが電話の口へ手巾をかけて、聲の識別が先方にできないやうにして、リューパンの聲色で、金髮美人と話をする。ショルムズはもう英國へ追拂つてしまつて、もう大丈夫だから、家へ歸つて待つてゐろ、自分は直ぐ行くからといふのだ。それで、金髮美人は自分の家へ歸るにちがひないし、從つて金髮美人がショルムズに捕へられ、警官の手へ渡されるにきまることは明になつたので、リューパンはもう仕方なしに、ショルムズに、金髮美人はそのまゝにして置いてくれるといふ條件で、寶石の在りどころを教へようといふ。ショルムズは無論その條件に同意するので、リューパンは持つてゐるステツキの頭のところが捻ちになつてゐるのに、それを外づせば、其所に寶石が隱くしてあるのだと云ふ。ショルムズはさういふ風で寶石を得て、その家を去る。リューパンの方は警官をうまく策略にはめて、逃げてしまふ。つまり、此の小說では、ショルムズの目的の寶石は手に入れるが、リューパンを捕へて警官に渡してしまうことはできず、リューパンの方は警官の手からは脫するけれども、寶石はショルムズに渡さなければならなくなるといふ風で、ショルムズとリューパンの爭鬪は結局相こに了はるといふ形になつて居るのである。

同じ卷の『ユダヤ製のランプ』といふのも、結局ショルムズとリューパンとの對抗が相こに了はることになつてゐる。此の小說では、底の栓を拔いたので沈んで行く船のなかで、兩雄が悠然と話し込んでゐるところが、讀者の興味を引くであらうと思ふ。

三

リューパンの行動には愛嬌があり、陽氣なユーモアーがある。僕は短篇ちうの乞食が農家へ盜みに入ひつた話を甚だ面白いと思ふ。

或る可なり大きい農家の主人が、息子をつれて、狩りに出たが、夕方門を入つて來ると、木の上に立つて居る案山子が眼に入つた。もう秋の末になつてゐて、案山子の必要もなかつたので、老人は、鐵砲のなかに殘つてゐる彈丸を始末するといふやうな意味でもあつたのだらうか、銃を擧げて、案山子へと狙ひをつけて、ドンとぶつ放すと、襤褸で拵しらへた人型は、横倒

しくなつて落ちて來て、下の室の板の上へうつぶしに倒れたやうに止まつてしまつた。親子はこれを見て、如何にも興あるもののやうに笑ひながら、家へと近づいて來ると、家のなかから老婦のけたたましく叫びたてる聲が聞えたので、何事だらうと大急ぎで驅け込んで行くと、その邊の乞食で何某といふ男が盜みに入つて、税金にと用意してあつた可なりな金を盜んで、今逃げたところだといふ。で、直ぐ追つかけやうとすると、後姿が一寸階段の邊で見えたので、それと云つて、後を追つたのだが、折しも迫まつて來た夕闇にまぎれて、何處へか見えなくなつてしまつた。しかし、邸内は可なり廣いし、周圍は高い塀を繞ぐらして居り、それに附いてゐる門には錠が下りてゐるのだから、外へ逃げ出るひまはなかつたので、何うしても、邸内の何處かに潜んでゐるにちがひなかつた。そこで、その農家では、村人の助けを借りて、その晩から夜番を置いて、翌日になると、邸ぢうを幾つにも區ぎつて、その區域を一々嚴重に調べ、全く草の根を分けるやうな綿密な捜査を行つたけれども、乞食の男は影も形も見えなかつた。それに拘らず、邸外へ出た形跡は少しもなかつたのだから、何うしても、邸内にゐるにはちがひないといふので、家のなかの食物などは嚴重にしまひ込むやうにして、食物を賊が得る機會をなくなすと共に、食物ばかりでなく、水も飲めないやうにしようといふので、水のあるところへ夜番人をつけた。そこへ來るには、井戸が一つあつて、それが築山の落ちてゐる樹の下になつてゐたのだが、そこから鐵管か何かで、家の台所へと水を導いて、通つてゐるのであつた。つまり、邸内で水の出るところはその泉一つきりなので、これへ夜番人をつけて、それへ近づくことができないやうにして置きさへすれば、賊は水に渇してしまつて、降參して、何處かから出て來るにちがひないといふ考であつたのだ。ところが、不思議千萬にも、賊は食物を盜みに出て來た形跡もなければ、水を飲みにと姿を現はしたこともないのであつたから、全く飲まず食はずでゐるにちがひないに拘らず、四五週間經つても、何處からも出て來ない。はては、その村での不思議の一つに數へられて、都會の新聞の紙面を賑はしたくらゐであつた。

或る日、巴里から自用自動車で遊覽旅に出て來たといふ紳士が、その自動車の部分品が破はれて動かなくなつたので、それを鍛冶屋で作らせる間、その邊の店に入ひつて、人々と話をしてゐるうちに、乞食の賊の不思議な話が出たところが、その紳士が、現場を見た上で、自分がその奇怪な問題の解決に當つてみたいものだと云ひだした。其所で、そのことを村人の二三人

から、農家の爺さんに通じるといふと、爺さんの方でも、實は大分手こずつてゐるところであつたので、その紳士の申し込みを歡迎した。紳士は直ぐその農家へやつて來て、主人に案内されて、邸内を見廻はり、裏門のあることなどを見て、門の開き具合などに就て、主人の説明を十分に聞いた末に、水の泉のところへ行つてみたいと云つたので、主人が其所へ直ぐ案内すると、紳士は此の水の深さはどれくらゐあるのだらうかと云つて、其の傍にあつた長い麥藁の管のやうになつたのを取つたが、一寸それを手に取つて見ると共に、何か考へついたことがあつたと見えて、水の深さは計らずに、直ぐ家へと入つて行つて、主人の銃を借りて、今賊を追ひだして見せるからと云つて、樹の上の案山子へとしつかり覗ひをつけた。人々は何ういふ積りなのだらうと、呆れて見てゐると、樹の上の案山子が動き出して樹から跳び下り、逸足だして逃げだした。人々は大笑ひをしながら追つかけて行つて、間もなく賊の乞食をつかまへて來た。

其所で、みんなが取り卷いて、さア取つた金を出せといふと、賊はきよとんとした顏で、金なんぞはちつとも持つてゐないといふ。そんなことがあるものか。金は何うしたのだと、詰問すると、金はあの紳士に渡したといふ。其處で、人々は紳士のことに氣がついて、さういへば、あの紳士は何うしたらうと、處見廻はしたが、その邊には影も見えなかつた。そのうちに、誰か、あの紳士は庭の方へぶら〱出て行つたといふ者があつた。庭の方ならば、邸外へ出る氣づかひはない。裏門にはちやんと錠が下ろしてあるから。と家の主人の爺さんがいふと、誰かが又その鍵はお前確に持つてゐるのかといふ。それは先刻あの紳士に裏門の開き具合などを見せた時に使つたまゝかくしへ入れてあるのだがと云つて、かくしへ手をやつたが、あつと云つて、頭をおさへた。鍵が何時の間にか無くなつてゐるのであつた。それといふので人々が裏門の方へと向ふと、丁度勢ひよく走り出す自動車のモオタアの音が塀の彼方から聞こえて來た。

要するに、これは、賊の乞食は闇にまぎれて案山子に變裝してしまつて、樹の上に横になつてゐて、夜になるのを待つて、麥藁をつないで長くしたのを管にして、泉の水を飮んでゐたのだ。ところが、その紳士の方はアルセエヌ・リューパンで、巴里の新聞でその怪事件に關する記事を讀んでから、一種の探偵欲といふやうなものから、その事件を解決する積りで、その村へ來て、わざとおしやべりの床屋か何かの前で、自動車に故障を起らせて、唯通りがゝりの旅客がその迷宮的事件の話を耳

にして、[illegible]その[illegible]ことにしたものにさせ
て、その農家へ何食はん顔で出かけ、いよ〳〵の持つ逃げ路ま
でも、先きの爺さんに案内させて置て、[illegible]の着を見て、賊が
案山子になつて潜んで居るのを知り、銃を借りて、賊を威し
て、發見の刹那に劇的な興味を加はへ、賊の盗んだ金を捲
き上げて、うま〳〵引きあげてしまつたといふわけであつたの
だ。

如何にも人を食つたやり方が讀者には多大な興味を覺えさせるのだが、さういふ陽氣な、皮肉さが、佛蘭西人の一面の氣質でもあると思ふのだ。

そこで、賊の乞食は何うなつたかといふと、盗んだ金を持つてゐなかつたものだから、外國の法律では、罪を重くするわけに行かないで、餘程短い刑期で牢を出ることができたのであるが、それからは、時々何處そこに金が隱してあるから取りに行けといふ知らせが、何處かゝら傳へられる。それで、村外れの路傍の石の下とか、畑の緣の樹の下とかいふやうな處で、その乞食の男は五圓とか十圓ぐらゐの金を掘り出すのであつたが、乞食に取つては、それだけの金でも可なり纏まつた金なので、それでやす〳〵と暮らして行けるのであつた。

シヤアロツク・ホームズにも無論ユーモアーはある、諧謔好
き[illegible]と
「建築家の事件」――[illegible]と
いふ短篇である。

建築家――といふより建築請負者と云つた方がいゝらしく思はれる――であつた男が、最早引退したやうな風で、ノオウツドといふところに自分で家を建つて住まつてゐたのだが、それが殺されたといふことになつたので、その男の甥か何かでその男と財産上の關係があつて、平常仲の惡かつた若者が殺人の嫌疑を受けて、警官に逮捕せられる。ホームズはその男のために寃を解くことを賴まれたので、現場へ行つて見ると、被害者の屍骸は加害者が燒き捨てたらしく、あとかたもなくなつてゐた。けれども、事情が疑はしいので、くはしく現場を調べた上でホームズが家へ歸つてゐると、其所へ、嫌疑者を捕へた探偵がやつて來て、被害者の家の壁に血痕のあるのを新たに發見したので、もう十分な證據を握つたと云つて、ホームズを凹ます積りでひどく得意になつて話す。ホームズは、成る程それで證據は十分なんだと、眼を躍らせるやうにして云つた。

それで、その翌日か何かに直ぐ行つて壁の血痕をよく見てから、被害者のうちの番をしてゐる巡査に、君は相當に大きい聲が出るかといふと、可なり大きい聲を出すことができるといふ

答へなので、同行して行つた探偵に今實驗をしてみるから、それに加勢してくれと云つて廊下へ桶を持つて來させ、又バケツに水を入れたのを持つて來さすので、探偵はこんな際に冗談にも程があると云つて、苦い顏をしてゐる。そのうちに、藁束へ火をつけると、それがパチ／＼と大きい音を立てゝ、勢ひよく燃えあがる。其所で、一齊に大きい聲を擧げて、『火事だア』と喚き立てた。すると、廊下の突き當りぐらゐの、戸のないやうに見えるところが開いて、小柄な男が跳び出して來て、四邊の明るさに眼をパチ／＼させながら、突つ立つた。ホームズは、此の家の主人それがし君を諸君に紹介しますと、探偵に云つた。

これはそのノォウッドの建築業者は兎か何かを燒いて、肉のやけるやうな臭をさせ、自分が殺されて、屍骸を燒き捨てられたやうに見せかけ、自分が建築業者であつたので、兼て拵らへて置いた隱れ部屋へ引つ込んで、被嫌疑者へその罪がかゝつて處刑されるのを待つてゐる者であつたのだ。ところが、もう少し確な證據を警察側では要してゐるだらうと思つて、或る晩こつそり隱れ場所から出て、壁へ血痕をつけて置いたのだ。探偵はそれを見て、被嫌疑者に對する決定的な證據だと思つたのだが、ホームズの方では、その前に家ぢうをよく調べて置いたのだから、壁に何の痕もなかつたことを知つてゐたので、そんな血痕が後からついたとすれば、それは少くとも被嫌疑者が無罪であることの確な證據だと言ふ意味で、十分な證據だと、探偵に皮肉に云つたのであつた。それからその家へ來て、尙善く調べると、前にも不思議だと思つた點が益々確められた。それは、家の外廻りと、部屋の數とが一致しないことであつた。さうして見ると、此の家には何處かに祕密室があるにちがひないことが分つた。死んだことになつてゐる主はそこに隱れてゐることはすぐに察し得られた。壁でも叩いて、その隱れ部屋を見つけるのは何でもないのであつたが探偵が餘んまり頭が働かないのを可笑しく思つて、それで、火事の狂言をやるやうな冗談をしたのであつた。

で、かういふ風に、リユーパンとホームズの諧謔を比較してみると、リユーパンの方は大盜といふ無責任な地位に立つて居る、ホームズの方は私人にしてもやはり探偵といふ職業的拘束があるといふ境遇の差を十分に考量してみても、尙やはりリユーパンの方に雜何的の陽氣な諧謔性を認めない譯には行かぬであらう。ホームズの諧謔の方は、幾分重い、苦いところがあるやうな氣がする。

四

ファイ[illegible]
お[illegible]作者のものには、[illegible]
探偵のソオンダイクの人格といふ[illegible]たものには、特に推讃されて
はゐない。又、その犯罪事件若しくは犯人に強て云つても、特に國民性の表はれと云ひ得べきものを見ない。強て云へば、ソオンダイクの如何にも理性的な、少しも感情に制せられないやうたところが、英國の作家の作くりだすにふさはしいものとでもいふべきであらう。つまり、フリイマンの作全體に理性的なところが行き渡つて居るのが、此の作家の英國人たることを表はす特徴だと云ひ得ようと思ふのだ。唯だ「大肖像事件」の中へ出て來る米國の考古學者の一連が、畫館にある或る肖像の額縁のなかに財寶の所在を記した書類の隱しあることを知つて、それを手に入れる爲に、不思議な音樂隊のやうなものを拵しらへて、畫館のなかを練り廻つて模寫に來てゐる畫家たちの間に非常な混雜を起させて、目的の古畫をすりかへて、書類を得てしまうといふ、思ひ切つた行動は如何にも米國人の輕佻にして勇敢なところを描き得たものとして、甚だ面白いと思ふのだ。

フレッチャアの特に近來の作は、英國の小都會を場面に取つて、或る犯罪事件が職業的探偵でない普通の人々の間に起こす、小葛藤を描いて行つて、事件の解決に達するといふ手法を

[illegible]
こ[illegible]
ら省略することより外はない。

オルツィー夫人の「ピンパアネル」シリイズは、佛國大革命の時分、佛蘭西の王族や貴族を救ひ出すために組織されたスカアレット・ピンパアネル團の首領サア・プレエクネエといふ貴族の活動を主として、佛蘭西の貴族その他の、革命黨に苦しめられる人々の物語を書いたものであるが、ディツケンスの「二都物語」からヒントを得たものらしく見える。少くとも、夫人の「トオニイ卿の妻」の一部の如きは、「二都物語」の一部と非常によく似通つてゐるやうに思はれる。二作とも、貴族に對し心からの恨みを持ち、その點では殆んど狂的になつてゐるやうな大革命時代の下層な男女を宛も生けるが如く描寫してゐる。これ等の作は、大革命時代の佛蘭西人氣質を描いたものとして、讀者に推薦して差し支へがあるまいと思ふ。

革命に對する罪人をば極刑に處さうとして荒れ立つ群集の兇暴性、刑死する貴族の勇氣、そんなものが實に鮮かに描出されてある。

或る貴族の一團が斷頭台へ上ぼされた時に、一人の若い貴族

貴族はよくその友に向いて、見てゐろ、俺は本當の貴族の生れなんだから、俺の血は青いぞと云つて、首を斬られてしまふ。貴族とか士族とかいふ風に上流の身分といふ意味の時に、『青い血』といふ言葉を用ゐるのでその貴族は謂はゞ洒落な心持でさう云つたのだが、その首が斬り落されて斷頭台の下の籠へ落ちると、その友の貴族は前へ跳び出て、それを上から覗き込み、何んだ廣言にも似ず、やつぱり赤い血しきや出ないではないか。見てゐろ、今度こそ、俺の血は青いぞ、地獄で逢つて、笑つてやるぞといふやうなことを云つて、哄然と笑ひたから、自分も又首を斬られてしまつた。そんなエピソオドを何の作かで讀んだと思ふ。

オルツィー夫人はブレエクネエの性格を極めて興味深く描いてゐる。緻密を極めた考慮と、驚くべき放膽な實行とが、巧みに結びついてゐる行動のために、佛蘭西の探偵長がさんざんに翻弄される。諧謔好きで、非運に驚かぬ、義俠心に富んだブレエクネエが此の物語の數篇を通じて、紙上に活躍してゐる。ブレクネエは交際場裡では、服裝整然として、禮儀正しい大紳士であるに拘らず、一朝冒險の心、不幸なる者に對する愛憐の念の燃え立つや、佛蘭西の群集と同じ破れし衣を着、粗惡なる食物を食つて、虱だらけの部室に起臥して少しも意にしない。オルツィー夫人から見れば、さういふのが、由緒正しい英國の貴族の理想なのであらう。少くとも、英國の大貴族の氣質をば淨化したものであることは疑ひないと思ふ。

『われ復讐すべし』――復讐は神にまかせよの意味――の作で、終はりの方で、裁判所で死刑を宣告された男を救ひ出さんが爲めに、わざと群集を煽動して、その男を私刑にしようとする騷擾を起させ、そのどさくさ紛れに、僞せの軍憲を使つて、その男を奪ひ、城門を抜け出すのが困難なので、又大群集のなかへまぎれ込まして、大群集をして城門から押し出させて、首尾好くその男とその戀人とを英國へ向けて、逃亡させてしまふといふ術策が實に巧妙であるのには、讀者は思はず拍手するにちがひない。

或る貴族の書類を奪はうとする佛蘭西の探偵長を術策に乘せて、それを擒にした形で、その探偵長を同じ馬車に乘らして、案内者のやうな格にして、警戒線を脱出するといふ物語――『スカアレット・ピンパアネル團』のなかの一篇――も讀者の興を少なからず喚起することは必せりだと思ふのだ。

ジイ・ケエ・チエスタアトンの『師父ブラウンの無邪氣』、『師父ブラウンの智慧』の二作は、師父ブラウンの落ち着いた謙和な性格に自ら則せずして、いふべからざる微妙な皮肉とユーモ

アーが含まれてゐるところだ。[illegible]認めないではゐられないだらう。

『青十字架』で、師父が大盗フランボオを官憲に捉らさせる方法の巧妙さ、『奇異な足音』に於ける人情に關する洞察、『折れたる劍』に於ける人間の弱點に關する深意ある批評など、作中の人物よりは寧ろ、作物全體に渉つて、作家チエスタアトン自身の、理性に富んだ、批判心の鋭い、酷烈な皮肉の愛蘭氣質が横溢してゐる。

五

米國で特徴のある作家はジヤック・ロンドンなんだが、クロンダイクで黄金を獵る人々の群を描いたものなぞは、今日の經濟組織のために、黄金を得んこととのみを熱望するやうになつた人間の寧ろ狂態を描いたものとして、殆ど悲慘な感を禁じ得ないと共に、少くとも、米國人の一部の氣質を鮮明に描出したものであることは疑ひない。クロンダイクでは、寒威酷烈な夜半に新鑛區を獲得する競爭が行はれ、極めて酸鼻の光景を現出するのだが、精神的には、都會の文明の光輝赫灼たるもなかに於ても、その悲慘なる點に於いては、前者に決して劣らざる黄金狩の激烈なる競爭が行はれてゐる、炯眼なる讀者は、ジヤック・ロンドン[illegible]だ、[illegible]には米國人の為[illegible]る淺ましき行動を描いたものであることを、容易に看見し得るであらう。

ところで、さういふ徹底的な物慾邁進は、一方に於ては、さういふ物慾を超越した淡泊不羈の性格を生み出すに至つてゐるのだが、其所が人間性の妙味であると思ふのだ。マアク・ツウエーンのトム・ソオヤアの如きはさういふ性格の一つである。いや、マアク・ツウエーンその人がさうだと云つて宜しいのだ。有名な『百萬磅の札』の如きは、その主人公の性格に物にこだはらぬ、悒々とした米人式のところが現れてゐて、快く通讀せられる。

一般米人の物慾を超越して、横にそれた形のものが、米國の探偵小説中の盜賊及び詐欺師である。さういふ罪人に物慾がないと云つては、ヘンに聞えるであらうけれども、確に一般人のやうには物慾にこだはつてゐるところがないのだ。さういふ性格の惡黨が幾分かの程度に於て實在してゐればこそ、そんな性格の人物が作家の筆に現はれたとも考へられるのだが、少くとも、作家の理想裡にさういふ人物がはぐくまれたことだけは確である。

さういふ面白い性格の賊は、マツカレーの書いた「地下鐵サム」がその顯著な一例である。あの輕佻でありながら果敢な、物慾に恬淡な性格は、一種の米人氣質だとして、讀者に歡迎せられるに違ひない。

オー・ヘンリイの作物にも、米人氣質が可なりよく描かれてゐる。就中、「上品なる詐欺師」の一篇が如何にも面白い。此の長篇――寧ろ同じ人物を主人公にした短篇を幾つも寄せ合はせた――の主人公が輕快、不羈な一種の米人氣質を發揮してゐる。

或る詐欺師が金なしになつて、鐵道の貨車に忍び込んでタダ乘りをして、或る町へ下りて、町外れの茶小舍か何かで一夜を明かさうとする。其所で、見ず知らずの同じやうに金なしの二人の悪者に邂逅するのだが、一人は竊盜で、一人は空株券を賣る詐欺師なのだ。竊盜のいふには、かうなつては、お前たち詐欺師のやることとは、幾らか資本がなければやれない仕事であり、目直ぐ二時間のうちに何うするといふ風には行かぬ仕事なんだから、手も足も出なからう、其所へ行つては、俺の仕事の方は、今が今でも直ぐやれる仕事なので、こんな場合に少しも困まることとはないと云つて、さんざんに威張る。二人の詐欺師の方は癪にさはりはするものゝその場合は確にその通りにはちがひないので、何とも返す言葉がないので閉口してゐると、竊盜の方は、それでは、俺が一寸出て行つて金を拵らへて來てやるといふやうなことを云つて出て行つたが、やがて二時間とたゝぬうちに、可なりな額の金を握つて歸つて來る。そして、お前たちは、何れだけあれば、次の目的地へ行くことができるか、とにかく、それだけは、此の金のなかゝら分けてやるといふので、會社詐欺師の方は少し多く貰らひ、唯の詐欺師の方は目的の町への汽車賃ぐらゐを貰つて、その翌朝別れてしまふ。

詐欺師の方は、竊盜の男が或る町で、博奕場――カルタでする博奕場――を開くといふのを聞いてゐたので、先き廻はりしてその町へ行つて、其所に住んでゐた、友人に金を借りて、その町に一軒しきやないカルタを賣つて居る店へ行つて、其所のカルタを皆な買ひしめてしまひ、一と晩ぢうかゝつて裏へ他人の眼には何うしても分らないやうな印しを巧妙につけてから、それを皆元の店へ持つて行つて、少し見込みちがひをしたから、此のカルタを割引で引き取つてくれと掛け合つて、元價の半分ぐらゐで、戻どしてしまつた。すると、竊盜の方はその町へ來て、博奕場を開いたのだが、無論、その町でカルタを賣つてゐる店は一軒しきやないのだから、詐欺師が裏へ印しを附けたのを買つてしまつたのだ。其所で、詐欺師は何食はん顏をして、竊盜の博奕場へたづねて行つて、主人の竊盜とカルタをや

るのだが、詐欺師の方に裏の裏にしてゐた何んでもはつきりきめてか
るのだから、やる度毎に勝ちつゞけて、窃盗の稼ぎ溜めてゐた
金を殆ど全部捲きあげてしまつた。

これからしばらく經つて、その詐欺師が或る町のカフエーで友人に、窃盗の方が詐欺師よりエラいと云つて、さん／＼威張られた復讐に、先きの金を此方の手に乗せて捲きあげてしまつたのだと云つて、カルタの話を一伍四什物語る。すると、その友人は、それではその金は何うしたのだと訊く。詐欺師は、その金では極々確なものを買つて置いたのだといふ。一體それは何だといふと、内隠しから、大切さうに一束の株券を出して、見込書で見ると、これほど確に儲かる會社はないのだから、その株券を買つたのだといふ。ところで、その株券に記入されてゐるその會社の社長の名を讀むと、その友人は思はず破顔した。その重役の名は、詐欺師から聞いた會社詐欺師の名の文字を少し綴りかへただけのものに過ぎなかつたのだ。詐欺師にそれを注意すると、詐欺師もその時始めて氣がついて、頭を抱へてしまつた。かういふ風な所謂三すくみの狀態にはよくなるものだとは聞くのだが、小説ながら、その實例を見せられるやうな心地がして、興味が少くなくない。

オー・ヘンリイは『市の聲』のなかで、紐育人氣質ともいふ

べきもので、ぬけてゐるといつてゐる。

或る夕方公園のベンチに腰をかけて、本に讀み耽つてゐたこ若い女がある。若い男がその傍へ行つて話を始める。女は、自分は自分の名を云へば直ぐ人があゝ、あの家かと氣のつくくらゐの大家の者なんだが、家にゐても、外へ出ても、伴がついたりしてうるさいので、時々はかういふ風に微裝して、一人でこんなところへ來て、のう／＼としてゐるのだと話す。男は、自分はむかうにイルミネエションの見えるあの料理屋のウエータアなんだが、自分は夜の廻りになつてゐて、仕事が始まるまでにはまだ少し間があるから、かうしてゐるのだといふ。やがて、女は起つて歸らうとして、男に向かつて、わたしのあとをつけないやうにしてくれ、むかふにわたしの自動車が待たせてあるのだが、それを見られると、直ぐわたしの名がわかつてしまふから、といふ。それでも、女が行つてしまつた後、直ぐ男はそのあとをつけて行くと、女は待つてゐる自動車の傍をどん／＼通り過ぎて、公園外の明るい料理屋へ入つて、直ぐ事務服らしいものに着更へて出て來て、高い所にゐた女と交代した。つまり、實はその女は料理屋の會計係であつたのだ。男はそれを見とゞけると、又公園へ引返して來て、待つてゐる自動車に乗つて、運轉手に『オイ、ヘンリイ、倶樂部へ』と云つた。紐育で

は、貧人が富人を装ひ、富人の方は貧人を装うといふ心理を巧みに描出したものである。

紐育の人は物見高いといふ。路傍で自動車がパンクしても、或は、石板書きが石板を書いてゐても、人が黒山のやうに集つて來る。ところで、さういふ物見高い心持を最も多く持つてゐる男女が、始めは見ず知らずであつたけれども、同趣味のために、だん／＼心安くなつて、到頭結婚することになつたのだが、その結婚式場である教會の前へ、その結婚式を見物に來る人々が多勢群集してゐるのを見て、二人とも、自分の結婚のことは忘れてしまつて、見物のなかへ入つて、婿さん嫁さんが今に來るか來るかと待つて居るうちに、群集のなかで、動搖が起つて、二人は半死半生に踏みのめされてしまう。さういふ話も、「市の聲」のなかの一篇なのだ。

それから、料理屋の女給が、度々さま／＼な男から結婚を申し込まれるので、人の話を半分どころか、十分の一、百分の一にも聞く習慣になつてしまつて、或る金持の男からの眞劍な結婚の申し込も同じやうなチヤラツポコだと聞く。即ち、男が新婚旅行は家の所有のヨツトで西印度諸島へ行くことにしやうと思ふと、眞面目に本氣で云つたのを、女の方では、實際男がそんな金持であらうとは知らなかつたので、話千分の一ぐらゐに聞き流して、後で、朋友にあの人もやつぱり、近くの島へ新婚旅行をしようといふやうな月並なことを云ふやうになつたから、交際を斷つてしまつたと話すのだ。

その外、或る男が叔父の機嫌を損じて、遺産相續權を奪はれて、放浪者になつて、野宿のやうなことをしてゐると、其所で、も一人の放浪者に會ふのだが、それはその男の從弟で、その從弟の方が今度は叔父の財産相續權を授けられることになつて、その翌朝、叔父の抱への辯護士に會ふわけになつてゐる。ところが、その從弟はそんな財産相續者になるといふことを聞て以來、朝になるまでにはそれが何うなつてしまふかと思ふと、不安でたまらなくて、とても一人ではゐられない氣持だといふのだ。それで一方の男が、一晩ちうその從弟の伽ぎをして、心を落ち着かせるやうにし、朝になると、その辯護士のところへ同行して行つてやる。辯護士は、始めの男を見て、ヤア、君が來るのを待つてゐた。君の叔父さんは第二の遺言書を取り消したので、やつぱり君が相續者なんだといふ。放浪者の從弟の方は、それを聞くと、今までのガタ／＼ふるへてゐたゐたのがパツタリ止まつて、いや、それでサツパリした、もう全く安心したと云つて、足取り確に、勢ひ好く、辯護士のところを出て行く、といふ話も、「市の聲」のなかの一篇であつたと思ふ。

事ち「市中の習」では、[illegible]へ[illegible]、[illegible]は[illegible]に[illegible]たたま[illegible]な性[illegible]い[illegible]な人[illegible]の間でも怪に[illegible]ばかりたたまし[illegible]るのである。

六

支那の物語りは餘まり知らないが、今机邊にある『騙術奇談』には、左の如き物語がある。

或る貴族が、その住まつて居る村に饑饉があつたので、極力施與をしたのだが、その近くに住んで居る金持の老人にも寄附を勸誘したけれども、老人は極く吝嗇な質であつたので、一錢も出さなかつた。貴族はそれをひどく憤つたけれども、そんな色を少しも見せずに、老人に一泡吹かす工風に取りかゝつた。老人は奇物を好む癖の強いのを、その貴族は探知したので、其所へ附込んで、老人を術策に乘せようといふのであつた。

貴族は自分の所藏の關山行旅の圖といふ畫の摸寫を二つ造つた。一つの方は中の人物が傘を疊んで擔いで居り、も一つの方は、その同じ人物が傘を開いてさして居るといふだけがちがひで、その外は兩方とも寸分もちがはないものを拵へ、表裝もまるで同じに仕立さした。それで、雨の降りさうな日を選んで客を招いたが、金持ちの老人もそのなかに入ひつて居つた。

[illegible]て、[illegible]たつ[illegible]に、[illegible]居る方の畫を、客に知られないやうにして、[illegible]かへてしまつた。老人はそれを見て、その畫は名畫だから、なかの人物が、晴雨に從つて傘をつぼめたり、開いたりするのだと思ひ込み人橋かけて熱心に讓り受けを交渉し、結局萬金を投ずるといふことにして、先づ五千金を渡して畫を手に入れ、晴れるのを待つて客を呼んで驚かせようと思つてゐたが、雨がやんでも、畫中の人物はやつぱり傘を開いてさしてゐる。そこで騙まされたのを知つて、金を返へせと、居仲者に嚴談してゐるうち、貴族が、老人を訪ふて、此んな詐術にかゝつたのは、老人自身自ら招いたことだからし方がなからう。此の畫をもう一枚進ぜるから、晴れにはこちらの方、雨にはこちらの方を懸けたらよからう、老人から受け取つた金は決して自分の用には使はない。此れを用ゐて、老人のために博く慈悲善根を施すのだからさう承知してくれと云つた。

要するに、かういふ機智は、如何にも支那の知識階級の人々の用ゐさうなものに思はれる。『棠陰比事』の裁判例などには、支那人の自由な、臨機應變的な機智の實例が幾つも出てゐる。

或る男が他の男の妻と通じて居る。男が女のところに居ると

ころへ良人が歸つて來た。男は良人に覺られないやうに逃げ出したが、帽子を忘れたので、二階へ出て來た女に、街から頭を押へて、帽子を取つてはふつてくれといふ合圖をする。女は、それを良人の首を斬れといふ合圖だと思つて、良人を殺してしまう。男は女の非道なのを憤つて、女を殺して、自訴して出る。

これは唐の沈何之の書いた名高い物語で、後世のものでもこれに似た物語をも一つ讀んだことを記憶する。

かういふ支那人の道義心の現はれは、德川氏時代の人々の心持とは大分違うやうに思ふ。日本人ならば、そんな場合自殺するであらう。女は殺さないかも知れぬと思ふ。さうでなく、さういふ場合女と一緒に逃げるのは、支那にも日本にもザラにあるだらうが、それは情に囚はるゝ一般の人情であらう。



大衆文藝論

大衆文藝私見

佐藤春夫

僕は民衆藝術に就てはこのごろ非常な興味を覺えて、その使命の甚だ重大なことをも感じ、從つて考へてみることも多少ないではない。實はここでも「吾が民衆藝術論」を書いてみようかとさへ考へたのだけれども、も少し考へなければならない點もあり、且つ時日の關係もあるので充分にそれを果せさうにない。だからここでは、その考へのうちの一片を記すことにしよう。

民衆藝術といふものと、大衆文藝或は大衆藝術といふことは、言葉の違ひから多少の違つた感じを受取る。またそれに携はつてゐる諸家にしても、自づと相異つた調子があるやうだから、僕の感じは間違ひではなささうである。

どういふふうに相異るかといふと、民衆文藝といふよりは大衆文藝といふ方が、少しさばけた感じがする。むつかしい理屈抜きにして書かれてあるやうな氣がする。

つまり今日の民衆藝術、或はプロレタリヤ文藝を主張する諸家にはいろ〳〵理論的な背景がありさうなのに對して、大衆文藝の諸家にはさういふ點が乏しさうに見える。片方を書生坊じみてゐると惡口を言へるなら、片方を藝人氣質だとも言へさうに思ふ。この點では、僕は所謂プロレタリア文藝の方に味方したい。——多分、僕自身が書生坊だからだらう。

ともかくも、大衆文藝なるものも、民衆藝術の一部分と見てもよからう。さういふ見方も出來るだらう。

さうして大衆文藝といふものは、どうも興味中心——娛樂的讀物の脈を引いてゐる。それの一種の發達と見て差支なささう

……いふ。

そこで興味といふものと藝術との關係を、――藝術的興味が如何なる要素としてそれに含まれるか、或は含まれないか、價値かあるかを考へてみたい。

一たい藝術といふものは好奇心とよほど關係のあるものだ。

僕は好奇心なるものを一概に興味のないものとは思はない。これはしばしば高い精神的なものの特性を持つたものの[illegible]ケに現れた外觀であることがある。しかし所謂、好奇心といふものは、普通はさう何か或るもののやうに僕は思はない。これは一旦滿されてしまふと消滅してしまふもので、同一の物に對して人は決して二度とは好奇心を動さない。もし同一の事に二度も三度も好奇心が動くとすると、これはきつと好奇心の外貌を持つた外の何物かである。

前の面白味といふものはさうした部分のなかでよほど重大な要素になつてゐる。

しかし、この好奇心だけで、これ以外のもつと何か深いものに觸れてゐなかつたならば、讀者にもう一度と讀み返すことはしない。たとへそれによつて一時の興味が得られたとしても、讀みたい。

僕は何度讀んでも面白いかどうかといふことを、一般の藝術の尺度にしても大して間違ひはないだらうと思つてゐる。さうして度重なるほど面白くなるものだけが本當に深みがあるものだと思ふ。――すべての古典といふものは、かういふ風にして出來に成つたのであらう。

大衆文藝なるものが、その本來の性質として一時間に讀まれるものでなければならないといふ譯でもない。しかし、讀み捨てられるといふ事と、久しく讀まれるといふこととは決して斷定しないものでは無いやうである。僕は此の大衆作家が、そこをこゝに認めてくれることを希望する。それだけの文學を心掛けずして、この文學に文藝の名を冠することは[illegible]である。

はやりは流行に支配されるものだ。しかしすぐに流行に飽きて捨てるものだ。このあとでは作者は[illegible]だ。一時の好奇心に投ずることはやさしい。作者に迎合せないことはむづかしいだらう。作家を引くみることは問題のなかの難かしいものだ。讀者は一時は流行もする。だまされもする。しかし讀者は永久のなかにすぞ

んこ、[illegible]

たまたま[illegible]文學的教養によ[illegible]

とが多かつた所謂高級なる讀者より以上のものがあるだらう。

ラフカデオ・ヘルンがトルストイの藝術論に贊同して、「よい文藝は百姓にでもわかる」とトルストイの言ふのはまだ足りない。百姓のごとき生れながらの心を持つた人々にこそ最もよく判る筈だ」といふ意味を力說してゐるのは名言である。

僕はさういふ意味でのみ、大衆文藝を期待したい。さうしてこのやうな大衆文藝は決して片手間の小使錢稼ぎのつもりでは出來ないだらう。

民衆に所謂文學的な作品の、ただ大ざつぱなものだけを與へるのが大衆文藝の使命であつたならば、僕は寧ろ、大衆文藝には極力反對する。それぐらゐならばむしろ、無邪氣で素朴で視覺な見世物でも發明する方に贊成する。

[illegible]

[illegible]

いた[illegible]から出發した讀み物や、通俗的な[illegible]の空想から生れた探偵小說や、さういふものは寧ろ、我々の早く脫却したいものであつて、萬々、たとひそのなかにどのやうな新理想が包まれてゐるにしたところが、さういふ大衆文藝は我々の希望とは甚だ遠い。

生れながらにして持つてゐると言はれてゐる動物としての人間の友愛を父とし、健康な心理と生理とを母として、今日の社會といふ産褥のなかに民衆の文學は生れなければならない。我々のあまりに專門的で、あまりにロココ風で、あまりに鈍衰的である文藝も亦、この新らしく誕生する文藝のために生氣を與へられるだらう——これは僕が空想する、民衆或は大衆の文藝の夢である。

大衆文學の地位と特色

小川未明

いかなる作家でも、その人は、どの階級にか屬しないものにはない筈です。言ひ換へればそれまでに、其の作家を育てた環境が、かゝる作家を造るに至つたといふことができるからです。このことは、今更說明するまでもないことでありませう。

たゞ作家自からが、はつきりとそれを悟らず、漠然とした意味から、人生のためにとか、民衆のためにとか、いふ心持で普遍的の眞理を書いてゐると自負してゐるものがあつたら、不遜な人間か、さもなくば、考へのそこまで至らないかのどちらかでありませう。

智識階級の社會を材料に取り、もしくは、ブルジョアの社會を疑ひを挾まずに描くやうな作家は、その人が、智識階級に屬するか、またその人の生活が、ブルジョア的の空氣の裡に營まれてゐることを物語るものです。なぜなれば、いまの文壇に、ありあまる程の經驗を有し、どの社會の生活意識にも、徹してゐるといふ人を見出すことができないからです。私小說即ち心境小說の多いのも、一に、こゝに原因するからだと、言へるのであります。

むしろ、この意味に於て、各作家が、各自の屬する階級的立場を自覺して、さらに、深刻にその階級の生活なり、悶えなり、また反抗なりを眞實に描くことができたら、決して、これを意義なしとするものでありません。

ある意味に於て、その階級の代辯者たり得るからです。今日の社會制度に於て、階級別のあることは、半ばこれを宿命的とも見らるゝのでした。從つて、その階級の眞劍な意志の表現は、蓋し、その階級から生れた、誠實なる作家を待つて、はじめて表白されるとも言はれるでありませう。

鬪爭的無産階級のために、代辯たらんとするプロレタリア作家は、もとより、農民のために、自から進んで代辯たらんとする作家、もしくは、崩壞期の惱みと良心の鞭に血みどろの姿を見せつゝある智識階級の代辯をつとめる作家等、それ等は、この社會になければならぬばかりでなく、むしろ生れ出づるのを當然とします。

また、今日、世間には、無自覺的な享樂者が多く、有閑階級者が一面に存在するかぎりは、この方面の戯作者もなければならぬ譯です。

以上は、必然に伴ふ現象であつて、いかなる魅力あるヂャァナリズムも、また一攫的な資本主義も、培ふに足るだけの種子のないところには、手を下せぬからであります。

是等の文學は、概括的に言つて、傾向的、思想的と言ふことができます。誰も、享樂派の藝術――ブルジョア階級の附屬物

の[illegible]あることを——ものを、[illegible]、[illegible]といふ[illegible]またこちゃと思ひますから、前に掲げた、戰爭的無産派の文學、農民文學、智識階級的文學等を指すことは言ふまでもありません。そして、これ等は、かく思想的であるが故に、同時に、傾向的であるが故に、また、理想主義的でもあると言ふことができます。即ち社會に向つて、ある種の主張と抗爭性を有してゐます。

本題である、「大衆文學」とは、これ等とは、自から異なる性質のものでありませう。然らば、何が、「大衆文學」であり、そして、その使命は、如何なるところに存してゐるか。

被支配下の庶民こそ、そのうちにもいろ／＼あるが、おしなべて大衆といへるのであります。そして、ある意味に於て、この大衆の代辯となり、また、その如實の生活を活寫するものが、所謂、大衆文學であると言へる。この派の文學は、傾向的と言はんよりは、より多くの客觀性を帶びてゐるのが本來の性質であり、自然のやうに思はれるのであります。

例を上げれば、江戸末期に流行した、稗史や、講談の如きが、即ち、當時の大衆文學の總稱であつたらうと思ふ。もつとも講談や、淨瑠璃は語るが主であつて、讀むのは主意ではないかも知れぬが、それが文字として表はされた時には、たしかに大衆[illegible]

これが、所謂大衆文學と相通じてゐることには、作者の手段が、全く寫されて、大衆共通の心理と意志が全篇に現はされてゐるといふ點で、即ち大衆の文學ではあつたのです。江戸末期の文學に現はれたるたとへば、意氣、伊達のたぐひは、庶民階級の支配階級に對する反抗心の一端でなければなりません。

封建制度の行き詰りは、新しい生活を求めて止まなかつた。すでに理想は、庶民の間に湧いてゐた。轉換期の前後に擡頭するロマンチシズムは、早くも、それが文學となつて現れたのでした。

横暴に對する正義と惡に對する善との對比せる鬪爭は、これに戀愛を配し、天譴を配し、勸善懲惡の道德に基いた人間的事實として現はされ、時にまた、超自然的現象として取扱はれ、思ふ存分に、庶民階級の意志と氣魄と要求を表白したものが、維新の社會的變動のある前後の文學であつて、これによつて、讀者をして自らを慰さしめ、信ぜしめ、悟らさしめ、鼓舞せしめたものです。

かくして、文化の基礎が更新されて、明治も二十年代を過ぐる時分には、やうやく講談は飽きられて來た。それは、一部の階級には、尙ほ捨て難い情趣であり、また生活的同情でもあつ

て、喜ばれたけれど、大概は、巷間のものとされて、智識ある人々には、あまりに荒唐無稽であり、非科學的であり、低級なるものとして、むしろ觀念小説の方へ走るやうになつたのであります。

硯友社以降自然派小説全盛の時季までは、若き日本の、飛躍時代であつて、庶民生活にも理想は燃えてゐた頃でした。一方には、資本主義的、帝國主義的の戰爭はあつたけれども、その戰勝の結果は却つて世間の景氣を善くしたゝめに、民衆は平和と物質充足のたまものを享樂し得ることができたのでした。しかし、さうした事情の下に、庶民が置かれたのも長い間ではなかつた。歐州大戰を限度として、日本の資本主義も、何等か別に際立つた開拓がなければ、より以上の好景氣を來す望みは愚か、いよ／＼一般の庶民生活は行き詰るばかりであることが、豫想されてゐるのであります。

やうやく、この時分から、流行しはじめたものが、今日の所謂「大衆文學」なるものでありました。そして、この現象は、錯時代的にも、一時、衰微しかゝつてゐた、講談の復活からはじまつたやうです。もとより、昔の作意そのまゝではない。けれど、見逃がされない事實は、題材を維新當時に取つたものでなければ、同じく講談であつても、一般からは、あまり歡迎されなかつたことである。要は、この點に、留意すべきであります。

このアナクロニズムも現在の民衆に取つては、或は、一種の代辯であり、また憧憬であるのかも知れません。ある經濟學者は、今日の社會的現象は、よく江戸末期の事情と相似てゐるものがあると言つてゐるからです。

大衆文學作家が、今日の被支配階級の心理を深く洞察することによつて、ことさらに、事情の相似せる維新當時の社會に材を取れるものか、若しくは、その時代が、ロマンチツクの時代であつたといふがために、また荒唐無稽の想像を驅使する自由を有するがために、また史實が近い過去であり面白い讀物を作り得る自信から、こゝに筆を染めるに至れるものか、いづれかは分りませんが、これは、作者の意志からといふよりは、今日の大衆が、かゝるものを欲するためにと見るのが至當であると感じます。

けれど、一面からは、非科學的なるが故に、西洋種の冒險物、もしくは探偵物も、これと相伍して提供され、これまた相當の流行を見るに至つたやうであるか。これは、必ずしも非科學的、錯時代的なるものを好まざるが故に、近代的なものを選ぶと批評するよりは、私をして言はしむれば、同じく、ロマンチ

ワクなものに堕ちて終つたと思はれます。

通俗小說なるものが、名ばかりの讀ましくとも、すでに、一般の興味を惹くに足らずとせば、たとへ通俗的にはせよ、大衆文學の興起を自然にして、必然の現象と見なければならない。

傾向的の作品が、やゝもすれば、通俗からは遠ざかり、局部的なるに反して、大衆文學は、はじめより庶民階級に、當然屬すべきものであるからは、たとへ、その作家は、ことさらに主觀を沒するにせよ、對社會的の意識と批判力とに缺けてはならない筈だと思はれます。

一時、讀物本位の雜誌が、相競つて大衆物と稱して、この種の作品を掲載するや、所謂本格小說に行詰つた者や、雜文家等にして、たゞ題材を幕末、維新當時に取ればいゝといふので、新作講談や、歷史小說を數限りなく書いたものであるが、極めて、僅かの此派の作家を殘して他はいつしか顧みられなくなつてしまひました。

すべてに於て、流行を追ふものゝ末路は同じとするも、彼等は、何が故に、大衆物が今日の民衆に受けるかといふ眞の心理を解しなかつたによるものです。活動寫眞の廣告ではないが、熱烈の戀とか、覆面の勇士とか、さういふ煽情的な看板のみが、惹付る原因ばかりでなかつた。だから、頽廢的な、奇矯なものは、いつしか[illegible]になくなつてしまつた。

しからばいかなるものが要求された傾向であつたかといへば、やはり新生活に對する憧憬に他ならなかつたのであります。

それ故に、大衆文學は、少くとも今日の大衆文學は、ロマンチシズムの精神の發動と見て差支へないと思はれます。そして今日の社會的事業はたとへ江戶末期と相似するものがありたりとせよ。質に於ては同じでないのだから、いつまでも錯時代的な江戶文學の復興で足れりとする筈がない。頽廢的であるよりも、新興的であり、病的であるよりも健全でなければならぬ。そして、どこにか、庶民生活の眞の理想を暗示せねばならぬものです。(六月四日)

手前味噌

田中貢太郎

何日であつたか又何と云ふ新聞であつたかそれは知らないが、その新聞に大衆文藝と云ふやうなことを書く人があつて、それによると私も大衆文藝家の一人であるさうだ、しかし、もうその時代でもないと云つてあつたと云ふことを松崎天民から聞いて苦笑したことがあるが、全體その大衆文藝とはどんなことだらう。字面の上から強いてこじつけるなら、世間の多數に解る文藝、即ち通俗文藝と云ふやうにとれるが、そんならわざわざ生硬な文句をつかはないで、やつぱり通俗文藝と云つたがいいではないか。

大衆の字義の詮索はそれとして、私もその大衆文藝家にせられてゐたと云ふので、この欄で何か云はしてもらふことにした。私は從來興に乘じて小說を書き、物語を書き、隨筆を書き、紀行文を書き、俳文を書くが、未だ嘗て世間の多數を眼中において物を書いたこともなければ、又それを自分から名乘つたこともない。ただ題材の如何によつて世間の多數に面白いと思はれた物もあつたとは思ふが。瀧田樗陰氏が在世の時だが、あなたの書く物は、讀者を眼中におかないと云ふ評が編輯局にあります、と云つて叱られたこともあるほど、私は自分勝手な物をよく書いた。從つて中央公論の說苑欄に物語を書いた時も、創作欄に物語を書いた時も、同じやうな態度であつた。それかあらぬか、ある時、說苑欄に伯爵叔母と云ふ物語を書いて持つて往つたところで、瀧田氏が、これは創作欄に入れてもいいですと云つて創作欄に入れてくれた。無論私の書いた物は佳い物ではなかつたが、しかし私は、自分の書く物は、說苑と云はれやうが、情話と云はれやうが、創作と云はれやうが、そんなことはどうでもいいと思つて意を強うしたことがあつた。

かうして說苑欄の非藝術品とせられてゐる物を創作欄に持つて往くと云ふことは、通俗的な雜誌の場合なれば知らず、權威ある大雜誌の場合にあつては異數のことであらう。又說苑欄と創作欄とは天で違つてでもゐるやうに思つてゐる不見識家の多い文壇にこんな內情を知らさうものなら、それこそ吃驚して氣絕する者もあるだらうと思ふと共に、今更ながら瀧田氏の識見の

[illegible]してゐたことに[illegible]すると[illegible]つて[illegible]も[illegible]を打たうが、要は作物の内容の如何に歸着するので[illegible]の種類の情話、今の大衆文藝的作物が非藝術品で、身邊の雜事をくどくどと書いた作物が藝術品であると云ふやうなことを云ふ者は、迷信でなかつたら、詩想の貧弱な作者をおほふための仲間同志の組合辯護の八百長文句である。しかし、それかと云つて、今の大衆文藝家と自分から銘を打つてゐる人達の書いた物に、作者の個性のあらはれてゐるやうな藝術的な物は殆んど一つもないと云ふことを私は斷言する。及びその取りあつかつた材料に考證的な權威のあるやうな物も一つもない。其大衆家の出世作と云はれてゐる新撰組のことを書いた物に、新撰組と新徴組の區別の判つてゐないのもその一例である。

私は中央公論の創作欄に、禪護、南瓜の苗、それから今云つた伯夷叔齊を書き、說苑欄に二十餘篇の物語を書いて一方を小說と云はれ、一方を情話と云はれたが、私の作物の質においてかはりはなかつた。私は身邊の雜事を書いて得意になつてゐる小說家流も、世間の大衆を大向にまはして棒ちぎりを振りまはしてゐる大衆作家も看板よりも本質に目を向けてもらひたいと思ふ。

[illegible]て、杉村楚人冠氏などが日記らしい[illegible]ふうな物を書いてゐた。明治三十六年頃川合の[illegible]に關係したことの[illegible]は、新聞の雜報欄の記事があまりきこちないので、正確な記事を作ると共に、その一方で敍情的な趣味のある記事を作りたいと云ふことを考へて、友人などにも時をり話してゐたことがあつたので、杉村氏の書いた時了といふやうな物を見て、自分の意見と一致したやうに思ひ、それから中央公論の說苑欄に注意をはらつてゐたところで、松崎天民が淪落の女と云ふやうな物を書きだした。そこで私も何かあゝした物をかかうと思つてみたものの、二人のやうに人生記錄にする材料がないので、そのまゝになつてゐると、例の大逆事件が起つて、郷黨の先輩、幸德秋水、奥宮健之の二氏が刑死し、つゞいて田岡嶺雲氏が日光に客死した。私は日光に出かけて往つて嶺雲先生の近親の者について、荼毘にふしたその遺骨を鳴蟲山の麓に拾ふての歸り、汽車の中でふとこの先進達の印象を書いてみたればと思つたが、酒と生活に追はれてそれなりになつてゐるうちに、大正三年となつたが、その初夏の頃になつて馬場孤蝶翁に話してみると、雜誌に出しても出さなくても、とにかく書いてみたらばどうだ」と云はれた。

そこでやつと取つてしまつた八十枚の物に纏めて、孤蝶君の所に持つて行き、後でしばらくして行つてみると、この間大杉君が借らせて、これを読んでない人はいないから、中央公論あたりに持つていつたらいいだらう、ただ田中君は今仲介に日数がないやうしいであるが、よそに日数があつたといつてゐた、と孤蝶君がいつてくれたので、とうとう持つて行く気になり、この年の八月十五日、孤蝶君の紹介状をもらつて西片町の中央公論へ往つて、はじめて滝田氏に会ひ、その結果、この年の十二月號に載せてもらつたのも、同時期の木村荘八と消息録と云ふのであつた。

その印象記の次に私の書いたのは、悪魔十九物語と云ふ明治二十九年の松方内閣の悪魔十六の頃の探偵事件であつた。それは翌年一月號に掲載したもので、時の大隈内閣が政府の大臣を内相に任じて来るべき、月二十五日の総選挙に赦免国民の民衆に於て事を知らせるやうな材料が見えたから、松方内閣当時の内閣に於ける大十八年を背にして見直したものであつた。

それはそれから後公論の作品事件のやうな物を書いたり、其他にも一つ二つ政治的意味のある物を書いてゐし、その後で犯罪もあり、新聞の上と云ふ所謂情話を書いた。この情話は最本の小説であつたが、その興味はそれから歴史的な物語に移つた。吉人はし、白の往日物語、熊の妖、紅、話、枕、往日物語、秋の役物語、異説切支丹屋敷と云ふやうな物はその後からできたものであつた。風前、温泉宿の狂気、木乃伊と云る、心中の唄と云ふやうな現代的な物語も書いたが、この当時の私の興味は主として歴史的物語にあつた。大正七年頃、私が切支丹屋敷と云ふ物語集をこしらへた時、その当時あつた中外と云ふ雑誌の新刊紹介の中に

歴史的情話文学の創造者として有名なる田中氏が最近の十なる作十九篇を集めたので、巻頭にある異説切支丹屋敷の如き優に立派な芸術品といつてもいい位の高い作であるとどれを読んでも読者に一種の魅力を與へる點に於て他の模倣者の追随し能はざる價値がある。

と云ふ評をしてくれた。こんなことを自分から云ひだすのは、まことしくすぐつたいが、切支丹屋敷の後でこしらへた探偵と云ふ物語集をめくつてゐると、この頁にくつつけた切支丹屋敷の廣告文が見つかつたから引いてみた。それにこの廣告が今は世に亡き滝田樗陰氏であることを思ふと引用しないわけにはかなかつた。

私は中央公論の他にも、婦人公論、新小説などにも物語をおくことは書いたが、やはり中央公論の方が回数も多かつ

かう[illegible]

[illegible]梢風であつた。梢風の言葉によると、梢風は[illegible]見て、はそんなことを書いても原稿にならない、と思つて、筆を執つたといふことであつた。梢風の持前の物語は、話は忘れたが何んでも彰義隊の落人が吉原へ往つて隠れると云ふやうな話であつたと思ふが、ある日、西片町の中央公論社へ往つてみると、瀧田氏が梢風から送つて來てゐた原稿を見せて『なかなかいい原稿です。』と云つて、二三行讀んで聞かしてくれた。これは吉原の遊女屋の亭主が談巴菰を飲みながら相手の客に空うそぶいて見せる所であつたが、瀧田氏と梢風のことを考へるたびに、何時もその時の瀧田氏の風貌がありありと浮んで來る。

生方敏郎もその比から中央公論に書きだしたが、敏郎のは對話であるから此所では云はない。その時分から私の興味は支那

[illegible]

これは大正八年比であつたらうか、大泉黒石が[illegible]て來て神田神保町の[illegible]家にあがり込んで[illegible]に往き逢つたのは。私は黒石を連れて[illegible]へ瀧田氏に逢ひに往つて、黒石に書かしてもふことにした。かうしてできたのが黒石の自叙傳と云ふ黒石の傑作である。これも說苑の中間物として文壇には問題にせられなかつたが、立派な創作である。ただし、瀧田氏に逢ひに往つての歸りに、黒石が何處までも露西人になりすますので、刺身でも日本食をくはしても氣の毒だと思つて、神樂坂の洋食屋へ伴れて往つてみると、露西亜ではこんなふうにたべますと云つて、ぱくぱくと犬のやうに洋食を喫つてみせたなどは、あまり創作家すぎると思ふ。

民衆藝術雜言

正宗白鳥

「農民藝術」といふ言葉が、この頃屢々新聞や雜誌に現はれてゐるが、それは、農民に讀ませるため、見せるため、聽かせるための藝術を指して云ふよりも、むしろ、農民を題材とした藝術といふ意味であるらしい。「民衆藝術」といふ言葉も、學問の

淺い趣味の低い教養の乏しい民衆にも理解されるやうな藝術といふ意味をもつてゐるのであるか。あるひは民衆（農民など筋肉勞働者を指してゐるらしい）を題材としたものを指すのであらうか。あるひは兩者を包んでゐるのであるか。その點は曖昧である。

源氏物語などの王朝文學には、當時の貴族社會が描かれたものであつたが、德川時代の文學には、當時の民衆が題材として取扱はれてゐた。音樂でも芝居でも民衆的であつた。默阿彌の芝居などには、スリだの泥棒だのゴロツキだの賣淫婦だのが跋扈してゐる。

今日の民衆藝術主唱者は、默阿彌の藝術のやうなものを望んでゐるのであらうか。スリや泥棒ぢやいけない。もつと健全な民衆を題材とせよといふのであるか。あるひは題材は何でもいい。勞働者に味方して資本家を罵倒したものを書けと云ふのであらうか。

しかし、藝術は茫漠たる議論とはちがふ。私なども、農夫や漁夫だのが、生活のために辛慘を舐めてゐるのに、別莊に起臥してゐる人々が、贅澤な生活をして遊んでゐるのを目睹すると、一種の憤慨に打たれることがある。……しかし、ここに何のなにがしといふ農夫あるひは漁夫をモデルとして、一篇の創作を試みる時には、私はそのモデルを一人の人として描かうと思ふ。その人を善良の權化とする譯には行くまい。彼れの心に狡猾と卑屈とを認めたなら、斟酌しないで、それを摑み出して書いていゝと思ふ。……個人の眞相に立入つて見たら、富者も貧人も同じことかも知れない。所謂民衆藝術の講談などでは、すべて上つ方を尊重して、一般の人民を卑下させてゐるので、私などは昔から馬鹿らしく思つてゐるのであるが、この頃、ことに更に勞働者贔負をしてゐる皮相な小說を讀むと、同じ程度で馬鹿らしいのである。

民衆に理解され民衆を樂ませる藝術と云つても、民衆の一部である少年少女は婦人雜誌などの通俗小說を愛讀して、帝劇や音樂會やダンス場や、三越や松屋や自動車に心を惹かれてゐて、決して小作爭議や貧乏生活の直寫小說を喜ばない。多數の勞動者だつて、自己のみぢめな生活を描いた小說や芝居を喜ばないに違ひない。落語家が高座で、自己を卑下し侮辱して聽衆に媚びると、聽衆は優越感を起していゝ氣になつて喜ぶのである。講釋場へ行つても、天下の副將軍のキザな威張り方を、悅んで聽きこそすれ、憤慨はしないのである。數年來プロレタリア文學として類別される小說の如きも、多數の民衆は愛讀しないにちがひない。

[illegible]民衆が[illegible]するに足らない。自分は自分の信じるプロレタリア文學に全心全力を盡すといふのなら、それは藝術家として尊いことである。しかし、それならば他の作家が他の道を是なりとして歩んでゐるのを妨げるべきものではあるまい。どちらにしたつて、拙いものは藝術として拙いのだ。民衆的といふことが下手な言譯にはなるまい。

今の日本の文學者の取扱つてゐる題材の範圍が狹少だといふ非難には、私も同感する。揃ひも揃つて原稿生活者の日記見たいなものばかり書いてゐるのは、智慧がなさ過ぎると、私は思つてゐる。私自身ももつと廣く世間を見なければならぬと思ふことがある。しかし、私は、多數の民衆に迎合しようと意識して筆を執らうとはしないつもりだ。自己表現の藝術である。：：我々の筆はなか〳〵意の如く運ばなくつて、いつももどかしい思ひをしてゐるのに、その上、民衆のためとか誰れのためとか云ふやうな重荷の條件をつけられては溜らない。自分が思ふ存分に書いて、その結果が自から民衆のため多數者のためになるのなら、私もそれは結構なことだと思つてゐる。

數年前の早稻田文學の合評記事のうちで、ある評家は、私のある小說を批評して、「階級意識の有無を云つたら非難する點も[illegible]なかつた、[illegible]自身は階級意識の[illegible]のために小說を書いてゐたいのに、それの有無を物差しとして、他の苦心の作を評價するのは、不當なことではあるまいか。早稻田文學も、坪内博士が主宰されてゐた時分は、時代を指導してゐたのであつたが、近來は、つねに文壇の流行に迎合してゐる「民衆藝術」もいゝだらうが、先頭に立つのではなくつて、人の後へ隨いて行くのは詰らないではないではないか。これは、早稻田文學について特に云ふのではない。自然主義隆盛の時分に、淺はかにそれにかぶれて眞似をしてゐた作家は、いつの間にか衰へて影を消すやうになつた。實社會の俗事なら、忠實に人眞似をするのもいゝことであらうが、文學藝術に於ては、徒らに雷同をことゝしないで、獨自一箇を樹立すべきものであらう。自分がしつかりしてゐるつもりでも、人間は流行に感化されるのに、自分から進んで流行を眞似ることに心を專らにしたら、自己存在の影は薄くなるばかりである。

私がひそかに望んでゐるものは、藝術的、あるひは哲學的天分の豐かな非凡な天才が現はれて、淺薄な民衆にはとても理解されないやうな深遠な思想、精巧を極めた藝術を創造すること

である。街上の露店に並べて安賣されるやうな藝術品ばかり織出しても詰らないことだと思ふが、しかし、今日の時世では云ふ迄もなく、將來に渡つても、私が渇望するやうな――それによつて、わが半生の夢を啓かれるやうな――思想も藝術も、この國には現はれる見込みはないのかも知れない。

根本問題は別として、民衆のために、いゝ藝術を鑑賞させる道を開くといふことには、誰れも異議はないであらう。帝劇でも歌舞伎でももつと入場料を下げて輕便に見られるやうにすること、小說でももつと定價を廉くして廣く行渡るやうにすること、古來の名畫なども富豪の倉庫にばかりしまつて置かないで、博物館へでも寄附させて、何時でも見られるやうにすること。さういふことの實現につとめるのは、粗製濫造で、しかも民衆自身もあまり好みもしないらしい、所謂「民衆藝術」なんかを造るよりも、實際に於て効果が多いだらう。

ここまで書いて、今ふと思出したが、先日本鄉座で觀た小楊月樓の支那芝居はなか／＼面白かつた。言葉がちつとも分らないので、時々退屈したが、あれなどは、いゝ意味の民衆藝術であらうと思はれた。支那の藝術はなか／＼馬鹿にならないと思はれた。筋書を讀むと、着想結構ともに凡庸で心を惹かれるところは何もないのであるが、觀てゐると面白い。技藝がうまいのである。非常に稽古を積んで鍛へ上げられてゐるのであらう。特色としてゐる立廻りが、とても日本の劇場のやうな粗野なものではない。立廻りを得意としてゐる左團次一座や澤正一座はあの支那役者の藝術的立廻りを觀て、自から省みたらよからう。それにつけても、技藝の力が思はれる。民衆藝術でも何藝術でも、これだけの鍛錬を經なければ人を動かすことが出來ないのだ。人のことよりも、私自身、この小楊月樓一座の所演を觀て考へた。

村松梢風氏の個人雜誌「騷人」の六月號に出てゐる「上海通信」には、ある支那の文學者が、「小楊月樓のやうな俳優が日本の劇壇に何を捧げて行くのであらう」と云つてゐるが、私はこの俳優からでも得るところがあつたのである（六月六日）

大衆文藝に對する不滿と希望

藤井眞澄

長い間期待されてゐた大衆文藝も、今日ではだいぶ育つて、其中でもチョン髷物の如きは最早や全盛を極めて居るのではないか――と思はれるやうな有樣になつて居る。もうこれほどに育てば、現在に就いての不滿や將來に向つての希望を少々くらゐ述べても構はないだらうと思ふ。

大衆文藝と云つても、矢張り大きな廣い一般大衆の文化を背景として生れるもので、取りわけ其演劇や映畫とお互に因となり果となつて育つものであるから、今こゝで其不滿と希望を述べるに就いても、さういふ他の藝術の諸問題にも觸れて來ようと思ふ。

髷物は現代物に較べて、想像力を伸ばす範圍が廣く、新しい科學的智識もそれほど必要でなく、其上官權の監督がいくらか緩るくなるので、多少らくに、そして早く發達した。白柳秀湖は歴史的觀察の點で、白井喬二は筋や組立の點で、中里介山は佛教的な寂かな或る氣分を出す點で、國枝史郎は新しい空想力の點で、夫々に秀れて居る。なほ其他の數氏もそれ〳〵相當立派な獨特な手腕を示して居るやうである。其中の或作の如きは、世界的な舞臺へ出しても、恥かしくもなからうと思ふ。

然し「偉大なる國民歴史小説」といふやうな大きい理想的立場から觀ると、まだ〳〵澤山な不滿がある。例へば世界的に有名な歴史小説家のチューマやシエンキウイッチやメレヂュコフスキーやアナトール・フランスなどに較べると、餘ほどの距離があるやうな氣がしてならない。之につけても思ひ出すのは、今日の日本といふものが、貧乏で其上落付がなくて、ゆつくりと大作をする餘裕を與へなさ過ぎる――といふ事實である。

目下最も興味のある現象は、以上のやうな作家の物が頻りと映畫化されつゝあるといふ事である。外國物の事は今は云はない、日本物の中で僕の見たのは、渡邊霞亭の原作「大楠公」と行友李風の原作「修羅八荒」と前田曙山の原作「孔雀の眼」の三つに過ぎないが、三つとも夫れ相當な成績を示して居たと思

ふこの[illegible]といふ事は、[illegible]
はいやな[illegible]
[illegible]果を齎らすもあらうと思つて[illegible]
[illegible]の上ふことは、自然[illegible]や前田課
由の所作一概ゆる滑稽になせ[illegible]合に[illegible]技助し
たとは云はれなかつた[illegible]
いた、諷刺には[illegible]
[illegible]しもう[illegible]なからうと思ふ。

[illegible]に現代劇の[illegible]

[illegible]

[illegible]といふ事[illegible]中門伊之助の作[illegible]
[illegible]の點で特殊な力[illegible]
[illegible]といふ[illegible]
[illegible]認め[illegible]
[illegible]してゐる[illegible]
[illegible]人[illegible]何[illegible]多少の疑問
[illegible]いかにも[illegible]
[illegible]日をかある。

[illegible]といふ
[illegible]日本[illegible]といふ[illegible]
[illegible]今も[illegible]
[illegible]の日下[illegible]して居る日本[illegible]
[illegible]居る様で、[illegible]の一日
一日[illegible]この[illegible]に[illegible]てよ
[illegible]であつて[illegible]である。今後現代
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]

こゝまで來ると、何うしても大衆へ何か新た[illegible]を引合に出して來なくてはなるまい。

ロシヤでは先づ例のドストイエフスキーを思ひ出すが、之はとても偉大なので、日本の作家に較べる事は非常に困難である。然し、斯ういふ偉大な作家も、現代物大衆小說家の仲間に加はつて居るといふ事丈は、よく〳〵心得へておかなくてはならぬ。トルストイやゴルキイやアルチイバーセフなどの或作にも、大衆小說の中に加へてもよいやうなのが少々はあらう。ロシヤ革命後に現はれた最も偉い作家は、イリヤ・エレンブルグであらう。長篇小說として「フリオ・フレニトと其弟子等の奇妙な旅行」「ニコライ・クルボフの生涯と破滅」などがある。構成主義小說の「トラストDE」は僕も一寸讀んだが、最早や斯ういふ作になると、現代物といふよりも、將來物と云はなくてはならない。

アメリカのヂヤツク・ロンドンは、僕の最も愛する現代物乃至將來物の大衆作家である。次いでアプトン・シンクレアがあるが、ロンドンに較べると、ずつと劣り、弟分といふ感がある。然し、シンクレアくらゐの作家さへ、今の日本には見受けられない、甚だ心細いではないか。

之につけても思ひ起すのは、日本のプロレタリア作家が揃ひも[illegible]一般大衆[illegible]心要[illegible]大衆[illegible]には[illegible]くこゝにあるのであるから、新しく起る若い作家に、是非とも、此點に努力するよう此際特に切望して置く。

最後に、歷史物にして現代物乃至將來物にしろ、今後新しく起る筈の大衆文藝の內容精神に向つて、多少の刺戟と暗示を與へるといふ意味で、僕の年來願つて居る理想の要求を甚だ簡單ながら列べて見たいと思ふ。

先づ第一に、通俗的である事。此事は云ふまでもなく大衆物の原則であつて、面白く分り易いといふ意味も含まれて居れば、人情や習慣の俗に通じ、その眞底に徹底しなくてはならないといふ意味も含まれ居るのである。

第二に、陽氣な事。之はつまり光明的な事で、一般大衆は虐げられた苦惱の生活に沈淪して居るものであるから、陰氣な、じめじめした氣分は禁物である。たとへその前半は薄暗かつても、後半は、少くとも最後の點だけは、何等かの意味で光明を示す事が必要であらうと思ふ。此點で智識階級專門の藝術とは、正反對になつて居る。

第三は、なるべく英雄を活躍せしむる事。此の英雄は一般大

衆の良心であり、又彼等が選出した代表者に當る。生きた一箇の人間が之になつて出て來るに越した事はないが、或る主義或る信仰のやうなものに象徴しても構はない。

第四は、一層科學に基礎を置く事。たとへ宗教的な力が出て來たり、奇蹟が現はれたりしても、其底に新しい科學的な根柢があつた方、より有難たいのである。さういふ意味から表現主義や構成主義の藝術をば、科學的想像とか科學的空想とか或は科學的飛躍の藝術などゝいふのである。

第五は、その背景を國際的にするのも面白からうといふ事。世界を股にかけた大衆小說！さう云ふものが此の日本から生れて貰ひたい。

第六は、社會意識を忘れない事。實を云へば、階級意識に常識にして了ひ、マルクスなどは卒業してゐて貰ひたいのである。

第七は、民族意識を高調する事。之は前の社會意識の横に對して縦になるわけで、兩々相俟つて完全なものになるのである。が、今日までの世界思潮では前の分は最早や十分表出されたやうであるから、今後は後の方を特別念入に高調する必要があらうと思ふ。大きな民族を背景にする事は云ふまでもないが、小さい民族——日本で例へれば或はアイヌ系或は琉球系或は北支系或は南支系、或はユダヤ系などの最もこまかい問題をも、取入れる事などである。

第八は、日本人種獨自の氣分を十分に掴んで、なるべくこれを中心生命とする事である。其爲めには儒教や佛教の混らない原始日本人乃至純粹日本人の氣質をよく〱理解する必要がある。つまり此一ばん長い深い強い生命の傳統が、將來の日本人の運命を支配する譯であるから、此生命力をこそ、大衆文藝の上で一大飛躍を試みさす……まアさう云つた具合である。此點は僕の目下一ばん興味を以て居る大問題であるが、豫定の枚數を過ぎたから、これまでにしておく。

結論として希望したい事は、世界に類のないやうな立派な日本的大衆文藝を建設するに就いては、適當な作家に、十分な餘裕を與へる事である。今日のやうな有樣では、人氣作家になる事は、ひ、つ、ぱ、り、だ、こ、にされ、小さく切賣りにされ結局大いに伸ぶべき其生命力を絞取られて了ふ事になる。

大衆文藝の問題は、單に文藝丈けの問題ではなく、日本民族の將來の浮沈にも大きな因緣を有つて居るのであるから、國民は上下倶に力を併せて、この新しい創造に向つて、相當な後援をしなくてはなるまいと思ふ。（大正十五年六月七日夜）

大衆文藝分類法

直木三十五

一

何が「文壇小說」で、何が「大衆文藝」か？　こんな事に定義を下さうとする位、下らない事は無い。下しえられるものなら、暇な學者は何うぞお下し下さい、であるが今の「赤本小說」「貸本屋小說」と今の「大衆文藝」とは何うちがひがあるのか？作によつて分けるのか、手輕く作者別にしてもいゝものか？早い所、こんな物は何う區別するかと聞かれて、明瞭（はつきり）と云ひ切れるか何うか？例へば、エドガー・アラン・ポーの「黑猫」「黃金蟲」の如き。その題材から云へば確かに「大衆的」であるが、その表現法から云へば立派な藝術品である。

だが、總て物はそう徹底的に考へると、むつかしくなつてきていけない。だから介山、齋二氏らの作を「大衆文藝」の適例として見ると——それでも、浪六は何うだ、涙香は何うだと、そう古い所のは論じない事にして——では通俗小說と、大衆文藝とは何うちがふのか？輕文學、娛樂文藝、新講談、讀物文藝、新聞小說この區別を示して個々の例を擧げよ、と——だから、だから君、初めつから、そんな定義をきめるのは下らないからと斷つてあるのに。

二

だが、反文壇小說の一現象とでもして見るなら——文壇小說とは藝術小說の最下等たるものをいふ、と、これは立派な定義である——いくらでも、文句とか、講釋とかは、云つて云へ無い事は無い。第一に、文壇の人々は日露戰爭後二十數年を經てやう／＼今までに仕上げてきたのであるが、吾大衆作家は僅に震災後僅々三年間の發達であると、だから、これから十七年經つたなら何うなるのか、これは多分素晴らしすぎるだらうと、この言葉は十六年間は安心して使つてゐてもいゝものである。

又「せめて、ユーゴー、トルストイの作位の物をかゝなけりや」といふ文壇人の數人に對してはこう答へてやるがいゝ、「お前さん達の中に、それでは居るんですか」と。松岡普殿の「身

邊雜事」程度を「心境」などと名づけ、武羅夫の「株屋小說」を「本格」と稱し、秋江の「賴朝」が「戲曲」で、堀木克三が合評會員だと、だから「大衆文藝」が賣れてきたのなら、何といふ日本の小說讀者は高級にして尊敬すべき人々なんだらうか？三十年前の「探偵小說」と、そう大してちがひもしない「大衆文藝」を文壇小說に飽いて求めたとは！

三

だが、僕をして云はしむれば決してさういふ理由からではない。印刷術が發達し教育が普及して讀書力が增加したから、科學の本も賣れるやうになり、スポーツ專門の雜誌も出で、新聞の發行數も增加し、その一部として大衆文藝も存在の餘地を見出したと、たゞこれだけの事である。もし反文壇小說氣運によつて雜誌「大衆文藝」の同人十一人が出たものとしたなら、氣の毒に中央公論はぐん／＼減じる筈であるが――を分、さうでは、あ、る、ま、い、である。

然し、もう一つの見方、度々「文藝春秋」に書いた私の考へ方をすると、文藝志願者よ、もし菊池寛の名聲と、財産とを得たなら、大衆文藝へ入り給へと、何故かなら――。直三の哲理、純一郎の味噌を、電車の中で讀みつゝ、いや近頃はそれも讀めぬ位に忙がしい世の中である――ですよ、映畫、カッフェ、ダンスと、確かに文壇小說よりも面白い興味であり、尚其の上理は、タイピストの美しさによつて瞬間に忘れさせられるし、街の教會では、決して世間の勤めの時、夜のラヂオ時まで人間に妄想を醒らさない。反つて父教會へ集つた百年前に較べて、現在の都會の享樂的機關は全くいかに數多く魅力的になつてきたか！

嘗て「精神の糧」であつた、膝を正し、襟を正して讀んだ昔の讀書「四書、五經」より、今日の讀書力の增加による戲作、小說の類となり、今や教育普及して「大衆文藝」と、享樂的方法の一つとしか讀書を取扱はないやうになつたのは、これ人生の、人間の自然にして、文藝それ自らも、十九世紀末をもつて所謂人生研究の文學は打止めにしてしまつてゐるのである。――だから明日は「映畫」を、と書いたのは勿論私のこじつけであるが、人間が「大衆」が最早、大真面目な、しかめつ面の小說をのみ好んで人生の意義、人間の性質のみを求めてゐると考へてゐる事は大まちがひで、そういふ特別な殊勝人も又決して人生から消失しないと共に愈々益々多くの人々はたゞ感覺的生活、享樂的生活に焦燥してゐるのみである。探偵小說の流行大衆文藝の隆盛はこの要求の一部分の現れで、享樂生活中の「讀書」の一項目に基いてゐるだけのものである。

四

だが、少し私の失禮な申分を許せ。何んといふ現在の「大衆作家」の多くは、赤本作者であらうか？彼等の幾人かは、文壇の落第坊主である。と云つて惡いなら逆に文壇人共の「大衆文藝」は又、何んといふ拙さであらう？と云つてもいい。それは單に小遣取として許してをけることでは無い。大衆作家としても、文壇作家としても才能の無いことを示すだけのことである。

もし、こういふ物の云ひ方をよすとしても、それでも當時の浪六の示した情熱、當時の涙香の怪奇ささへ多くは無く、何んといふ文章のまづさ、見えすいた構想、露骨なる教訓、ぴんと來ないテーマ。淺薄なバテレン趣味、手輕なトリック。恥かしくもない模倣どれも、これも筋の興味一つだけ、もし、今のままなら、私は名を擧げて忠告する。仲も、喬二も、亂歩も、史郎も、又文壇の第三流人が飽かれた如く飽かれ、取材が枯渇し、文壇人に「學問」が無いと云はれる如く、そういふ點だけでも信用を失ふであらうと。喬二を除いて誰が、當時の習俗さへ研究してゐるかを。そしてそれ一つの研究だけでさへ、あの三田村鳶魚氏が、可成りに多く讀まれてゐるではないか？あの中途半端な書き方、研究でさへ——。

[illegible]ために、分類法をもつて、かくの如く多いが、この大衆文藝の爲めに愛されてゐる。一人が一種々のそれを刊行してゐるなら、何といふ素晴らしい幾十人の大衆作家が現れてくる事であらう？それを數へやう。併て、押川春浪は少年小説家として今の誰よりも永く廣く少年の内に存在してゐたで無いか？ 又、一人のスポーツ小説家が出て存在できぬといふ理由が何處にある。そしてスポーツ作家が「大衆作家」でないといふ論理が何うして出てくる？もし、出て來ないとしたなら「大衆作家」よ、御身の前途は洋の如く洋々としてゐるのである。祝福すべき哉である。

五

分類もいろ〳〵に出來る。現在までの大衆的な作を假に十部門にでも分けるとすれば

一、軍記物として雜賀戰記とか、天草軍記とかに現れたりと雖も一種の中であらう。

二、は政談、白浪物とでもして一つに纏めてもいゝし、二つに分けてもいゝ。鼠小僧とか、白木屋お熊とか、お七吉三とかの類で、大岡越前、曲淵甲斐の出てくるものである。

三、は俠客物

四、は仇討物、仇討と一口に云ふが可成の範圍は廣くて各種類に關係してゐるが獨立させてさせられないことはない。

五、お家騷動物、伊達騷動とか相馬大作

六、人情物、洒落本の類

七、怪談物の類

八、傳奇物、こゝへ一緒めにして金平本とか、八犬傳の類を入れてしまふ

九、敎訓物

十、戯作物、八笑人の類

即ち、芝居、講談と連絡してゐる古い型の大衆物であるが、もう少し明治時代に入ると、戀愛小說、家庭小說、探偵小說、といふ名の下に、春葉、幽芳、霞亭、思軒、涙香と、そういふものは今なら、明日からでも、大衆文藝と名づけられていゝ多くの素質を持つてゐるものである。そして、この程度の燒し直しで——いやいかに多くの燒し直しが横行してゐるか？——いゝなら、大衆作家よ、右の一種を專心に研究し給へ。少くも露伴氏の智識と、もう少しいゝ文章とを、それだけで昔の作者のプロットは、立派に現在の大衆文藝愛好者には、一夕のラヂオと同じ役目を務める位のことは十分であらう。

六

ただ、谷崎潤一郎氏の諸作も「大衆文藝」である。明日の「大衆文藝」はあの位に——と言出してくると右の分類法では少し困つてくる。

江戸川亂步氏に多少谷崎氏の趣味があるが、これは科學上近代生活から生れた病氣であるから、近代生活が變らない以上、いよいよ要求は多くなるであらう。そして、それは只變態性慾のみでなく恐怖又は怪奇に對しても異常の興味を人々に抱くやうになるにちがいない。支那術も文獻らしい恐怖を與へるに十分であらうし、埋葬法者の參考書の例のごとく、東西刑罰史、支那の拷問史、後者、これを性慾と適宜に混へて、或は若い燕に、モダンガールに、法醫學の書より、支那拷問の變態性慾本、冬夏社版のハバロックエリスの性慾學と、手近の二三冊の參考書からでも、「現在」の大衆作家の取材の如き、無雜作にしてつきる所を知らないであらう。

次には、科學小說、又は學術小說とでも稱すべき種類である。ウェルスが一人でこの世界を占めてゐるが「タイムマシーン」「黒と白」の如き、誰かの「四百萬年後」の如き、又大衆の興味を索くに十分であつて、正木、小酒井氏が彼等の專門的智識

によつて、[illegible]をもつてゐる[illegible]の國より[illegible]も、大衆作家好學の風は、何よりも必要なことである。曾て人類の奇怪な空想に「月世界旅行」を生むだが「發見及び發明」に對する人間の情熱と興味は、猶「白と黒」の如き物に十分の現實性を與へさへしたなら、大いに人々は喜ぶものであらう。探偵小說の一轉化方面として近頃この科學的研究へ來たのは當前の事である。

第三は、ジヤツクロンドン原作、堺利彥譯の類である。當然これも大衆的でなくてはならぬ。宣傳を、思想を、批判を傳へるものとして、人に興味の最も多い題材を取り、藥を砂糖にまぶし、小乘說教によつて極樂へ導くのは、永久不變の對大衆的方法である。或は歷史的事實にかり、或は異端世界の假想物語とし、戀愛小說の皮を冠り、これを骸骨にしては、朝鮮作家、琉球作家、アメリカ移民小說と、それでも一種一人位の作家は立派に生存して行けるであらう。そして、これは藝術的であるよりも一般的に一般的は大衆的だらうと、こう考へてはいけないか？

それから、都會の享樂的、感覺的な事、半分に探偵小說的に、三分の一は極めて淫蕩に、五分の一は鋭い批判を、時には一脈の正義感をもつた、そしてその小說から流行が生れると云つ[illegible]大衆にして[illegible]作家にたるなら主としてこういふ研究をする[illegible]小說でもあり、戀愛小說でもあり上述以上の[illegible]。

それから、押川春浪が死んでいかに久しく彼程の少年小說家は出ないか？一人のスポーツ作家、佐々木邦はいつも親父とその友人が話をして子供が聞いてゐるだけであるが、彼一人であるが故に――せめてオー・ヘンリーの半分の才人でも出よ、マクスオレールよ、シエンケウヰチよ、エリオツトよ、彼等の示しておいた手本は「大衆文藝」で無いと誰が云ふか？「大菩薩峠」が「大衆文藝」の代表作なら、一年後の私の「未來三代記」だつて代表作だらう。もう少し學殖を、機智を、批判を、そしてそれを興味の多い題材に――。それから表現を藝術的に。

結論を云はしむるなら、空想を現實的迫眞らしくする力を藝といふ。嘘を實に、僞を眞に感ぜしむる力。これが藝術であつて、それを最も興味深い題材に使用せよ。これが大衆文藝の上乘なるものであると。例へば、ボーを見よと。何んと云ふ當り前の話だらう。そして、いかに一人も現代の「大衆作家」は當り前で無いのか？だが立派にそういふ文學の將來は勿論―・あるだらう。なければならぬ。勉强だ。君！

大衆文藝について

宇野浩二

大衆文藝などといふ言葉はいつ頃いはれ出したのか知らないが、その意味はよくわからない。大衆に興味のある讀み物といつても、どんなのが大衆か、どんなのが興味があるか、そんな事は容易に分るものではない。近頃もつともらしい說として、所謂文壇の小說がだん／＼偏狹になつて、つまり作者の狹い心境や狹い身邊を書いたものが多くなつて、一般の讀者に飽きられたので、誰にも興味のもてる、誰にも分る讀み物が歡迎されるやうになつた。それが大衆文藝が起つた所以だといふのがある。しかし、そんなことはない。

近頃、同じやうな流行言葉で、心境小說とか本格小說とかいふ言葉がある。がこの言葉などもひどく曖昧なもので、小說は作者が彼の身邊のことを書かうと、空想の世界のことを書かうと、その作者の心境小說でなければ意味をなさない。さういふ點で、現今大衆文藝と稱せられる讀み物にはその作者の心境などは全くうかゞはれない。所謂通俗小說と呼ばれる讀み物などもその亞流である。今の大衆文藝や、通俗小說の作者のやうになら、誰だつて、敵討の話でも、殺人のことでも、探偵のことでも、キリシタン・バテレンの話でも、華族の家の悲劇でも、勞働者の內幕でも、戀愛でも、心中でも、何でも書ける、讀み物として、大衆の讀者が喜ぶ程度には書ける。しかし、そんなものは大衆文藝などといはずに、大衆讀み物とでもいつておいた方が穩當だらうと思ふ。もつとも大衆讀み物といふものは昔からある。講談速記、それから新講談と進んで來た讀み物がそれだ。今日の大衆文藝の作者の幾分かは、この系統の作者であるらしい。系統などはどうでもいゝ、毛蟲から蝶になることもある。だが、私の見るところでは、多くの大衆文藝の作者と、新講談との區別は幾何ぞやといひたい。あれよりもこの方が幾らか藝術的だとか、幾らか高級だとかいふことは問題にならない。或はあれよりこの方が讀者が多いとか少ないとかいつても、そんなことは小學校の算術の問題にもならない。どんな作品が大衆に歡迎されてゐるか、どんな作品が少數の讀者に愛されてゐるかと調べたところが、それは讀者の頭の問題である。

讀者の頭は、お伽話から、少年小說、[illegible]、[illegible]、[illegible]愛小說、とだん／＼進歩して來るものであるし、いつ迄でも新講談で滿足してゐる頭もあるし、不斷は高級な小說ばかり讀んでゐても、寢床の友には講談を愛讀する頭もある。一體、大衆とは誰のことだ。

私の考では、或意味で、文藝といふものは、どんなにしたつて大衆のものではないのぢやないかと思ふ。かういふことを迂濶にいふと、方々から抗議が出さうだが、これはどんな抗議も見當違ひの外に、議論の餘地はないことだと思ふ。作者にそれぞれの才能があるやうに、讀者にもそれ／＼の才能を必要とする。

多くの大衆讀み物を見ると、作者は何か讀者を喜ばしたり、驚かしたり、はら／＼さしたりすることばかりに、全力をそゝいでゐるやうに見える。そんなことを考へてどんな文藝が生れるかは、神でなくても、目のある人が見たら分るだらう。今日の文壇の或種の小說がどんなに偏狹で、身邊雜事に墮してゐようとも、作者は彼自身の心境に忠實なところに賴もしさがある。自然、その心境を深め或は擴めて、身邊から進んで廣い人生に押しすゝめて行くことを志さない筈はない。作者は到頭その志を死ぬ迄遂げられないかも知れない。が、それでも彼は生き甲[illegible]、私には[illegible]き詰まつてゐるとは思はない。或は行き詰まつてゐると思ふことは勝手だが、人生と、そして文學に眞面目で忠實だといふことが出來る。兩樣は彼等を見捨てないであらう。時として、私も亦、今日の小說家の所謂身邊小說を讀んで退屈することがある。が、その作者を考へて、寂しい氣はしない。といふのは、彼等は生きてゐるから。が、私は幾つかの所謂面白い、飽きない（實は飽きる）大衆文藝の讀み物を讀んだ後では、作者の心が寂しくならないか、といつも心配するのである。

嘗て或人が大衆文藝といふ言葉に贊成して、今の日本の大衆文藝はいけないが、トルストイやユーゴーの或種の作品は立派に大衆文藝であるのだから、それを手本に大衆文藝の作家たるものは勉强せよといふ意味の論文を書いてゐたが、その意味の大衆文藝を今の大衆文藝の作家に望むことは、木によつて魚を求めるといふ程の無理だらう。寧ろ、どちらも無理だとしても、矢張り今日の所謂「文壇的小說」（その論者はかういふ言葉を使つてゐた）を書いてゐる作家に求めるのが當然である。斷るまでもないことだが、私がそのいづれに屬する作家であらうとも、私はさう信じるのである。因みにトルストイやユーゴーの、その論者の所謂大衆文藝的作品にしても、讀者を目安にお

いて、つまり大衆を目當にして筆を運ばしてある部分がよいのでなく、彼等の藝術的天分の溢れてゐる部分がよいのであることはいふ迄もない。

大衆文藝と現實暴露の歡喜

白井喬二

大衆文藝論を心行くばかり書く段になれば、尠くとも五百枚書き綴らなければ書き盡せ無いやうな氣持がする。是れを思ふ時に、私の脳には充分それだけのコクが浮び上つて來る。其の中には勿論大衆文藝の系圖、丁度あの源平藤橘諸家の系圖の様な、または植物の類似説明圖の様な其れの分類圖までも浮び上つて來る。祖先、曾祖父母、祖父母、父母、其子、其孫、其の各自が持つ脈絡、丁度さう云つた風に、其の演繹するところの諸相が、整然または紛然として、目に、頭に、浮んで來る。海行かばみづくかばね、果しなき航路の旅を感ずるのである。だが亦、卒然として其反對に、一行も書く事が無いやうな空漠な氣持もする。

そもそも大衆文藝論を一體誰に讀ませやうとするのであらうか。

それなら、どつちの氣持の方が本物か、又は分子が多いか。本物僞物の區別は今にわかに斷定は出來難いが、分量の點から云へばどうやら後者の方に軍配が上りさうだ。私はしばしば、淺草邊りで開かれる某會の通俗講話の集りに一席大衆文藝論を口演することを頼まれるが、其の都度、聽衆に向つて大衆文藝論を語つて聽かせてるヘマさ加減を思ひ巡らしてドウしても其れをやる勇氣が出無い。それではなぜ大衆文藝論を口演する事がヘマであるか、そのヘマ認識には根據があるか、つまりヘマ論の依つて起る所以を闡明しなければならぬ順序となるが、逆史式にこの邊からほぐして行く方が私一個の思想を述べるには都合がいゝから、矢つ張り事の順序通りこゝに本論の端緒を据ゑることにしやう。

だが、勿論さういふ事、即ちヘマ乃至其の反對者語中のウソ

(附註)などゝいふ言葉は日本語の内でも最も曖昧な熟語で、一發でスポンと言ひ現はす事の出來難い境地である。換言すれば幾つもの因數が寄つて一數を成す如く、幾つもの背景が相寄つて始めてヘマ的環境を構成するのであるから、其の說明には可成りの經路を要する。既に一語ですらこの通りであるから大衆文藝全體の本質を論ずる日になれば、冒頭に述べた如く數百枚を費すも猶ほ足らないほど、複雜多岐なる因數集合的定義を、而も漸くにして下し得る事になりはしまいかと思ふ。

大衆文藝を街頭に立つ一つ一つの實際問題と見る私としては、これを單なる文藝論としての論じ方で片付けて行くのは、折角の鮮魚の生きを自から祭檀に祭つて腐肉とせしむるに等しい所業だと思ふ。大衆文藝が實際問題として現はれて來たのなら、それを論じ迎ふるのも當然實際問題として取扱はなければならぬ。實際問題は要するに實際問題で、一片の理窟で論じ去れないいゝところと困つたところとを持つてゐるのである。だが、それは實在だ。そこに大衆文藝の强味があり、また餘程複雜に考へて其れを觀察しなければならぬ所以が存在して居るのだ。

私が思ふに、日本では蓄音機も、活動寫眞も、ラヂオも成功してゐない。これは日本ばかりでなく外國もさうであるかも知れぬが、それなら日本といふのを人間と直してもいゝが、兎に角ノ蓄音機の持つ本質、活動の持つ本質、ラヂオの持つ本質、さういふものを受け入れることつまり呑み込みたつて、とつくり頭にいゝところに觸らない内に、定義的に目に立つ內側のみがズン〳〵發達して、そして遺憾ながら功利追求した時代思想が想像した其のよさにどれもが遂に到達してゐない。人間が早急なるために、與へられたるものゝ半ばをも享受し得ないで終ふものと見える。ところで大衆文藝はどうであるか。

元より大衆文藝は器械ではないが、そして渡來したものではないが、早くも寵兒になりかゝつて、やいのやいのと、私一個としては未だじつくりと、蓄音機のやうにならずに、活動寫眞のやうにならずに、またラヂオの樣にならずに、要するに今度こそは其本質の全豹に突き當つて、藝術のポンペイ市を掘り起さなければならないのに、オペラポンペイ座の屋根だけ掘り出したところで御苦勞樣といはれて終ふのは如何にも殘念である。ポンペイ市が始めから分つてゐるなら其屋根を、瓦を、柱を、床を、少しも傷けずに掘り返す事も出來やうが、さうでないとすれば、一鍬々々、後から笑止な徒勞も、其れは止むを得ないのである。さういふ大衆文藝の陣痛時代を、一體どういつて子供の自慢をすればいゝのであらう、文藝は瞬約したところが仕方がない、間違つても法律では罰されないであらうが、其代り

まだ生れぬ子供の自慢をする淺草の大衆文藝論の口演は始めからヘマにきまつて居るのであるが、其處で私に考へて、いはゆる「不言實行主義」が一番いゝと思ひ、最う一度いはせて貰へば、即ち蓄音機とならず、活動寫眞ともならず、ラヂオともならぬやうに、はやまるな主義で、ジツクリと、人間の子供が十ケ月で生れるものならば、大衆文藝は先づ差詰め十年と目標を置いて、私一個としてはさういふ決心で、それゆゑに「十年批評する勿れ」と主張して、これまで無宣傳無辯解主義でやつて來たのである。其れゆゑに、「大衆」といふ言葉は可成り早くから私が使つてゐるが、私としては其の發言者だと思つてゐるが、決して「文藝」と食つ付けた覺えは無いのである。いつの間にか大衆文藝といふ立派な名前が附いて、さつきいつたやいのやいので、好かれ惡かれ寵兒となり賑つて來たのは、扨て彼れに取つて果して幸福であらうか。私一個としては藝術家諸氏の批評が、失禮な話だが、邪魔になつて、向ふに向つてやりかけた仕事、其仕事をしながら耳裏の囁語を、かけまい〳〵と思ひながら氣にかゝり、其れがげに尤も千萬な言葉だけに、猶更ら強く身にこたへてエ、藝術にしてしまへと、短氣な考へも起るのであるが、そういふ時には私は私の憲法「文學者としての虚榮を捨てよ」を三遍唱へてやつと落着くのである。何にしても萬衆環境のたゞ中で十年辛抱して、じつくりと、蓄音機にならず、活動寫眞にならずに、ラヂオにならぬよう物にしやうとするには、並々ならぬ苦行を要する次第で、其結果、假へうまく行かなくても罪を十年の年月に嫁さうとする譯では無く、總ては己れの天分にある事と、諦らめるより外仕方がないのだ。だが、今はまだ、今云つた十年計畫の、私はそれを約五つに區分してゐるが、其第一期の雰圍氣構成時代を漸く卒業して、これから始めて第二期の大衆文藝醱酵時代に入らうとしてゐるので、私一個としては今が丁度さういふ時期に當つてゐると思つてゐるのである。其れなら後の、第三期、第四期、第五期は、だがそれは未來の事であるから例の口演と一つ事で云ふべき限りでないが、私には勿論そんな事は出來まいが、大衆文藝そのものの本質は、全くその位ゐに複雜でまたじつくり辛抱すべきものだと考へてゐる。

恐しく氣の長い話だと考へるかも知れない、大衆文藝の到達すべき理想郷があるなら早く完成したらよからうと云ふかも知れない、現に大衆文藝の定義を示して、そんなに謙遜しないで、早く此の階段を上れと、まアかういふ風に聲援する人もあるが、其人には定義的にハッキリ大衆文藝の形を感じてゐて云ふ事であらうが、だが其の形を感じた原動力たる底にある藝術

覺が、其根本觀が非常に因習的な物であると云はれるのである。其因習的藝術觀の上に形作られた大衆文藝の殿堂へ、上れと云はれてもそれッといふ譯には行かないのである。それは最に花々しい道で、また好ましい道であるが、其れにもかゝわらず大衆文藝は、もう少しじつくりと、人工的でなく、雰圍氣、醱酵、さういふ言葉に相應しい程の調子で、まどろかしがられても、本然的に、流行的でなく、其處に到達しなければならないのである。其處がとりもなほさず大衆文藝は實際問題だと喝破する所以なのであるが、なら、それなら、何が故に實際問題なのであるか。之はさつきのへマ認識論よりも、大衆文藝の本質に觸れてる問題だけに、其説明はなか〳〵六ケ敷いのであるが、私自身にはよく分つてゐるのであるが、其れをハツキリどう云ひ現はしたらいゝか、凡そ千百の例を引かなければ其れを引いても分る人にしか分るまいが、今そんなに澤山な例を引いてるいとまが無いから、兎に角どう云ふ風にか其れを説明して見やう。

世界で文豪といはれる人は幾人あらう、又文學者の列に加はる人は幾人あらう、昔から今まで。それは誠に驚くべき多人數に違ひない。そしてそれ等の大小の文學者が、ペン先きから書き迸ばらしめた文字の數は、其行數は、亦驚くべき算表を示すであらう。だが、其の内のだれが、己れの小説の一行でも、全

くい後に、しこ云ふ時は、[illegible]多くとも、これは絶對に否應の事實なのである。この事實は、何アんだ當り前だといつて了ふかも知れぬが、だが恐らく誰り意識的にはおへてゐない、然し重大な一つの事實、而もどうすることも出來ない一つの事實なのである。されば藝術家最高なれとたれか云つたかどうか知らぬが、何と羨やむべき境地を一般の讀者は持つてゐるではないか。だが、藝術家同志が己れの作品でない他作家の小説を讀む時の、其の豫知無しの讀者心理をも、それをも羨やむべき境地とはいはれない、とかう思ふのである。其れは純粹の意味で、絶對に豫知無しとはいへないのだ、何となれば始めは原始的であつて今は後天的の修養となつた、乃至約束的感覺となつた、藝術家共有の一種の熟達神經が或種の豫知を以つてこれを讀み、これを受け入れて消化諒解して行くのだから、彼の多くの豫知無しの讀者と其境地を同日に談ずる譯には行かないのである。其處に大衆文藝の實體が横はり、その不可侵獨個の讀者境地こそ理窟で行かぬ實際問題と云ふのである。文學は、藝術は、小説の實體は、さういふ約束的修養を知らぬ物を度外視し、または度外視はしないが向うが教養がないのでどうにも仕方がなく、つまり向ふが勉強して小説、それほどが分るところまでやつて來いと云ふほど、それほ

どの者なら、それは娯樂物ではないか。私が思ふに小說の本體はさういふものではないのであるが、今云つたやうに藝術家は豫知無しに讀む境地を奪はれて來たために永い間にそのいはゆる實際問題を忘れてしまつて、其の豫知（藝術）のみで讀む形式が發達して來たものと思はれる。だが實は、それは佳作の價値は充分にあるであらうが、だがそれだけでい丶と思つたとすれば、それは餘りに享樂的娯樂的な考へ方だと思ふのである。大衆文藝はさういふ享樂的娯樂的な氣持ちを捨て丶、飽くまでも彼の實際問題を解決し、文學者の虛榮なんか踏みにぢつて、そんな事よりも無約束の人間のその不可侵獨個の無豫知の世界に沒つて、まだ千年も先きがある事だから、何といはれても、じつくりといくら癡兒になつたからとて有頂天にならずに、増して殿堂などに近溯に昇らずに、今少し雰圍氣構成時代の中で勉強するに限ると思ふのである。

前にも云つた通り大衆文藝とは計らずしていい名前が附いてしまつたものであるが、だが今日のま丶でも大衆文藝には違ひ無いのであらうが、然し矢つ張り雰圍氣構成時代の作品と見る方がい丶と思ふ、私一個としては明らかにさう思つてゐる。だが、この雰圍氣構成時代の作品はそれだけで獨立性が無いかといふと、それは充分ある事は今更ら贅言を要しまい。何となれば雰圍氣構成時代の作品などと思つて誰も讀んでる譯ではなく、亦それなればこそ雰圍氣が構成される譯で、そして亦實にこの種の作品は藝術家は蔑視するかも知れないが、約束無き讀者へ當てがふ物ゆゑ、實に正直で、そして向ふに共通の尺度がないから丁度眞劍勝負のやうなものなのである。其の眞劍の作者に對して娯樂作家とは之れ如何、讀者に迎合すればなりと藝術家は直ぐ附け加へるかも知れないが、私は迎合とは認めないけれど、假りに迎合としても一人の對者に對する迎合と、澤山の人に對する迎合とは此の「迎合」の字義が全く違つて來るのである。これだけ云へばこの地點の作品も亦獨立性のある事は一目瞭然とならう。此の作品が多ければ多いほど、此の時代が長ければ長いほど、大衆文藝は幅廣く、大きく、健全に、確乎不拔た發達を遂げる瑞祥と見ることが出來るのである。

大衆文藝に於てはかういふ悠々たる氣持が實に貴いと思ふのである。これは日本特有の文學の歩み振りかも知れぬ、或る評者は大衆文藝は昔からあるではないか、涙香、浪六、要するにそれの復活、また高く買つてもユーゴー翻譯物の刺戟、亦は純藝術作品に對する反動、さう云ふ樣な事をいふが、現在大衆文藝といはれてゐる物は、即ち其一つであるべき探偵小說は別として、其の何れとも亦別個の起因を成すものではないかと思

ふ。さういふ[illegible]的な[illegible]であつても[illegible]にしても、もつと必然的な原因に據るものでは無いかと思ふのである。若しさういふ文壇意識的の原因で大衆文藝が起つて來たものなればモット小さく完成して終りはすまいか。つまり讀者から「大衆文藝とはいふものゝこれならば充分藝術作品の域に達してゐる」といふ、私一個としては不思議極まる讃辭を賜はるやうな作品ばかりとなつてしまひはすまいか。だが、さうならずに食ひ止めてゐるのは、さういふ原因以外に必然的原因が磁鐵となつて地の底に埋つてゐる爲ではないかと思ふ。其處へ行くと、こんな事を云ふのは誠に濟まぬが、探偵小説は何だか段々小さく固りかゝつて居るやうな氣持がして仕方がない。そこを、探偵小説の方では亦、大衆文藝のまだるつこしさを見返してゐるかも知れぬが、この悠々たる味が分れば、地下に埋沒された必然的磁鐵の潜在が分れば、げにも探偵小説は今よりももつと幅廣く發達するであらうと思はれるのである。「探偵小説時代」來れりとの話であるが、然し作家が澤山輩出してもそれが直ちに「時代」といふ譯には行かないので、それは文壇意識又は團結意識の上からはさうであらうが、だがそれは大衆文藝意識の上ではまだ〳〵なので、さればこそ雰圍氣時代の長きを貴ぶのである。さればこそ大衆文藝が街頭に立つ實際間進んであるといふのであらう。[illegible]其、ラジオ、大衆探偵小説、又は大衆文藝、といふ風に數へられない爲には、殿堂に早く上りたがらずに、[illegible]で完成した大衆文藝といふ風にならなければならないのである。

定義式に大衆文藝を論ずる事になるとこれは容易であらうが、先づ本當に大衆文藝意識を闡明することになれば、どうしても斯ういふ風に交響樂的に氣分記述で進めて行くより外は仕方が無いのである。私一個としては本來は不言實行が一番いゝのであるが、然し雰圍氣時代の話なら少しは散文へあるまいと思ふので、正直なところを述べたのである。

この上に述べる事は、大衆文藝の内容使命の解剖であらう、これは大衆文藝が文藝の中心として立つ其の完成期を宿命として詳述しなければならぬので、其の中には先づ藝術意識の改立、さういふ事も大きい問題であると思ふ。それから其の後では大衆文藝家の心律、即ち心のおきどころ、心得、さういふ事も論ずる必要があると思ふが、此の中には社會意識がどこまで行き屆くべきかといふ事や、また平常私の思つてゐる「文章非惡論」を述べて、大衆作家はさういふ心律を持つことの必要である事を提言したいと思ふのであるが、だがもう與へられた枚數も盡きたし、其れに雰圍氣構成時代には或ひはお先き走りか

も知れないから、一先づこれだけで本論に一區切り付ける事にしやう。

だが、大衆文藝が名殘なく實現された時はどうなるであらう、さうなるかならぬか知らぬが、さうなる時の理想は現實然露の歡喜なのである。たとへそれが如何ほど社會の暗黑面、醜惡面を暴露してあつたとしても、それが眞實であればあるほど、其のあまねく讀まるゝ親しみの文藝は、まことに現實暴露の歡喜といはなければなら無い。

——一五・六・九——

姑く僕を語るを許せ

白柳秀湖

早稻田大學と僕

大衆文藝が勃興しかけて、文壇的作家（僕の平民社時代から呼びつゞけて來た語で言ひ現はせばブルジョア文藝の作者）の步調が亂れかけたといふことは、僕に取つてはさほどうれしいことではない。何故となれば、今の所謂大衆文藝には傑なるものはない。僕自身の書いて居るものでさへ、自分で滿足して居るものばかりはない。然るに誰が見ても碌なもののない大衆文藝が非常な勢で流行し、その流行に對して何等かの深い意義を提へやうとする批評の起りかけて來たといふことは、僕に取つては夜の明けたやうにうれしい。さうだ。長い〳〵不眠と煩悶の夜があけて、戸の外に雀の最初の一聲をきいた時ほどに嬉しい。

思へば長い煩悶の夜であつた。僕は敢て豪語する。大衆文藝の歴史は一面に於いて僕自身の煩悶の歴史だ。此機會に於いて僕が僕自身を語ることは、僕といふものに理解を持つ或る小數の人にはキット許してくれるだらう。僕の煩悶は先づ早稻田の講堂から始まつた。卒直に言はせて貰へば、僕はその頃の早稻田が僕に教へようとした純文藝論と、美學の講座とに全く不滿足であつた。

今日でこそこれは極めて平凡な、寧ろ當然のことかも知れぬが、僕が初めて早稻田に通ひ始めたのは三十六七年頃で、紅葉

が先に、[illegible]に、[illegible]
代であつた。さうして[illegible]と[illegible]との間に立交つて、[illegible]
が時々滋味のある、よい作風を見せて居る時代であつた。此時
代に於いて、早稲田に學んだものの、誰が坪内博士の純文藝論、
島村講師の美學に對して疑ひを持ち得よう。併し、僕はハッキ
りと不滿足であつた。其頃の僕としては、何故不滿足であるか
をハッキリと言ひ現すことは出來なかつた。併しそれも高等豫
科を經て、大學に進み、平民社の社會主義運動が、一部青年の間
に勢力を持つて來る時代になると、最早ハッキリと分つて居た。
それは要するに日本では坪内博士によつて代表せられ、現に世
界の思想界にプレヴエールして居る文藝論と云ふものは、巧妙
にあみ出されたブルジョア組織のつの結び目であるといふこと
が分つて來たからである。さうして此文藝論を土臺から支持し
て居る美學、即ち美といふものは、畢竟するに人間の實生活を
離れた、神韻縹渺の感念でありとする美學の思想も、確にいか
さかもので、吾々プロレタリアの立場からすれば、全然別個の
美學が成立たねばならぬといふことに氣著いた。さうしてその
頃から、僕の内部の爭鬪、即ち毎日々々學校が僕に敎へるもの、
注入するものと、僕自身の中心から生れ出ようとするものとの
鬪爭は日を經るに從つて激しくなつて行つた。此狀態は僕をさ
[illegible]
に[illegible]時には[illegible]たいこと
もした。「火鞭」を出したり、「火鞭」の講演會に[illegible]氏を聘
して、ゾラの話をして貰つたり、宮田脩氏の宅に集つて、トル
スイスの研究をしたりしたのも、その頃のことであつた。
ゾラにしても、ユーゴーにしても、トルストイにしても、早
稲田の講堂ではモウ、立派に正札が附いて居り、此點までは許
してやるが、これ以上の點は苟も文藝の徒たるものが踏入るこ
とは罷成らぬといはねばかりのことになつて居た。然るに僕は
その禁じられて居た境域の中に、プロレタリア文藝、プロー
レタリア美學の立場からすれば、特に學ぶべき重大なものがあ
るやうに思はれてならなかつた。

藤森成吉氏と僕

かやうに僕は坪内博士の文藝論や、島村講師の美學に不滿足
であつたが、併し、これらの先生の講座には殆ど毎回缺かさず
に出席した。それはその講義がさうした僕をさへ惹きつけるに
充分の力があり、又、實際に有益なものであつたからである。
但だ學校が或る政策の爲に置いて居ると見られた或る種の講座
となると全く堪らなくなつた。又、實際に眞面目に勉强しても

よい筈の科目でも、その講師の態度が、餘りに壓制的であつたり、押賣的であつたりすると、ツヒその教室に足が遠のいた。久しく休んでは又思返し、我と我が心に鞭つては見るが、入口まで行くと、皆が自分の顏を見るやうな氣がし、又、講師からも何と思つて出席したかと訝まれるやうで入口からフイと圖書館に外れたり、芝生の上に踞きつたりしてしまつた。僕の此心持は當時誰一人として汲んで呉れる人もなかつた。今は田舍に行つて居る或る文壇の大家が「自卿は繁雜から閑まれて自然で居るんぢやないか」といつたといふことも人傳にきいたし、又、學校を出てから全然異つた專門の方に發展して居る或る大家が、『自卿もよいが、奇技がつて困る』と評したといふこともきいた。之等の批評は勿論僕の外面に現れた焦躁的態度によることで、決して無理とは思はぬが、僕として之を傳へきいた時には全く外國人が、初めて見た異郷のことを語つて居るやうにしか思はれなかつた。

僕が玆に新來の大學文藝論に重大な關係を有することで、一つの面白いエピソードがある。それは藤森成吉氏と、僕との關係である。右のやうにして、僕の内部の煩悶は同窓の何人からも理解されず、從つて同情もされなかつたが、僕は學校を出て久しい後、或る日、突然藤森成吉といふ見も知りもせぬ人から、一通の手紙にそへて『文章世界』の新年號を送つて貰つた。手紙には貴下の書いたものをよく讀んだといふ心持で、今度出來た小說を御送りするといふやうな意味が簡單に書いてあつた。その小說はたしか『研究室で』といふのではなかつたかと思ふ。とにかく之は僕自身の學校生活をソツクリその儘書いてくれたのではないかと思はれるほど、僕の或る講師の或る講座に於ける心理狀態を何處からかのぞいて居たのではないかと思はれるほど痛切に深刻に剔つて居た。併し之は勿論僕のことを書いたものでなく、藤森氏が自身のことを書いたので、何處で何うして僕の學校時代のことを知られたものか、或る日突然さうして僕に小說を送つて下つた。

僕は藤森氏の此手紙に接してホントにうれしかつたといふのは、久しい以前に[illegible]博士も何處かで（多分不評と記憶する）さういふことを云つて居られたが、友人の高畠素之氏が今のやうに賣出す前から常に云つたり書いたりして居る。高畠氏によると僕はまだホントに持つて居るものを世間から認められて居ぬのださうである。此批評は寧ろ過分で或は當つて居ぬのかも知らぬが、僕が始終くすんでばかり居ることは事實だ。十六七歲から筆を持ち、不惑の今日まで、まだ一度も花を咲かせたことがない。藤森氏が何うして此くすんだ、世間から

――殊に若い男女からは最もヒッかけられた僕の宮へ、區々か慮を送つて下すつたのか。全く利害關係を離れた此の仕事である。これを思ふと僕は此未見の作者に對して涙ぐましい心持にならずには居られなかつた。人間がくすぶつて 冴えないで居るのに、未見の人から對手にして貰ふほどうれしい ことはない。

藤森氏の正攻法、青野氏の肉彈戰

處がそれから七八年の歳月が夢のやうに流れ、藤森氏は押しも押されもせぬ文壇の流行兒となつた。さうして今、新潮社の『社會問題講座』に書いて居る『無産階級文藝論』といふものは、日本に於いてプロレタリア文藝の本質に關して論じた唯一のものである。勿論是までプロレタリア作家と稱せられる人々によつて、ブルヂョア文藝の要塞に打込まれた砲彈の數は少いものでなく、それがすべて無効であつたといふのではないが、ブルヂョア文藝の要塞から發射する砲彈は、流石現世界の思想界にプレヴエールする文藝論に由るもので、その照準の正確にして、効果の偉大なる、さしも猛者揃ひのプロレタリア作家もタヂ／＼の形である。之はプロレタリア作家が、ブルヂョア文藝の基礎工事であるブルヂョア美學に對して正攻法[illegible]作は今いで、一氣に通讀して[illegible]た。僕は昨年の五月に『社會問題講座』の序文で、之れを言つて置いた。此序文に關しては、堺利彦氏と僕との間に數次手紙並に口頭で意見の交換があり、堺氏は、安成二郎氏と僕と三四人同席の時、此のプロレタリア文藝論者に對する批評は幾分的を外れて居る。少くとも、青野季吉氏と平林初之輔氏とは最も徹底したプロレタリア文藝論者であるが、就中青野氏は最も徹底して居る。君は青野氏の書いたものを讀んで置かぬと、後で困ることがあるとまで注意して呉れた。平林氏の書くものに對しては、豫て多大の敬意を表して居たが、青野氏の方はまだ懸け違つてよく讀んで居なかつた。然るに最近青野氏から、『解放の藝術』を送られたので、貪る如く讀んで見たが、堺氏と僕との間には、まだ幾分意志（意見ではない）の疏通せぬ所があるやうに思はる。

成る程、青野氏は素晴しく勇敢である。その態度も小氣味よく徹底して居る。併し青野氏の格鬪力と青野氏のプロレタリアとしての態度とは必ずしも青野氏の攻擊法の徹底して居ることを意味するものではないと思ふ。戰爭は相對的のものである。當人の熱と力とだけでは 正式防禦工事を陷れることは出來ぬ。僕は青野氏の奮戰健鬪を多とし、其格鬪力に多大の敬意を

表するものであるが、併し青野氏は正攻法によつて居ないといふことを明言したい。『定石』を打つて居ないといふことを明言したい。僕は青野季吉氏が善くは戰ふが、さて如何なるものが理想的なプローレタリア藝術なりやの問題で行詰り、秋田雨雀氏の話までも援用して之に同意し、『調べた藝術』といふやうな所でお茶を濁して居るやうに思ふ。之を要するに氏は善き戰士ではあるが、善き兵法家ではないと思ふ。

僕は今の文藝論の基礎工事をなして居る美學をさへ覆へしてしまへば、文藝の形など何う變つてもよいといふ結論に到達すると思ふ。要するに成るやうにしか成らぬ。ホントにプローレタリアの時代が來れば、今のブルヂョア文藝家の必死となつて支持して居る『藝術』そのものが消滅することになるだらう。勿論、昔はこんなものがあり、人々がこんなものを珍重したものだといふ古典的の趣味で後世にも讀まれるであらうが、生命はなくなる。要するに今日の世界が、藝術といふものを何か一段高尙な悠久なもののやうに考へて居るのが間違つて居る。文學が高尙であるの、講談が低級であるのと（青野氏も講談の輕侮者の一人である）云つた處で、ひとしくこれ人間の道樂の要求に應するもので、世の中が進み、人間の道樂が變れば、科學も文藝も全く一緖のものになつてしまふ。昔は汽車や電柱は風流にならず、或る歌人が汽車を『むしけぐるま』と云つたといふ笑話もあるが、電氣の應用が盛になり東海道を電氣機關車が走るやうになれば、さみしい東北の荒野を二時間に一回ぐらゐ、汽車が長蛇のやうな煙を吐いて走るのは、正しく一篇の詩であり一幅の畫である。早い話が此節淺草へゆくと、汽車や、鐵橋や、電柱や、シグナルは舞臺の小道具として賣つて居る。要するに今の所謂文藝などいふものは、時期が來れば、内部から自然に崩壞してしまふのだ。青野氏の所謂『調査した藝術』も科學との關係に於いて結局そこに落ちはせぬか。

藤森氏と僕との藝術的衝動論

其處へ行くと藤森成吉氏の『無産階級文藝論』はブルヂョア文藝の要求に對する正攻法にかなつて居ると思ふ。藤森氏の研究はまだ未完稿であるから、深入りした批評も出來ぬが人間の衝動を論じ、衝動の變化を說き、美學の根柢に立入つてブルジョアの文藝論を批評して居る點に於いて確に、プローレタリア文藝といふものを本質的に說明しようとした最初の努力と云つてよい。併しその說明の節々には僕として首肯の出來かねる所もある。例へば藤森氏が、藝術的衝動を自己保存の本能や、種保存の本能と多元的に平行して存するもののやうに見て居られ

る點である。藤森氏の說明によると人間には自己保存の本能と共に二つも三つも平行的に存在する（同論二十頁十行）やうであるが、僕は之を多元的平行的存在とは見たくない。藝術的衝動が直接に經濟關係から生ずるものでないといふ藤森氏の說には何の異存もない。但だ藝術的衝動が自己保存の本能のやうに根元的のものであるといふ說には服し兼ねる。僕は藝術的衝動を自己保存慾の發展の一形式と見たい。藤森氏は讀んで下すつたか、何うか知らぬが、僕は嘗て雜誌『改造』に『生存慾の變態としての文藝』と題する一文を掲載したことがある。之は僕がおほけなくも今のブルヂョア文藝の根柢に一擊を加へようとした最初の試みで、僕が學校時代から此問題で如何に煩悶し、苦惱して來たかを語る最もよい證據である。何故となれば此文章は、プロ－レタリア文藝などいふことがまだ誰の口からも論議されなかつた時代に、先づ提唱されたもので、僕は之がブルヂョア文藝を美論の上から覆へさうとした最初の試みであると自惚れたい。併て學校生活の煩悶で邂逅した藤森氏と僕とは、今またプ－ロレタリア文藝論の上で邂逅したわけで、此點はよく／＼深い因縁と思はれる。『生存慾の變態としての文藝』には『死』といふもののある人間の生命と、國家の生命とを比較して論じた後、更にそれが『死』といふもののない『社會』に如何に作用するか[illegible]に就いて[illegible]とする點はあつたが、人間には自己保存の本能が先づ存し、自己保存の本能が或る程度まで充足された時に、自己保存の本能が派生し、詩歌即ち藝術的の本能は以上二つの本能の發展する過程から逆用派生するものであるといふやうに說いた。此一元的派生論は、當時僕の先輩の間に大分評判のよかつたものである。藤森氏の多元的平行論と、僕の一元的派生論とは、初めはホンの語の云ひ廻しの相違ぐらゐなものであるが、後に至ると大へんな相違が生じて來るやうに思ふ。即ち藤森氏はトロツキーよりもルチヤナルスキーよりも、より多く共鳴するが、僕はルチヤナルスキーよりもより多くトロツキーに共鳴する。僕は藝術の消滅を說くが、これは今のブルヂョア思想家が支持しようとする藝術の永久不變性に對する反逆で、トロツキーのいふやうな人間の實生活に溶け込んでしまつた、全く新しい藝術は將來に存在すべきは之を認める。實際、僕の此頃の心境は例へば草花を作つて樂しむに、其色彩情調を鑑賞するだけでは滿足が出來ぬ。色彩情調を鑑賞すると同時に、肥料の話なし、害蟲の話なし、バリエチーの話をして初めて一種の藝術的歡喜に浴することが出來る。此關係は『奴隷制度と文藝』と題して昨年『我觀』に載せたことがある。藤森氏と同じく正攻法によつて、ブル

ヂョア文藝の要塞に肉薄しようとした僕の努力の一端である。

木村毅氏の現象論

僕は又、吾々の遠い祖先が、火の使用を發見した時の火に對する歡喜、手頃の棒即ちステツキを使用し始めた時の棒に對する歡喜、岩窟の内壁や、土器に原始的の繪畫を描いて文字に代へ、寸置き又は語繼ぎの實用に供し得た時の罫若しくは模様に對する歡喜、初めて金屬を使用した時の武器その他の什器に對する歡喜が、如何に神韻縹渺たる藝術的本能となつて現在の吾吾に殘つて居るか。毒々しいといふ感念、アツサリとして氣持が好いといふ感念コムプリメンタルな色彩の調和、フアミリアルな色彩の排列が、如何に吾々の實生活即ち自己保存の本能に根元する所の深いかを考へた。さうして其一端は『講談屋の美學』と題して之を雜誌『我觀』に掲載した。

僕はなほ風景美に關しても獨自の思索をつゞけて居る。建築美に關しても獨自の思索をつゞけて居る。風景美や、建築美に關係の深いシミラリチーの美、シンメトリーの美などの根元に關しても、人間の生存慾から立派に之を解釋することが出來ると思ふ。凡そ僕の今日までにブルヂョア文藝の基礎工事に對して加へ來つた批評は、その批評が當つて居るか當つて居ぬかは別問題として、兎にも角にも正攻法に出つて戰はうと努力したものである。此努力は藤森氏の『無産階級文藝論』と共に買つて貰ひ度く、少くとも僕が學校時代からブルジョア文藝の基礎工事に對して深甚の疑問を懷きその爲に自分の世に立つ上に大きい不利益とは知りながら全然文壇に身を投ずることも出來ず、さりとて、文筆を燒いて、實際運動の渦中に投ずることも出來ず、見苦しい矛盾の中に、甚だ光彩に乏しい、くすんだ生活を送つて來たといふこととの一片の詐僞ではないといふことだけは認めて貰ひたい。

何故にブルジョア文藝が行詰り、何故に心境小說、私小說、身邊雜事の記錄が讀者に飽かれ、又同時に作者自身にも飽かれるに至つたか、さうして、一つとして碌な作物がないにも拘らず、大衆文藝、プロレタリア文藝と云つたやうなものが、潮のやうな勢で、ブルジョア文藝家の足許を襲ひつゝあるか、此現象に對する社會的意義を闡明した人に木村毅氏がある。

木村毅氏の『反響』創刊號に掲載した『個人意識より集團意識へ』は、僕の完全に一致し得る近來の快文字である。大衆文藝の流行に對する解釋として、恐らくこれ以上の明快な評論を望むことは無理であらう。が、木村氏の批評は單なる現象論に止まり、來るべきプローレタリア文藝の本質に關しては殆ど言

[illegible]帰たい。[illegible]に見る[illegible]なしの[illegible]な小說で、[illegible]をおつてブルヂョア文藝の要求に[illegible]の如く押し合せつゝある現象を、巧妙に[illegible]して「現在の通俗小說が、社會的關心を十分に滿足さすものかと言ふに、其處まで自惚れてはならない。大きな波濤の押しよせる時、先づ波がしらに乗つて來るものは、貝殼や、木片や、ビールの空罎などのゴミクタである。」と云つて居る。全くその通りである。之にそのビールの空罎の一つである僕が保證するのだからこれくらゐ確かなことはない。さて木村氏の所謂、讀者の社會的關心に、大きい滿足を與へ得るもののプロレタリア文藝とは、果して何んなものであらうか。

挿畫藝術の發達

藤井眞澄氏が、過日の『東京朝日』か、『東京日日』かで大衆文藝の諸作家を揶揄し、今の大衆文藝の諸作家は揃ひも揃つてチョン髷ものばかりを書くが、一人として現代ものを書きこなし得る人がない。之はチョン髷ものが、昔のことで胡麻化し易いから社會的知識に乏しい今の作家にちやうどよいのである。自分も其中大に現代もので大衆の讀物が書きたいと心がけて居るが、現代の工場や、鑛山などに關する専門的知識に乏しいから書けぬと、暗に青野氏の『調べた文藝』に呼應して居た。

藤井氏からは僕も度々聲援や激勵をして貰ひ、ひたすら感激して居るが、胡麻化し易いといふのは、少し言過ぎではないか。[illegible]よいとも[illegible]けし、[illegible]に[illegible]把握を取る。又に、真面目に書かうとすれば、十人分に[illegible]を一つ波らせるにも、此總が果してこの國にあつたか、なかつたかを調査する必要があり、同じ一人物を[illegible]にしても、又、[illegible]立てさせるにしても、それぞれ調査する所がなければならぬ。おかみさんと呼んだか、御新造と呼んだか、殊に物價などの詮索になると中々面倒で、生中な物識りで出來る仕事でない。ウッカリ書いて居ると、八百屋おじが吾妻橋を渡つたりして飛んだ失敗をする。現代ものにはこの方の苦勞はない。分らぬことは出かけて行つてもよし、又、人にきいても間に合ふ。殊に通俗小說などゝ來ると、男女戀愛の場面を描いて、若い男女に空想を浮うさせ、自分を小說中の人物に擬して、胸を躍らせさへすれば、それで原稿料だけには上るのである。勿論藤井氏は通俗小說を問題として居るのではないが、昔のことは胡麻化し易いといふのは、少し云ひ過ぎであらう。

尙ほ大衆文藝の一副産物として、批評家の忘れてならぬものは、挿畫藝術の異常な發達である。挿畫藝術家が、大衆文藝の勃興に隨伴して頭を擡げ、直に讀者の眸睛に喰入るやうなその獨特の妙技を以て、空疎なブルヂョア美術家に挑戰しつゝある現狀は批評家の注目に價するものではないか。之に對して新聞にも雜誌にも批評らしき批評の現はれぬのは何故か。

力一ぱいの仕事をすること

里見弴

○

およそ文筆をもつて立つ人で、一人でも少數の讀者に讀まれやうと望むものはないと思ひます。一人でも多くの人に讀んで貰ひたいと希ふのが誰れしもの心持でせう。

だから、創作家の方の心持からいへば、恐らく、誰れ一人として自分の作品が大衆的であることを望まない人はないだらうと思ひます。

○

一人でも多くの人に讀ませる――それは自分の實力ありつたけの仕事をすることだと思ひます。

所謂大衆文藝については、さう澤山讀んでゐませんが、若し調子を下げるとか、甘く書くとか、餘裕のある仕事をすれば、その故で、多勢の人に讀まれる可能性を帶びて來るといふやうに考へる人があるとすれば、僭越至極なことだと思ひます。

つまりそれは、自分は人並より非常に優れてゐる實力いつぱいの仕事をすると、とても多勢の讀者にはついて來られない、といふ心持から出て來ることで、自惚れた話です。

かういふ風なもの丶考へ方は、人生に處して行く上からいつても贊成出來ません。

○

たゞその作風によつて、多くの人に讀まれ易いたちのものと少數の讀者しか得られにくいものとの差別はあると思ひます。トルストイの作品のやうに廣く讀まれてゐるものと、ストリンドベルグのもののやうに限られた讀者しかついて行けないものとがあるやうにです。これは遠くへ例を求めなくても日本の現文壇に見ても分ることでせう

これは然し、たゞ日常の附合でも、人好きのいゝ人わるい人があるやうなもので、――生れつきの性分といふところまで行けば、なんとも致し方のないことです。私が今こゝで云ふの

は、さういふ根本的な問題ではないので、たゞ調子をさげさへすれば大衆の讀者がついて來るものゝやうに考へ、實力いつぱいの仕事をしないでゐるとしたら、——それが大衆文藝といふものゝ仕事のしぶりだとしたら、決していゝものではないと思ひます。

○

實力いつぱいの仕事をしても、尚讀者が得られない場合なら、一層實力の充實に努めるのが當り前です。それを、あべこべに、故意と調子を下げるとか、甘く書くとかいふことは、その遣り方は、大衆文藝にあつてはならないことで、[illegible]作者の人々は頭にたゝきこんでおくべきだと思ひます。

○

要するに、大勢の人に讀まれたいと思ふのは、作者として當り前のことで、そのためには、自分一人の一心不亂な勉強をしてゐればいゝのに、大衆と云ふものに目安を置いて、自分からそつちへ歩きだし、呼びかけるのでは、いつまで行つても埒のあくことはあるまい、とかう云ふのです。たゞそれだけのことを云へばいゝのです。（談、聞）

大衆文藝のレーゾンデートル

平林初之輔

一

大衆文藝の第一人者中里介山氏は（尤も氏自身は大衆文藝家と自稱したことはないやうに記憶してゐるが）「聖母の畫像」といふ小説の卷頭で注目すべき文藝觀を發表してゐるが、その中には、現代の文藝作品に對して極度の不滿と侮蔑との口吻が用ゐてある。

氏は言ふ『近頃は、よく文藝を區別して高級と低級とに分けるが、私どもは自稱高級者の不遜を憫むもので、自分の作物をその亞流扱ひにされたくない……』

あまりはつきりと斷言はできないが、高級文藝と低級文藝、藝術的作品と通俗作品との區別が日本の文壇に生じて來たの

は、大體自然主義以後のことであるやうに私は思ふ。さうして、自然主義系統の作品に「藝術的」といふ名稱を與へ、然らざる作品に「通俗的」といふ名稱が與へられたやうに記憶する。その證據には自然主義前期の作品、たとへば尾崎紅葉や幸田露伴の作品などは、かういふ分類を超越した存在であつた。ところが、それ以後になると、田山花袋や島崎藤村は藝術作家で、柳川春葉や菊池幽芳は通俗作家であるといふ風に、はつきりと兩者が分類されてしまつたのである。近頃では、久米正雄が通俗小說を書き出したとか、菊池寛が通俗小說に筆を染めたとかいふことを言つても誰もあやしまなくなつた。

「通俗小說」といふ言葉の發生した理由には十分認めなければならぬものがある。自然主義の運動は、文學界に於ける一種の革命であつた。自然主義文學は題材を貴族や軍人や富豪の生活から中流階級の生活へひきおろした。形式に於ては、一切の虛張、美辭麗句をしりぞけて、客觀描寫をとり入れた。物語の起首があり、伏線があり、波瀾があつて大團圓があるといふ風なプロットを追はずに、人生の斷片をゑがくことで滿足した。事件の解決を不必要であるとし、甚しきは事件そのものすら不必要であるとするに至つた。

かういふ小說は、一般人にすぐに理解され歡迎される筈はない。そこで戰ひが必要であつた。そして、文學に於ける戰ひには、これこそほんとうの藝術で、前からあるやうな小說は通俗的な小說だと主張することは有力な攻道具である。一般人は自然主義の小說がわからねば藝術がわからぬのだと考へて、面白くないのを我慢して熱心にこれを讀むやうになる。そのうちに一般讀書人の趣味が轉換して、自然主義小說は、押しも押されもせぬ地位勢力を獲得して來たのである。

併しながら、自然主義小說が、支配者の立場にたつにしたがつて、もう戰ひの時のやうな緊張は失せてしまひ、ただ惰性によつて現在の地位を維持してゆかうとするやうになるのは自然である。けれども彼等は、以前から用ひなれてきたスローガンだけは忘れない。「吾々の小說こそ藝術小說である」と彼等は相變らず同じ文句を繰り返してゐる。そして彼等と見解をともにしない文藝家を、通俗作家としてしりぞけようとする。中里介山氏が「自稱高級者の不遜を惡む」に至り「自分の作物をその亞流扱ひにされたくない」と宣言した時には、所謂「藝術小說」は全く惰性的に命脈を保つてゐる存在でしかなかつたのである。ひとり中里氏にかぎらず、自稱高級者の「高級」といふやうな言葉がもはや何の意味ももつてゐないことに、多くの人々がひとしく認めるところであらう。

二

然らば、所謂自稱「高級者」の作物はどういふものであるかといふに、中里介山氏はつゞいてかういつてゐる。「所謂近代化したる不良少年の作物や、すんなりとした人のよいお坊つちやん風の作物（現作の文壇と稱するものゝ作物は大抵それである）が呼應して代表顔をすることを不快に思ひ、またその思潮が往々人間として恥づべき事を大袈裟に讃美して中學生をあやまるのを苦々しく思ふ。斯様な風潮は、國家社會の害物でもあり眞面目な文藝の賊でもある。」

中里氏の意見に私は文字通り贊成しがたいところもある。（氏の理論は氏の小説とかはつて甚だ不用意で粗暴である。）けれどもその大體の趣旨には異存はないから、これを敷衍してゆかうと思ふ。

「所謂近代化したる不良少年」といふのは小説家の生活が志士的な風格も、殉教者的情熱も失つてしまつて、だらしない生活になつてゐることを意味するのであらう。それは印刷技術の進歩や讀書人の普及等につれて、小説家の收入が增加し、小説をつくるといふことが職業として確立された結果である。小説が職業的に製作されることになれば、比較的少ない努力で、比較的多額の收入が得られることになるし、また人の需要に應じて的の努力がないから自然に不規則になる。規則的の生活、なきつて不規則な生活が許さるるとすれば、その生活が「所謂近代化したる不良少年」の生活となるのは自然の勢ひである。そして、そのやうな生活は、十分の收入のないものにも模倣され易いから、これが文壇人一般の生活様式として一般化して來るのである。

次に「すんなりした人のよいお坊ちやん風」といふのは何を意味するであらうか？　大學の文科でも出て、西洋の文學書の五六冊も讀めば、その人は或る範圍内では文學者として通用する。そしてその人が道樂半分に同人雜誌でもだして作品を發表したり、文壇の人々と交際をつゞけたりする間にはいつの間にか一人前の作家になつてしまう。かういふ人には實際の世間はわからない。單に社會生活の複雜なメカニズムがわからないのみならず、個人的心理の微妙な動きもわからない。かやうに溫室の中の植物のやうに、限られた圏内に生きてゐながら、別に才能も惠まれてゐない人でも、事務的に、職業的に、機械的に、經濟を顧慮しながら筆をとつてゆく人の作品にくらべると大して遜色のない作品をつくることは可能である。これが中里氏の所謂「すんなりとした人のよいお坊ちやん風の作物」である。

中里氏は、括弧をして、（現代の文壇と稱するものゝ作物は大

批これである）といつてゐる。何故「文壇と稱するもの」の作物がさうであるかを、私は今度は文壇の内部からこれを考察して見よう。

三

中里氏は「文壇」といはずに「文壇と稱するもの」といつてゐる。これは文壇といふものがあやふやな、あるかなきかの存在であるために氏がさういつたのではなくて、文壇といふものに對する侮蔑からさういつたのであらうと思はれる。何となれば、文壇といふものは、今日では疑ふべからざる存在であるから。

併しながら、文壇といふものゝ構成を調べて見ると、これに大なる權威を與へ、これを尊敬することは誰でも躊躇するであらう。文壇といふものは、所謂藝術的な文學作品中里氏の所謂高級な作品を製作することを職業とする作家と、これに附屬する批評家と、これ等を發表する機關とをもつて構成されてゐるのである。ある作家が、作品を一定の雜誌に發表する。すると特定の批評家が待ちかまへてゐてそれを新聞の文藝欄か何かで批評する。これが「文壇」内部のメカニズムの一切である。作家に特定の批評家（作家自らである場合もある）の毀譽褒貶を標準にして作品を製作する。ところが、批評家は、限られた機關に發表される限られた作家の作品のどこがうまん、こゝがまずいといふ風な批評をする。この作は力作でこの作は駄作だといふ風に品さだめをする。この批評は、狹い、所謂文壇の生活をしてゐる人によつてされるのであるから、決して一般の趣味や要求を代表してゐるのではない。たゞ文壇の出來事に對して彼等だけが發言權をもつてゐるために、それが一種の權威をもつて通用するのである。

ところが、我々が髮を刈つて貰ふ場合には、大體その店が清潔で、親切で、時間をはやくやつてくれることを要求するのであるが、玄人の理髮屋同志になると、髮の刈りかた、髮の刈りかたに一本でも不揃ひなのがあればそれを氣にするといふ工合である。それと同じやうに、文壇所屬の批評家は、一般の讀者の問題とするところは問題にしないで、一般人にはどうでもよい枝葉な表現のこつや、技巧の冴えなどを問題にする。さういふわけで、批評家と作家とが相俟ち、相助けあつて、「文壇」の繩張りを益々狹くするのである。

所謂文壇的作品は、かういふわけで、一般人の要求と益々遠ざかつていつた。たゞ文學者、作家といふ職業が漸次獨占的性質を帶びて來たゝめに、辛うじてその位置が維持されてゐるに

過ぎない現状となつて来た。そこで、[illegible]ういふ現状に對して不滿の聲が洩れるやうになつた。それはまづ理論的な形を帯びて、今日の「文壇人」の作品が面白くない、題材は狭少であり、取扱ひ方は千篇一律であつて退屈にたへないといふ叫びとなつてあらはれた。第二には、「文壇」の内部にゐる人々が、窮屈な「文壇」の境界をすてゝ、以前にはいやしんでゐた通俗小説に筆を染めるに至つた。田山花袋、菊池寛、久米正雄、その他の作家が續々かういふ變化をとげた。

三度び中里介山氏の言葉をかりると氏は、「寧ろ見識は狭く、思想は高からざるも、所謂通俗作家といふものゝ方に罪のないのがある。」といつてゐる。罪がないのみならず、彼等はその作品を一般讀者の自由な批評に解放してゐるといふ一點に於て、所謂文壇の作家よりも意義のある作品をかいてゐるといつても大して不當ではあるまい。

四

かういふ風潮に乘じて生れたのが大衆文學である。大衆文學が通俗文學とちがふ點は、後者のやうにびく／＼しないで、大膽に大衆文學の意義や價値を認めてゐる點であつて、その内容に於ては通俗小説と何のかはりもない。

私は、作品を訴へる相手を小數の文壇内の批評家や仲間の作家におかずに、一般讀者におきかへたといふ點に於て、大衆文

要にたしかに人目に[illegible]是認するものである。

彼等は、何等かの意味で讀んで面白いといふことを大衆小説の主要條件として認めてゐるやうに思はれる。而して[illegible]いふ興味に訴へることは、藝術家のなすべきことでないとして斥けられたのを、大衆文藝は再びこれを重要視して來たらしい形迹がある。

彼等は先づその題材を自己の直接に經驗した境遇から離れし、最も多くの人に興味のありさうな事柄を選んだ。一方に於ては、歴史上のクリチカル・モーメント、たとへば明治維新を好んでとりあげると同時に、他方では人生の日常茶飯事でなくてクライマックスをとらへようとする。それらが歴史小説又は探偵小説といふ名前を與へられる。藝術派が事件を輕んずるに反して　大衆派は事件を重要視する。前者が解決を與へることを意としないに反して、後者は解決を與へねばやまない、言葉をかへて言へばまとまつた讀物を提供することに全力をかたむける。

これ等の點については多くの異論があるべきだし、私も多少言ふべきことがないでもないが、こゝでは只一つ大衆文學に對する希望をのべておく。

大衆文學者は、大衆の趣味に追隨し迎合することを任務と考

へてはならない。さうであるならば大衆文學は八木師と選ぶところはない。大衆文學がもしほんとうの意義ある事業をしようと思ふならば、文學作品の對象を一部の文壇批評家から開放して、一般讀者家に擴大するといふ點に重きをおき、決して俗惡低級な趣味に墮落すべきではない。文學界の現狀では、大衆文學にたしかにレーゾンデートルをもつことを私はこれまでも々指摘した。しかし、それは大衆文藝と銘打てば何でもかでも是認するといふ意味ではなく、むしろその反對に、大衆文學といふやうな名前はすてゝ、文學そのものを一般人のものとするのが眞の大衆作家の任務であるだらう。(完)

發生上の意義丈けを

江戸川亂步

從來の通俗小說といふものであれば、今更ら兎や角論議することはないのであらう。殊更らに大衆文藝の名を冠して、大袈裟に云へば、文壇的な小說の一敵國であるかの如き立場に於て、藝術の名によつて、色々に云はれるといふのには、それは單に、藝術的理解の程度の低い多數人に讀まれる小說といふ以上の、何等かの意味を持つてゐなければなるまい。

一つの物が生れ出たからには、それ丈けの意味がなくてはならぬ。それはもう云ふまでもないことだ。だが、私が思ふのに、問題はさうした發生上の意義の外に、それ以上に、大衆文藝の存在を主張すべき、何物かゞあるかどうかではないか。

私の云ふ所の發生上の意義とは、普通に考へ得る常識にしか過ぎないのだが、云つて見るならば、日本の近頃の小說が、餘りに個人の諦觀的な境地にとぢ籠つて、或は又、表面上の彫琢にのみ浮身をやつして、一般向きでなくなつたこと、恰かもその時、相當豐富なる藝術的才能を有する人々によつて、從來の講談に時代の精神を盛つたかの如き、新しき讀物小說が現れたこと、それが、通俗讀者階級のみならず、所謂文壇の小說に飽き始めた比較的理解の高い讀者にも歡迎されたこと、一部の批評家も、多少買ひかぶりの氣味ではあつたが(それには理由のあることだ)これを認めたこと、同時に、これまで文壇にとぢ籠つてゐた人

ものゝ、[illegible]も[illegible]たこと、そして、所謂[illegible]りも、藝術の民衆化といふ様な傾向が、趣好に投じたこと、等、等を上げることが出來るであらう。發生上の意味からは、大衆文藝といふものが、從來の通俗小説とは多少違つた、一つの勢力を爲して來たのも、成程尤もに思はれるのである。

だが、右の事情を外にして、例へば作家達個人々々の藝術的才能、彼等が大衆文藝の名によつて、世に現はれたことなどを外にして、大衆文藝そのものに、何等か特殊の意義を認めることが出來るのであらうか。本流の小説とも異り、從來の通俗讀物とも違ふ所の、特別の大衆文藝といふものが、存在すべき理由があるのであらうか。

色々な意味をこめて、大衆文藝の主たる存在理由は、今も云つた藝術の民衆化にあるといふことが出來るかも知れない。第三者の立場からは、これが最も穩當な見方であるかも知れない。つまり、難解な高踏的藝術を避け、しかも、娛樂的讀物よりは一歩藝術に踏み入つた、謂はゞ中間的な、一種の文藝といふ見方である。實際、今日大衆文藝と云はれてゐる作物は、恐らく偶然にも、丁度左様な種類のものであるかも知れない。そして、民衆の藝術的指導といふ様な、社會的の意味からは、何等か貢獻する所があつたかも知れないのである。

今の[illegible]に、正宗、[illegible]、[illegible]といふことが、[illegible]文學に[illegible]ない者はない。といふ風に、一般が時々[illegible]へてゐたとも見られる。そこへ丁度、手頃の文藝が現れたので、[illegible]と、歡迎もし、大衆文藝などゝいふ理想めいた言論で、受け入れる空氣を作つたのではないか。同時に作家の側でも、その大勢に應じて、大衆文藝といふものが、一つの立派な存在であるかの如く思ひなすに至つたのではないか。

だが、民衆の藝術(大衆は從來の民衆と同義語に相違ない)といふ特別のものがあり得るのであらうか。藝術には、選ばれたる小數を相手にするものと、一般多數人を相手にするものと二つの違つた種類があるのであるか。そして、それが兩方とも本當の藝術であり得るのか。

第三者が單に分類することは勝手であるが、少くとも、藝術家自身にとつては、藝術はたゞ一つのものではないのか。多數の讀者を念頭に置き、民衆向きの文藝といふが如きものを計畫するのは、藝術に藝術以外のもの(それは功利と呼ぶべきか)を夾雜せしめることではないか。新しい時代は、さうした事柄を、藝術に許し得るとでも云ふのであるか。

といつて、私は毛頭藝術の民衆化に反對するものではない。若

しそれが本當の藝術であるならば、作者の迸り氣なき藝術衝動から生れたものであるならば、讀者が多ければ多い程、藝術の爲にも、喜ぶべきことに相違ない。だがそれは、讀者の數なり階級なりによつて、一つの藝術を唱導しやうとするが如き、所謂大衆文藝論などゝは、全然關係のない別個の問題なのである。

　分り切つたことであるが、藝術の價値は、議員の選擧などゝ違つて、讀者の數によつて、即ち多數決によつて定まるものではない。そのことは分つてゐながら、（恐らくこれは藝術といふものゝ根本に横はる、一つの大きな矛盾に相違ないのだが）藝術が全然個人的なものでない以上、即ち社會への發表を條件とする以上、我々は、それが出來る丈け一般化し、多數の讀者に讀まれることを望まない譯には行かぬのである。

　さうした事情が、或は一部の人々をして、大衆文藝を唱へさせたのではないであらうか。少くとも、現在の文壇的小說の讀者が、餘りに局部的であることを、不滿に思つてゐた人達が、大衆文藝論の勃興に、一種の好意を感じたことは、想像に難くないのである。

　なる程、優れたる藝術であつて、同時に大多數の讀者に讀まれるものが出ることは、望ましいには相違ない。だが、一時代で云ふならば、それは殆ど理想であつて、多くの場合、本當の藝術よりは、低調なる娯樂讀物の方が、遙かに多數の讀者を有することは事實なのである。それが殘念だと云つて、大衆文藝などゝ云ふ、謂はゞ鵺の様な藝術を唱導して見た所で、この遺憾な事實をどう改めることが出來るのであらうか。

　その人々は、藝術の一般化といふことを、餘りに性急に考へてゐはしないか。彼等は藝術の横の擴がりのみを見て、それの縦の擴がりを忘れてはゐないか。假令ある一時代には、讀者の數に於て、娯樂讀物に及ばなかつた藝術でも、若しそれが眞に優れたものであるならば、長い年月の間には、結局最も多數の人々に讀まれるといふことを忘れてはゐないであらうか。

　結果として現れたものが、優秀であらうと、低劣であらうと、讀まれやうと讀まれまいと、作家としては、自れの身についた藝術を發表する外はない。それが當然でもあり、苟も藝術である以上、それ以外のやり方はない筈である。所謂大衆文藝に屬する作家達としても、彼等が藝術家であるならば、創作に當つて、藝術以外の、例へば彼等の作物が多數人に賣れるかどうかなどゝいふことは、決して考へなかつたに相違ない。その結果がはからずも、文藝の民衆化といふ様なことに貢獻した所で、それは彼等の素質が、偶然にも民衆に理解される如きものであつたといふに過ぎないのではあるまいか。

要するに、私は大衆文藝といふものについて、大して云ふべきことを持たぬのである。藝術は一つである。作者はたゞ自己の藝術を發展することの外に、それの讀者などについて顧慮を混へるべきではないし、第三者の立場から云つても、分類は勝手であるが、積極的に、大衆文藝といふ特殊の藝術を認め、それを明導することは意味を爲さぬものである。私の意見はこれだけである。そして、私が大衆文藝について云ひ得る點は、その通俗上の意義と、それに屬する作家達の、大衆文藝會とは別物の、藝術的才能のみである。

（附記）私が書いてゐる探偵小說は、いふまでもなく藝術には遠いものだし、大衆文藝といふ程のものでもなく、たゞ一種の遊戲に過ぎないものだといふことを附加へて置きます。

亦一說？

芥川龍之介

大衆文藝は小說と變りはない。西洋人が小說として通用させてゐるものにも大衆文藝的なものは澤山あるやうだ。唯僕は大衆文藝家が自ら大衆文藝家を以て任じてゐるのは考へものだと思つてゐる。その爲に大衆文藝は興味本位——ならばまだしも好い。興味以外のものを求めないやうになるのは考へものだと思つてゐる。大衆文藝家ももつと大きい顔をして小說家の領分へ斬りこんで來るが好い。さもないと却つて小說家が（小說としての威嚴を捨てずに）大衆文藝家の領分へ斬りこむかも知れぬ。都々逸は抒情詩的大衆文藝だ。北原白秋氏などの俚謠は抒情詩的小衆文藝だ。都々逸詩人を以て任じてゐては到底北原氏などに追ひつくものではない。次手に云ふ。今の小說が面白くないから、大衆文藝が盛んになつたと云ふのは譃だ。古往今來小說などを面白がる人は澤山ゐない。少くとも講談の讀者ほど澤山ゐない。その又小說の少數の讀者も二十代には小說を讀み、三十代には講談を讀んでゐる。（その原因がどこにあるかは別問題として）大衆文藝が盛んになつたのはほんたうに小說に飽き足らないよりも、講談に飽き足らない讀者を開拓した爲だ。

想華

呂宋の眞壺

文學博士　新村出

日本と比律賓との關係は足利時代末期乃至戰國時代に於ける呂宋への倭寇にはじまり天正年間に於ける呂宋船の平戸入港より文祿慶長以降に於ける彼我の貿易並に宗教關係におよび、寛永の鎖國以後に至つてもマニラは宣教師が日本布敎の發源地となりいはゆる日本町に往時の國力發展のたどりをとゞめてゐた次第は、內外新古の文獻とその考證との一とほりつくす所である。豐臣秀吉が天正末年に於ける比島征服計畫と松倉重政が寛永七年に於ける同島侵略の企圖とは日本人をして壯快の感を起さしめると共に歐米人をしては今なほ危惧の念を懷かしめる基となつてゐる。明治以降はしばらく措く、その以前の鎖國時代にあつては呂宋島への漂流がをりをり起つて、わづかに日比關係に一縷のつなぎをとゞめてゐたばかりであつた。文祿寛永間の約半世紀間の呂宋貿易の結果として私たちの研究興味を動かすものは呂宋の眞壺の舶載であるが、その研究は茶器や陶器の蒐集家や鑑定家の既に着手したところであり、海事海法の研究家として聞こゆる松波博士の大に力をつくされた著述も存するのである。私がこゝに紹介せんとするのは呂宋壺に關する二三の新史料であつて、それを舊來世に知られた記錄とあはせて、この茶器に關する歷史的興味を述べてみようとするだけで

あつて、主として文獻研究にとゞまり偏蔽の實證研究には全く及ばないものである。

慶長年間に於ける呂宋への航行に與へた御朱印は三十通もあつて暹羅渡航の御朱印が三十五通あるに對してこれに次ぐほどの回數が出てゐる。外蕃通書の卷二十一乃至卷二十三の三卷に於ては慶長以前および以後の呂宋國書を載せてゐないけれど、文祿年代に於ける彼我の往來は太閤記などにもみえ、下つて寛永時代に於ける貿易は一二の文書によつてもうかゞはれる。名古屋の俳人學者堀田六林の蓮花關隨筆は安永九年の編輯であるが、その卷二に寛永六年より九年まで長崎奉行を勤めた竹中采女正重次――吉利支丹迫害では名高い奉行である――の時代に長崎から京都へ送つた書簡が反古となつて屛風の下地に張りつけてあつたのを取離して書きつけてある。「るすんへ日本より參候ふね二そう、但一そうはくちの津と申所へ入候」などとみえ、呂宋砂糖の輸入のこと、その價額のことなどもみえてをるが、そこには壺のことはみえてゐない。この古文書は貿易史上有用なものとみとめるが、こゝには全文の記載を略する。次に私藏の文書であるが、有名な江月宗玩和尚へ宛てゝ某年七月六日付にて平戸か長崎あたりから送つた文書に次のやうな文句がある。江月和尚は茶道の方にも聞こえ、もとは泉南の人である。博多の崇福寺にも住し平戸の正宗寺の開山にもなつてゐる人で、大德寺の龍光院に住した。この文書の年代はわからぬが、江月和尚は寛永二十年の入寂であるから、よしんば下つても寛永中葉を下らぬものである。今抄錄するとかうである。

黒船呂宋于今不來我人氣遣、香氣飲聲致候、十に八九はアブナキと申候、去月中旬に大東風七日ツヽケ吹申候ゆへと申候、小黒船と申候一艘來り申候、これが右の旨申候、このふねもそこなひ申旨候間、定而ヨノ船もいかゝと申候ゆへ一入人々氣遣致申候、明日より十日迄不來候へば必定果たると申世上のさた斗に候へばいニ／＼と申、きのどくに存候、御すもじ可被下候、

とあつてこの次には変則船に關する記事のことが記るされてある。當代記卷三、慶長十年の條に、

當春日本國の船、ルスン、トキン、シヤムへ爲商買渡海の處に、如何したりけん、一艘も不歸云々、

又去年エゲレシと云處の者共黒船を押取ける處に、日本の商船令商買過分得利歸朝の船在之、ルスンの内シンチウ（泉州）と云所にての事也、是はたちうり（立賣）の桔梗屋の道閑と云者也、京町人羨之、

とある事件の内容は、或船に於て右の江月和尚の文書と類似してゐる。然るにこれらの當時しばしば南洋上に起つた海難や八幡(ばはん)を詩材にとつた俳諧が見えるのである。それは安原貞室の獨吟千句の第六聯に左の數句である。

かたきもつ身のなどり陰(ユゲン)なる
黒船はゑげれす舟のあひ近み
俄に風のかはる洋中(ヤウチウ)
みんたみの峯に陰氣な雲たちて
腹ひきさるや補陀落の山

この千句獨吟の俳諧、すなはち正章千句としてもきこえてゐる連俳は正保四年十一月の識語があつて師匠貞徳の判を乞ひ翌年慶安元年秋出版されたが、寛永時代の海洋の事相を簡潔に寫し得て妙だと思ふ。

かういふ背景をゑがいておいて、小瀬甫庵のかいた童蒙先習卷之十二に「心もとなき物」と題して、

ゑすんへつぼなどおつらへたる

というた一句を讀んでみると味が深い。この書は慶長十七年の跋語がある古版本で十五卷を二冊にしてあり、尤の草子などと同一の系統の隨筆である。この一條は同じ著者甫庵の太閤記卷十六に、「呂宋より渡る壺の事」と題して人口に膾

[illegible]し從來史家の常に引用した[illegible]の一文と[illegible]するものである。

泉州堺津菜屋助右衛門と云町人、小琉球呂宋へ去年の夏相渡り、文祿甲午(三年)七月二十日歸朝せしが、其比[illegible]官は石田木工助にて有し故、奏者として唐の傘・蠟燭千挺・生たる麝香二疋上奉り、御禮申上、則眞壺五十御目に懸しかは、事の外御機嫌にて、西之丸(大阪城)の廣間に並べつゝ、千宗易などにも御相談有て、上中下段々に代を付させられ、札を押、所望之面々たれ／＼によらず執候へと被仰出なり、依之望の人々西丸に祗候いたし、代付にまかせ在六日之内に悉く取候て、三つ殘りしを取て歸り侍らんと、代官の木工助に菜屋申ければ秀吉公其旨聞召、其代をつかはし取て置候へと、被仰しかば、金子請取奉りぬ、助右衛門五六日之内徳人と成にけり、

これは堺の納屋助右衛門が壺成金になつた話であるが、それかあらぬか助右衛門の邸宅を本堂にした堺の大安寺には呂宋壺が一つのこつてゐるといふことを、故川島元次郎氏の「徳川初期の海外貿易家」によつて見たことがある。同じ記事は當代記卷二、文祿三年の條にもみえてゐる。

此春るすんへ渡商人壺多持來、直輙之間上下取之、然處に此冬太閤秀吉聞之御、日本國の爲寶物を、[illegible]下直成と有仰、悉く被召上、翌年右之價一倍金子被納壺は本主に被返遣、

右は文祿三年すなはち西紀一五九四年のことであるが、その前年なる文祿二年七月の十二日付、寺澤志摩守正成より平戸の松浦法印鎭信に送つた文書が、平戸貿易志に出てゐる。

今度ルスンより五島へ相着候唐舟積來候壺、其他唐物、上様(秀吉)可懸御目旨御仰之通申入候、助大夫買來候つぼ三持參候、則懸御目候、御意に不入候間、何れも主次第可賣旨に候、則其通船頭申渡候、其外の商人持來候つぼから物之儀御諚候可被持越候、

これによると堺の納屋以前また以外に呂宋壺の輸入のあつたことを知ることができる。蓋し信長秀吉時代に堺を中心にして茶器の愛玩が盛であつたことは、信長記や太閤記にもみえてゐるとほりである。信長にありては同記卷二、永祿十一年二月、卷八、天正三年十月の條、秀吉にありては有名な天正十三年十月の北野大茶湯の件の如きがあつて、殊に堺の名器がすぐれてゐた。但し呂宋の壺といふ名稱はいづれにもまだみえない。然し呂宋のと同一種類の眞壺があつたにちがひないと思ふ。茶器の寳物をしらべてみれば直にわかることであらう。

永祿元龜天正ころの吉利支丹の報告書にも茶の湯のことは散見し、千宗易の名はしばしばみえてゐる。又布教史にも載つてゐる。一六〇三年すなはち慶長八年の長崎吉利支丹學林版の日葡辭典にも茶事茶器に關する名稱は一とほり出てゐる。マツボを解して製茶を貯藏する貴重な一種の壺と說明した。チヤツボ は茶をたくはへる小さな壺だといひ、肩衝の、文琳(ブンリン)の、茄子(ナスビ)の、棗子(ナツメ)の、大海(タイカイ)のと、いろいろな茶器の名前も出てゐるのはその時勢の反映であつて不思議はない。

丁度からういふ時代に葡萄牙から印度に來あはせて五ケ年餘をすごし南洋東洋の風土習俗を傳聞した和蘭のリンスホーテンの旅行記をみると、その第二十六章なる日本風土志に茶の湯のことと、茶器愛玩のこととが書いてある。リンスホーテンは一五八三年の四月すなはち天正十一年春、二十一歲を以てリスボンを發し、秋葡領ゴアに着し、一五八九年の新春すなはち天正十七年、二十七歲を以てゴアを發して、三年の後一五九二年一月二日リスボンに歸着して、本國に歸つてから後、數年經て一五九六年その旅行記を出版した。それは慶長元年にあたるのである。爾來英獨拉佛とそれぞれの飜譯があり、英譯では一五九八年の舊版本によつて校註を加へたバーネル等の一八八五年の飜刻本がある。蘭本には一九一〇年の校註再版本がある。

そのリンスホーテンの旅行記中にも豐後の大友氏が高さ三尺の眞壺を一萬四千デユカトも出して買つたとか、堺の吉

利支丹信徒の一人が同じやうな壺を千四百ヂュカトで購入したといふ話が載つてゐる。因みにいふが、リンスホーテンは、彼れの滞在中に渡航の道程中に大友大村有馬氏の使節一行ともゴアで落合つたのであつた。さてリンスホーテンの記載した壺が呂宋物なりや否やは不明であるけれども、英譯再刊本に於てバーネルはその校註にアントニア・デ・モルガの比律賓志を引用して、それらの壺が呂宋に出づるものなることをほのめかした。モルガの比島志は一六〇九年すなはち慶長十四年西班牙領メキシコの首都に於て出版せられ、その西文原本は日本では東洋文庫に藏せられてゐるが、一八六八年に出たスタンレーの英譯本はハックルイト社の刊行叢書中に存してゐる。今それによると、呂宋島に於てはマニラ、パンパンガ、パンガシナム及びイロコスの諸州の土人の間に、暗色の非常に古い大小種々な壺があつてその出所由來は一切わからない、島中に作られたものか他から購入したものか知られない、日本人はこれらの壺を求めてそれを大に珍重する、日本の王侯間にもてはやされる飲料にて茶と名づくる植物の根(葉)を貯藏するにはこれらの壺にまさるものはないとなして、格段に貴ばれる云々とみえてゐる。これを Tibor とよんでゐるが、この語については尙別に攻究することにして今は略する。

リンスホーテンやモルガの誌には、かくの如くわが文祿慶長に於ける呂宋壺に連關する事柄を反映してゐるが、異國日記や異國往來には、あらためて家康時代に壺を輸入または獻上したことはみえてゐない。慶長十四年呂宋よりの進上品に葡萄酒二壺とあるのを外蕃通書にぶどう酒壺二ツなどと誤記されたのや、慶長十六年同地よりの進上目錄に蜜壺參とか葡萄酒貳壺とか書いてあるのやが目につくけれども、これらはいはゆる呂宋壺と見做すわけにはゆかぬ。元和七年の長崎の呂宋船積帳にみえる輸出品のびすかうと壺や油壺などゝ共に別にしておかなくてはならぬ。然し故川島文學士の南國史話をみると、薩摩の山川港に於ける大迫文書に、慶長十一年頃、島津義弘の命を受けて家臣大迫吉之丞が呂宋

に眞壺を取りに行き、假りに吉利支丹宗になつて渡航し、こちらからは金屏風や馬や鞍などを贈り、あちらからは返禮に眞壺九個その外織物二卷をもらつて歸つて來た話が出てゐる。それは一六〇七年にあたるから、モルガの著述が出版されるよりも二年まへのことである。

呂宋壺のことは、元祿七年刊行の古今和漢道具見知鈔すなはち萬寶全書の第八卷に、下品物たる南蠻燒の茶碗などのあとに、眞壺十餘種のうちに洛宋を擧げてあるのをはじめ、茶器や陶器の書物にはよく出てゐる所である。粗末の本ではあるが、田内米三郎の陶器考には殊に之に關する詳細の鑑識が出てゐる。隨分あやまりが多いが、同書の呂宋と南蠻との部は、米國シカゴのフィールド・ミューゼアムのコール(Cole)氏が、考註を施して譯出して、その比律賓島内支那陶器考と題する一九一二年刊行の該博物館報告書中に收めてある。最近この書によつて京都考古界の耆宿ともいふべき横地石太郎氏は、本年四月號の「料谷」と題する雜誌中に於て、「京都博物館の二大壺」の一たる東山將軍より眞如堂に寄附されたる油壺なるものの考證をされた。それは龍鳳紋の飴釉であつて、俗に交趾燒といはれてゐたものであつた。高二尺三寸三分深二尺二寸六分口徑七寸二分腹圍五尺六寸八分あるといふ。さて横地氏は、コール氏の陶器考に出つて、呂宋群島の殆ど全部の壺類は呂宋北部のアブラAbra州の產出であつて、その壺のうちには龍の刻紋樣のものがドラゴンジヤーと呼ばれて貴ばれ同地方の蕃族は家傳の寶器として神の如く崇崇してゐるといふ、されば眞如堂の油壺といふものも呂宋のアブラ州より出た壺を誤傳したものではなからうかとのことである。非常に面白い思付きのやうに私は考へたので、コールの著をも一見して更に攻究を悉くす所あらんとした。その壺を義政時代のものとすると、凡そ西暦千四百七八十年代の文明時代になるわけだから、マジエランの來航よりは數十年前、レガスピの占領よりは約百年以前にあたる。そのころから既に呂宋壺が渡つてゐたとすると、興味が更にわいて來る。但しコール氏及びその著に補註

を加へたラウフェル氏によれば、それらの古い呂宋壺には長き歳月のものを貯藏したものであること、而して主としてコール氏に由るにそれらの古名壺には趣味ある傳說がつきまとふことが知られる。壺が互に談話をしたり贈答をしたり旅行をしたり雌雄兩壺が結婚をして子を生んだりするといふ傳說がある。博洽な柳田國男君を煩はしてかういふ傳說の研究をしていたゞきたい氣持がする。先進文化國から得た道具を稀世重代の寶器として珍重する風は未開野蠻國によくある所で、近くは古代日本にも近代アイヌにも類例があるが、呂宋の蕃族が一首を斬つて一壺に代へるといふほどの寶器を、桃山時代なりさては東山時代なりに茶器として貴び、はては呂宋遠征計畫の緣にもなつたことは興味の深い物語である。海上の危難を凌いで南國へかういふ器物をとりにやつた當代の雅懷もまたなつかしい。

眞如堂の油壺のアブラが北呂宋のアブラ州から出たとする推測を基にして進むと、その壺が東山時代に如何なる經路を以て日本に渡來したものかの攷究も必要である。アブラは恐くは西の海に注ぐアブラ河から出た名前であつて西班牙人侵略後の命名ではないやうであるが、その產出地の名を失はずして日本に渡り、その名が忘れられずして後世に傳はり、燈油のアブラを納れる器と解せられて近時に及んだことも誠に工合よく傳來したものだと思はしめる。油の痕跡のありや否やは横池氏も未だ究められざる所であるといふ。又茶事にかけては有名な堺の油屋といふ名も信長記等にはみえてゐるから、彼の壺の名稱の來歷も尙精査を要するにちがひない。然し偶然としてはあまりに偶然すぎるから、私は横池氏の說に左袒して向後の研究を進めようと思ふ。

呂宋壺と同類のものには支那の古壺もあるであらうから、即ちコール氏及びラウフェル氏に從ひて呂宋壺が支那系統とすると一層さういふ考へ方が有理になつてくるから、今後ますます兩者の比較研究が必要になつてくる筈だ。恐くは既にその道の人々によつて試みられた所でもあらうかと思ふが、私は未だその般の消息を知らない。近ごろ羅山詩集卷五

十九に呂宋壺を賦した七言絶句一首を見出した。雜山の詩は五山詩僧の亞流で、拙劣なものが多くして誦するに堪へぬが、この詩もやはりまづい出來である。題詞によるに京尹板倉周防守重宗の家に亞花眞壺といふものと呂宋茶壺とが藏せられ、家康公から拜領したものであるが、これにつき重宗からたのまれて詩を賦して之を書したといふ意味である。

　名器遙從呂宋來。　神宮威德峻於天。

　蠻船載到物相似。　太乙眞人一葉蓮。

といふ詩であるが、それらの壺の相似てゐたといふ事實はたしかである。これによつて見ても古い傳來の眞壺と文祿慶長の新渡の呂宋壺との類したことがいよいよ良くわかる。

かうなると呂宋壺出來の考究も段々遡つて宋あたりに於ける支那と呂宋諸島との通交關係などへ進まなければならないが、さういふ歷史的考證は他日を期することにする。私の特に感興をおぼえたのは、「呂宋へ壺などあつらへた心もとなさ」の文祿慶長時代に於ける南海の波瀾であつた。元祿の「松の葉」卷の一にはや舟といふ曲組のかういふうたがある。

ながの長崎の、長のるすんの留守ならば、思ひ出すことは、宵と夜中と、のう曉と、などややまぢよのう、肥後ぢや八代熊本ぢや、鳥も得かよはぬ山なれど、住めば都よ我里と、

「長のるすんの留守なれば」とあるルスンは或は單に諧音であつて必ずしも呂宋ではないかも知れぬが、あの起句の二三句の氣もちは、私をして呂宋壺をとりにいつた船のことを想はしめずにはおかない。

文藝時評

正宗白鳥

トルストイについて

先日ある書物を搜出す次手に、「人間」といふ古い雜誌が一冊、ふと手に觸れたので、何の氣なしに開けて見た。私が文壇生活に入つてから數十年の間に、幾千の雜誌が現はれたり消えたりしたことであらうかと感じながら、ところ〴〵讀んでゐたが、そのうちに、田中純氏譯のゴルキーの「トルストイの思ひ出」に私の目は惹寄せられた。さすがにゴルキーの目は光つてゐる。見方が月並でない。學究や職業批評家の常套的觀察とは違つてゐると、私はひどく感心した。田中氏の譯は未完であつたので、私は英譯によつて、新たに全部を讀んだ。

「トルストイの中には、ある憎しみに似た感情を私に喚起させるものが澤山ある。しかもこの憎しみは、私の魂の上に壓潰すやうな重みでかゝつて來る。彼れの不釣合に發達した個性は、殆んど醜に近い怪物的現象である……實際彼れは偉大である。私が深く感じたことは、彼れが語つたものゝ向うに彼れが默つてゐた。日記にさへも彼れの書かなかつた多くものがあつたといふことである。彼れは默つてゐる。そして、これからも誰れにも語らないであらう。その「ある者」はたゞ時々、しかもたゞ暗示として、彼れの會話の中に漏れる。……それは、私には「すべての肯定に對する

否定」の一種のやうに思はれる。それは無限にして救はれ難い絶望や、恐らく彼れ以外には何人もかつて經驗したことのない恐ろしくはつきりした孤獨の土地から生れ出た、最も險惡な虛無主義のやうに思はれる。彼れはその魂のどん底に於ては、頑なに、民衆に對して無關心な人間だと、私が思つたことが屢々ある。……彼れの目には、民衆はたゞ蚊の如く見え、彼等の活動は、むしろ馬鹿らしい慘めなものに見えたであらうと思ふ。……彼れはその孤獨の境に於て、全精神の最高の努力をもつて「最も本質的なもの」死の中にぴたりと見入つてゐたのである。」と、ゴルキーは明快に鋭くトルストイの人となりを斷じてゐる。

ゴルキーはまた、自分とトルストイとチエホフとが會合した時の面白い雜話を述べてゐる。その時、トルストイが、「私の一生に幸福な日の少かつたのは、私がかつて自分自身のために生きたことがなく、生きることが出來なかつたためである。私が見えのために生き人のために生きたからである」と云つたことを取出し、歸途チエホフと二人で、その言葉の批評をして、「トルストイは自分に必要でないものを乞食に與へるやうに民衆に與へたのだ。彼れは強要することが好きだ」などと、ゴルキーは自己の意見を述べてゐる。

「ロシアの宗教家だちは一二を除くと、冷たい人々である。彼等は積極的な生きた信仰を持つてゐないからである。私が「どん底」に於てルカ老人を書かうとした時に、私はさういふ老人が書きたかつたのだ。彼れは「あらゆる解決」に興味を持つが、民衆には興味を持たない。避け難くなると、彼れは彼等に接觸する。が、彼れが彼等を慰めるのは、たゞ自分を平和の中に置きたいためばかりである……」と、ゴルキーは自作のルカ老人の說明をしてゐる。

兎に角、この追憶記は、はじめからしまひまで、人生について、文學について、暗示に富んだ面白いものなのだ。トルストイを人道主義者としたり聖人としたりして、その前に合掌禮拜してゐるに留まらないで、この怪物的人物の核心

を屢々摑んでゐるところがあつた。

私は十餘年前にメレヂコフスキーの有名な評論を、二回程繰返して讀んで、それによつて露西亞の二大作家の人物と藝術とを理解したつもりになつてゐた。しかし、この評論は古今無類の面白い評論でありながら、論者の趣向に當嵌めるために、二人をことごとしく對立させ、二人が論者の注文通りにうまく出來上り過ぎてゐた。評論も創作だといふことは、メレヂコフスキーやブランデスの文學論によつて證明することが出來る。近代の小説家が市井の凡俗人をモデルとして創作の筆を動かすやうに、彼等傑れた評論家は、古今の文人をモデルとして、自己の好みのまゝに人物を作り出したのだ。

同じく、トルストイのイゴイズムを說いても、メレヂコフスキーとゴルキーとは各々その論文が異つてゐる。前者は學究的であり、後者は現實的であり天才的である。

「彼れは自分に必要でないものを、乞食に與へるやうに民衆に與へたのだ。彼れは彼等に强要することが好きだ。彼等に强要して讀ませ、歩かせ、菜食主義者たれ、百姓を愛せよ、レオ・トルストイの理性的宗教の思案を不朽の眞理だと信ぜよと强いた。民衆には彼等を滿足させるものか、彼等を樂ましめるものが必要である。その後に勝手に行かしめるがいゝ。民衆をして彼れを平和の中に置かしめよ。「本質」の問題に於ける、底のない穴に面接した彼れの、不斷の、苦しい、そして時には樂しい、孤獨の中に彼れを置かしめよ」と、ゴルキーはトルストイについて云つてゐる。

古來の聖人賢人天才と名付けられた人々は、自分に必要でないものを、乞食に與へるやうに民衆に與へたとして、我々は彼等の心の秘密を見破ることが出來ないであらうか。何々主義の鼓吹にしても、主唱者は自分に必要でないものを、乞食に與へるやうに民衆に與へてゐるのかも知れない。思慮の淺いお目出たい民衆がそれに隨いて行く。……

今、私の所有には、日本譯の「大トルストーイ傳」第一卷と、チエルトコフの「晩年のトルストイ」と、アルツイバーシエフの「トルストイ論」（「作者の感想」と題した雜感集に含まれたもの）と、「闇の力」とがある。私はあれを讀みこれを讀みして、怪物トルストイの面目を眼前にちらつかせてゐる。

アルツイバーシエフも、メレジコフスキーのやうに學究的でない。彼れは彼らしく自己の心を、トルストイに於て讀んでゐる。「トルストイは八十三年生きた。しかも、三日生きてゐた者のやうに死んだ。……トルストイは人間が空想し得るあらゆる才能を持つて生れた。しかも、彼れは乞食の最後の一人のやうに不幸であつた。」

面白いことには、アルツイバーシエフが、トルストイの死後間もなく、故文豪に對する自己の感想を忌憚なく述べると、嵐のやうな漫罵嘲笑が彼れの頭上に降りかゝつて來たことである。それはトルストイといふ神聖な殿堂に對して、型の如き態度を取ることを敢てしなかつたゝめなので、日本でも夏目漱石逝去の時に、彼れの人物や作品に對して少しでも不足らしい批評を下すと、彼れの盲目的崇拜者等が目を尖らせて逆らつて來たことによつて、その一端を察することが出來る。

私は、トルストイの著書は隨分讀んでゐるが、この人の作品ほど人生の種々相を作中に織した人はないと思つてゐる。「あらゆる人間がその裡に自己の一部を、恐らく、彼れの一部に自己の全部を見出し」得られるのである。人生の概念的類型的種々相しか現はし得なかつたシエークスピアとは比較にならない。無類の客觀詩人と云はれてゐる沙翁よりも、主我的主觀的作家とされてゐる杜翁の作品に於て、人生が一層深刻に一層複雜に、一層多種多様に現はれてゐるのだから不思議だ。トルストイは、歐洲の常識に從つて、キリストを崇拜し、原始的基督教を鼓吹してゐたが、それは溺れた者が藁でも掴まうとしたのと同様で、彼れに取つてそれが何の足しにもならなかつたことは、「晩年のトルストイ」

を讀むとよく分るのだ。到底、二千年來の傳統[illegible]

にならない厚みのある人間なのだ。人間以上の神と[illegible]く者を信じ、キリストを神の子であると信じる者なら[illegible]の頭腦を持つてゐる人なら兎に角、さういふ迷信仰を脱却してゐる現代人が――ことに、基督教國の先入主的自信に感染してゐない筈の日本帝國の現代人――が、人としてのキリストを人としてのトルストイ以上に思ふのは沒分曉であると、私は感じてゐる。キリストは僅か三十餘歳で夭死したのではないか。八十餘歳までも人生の風波を凌いで來たトルストイに比べて、人生の體驗に於てどちらが富んでゐたか、それは云ふまでもないことである。無論年齡ばかりを標準には出來ないが、「人間が空想し得られる限りの才能を有つてゐた」トルストイは、天分に於て、キリストに比べても、昔の誰れに比べても劣つてゐよう筈はなかつた。

論より證據、トルストイ全集と、四福音書とを比べて見るがいゝ。どちらが人生の書物として内容に富んでゐるか。トルストイが四福音書に歸依したのは、彼れの空想裡の福音書に歸依したのでる。希臘の神話を材料として、後世の詩人が自己の創作を試みるが如く、トルストイは、キリストや原始的宗教を素材としてこれを心のまゝに使つて、自己の傑れたる創作を試みようとしたのだ。孔子が堯舜を題材として、それによつておのれを語つたやうなものである。

キリストは聰明であつたから、その說くところが人心の機微に觸れたのであつたが、由來說教といふものは手易いものなのだ。人に向つて道を說くことはさう困難ではない。キリストは荒野で短日月の試鍊を經たのに過ぎないが、トルストイは八十年間現世の試鍊を受けたのである。キリストは光明を示し、トルストイは口先や筆先で光明らしいことを云ひながら、彼れの全集彼れの一生は、詰りは暗黑裡のうめきを聞かせたのであつたが、しかし、前者の光明はお伽話

の光明で、後者の暗黒は大地と人心の底に渦を捲いてゐる現實の暗黒である。

そこで、私は、アルツイバーシエフと共に結論をつけやうとするのである。「然らばこの巨人は如何に生き、何の名に於て生き、如何に死んだか？。蓋し、若しこの巨人の生活にして何等人生の偉大さも意義も目的も示さないならば、何を私達の小さな貧弱な生活から期待し得るであらう？」

トルストイは、その該博な智識と、變化極りなき豐富な生活と、明快勇敢な理智とをもつて、八十年間人生の試練を經ながら、最後の日に、その生存の無意義であつたことを暴露したことは、私だちの胸にいかに手頼ない思ひを傳へることであらう。

「晩年のトルストイ」には、この苦悶を噛潰したやうな文豪が七轉八倒の苦しみをしつゞけたことが、目前にその人を見てゐる如く現はれてゐる。曲亭馬琴がその老妻に惱まされたのといくらか似てゐる。馬琴がその作品に於て人倫五常の道を說法しながら、自己の家庭に於ては表向きの奇麗事とは異つた現實の惱みを惱んでゐた如く、トルストイは「左の頰を打たれゝば右の頰を向けよ」などと、原始宗教の教旨を人民に强いながら、自分はヒステリーの老妻のために、肉を削がれ骨を削られてゐたのである。財産の拋棄出版權の拋棄などを企てながら、剛慾な老妻に妨げられて自說の實行が出來なかつたために、この老文豪の心の平和がいつまでも得られなかつたやうに、周圍の崇拜家は云つてゐるが、さういふ外形的の自說を實行したつて、彼の心が泰平になつたとは思はれない。一つの不滿が充たされゝば、他の不滿が彼の心に巢をくつたに違ひない。……また老妻ソーフイヤ・アンドレエウナにしても、孫や曾孫まで數に入れると、二十八人にもなる大家族をかゝへながら、トルストイの空想の犧牲になつて無財産の窮境に陷るのを恐れて、極力反抗したのは、人間性として當然のことなのである。

ストリンドベーリの「死の舞踏」をもつて、あまりに誇張したものとするものがあるならば、それは唯人生の奥底を知らないためではあるまいか。晩年のトルストイ夫妻の關係は、ストリンドベーリの筆によつて描かるべきものであつてある。トルストイ家出前の日記や書簡の抄錄は「死の舞踏」にも勝る凄愴たる響きを私などの胸に傳へるのである。

彼れの妻は、多年彼に對して囚人を監視する看守のやうな態度を持してゐた。トルストイは彼女の目を離れて、自由に一行の文章を作ることも出來なければ、親しい友人と自由な談話を試みることも出來なかつた。トルストイの深夜の冥想をさへ許すまいとするやうに、彼女は眞夜中に爪立足して、夫の寢室を扉の隙間から覗くのであつた。……ありとあらゆる要求や、またその要求に類する願ひなどを夫の前で口にしたばかりでなく、若し彼れが拒んだ場合には、それを自分の一切の行爲に現はし、彼れの意志に逆つてまでも、自分に、從はせようと試みた。この目的を果すために、彼女はヒステリーや狂氣の發作に罹つたやうに裝ひ、自殺すると云つて脅かし、毒薬を呑むとか呑んだとか偽り、半裸體のまゝ雨や雪の降つてゐる中へ、または夜中に戸外へ走り出るのであつた。……さうして家族の人達が、そんな仕打をして、結局あなたは彼れを殺してしまふことになるだらうと告げると、彼女は冷やかに、「あの人の魂が私に對して死んでしまつてから、もう長い事になるし、あの人の身體なんか、どうなつてもかまやしない」と答へた。それで、若し彼れが本當にあなたの仕打のために死ぬやうなことがあれば、あなたはどうするつもりだと訊かれると、彼女はよくかう答へた。「さうなれば私は伊太利へ行かう。あすこへはまだ行つたことがないから」

數十年寢食を共にした妻の口から出る冷語骨を刺すのである。そして、絶世の文豪トルストイがいよいよ最後の決心をして、平和を求めるため自分の家を逃出すに當つても、妻に氣取られはしないかと戰慄して、家を出掛けても、道を取違へて、茂みの中へ落ちて、ひつ搔かれ、木にぶつゝかつて倒れ、……追跡を豫期して恐れて震へた。

世界的に有名な「家出」について、故文豪のために敬虔なる釋明を試みるべく「晩年のトルストイ」といふ一書を著はしたチエルトコフなどは、仙人が魔女に苛まれてゐるやうに、この人生の一事實を取扱つてゐるが、トルストイはそんなお目出たい仙人でもなく聖者でもなかつただらうと、私は思つてゐる。……「一日中ものういみじめな狀態。夕暮近くなつて、この氣持が、物柔かな心――愛撫を、愛情を求める心に變つた。私は幼兒がするやうに、誰れか自分を愛して呉れるいつくしみ深い人の胸に顏を押しつけて、思ふさま泣き、柔しく慰めて貰ふことを切望した。しかし、私がそのやうにして近づき得る誰れがこの世にあらう？」と、彼れは晩年の日記に書いてゐる。彼れは二十餘人の兒孫に擁せられ、世界の人々に尊敬愛慕されながら、峻烈なる孤獨の淋しさに震へてゐたのである。財産拋棄や四福音書の信仰などは、この淋しさを忘れんとする果敢なき彼れの夢に過ぎなかつたのだ。

かゝる、人としてのトルストイ。非凡な藝術家としてのトルストイ。私はそこに計り知られない興味が寄せられるが、彼れの思想そのものにはさして心を惹かれないのである。

「アンナカレニナ」「戰爭と平和」「クロイチエルソナタ」その他彼れのどの作品を見ても、人間の達し得る限りのうまさをもつて、人間と世相とがいき／＼と描かれてゐる。十數年前、私は「アンナカレニナ」をはじめて讀んで、ウーロンスキーがアンナをはじめて見るところの描寫の巧妙に驚いて以來、トルストイの作物を讀むたびに、空前絶後東西無比の作家として彼れを仰ぎ見てゐるのである。しかし、彼れの戲曲は、彼れの小說よりも餘程劣つてゐるやうに思はれる。最も傑れてゐる「闇の力」についてさへさう感ぜられる。

この前勘彌などの演技を觀た時にもさう思ひ、今度築地小劇場の所演を觀てもさう思つたが、これは、俳優の技術の

至らないためでゝもあらう。

トルストイの所謂心機一轉後の作品であつて、從つて例の教訓傳道的臭が附纏つてゐるに拘はらず、藝術家として豐富なる彼れの天分は、こんな作品でも單純なる教訓劇としようとしても出來なかつたのである。ニキタはロシアのある農民であるとゝもに、トルストイ自身の影法師である。ニキタの悔悟によつて、人間の靈魂の光明を暗示したつもりであつても、それはトルストイ自身が、「懺悔錄」や「わが宗教」に於て、光明の域に達し大悟徹底の境涯に入つたらしく自から思ひながら、その實、最後まで煩悶孤獨迷妄に惱んでゐたと同樣に、「闇の力」一篇のわれ／＼に與へる印象は、依然として闇の力である。根強い本能の跳梁である。結末が惡人亡び善人榮え、目出たし／＼になつてゐようとも、鶴屋南北の脚本が陰慘で氣味の惡いものであるのと同樣である。「闇の力」の表面の筋立をそのまゝに飲込んで教訓や光明を感受する民衆は、ゴルキーのトルストイ論によつても知られる如く、トルストイから飴を甜めさゝれたと云つていゝのである。

ニキタがトルストイの心の影である如く、アニーシヤは彼れの妻ソフイヤ・アンドレエヴナの影ではないかと私は推察してゐる。多年夫の原稿の淸書をしたり、絶えず夫の言行をも監視したりしてゐた彼女も、創作中の一人物として、彼女自身の影が峻烈に描かれてゐるのに氣遣かなかつたとすると面白い。馬琴は彼れの惡妻お百婆のことを、その作中に屢々描いたらしい。その點では今日の「私」小說作家などは、あまりに馬鹿正直で且つ知慧がなさ過ぎる。アキームやミートリツチは、トルストイの好きな空想的人物らしいが、かういふ人物はロシア文學には頻繁に出現するので、チエホフやゴルキーの戲曲の中にあるひはドストエフスキーの小說中で、私だちは顏馴染になつてゐる。從つて、私はかういふ人物の上に、トルストイ獨特の創造力を、さう重く見ることが出來ない。

トルストイも劇作は珍らしいので、今日の日本の批評家に非難される上演意識なるものに、いくらか支配されたらしく、出場人物の取合せが芝居染みて、彼れの小說ほどに自然味がない。

四福音書はキリストの徒弟の筆に成る簡潔な傳記であるが、原久一郞氏によつて日本文に飜譯されつゝあるビリユーコフのトルストイ傳は浩瀚な評傳で、かうなると、その人に對する空想の餘地がなくなつて有難味が薄らぐ譯である。キリストだつて孔子だつて、その生涯の言行をこのトルストイ傳くらゐに細かに書かれて、白日の下に曝し出されたなら、人與紛々として、神らしさ聖人らしさの尊さを失つたであらう。

ビリユーコフの如き忠實な徒弟が、如何に細密に、正確に、そして整然と、翁の一擧手一投足の細微をも漏れなく捕捉して書綴つたにしたところが、翁の心裏の秘密は捕へられなかつたかも知れないが、我々人間の人生行路の參考として、聖書中のキリスト傳などよりも、傳へられてゐる偉人の正體がよく分つて趣味津々たるものがある。

二つの長篇

數年前「やまと新聞」に連載された田村松魚氏の「歩んで來た道」といふ長編は、作者夫妻の生活を微細に書いたもので、同種類の小說のうちでは最も興味のあるものとして私の記憶に殘つてゐる。妻の所行に對する夫の苦悩もいたましく現はれてゐたし、社交を好む妻の氣儘な生活振りもよく現はれてゐた。ことに、仲たがひして別れた妻が、夫が鹽鮭か何かで獨りで晩餐を食べやうとしてゐるところへ、ふと訪ねて來て、カーテンの奥に誰れかゞ隱れてゐるのではないかと疑つたり、夫に食事を勸められたりしながら、二人で手賴りない話を取りかはす結末の一章など、しみ〳〵とし

た藝術味人生味が、忘られがたく私の胸に喰つてゐる。一團凝らして置てよことした長篇小説とは素質を異にしてゐる「やまと新聞」などに出たために、讀者の目に觸れなかつたのは遺憾である。單行本として新たに出版されないのであらうか。

「文藝春秋」誌上の久米正雄氏の「馬券」は、上海競馬を背景にして、人間の射利心投機心から生ずる悲喜劇を書いたもので、簡單な噺話に過ぎないにしても、私には面白かつた。

金錢に對する人間の欲望は、時代の進むにつれて、ます／＼强烈になりつゝあるやうに思はれる。射利心賭博慾の發露は、一面滑稽に見えるとゝもに、一面悲壯に感ぜられることもある。宮島資夫氏の新作長篇「金」は、兜町の仲買商を中心人物として、取引所界隈の空氣を素朴な力のある筆で黒く鮮明に書いてゐる。筋立が通俗小説らしいところもあるが、作者の藝術的素質が不器用であるために、却つて面白づくの小細工がなくつて現實味が滲み出てゐる。これで、五百ページに餘る長篇を、私は退屈しないで讀通した。相場師を書いたものでは、露伴氏の「天打つ波」のある部分と、天外氏の「長者星」のある部分とを讀んだことがあつたが、二氏作中の相場師は、「金」のうちの人物に比べると、現實味は甚だ稀薄であつた。

「金」の作者は、その懷抱せる主義に基づき、金錢慾の權化見たいな作中の人物を、はじめから侮蔑して取扱ふのかと思つてゐたら、さうでもなかつた。仲買店の老主人の心理に深く立入つてゐて、その心理にわれ／＼も入込まれるところがある。淺い同情心から知人の零落の救助を父に强要した子女に對して、老主人が自己の衷情を述べたところなど、その一例である。「お前は今日まで、わしがどの位、苦勞に苦勞を重ねて來たのを知らないか、現にこの家も、あの店も、すでに他人の手に渡りかけた。それはみんな、わしが强情を張つて、この三年間、貫通して來たゝめだ。その時に

誰れがわしのために代つて證據金一つでも納めて與れると云つたものがあるか。」と云ふあたりの父子の對話は、浪漫な理想家と猛烈な實際家の心理をよく現はしてゐて面白いのだ。そして、この實際家も、自己以上の富豪たる栗田や安達に對する競爭慾復讐心から、全精神をそゝいで奮闘した擧句、意外な出來事のために急轉直下破產に瀕するところは、理想の崩壊と云つていゝ悲劇感を人に起させるのだ。頭の先から足の爪先まで金錢慾で固まつて、實際家の權化であるやうな彼れも、傍から大觀すると、誇りは金錢といふ理想の影を追つて捉へたり離れたりして苦しんでゐたのである。

最もうまく書けてゐるのは、老主人の部下の、頻りに惡黨がる保坂といふ男である。それから、腦貧血で倒れたあとでも、微かな息の通ふかぎりは、胸の上に置いた手をもづ〳〵させて、まだ花札をいぢつてゐるような眞似をしてゐて、勝負に生き勝負に死んで行く濱口老人がよく書けてゐる。作中幾多の人物中、少くもこの二人だけは、紙上に活きて動いてゐる。たゞ女性の描寫は甚だまづい。それから杉中といふ主要人物は、作家主觀の權化であらうが、通俗的痛快味をもつてゐるだけである。

この長篇は「東京夕刊」とかに連載されたのださうだ。「踏んで來た道」といひ、「金」といひ、私には頽廢へのする長篇が、文壇の注意を惹かない新聞に現はれるのは不思議である。かういふ新聞には、作者が讀者當てを氣にしないで筆を執り得るためではあるまいか。

淡島寒月氏

「中央公論」の六月號に、生方敏郎氏と內田魯庵氏とが、この頃逝去した淡島寒月氏について語つてゐる。寒月といふ人は明治最初の西鶴本の蒐集家で、紅葉も露伴も氏の藏書を借覽して、元祿文學を學んだのだといふことは、私も學生時

代から知つてゐたが、氏に関して、その他のことは何も知らなかつた。まだ生きてゐるのか否か、もう疾つくに死んでゐるのではないかと思つたこともあつた。

それで、私は今度、生方内田剛氏の追憶記によつて、はじめて趣味の人淡島寒月の一生について いくらか知ることを得たのだが、私が面白く感じたのは、七十近くまでの長い生涯を、殆んど何等の金取仕事をしないで過ごす人が、今日の時世にでも、まだ随分存在してゐるといふことである。江戸時代には、父祖の遺産などを手頼りにして、貧弱な風流を楽んで一生を過した人が多かつた。(それは専制政治の下で、自由に自己の天分を發揮し得なかつたためでもあつたらうが)いくら昔の世でも、白痴か病人でない限りは、何もしないで日を送る譯には行かないから、狂歌や俳諧を學ぶとか、書畫をいぢるとか、和蘭の骨董でも集めるとか、何かの道樂をはじめなければならなかつたのであらう。酒色の慾に沈湎するよりも上品で高雅でいゝのであらうが、私は江戸時代の風流人に對しては、ちつとも敬意が寄せられない。

私はトルストイのことを書いた後だつたので、淡島寒月とトルストイとの二人を對照させて考へた。トルストイは豐富なる資産を有してゐたのに關はらず、自から好んで、焦慮煩悶して、八十餘年の間悠然として南山を望んだことは一度もなかつた。「カリフのアブツラマンは、その一生の中に、十四日の幸福な日があつたと云ふが、私には乾度それだけの日もなかつたに違ひない」と、彼れはゴルキーとチエホフとに向つて云つてゐる。

寒月のやうに一生を過す人もあり、トルストイのやうに一生を過す人もある。キリストをもマリアをも閑餘のオモチャとして扱つてゐた江戸の通人の目には、トルストイの如きは、血迷つた新五左衛門で、話せない奴として映つたであらう。私などは、二人のうちのどちらのやうにして晩年を過したらいゝかと今考へたが、どちらにもなれさうでない。

斷片錄

△近來私のところへ寄贈される雜誌三十種を越ゆ。それ等を座邊に置いて、あちらこちら讀んでゐると、都會の表通りを歩いてゐるやうな感じがする。耳が鳴り出しさうに喧しい。浮つかりしてゐると、自分が突飛されるか、自轉車か自動車に轢殺されさうな危かしさが感ぜられる。生存競爭の激しさをあり〳〵と見ることも出來る。

△「隨筆」の創刊號は案外面白かつた。先代の「隨筆」では、寄稿者の多くが文壇人であつたが、今度は、執筆者が多方面に渡つてゐて、世間味に富んだ話の種が多い。この調子で續いたなら、特色のある雜誌として繁昌するだらう。

△數年間寄送を中止されてゐた「太陽」がまた來だした。この雜誌はこの頃は、評論でも創作でも、定評ある大家や流行作家を看板にしないで、若い人々の作品のみを集めてゐる。これはいゝことである。なほ同誌には、江見水蔭氏が明治文壇史を連載してゐるが、これを讀むと、私だちが少年時代に、遠くから羨望してゐた當時の作家の生活が華やかでも豐かでもなかつたことがよく分る。

△今年上半期の「婦女界」を一纏めにして寄贈されたので、非常に評判が高いといはれてゐる菊池久米兩氏の長篇の一部を讀んだが、その批評は後日に讓ることにする。同誌所載の廣津和郎氏の「勝者敗者」をも讀んだが、氏か戲曲の才能を具へてゐるのを意外に感じた。この頃の氏の小說よりも傑れてゐる。劇として一分の隙間もない。はじめて芝居を書いた人とは思はれないうまさがある。……これは附けたりだが、氏が先月の「新潮」に書き、今月の「合評會」でも話を觸れてゐるから、次手に辯明して置かうと思ふのは、私が久米氏を批評するために、廣津氏に當てこすつてゐると獨斷してゐることである。氏がさう思ふのも當然のやうであるが、あの時は、私が出席した一月の合評會の談話から

[illegible]によつて[illegible]下したこと、[illegible]にも[illegible]べたの[illegible]
の所論だけをハッキリ考へてゐたのなら、氏の名を口にすることを躊躇するやうなことはなかつたのだ。しかし、個人を目す
にしてゐなくつても、かゝいふ書振りは、批評家としての素質を疑はれるかも知れない。

△「女性」に連載された水上瀧太郎氏の「大阪の宿」は完結した。多くの讀者とゝもに、私もこの長篇を愛讀したのであつた。しかし、完結したあとで、回想すると、たゞ面白かつたといふだけ物足りない。作中の人物が私の頭の中を素通りしたゞけである。

△この頃は雜誌の數が多くつて、文學は隆盛を極めてゐるので、我々に取つて喜ぶべきことなのに違ひないが、かういふ文壇に身を置いてゐると、心が慌たゞしくなつていけない。十數年前には、「中央公論」などに、可成り長いものを、一月も二月もかゝつてユツクリ書いてゐられた。一つ書終ると、暫く原稿紙を離れて、氣儘に讀書したり遊んだりしてゐられた。旅行しても直ぐそれを材料にして何か書くやうなことはしなかつた。私は、あの時分の方が藝術的環境に浸つてゐたやうに思はれて懷かしくなることがある。（六月一日）

「なぜ女は老けるか?」號

■おかみさんの小使帳……北川千代
■桂月氏の酒ゆゑに……田中貢太郎

前感

◇暗い■■……長谷川時雨
◇青葉の窓……九條武子

■女は何故老け易いかの問題……醫學博士 高比良英雄
■臺所の科學(第一章食物の消化と精神作用)……醫學博士 越智眞逸

■竜野慘劇の家……安成二郎
■太陽に憑かれた女……畑耕一作 川端龍子畫
■今月の問題……吉野作造
■宵話・■詩・■卷頭文■

美容講座

◇髪と顔……山野千枝子
◇顔……早見君子
◇肌……メイ牛山
◇髪……大場靜子
◇着附……遠藤波津子

■奇怪なる放火事件の眞因
■生活難が產んだ二つの慘劇
■肺病の重罪人と心中した國子
■白蓮女史に救はれた吉原の娼妓
■豐橋高女の同性心中

■諸國「美人」行脚……伊藤金次郎
■神様へ苦情を申上げる……水島爾保布
■惡魔の作「美女」……小島政二郎
■をんな化粧一代史……岡本一平
■パ、さんマ、さん……楚人冠

■醫學上■若さと美しさを保つ法……醫學博士 三十家

婦人の一生

細君生活者の記録

◆悲しき道程……山田邦子
◆夢と現實……若杉鳥子
◆甲斐なき苦勞……武藤千世子

未亡人生活者の記録

◆亡びたく思ふ……三津木貞子
◆新しい目……江木榮子
◆再婚奬勵……岩野英枝

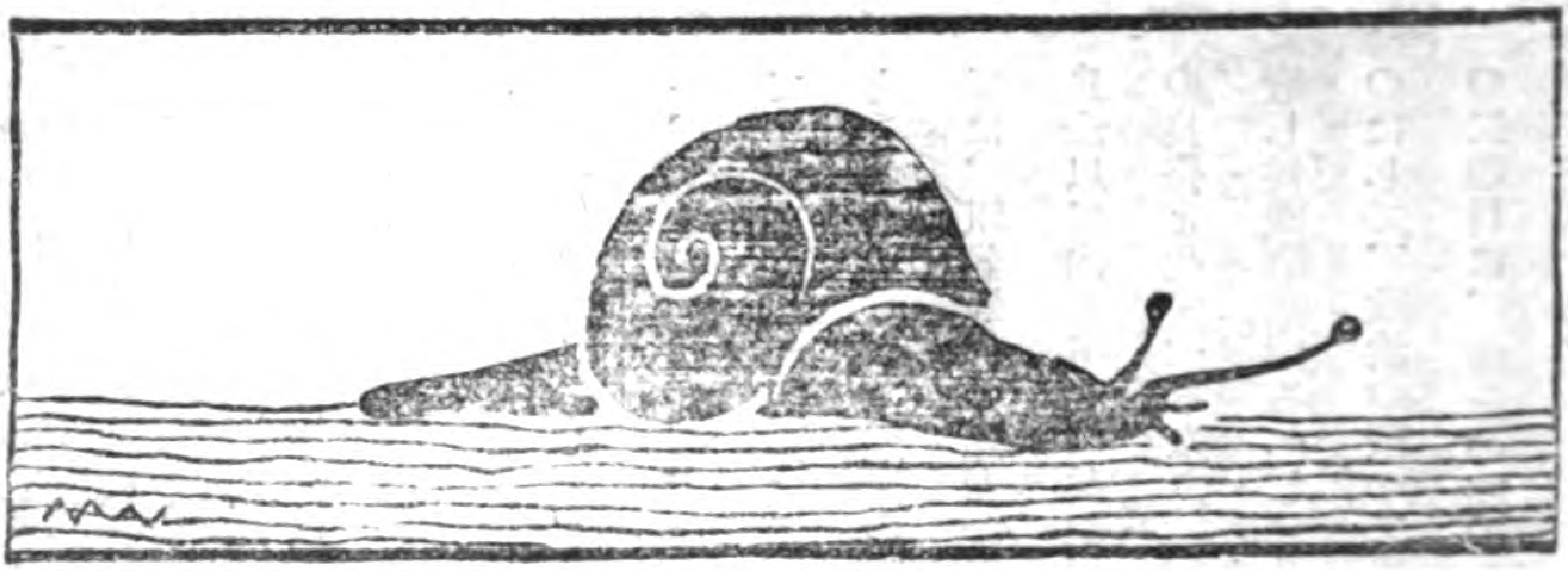
再婚生活者の記録

◆老を忘るゝ……柳原燁子
◆記憶への反逆……宇野千代
◆兎屋の生活……北川千代

獨身生活者の記録

◆氣樂さ煩しさ……植原久和代
◆獨り者の惱み……永井郁子
◆老嬢の生活……市川房枝

（中央公論第四十一年夏季大附錄號創作）



森有禮（五幕九場）

小山内薫

第一幕

第一場

明治二年（西暦一八六九年）五月二十七日の午後。

公議所議場。

正面奥の議長席に議長心得森金之丞。その左右に議長大原重實、副議長神田孝平。その後に、辨事、參與、議定、公卿、諸侯、若干名。右手に、議事取調掛數名。左手に學校、刑法、外務、軍務、會計、神祇などの諸執政官。議長席を挾みて對座す。

議長席より少し前に投票箱。その前に筆生二名對座。筆生より少し前に議案臺。

議案臺より又少し隔たりたる前に又投票箱。

投票箱、議案臺等を中に挾みて、左右方列に公議人（貢士）對座す。（公議人の員數は實際に於いては二百七十餘名なれども、舞臺に於いては必しも然るを

要せず。但し、少くとも百五十名を下らざること)

森あく。議長心得森金之丞、起立しゐる。

森。公議所書記小野清五郎提出の議案第十號「切腹禁止可然の議」は、可とするもの三人、否とするもの二百人で、否決に相成りました。これから廿二日の前會に提出して置きました不肖森金之丞の議案第十二號の討論に移ります。

公議人の一人。討論の必要はない。

公議人の他の一人。否決、否決。

森。討論に移るに當りまして、念の爲に今一應、議案並にその提出理由を朗讀いたします。(刷物をひろげて讀む)第一、官吏兵隊の外帶刀を廢するは隨意たるべき事。第二、官吏と雖も脇指を廢するは隨意たるべき事。(少し間を置きて)制度寮撰修森金之丞。謹んで案ずるに、人の刀劍を帶するは、外は以て人を防ぎ、内は以ておのれの身を護するところにて、天下動亂の時要すべきあり。然れども世運漸くに文明に赴き、人々おのづから道義の貴きを知るに至つては、粗暴殺伐の惡習おのづから相息み、これらのものも畢竟虛飾に過ぎざるのみ。方今國家鎭定、皇運日に隆興、良法以て内を正し、兵制以て外を守る。この際に當つて、人各禮節を砥礪し、所謂粗暴殺伐の惡習、變じて道義自守の良俗と化すべきなり。故に自今以後、官吏兵隊を除くの外、帶刀相廢し候義隨意たるべし。尤官吏と雖も、脇差相廢し候義隨意たるべし。是何ぞ偏に文事を重くし、武事を輕くするに非ず。固より文武同假、唯その名を異にするものにして、政治の賴つて擧るところ、人各著く意を注ぎ、二つながらこれを盛興すべきなり。今ここに陳するところの二個目は、唯その弊習を一新して、聊皇政隆興の際に裨補あらむことを思ふのみ。伏して諸賢の高評を待つ。謹議。(着席する)

公議人の一人。議長。第百三番。

森。第百三番、新庄藩波多野治右衛門氏に發言を許します。

波多野。（起立）諸君、拙者は慨嘆に堪へません。切腹禁止の議と言ひ、又この帶刀廢止の議と言ひ、天下の公議所に向つて、よくもかくの如き非國家的な議案が持出されたものだと思ひます。

公議人の一人。然り、然り。

波多野。議案提出者たる森氏は、帶刀を以て「粗暴殺伐の惡習」だと言はれるのであります。「虚飾」だと言はれるのであります。「弊習」だと言はれるのであります。併しながら、果して帶刀は「粗暴殺伐の惡習」でありませうか。「虚飾」でありませうか。「弊習」でありませうか。抑も日本刀は大和魂の權化であります。大和魂は「虚飾」ではありません。「弊習」ではありません。否、決して「粗暴殺伐」ではありません。

公議人の一人。議長。第五十九番。

森。第五十九番、松江藩雨森謙三郎氏に發言を許します。

雨森。不肖雨森は波多野氏に全然同意見であります。たとひ随意にせよといふ法令が出たにしても、苟も大和魂のある者は帶刀を廢さうとはいたしますまい。想ふに議案提出者は徒に洋風に心醉して、國風の貴きを忘れられたものでありませう。

公議人の一人。その通りだ、その通りだ。

公議人の他の一人。毛唐の眞似だ。

公議人の更に他の一人。大和魂は毛唐にはないぞ。

雨森。本議案は國家の精華を破にした議案だと思ひます。極言すれば、國家その者を危くするの議案だと思ひます。故に不肖雨森は極力反對をいたします。

公議人の一人。議長。百二十四番。

春。百二十四番、鹿兒島藩内田仲之助氏に發言を許します。

内田。私は同藩の藩士たる森氏からかかる愚案の提出せられたことを、諸君の前に恥づるものであります。

公議人の一人。貴公が反對なら、恥づるには及ばんぞ。

内田。諸君も御承知の通り、本案の提出者たる森氏は、慶應元年齢十九にして歐洲へ留學せられたのであります。それ故、森氏の教育は概ね西洋で受けられたものであると言つても差支はないのであります。從つて、森氏は西洋の歴史には通じてをられても、日本の歴史には盲目であられるのではないかと思ひます。建國以來、日本が萬國に比類なき國體を守つて來られたのは、抑も何の力でありませう。

公議人の一人。日本刀のお陰だ。

公議人の他の一人。大和魂だ。

内田。本朝の大勢は神武建國以來九變して武家の代となり、武家の代又六變して終に王政復古したのであります。建武中興の御政務以來、今上陛下の御親政に至るまでの朝廷の御苦勞は如何程でありましたらう。その間、皇統の連綿として一糸亂るることのなかつたは、皇威の犯すべからざるに依れること勿論ではありますが、また一面朝敵現はるる毎に死生を賭して必ずこれを鎭撫した忠勇義烈なる武士の功績に負ふところが多いのであります

公議の一人。然樣、然樣。

内用。士民に至るなげに「方今内安頻危」と云はれたが、果して今の内安は帯刀を廃しても可なる程に安定したのでありませうか。現に本年正月四日の御詔勅にも「一治一亂、内安ければ必ず外の患あり。豈武備せざる可けんや。」と仰せられてあります。次いで本年二月十一日、紀元の大節に、畏れ多くも我が鹿児島藩主たる島津公に賜はつた優渥なる御詔勅の内にも、「凡そ國備を正し、強盛に備へ、大義を立て、民安を図り」とのお詞があります。抑も一治一亂に備へるものは何でありませうか。強盛に備へるものは何でありませうか。拙者はもはや多言を費しません。本議案は日本の國體を危くするものであります。滿場一致の否決を希望いたします。

公議人の一人。同意、同意。

公議人の他の一人。刀をよしてピストルを持たうと言ふのか。

笑聲、起る。

公議人の一人。武士の魂が替へると思つてゐるのか。

公議人の他の一人。森は武士の魂を英國に忘れて來たのだ。

公議人の更に他の一人。早く便船で取り寄せ給へ。

笑聲、起る。

森。（起立す）靜肅に願ひます。議案提出者として、今一應趣意のあるところを申述べますから、暫時御靜聽を願ひます。

公議人の一人。もう澤山だ。

公議人の他の一人。聞かないでも分かつとる。

森。いや、まだ十分お分かりにならぬ點があるやうであります。既に提出理由書にも認めあります通り、私は決して文事を重くして武事を輕くするものではありません。同藩の内田氏は森は外國で學問をしたので、日本のことは知らないのであらうと申されました。これは誠に意外なお詞であります。鹿兒島藩士たる内田氏が我が鹿兒島の學風を御承知ない筈はありません。若し御承知がないとすれば、内田氏こそ薩藩第一の怠け武士だと言はなければなりません。

内田。（憤然と）怠け武士とは何だ。

森。苟も鹿兒島藩士たるものが、鹿兒島藩の學風を知らなければ、怠け武士だと言はれても爲方がありますまい。

公議人の一人。鹿兒島のことなどはどうでも好い。

公議人の他の一人。早く議案の説明をし給へ。

森。成程、私は弱年にして歐洲の地を踏みました。かの地で教育を受けました。併し、それまでは懈怠なく藩の教育を受けたのであります。諸君も御承知の通り、我が鹿兒島藩に於いては、年齢六七歳に及べば、集會所に於いて、經書歴史の輪讀並に習字運動の三課を課せられます。十五歳以上になれば、毎夜軍書の輪讀を課せられ、運動としては相撲、戰鬪演習、並に兎狩などをいたします。私も藩士の子弟として一通りかうした教育は受けたのであります。その上、別に兄の喜藤太に就いて漢學を學びました。川上八郎左衛門先生に就いて天眞流の武術も學びました。森は淺學短才ではありますが、日本のことをまるで存ぜぬ程無學ではありません。帶刀廢止の議案を以て日本歴史の無知に出來するものだと斷定せられるのは、誠に迷惑至極であります。

公議人の一人。それでは何に由來するのだ。

公議人の他の一人。毛唐人に由來するのか。

笑聲、起る。

ただ國家、何時何處に行ふところなかるべからざることは、不肖森もよく心得てをります。但し、それが爲には既に兵備が出來てをります。兵隊の組織があります。治に居て亂を忘れずといふことは、成程立派な覺悟ではありますが、今は建武時代でもなければ戰國時代でもありません。日本の歷史に比類なき御一新の大業が成つた萬民鼓腹の時代であります。英米佛伊は勿論最近瑞典、那威、西班牙、北獨逸聯邦の諸外國とも同等の交際をするやうになつた時代であります。日本は既に日本の日本に非ずして、世界の日本であります。かかる時代に於いて、兵隊以外の者が武器を帶びるといふことは、第一無用であるばかりでなく、野蠻時代の遺風だと言はなければなりません。

公議人の一人。無用ではない。御一新は何で出來たのだ。

公議人の他の一人。野蠻とは何だ。

公議人の更に他の一人。まだ人民は鼓膜してはをらんのだ。

森。今日諸外國に於いて、兵隊以外の者の平素武器を帶びてゐる國はどこにもないのであります。はじめて日本へ渡來した外國人は、この奇異なる帶刀の風俗を見て、必ず恐怖と疑惑に襲はれるでありませう。日本は好戰國である日本は野蠻國であるとして、必ず一種の警戒をするやうになるでありませう。

公議人の一人。日本を恐れるのだから好いではないか。

森。いや、それは外交上由々しき大事であります。外交とは平和的折衝の意でありまして、決して恐喝若しくは威嚇の意ではありません。條理公道を楯にして、一歩も假借すべからざるは言ふまでもないことではありますが、苟くも武力を誇示して條理を脅迫するが如きは、卑屈卑怯なる外交と言はなければなりません。

公議人の一人。帶刀がなんで恐喝だ。

公議人の他の一人。誰が條理を脅迫せよと言つた。

公議人の更に他の一人。帶刀は武力の誇示ではない。

公議人の一人。卑屈とはなんだ。卑怯とはなんだ。

公議人の他の一人。無禮なことを申すな。

議場、漸く騷然として來る。

森。どうか今暫く御靜聽を願ひます。先程、日本刀は大和魂の權化だといふお說がありました。如何にもそれは然樣でありませう。併し、權化は飽くまでも權化でありまして、實體ではありません。大和魂は無形の魂でありまして、有形の刀劍ではありません。

公議人の一人、屁理窟を言ふな。

公議人の他の一人。大和魂は無形ではないぞ。

森。若し大和魂が刀劍その者であるとすれば、賊に奪はれて刀劍を奪はれた時、諸君の大和魂は盜賊の手に渡ることになるのであります。

公議人の一人。刀を奪はれる莫迦があるか。

公議人の他の一人。莫迦なことを申すな。

議場、益騷がしくなる。

森。諸君の謂はゆる大和魂とは然樣な脆弱なものなのでありますか。建武御中興以來、一天萬乘の皇室を守護し奉つて

るのたものには、[illegible]たるものではありますまい。昔日は[illegible]れたこともありまして、[illegible]ては

ありません。

公議人の一人。兇器とは何だ。

公議人の他の一人。武士の魂を侮辱するな。

議場、愈騒然。

森。國家を守るものは斷じて刀ではありません。魂であります。

公議人の一人。いんや、刀だ。

公議人の他の一人。御一新はどうして出來た。

公議人の更に他の一人。貴公はもう忘れたか。

公議人の一人。忘恩者。

公議人の他の一人。國賊

公議人の更に他の一人。西洋崇拜。

議場、囂々。

――命が惜しけりや議案を撤回しろ。

――さうだ、撤回しろ。

――歸りを氣をつけろ。

――國賊。賣國奴。

森。どうか静粛に願ひます……

怒聲、罵聲、議場に滿つ。

森、終に卓上の木板を打つ。

それでも、議場の憤怒は鎮まらない。

議場、總立になる。

第二場

同年六月二十日の夕刻

森金之丞邸の一室。

森の兄横山正太郎、薩摩絣の單衣に袴を穿ち、机の前に正座して、頻に何か認めてゐる。

稍長き間。

森金之丞、襖を排して出づ。

横山。(筆を置いて、振向く) 金之丞か。

森。はい。(兄の前に手を突いて、禮をする) 只今歸りました。

横山。御苦勞だつた。(弟の顔をぢつと見る) 大層蒼い顔をしてゐるではないか。また刺客にでも襲はれたか。

森。いや、さうではありません。

横山。役所で何か不首尾でもあつたか。

森。（辭令書やうのものを懐から出して、兄の前に置く）これを御覧下さい。

横山。（書類を手に執る）※徵士並に職務を免じ、位記返上仰せつけらる（呆れたやうに弟の顔を見る）これはどうしたことだ。

森。その通りです。

横山。どうしてこんな目に會つたのだ。何か不都合があつたのか。

森。帶刀廢止の建議が祟つたのです。

横山。あれはこの六月二日の會議で否決されたと言つてゐたではないか。

森。さうです。滿場一致で否決されました。

横山。それなら、それで一件落着に及んでゐるわけではないか。

森。私もさう思つてゐました。ところが、太政官では、あまり世間が騒がしいから、一先づ役を引いてくれろと申すのです。

横山。岩倉さんや大久保さんがそんなことを言ふのか。

森。岩倉さんや大久保さんは、寧ろ私を庇護してくれたのですが、周圍がどうしても言ふことを聞かなかつたらしいのです。

横山。周圍が聞かないと言つて、岩倉や大久保ほどの人物が、それに負けるといふ法があるものか。

森。薩藩の先輩が一番反對したらしいのです。私を殺さうとしたのも多くは同郷人らしいのです。

横山。何といふことだ……太政官ではお前が邏卒につけ狙はれてゐるのを知つてゐるのか。

森。それは知つてをられます。いつも氣の毒だ氣の毒だと言つてをられます。

横山。氣の毒だと言ひながら、役を取り上げるとは何事だ。卑劣極まるではないか。

森。（寂しく笑つて）天下の大勢には勝てないのでせう

横山。（熱して來る）それが果して天下の大勢だらうか。おれはさうは思はん。役人どもは維新の功に誇る唯一部の武人を恐れてゐるのだ。一時を糊塗して、一身の安きを求めてゐるのだ。おれはお前とは學歴も違ふで、意見の上では多少とも相違してゐる點がないではない。例へば廢刀の可否についても、おれには又おれで意見がある。併しながら、公議所は天下の議を述める場所ではないか。建言輿論を求める場所ではないか。可否は問はず、廢刀の建議をしたことが、なぜ惡いのだ。それに何の罪がある。幾分過激ではあつたかも知れんが、國を思ふの誠意は、お前の書いた趣意書にも十分現れてゐる。どこに不忠がある。どこに不敬がある。免職とは何事だ。位記剝奪とは何事だ。

森。まあ、兄さん、さう興奮しないで下さい。

横山。お前はおとなしく引き下がるつもりか。

森。既に天裁をも經たことでありますから、この際少しでも不平らしい行爲に出るのは、却つて不忠不敬に當ると思ひます。

横山。（首を垂れる）それは如何にもさうだ。

森。それに、自分の精神が貫徹しなかつたのに、畢竟自分の考慮に足らぬところがあつたからだと思ひます。お國のお爲を思つてしたことではありますが、世間を騷がした點は重々申譯がないと思つてをります。

横山。それで、お前はこれからどうするつもりだ。

森。国へ帰ります。国へ帰つて四五年うんと勉強をいたします。折角抜擢されて官途につきながら、かうした結果を見ましたのは、畢竟自分の學問が足りないからだと思ひます。大言壮語をするやうですが、只今の日本には人物らしい人物が一人もをりません。真の儒者もゐなければ、真の豪傑もをりません。昌平校あたりの贋名學者が幅を利かしてゐる世の中です。国家が私を必要とする時期は必ず来ると思ひます。それまでに十分勉強をして、立派に御奉公の出来る資格を作つて置きたいと思ひます。

横山。その覺悟を忘れてはならん。お前はまだ二十三だ。まだまだ先が長い。もう一度初めから遣り直すことにしても、決しておそくはない。

森。はい。きつと御期待に背かないやうにいたします。ところで、兄さんはどうなさいますか。

横山。おれか。おれは東京を離れることは出来ん。おれは役人は嫌ひだ。仕官の望みもない。併し、お国は今累卵の危きに臨んでをる。幕府を倒した當時の意氣は今の政府には見られない。明治の新政は昨の非を今日の是としてをる。大臣参議は驕奢を極め、官員は名利を事とし、直を喜ばずして佞を喜び、官の為に人を求めず人の為に官を求めてをる。廉恥もない。忠誠もない。軽薄の風は天下に漲つてゐる。おれはこの状態をこの儘見殺しにすることは出来ん。殊に憂ふべきはこの頃盛なあの征韓論だ。おれはけふも實は佐田を訪ねて、一論判して来たのだが、彼等の唱ふる征韓論なるものは、總て政略から出たもので、決して大義名分から出たものではない。一體、我が国の現状はどうだ。庶民は困窮飢餓に迫つてをる。政令は枝葉にのみ走つて根本国是は今に定まつてをらん。一新とは名のみで、一新の徳化はどこにも見られない。若し国力が真に充實してゐるなら、朝鮮如きが我に非禮を加ふる道理はないのだ。それ

横山。これで、おれはこれでおいとまするつもりだ。

森。国へ帰ります。国へ帰つて田を作らんと奮発をいたします。折角抜擢されて官途につきながら、さうした結果を見ましたのは、畢竟自分の学問が足りないからだと思ひます。大言壮語をするやうですが、只今の日本には人物らしい人物が一人もをりません。真の儒者もゐなければ、真の豪傑もをりません。昌平校あたりの贋名学者が幅を利かしてゐる世の中です。国家が私を必要とする時期は必ず来ると思ひます。それまでに十分勉強をして、立派に御奉公の出来る資格を作つて置きたいと思ひます。

横山。その覚悟を忘れてはならん。お前はまだ二十二だ。まだまだ先が長い。もう一度初めから遣り直すことにしても、決しておそくはない。

森。はい。きつと御期待に背かないやうにいたします。ところで、兄さんはどうなさいますか。

横山。おれか。おれは東京を離れることは出来ん。おれは役人は嫌ひだ。仕官の望みもない。併し、お国は今累卵の危きに臨んでをる。幕府を倒した当時の意気は今の政府には見られない。明治の新政は昨の非を今日の是としてをる。大臣参議は驕奢を極め、官員は名利を事とし、直を貴ばずして能を貴び、官の為に人を求めず人の為に官を求めてをる。廉恥もない。忠義もない。軽薄の風は天下に漲つてゐる。おれはこの状態をこの儘見殺しにすることは出来ん。殊に憂ふべきはこの頃盛なあの征韓論だ。おれはけふも實は佐田を訪ねて、一論判して来たのだが、彼等の唱ふる征韓論なるものは、総て政略から出たもので、決して大義名分から出たものではない。一體、我が国の現状はどうだ。庶民は困窮飢餓に迫つてをる。政令は枝葉にのみ走つて根本国是は今に定まつてをらん。一新とは名のみで、一新の徳化はどこにも見られない。若し国力充實してゐるなら、朝鮮如きが我に非礼を加ふる道理はないのだ。それ

を考へないで、唯朝鮮を小國と侮り、妄に無名の師を興して、若し萬一にも蹉跌したならば、天下の人民は何と言はう。たとひ大勝利を得たにしても、名義を失つたら、長く世界の誹を免れることは出來まい。佐田の如きは己を欺き、人を欺き、國事を以て戯れとするものだ。おれはこれらのことを書に認めて、聞かれるまでは幾度でも建白するつもりだ。おれの味方は一人もない。しかも一人の至誠は以て萬人の心を醒すことが出來ると信じてをる。おれはこの建議の納れられるまでは斷じて東京の地は去らん。

森。事に大小はありますが、私の帶刀廢止の議も、兄さんの非征韓論も、根ざすところは同じだと思ひます。武力が政界の具となる時、國家は土の如く崩れずにはゐません。折角、御健闘を祈ります。

横山。うむ。どうしても聞かれんやうなら、死を以ても諫めるつもりだ。

森。いや、それはいけません。死ぬのはいけません。現在、私のやうな場合でも、昔なら切腹をするところでせうが、今は時勢が違ひます。私は一時の恥を忍んで、他日大に爲すところあらうとしてをります。兄さんも命を輕んじないで、飽くまでも生きて世を救つて下さい。

横山。いや、最後の手段は死より外はない。おれの死が諸公の胸に響いて、一人でも非を悟る人が出來たら、おれの死も決して冗にはならん。

森。分かりました。もう強いてお留めはいたしません。

横山。（弟の手を執る）金之丞、禮を言ふぞ。おれの心を知つてくれるのはお前ばかりだ。

森。（兄の手を堅く握る）私の心を知つて下さるのも兄さんだけです。

書生、慌しく出づ。

書生。（息をはずませて）お客様です。

横山。おれのところへ来たのか。君のところへ来たのか。

書生。森先生にお目にかかりたいと申してをります。

森。どうかしたのか。ひどく息をはずませてゐるではないか。

書生。先程から参つてゐたのでございますが、御密談のやうでございましたから、暫く差控えてをりましたところ、早く取次げと申して、脾腹を蹴られたのでございます。

横山。乱暴な奴だな。何人で来た。

書生。お二人でございます。府中藩の方だとか承りました。

横山。毛利か。まだ廃刀が祟つてゐるのだな。金之丞、早く行つて諭してやれ。

森。免職の上位記返上、だと申したら、大抵満足するでせう。

横山。大きにな。は、は、は、は。

森。は、は、は、は。

森、襖に手をかける。

第二幕

明治五年（西暦一八七二年）四月廿七日の午前。

亜米利加華盛頓日本弁務使館の一室（当時の弁務使館は或ビルディングの一部かホテルの一室を借りて設けた）

るものなるべし

山辨務使森有禮、フロックコオトを着け、暖爐のマンテルピイスの上に黒塗の小さい位牌を飾つてゐる。

從者荒井常之進、花を持つて登場。

荒井。行つて參りました。

森。買つて來てくれたか。それは有難う。（花を受取つて、直ぐそれを位牌の前に捧げる）

荒井。ほかに御用はございませんか。

森。外山はアリントン、ホテルへ行つたやうか。

荒井。はい。もうお出かけになりました。

森。矢田部はもう起きたか。

荒井。疾うにお目覺めで、もう新聞を調べて入らしやいます。

森。宜しい。それでは、もう行つて好い。

荒井、退場。

森、姿勢を正して位牌の前に立ち、合掌默禱する。

稍長き間。

外務次書大令使矢田部良吉、英字新聞を片手にして、案内なしにはひつて來る。

矢田部。いや、これは失禮しました。
森。(顔を上げて振向く)孫はん、孫はん、もう濟んだ。
矢田部。けふはお兄い樣の……
森。祥月ではないが、命日なので。
矢田部。では、毎月さうやつてお祀りになるのですか――ちつとも存じませんでした。
森。これでは餘り西洋心醉でもないだらう。は　は、は、は。(椅子にかける)
矢田部。(椅子にかけながら)全くお兄い樣は惜しいことをいたしましたな。
森。正直一途な人だつた。死を以ても當路の惡政を諫止せずには置かないとよく言つてゐたが、まさかに實際やらうとは思はなかつた。わしが東京にゐたら、どんなにしても留めるのだつたが、何しろ薩摩へ島流しになつてゐ たので な。(寂しく笑ふ)
矢田部。もう三年になりますな。
森。さう。をととしの七月のけふだつた。
矢田部。併し、閣下が再び迎へられて、かうした大任をお帶びになつたのですから、地下の横山先生はさぞ御滿足でございませう。
森。いや、それは分からん。政府は相變らずの政府だからな。現に岩倉大使の一行が條約改正の相談に遥々ここまでやつて來ても、條款一つ拵へて來んやうな始末だからな。かうした政府に仕へることは、決して地下の兄の喜ぶところではあるまいと思ふが、命ぜられた任地が外國でもあつたし、將來聊か期するところもあつたので、兄の靈に誓つて、

こつちへやつて來たのだ。

矢田部。お志の程はよく分かつてをります。外山や私をお連れになつて、自由に教育方面の研究をさせて下さるのにも、將來の御計畫がよく見えてをります。

森。教育だ。教育だ。何を措いても教育だ。教育がなければ、政治家も軍人も一文の價値はない。今の政治家はみんな御一新のどさくさ紛れに出世をした成り上り者だ。正式の教育を受けたものは一人もありはせん。各藩の藩士に至つては更に一層無知蒙昧だ。若しあの手合に少しでも教育らしい教育があつたら、わしが公議所へ提出した廢刀案なども、議論なしに理解が出來る筈なのだ。今の時世に、用もないのに刀を差して歩くなどといふ野蠻なことがあるものか。さういふ野蠻な風があるから、何度わしは刺客に狙はれたか分からない。兄の横山もたうとう刀で腹を切つてしまつた。

間。

矢田部。さう言へば、切腹禁止の議を出した小野清五郎も暗殺されたのでしたな。

森。あれも先覺者の一人だつたのに、實に惜しいことをした――わしが國へ歸ると、間もなくやられたのだ。

矢田部。まあ、こちらにゐれば、それだけは安心ですな。

森。併し、油斷はならんよ。吉田のやうな分からん奴が渡來して來るからな。

矢田部。さう言へば、たうとうお書きになりましたな。(新聞を出して見せる)

森。外債募集反對論か。いくら說いても吉田には分からんから、亞米利加の當路に警告を與へたのだ。吉田は同藩で、わしがはじめて英國へ留學した時に一緒に行つた一人だが、どうしてああ物が分からんのかなあ。

矢田部。十年[illegible]日本にならないやうですが、[illegible]アムス[illegible]いて[illegible]かせたでせう。今頃はさう思つてをられるでせう。
森。今にきつと[illegible]に代るだらう。さうしたら、また條理のあるところを説いてやらう。
矢田部。今日の日本の狀態で、二千萬圓からの外債を募るといふことは全く不利益だと思ひます。
森。君もさう思ふだらう。國計の基礎もまだ出來てゐなければ、條約の改正さへまだいつ出來るか分からん狀態だのに、單に諸侯の家祿を買ふ爲や鐵道の敷設などの爲に外國に公債を募るなどとは言語道斷のことだ。吉田は廟議廟議と、廟議の一點張りだが、たとひ廟議でも政府の命令でも、日本に不利益だと思へば、職務上わしは默つてゐることは出來んのだ。

唯かがドアをノックする。

森。おはひり。

辨務少記外山正一、登場。

外山。何か御用談ではなかつたのですか。
森。いや、例の外債募集の反對論を述べてゐたのだ。
外山。今も大使のところで、その噂がありました。
森。さう、さう、君はアリントン、ホテルへ行つてくれたのだつたね。御苦勞だつた。岩倉公はお變りはないか。
外山。大層御元氣でした。
森。公債募集のことはどう言つてをられる。

外山。誰にもしつかりした意見はないやうです。木戸さんも山口さんも、外國のことは森がよく知つてゐるのだから、或は森の意見が正しいのかも知れんなどと言つてをられました。

森。困つたものだな――伊藤さんや大久保さんからの便りはないやうか。

外山。まだないさうです。

森。一體、二人が條款を持つて歸つて來るまで、ここに待つてゐて、是非とも條約の改正をするつもりなのだらうか。

外山。さあ、それもしつかりは定まつてゐないやうです。あまり來るのが遲いやうなら、さう便々と待つてはをられんといふやうなことも言つてをられました。

森。困つたものだな――ところで、わしの出向くやうな用はなかつたか。

外山。來月朔日までは、ホテルで靜養をされるさうです。朔日には瘋狂院を參觀に行かれるさうで、閣下にも是非御同行が願ひたいと言つてをられました。

森。こなひだの招魂祭については、なんにも話がなかつたか。

外山。アリントンの招魂祭ですか。大使は好いものを見たと言つて、大層喜んでをられました。殊に、南北戰爭に就いての閣下の御説明が有難かつたと言つてをられました。餘程感服されたものと見えて、リンコルンのことを、幾度も言つてをられました。

森。（矢田部の顔を見て）そら、これが教育だ。君。

荒井、登場。

を左（森の前へ行つて、名刺を出す）お[illegible]お見えました。

森。（名刺を見る）カメヤマ——日本人だな。

荒井。さうです。

森。十五分位でよければ會ふと言へ。

荒井。はい。

荒井、退場。

矢田部。何者でせう。

森。心配はない——わざわざ旅費を使つて、ここまでわしを殺しに來る奴もないだらうから。

外山。併し、油斷は出來ません。

森。大丈夫だ。わしはどんな場合にも油斷はしてをらん。

荒井、龜山某を案内して來る。

龜山は白い布で包んだ刀らしいものを持つてゐる。

矢田部と外山は、出て行かうとして、これに目をつけ、ぎよつとする。

森。（矢田部と外山に）君達は暫くあつちへ行つてゐてくれ給へ。

二人はまだ躊躇してゐる。

森。（威嚴を以て）早く行き給へ。

兩人、去る。

細山、森の前にいきなり平伏する。

森。それでは、お話が出來ません。どうか椅子へかけて下さい。(自分が先づ椅子にかける)

細山。はい。(素直に椅子にかける)

森。御用は何ですか。

細山。はい。(躊躇する)

森。どうか遠慮なく言つて下さい。

細山。はい。(まだ躊躇してゐる)

森。時間がないのですから、どうか早く言つて下さい。

細山。(卓の上に兩手を突いて、頭を擦りつける)申し上げます……わたくしは先生に對して、實に申譯のないことをいたしました。けふはそのお詫びに參つたのであります。

森。(訝しげに)餘り唐突で分からんが、どういふことですか。

細山。(決心したやうに)先生、わたくしは嘗て先生を暗殺しようといたしたものであります。

間。

森。それはいつのことですか。

細山。先生が帶刀廢止の建議をなすつた時であります。

森。うむ。あの時は隨分大勢につけ狙はれました。

細山。わたくしも、なんにも分からずに、悲憤した一人でありました。

森。あなたは士族ですか。

龜山。申しおくれましたが、大垣藩のものであります。

森。薩藩の士族はみんな憤慨したやうですな。

龜山。わたくしはどうしてもあなたを倒さなければならないと思ひました。

森。なぜ倒さなければならないと思つたのです。

龜山。それはお答が出來ません。今日になつて見ると、冷汗背を潤すばかりであります。わたくしは屢先生を道に要したのですが、食ひ違ひ食ひ違ひして、どうしても先生を捕まへることが出來ませんでした。その内に、先生はたうたう薩摩へ歸つてしまはれました。併し、それが爲にわたくしは救はれたのであります。その後、一時の興奮から醒めて、だんだん先生の仰しやつたことを考へてゐる内に、どうも自分の頭は何かに縛られてゐるのではあるまいかといふ風に考へて來ました。そこで、今まで排斥してゐた洋學を勉强し始めました。わたくしの眼界は忽ちに開けて參りました。世の中の見方がまるで變つて來ました。それから、その後いろいろと準備をいたしまして、たうとう今度こちらへ渡つて參るやうなことになつたのであります。わたくしはこれから亞米利加のカリホルニアで開墾に從事するつもりであります。實に、今になつて見ると、お詫の申しやうもない不埒なことをいたしました。

森。では、その謝罪に來たのですか。

龜山。さうであります。(森の顔をぢつと見る) 先生、赦して下さいますか。

森。(いきなり龜山の手を取る) 君は實に偉い人だ。

龜山。お赦し下さいますか。

森。赦すも赦さんもありません。あなたは學問をしたお蔭で、眼界が開けて來たと言ひましたね。その一言を、わたしは何よりも嬉しく思ひます。

龜山。(涙を流して)これでやつと安心しました。實はもう一週間も前からこの地へ參つてゐたのでありますが、どうしてもお訪ねをすることが出來ませんでした。けふは非常な覺悟でやつて參つたのであります。

森。それは却つてお氣の毒でした。

龜山。さう仰しやられては申し上げやうがありません。(白い布で包んだものを解く)就いては、これがその當時わたくしの差してをりました刀であります。紀念として、これを先生に差上げたいと存じますが、お受け下さいませうか。

森。(刀をとつて押し戴く)有難く頂戴いたします。

龜山。(立つ)公務のお妨げをいたして申譯がありません。それでは、これでお暇をいたします。

森。(立つ)もう直ぐここを立つのですか。

龜山。今夜にも出發したいと思つてをります。いづれカリホルニヤの方から御通信をいたします。將來事業の上で御厄介になることも澤山あるだらうと存じます。その節は何分宜しくお願ひ申し上げます。

森。どうぞ、何なりと遠慮なく命じて下さい。暇があつたら、又このワシントンへも遊びに來て下さい。

龜山。有難う存じます。

森。(握手する)それでは、さやうなら。

龜山。失禮いたしました。

森、[illegible]
らデスクに向つて[illegible]める。
從者荒井、顔色を變へて登場。

荒井。閣下、閣下、吉田理事官様がおいでになりました。
森。(微笑しながら立上がる)たうとうやつて來たか。
荒井。なんだか大層怒つて入らつしやいます。お留守だと申しませうか。
森。ばかを言へ。直ぐにここへ通せ。
荒井。でも、非常な御剣幕ですから、若し間違ひでもあつては……
森。餘計なことを言はずに、直ぐ通せ。
荒井。はい。(行きかける)
森。矢田部や外山はどうしてゐる。
荒井。お部屋に入らつしやいます。
森。吉田の來たことは二人に言ふな。
荒井。畏りました。

荒井、退場。

森、部屋の中央なる圓卓に歩み寄り、卓に手をかけ、姿勢を正す。

大藏少輔吉田淸成、荒々しく登場。

吉田。森、貴樣は怪しからん奴だ。（衣兜から英字新聞を出して、卓の上に叩きつける）これは何だ。

森。まあ、かけ給へ。（椅子を指す）

吉田。（新聞を指す）これは何だ。これは何だよ。

森。讀んだか。

吉田。讀まんでどうする。

森。（兩樣の意味で）分かつたか。

吉田。分からん。分からんから談判に來たのだ。

森。（新聞を手にとる）どこだ。どこのところが讀めない。

吉田。（新聞をはたき落す）文字ではない。なぜ、こんな不埒なことをするのか、これが分からんのだ。

森。では、坐れ。返答をするから。

吉田。（椅子にどさりとかける）さあ、坐つた。

森。（椅子にかける）一體、何が不埒だと言ふのだ。

吉田。不埒ではあるまいか。おれは日本政府を代表して、廟議の決するところを携へて來てゐるのだ。然るに、政府の代作として外國へ派遣されて來てゐる辨務使が、これに反對するといふ法があるものか。況や第三者たる外字新聞に投書して、これを誹毀するに於いてをやだ。貴樣は日本の役人ではないのか。

森。おれは日本の役人だ。日本の役人だから日本の爲を思ふのだ。日本の爲になることなら、誰に向つて物を言つても

論理に訴じてない。若し、あるにしても、政府の代任たる者が、かやうな言辭を弄して、自國政府の名譽を傷つけるといふ法があるものか。

森。政府を盜賊にたとへたのは、論理上の譬喩に過ぎない。また減租賈祿の文字を嫌ふなら、文理者に聞いて見給へ。その意味が直ぐに分かるから。一體、君の持つて來た條件の内に「諸侯高を祿と見做せば」といふ詞がある。これが第一おれには分からん。これ蓋し東洋流行、無理の理より生ずるの理かな。

吉田。苟も政府の代任たる役人は、努めて政府の信用と名譽とを辱かしめないやうにしなければならない。これが交際吏員としての第一の職務だ。故に、政府の處置が果して全國の安危に關するやうな場合は、書を呈して利害を述べるか、使を出して事を議らせるか、或は自身歸つて意見を陳述するが好いではないか。命を奉じて來た理事官に迫るといふ法はない。

森。いや、おれはさうするのが一番好いと思つたからさうしたのだ。

吉田。そんな亂暴な詞があるか。

森。いや、決して亂暴な詞ではない。

吉田。いや亂暴だ。

森。おれが亂暴なら、貴樣は分からず屋だ。

吉田。分からず屋とは何だ。さんざん人に恥を搔かせて置いて。

森。搔くやうな恥を持つて來たのが悪いのだ。

吉田。なに。(立上がる)も一度言つて見ろ。

森。幾度でも言ふ。亜米利加三界まで恥を搔いで來たのは、貴樣の頭が悪いからだ。

吉田。何を。

吉田、森に掴みかかる。

森も吉田を投げ倒さうとしたが、ふと兄の位牌と其の前に捧げてある刀に目をつける。突然、手を放して、絨毯の上に膝を突く。

森。癪に障つたら、腹のいるまでおれをぶて。

吉田、氣の狂へるが如く、森に鉄拳を浴びせる。

森。ぶて、ぶて、いくらでもぶて。ぶつてゐる内には、貴樣の目も明いて來るだらう。

森、口をつぐむ。

吉田、尚續けて打つ。

矢田部、外山、ドアを押して驅け入る。この態を見て、立ち竦む。

第三幕

森。……永久とは何ですか。それは到底望むべからざることです。

李。望むべからざることとはどういふ意味ですか。では、條約といふものは、自國の都合で、破つても構はないと言ふのですか。

森。これは不思議な御質問を受けるものです。日本人にさういふ御質問の理解出來るものは一人もありますまい。勿論、條約といふものは、これを議定する際に、十分雙方の意に適ふやうにして作るものです。併し、一度きめたものは、永久に動かすことが出來ないといふ道理はありません。時勢の變遷に連れて、必ず改めなければならない箇條が出來て來ます。

李。勿論、それはさうです。併し、現今貴我兩國の間に結ばれてゐる條約は完全無缺なものです。それに、一旦締結した以上は、少くとも十年間は、雙方ともこれを固守しなければならないと思ひます。

森。如何にもさうです。期限をきめた以上は、その期限は守らなければなりません。併し現在の條約が完全無缺のものでないことは、閣下もよく御承知のことでせう。

李。それはなぜですか。なぜそんなことを言ふのですか。

森。總理衙門大臣などが私に向つて言はれました——朝鮮は清國の屬國である。だから、條約に掲げ言ふところの屬邦

の一つであると。

李。勿論、さうです。朝鮮事件について、衙門と貴國の公使館との間に往復した書翰の趣意は私も詳しく承知してゐます。即ち、朝鮮は清國の屬隷であつて、貴我の條約に基き、貴國からも屬國として見らるべきものの一つです。

森。併し、條約の内には、朝鮮が貴國の屬國だといふことを明示してある條款はどこにも見えません。これに反して我が政府は終始朝鮮を獨立不羈の國として認めてゐます。獨立國として待遇してゐます。列國は勿論、恐らく貴政府とてもさうに違ひありません。現に貴政府は曾て明言しました――朝鮮には自國の政府があつて、隨意に内外の事務を處理してをる。清國は毫もこれに干與することはないと。

李。如何にもさうです。如何にも朝鮮は獨立國です。併しながら、その國王は清國皇帝の命令に依つて立つのを常としてゐます。だから、清國の屬隷だと言ふのです。

森。併し、これは貴國と朝鮮との交誼に關する單に禮儀の問題ではありませんか。朝鮮獨立の問題には何の關係もないことです。

李。いや、朝鮮は清の屬國です。これは昔からみんなのよく知つてゐることです。

森。もうその問題はやめにいたしませう。いくら討論をしても際限がありませんから。それよりは、緊急に閣下の御注意を願ひたい一事がありますから、これを述べることにいたしませう――貴我の條約の内に、一方が他方の封土を侵掠してはならんといふ一款がありますが、領土の限界が確定してない爲に、曾ては臺灣事件を起し、今度は又朝鮮事件を起すやうなことになりました。私が現在の條約を不完全だとする理由は、この一條でもお分かりになるでせう。

朝鮮が貴國の砲船に發砲したのは、貴國自らが招いたことなのです。況や公法で禁じてある三里以内の海岸に進入し、城地を陥れ、人を殺し、財を掠むるに於いてをやです。

森。いや、これは違ひます。我が砲船は海水測量が目的で朝鮮へ參つたのではありません。薪水を求める爲に船を寄せたのです。船を寄せるには、先づ海水の深淺を實測して、進退を無難にしなければなりません。その上、砲船の帆柱には厳然と國旗が掲げてあつたのです。それにも關らず、突然これに向つて發砲するといふのは、我が國の名譽を汚すものだと言はなければなりません。勿論、直ぐに問罪の師を出して、彼を膺懲するのは容易なことではありますが、我が國はさういふ處置に出るのを好まないので、修好の使を派遣したわけであります。閣下は又我が國の砲船が公法上禁ぜられてゐる場所へ進入したのが悪いといふやうに仰せられましたが、公法といふものは、これを遵守する國に對して用ふべきもので、朝鮮のやうに公法の何物たるかを知らず、却つてこれを嫌惡するやうな國に對して用ふる必要はないと思ひます。

李。それは如何にも御尤です。併し朝鮮は決して貴國との交通を嫌つてゐるのではありません。唯その影響を恐れてゐるのです。自餘の外國が貴國の例に倣つて、狡猾な商業を營むことになると、朝鮮は忽ち亡びてしまふからです。

森。いや、その心配はありません。諸外國にいたしたところで、航海安全の爲に朝鮮海測量の自由をさへ許してくれれば、必ずしも開國通商は求めますまい。

李。いや、國外人の欲望は決してそこには留まりますまい。

森。それはさうかもしれません。併し、通商を迫るといふことは、どこの國でも出來ません。たとひ我が國でも、さやうな強迫を朝鮮に加へようとは思ひません。

李。それは保證出來ますか。

森。勿論のことです。苟も朝鮮に於いて外交を拒絶する正理があるなら、それを行ふのも好でせう。或は日本や清國のやうな昏商の國だけを容れて、自餘の外國を拒なとしても好いでせう。

李。さういふことが出來ませうか。

森。勿論出來ると思ひます。現に我が國の例を見ましても、今から三百年前に、歐洲の諸外國を容れて交易を營んだことがありましたが、だんだん內政に關與して參りましたので、和蘭國を除くの外は悉くこれを逐斥して再び日本へ來ることを禁じました。阿蘭陀人が良好友愛の情を我に示しましたことは、恰も貴國が我が國に對するのと同樣でありました。故に貴國及和蘭は數百年の間、我が國と交通があつたわけですが、その間自餘の諸外國は一切我が國へはひることが出來なかつたのです。漸くその禁が解かれて、日本が外國一般と交通するやうになつたのは、つい二十年前のことです。

李。果してさうなら、朝鮮もその計畫を變へなければなりません。

森。實は私もさうした件に就いて、貴政府の協力同心を得たいと思つて、貴國へ渡來したわけですが、今日になつて貴政府の意のあるところを見ると、甚しく私の期待に背くものがあるのです。

書。貴國の大臣[illegible]

ても。このお考を知りたから。これを賛成する[illegible]です。[illegible]

ても好いでせう――例の無用な領土不可侵の條款です。此あればかりを問題にして、何度手紙を書いたか分かりません。かやうな待遇を受けるのは、實に失望の至りです。

李。それは如何にもお氣の毒でした。併し、我が政府が朝鮮に關して、さういふ處置をとつたのには相當理由のあることです。一體、我が政府の見るところを以てすると、貴政府は事を行ふに當つて、甚しく急激に過ぐる嫌ひがあります。況んや今日の朝鮮はまだ貴國の望を十分滿足させることが出來るまで來てをりません。しかも、貴國は――臺灣事件の例を見ても分かるやうに――動もすれば隣邦を擾亂し、機に乘じてこれを奪はうとする意があるやうに見受けられます。

森。成程、貴國に比べると、日本は敏捷でもありませう。清國人たる閣下の目から見れば、或は短慮にも見えるかも知れません。併し、今日の朝鮮が日本の望を滿足させる程度にまで來てをらぬといふお説は首肯いたしかねます。我が國が朝鮮政府に求めるところのものは、極めて容易な一二件に過ぎません。先づ第一は、朝鮮が我が國に對して、國威相當の禮を盡すことで、第二は朝鮮海を我が國の船が安全に航海の出來るやうにして貰ふことです。日本が朝鮮に求めることは、この二件以外にはないのです。こんな至當な、こんな簡單な要求を拒むのは、天誅を畏れざるものと言はなければなりません。また閣下は今、日本は動もすれば隣國を擾亂し云々のことを言はれましたが、これは英明な閣下のお詞とも覺えません。申すまでもなく、日本は四方海に圍まれた島國でありまして、水に依つて生を營む者と、陸に依つて生を營む者と、その數殆ど同じであります。日本の人民が海利事業に熱心なのは、この理由からであ

りまして、政府も亦これが爲に保護の道を設けなければならないのであります。閣下の仰せられた征臺一件も、さうしたわけから、已むを得ず起つたことで、我が政府が莫大の費用と苦心とを厭はずに、あのやうなことをしたのは、唯政府が政府たるの義務を盡さうとしたからです。若し征伐が目的だつたら、どうして一旦占有した臺灣の一部を棄てる道理がありませう。

李。分かりました。朝鮮のことに就いては、早速一書を總理衙門へ遣しませう。我が政府があなたのお手紙に對する返事の内に、和親の條欵——即ち雙方互に領地を侵すことを禁ずる條欵を引いたのは、如何にも聊か輕卒でした。

森。その御一言を承つて安心しました。どうか貴政府が十分我が政府の眞意をお汲み下さればと願つてゐます。

李。暫くお待ち下さい。私の手紙に依つて、總理衙門が熟考する間、どうか待つてやつて下さい。

森。畏りました——貴國へ到着いたしまして以來、こんな愉快なことはありません。今夜は枕を高くして寢ることが出來ます。

外交的緊張、弛む。

李。それでは、お茶を上げますから、ゆつくりして行つて下さい。

森。有難うございます。

李鴻章、卓上の鈴を振る。

綠茶、運ばる。

李。失禮だが、あなたはお幾つですか。

森。三十になります。

た。

森。いや、併し、お元氣なことはなかなか若い者の及ばぬところです。

李。勿論、あなたは外國へ行かれたことがあるでせうな。

森。前後二回參りました。一度は西へ向つて東から歸り、二度目は反對に東へ向つて西から歸りました。

李。それは愉快でしたらうな。

森。まるで夢のやうでした。

李。ところで、この頃貴國では舊來の服制を棄てて、洋服を用ひられるやうになつたと聞いてゐますが、これはどういふわけですか。

森。極めて簡單な理由からです。日本舊來の服裝は無事安逸に世を送る人には適してゐますが、多忙多用な人間には全く不適當です。それで、時勢の變遷につれて、新式な服制をとるやうになつたのです。

李。併し、衣服といふものは、祖先を憶はせるものですから、子孫たる者はこれを貴重して、いつまでも保存すべきではないでせうか。

森。いや、吾々祖先が若し今日生きてゐたら、きつと吾々と同じことをしたらうと思ひます。吾々の祖先は既に千年も前に貴國の服が我が國の服より便利だと思ふと、直ぐにこれを採用してをります。凡そ何事につけても、他國の長を採るのが、我が國の美風です。

李。貴國の祖先が、私の國の服を採つたのは賢いやり方です。私の國の服は作るのも容易なら、材料も一切貴國のもの

で間に合ひます。第一歐羅巴の服を眞似るやうに金がかかりません。

森。成程　貴國の服は如何にも美術的ではありますが、便利といふ點では如何かと思ひます。靴も大きくて粗末です。髮の毛を結んで長く垂れるといふやうなことも日本の國民には適しません。ところが、洋服の場合はさうではありません。成程、經濟の原理を知らない人は贅澤のやうにも思ひませうが、勤勉は富の基、怠慢は貧の源です。便利な服を著て一所懸命に働けば、現在費すところに據つて、將來無限の報酬が得られると思ひます。

李。成程、それは如何にもさうでせうが、それに依つて貴國獨立の精神が歐洲の配下に委ねられるやうなことになつても、あなたは少しも恥ぢませんか。

森。少しも恥ぢません。私はこの變革を以て却つて世界に誇らうと思ひます。一體、この變革たるや、決して外から強迫せられたものではありません。全く我が國自己の好むところから出たのであります。日本は昔から亞細亞、亞米利加、その他いづれの國を問はず、その長ずるところを取つて、常に自國の短を補つて來たのであります。

李。我が國では決してさういふ變革は行ひますまい。唯軍器とか鐵道とか電信とかいふ器械方面のことは、確に西洋の方が優れてゐるのですから。これを採用しないわけには行かないのです。

森。一體、將來のことといふものは、容易に分かるものではありません。たとひ貴國にしても、四百年前に現在の服制を好んだ人はないでせう。

李。併し、これは我が國だけの變革で、決して洋風を用ひたのではありません。

森。併し、變革はやつぱり變革です。殊に、貴國の變革は強迫に出たもので、貴國の人民は容易にこれに服さなかつたと言ふではありませんか。

李。時に、亞細亞と歐羅巴の交際は將來どうなりませう――これに就いての御意見が伺ひたいものだが。

森。それは大問題です。この問題は各種の國民、各種の宗教の權威にも關係のあることで、世界二大洲の智力と富との競爭如何にあることだと思ひます。併し、私は亞細亞人ではありますが、亞細亞が歐羅巴と對抗の出來る時機にまだまだ數百年後でなければ來ないと思ひます。單に外面から見ましても、今日の亞細亞人の下賤野卑なことは禽獸を距ること遠くないと思ひます。

李。なぜそんなことを言ふのですか。

森。何よりも先づ第一に言ひたいのは婦人に關することです。一體、婦人を尊ばなければならないのは、天の定めた理法です。婦人は人間の母です。一國一家の母です。然るに、亞細亞洲では、どこの國へ行つて見ても、婦人を卑んで、これを遇する道を知りません。まるで獸か何かのやうに扱ふのです。私が亞細亞人を下賤だと言つた意味は、この一事を見てもお分かりになりませう。

李。これは不思議な議論を承るものです。あなたは一體耶蘇教徒なのですか。

森。いや、私は耶蘇教にせよ、佛教にせよ、回教にせよ、宗教と名のつくものを一つも信じてはをりません。現に御覽の通りの俗人です。唯常に正道を守つて、人を害さないといふことを一身の目的としてゐるだけです。併し、己れの心が己れの心を迷はして、常に實行の難きを嘆じてをります。

李。どうも實にあなたは豪い方だ。孔夫子のやうなお方でもあなたの仰しやるやうなことなら、謹んで聽くでせう。併

し、あなたのやうな賢い方がをられるのに、どうしてあなたの國は外征などといふ輕擧盲動を企てられるのでせう。しかも、お國は今財政困難で、巨額の公債をさへ歐洲に負うてゐるといふではありませんか。

森。併し、苟も思慮のある人間なら、豫め計畫するところなくして、妄に事業は起しますまい。

李。それは勿論のことです。併し、現在のやうに莫大な經費を計上して、この上にも外債を積むやうなことがあれば、國家は終に滅亡してしまふでせう。

森。外債のことに就いては、以前から私も聊か考慮を費してをります。一體負債といふものは、その方法と時機さへ宜しければ、必ずしも忌憚すべきものではありません。現に我國の歐洲に對する負債の如きは、國家にとつて實益の顯著たるものがあるのです。

李。それはどういふわけですか。負債は決して好いことだとは思ひませんが。

森。それはかうです。以前外債のない時代には、國民一般に、理財の方法も知らなければ國家の形勢にも無頓著でありましたのが、今日では、たとひ小額でも外債があるといふことから、國民が理財の方法を會得して、常にその可否を論じ、一擧手一投足にも深い注意を拂ふやうになりました。その上、百般の工業を起して、その利潤を以て外債支償に充てようと努めるやうになりましたから、外債は却つて我が國の財政を善良に導いたと言はなければなりません。

李。それは結構なことです。服制の變革と言ひ、外國に對する負債と言ひ、それが貴國の幸福になるなら慶賀に堪へません。唯併し、歐洲に對する負債の増加は必ず貴國獨立の束縛になるだらうと思ひますから、今後は御注意が肝要です。

森。御懇情の程感謝いたします――それでは、今日はこれで失禮いたします。

[illegible]

森。委細承知しました。

一同起立。幕。

第四幕

第一場

明治十九年（西暦一八八六年）十二月某日の午後。

高崎正風邸の客間。

文部大臣森有禮、書生に案内せられて登場。

書生。只今直ぐお見えになります。

森、默つて頷く。

書生、去る。

高崎、直ぐに出て來る。

高崎。やあ。年末で忙しいところを、よく來てくれた。

森。いえ、役所の方の用事はもう大抵片づきました。

高崎。家庭の方の用事はどうだ。

森。（默つて、高崎の顔を睨む）そんなことで私をお呼びになつたのですか。

高崎。さうではない。（笑つて）まあ、さう向きにならんでも好いではないか。

森。いや、併し、家庭の問題は家庭の内で解決するといふのが私の主義です。如何に先輩でも、他人の干渉は許しません。

高崎。誰が干渉すると言つた。僕は唯氣の毒だと思つて、見舞を言はうとしたのだ。

森。別に氣の毒なことはありません。

高崎。併し、君の男女同權論には多少の修正が施されるだらうな。

森。なぜですか――家内が不都合をしたからだと仰しやるのですか。

高崎。（默つてゐる）

森。そんなことで私の男女同權論が動いて溜まるものですか。その證據には、結婚をした時契約書を取交したやうに、離婚をする場合にも、双方諒解の上、契約書を破棄したのです。

高崎。それでは奥さんが同意をしなければ、離別もしなかつたといふわけだね。

森。勿論です。

高崎。それは分からんな。

森。お分かりになりますまい。

高崎。世間ではかう言つてゐるぞ――男女同權などといふことを稱へるものだから、女がそんな不都合なことをするやうになるのだと。

森。いや、これは違ひます。[illegible]の不[illegible]は[illegible]の不[illegible]で、[illegible]とは[illegible]ないことです。[illegible]には、[illegible]

[illegible]へ[illegible]以前にも、さうした事はあつたではありませんか。

高崎。（笑つて）成程、これは一本參つた――ところで、君は後妻を迎へる氣があるか。

森。適當なのがあれば、貰つても好いと思つてゐます。

高崎。岩倉公が末のお孃さんを上げたいと言つてをられるのだが。

森。岩倉さんのお孃さんだから、何でも彼でも貰へと言ふのでは困りますが、交際をして見て、氣に入れば貰つても好いと思ひます。

高崎。さうか。それでは、そのことを先方へ傳へよう。

森。（少し打解ける）その御用だつたのですか――

高崎。いや、それもあつたが、實はけふは君にあやまることがあるので、わざわざ來て貰つたのだ。ところが、いきなり男女同權論で食つてかかられたので、話がわき道へそれてしまつたのだ。

森。何をあやまると仰しやるのです。

高崎。例の黴の生えた勤王の一件だ。あれはこの頃になつて、つくづく君の說が本當だと思ふやうになつた。

森。いや、あれは酒の上で言つたことです。さう仰しやられると却つて恐縮します。

高崎。いや、ほんとに吾輩の勤王論などは、もう黴が生えて、犬も食はぬやうになつてしまつた

森。あなたがそんなことを仰しやるのは不思議です。

高崎。いや、もう黴の生えた勤王論などは再び言はん。もうけふからは宗旨變へだ。

森。どう宗旨をお變へになるのです。

高崎。これからは歐羅巴主義だ。

森。飛んでもない。氣でもお違ひになつたのではありませんか。

高崎。いや、決して氣は違はん。

森。でも、あなたのやうな勤王家が急に歐羅巴主義にならうと言つたつて、それは出來ることではありますまい。

高崎。いや、決して出來んことはない。過つて改むるに憚ること勿れといふことがある。また君子は豹變するといふこともある。勤王家が歐羅巴主義になつても、決して怪しむことはない。さあ、わしが歐羅巴主義になつた以上は、何も彼も歐羅巴流義にしなければ氣が濟まん。第一、君の係である教育なども、早速歐羅巴流義にしてくれんと困る。若し、さうせんやうなら、君の首を貰ひに行くかも知れん。

森。(聲を上げて笑ふ) それはをかしい。現に歐羅巴流義に爲しつつあるではありませんか。併し、あなたの仰しやるやうに、さう早急には行きません。五六年の内には、きつと歐羅巴流にして見せます。

高崎。爲しつつゐるといふ議論があるものか。わしは君も知る通り、英語も出來ず、佛蘭西語も出來ず、獨逸語も出來ないが、歐羅巴大陸は一通り廻つて見て來た。勿論風俗や人情も探り、教育の方面も注意して見て來た。ところが、どの國へ行つて見ても、きつとその國の國語學校といふものがある。さうして、小學校の讀本はその國の詞を正しく話させ、その國の文章を正しく書かせる階梯になつてゐる。佛蘭西へ行けば、佛蘭西のことを先づ第一に教へてゐる。獨逸へ行けば、獨逸のことを先づ第一に教へてゐる。英吉利へ行つて見れば、英吉利のことを先づ第一に勉强させてゐる。かうして見ると、學校といふものはその國の國民を作る場所である。ところが今君達の爲しつつあること

は気だ、[illegible]
[illegible]
たな[illegible]
學士とか言はれる人達の中に、手紙一つ滿足に書けぬ人があるではないか。わしは二三人さういふ人を知つてゐるので、始終手紙を貰つてゐるが、いつもてにはや語格が間違つてゐる、佛蘭西や英吉利の博士に、自國の文法を間違つて手紙を書くやうな人が一人でもゐるだらうか。どうだ。ちやきちやきの博士が、綴の誤な程日本の文法を知らぬ手紙をよこしたのだ。それでも日本の博士と言はれるか。わしが歐羅巴流にして貰ひたいといふのは、ここのことだ。歐羅巴の學校はその國の人を製造する場所である。日本の學校は英吉利人を製造する場所なのか、佛蘭西人を製造する場所なのか。英を學ぶものは英でなければならない。佛を學ぶものは佛でなければならない。日本の學問を隅つこの方へ押し込んで置いて、それで日本の學校だと言はれるか。日本の教育だと言はれるか。どうだ。早速あしたから歐羅巴流にして貰ひたいと思ふがどうだ。

森。（頭に手をやる）成程、これは一本參つた。實はそのことに就いては、私もかねて心配してゐるのです。かう言ふ自分も、日本文で手紙を書けば、きつと間違ひをするに違ひないのです――あなたは人が惡い。

高崎。いや、決して惡くない。君の說に依つて自分の說を變ずるくらゐ人が好いのだ。

森。もう深山です。けふは一本參りました。

高崎、笑ふ。

森も笑ふ。

第二場

明治二十二年（西暦一八八九年）一月二十八日の午後。

文部省の會議室。

直轄學校長會議。

森有禮、自席に起立して、演説す。

森。……現今帝國大學その他諸學校の氣風を見まするに、決して未だ滿足すべき狀態に達してをりません。蓋し、これは時勢の然らしむるところでありまして、諸君に於いても既にお氣づきのことであらうと思ひます。ところで、今これを滿足すべき狀態へ進めようとするには、主として學政の目的を明示し、萬事この目的に向つて進むのが第一だと思ひます。さて、學政の目的とは何でありませうか。これは詳言せずとも、既に諸君の知悉せらるるところであります。抑も政府が文部省を設立して、學政の責を負はせ、その上國庫の資力を借りて諸學校を維持する所以のもの、畢竟國家の爲であるとするならば、學政の目的も亦專ら國家の爲といふことに歸着しなければなりません。例へば、帝國大學に於いて教務を執る場合に、學術の爲と國家の爲とに關することがあれば、國家のことを先づ第一にしなければならないのです。學政の上から見れば、諸學校の教育は、生徒その人の爲にするのではなくて、國家の爲にするのです。一體、教育といふことは、教科書の材料を列べて事物を知らせるといふに留まりません。一般國民の心を確め、精神上の方向を指示し、一つの重點に歸向せしむることが最も重要なことであります。これは甚だ困難な爲事でありまして、二千年前の支那で行はれた周の世の教育を、その儘今日の世の中に移さうとしても、出來ることではありません。歐羅巴には宗旨があつて、それが少年の精神を固めることになつてゐますが、これはお國に於いて採るべ

りまた[illegible]
きことでな[illegible]
[illegible]
お[illegible]
御國の國體、萬世一系の一點であります。この一事より外に教育の基礎とすべきものはありません。御國の人民たるものは、遠い祖先から子孫の末に至るまで、千代に八千代に、御國の國土のあらん限り、萬世一系の天子に仰ぎ奉つてゐるのでありまして、こんな有難い國體は世界のどこへ行つても、二つとは見られないのであります。この國の成立を以て教の基礎とすることが、教育上第一の主義とならなければなりません。これを棄てて、他に依るべきところはどこにもありません。どこにもありません……

拍手。

第五幕

第一場

明治廿二年二月八日の宵。
内務省屬山口縣人兒玉佐一の寓居。
主人の兒玉、同鄕の靑年四五名、大きな卓を圍んで夕飯を食つてゐる。

兒玉。憲法發布も近づいたな。
靑年の一。あす、おさつて、しあさつてか。

青年の二。市中はえらい騒ぎをやるらしいな。

青年の三。新聞で見ると、なかなか奇抜な催しがあるらしい。

青年の四。山車や御輿も随分出るらしい。

青年の一。それぢやあ山王の祭も同じことだな。

青年の二。東京人はお祭騒ぎが好きだ。中にはわけも分からずに騒ぐ奴もあるのだらう。

兒玉。いや、いくら騒いでも好い。お祭騒ぎはおれも好きな方ではないが、今度ばかりはいくら祝つても祝ひ足りないやうな氣がする

青年の三。ほんとだ。君主獨裁が一滴の血をも流さずに立憲帝政に移るのだからな。

青年の四。古往今來、萬國を通じて、かういふ例はあるまい。

兒玉。ない。全くない。その代り、この二十二年の間の今上陛下の御苦勞はどの位であつたらう。おれはそれを思ふと、涙がこぼれて來る。

青年の三。板垣が民選議院設置の建白をしてからも、もう十六年になるからな。

兒玉。板垣などが何を言はずとも、陛下は既に御登極の際から、このことを天地神明に誓つてをられたのだ。有難いことだ。

青年の一。大典の當日には、西郷も賊名を除かれるさうだな。吉田松陰へも贈位があるさうだな。

兒玉。大赦令が出て、國事犯は全部釋放されるさうだ。愈有難いことだ。

内務省土木局計算課勤務西野文太郎、登場。

兒玉。おう、

兒玉。大層顏色が惡いぢやないか。體でも惡いか。

西野。(首を振る) いや。

兒玉。役所で喧嘩でもしたか。

西野。(首を振る) いや。

青年の三。どうしたのだ。

西野。いや、どうもしやせん。

兒玉。ぢやあ、飯を食へ。

西野。うむ。(まづさうに飯を食ふ)

青年の三。一體、貴樣、この頃どうかしてるぞ。

青年の四。背水庵からこつちへ移つて來た時は、ひどく愉快さうだつたが、この頃又すつかり沈んでしまつたな。

兒玉。青年は元氣がなくちやいかん——今も話してゐたことだが、しあさつては憲法發布だ。一つみんなで東京市中をあばれ廻らうぢやないか。

青年の二。おれも東京人のお祭騷ぎには不贊成だつたのだが、今兒玉の話を聞いて、大に祝ふ氣になつたところだ。

青年の一。どうせ役所も休みなのだから、東京市中見物して歩かうと思つてゐるのだ。千載一遇の大典だからな。

青年の四。(西野に) なぜ默つてゐるのだ。

西野、やつぱり默つてゐる。

兒玉。西野、貴樣はこの大典をめでたいとは思はんのか。

西野。それはめでたいと思つてゐる。

兒玉。今上陛下の御治績を有難いとは思はんか。

西野。恐れ多いことだと思つてゐる

兒玉。それでは、なぜもつと快活にせんのだ。

西野。唯一つ氣になることがあるからだ。

青年の三。分かつた。森文部大臣の不敬事件だらう。

西野。さうだ。

青年の四。貴樣は妙にこなひだからあのことを言つてゐるが、あれは果して事實なのか。

青年の三。おれは事實だとは思はんな。この正月に文部省でした演說の筆記を見ても、森は立派な國體主義者だ。あんなことを言ふ人が、苟にも皇室の御先祖に對して不禮を働くなんて、おれには考へられないな。

兒玉。聞くところに依ると、森といふ男は、秀才ではあるが、非常に傲慢な男ださうだ。だから、人に憎まれて、さもないことを大業に言ひ觸らされるのだらう。

青年の一。耶蘇信者だといふ噂もあるな。

青年の二。だから、神官や僧侶に憎まれてゐるのだらう。

青年の四。さう言へば、西野の親父も神官ださうだな。

西野。いや、おれは宗教上の惱みなどから人を殺しはせん。森は日本の國民として、誰が見ても許すべからざる行爲を敢てしたのだ。おれは德島から轉任して來る途中、伊勢へ寄つて、すつかり調べて來た。

兒玉。では、森は一體どんなことをしたのだ。

西野。森が三重縣へ學事視察に行つたのは、をととしの十二月だ。神宮へ參拜したのは二十八日の午後二時五十分頃だつた。案内役は尾寺禰宜だつたが、豐受大神宮の前まで來ると、森はステツキで御門扉の御帳を高く上げて、中を覗いたさうだ。尾寺禰宜が、この門内へは皇族以外のものははひることが出來んのだと言ふと、さうかと言ひながら、左の手で帽子をとつて、輕く頭を一度下げたきりで、その儘二見ケ浦の賓日館といふ宿屋へ引き上げてしまつた。皇太神宮へはたうとう參拜しなかつたのだ……

兒玉。それは事實か。

西野。確な事實だ。その時隨行したといふ山田の或新聞記者から親しく聞いて來たことだ。

青年の二。事實とすれば怪しからんことだ。

西野。怪しからんといふ程度のことではない。帝國の臣民として實に許すべからざる不敬な行爲だ。況んや、これが教育の大任を雙肩に擔つてゐる文部大臣たるに於いてをやだ。

兒玉。併し、唯それだけのことなら、さう深く咎めるには及ばんと思ふ。おれは鞄の儘神殿へ上がつたやうなことを聞いたが、まさかにそんなことはしなかつたのだ。

西野。咎めるに及ばんとはどういふ意味だ。ステツキで御帳を揭げたといふだけでも、不敬至極ではないか。

青年の三。それは森が日本のことを知らんからだ。あの人はうま煮のことを馬の肉だと思つたと言ふではないか。

西野。それは昔のことだ。森も今日ではもう四十三だ。日本のことを知らんでは、もう濟まん。

青年の四。おれは森がそんな不忠不敬な人間だと思ふことは出來ん。さつき兒玉も言つたやうに、あの男の傲慢な態度が、さうした流言を生んだのだと思ふ。

西野。流言とは何だ。おれは實際調査して來たのだ。

青年の二。事實さういふことがあつたのなら、第一當局が默つてはゐまいと思ふが。

青年の一。森は昔帶刀廢止の建議をして、位記返上を食つたことさへあると言ふではないか。亞米利加で理事官の吉田と喧嘩をした時も、日本へ召還されたといふ話ではないか。それに、それ程の不敬を敢てしながら、安穩でゐられるわけがないと思ふ。

西野。それは今の内閣が腑拔だからだ。

兒玉。それでは、森一人が惡いのでなくて、今の内閣全部が惡いことになるではないか。

西野、勿論のことだ。

青年の三。森は西洋崇拜であるかも知れんが、國家主義者たるに於いては、昔から終始一貫してゐる。おれはどうしても森を不敬罪に問ふことは出來ない。

西野。森の國家主義は舶來の國家主義だ。日本で生れた國家主義ではない。

青年の三。併し、森は日本の國體の世界に比類のないことを賞讃してをる。

西野。それは政略の上からだ。腹からほんとにさう思つてゐるのではない。

青年の一。それがどうして分かる。

西野。ステツキで御帽を揭げた一事でよく分かつてゐる。

兒玉。どうも、さういふ風にいつまでも一つことに拘泥してゐては困るな。兎に角、しおさつていふ大藩には大政令も出るといふのだ。もう好い加減に許してやれ。

西野。いや、許すことは出來ん。曠古の大典に、あんな非國民を列席させることは斷じて出來ん。

兒玉。出來んといつたつて、どうすることも出來んではないか。

西野。いいや、出來る。

兒玉。どうして出來る。

西野。おれが命を棄てれば、なんでもない。

兒玉。そんなことで命を棄てる莫迦があるか。

一同、笑ふ。

兒玉。さあ、もうそんな議論はやめにして、小川町へ散步にでも行かうではないか。

青年の二。行かう、行かう。

青年の三。前景氣を見に行かう。

一同、立ち上がる。

兒玉。西野、貴樣行かんのか。

西野。おれは一寸調べ物があるから、留守居をする。

青年の四。をかしな奴だな。ぢやあ、みんな行かう。

一同、退場。

西野、一人殘り、葛籠の中から紙を出して、食卓の上に廣げる。それから、筆と硯を持つて來て、何か書き始める。紙の上に涙が落ちる。

第二場

同年同月十一日午前七時。

森文部大臣官邸の應接室。正面に扉。扉の向うは廊下。

中川秘書、西野文太郎を案内して、登場。正面の扉、開いた儘になりゐる。

中川。どうぞおかけ下さい。

西野、椅子にかける。

中川。（椅子にかけながら）大臣は御參内前で時間がおありになりませんから、私が代つてお目にかかります。私は秘書の中川と言ふものです。

西野。實は秘密に閣下へ申し上げたいことがあつて參つたのですが。

中川。併し、何分にも參内の時間が切迫してをりますので。また明日にでも。

西野。いや、今日御參内前に是非ともお耳へ入れて置かなければならないことがあるのです。

中川。私が承るわけには參りませんか。

西野。實はけふ、閣下を途上に要して暗殺を企ててゐるものがあるので、その顛末を直接閣下に申し上げたいと思つて

參つたのです。

中川。（驚いて）それは一大事ですな、さういふことなら、委細をお話し下されば、折を見て私から大臣へ必ずお傳へいたします。

西野。いや、重大事件ですから、直接大臣にお目にかからなければ、申し上げることは出來ません。

大禮服を著た森有禮、廊下の外を通りかかる。

西野。（戸口へ走り寄る）閣下は大臣でありますか。

森。さうだ。

西野、いきなり左の手で森の胴に抱きつき、袴の下に隱してゐた出刃庖丁を揮つて、森の右の脇腹を刺す。森、應接室へ倒れ入る。

中川。（叫ぶ）賊だ。賊だ。

家扶岡本消遠、飛んで來る。中川と力を合せて、西野を組伏せる。

屬官座田重秀、駈けつけて來る。

西野、跳ね起きて、再び大臣を刺さうとする。

座田、仕込杖を拔いて、西野を斬り下げる。

岡本、中川、大臣を抱へ起す。

第三場

同年同月同日午前十時。

文部大臣官邸の二階。大臣居室。

森、病床に横たはりゐる。中川、座田、主治醫など侍しゐる。

森。(譫言のやうに)中川、中川。

中川。(擂り寄る)はい、はい。

森。中川はをらんか。

中川。中川はここにをります。

森。兇漢はどうした。

中川。座田君が直ちに成敗しました。

森。斬つたのか。

中川。はい。

森。可哀さうに。何で斬つた。

中川。仕込杖で。

森。仕込杖で。(間)兇漢はおれを何で刺した。

中川。(答へない)

森。何で刺したのだ。

中川。はい。庖丁で。

森。庖丁で。

中川。はい。

森。おれの兄は日本刀で腹を切つた……おれは庖丁で刺された……兄樣は仕込杖でやられた。

沈默。

森。(譫言のやうに)兇器は……兇器は……いつになつたら……日本から消えるだらう。

沈默。

岡本家扶、大禮服の内閣總理大臣黑田清隆を案内して來る。

黑田、直ぐに森の枕頭へ行く。

黑田。森、森。

森、瞑目して答へない。

黑田。安心せい。憲法發布の大典は、歡呼の内にめでたく終つたぞ。

森、目を開く。

黑田 天皇陛下から優渥な御沙汰があつたぞ。

森、微に笑つて、僅に頷く、やがて又瞑目す。

百一發の祝砲、遠く響く。

市民歡呼の聲、遙に聞ゆ。

主要なる登場人物

森金之丞（有禮）第一幕、廿三歳。第二幕、廿六歳 第三幕、三十歳。第四幕、第一場、四十歳。第二場、四十三歳。第五幕、四十三歳。）

波多野治右衛門、公議人、新庄藩。

雨森謙三郎、公議人、松江藩。

内田仲之助、公議人、鹿兒島藩。

横山正太郎（安武）、有禮の兄。

荒井常之進、從者。

矢田部良吉、外務文書大令使。

外山正一、辯務少記。

亀山某、大垣藩士。

吉田清成、大藏少輔。

李鴻章。

高崎正風。

兒玉佐一、内務省屬。

西野文太郎、内務省土木局計算課勤務。

中川某、文部大臣秘書。

岡本清遠、家扶。

座田金秀、文部屬。

黒田清隆、内閣總理大臣。

この戯曲、必ずしも史實に據らず。然れども、左記の諸著、作者を裨益すること尠少ならざりき。誌して謝意を表す。

木村匡氏「森先生傳」

小松徹三氏「明治大正流血史談」

伊藤痴遊氏「森有禮の死」

太政官刊「米歐廻覧實記」

尾佐竹猛氏「維新前後に於ける立憲思想」

煙山專太郎氏「征韓論實相」

宮武外骨氏「明治演説史」

坪谷善四郎氏「明治歴史」

妻木忠太氏「維新後大年表」



大阪商人

瀧井孝作

一

この朝たづねてきた大阪の叔父を、自分は、寝床などあげていまかたづいた座敷の方にと請じた。冬枯の庭の上にはよく日があたつて、座敷の内はつめたかつた。互に改つた風で口をつぐむだ。

叔父は茲は初めてだ。自分は暖くなつたら来ておくれと、正月叔父の宅でみんなに曰ふたのだつた。今日ひとりやつてきた、叔父は何ごとか話たくてだらう、とそんなに思はれて自分はそれを待受たが、互にいさゝか改つて落付かぬ風だから自分は

「やはり、茶の間の方があたゝかい、あちらの方に移りませう」

と曰つた。座布團など持つてたつた。

茶の間の方には叔父の持つてきてくれた、子供のゴムマリがころんで、つぎの臺所の方にトシコのこゑがした。南向のこゝの庭畑は花樹の苗木の植ごみに、はや梅

の花が二三リンひらいた。
妻は、陶の火鉢の傍にきて
「あしたですと何かあるのでしよ」
と自分に向いた。
「あした節分や、ばアさんは春日の萬燈籠やであしたにしたなあれと日ふとつた、僕はけふは晩いでえ一寸來た」
と叔父は日つた。自分は、叔母は「春日の萬燈籠」と日つてすでに心得てをると思はれた。叔母は上ミ方に二十何年か居るのだつた。
妻は自分に向いて日つた。
「あれは七厘を出しましようか、こゝでよいでしようか」
「ウンここでいゝや」
自分は明るい障子の方にと大きい陶の火鉢を引ぱつて行つた。鋤焼鍋をはじめた。叔父のさかづきに一杯つぎ、自分は
「奈良はわりによい牛肉があり升、暑い夏むきは少しかたくなるかもしれんが、いまはなか〱上等です」
といつた。
トシコが一しよにおぜんの傍に附くと妻は
「オマイカ、シメテ」
と、例のをしてやるのだつた。叔父はそれに目をくれるのだつた。

「それは何だ」

「これは、ワイシャツのお古で袖のとれたのですわ」

「フン、シャツのうしろまへか。オシコはえゝエプロンやなあ」

とさういうて、叔父はにがわらひだつた。叔父は子供服、エプロンなどの卸屋であるから、叔父にはこのシャツのお古はいさゝか意地悪だ。不快に思つた顔は、自分に分つたがすぐつぎには、互に氣にかけなかつた。

例の毎月の北陸行きは、先月は下旬ときいてゐたので自分は

「このあいだ北陸の方はずゐ分の雪でしたろ」

ときいた。

「フム、十七十八十九と三日お天氣やつた、あと一週間つゞいてどこもかしこも大吹雪やつた、外に出て歩いて居られん位やつた。高岡のプラツトフオムでは僕はころんだり何かして、こんど目はヒドイ目に遇ふた」

叔父はさかづきを持上げてさういふのだつた。自分は先日は、新聞に大雪の寫眞などがあれば汽車で雪見に出かけたいと思ひきらくな方だつた。で

「タマに旅に出たら面白いが、月々はつらいでしよ」

といつた。

「さうや、僕はこんど目は思ひもかけん弱り方やつたでえ、商賣は好景氣がくれば盛返やせるが、この年齢の弱りは何うにも直らん、僕、若い者に劣らん氣ぐみやが、氣だけでからだがいふことときかんでえ、段々にからだが持たん、酒をたんとやると次の日はからだにこたへるしなあ」

と、叔父はショゲ返つた元氣のない聲だつた。自分はそんなつもりで家のことなど云ひだした譯ではないが、叔父は自身の方に引きつけて困つて居た。これも實際困つて居るからだつた。

それから、老がこたへると云ふ叔父は沈みこんでは、酒杯をかさねると、やがて弱音が出た。

「近年は各百貨店、東京方面のエプロン屋が北國に入りこんで、競爭が激しいから、四五年まえ二割、三割方に廻つたほどのボロイ儲口がモウない、商ひはやりにくうなつた」

叔父は弱々とした面持でツブヤイたが、又自分に向ひ

「家で一と思ひに商賣ヤメてしまつたろか。いま現金は二萬圓程たまつたるコレを堅く廻はして宅らは儉約ぐらしやつたら樂ウにやつて行かれるんや。………が、僕は大阪のエプロン界でも屈指の方やで、これをそやつたら、タヾ捨てると同樣やないか、君は何と思ふか分らんが商人の身になつたらこれが惜しいやないか」

といつた。

自分は點頭いた。自分は叔父の弱つた心持には附込れんように性分無關心だつたが、今云つた話は實際に切迫した所があつて、叔父の心持は自分に映り、自分は、何だかそんな店の株があり〳〵浮出てまのあたりにある心持だつた。

「せつかく店の株だから、いまやめることは、惜しいでしよ」

「と君も思ふんか」

「商賣はいまやめなくとも、よいでしよ」

「やめたくはないのや、君が何と云ふかと思ふたがそんなら君の意見に從ひ、これは思ひ止マろ、之はよしと」

叔父は心持微笑んだ。そして幾分元氣になつた。自分は叔父に向ひ子供の時の態度だつたがこんなに相談相手にされ

るのだつた。

　叔父はそれから又、曰ひ出した。

「繁二郎のやつは、やはりあかんしなあ、こんども泊つた宿で僕はお客と話してをればあいつは火燵で本をよんでけつかる、商用の旅先へ本をもつて行くといふ心持が、第一僕には氣にいらん、君は繁二郎にこんど會つたら旅へ本をもつて行くことはトメてくれ、本は宅にをる時ひま〳〵に何ぼ見たつてよろし、……旅では汽車にのつたら新聞を何枚も買込んでよんだらえゝ、本は商人の世間話にならんが新聞の方やつたら話の種は何ぼでもあるでえ」

　自分は、自分の從弟にいだく叔父の不滿、商賣に役立たぬ養子にいらだつて居ることは、これまでしば〳〵見たり聽いたりした。自分は、中途から商家にきた繁二郎がうまくやれるとは思はれず、さう云ふ才能のない者にさう曰つておこるのは又無理だと思はれた。

　が、叔父はつく〴〵とからだの衰へを感じて居る。叔父は商人として店を大切がる心持から、跡繼の男が、役立たなかつたら實際心細いだらう。一と思ひに商賣止さうと考へたと云ふのも思へば哀れだつた。

　そこに居た自分の妻は叔父を氣の毒に思つた。それから叔父は自分らに向いて、かう曰ひ出した。

「それについて相談があるんや、君も知つとをる清治、あれに僕の商賣を手傳はせようかと思ふとるのや、未だ誰にもこの話は曰はんとをるが」

　自分は「ああさう」と思つた。清治のことは出し拔けに曰はれたやうに思はれず、自分の頭は徐ろにその方に向いて行くのだつた。

二

叔父は己れの實子の清治の話に移つた。

「僕も若氣のいたりからなあ、清治は、僕が大和を出たときあの子は腹にゐたんや」

と叔父はこれだけで口ごもつた。……妻を捨てゝ別の女の人と大阪に來てしまつたと云はれる若い頃の生活は、自分は他からきいてゐた……清治はそんな生れだつた。

叔父は筋目立つた話する方だから、昔の己れの仕出來したことは言ひにくい乍ら持出した。が、これきり多くは言はずに現在のことに移るのだつた。

自分は、先日叔父の宅にいつて、見てきたことを思ひうかべた。…………一月十五日に自分は行つたら叔父は「この九日に清治に嫁はんもろて、うちで三日お客をしたんや、堺の一寸遠縁にあたる家の娘はんや、いま二人はそこの路地の上の二階借りやが、二階住ひの嫁はんにしては荷物を澤山持つて來たで」といつた。さうして自分は引合はされた。二十二三のひとで、きて一週間たらずに新嫁らしい粧ひはなくこれは淋しい感じだつたが、地味な落付いた風が叔父などにきにいつたんだらうと思はれた。名は云はれた筈だが氣にとめなかつた自分はいまおぼえて居らぬ。清治は會社で晩遅くなるとかで自分はあはなかつた。叔父は路地に佇み彼等の二階に目をやつたりした……こんな風のことを思ひうかべて自分は、叔父に向くのだつた。

實子にかゝれん義理合で、四年まへに繁二郎と云ふ養子を入れたんだと思ふが、今度、一しよに商賣となると殆ど家に入れると同様だが、以前のそれはとれたかと思つた。自分は叔父の古傷にさはるやうだが、叔父の義理合を平くみを

心持を思つて
「さうなつたら大和の方かどこかゝら何か云はれる樣なこたあ」
と一應、輕くきくのだつた。叔父は悠くりと
「フム、あれの母親は亡くなつた、大和には母樣があつて親類にあづけてあつて僕は仕送つてやつとをる、八十になつてモウ死んだつてえゝがまだ達者でござるでえ、大和の親家は現在は釘附けにしてあるのやが誰にも借さずに婆樣のさうしきはそこから出したいでなあ、そのほか堺に僕の妹がある。Yはんのいま孀ばあさんやが之は家作や地所や五六萬の資産を持つてなか〳〵しつかりものやでえ、清治は何かと堺の叔母に相談する風やが……話はすればこの二人や」
こんなに日つた。父子は自然に近づいたわけだ。
自分は肯いた。いつか叔父の相談にのる心持だつた。實子にやらせるのだから別に反對する理由はなかつた。
叔父は清治の生活向きの話した。
「何にしてもあれのいま出とをる店があかんでえ」
「…………」
「こんど嫁はんもろて所帶持つたと云ふことで、あれは二十五圓の月給が四十圓に上つた」
自分は口をはさんだ。
「四十圓で二人くらせるかな」
「フム、そりや二階がりや、嫁は裁縫が上手やでえせつせとお針して一杯にはいくが、子供でも出來てみい、七年つとめて四十圓や、またこれから十年ゐて、倍の月給は六ケしいやろ……それといふのはあの會社が、五十萬圓の資本やが實

は欠損で五十万円以上にはならないさかいや、さうなつたらこれからまた[illegible]

ほんの方の穴うめせんことには行かんで[illegible]月給以上になるあてはない」

「…………」

「宅の方やつたら、手伸ばせたら越後新潟方面まで販路は廣い……それで宅は一人ふへたら從つて繁二郎が張るでえ、現在以上に商ひせんことにはあかん。現在は富山までやから、淸治には越後方面にとくゐ先をつくらせるのや、あれの月給は今日の倍にして、その上に利益は、二ツ半に分けるんや、そやつたらあれは立いけるし、宅は商賣擴張や、兩方よいやろかと思ふのや、利益分配は二ツ半にするんやでえ三人やで、繁二郎は商ひはまだ見習ひやでな」

自分は、こんな風に云はれる商ひの方の事柄はよく分らず、只ぼんやりと聽いた。が、淸治の生活を何とかしてやりたがつて居る父親の心持は受けとれた。

叔父は自分を見戌つた。

「何うやらう、君は分つてくれるでえ、僕は君にこの話の間に立つて貰はんならん思ふのや、僕が話せば親の權柄でさせると思はれる、僕はこれは親の權柄で曰ひたくない」

自分は點頭いた。

「宅のばさんと繁二郎と、この二人に先づ當つてみてくれ、二人が承諾した上で淸治に持出してくれ、僕は堺の妹に曰ふでえ」

「話しに行くのは僕は宜いが、さうなると僕は、淸治君に繁二郎のことはたのまんならん」

「……」

叔父は口を噤むだ。自分は實子の方に實力はあるのだから自分の從弟の立場から、先走りでさう云つたが叔父にきにいらん風だつた。自分はその複雜な家庭が思はれ、叔父の古傷が思はれたが、こんな風でもつてそれの意地惡をいつたわけではなかつた。

兎も角、一人は商店の丁稚から仕上げた年功者、一人は大工から商家に來た男でいろいろの掛引の太刀打はまだ出來ないが、二人うまく折合つて行かれたら結構なのだつた。それで

「清治君はやりてでしよな、繁二郎はかたい一方で、謙遜して穩和な男だから、役に立たん代りにむちやはやらない。まあ守る方にとりえはありますかな」

と、自分は叔父の心持に向いてさう曰ふのだつた。叔父は點頭くのだつた。

二人の話の中にトシコは例の晝寢で下にねかされた。

叔父は、まだ酒杯を持上げて居たが、やれない自分は、先に御飯にするのだつた。すると叔父は共に御飯にした。

「今日は大和の高田に廻るでえ」

と叔父は、婆樣の所を曰ひ

「次の日曜は何日か、そや七日が第一日曜や、それやつたら待つとをるでえ、君は七日に來とおくれ」

と、用向の方は自分の承諾を得るのだつた。自分はいさゝか厄介に思はれたが引受たことだつた。

叔父は今日は高田の在所に廻るやうにいつたけれど、おぜんなどの片付いた跡の火鉢に寛いで凭りかゝり

「こんどほど弱つたことはないでえ……僕はつくづくと考へたでえ」

と、獨言が出るのだつた。

三

自分は叔父の戻つて行つた跡で、叔母やそこの從弟のことを思ひうかべた。叔母は清治のことに異存は云ふまい。商ひのできる上で清治とえゝ肩を並べん繁二郎は、これで不斷にやつつけられることになる。叔母はすぐ之は思ふだらう。自分もそれは可愛想に思つた。叔母は繁二郎の商ひのできないことを見拔いて、杉村さんと云ふエプロンなどの商品を造る所に用はれて、裁チの方を習つておいたら手に職がつけばくひはぐれはないと云つたことがあるが、之が叔母の繁二郎に向いた思案だつた。

自分はこんな思ひで、叔父に引受た話、これは七日の日に行つて何う云ふ風に叔母や從弟に持出したら宜いか分らなかつた。まあ行つて會へば何とか云へるだらうと思つた。そして其日晝過ぎに行つた。

叔母と繁二郎とはこゝろもち淋し相な面持だつた。叔父は元氣に迎へた。

「いまお晝たべたんや、待つてゐたがなか〳〵來んでえ」

叔父にさう曰はれたが自分は腹は一杯だつた。

自分は奥の方に行き火鉢に凭ると、石油ストオブの瓦斯の音たてゝをる圓い反射が向けられた。自分は何と云ひ出してよいかまだ分らなかつたが、叔母、繁二郎がきて坐ると、叔父は自分には口を開かせないかのやうに一人で口きくのだつた。

「今朝來てくれるかと思つて待つてゐたが見えなかつたでえ、僕は先程皆に一座話して見たのやが、ばさんも繁二郎も異存はない様や、清治にも一寸話したらあれは、わし一存にも行かんで堺の叔母さんと相談して改めて返事すると云ふた、僕もさう云ふやろと思ふたでえあれもそれでよいやろと思ふのや、一昨日F（自分の妹むこ）の所へ行つて此話を

したが、僕はFはどうも氣にいらん所があるのやがまあ話したらFはかう云つた、淸治に宅の商ひやらせるのは贅成やが、繁二郎は出來んから杉村さんにでも用うてもらう樣にと云つたが、斷う云ふこと云ふからあいつはいかんやつやて、未だ若いで斷う一と口に云へるんやろ、僕は繁二郎を養子にもろたのは奉公さす爲ではないそんなこと出來るか、奉公して居ると國の方にきこえてみい僕は顏向けがならんやないか、繁二郎は跡つぎやで宅の商賣を守つて行かねばならん者や、繁二郎をどこまでも跡つぎとして立てゝ行くんでえ僕はモチットましになつてくれとやかましく云ふのやでえ、淸治は養子や云ふても跡つぎでないで淸治は商ひやるとしても跡繼を盛立てゝ行くこれが當り前の道や、これで僕は繁二郎をちやんと立てうとは常に思うとるのやでえ、淸治にはあの嫁はんもろたが繁二郎の嫁はんはその上にでんことにはあかんでえ、賢こいか、きれうがよいか、里が上か、一つ勝さつた所のあるのをと思つて僕は考へて居るのやでえ」

自分は聽いてゐる中に思ひ付いて曰ひだすのだつた。

「さうだ、Fの云ふことは簡單でいゝと思ふ、叔父さんの言葉も尤と思ふ、之は繁二郎君がどつちにするか自分できめるんだな、自分は到底商ひはできないと思つたら茲で一と思ひにきつぱり云つて斷はるか、やれると思つたらさう云つて商ひの方へ心から振ひ立つて打ちこんで行くかどつちかと思ふ……僕も淸治君へ話をする場合繁二郎君は商ひがヘタだからたのむと云つては、そんな足手まとひになるやうなことは持出せないが、繁二郎君は確かりやると云ふから一しよにやつてくれないかと云ふ風なら面白いけれど……併し茲で君が到底でけんと思つたらさう云ひなさい、君が斷つたとて決して君が惡いとは思はれんが―」

自分は繁二郎は自决は出來ない男と思つたが、又、自分でいやだと云つて打ちこはしてしまふほどの元氣を茲で出してくれたら、さう云ふ力がついたらと思つた。それは叔父の期待を裏切るわけだけれど、從弟自身で自決の場合は、恩に

こむくとかは[illegible]と云[illegible]家にはならんと出来[illegible]

[illegible]

自分は又曰つた。繁二郎は一寸頭を上げた。

「商ひをやります」

「それならさう云つて僕は滑治君に話を仕様！」

自分は自分一人好い子になる爲に從弟をむごく取扱ふ風だつた。叔母は子をかばふ風に

「滑治さんに商ひの方をしてもろうのはわてはあの人は出來る人や思ふでそりやけつこや、繁二郎の方はわてはあかんと思ふで、杉村さんの店に行つた時折〳〵ひまがあつたら工場に入つて裁チを習つておけよと云ふてゐたんやが」

といつた。叔父はこれは聽かん振して自分に向ひ

「そや、君はよく云つてくれた、………これで商ひは面白いもんやでえ、僕の店を退いたのは大正九年やつたがその時貯金と慰勞金とで千二百圓程あつて、それを元手に始めたのがこの商賣やはじめは捗々しくなかつた、で、ばさんと火鉢に顔突合せて田舍に引込み細うにくらさうと考へて、高山へ手紙をやつたら君の宅からは「大阪の土地で立つた者がそこをはなれて何でくらせるか」と返事がきた、僕はそれから思ひ直した、その中に好景氣が來たのやつた、これから僕は商ひ十年したら五萬圓できると思つたが今豫算通りやで」

といつた。叔父は更に自分に向いた。

「僕はそれで、君がこんど間に入つて保證に立つてくれるんで之も相談やが、細々したことはあとできめるとして、利益の分配は三人に二ツ半に割るのや、資本は皆僕が出してそれの利息は僕が貰ふけれど、右様な雑用さし引き利益は二

ッ半に分解するのや。いはゞ今朝何時や」

「二ッ半とは」

「二ッ半つて、昔にあたるへんもしれんな。たとへば十時頃は四ッ時。四ッ半は十一時。二を繁く數へるとこうした工合や。また繁く時はたんと數へんこと」

自分は首肯いた。そしてうたれはしに

「さうすると、これは八ッ半といふわけではないな。四時分。父様が寝つた様な工合ですな」

と私どに向いた。私どは自分に向ひかけて

「二や。こんどの話はこれで村さんでも云はれたな。それであんたは八ッ半にしやはつたらないやろな。品物はあとからとつて大勝の話かけた」

自分は村さんといふ婦人はすぐそこへたかと思つた。

そこへ娘が出て来た。村さんはお八つ中昼に行つて来た。清吉の娘の兄で。魚屋で切りいれた物を出し一昨日のお下の用意しに来たいだつた。私どは

「いゝところへおこしやした。清吉も今の時はあんたてきはの向ひを下つたはずよう思つてゐますのや」

と。今後の話をしたら私は父にこ／＼と聞いた。

「清吉のやつ何してゐるんや。また師つてをらんか覗いてこい」

と私どはそすらに向くのだつた。

清吉はしばらくたつてやつて来た。自分は、二十何年で何ふのだつた。二十八の男だ。痩せたいかり肩。痩せた京花

といつた。清治は小僧に火鉢一つ持つて先に二階に上り、座布團などを用意した。どうぞ／＼上座へと譲り合つた。自分は叔父があらかじめ話した上だし只形式だと思つたから、軽くそこに坐つた。

「叔父さんが話をされたさうですが、僕は紫二郎にさう云つたら紫二郎は奮發してやりたいと云つてをるから、一しよに働いて下さい」

とこれだけ曰つた。清治はお辭儀して

「私には堺に叔母がありまして、私一存には出來ません次第で。この叔母に、一應。相談致さねばなりません、で、さきほども。こう返事致しました次第ですが」

と改つた調子で、固くるしく曰ふのだつた。自分は首肯いた。そしてそれですんだので簡單にして下に降り様としたが、清治はやはりかたくなつて坐つて居た。

「ぢやあ」

と自分は云ふのだつた。

叔父は自分に向ひ

「今日は何たべるか君のくひたいもんを云ふてやるから、この頃はあひ鴨のうまいのがあるでえ」

と、そこの客はさしおいてさう云ふのだつた。

四

自分は其の晩戻つてから、話の間に立つた自分は何だか之だけでは形がつかん様な氣がしたので叔父の所へ手紙を書いた。手紙は繁二郎もよむと思つてむしろ繁二郎あての心持で書いた。——

昨日は御馳走になりました御禮申上ます。今回の事は皆さん一致されてよい工合だと思ひます、私は口べタでうまくいへなかつたやうですが念のため思ふ事を玆に改めてかいておきます、私は叔父さんの心持はよく分つたつもりです。それで繁二郎君にこんどの事は親の權柄でさういはれるわけではなく僕も年上でこれは押付て云つたわけではなく繁二郎君は自身奮發してやるとの事でさう定つたのですから繁二郎君は自身の腹から出たことですから之は忘れぬようキモにめいじてやつてもらはねばと思ひます。清治さんがあとをやつて繁二郎君が奉公にゆくと云ふやうな風ではそれは簡單かも知れぬけれども、叔父さんとしてはそれは義理が立たぬので義理の子繁二郎君を男にするために今回の事は持上つたのですから繁二郎君は自分をさう立てられたと思つて自重してやつて下さい、繁二郎君はまだ商ひに馴れないから無理な所もあるだろうけれど自分から一心になれば人に追ひ付けると思ひます。又自分はあとからこの道にはいつたと云ふ點でそれは人一倍熱心にならねばならぬ事だと思ひます。何よりもその道に興味を持つ事千二百圓が五萬圓に殖ゑる所に商ひの面白味とたのしみがあるわけだがこれが何よりも愉快だと思へば占めたものだと思ひます、（自分は玆を書き乍ら可笑しくてふき出した、）繁二郎君は奮發して一人前にやるといつたので私も清治さんに共同してやつてくれと頼めたわけですから繁二郎君はダメだから助けてくれと、清治さんに云つては今回の趣旨は立たぬわけだから玆をよく考へてくれぐれも繁二郎君はしつかりした氣持であつてほしく思ひます。繁二郎君が立派であつてくれゝば私も中にはいり保證になつた顏も立つわけで、又皆さんのよろこびだと思ひます、なほこの手紙について繁二郎君より返事があれば確かでよいと思ひます。

——自分はこの手紙をやつて、繁二郎が何とか云つてくるかと待つたら、何にも云つて來なかつた。繁二郎より返事のない所に、自分は彼の眞實の心持を感じるのだつた。

（十五年五月）

嫉妬

水木京太

人

松井。三十二三の會社員。

三島。同じ年頃の同僚。

伊勢子。松井の義妹、二十位。

ばあや。四十五六。

時

梅雨晴れの日曜、正午頃。

場所

郊外。

松井の家。階下の茶の間と奥の間。玄關と臺所は蔭になつてゐる。——二階へ上る階子段の裾が見える。茶の間の前は縁側。一寸した庭。

伊勢子、松井の脱ぎ捨てた洋服を始末してゐる。ばあやがお盆を持つて二階から降りて來る。

伊勢子。(待ち構へて)どう云つて、御飯のこと。

ばあや。あの、お濟みださうです。

伊勢子。さう。さうだらうと思つた。——ねえ、ばあや。兄さんも隨分な汗つかきね。(下着類をまるめて出す)ほら、みんなぐしよぐしよ。

ばあや。(受取つて)——急にまたお暑くなつたんですもの。

伊勢子。(子供らしく袖で額際を拭く)あたしなんかもこんなよ。もつとも、今日あたりネルを着てゐては當り前だらうけど。——今夜こそ縫ひ上げるわ。これぢや溜らない。

ばやあ。なんでしたら奥さまの單衣をお出しませうか。

伊勢子。いゝわ、今日一日の辛抱だもの。それにあたしみたいな太つてうぢや、てんで合ひはしない。借りられるのは寢卷位のものだから情ないわ。(ポケツトから手巾を取り出して)これも序にね。

ばあや。はい。さつと一すゝぎして來ませう、夕方までに乾いて了ひますから。

伊勢子。でも——御洗濯はあとにして、あたし達御飯にしない。——いま濱けてだけ置いて。

ばあや。(柱時計を見て)おや、もう十二時。井戸端へ一寸顏を出したと思つたら、もうおひるですかねえ。

伊勢子。あたしだつて、御掃除をして、髮を結つたつきりよ。——構やしないわ、ばあや。たまに寢坊位はしたつてい

いのよ。ゆふべはあんたに[illegible]たんだし、兄さんに[illegible]

ら小箱を出して、あけて見るこ　からつぽ。

ばあや。なんですか大層奇麗な——

伊勢子。これ。舶來の煙草。——よそへ行つて、こんな贅澤なものをぷかぷか吹かして居るのねえ。きつとさうよ。

ばあや。どなたかから御歳暮に頂いたのは、ブリキの罐に這入つてゐましたが、——舶來のはおいしいんでせうね。

伊勢子。可愛い箱だらう。あたし針さしにしようかしら。

ばあや。(氣がついて)お嬢さまの方に、ほかに、何か洗ひ物は。

伊勢子。ないわ。——とにかくおひるにしてね、きまりがつくから。

ばあやは汚れ物を持つて臺所に行く。

伊勢子は松井の持物や買物を奥の間へ片づけてから、緣先へ出て洋服にブラシをかける。

しばらく。

ばあやが出て來て食膳の用意をする。

伊勢子。ばあや、洗濯屋がこの頃遲いわね。ワイシヤツが二つも行つてるんだから。

二人食卓につく。

伊勢子。さうさう。ゆふべの御料理がそつくりしてあつたわけね。

ばあや。晩まで置いてもなんですから、お嬢さん召上つて下さいな。

伊勢子。兄さんのお蔭で、あたし達まで御馳走がたべられるわ。ばあやもおたべ。一つあたしの[illegible]を見て貰ひたいん

だから。

ばあや。いままでお前に――。

伊勢子。わたし一人だけやつてくれないから。

ばあや。さうですか。では御心配なしにいたします。

間。

ばあや。伊勢子さま今回は御所なんかにおあれ、何を仰つていらつしやるか――貴方にはお分りなさつて[illegible]ふ心に

なつてゐませんかしら。

伊勢子。それは、娘さんとやたらに別れなきやならないんだから。――これは別れなかつたら何にもならないのに、[illegible]

さういふところを家でになつてられて――家においてよつかれば、[illegible]、無理に行くんだつて。

ばあや。お嬢様の御性分は何よりの幸だつて存じますが、もうあなた様は御分別のいいことでせうね。[illegible]

ら。――娘さんなんぞは一旦に片付かれた方がようございますわね。ただ今はあなた様のお為め[illegible]いたら。

伊勢子。あたしみたいにお嫁になつて来るわ。――娘さんだつて、きつと[illegible]

くださいな。ばあや、あれが何だか知つて。

ばあや。あのさよつ、から――

伊勢子。そう、あなたなら家に入るわね、ひとり[illegible]かしら。娘さんはきたいつて[illegible]

ばあや。然しかう、あなた様は御身分ですよ。

伊勢子。ねえ。あなた一緒においでよ。[illegible]

ばあや、お嬢さまたいゝおかたですわね。

　　間。

伊勢子。……きつと朝から待つてるにちがひないわ、今日は日曜だから、部屋に一人ぼつちで淋しい顏をしてゐたことよ。——（二階を見て）いやな兄さんねえ、これで四週目。

ばあや。………。

伊勢子。姉さんが立つて行つて、まだ二十日そこそこぢやない。それが昨夜でもう四週目よ、へんな所へ行つたの。よそへ泊つて來て、見舞に行くのをすつぽかすなんてあんまりね。姉さんが可哀相だわ、なんにも知らずに待つてるんだから

ばあや。ほんとうに。

伊勢子。あたし、もう初めつから、知らせて上げるつもりだつたけど、姉さんに心配させては惡いと思つたもんだから……。いつそ、そ云つてやらうかしら。

ばあや。でも、折角御養生に行つてるところですもの、やつぱりお知らせしない方がよくはありませんか。

伊勢子。あたしどうしていゝかわからなくなるの。なにか、あたし達が行き屆かない事でもしたから、兄さんがそんなところへ行くのかと思つたり。——もしさうなら、あたし姉さんに濟まないんだから。

ばあや。そんなわけがあるもんですか。本當に旦那樣によくして下さるんですもの。

伊勢子。だつて、いくら姉さんが留守になつたからつて、あんまり度々なんだもの。あたし氣がかりで仕樣がないの。うちにゐる、あたしなんかゞ氣に入らないせゐなんだわ、きつと。

ばあや。いゝえ御孃さん。飛んでもない。――あなたがお氣に入らないなんて。

伊勢子。それでも、姉さんがゐた時こんな事一ぺんもなかつたんだもの。

ばあや。御孃さんがお出でになつてからはさうですが……。

伊勢子。――ぢやあ前には、やつぱり時々。

ばあや。よく夜分遲くなつてお歸りになりました。毎晩うちで御飯を召上るやうになつたのは、御孃さんが御支度をして下るからですよ。

伊勢子。どつかへ御料理でもたべに行つたのかね――兄さん食ひ道樂だから。

ばあや。それが御飯だけで御歸りにならないこともあつて……。だから、お孃さんがいらつしつたので、奧さんもほつとなさいました。

伊勢子。そんな時、姉さんはだまつてゐて。

ばあや。御心配もなすつたでせうが――おとなしい方ですからねえ。

伊勢子。うんとやりこめればよかつたのに。あたしだつたら、それあ云つてやるわ。だつて病氣で寢てゐるのに、良人があんなところへ行くなんて不人情よ。

ばあや。奧さんも、お孃さんにお賴みすればようございましたね。おとなしくしてゐないで。――でも旦那樣方には、いろ〳〵おつき合ひもあつて、どんな方でもたまにはお出でになるさうですよ。

伊勢子。いやねえ、馬鹿なおあしを使つて、女に騙されに行くなんて、――兄さんどうして度々そんな所へ行くんだらう。

ばあや。やつぱり面白いおこさるんでせう。

伊勢子。いやねえ。——あたし、兄さんはいつも三島さんと一緒だと思ふわ。

ばあや。お近しくしてゐらつしやるから、さうかも知れませんね。

伊勢子。あたしあの人大きらひ。きつと、あの人兄さんを誘惑するのよ。——ひとり者。それとも奥さんゐるの。

ばあや。もう赤ちやんがゐますよ。

伊勢子。それでゐて——。奥さんと仲でもわるいの。

ばあや。そんな事もないでせうが。(笑つて)奥さんてのは、三島さんがどつかから拾つて来た方ですつて。

伊勢子。拾つて来たつて。——おやあ藝者。

ばあや。なんですか西洋料理にゐた——

伊勢子。あゝ、バアの女給。いやねえ。——そんなだから、あの人どうせろくな人間ぢやないのよ。兄さんをわるい所へひつぱりこむのよ。

ばあや。根がいゝ方でも、お酒の上はちがひますからねえ。

伊勢子。……ばあや、兄さんどこへ遊びに行くか知つてゐる。

ばあや。(微笑)いゝえ、存じません。

伊勢子。あたし、この間わかつた。洋服のポケットを見たらね——別にさがすつもりなんかなかつたけど——

二階で松井の呼ぶ聲がする。

伊勢子。ばあや、行つてよ。あたし、いやだから。

ばあや。さうですか。——御馳走様でした。

　また呼び聲がする。

ばあや。はい。（行きかける）

伊勢子。三島さん、ひとの顔をじろ〳〵見て氣味がわるいつたらない

　ばあや二階へ行く。

　伊勢子は食卓に肘をついて頰杖を立てゝゐる。

　ばあや降りて來る。

伊勢子。なあに、ばあや。

ばあや。お番茶を。

伊勢子。入れ替へなくては、もう出ないわ。——ぢやあたし焙ずるから、こゝを片づけて。

　ばあやは食卓を片づける。長火鉢で伊勢子が茶を焙ずる。

伊勢子。——二階どうしてるの。

ばあや。お二人とも横におなりになつて——

伊勢子。下らない藝者のはなしでもしてゐるんだわ。——兄さんなんか、なぜあんないやな人とつき合つてゐるんだらう。

ばあや。御近所だつたりすると、自然さうなりますよ。

伊勢子。あたし、あの笑ひ聲を聞いただけでもぞつとする。本當にいやらしくつて。——ばあや、出來てよ。

　ばあや二階へ茶を運ぶ。

すぐ降りて來る。

ばあや。お嬢さん、お煙草おありましたかしら。

伊勢子。今度は煙草。忙しいわね。（奥の間へ行く）もう一つもなかつた。

ばあや。まだお二階にも少しありましたが――買つて參りませう。

伊勢子。（笑つて）舶來の煙草なんぞ、買つて來ちやいやだよ。――（蟇口を出しかけて）あたし行つて來るわ。

ばあや。いえ、お嬢さん。

伊勢子。食後の散歩。――一寸姉さんの眞似をして見るの。（庭に立つ）

ばあや。外はお暑いんですよ。

伊勢子。大丈夫、すぐそこなんだもの。

伊勢子出て行く。

ばあやは臺所へ入る。洗濯の音。

しばらく。

二階で松井の呼ぶ聲がする。

やがて足音をさせて三島が二階から降りて來る。上衣を脫いでゐる。誰もゐないので敷居際に立つ。

ばあやが庭へ出て來て見る。

ばあや。お呼びでしたか、つひうつかりしてゐまして。

三島。（わざと快活に）ばあや、水を一杯飮みたいね。（部屋へ來る）

ばあやは一たん引つこんで、臺所からコップを持つて出る。

ばあや。ばちやばちややつてゐたもんですから失禮致しました。

三島。(立飲みして) 濟まないが、もう一杯。

ばあや。大變おいしさうですこと。

ばあやが二杯目を持つて出ると、三島は食卓のそばに坐つてゐる。

三島。や、有り難う。(半ば飲んで) あゝうまい。うまいねえ。

ばあや。(笑つて) 三島さん、お酒よりはうまかないでせう。

三島。どうしてどうして、全く水に限る。

ばあや。お酒を飲んだ後は。――今日は朝から召上つたでせう。

三島。だつてばあや。うちへ歸るには喧嘩の覺悟がなくちやならないから、少し元氣をつける必要があつたのさ。

ばあや。お可哀相にお宅では心配して待つてゐらつしやるのに。

三島。いやうちのヒステリイには困るよ。折角いゝ氣持になつても、うちへ歸ると帳消しにされるから、また飛び出すことになる。がみ〳〵やられて許りゐると、自分の家つて氣がしないよ。

ばあや。奥さんにしたらあたり前ですわ。もともと遊びになんぞ行く方が悪いんですもの。

三島。――とにかく、僕んとこの奴みたいな拾ひ物はいけない。萎びやうが早くつてもうコツ〳〵だ。その上ヒステリイと來てゐる。うちにゐては、女らしい情味なんてものは毛程も味はれないんだ。だから――

ばあや。だからなんて、――三島さん も自分勝手ですね。

三島。さういふやんちやみたいな事——ところがこゝの家はどうだらう。どこの家々へ行つたつて、さう、暖い家庭といふものが溢れてゐる。——富士子さんがゐなくなつてからだつて、伊勢子さんといふものがゐる。やさしい姉妹の手が届いてゐる。

ばあや。それはお嬢さんは感心ですよ、よく旦那様の世話をなさいますよ。

三島。ねえ、女らしい心づかひが何にだつて現れて來るだらう。——それでたまに氣晴らしに行く位のことはよく了解もしてくれるんだから、僕から見れば大闕さ。

ばあや。（聲を低めて）お嬢さんだけは眞面目に怒つてゐらつしやるんですよ。旦那様のことを。

三島。へえ、どうして。

ばあや。そんな事をするのは、旦那様の情愛が足りないんだつて。

三島。伊勢子さんらしくつて面白い。姉さんに代つて燒餅をやいてやるんだね。——代理嫉妬か。

ばあや。何と云ひますか。——でも旦那様のお歸りでも遲いと、それあお氣の毒なほど苦勞なさるんですよ。——三島さんなんか、いつも恨まれてゐますから御注意なさい。

三島。だつて僕は何も。

ばあや。嘘仰有い。あなたはまるで信用がないんですから。

三島。誤解だよ、ばあや。——伊勢子さんが此頃へんに他人行儀で、話しかけても逃げを打つてばかりゐるが——さてはそのせいかな。僕は心底から惚れてゐるのに。

ばあや。まあ、あきれた。あなたみたいな浮氣者なんか、うちのお嬢さんは大嫌なんです。

三島。いや浮氣ぢやない、眞劍なんだよ。僕は伊勢子さんを見る度に、本當に生きてゐる女だといふ氣がする。體じゆうに娘盛りの赤い血が燃えてゐる。そこへ行くと、營養不良の藝者なんか、まるで女の幽靈みたいなものだ。僕はねばあや、伊勢子さんのそばにゐると、生甲斐があるやうに感ずるんだよ。

ばあや。（吹き出す）馬鹿も休み休みお云ひなさい。三島さんつたら、よくもそんな空々しい――

三島。僕は伊勢子さんに逢ひたいばかりにこゝの家へやつて來るんぢやないか。――え、どこへ行つたの。さつきからちつとも顏を見せないぢやないか。

ばあや。知りませんよ。

松井が降りて來る。

松井。何を云つてるんだい、そんなところで。

三島。旦那様の陰口さ、ねえばあや。

ばあや。あんなことを云つて――

松井。煙草はどうしたの。

ばあや。いまお孃樣が買ひにいらしたんですよ。――下にもなかつたもんですから。

三島。さうかい、煙草屋へ行つたのか。ぢやすぐ僕も追つかけやう。（立つ）

ばあや。ほゝ、不良少年とまちがへられますよ、三島さん。

松井。なんだい。

三島。僕がね、伊勢子さんにすつかり失戀しちまつたのさ。――あゝつまらない。歸らう、歸らう。（椽側へ來る）

松井。歸る。どうせゆつくりしてゐたらいゝぢやないか。（長閑に）

三島。大がい氣を拔いたから、もう食ひつきもしさい。いやだ、いやだ。（伸びをする）——ばあや、濟まないが僕の上衣を持つて來てくれないか。

ばあや二階へ行く。

松井。（頭を振つて）僕はどうもへんにいら〳〵して困る。

三島。少くとも女には反つて敏感になるね。さつきもほら、電車で……

松井。——房州行もたうとう駄目か。

三島。（笑つて）君が泊るとは思はなかつた。あんな娘がいゝのかね。

松井。（笑ふ）たまにはね。

伊勢子が急ぎ足で庭へ歸つて來る。敷島のボール箱を持つてゐる。

三島。いよう。伊勢子さん、あなたの歸るのを待つてゐたところですよ。

伊勢子上る。

ばあやが降りて來てゐる。

ばあや。お着せしませう。

三島。（着終つて）伊勢子さんに逢へたから、もう歸つてもいゝ。

松井。さうかい。

三島玄關から歸る。三人見送る。

ばあや。宜かつたですね。

伊勢子。(針を抜いて)そんなでもないけど。——八百屋へまはつて来たのよ。晩に野菜サラダをこしらへて見ようと思つて。

ばあや。今日は、あつさりした物がいいですからね。——お嬢さん。私は、洗濯物を出して了ひますから、

ばあやは台所へはいる。

松井は食卓の上にある新聞を取つて、ぼんやり眺めてゐる。

松井。伊勢ちやん。さつき二つ三つの紙包があつたらう。

伊勢子。はい。(奥から持つて来る)

松井。富士子の方へ、とにかく小包で出すことにしよう。——貰ひ溜めたものがあるかどうか、調べて見てくれないか。

伊勢子、エハガキを出して来て、読みながら、品物を引よせる。

伊勢子。あ、ヘヤ・ネツトがない。

松井。さうかい。忘れて行つたのはみんなのものだが、——つけ落ちがあつたかも知れないな。明日でも買つて来よう。

伊勢子。いえ、こつちで買ひますわ。早い方がいいから。

松井。ぢやあさうにして、あとでばあやにでも出さしてくれ。

松井は新聞と鉛筆を持つて二階へ上る。伊勢子は品物を食卓の上に並べる。包紙を畳んで一つ一つに包つ、

伊勢子。ばあや、これが済んだら手伝つて。

ばあや。(台所で)もうおしまひですから、なんでございますか。

伊勢子。あとで郵便局へ行くんだけど、この前にね、郵便局へ行つていつもつへ[illegible]ストを買つて來て下さる。……それから、油紙を一枚、小包に使ふのよ。あたしさつき行つた時買つてくればよかつたわね。──お金は御部屋でも御出しきます。

水口の戸をしめる音。

伊勢子は部屋へ戻る。

奥の間から萬年筆と萬年紙を持つて來る。緣側の隅にある籐椅子に腰かけて、肘かけの上で手紙を書き始める。しかし庭の面を見つめてゐる方が多い。

しばらく。

松井が大柄の浴衣を抱えて降りて來る。

松井。そんなとこにゐたのか。──これもう乾いたよ。(置く)

伊勢子。濟みません──

松井。(近いて)何を書いてるんだい。

伊勢子。(かくすやうにして)……姉さんへ。

松井。小包へつけてやるんだね。

伊勢子。え〻。

松井。──さうか。序に、僕のことも書いてくれないか。

伊勢子。……………。

松井。昨日行くつもりだつたが、工合が――體工合が惡いから、來週行くつて。

伊勢子。(間)でも……

松井。それだけでいゝ。

伊勢子。でも。――そんな事書いては惡いわ。

松井。……。

伊勢子。體工合がわるいなんて云へば、姉さん心配しますもの。――あたしからそんな事書いてやれないわ。

松井。(硬張つた表情で)では僕から云つてやらう。その方がいゝなら。

伊勢子。……。

松井。ばあやは。

伊勢子。柏屋まで――

松井。通の藥屋かい。

伊勢子。え。姉さんのヘヤ・ネットを買ひに行つたんです。

松井。なあんだ、あんな店にだつてあるのか。

伊勢子。化粧品や何かも賣るもんだから。

松井。それなら、初めつからあそこで買へばいゝぢやないか。何もわざ〳〵――

伊勢子。上等なものなんぞないんです。

松井。ぢやあ、ある物だけ買つてから後に賴めばいゝだらう。丸ビルをあちこち探したり、包をぶら下げて人ごみを歩

かなくてもよかつたんだ。

伊勢子。姉さんから、あなたにお預みして來たものぢやありませんか。

松井。だから買ひ揃へてやればいゝ。

伊勢子。いえ、ちがふわ。——たとひ小包で屆いても、一つ一つ兄さんが買つて下さればうれしいんだわ。

松井。僕は、そんな下らない、面倒な事が大きらひだ。

間。

松井。（強いて優しく）伊勢ちやん、今日は少しどうかしてるよ。馬鹿に御機嫌がわるいぢやないか。（わざと小氣らしく）兄さんがよそへ泊つて來たことでも氣に入らないの。

伊勢子。……（突然泣き崩れる）

松井。（肩を抱いて）どうしたの、急に——

伊勢子。ひどいわ、ひどいわ……

松井。でも——

伊勢子。そんな、そんなひどい事をしなくたつて……それぢや姉さんが可哀相だわ。

松井。……。

伊勢子。姉さんが立つてから、もう四週目よ。そんないやらしい所へ行かなくたつて……そんなにいぢめなくたつて……

松井。いぢめるなんて、伊勢ちやん、僕は——

伊勢子。いえ、あたしなんかいゝのよ、どうされたつていゝのよ——でも姉さんが可哀相で——姉さんに濟まない……

松井。伊勢ちやん、どうしたんだ、何もお前を、どうもかうもしないぢやないか。

伊勢子。兄さんあんまりだわ、あんな、いやらしい面當てなんぞしないたつて、あたし歸るわ。(立ち上る)

松井。本當にどうしたんだ、面當てなんて。

伊勢子。あたしが歸ればいゝのよ。(歩く)

松井。(引とめて)どこへ行くんだ。

伊勢子。姉さんへ——姉さんへ行つてあやまります。あたしがぼんやりで、馬鹿だからこんなことになつて——あたし姉さんに濟まない。(新に泣く)

松井。何もお前は、馬鹿でもぼんやりでもないぢやないか。

伊勢子。いゝえ、どうせ兄さんの御氣に入らないのよ。だから、だから——

松井。何を思ひちがひしてるんだ、僕はお前が好きで、好きでたまらないんだ。(腕を握りしめる)

伊勢子。うそよ、うそよ。氣に入らないから。あんないやしい所へ行つて、あたしをいぢめたんだわ。居たゝまれないやうにするんだわ。

松井。(増々迫つて)ちがふ、ちがふ。お前が好きで好きでたまらないから、遊びに出かけたんだ。

伊勢子。いゝえ、いゝえ。あたし歸るわ。姉さんにあやまるわ。(もがく)

松井。(熱情を以て抑える)伊勢ちやん、お前が來た其日から、もう僕は好きで好きでたまらなくなつたんだよ。

伊勢子。(やゝ落付いて)そんなこと。——だつて、もう四遍もあんなところへ……

松井。それが、お前を好きなせゐだ。たまらなく好きだからだ。

伊勢子。だつて――

松井。お前のこの手を。この胸を、この肩をお頬つぺたも目玉も何も。耳朶から足の先まで。體じゆうみんな好きで好きでたまらなかつたんだ。

伊勢子。……。（後へよろめく）

松井。そんなに好きでも。義理の妹を僕はどうすればいゝんだ。わかつたか。

伊勢子。……あたし……。

松井。伊勢ちやん、僕は富士子が。お前の姉さんが病氣なので。もう半年あまり本當の夫婦ぢやなかつたんだ。そこへお前が來たんだ。それで僕は。どうすればよかつたんだ。

伊勢子。それで……。

松井。遊びに出かけたのも――お前が好きだからだ。好きで、好きで。たまらなくなつてだ。（熱して抱く。

伊勢子。（うつとりとなつて）あたしなんか……あたしなんか……

松井。いつまでもかうしてゐてくれ。僕はどこへも行かない。お前さへ居れば、お前さへゐれば……

二人の接吻は奥の間へ隠される。

台所の水口の戸があく。

松井が縁側に出て籐椅子に倚る。

伊勢子が紙白粉で涙にぬれた顔をなほしてゐるところへ、ばあやが歸つて來る。

ばあや。たゞいま。ヘヤ・ネットはこれでようございましたかしら。お嬢さまのとおんなじだつては云ひましたが。

伊勢子。（離れたまゝ）それでいゝの。――ばあや、何か結はく紐を見つけて頂戴。
食卓の上の品物を油紙で包みはじめる。
なか／＼きちんとした形にならない。
ばあや。私が致しませう。
伊勢子。いゝわ、あたしがやつて見るから。
ゆつくり／＼崩したり積んだりしてゐる。
ばあやは食卓の上のエハガキを見る。
ばあや。お嬢さん、なんでせうか、このつばの廣い帽子は女の人も被つてゐますんですね。
伊勢子。さうよ。
ばあや。奥さんのゐるうち御伴をして、一ぺんあちらへ參りたいものですね。
伊勢子。あゝ。
ばあや。三人で、こんな帽子をかぶつて濟邊を歩いて見ませうね。
伊勢子。………。
ばあやはエハガキを見てゐる。
伊勢子は小包に丁寧に紐をかける。
松井がさつきから其樣を見てゐる。

逃げた小鳥

徳田秋聲

一

或る晩方のこと、好子は子供たちを町へ散歩につれ出さうとして、仕度をしてゐた。箪笥の上にある鏡に向つてゐるあひだも、子供たちはわい〳〵陽氣に立騒いでゐた。

「おばちやん散歩にいきませう。」これはこの冬母を亡くした、今年九つになる融の一番末の蝶子の聲であつた。

「おかあさん、早く行きませうよ。」これは最近好子が繼母の手から取つて來て、融のところへつれて來て、融の子供たちのなかにおかれてゐる、六歳の百合子であつた。

その外に融の子が二人一緒に行く筈であつた。何か子供のための買ひものもあるらしかつた。毛糸とか、洋服の切れ地だとか、好子はその許しを融に乞ふた。

「先生もいらつしやいませんか。」融はさう言はれたけれど、行かないと言つた。

好子は年齢に非常の相違のある、融の愛人であつた。彼は食後長火鉢の傍にゐたが、その傍でまた好子が仕度をしてゐた譯であつた。奥の四疊半の簞笥の前にゐた女中のしづが、伊達卷か帶かを好子に輕く投るやうに出した。來て間もない好子や、二三日前田舍からつれて來た百合子に、古參のしずやがぴつたり喰着いてゐるやうに懷いてゐた。その帶の出しぶりも、鈍な彼女としてはひどく氣の利いた、與ろ友達にでもするやうな押れ〳〵しさがあつた。融にはその媚びるやうな調子がちよつと厭な感じであつた。

「女中が君たちだけの召使ひのやうで困るな。」融はちよつと僻み魂情を出した。

帶をしめてゐた好子は、ちよつと驚いた風であつた。

「帶がつひそこにあつたものですから、投げてくれたんぢやありませんか。その位のことは何でもないぢやありませんか。」

「しかししづやが君達だけのお附のやうになつてゐるからね。」

好子はまた融の間違つてゐることを話した。考へてみればそれは何でもないことであつた。融は後悔したが、まだ滓のやうなものが少し頭腦に殘つてゐた。しづやがこの頃蝶子がつかなくなつてゐるので、わざと百合子にぺこ〳〵するのぢやないかと感ぐつた。蝶子の我儘も知つてゐたけれど、しづやがちよつと意地惡をするやうにも見えた。

四疊半の簞笥の前に、歸つたら直ぐ子供が寢るやうに蒲團がしいてあつた。それは好子のもので、メリンスに眞綿の入つた軟い掛蒲團に銘仙の敷が、肌觸の柔かいものなので、蝶子が好きでそれに寢てゐた。融はいきなり其處へ入つて横になつて、好子の帶をしめるのを馬鹿な顏をして見てゐた。

「私行きませんわ。」好子は言出した。

「いや、行つておいで。」

「でも先生があんなことを仰やるんですもの。」

「解つたよ。」融はさう言つて朗かな笑顔をした。

好子は掛蒲團の片端へ來て、乘しかゝるやうにぴたりと坐つた。そして美しい顔を彼の顔の上へ持つて來て、「何です／＼、この赤ちやんは」と囁いた。星のやうな冴え／＼した目が彼の上に輝いた。

「私何うしても行かない。先生は私を出すのが厭なんだから。」

「でも子供があんなに悦んでゐるぢやないか。早く行つておいで。」

「では直ぐ歸るから、おとなしく寢てゐるんですよ。」好子は二三度唇をもつて來た。

「さあ／＼行きませう。」と好子はさう言つて、やがて子供たちを引連れてさわ／＼出て行つた。

二

翌朝子供たちが學校へ行つてから、融は好子と火鉢に向合つて、食卓に就いてゐた。彼はさうしてゐることが、何となく地につかない、擽つたい感じであつた。好子が長火鉢などにはつかない女であるのは言ふまでもなかつた。彼はこの女と、こんな風な位置にすわらうとは、夢にだも思はなかつた。好子の言分では亡妻の柄が、まるきり彼についてゐなかつた。それは世間の定評だといふのであつたけれど、柄は兎に角として、好子のやうな若い美しい女と長火鉢で差向ひにすわることが、世俗的に見れば、羞かしい滑稽のやうでもあり、彼に不似合な喜劇のやうでもあつた。でもそれを言ふと、好子は自分の愛を侮蔑するものだと言つて、何時でも不機嫌であつた。融も愛を排ぶには餘りに糠粱すれが

しなさ過ぎる方であつた。あわたゞしい妻の死に直面した無限の寂寞、柱のぬけたやうな家庭の混亂のなかに坐つてゐる彼は、生活の終りが近づいたやうな感じであつた。抽象的な言葉では、迚も言ひ現せない、精神的の負擔と生活の重荷のために、ぐしや／＼と厭へつぶされてしまひさうな心弱さに襲はれてゐた。そのとき彼の前に進んで來た若い女性が好子であつた。そして戀愛關係が進んでから、今のやうな生活が初まつたのであつた。しかし氣分はまだ孰も不安定であつた。好子からいへば、二人だけの幸福な世界にゐることのできない彼の家庭の煩はしさを感じないわけに行かなかつたし、生活を二元的にすることが、今の狀態ではちよつと困難であつた彼には、愛人としてのみ彼女を待つことはできなかつた。しかし好子は今まで遠くに眺めてゐた彼に近づくことができたゞけでも、幸福であつたし、融も初めて來たときから目を瞬つた彼女が、あつちこち經めぐつた果、傷づいた翅を憩はせるために、懐へ飛びこんで來た小鳥を受容れるために、色々の故障を排するのに、可なり勇敢であつたほど、愛に溺れきつてゐた。彼は彼女の眞實を信じない譯に行かなかつた。そして一旦それを信じると、恐ろしい力でぐい／＼引込まれて行つた。

しかし好子が中途子供をつれて歸つてからの氣分には、いくらか自重的の氣分の出て來てゐることは見逃せなかつた。

或る晩好子の前夫が、繼妻と四人の子供とをおいて、知人の名で大金を銀行から引出して逃げたあと、繼妻と子供たちが、郷里の實家へ歸つてゐるといふ知らせを得て、今まで堪へ忍んでゐた子供の所有慾と愛着とが、一時に彼女の心を激しく搖り動かした。子供を取ることは、融も同感であつた。好子は或晩輕い旅の仕度をして、東京を立つた。

「時間が重なるんで、送れないからね。」

融はその晩宴會があつたので、土産物などを買ひ集めて來て、荷を造つて居る彼女に言つた。

「お前たちもまた迷つたのかね。」彼は小鳥たちにさう言つて、窓を閉めた。

すると其の夜宿から歸つて來て見ると、妹と、蝶子から三人上の姉娘の富美子とが、見送りに行つたまゝ汽車に乘り込んで遠い好子の田舍へ同伴したといふのであつた。

「三郎さんも入らしたんですけれど、僕は學校があるからと言つてお歸りになりました。」

「ほう、呑氣な奴だな。驚いたな。着のみ着のまゝで。」

「お二人ともお洋服で。三郎さんがお父さんに叱られるよと仰言つたら、遠藤さんが先生ならお叱りにならないから、行きませう〳〵つて仰言つたんですて。」

寢臺を一つ取つたことも、翌日三郎の話でわかつた。融はをかしがつて思ひ出しては笑つてゐたが、好子のさう言つた調子を怒れもしなかつた。彼は翌朝早速好子へ手紙を書いたが、二三日してから又電報をうつたりした。子供の學校を氣遣つたからでもあつたが、寂しくもあつた。それから蝶子の愛せられてゐる學校の先生から、餘り長くゐないやうにと注意を受けたので、二三日たつて又電報をうつた。遠いところなので、彼は手紙では悴かしかつた。

すると五日目かに融は彼女の手紙を受取つた。

先生、

お手紙有難うございました。

私も差しあげよう〳〵と存じながら、本當のこと、ひまがございませんでして、遂々こんなに失禮いたしてしまつたのでございます。

今、夢から覺めた處で　夢の中で先生にお目もじいたした處なのですから、戀しさに一入……

離家にお蒲團を二つ並べて敷いて、喜美様と私が兩はしに、中に蝶子ちやん、私の子の百合子がおねんねしてゐます。

喜美子さまも蝶子ちやんも百合子も、もう陽があかるくなつてますのに、未だやすらかな寢息を立てゝおねんねしてます。私丈がお蒲團から腹ばつて、あなたにお手紙をいたして居りますの。心から美しい世界が毎日展開されてます。

私の子供は誰が行つても引渡してくれそうもなかつたのが、私が冬子に逢つてよく氣持を話して、あの着きました翌日三人とも引きとる事ができました。

いろ〳〵御心配おかけ致しましたが、どうぞお喜び下さいまし。

子供達は引きとりました時は、さすらひの子のやうに見すぼらしく哀れで、とかく白い眼にものを見上げるやうにして眺めましたが、流石子供の事とてすぐ直りました。蝶子ちやんが、一番可愛がつて上げても、それでもとかく可愛いゝやきもちをやきますので、お姉ちやまが蝶子のやきもちと笑つてます。

私が蝶子ちやんを抱つこすると、喜美子さまは心から百合子を可愛がつて抱いて下さいます。

御飯の時も、一日でお膳はよして、皆でテーブルをかこんでの賑やかさつたらありません。

三間ぶつ通して皆で目かくしをするやら、お毬をするやら、お庭でまゝ事をするやら、蝶子ちやんはもつと歸りたくないと申しますの。喜美子お姉ちやまも三四日なら遅れてもなんて、ちつとも窮屈でないお氣持で遊んで下さいます。

……………………

どこへ行つても事情を知つてゐる近所の人々は、お家から鳥を出したり、出て来たりしては[illegible]を引取つてお目出度いと心からの喜びの言葉をかけてくれます。

蝶子ちやんは一ぺんも泣きません。これがちつとも遠慮してゝはないのですもの。今から又夏に来て下さる約束をしてゐられます。

こんな光景を私は先生に是非お目にかけたいと存じられてなりません。母は只心から喜んでお出でをお待ちいたして居りますが、いくら田舎家でも雪が消えたばかりで、あちこち傷んでゐるし、先生がおいで下さるなら少し大工でも入れて、二階の疊でも直してからならいゝがなんて恐れ多がつてゐます。それにうちの櫻も未だすつかり開かないで、青葉がちつともほぐれませんので、眺めは未だよろしくございませんの。今いらして頂いても、却つて何もかも解つてゝ下さる先生ですし、却つて嬉しいのですけれど、又牡丹の咲く六月の末も眺めがよくなつて宜しくないかとも思はれてなりません。お兄様も同じに思はれます。餘り子供の世界すぎてお困りなさらないかしらと氣づかはれもいたします。でも少しでもいゝ處をお目にかけたくて申し上げるのですから、先生のお氣持次第でいらして頂いてもかまひませんの。さうなれば又出來るだけお氣持よくいたします。

喜美子さまは妹の着物で大變よくお似合ひするのがありまして、肩揚をいたして、紅い帶を上げたりして家にゐられます。蝶子ちやまは小さい妹の去年私がこしらへて小さくなつた合ひ着がお氣に入つて、これを着たいと申されますので、母とも大笑ひしてお着せ致してをります。大變哭もなく、こちらは暖かでよろしうございます。もつとゐて下さると仰言るし、母もゐて頂きたいと申しますが、先生が學校のこと御心配しておいでゞございませう

し、私ももう我慢ができないくらひお逢ひしたくなりましたから、木曜あたりこちらを出立しようと思つてをりなす。でも先生とお兄様とおいで下さいますなら、幾日でもお待ちいたしてをります。この手紙がつさましたら、どうぞ直ぐ電報でお知らせ下さいませんか

…………

…………

…………

そすとそれだけ先生と私の事情もこちらでは皆な喜んでゐますが、そちらでもよりよくなつて、先生にも御心労をおかけせずにすむと思ひますと明い氣にされて參ります。

…………

…………

…………

遠くにゐられます

先生に

好子

融は繰返しそれを讀んだ。そして出向けない旨の電報をうつてから、二日ばかりして或る日一个立つた、十一時に着く――と電報が來たときには、融はやつと吻とした

その日は長男と二人で、ステイションへ出向いた。そしてちやうど入つて來た汽車の窓から窓へと移つて行くと、そこに硝子戸のなかに、好子に何處か似通つた、目のぱつちりと、輪廓の調つた、お人形のやうな丸顔が目についた。

「うゝ、さうらしい。」[illegible]一郎が目敏く見つけて云つた。

それよりも少し大きい嬢子の顔もそれと同時に見えた。嬢子の隣りにゐた好子の、黒い羽織を着て、彼女独自の髪の結ひ方をした形の好い後ろ姿が、クシヨンを少し離れて降りる仕度をしてゐた。

やがて彼等はおりて來た。一郎は百合子を抱き取つた。

好子は歩廊を歩きながら、遠慮ぶかさうな表情で、

「百合子が餘り泣いて取りすがるものですから、済みませんけれど二三日でもおいてやらうと思つて、仕方なくつれて參りました。母は近所の宿屋におくやうと申すんですの。」

「いゝよく\〵そんな事しなくたつて。連れて來てよかつたよ。」

「どうかして隠れてこようと思つたんですけれど、附絡はつて放しませんの。」

「それあさうだとも。僕はその方が却つて安心だ。」

皆んなは荷物と一緒にタキシイに乘つた。そしてそんな風にして、百合子は連れて來られたのであつた。

三

融は何うしたのかその朝不機嫌であつた。好子に子供があつては雑かしいだらうと、二三日前友人に言はれたことが、その時は格別何とも思はなかつたけれど、機械的に何となくそれが頭腦へ入つてゐた。それに昨夜詰らないことで、悪い癖を出したのが氣が差して、少し無口になつてゐた。好子がそれを釋さうとするやうに、顔を洗ふとき水を汲んでくれようとすると、

「いよ／＼、氷ぐらゐ己にも汲めるよ。」と邪慳に言つて、そこへ立ちはだかつた。しつけない好子にそんな事をさせるのが、ちよつと氣が差したからでもあつた。

食卓に向つてからも、彼は無口であつた。格別怒つてもゐなかつたし、早く釋けたい氣持はありながら、遂さうなつてしまつた。

やがて百合子が目ざめたところで、好子は洋服を着せて、食卓に坐らせた。火鉢に差向ひに坐つてゐた融は、子供に何とかお愛相をしてやらなければ悪いと思ひながら、つひ口を緊く噤んでゐた。好子がその硬い表情をのぞいてゐることを感じながら、彼は無理にもそれを見まいとした。顔を見合せれば、婉然しないではゐられないことに氣づいてゐながら、そして微笑が唇をむづ／＼させてゐるのを感じながら、つひ默りこくつてゐた。

好子は苦しさうであつた。一度台所へ出て行つて涙をでも拭いてゐたらしかつたが、直ぐ又子供の傍へやつて來た。融はその表情を感じながら、やつぱり目を見合せることができなかつた。好子は又台所へ出て行つたが、再び氣遣はしさうに百合子の傍へ歸つて來た。

好子が三度目に台所へ立つたとき、融もいつそゐない方が、この場の氣分を救ふだらうと感じて、書斎へ立つて行つた。

今融は腹を立てゝも、苦しんでもゐなかつた。彼は繊弱な好子の氣持を、内心劬はりながらも、何かしら底を割つてみたいやうな、またそつとしておきたいやうな、中途半端な氣持になつてゐた。でもちよつと落ちつけない氣持になつてゐたので、一旦机の前にすわつたが、又庭へおり立つたりした。すると縁側から見える四疊半の腰板障子がぴつたり締つてゐたが、そのなかに好子が百合子を抱きしめて泣いてゐるらしい氣配がした。融はその時も何うかして救ひたい

やうな氣がしてゐながら、つい開けて見もしなかつた。彼は暗に放擲つておいては惡いと思ひながら、手をつけずにゐた。

その時或る雜誌社から使が來て、談話筆記の速記を見なければならなかつたが、同時に約束の談話取りがやつて來たので、融は、

「おいおい。」と好子を呼んだ。

「はい。」と言つて好子がやつて來た。

「これをね、ちよつと見てくれないか。」融は速記を好子の前へ出した。

「大概いゝやうだが、字の間違とか、讀み續きのをかしいところを、ちよいちよい直してね。」

好子は「はい」と言つてそれを讀みはじめた。融はその間にちよつと簡短な藝術上の談話をしてゐた。

それを機會に、二人は釋れさうに見えた。融は實際釋れることを望んだのであつたが、しかし事實は反對であつた。

彼は何か底を割られずにゐられないやうな衝動に驅られた。

「……昨夜のことは昨夜のこととして、しかし何うも此の頃女中が百合子ばかりにちやほやするやうな風に見えるんだが……。」

そして古い融の習癖――むづかしく言へば、彼の人生に對する術式な態度の或るものゝ現はれが、その言葉に潜んでゐた。

「それは先生葉子さんが女中をお雇ひになるからなのよ。百合子ばかりを大事にするなんて、それは先生の僻みよ。」

「さうかしら。」

「それに蝶ちやんも我儘ですから隨分見兼ねるやうなこともありますの。私に足をかけたり打つたり。さう言ふときは私も叱ります。」

「それあ好いさ。あれは末ツ子で、皆んなはあの子の駄々だけは、何によらず通してゐたんだから。しかし妙に人情つぽい子だからね。」

融は勿論安心して蝶子を好子に任しておけることを知つてゐた。同じ叱るにしても、好子のは子供に取つてこわくも恐ろしくもなかつた。直ぐ口元ににやりと笑つて甘へられる種類のものであつた。蝶子はすつかり好子についてゐた。それは何か生理的な關係からでも來てゐるのではないかと思ふくらゐ、粘りのある懷き方であつた。

「さういふことも解つてゐますけれど、百合子だつて可哀さうです。年も三つ下なんですもの、何處の家だつて、あの位のうちは、いくらかちやほやしますわ。」

「可哀さうなことは知つてゐるけれど、百合子が來たからつて、蝶子をかまひつけないといふ風になると子供が變になるんだ。」融の語調は少し強かつた。

「先生はそんな風に見ていらつしやるんですね。それは先生の僻みです。先生の子供さんは、女中に少し酷いところがあると思ひます。それは東京では何處でも女中の地位が可哀さうのやうですけれど……私に對してだつて、皆さんのお態度にづゐぶんさういふ處がありますの。」

好子は目が潤んで來た。

「あの女中もいけないところがあるんだ。小意地がわるいんだ。」

「でも先生は、まるで君たちの侍女で、家のことは何んにもしないなんて。私帶ぐらゐ取つてもらつたつて可いと思ひま

すると好子は[illegible]、しげやさんを伴つた[illegible]、きたないことを言ひながら[illegible]
て、ほんの[illegible]やると言つた……。」好子は泣いた。
「何だつて。失敬おやないか。これこそ僻みだ。」融はさう言つて、火鉢の傍から手をあげて、好子の横鬢のところを、狼狽打つにはちよつと可愛さうた感じで、つひいきなり打つてしまつた。勿論好子もちよつと首を交はすやうにして、て〻部屋を出て行つた。

泣く聲が四疊から聞えた。

「おい〱。」暫くすると融はそれを紛らうつもりで聲をかけた。

好子がそこへ來て、いきなり疊に突伏して慟哭した。

「……蝶子さん達をおつれした時、田舍では母や妹たちが何んなにお取持ちして、皆さんが何んなに悅んでお遊びになつたか。先生はそんなことなんか、ちつとも考へて下さらないんですもの。百合子をつれて來たのが惡いんですけれど、餘り附くもんですから、喜美子さんも一緒におつれしませうと言つて下さるし、ほんの暫くでもいゝから、迎ひが來るまで宿屋にでもゐようと思つて……。」

融はそこに突伏して、わな〱顫へながら聲をあげて歎いてゐる、女らしい彼女のいぢらしい本氣に、胸をうたれながら、いくらか狼狽てゝゐた。そして其の側へ寄つて慰めようとすると、好子は起ちあがつて、部屋を出て行つた。

「私はもう駄目です。私は何もかも棄てます。私の最後のものとして撰んだ先生すら、自分のものとして見て下さらないんです。私は歸ります。」

融はほんとうに惡いことをしたと思つた。そして追ひすくめるやうに、後へついて行つて、好子が抱きしめてゐる百

合子を取らうとした。

「歸るなら歸るでもいゝから、こんな風にして百合子を歸したんぢや、御母さんにもすまないから、四五日遊ばしてからにしたら可いぢやないか。百合子おいで、おぢさんとこへおいで」

百合子は怯えた。そして好子にしつかり取りついて泣いた。

「あなたが附いてくるから……。」好子はさう言つて輕く百合子を小突くやうにした。

「子供を苦しめるのは止してくれ。」融は言ひすてゝ又書齋へ歸つた。彼はもう引止めることが、全く絶望だといふ氣がした。

好子は納戸へ入つて、何か取出したり、鏡臺の前に立つて、化粧袋にこて〳〵何か取入れたりしてゐた。

「何うしても歸るんだね。」融は離れたところから言つた。

「でももう駄目です。歸らして頂きます。」

「ぢや勝手にするさ。」

融は苦しくたつて來た。好子の側に理由のあることが十分判つてゐた。で又た卑屈な態度で、引止めようと言ひ試みたけれど、その手段ははづみのついた彼女を緩和するには、不適當なものであつた。

「こんなに言つても歸るんだね。己が哀願しても。」

好子は玄關口へ出て、子供に靴をはかせてゐた。そして用意さうに少し躊躇してゐたが、度を失した融の引止方が、この場合彼女には何んの役にも立たないのであつた。彼は小供らしく憤つてしまつた。

「見つともないから、この邊の宿屋へなんか行くことだけは止めてくれ。君もづゐぶん剛情だね。歸るなら絶對に再び

ないやうにしてくれ。」融は荒々しく言つてぴつしやりと障子をしめてしまつた。

四

お晝になると蝶子が歸つて來た。そして其處いらを見廻はしてゐたが、

「おばちやんは。」

融はぼんやり机の前にすわつてゐた。彼は全く敗北を感じてゐた。腹立しくもあつたが、醜さを愧ぢてゐた。

「おばちやんは歸つて行きました。」

「いやだア。」蝶子は寂しい泣顏をかいた。

「でも仕方がないよ。おばさんがゐなくても可いだらう。」

蝶子は悲しさうに頭をふつた。

融は惡いことをしたと思つた。

「お父さんとこへおいで。おばちやんお父さんと喧嘩して出てしまつたんだからね。歸らないかも知れない。でも好いぢやないか。お前には兄さんや姉さんが澤山あるんだから。」さう言つて彼は蝶子を膝に抱きあげた。

「でもおばちやんがゐなくちや。」蝶子は目に涙をためてゐた。そして本當に寂しさうな顏をしてゐた。

「でも出て行つたものは仕方がないから。また可愛がつてくれる人があるからね。」

蝶子は膝を離れて行つたが、悉皆しよげてしまつた。融はにが〱腹がいたむやうた、だるい惱ましさが胸に迫つて來るのを感じた。蝶子も寂しがつたが、彼自身も寂しかつた。

それから暫くして、蝶子がお腹が痛いと言つて、しく〳〵泣いてゐるので、彼は醫者へつれて行からと思つて、仕度をして手を引いて家を出た。彼はその時ほど、慘めな自身の姿に出會つたことはなかつた。何故もつと本氣に引止めようとはしなかつたらうと悔まれた。

「お腹がもう痛くないの。」

途中まで出ると、蝶子が言つた。女中に醫者へ通知させてあつたので、彼はちよつと其處へ寄つて、その事を斷つた。

「お腹がいたくないんなら、少し散歩してもいゝ？」

蝶子は頷いた。

「でも本當に癒つたの。」

「何だかよく解らない。」

兎に角電車通りへ出て行つたが、張合がなかつた。好子を家へ入れてから、嘲笑してゐるもの、非難してゐるもの、そんな世間的な批評の聲が、彼の氣分にも通じてゐた。結婚生活に失敗して、東京でまごついてゐた頃の好子の身のうへについて、兎角の噂があつた。そして其が極めところへ收まつたとなると、一層高まつて來てゐるらしいのであつた。

しかし彼女の過去について、彼は大抵のことは知つてゐた。過去が何んであらうと、現前してゐる好子はやつぱり好きであつた。好子が今迄のものの幻影が薄らぎかけて來てゐると言つてゐるとほりに、彼には好子があるだけであつた。その外のものはみんな光の薄い星屑のやうなもののやうでもあつた。自分が好いてゐれば、それで好い譯であつた。好子

を願つた人々に、押しつけようとしてゐるのではなかつた。この世に死は厳粛にしてゐるのでもなかつた。彼には寂しい無常感のやうなものが絶えず流れてゐた。死を思つたことのない彼の目の前にも、死の影が屢々去來した。好子が今にも壊れて行くもののやうに言つて喋つてゐる人も少くはなかつた。融もそんな時がこないとも限らないと思つた。それだからと言つて、彼女を突放す理由はなかつた。彼はそんな風に荒んだ見方を、好子にしたくはなかつた。たとひ壊れるときがあつても、離れたあとの好子は、過去の好子でないであらうことを信じてゐた。融自身も、今まで見出せずにゐた自分を、前途の彼に見ることができるのを感じてゐた。誰れも見つけえない好子が、彼の胸に巣くつてゐた。これが幻影ならこれでも好かつた。世のなかに誰が本當の眞實をつかんだものがあるだらう。彼もまだそんなものに出合したことがなかつた。

つひ最近まで閉ぢこもつて、好子が長編小説を書くのに熱中してゐた旅館の前まで來た。融は若しかすると、そこに好子が來てゐはしないかと思つて、ちよつと寄つてきいて見た。

「好子が來ない。」

「いゝえ。」若い番頭が不思議さうに答へた。

融はすご〱そこを出た。一月ばかりのあひだ、屢々訪問したことのある好子の部屋を懐かしく憶出した。

「ゐないね。」

融は呟きながら蝶子の手をひいて歩いた。

「××屋へでも行つて見ようかね。」

××屋といふのは、そこからさう遠くない、雑貨店であつた。そこへ二度ばかり好子と行つたことがあつた。彼

は氣分がかはると共に、今まで着てゐたものを、大抵は行李の底へ入れてしまつた。そして落着いた、じみなものを、差當り入用なだけ作るのに、多くの場合その店へ誂へてゐた。事によると、出て行つた好子が、そこで土産ものでも買つてゐるんではないかと思つた。

××屋へ入つて行つた融は、子供の手を引きながら、人を掻きわけて、あちこち捜すともなく探しあるいた。しかし何處にもゐなかつた。

「ゐないね。」融はつぶやいた。

「おばちやん探してゐるの。」

融は蝶子に極りが惡くなつた。それに事によると、忘れさせなければならぬ蝶子に、彼までが彼女を求めてゐることを感じさせるのは、好くないことだと思つた。

融は田舍から好子が歸つて來た翌日、子供たちと買ひものに來たことを思ひ出した。百合子が蝶子のもつてゐるやうな人形をほしがつたので、それも買ふ必要があつた。好子は何もない百合子に人形を買つてやるとしても、蝶子にも同じものを買つた方がいゝと思つた。しかし其の人形はさう安いものではなかつた。

「蝶子は家にあるんだからいゝだらう。百合子は無いから買ふんだからね。」融は蝶子にさう言つた。そして好子に、

「どうせすぐこはすんだらうから、これで好いだらう。」と、餘り好くない人形を買つて與へた。

彼は取つつきから、百合子に餘り好くしない方がいゝやうな感じがしてゐた。長いあひだに少しづつ爲ることはしてやらうと思つてゐた。しかし今となつては、そんな考へ方などが可けないのであつた。

「あの人形は餘りわるかつた。」今になつて融は後悔した。

ぶら／＼歩いてから食堂へ入つた。そして蝶子には腹にもたないさうなものを、自身には鰻を注文した。同じテーブルに丈夫々々した子供を三人つれた中年の商家の夫婦が、何かごて／＼食べものを前に並べて、旨さうに貪り食べてゐた。

融は蝶子の顔を見るのが寂しかつた。蝶子は二た箸三箸玉子を突ついたきりであつた。

「もう厭や。」

「さう。ぢやお止し。お腹は痛くない。」

蝶子は頷いた。

融も飯が舌にざら／＼した。

「さあ歸りませうね。」

そして食堂を出てから、「何かほしいものがある？」ときいたが、蝶子は首をふつてゐた。

父と子は悄々と××屋を出た。どこかそこいらに、黒地の勝つた大島の羽織に、手製の毛糸の肩掛をした、あの細そりした好子が、子供雜誌の口繪にでもありさうな百合子の手をひいて、例の、これもお手製の黒天鵞絨に草花の刺繍をした化粧袋と手提袋とをかゝへて、歩いてゐさうに思へてならなかつた。けれど好子に似た人もゐなかつた。

その日は薄寒い風が吹いてゐた。

孤獨の魂（四幕六場）

武者小路實篤

登場人物

A（赤石）
神
畫家（青海）
敏子（青海の妹）
山中
中岡
岡島
山田
女中

序幕

一（Aの室）

A。神様！

（神あらはれる）

神。なんだ。

A。私は今度は本當に閉口しました。

神。あまり閉口してもゐないやうぢやないか。

A。處が閉口してゐるのです。明後日までに百五十枚の原稿をかく約束になつてゐるのですが、まだ一枚の原稿も出來てゐないのです。かきぞこないは百枚以上もしましたがどうも氣乘がしないのです。

神。それならやめたらいゝだらう。

A。しかし男が約束したのですからね。それに同志の人にも月末には金をおくる約束になつてゐます。かけないと困るのです。

神。それは困るだらう。だが困つてゐるのはお前許りぢやない。恐らくお前より困つてゐる人間が、この世界には十四億三千六百五十三萬六千七百三十八人ゐる。

A。それはさうかも知れません。この世に生れて困らないと云ふのは無理かも知れません。何しろあなたが氣が氣かな

いのですから。

神。失敬なことを云ふな。

A。何しろ、こんなに忙がしくつては、私もつかれる許りです。頭もます〱禿げる許りです。それにこの頃は毎日のやうに原稿を見てくれと云つて來ます。又いろ〱かいてくれと云つて來ます。さすがの私も氣がいら〱して來ました。

神。あんまりいら〱もしてゐないやうだぞ。

A。その内にどうにかなるとは思つてゐるのですが。いら〱しないわけにはゆきません。少くも私はこの頃、少し疲れたやうです。

神。だがお前は呑氣にしてゐるぢやないか。

A。呑氣にでもするより仕方がありませんからね。今疲れちややり切れませんからね。しかしどうにもこうにも仕事をしてしまはないと男の意地が通りません。

神。それなら通したらいゝだらう。

A。えゝ、通すつもりですが、自分の力ではどうにもならないのです。それで一つあなたにおたのみして見る氣になつたのです。もう自力ぢやどうにもならないのですから。

神。それで俺はどうすればいゝのだ。

A。あなたは其處にぢつとしてゐてくれゝばいゝのです。私はあなたの顔を見てゐれば元氣になれるのですから。

神。さうか。それなら少し位ゐならゐてやつてもいゝ。

A。一體、日本には人がゐないのでせうかね。こんな私に、原稿を見てくれと云ふ人がこんなにあるのです。又私に何

かかいてくれと云ふ注文がこんなにあるのです。その上また、毎日のやうに私に何かかゝせやうと云ふ手紙がくるのですからね。私はなんでもひき受けると思つてゐるのでせうが、それにしても少しひどすぎますよ。それに私がいゝもの許りかき、又私が親切に原稿をよむ男なら、それも無理はないと思ひますが、碌なものはかけない時が多い、そして原稿は取りぱなしの方が多い、私にはこんなにたのんでくると云ふのは、少しわけがわかりませんね。

神。それは皆がお前を買ひかぶつてゐるのだらう。

A。いゝえ、さうぢやありません。私を本當に買ひかぶつてゐてくれる人は實に少ないのです。私を利用しやうと思ふ者が多すぎるのです。僕のやうなものさへ利用しなければ動きがとれない人が多いのです。だがこんなことでは駄目です。僕のやうな人間さへ疲れを内に感じて來てゐます。日本は少しでもいゝ人が出ると、その人の全力を奪ひすぎます。僕なんか、ずべらな方であり、がむしやらな方ですが、それでさへ、なしくずしにつかれて來ました、思ひ切つて呑氣にしたいのです。そして自分の内に力が自づとわくのを待ちたく思ひます。だが僕に力を與へてくれるものは何にもないのです。

神。赤坊がゐる。

A。赤坊は可愛いゝことはこの上なしですがゆつくりした氣持で子供とあそぶ暇もありません。

神。隨分お前はのらくらしてゐるよ。

A。これはのらくらしてゐます、しかし頭の安まる時がありません。頭をつかはない、靜かなたのしみがほしいものです。

神。今の世にそんな贅澤は云へない。

A。私も、之からと云ふ所で、疲れてくたばつてしまう仲間ですか。

神。それはお前の力一つだ。

A。どうか私をいろ／＼のことでわづらはさないやうにして下さい。

神。それはお前の決心一つだ。

A。いろ／＼の情實にしばられすぎないやうにして下さい。

神。それもお前の心がけ一つだ。

A。私は私を信頼するもの、私を友達と思つてくれるものに、私はます／＼冷淡になるより仕方がありません。

神。それはお前に力がないのだから仕方がない。さう萬事をうまくやつてゆくことはお前のやうな力のない人間には出來ない。

A。出來ないでも許してくれますか。

神。許さなかつたら、お前は自分の仕事に全力を盡しながら、他の人への義理を果すことが出來るか。

A。一人の人にたのまれたことを果すのでも容易なことではありません。まして何十人の人にたのまれたことを一々果しては僕の時間、僕の頭、僕の一生と云ふものは、廢物になつてしまひます。一人の人間をさうよつてたかつて駄目にすると云ふことはいくらその動機がいゝにしろ、感心は出來ません。だから僕は自分の時間と、自分の自由と、自分の生命を、守護するために、多くの人の要求を、拒るより仕方がないのです。すべて餘力があつての話です。

神。もうそろ／＼俺も引込んでいゝだらう。

A。まあ、もう少し我慢して下さい。私のお願ひしたことは、この私に、疲れることを知らない力を與へてほしいのです。

神。若い女の友でもほしいと云ふのか。

A。女は澤山です。

神。女より他にお前を元氣にするものがあるか。

A。あります。私はいゝ畫を見るのが、何よりすきです。

神。それならいゝ畫を見たらいゝだらう。

A。金がありません。

神。金がなくつたつて、見るにことはかくまい。

A。私は、私の生命を生々させてくれる、一人の畫家の友達を與へてほしいのです。それから、私のかはりに、原稿を見たり手紙をかいたりするいゝ男がほしいのです。それから、

神。原稿の代作する人がほしいのか。

A。いや、それは澤山です。私は呑氣な時間がほしいのです。自分の義務を果して、あと何にもかも忘れて、ぼつとして、その内に力が自づとわいてくれる時間がほしいのです。

神。それから神の國がほしいのか。

A。今は、いそがしすぎます。疲れてゐます。他の人のことを考へる暇がありません。先づ自分を生かさなければなりません。

神。それならお前に畫かきの友をやらうか。お前がほしがつてゐるやうな畫をかく。

A。どうぞ。

神。それから、お前の心を若くする睡眠の藥をやらう。

A。[illegible]ぞ。
神。これからのことは、お前の勝手にしろ。
（暗轉）

二

野原で畫家が畫をかいてゐる。A登場。

A。またヘボ畫かきが何かかいてゐるな。どうせ見たつて仕方がないが、見てやれ。
（A見にゆく）
A。之はすてきだ。之はすてきだ。
畫家。うるさい。默つてゐてくれ。
A。之は本當にすてきだ。
畫家。默つてゐろと云ふのに。
A。いや默つてはゐられない。君は大した畫かきだ。
畫家。なに云つてゐるのだ。僕はヘボ畫かきだよ。
A。いや君は大した畫かきだ。僕は君のやうな畫家がこんな所にゐるとは思はなかつたよ。
畫家。（畫をかきながら）。うまくつたつてまづくつたつて餘計なお世話だよ。
A。いや、僕は心の底から君の畫に感心してゐるのだ。

畫家。それは君が感心するのはいゝが、默つてゐてくれないか。今大事な所だから。
A。よし〳〵それぢやだまつてゐるよ。本當に大したものだ。
畫家。默つてゐろと云ふのに。
A。つひしやべるのだよ。悪る氣ぢやないから、かんべんしてくれ。
畫家。やつと出來た。（ふり返り）、あ、君は赤石金五郎君ぢやないか。
A。さうだ。僕は赤石金五郎だ。
畫家。いゝ處であつた。僕は君に逢ひたいと思つてゐた。僕は青海六之助と云ふものだ。
A。さうか。
畫家。君に畫を見てもらひたいと前から思つてゐた。
A。さうか。
畫家。今度、いつか君の肖像をかゝしてもらひたいと思つてゐるのだが、どうかね。
A。それは勿論、よろこんで承知するよ。
畫家。それでは明日から僕の家に來てもらはうか。
A。是非行かう。
畫家。君に逢へたのは本當にうれしい。
A。僕も實にうれしい。日本も段々有望になるな。
畫家。之からだよ。あらゆる意味でね。僕は世界中が、こゝで一變するのぢやないかと思ふね。どうも僕は我々は原始

時代に生れて[illegible]

A。本當にさうだ。君に逢つて本當にうれしい。

畫家。これおや、明日是非來てくれ給へ。

A。所は何處かね。

畫家。こゝからぢきだ。圖をかいて上げやう。（スケッチブックに圖をかき切つてわたす）隨分ひどい處だけど、自分の處が一番かきなれてゐるから。

A。君はいくつになるのです。

畫家。四十三になる。

A。君の名は世間には少しも知れてゐませんね。

畫家。それは知れるわけはない。僕は有名になるのが好きではない。二三の貧乏なパトロンがあつて食ふには困らないので、僕はなるべく人に氣がつかれないやうに仕事をしてゐる。

A。しかし多くの人に自分の價値を認めてもらはうとは思はないのですか。

畫家。思はないことはないが、近頃やつとものになりかけたので、まだ世間に發表するには早やすぎる。君は有名になつて得したことがありますか。君の近頃かくものは、有名になつた報いがあらはれてゐると、皆で惜しがつてゐますよ。

A。僕は有名とはゆきませんがね。しかしいろ〳〵自分の力を自分の仕事に集中することが出來ないので、少し困つてゐます。なるべく力を一つにしたいと思つてはゐるのですが。いろ〳〵情實があつてね。

畫家。自分の仕事以外は斷つてしまふのがいゝのです。君自身の仕事を尊敬することが大事です。

A。僕もさうも思ふのですが、どうも氣がよはくつて、たのまれるとつひ斷れなくなるのです。

畫家。それは面白くありませんね。

A。まあ、その內には段々斷ることになるでせう。斷るより仕方がありませんからね。

畫家。君は金をとる必要があるのがいけないのですね。

A。金をとるだけの仕事ならどうにでもなるのです。義理が出來るのがいけないのです。殊にたよられるのがいけないのです。それも一人や二人ならいゝのですが、それも人のいゝ人にたよられては斷るわけにゆきませんからね。

畫家。しかし斷はらなければならないでせう。

A。今の樣子ではね。

畫家。何しろ自分の仕事に全力を出さなければだめですよ。

A。それは僕もさう思つてゐるのです。

畫家。何しろあなたは今大事な所ですからね。もう一息と云ふところですからね。今くたばつては耻ですよ。又あなたのものをおとなしく愛讀してゐるものが氣の毒ですよ。

A。それはよくわかつてゐるのですよ。ですが中々一息と云ふ所が越せないものです。君は其處を越してしまつたやうに見えますか。

畫家。いゝえ、どうして、まだ〳〵です。それでは明日の午後御待ちしてゐます。

A。是非伺ひます。それではさよなら。

畫家。さよなら。

三

(畫家の家。畫家と妹、妹は二十五六)

畫家。赤石がもう來さうなものだ。

妹。赤石さんてどんな方。

畫家。頭のはげた、ぢゝむさい奴だよ。

妹。顏に面白い所があるのですか。

畫家。眞拔な所が面白い。

妹。赤石さんはお兄さんの畫にそんなに感心したのですか。

畫家。大いに感心してゐたよ。物好きな奴だ。何處に感心したのかね。本當にいゝ處が、あいつなんかにわかるわけがないと思ふがね。何處かわかつたのだらう。あいつも馬鹿ぢやない。

妹。赤石さんは近頃中々評判がいゝのでしよ。

畫家。なに、一時一寸とよかつたらしいが、もう下火だね。何しろ日本と云ふ國は、人間を駄目にすることがうまい國だよ、大人物は一寸出にくい國だね。

妹。お兄さんはどうなの。

畫家。俺だつて外國にゐればとつくに大人物さ。しかし日本にゐるから近頃やつとものになりかけて來たのさ。日本も奈良朝時代は大人物が出やすかつたやうに思ふが、徳川時代から少し駄目になつたね。足利時代にはまだ少しはまし

な奴がゐた。

妹。近頃はどうなのです。

畫家。少しは面白くなつて來てゐるが、大人物が出るには空氣の出來から少しかへないといけない。近頃は大人物なんて過去のものだと皆思つてゐる。しかし大人物に逢はなくつては氣がはればれしないと云ふ人間も少しはゐるはづだ。

妹。あなたは誇大妄想狂だと皆云つてゐるさうですよ。

畫家。俺の畫のわからない奴はさう思ふのも無理はない。そして俺の畫のわかる奴は、日本に二三人ゐてくれるかな。

妹。そんなことをすまして云ふ處を見ると、私もお兄さんを氣違ひのやうに思へて、氣味がわるくなりますわ。

畫家。そんならかう云へばいゝのか。俺のやうな畫家は日本にくさる程ある。俺なんかもう畫なんかかいても、ものにならない。君はどう思ふ。少しはものになつてゐるかねて、あはゝゝ。

妹。畫の話はもうやめ、他の話をしませう。

畫家。お前の嫁入りの話でもするか。

妹。私はもうお嫁なんかにゆかなくつてよ。

畫家。俺もゆけとは云はないよ。だがお前がゐるといろ／＼の奴が來てうるさいよ。

妹。誰も來ないと淋しいのでしやう。

畫家。皆、俺のゐない所をねらつてくる、泥棒猫のやうな奴許りだ。少しはたのもしい奴がゐるかね。だがお前のおかげで俺の畫もぼつ／＼賣れるのだと思ふとわるくもない。妹をおとりにする畫かきあり、と云ふいたづらがきでもしたい處だね。

妹。よくつてよ。私はこの頭までが來ても、[illegible]にしてゐるのよ。だけど[illegible]

畫家。滿更うるさいのもわるくはあるまい。

妹。それは人によりますわ。随分閉口な人もあるわ。

畫家。たとへば誰だ。

（外で聲がする）

妹。赤石さんがいらつしたわ。

畫家。來たと見える。

（妹退場。まもなく登場）

妹。赤石さんぢやなかつたわ。山中さんよ。

畫家。なんだ山中か。おい上らないか。

（山中登場）

山中。今日は天氣がいゝのにうちにゐるのは珍らしいね。

畫家。僕がゐないと思つて來たのか。

山中。さう云ふわけぢやないが。だが君がゐて丁度よかつた。

畫家。何が丁度いゝのだ。

山中。リンゴの美しいのがあつたので、君が靜物をかくのにいゝと思つて持つて來た。

畫家。それは感心だね。早速見せてもらはう。

山中。（リンゴをとり出して見せる）中々綺麗だらう。
畫家。うん中々綺麗だ。
山中。之を一つかいたら僕にくれないか。
畫家。たゞでか。
山中。まあ繪具代位ゐ出すよ。
畫家。繪具代ちやかく氣がしないよ。せめて五十圓位ゐはくれなくつては。
山中。五十圓か。五十圓は一寸困るな。
畫家。それなら水彩なら十圓位で賣つてやつてもいゝ。
山中。十圓も一寸困るな。
畫家。鉛筆畫で走りがきなら三十錢で賣つてやつてもいゝよ。はゝゝゝゝ。
山中。三十錢のヱと來たらひどいのだらう。
畫家。それはどうせ亂暴なものだよ。だが今買つておくともうかるよ。五十圓の畫は今に三百圓位ゐにはなるだらう。
　俺が死ねば少くも三千圓にはなるだらう。
山中。それがあてになればいゝがね。
畫家。あてになるよ。
（妹お茶をもつてくる）
畫家。山中が、お前にリンゴを持つて來てくれたよ。

ね　そんなにこまらないさ。

山中。さう云ふわけではないのですよ。僕にはくだらないゝと思つて持つて来たのですよ。それでは一つ三十錢の畫をかいてもらひたいね。

畫家。よし、(手帳を出して、走りがきしてわたす)

山中。いくら三十錢でも之はひどいね。

畫家。この畫の面白味がわからないのかね。(とやぶく)もう君には一生かいてやらないよ。

山中。そんなことを云はないでくれ、十圓奮發するよ。

畫家。まあいゝよ。又今度にしよう。

(外で聲がする)

妹。赤石さんかも知れませんね。

畫家。どうだか。

(妹退場、まもなく登場)

妹。中岡さんがお見えになりました。

畫家。中岡か。中々御定連がやつてくるな。面白い。之であと岡本がくれば三幅つひがそろふわけだ。

妹。およしなさいよ。

畫家。中岡、上らないか。

(中岡登場)

中岡。先生、おうちですか。
畫家。おうちだよ。うちにゐてはいけないかね。
中岡。さう云ふわけぢやないのです。私は先生をおよろこばししたいと思つて、今日は花をもつて來ました。
畫家。さうか。それはありがたい。今日は豊年だな。山中も今リンゴを持つて來てくれた。君は花か。まあ見せたまい。花はいつ見てもわるくないね。
中岡。先生、(花を出し)どうです美しいでせう。
畫家。中々奮發したね。中々高いだらう。
中岡。あんまり美しかつたもので。先生がおかきになるといゝと思つて持つて來たのです。
畫家。さうか。それはありがたい。僕も之からなるべく家にゐて、靜物畫をかきたいと思つてゐた處だ。妹があんまり僕が留守にするので、不用心で困ると云つてゐたからね。だが景色のやうに靜物はたゞでは得られないので困つてゐたのだよ。之はたしかに畫になる。
中岡。先生、御留守が不用心でしたら御留守に私達が上つてもよろしい。
畫家。僕の妹はお客が嫌ひな質でね。君達が僕の留守に來たら困るだらう。
中岡。あんまりお困りにもならないでせう。
妹。別におかまいもしませんから、困りはいたしませんが。
中岡。困る時は困るとおつしやつて下さい。いつでも歸りますから。
妹。こんなことはありません。

山中。本當です。僕達はあなたに御迷惑をおかけすることになると思つてゐるのですから。御迷惑の時は遠慮なくおつしやつて下さい。

妹。えゝ、之から迷惑な時は遠慮なく申しませう。

山中。どうかさう御願ひします。私達の仲間では遠慮は何よりいけませんから。

畫家。本當にさうだよ。遠慮してゐたら何處までつけ上るかわからないと云ふ連中だからね。

中岡。先生、それはひどいですね。

畫家。なにそれはほめたことなのだ。どん〳〵つけ上る位ゐちやなければ、有望な人間とはゆかないよ。そのかはり斷る方も、どん〳〵斷るやうにすればいゝのだ。

山中。本當にさうです。

畫家。處で僕は今日から赤石の肖像をかくことになつてゐるのだがね。

中岡。赤石さんのですか。あの有名な小說家の。

畫家。あんまり有名でもない。尤もあいつは女優と一緒になつてすぐ逃げられたと云ふ三面記事で有名な男だがね。

中岡。女にあまくつて有名な男ですな。

畫家。女にあまいと云ふよりも、女に饑えてゐるやうな男なのだね。若い時に道樂をしない男と云ふものはあくのぬけない處がある。

山中。本當にさうです。若い時には道樂するに限りますな。

畫家。そして中年になると、素人の女の處へリンゴを持つてゆくに限るかね

山中。それはどう云ふ意味です。

畫家。いやなんでもない。

山中。君は何か誤解してゐるのぢやないかね。

畫家。何んでもないよ、一寸口がすべつたゞけだ。

山中。僕は決してそんな野心家ぢやないよ。

中岡。先生私に一つこの花の畫をかいてくれませんかね。

畫家。たゞでかい。

中岡。繪具代位ゐ出します。

畫家。繪具代ぢやかく氣がしない。油畫なら六號で五十圓ならかいてやつてもいゝ。

中岡。五十圓？　もう少しまけてくれませんかね。

畫家。水彩なら十圓で賣つてやるよ。

中岡。水彩で十圓はやすくありませんね。

畫家。ケチな奴だね。

中岡。ケチと云ふわけでもないのですが。

畫家。それなら矢張り三十錢組か。

妹。誰かいらつしてよ。

畫家。岡島だらう。

（妹退場。まもなく登場）

妹。赤石さんがお見えになりました。

畫家。さうか。

（妹退場。Aをつれてくる）

妹。大へんむさくるしい所ですが。

畫家。お丶失敬。どうぞ。

A。（皆に挨拶し）昨日はどうも失禮。今日出かけやうとしたら、人が來て失敬した。

畫家。それぢや早速始めるかね。君達失敬だけど、さつきの話の通り、歸つてもらふことにしたいね。僕は畫をかく處を人に見られるのが嫌ひでね。

山中。い丶とも、それぢや又。敏子さん失禮します。

妹。さうですか、又どうぞ。

中岡。先生の畫を一寸でも拜見したいのですが。

畫家。それは他の時にしてもらはう。僕は畫を始める時に殊に他の人に見られるのが嫌ひなのだ。

中岡。さうですか。それでは明日拜見に上ります。

畫家。明日も困るね。

中岡。それではその內、お伺ひします。敏子さんそれでは失禮します。

妹。さよなら、又いらつしやい。

中岡。えゝ。又あがります。

（山中、中岡、妹、退場）

書家。（二人に聲をかける）それぢや失禮する。（赤石に）あいつ達は僕に逢ひにくるのではなくつて妹にあひにくる、狼連だ。之でさつぱりした。

A。聞えやしないか。

書家。聞えやしない。聞へたつてびくともしない連中だよ。

（妹、登場）

書家。歸つたかい。

妹。おかへりになりました。

書家。俺の留守に毎日あんな奴に來られたら閉口だらう。

妹。閉口もしませんがね。二人一緒だと反つていゝのですがね。一人で上りこまれると一番閉口しますよ。

書家。斷ればいゝのに。

妹。だつて一寸書が拜見したいとか。一寸用があるのでとか。中には默つてのそつと入つてくる人もあるのですからね。お兄さんがゐるとよりつかないで、お兄さんのゐない時を見はからつてくる人もあるのですからね。

書家。お前が歡迎するからいけないのだよ。

妹。それはさうかも知れませんわ。私、斷れないのですから。

書家。まあどうでもいゝ。赤石さん、それでは仕事を始めましやうか。

A。え丶。

畫家。一つかたづけてもらうかね。

妹。え丶。かたづけましよう。

A。　君の畫を少し見せてほしいものですね。

畫家。どうか見てくれ玉へ。

（A、畫を見る）

A。失禮だが、この畫はいくら位ゐで賣るのですか。

畫家。よりどり、三十圓なら賣つてもい丶のです。君がもし買つてくれ丶ばです。他の人だつたら五十圓位ゐに賣らうと思つてゐるのです。

A。馬鹿にやすいのですね。

畫家。だが五十圓でも高いと云つて、誰も買つてはくれないのです。

A。僕は今、金の都合がわるいのですが。月末に拂つてよければ是非ゆづつてほしいのですが。よろしいか。

畫家。どれでも氣に入つたのがあつたら持つていつて下さい。

A。それでは五十圓にしてもらつて、之と之をもらうことにしてよろしいか。

畫家。三十圓でよろしい。

A。　少しひどすぎますね。

畫家。どうせ賣れないのですから、かまはないのです。

A。それなら三つ戴くことにします。

畫家。どうもありがたう。敏子、どうだ、そろ／＼金持風が吹いて來たらう。

A。今日は二十圓切り持つてゐませんから、それだけ上げておきましよう。

畫家。さうですか。それではもらつておきましよう。

A。あんまりやすゝぎて。

畫家。いゝえ、君ならあげたい所なのです。それに僕の畫なんか賣れつこはないのです。金に困ると、よく十圓か、二十圓で賣つてゐるのです。

A。それぢや今の内に買ひしめて、うんともうけることにしますかね。そしたら僕も金の苦勞をせずにすめさうです。どうしたつてこの畫は一二年の内には二三百圓はする代物ですからね。

畫家。あてにはなりませんよ。とくすると思つて君に買つてもらつて、損させてはお氣の毒です。

A。得するといふのは冗談です。僕なら、金さへあれば、この畫に一二百圓でもよろこんで出すと思ひますね、金に困つてゐるから實際は買へませんがね。しかし三十圓でこんな畫が買へるとは夢のやうです。この畫を自分の室にかけることが出來たら、僕はつかれても、すぐ元氣をとりもどすことが出來るでせう。

畫家。そのうちにもつといゝものをかきますよ。僕はやつとのみこみかけて來たのですから。

A。君は本當に僕が文學の方でやりたいと思つて空想してゐることを、そのまゝ實行してゐるので、僕には實にぴつたり、君のかく時の心持がわかります。

畫家。僕も昨日から急に前途があかるくなつたやうな氣がしました。やつとわかつてもらつたと思つたのです。それで

は其處に坐つてもらひますか。

A。えゝ。それでよろしいか。

畫家。えゝ、それで結構です。氣らくにしてゐて下さい。あの畫を見てゐて下さい。敏子お前、琴でもひかないか。

敏子。はい。下手ですが。

畫家。云ひわけは相手が馬鹿な時にするものだ。あなたは大變つかれ　てゐますね。

畫。えゝ。今朝二時に起きて十枚原稿をかき、それから又一ねむりして午前に十枚原稿をかき、つかれ切つて飯を食つてゐる處へ、お客が來られて原稿を見てくれと云はれたので、勇氣を出して斷つたのですが、遠處から來た人なので斷り切れないで、よんでもらつて、批評して來たので、すつかりつかれました。

畫家。あなたも今が大事な時ですから、本當に疲れちや駄目ですよ。

A。ありがとう。

（琴の調べが始まる）

畫家。えゝ、樂にしてゐて下さい。僕はかきいゝ處からかきますから、目も自分の都合のいゝ時にかきますから、時々あの畫の方を見て下されば、いゝのです。さう一心に見つめて下さらないでも。

A。之でよろしいか。

畫家。それで結構です。もうあなたとは生れる前から知つてゐるやうな氣がします。

A。僕も丁度さう云ひたかつた處です。

畫家。いゝ人間が日本には少なすぎますね。しかし今に日本にも恐ろしくいゝ時代が來さうに思ひますね。何處かに、

何處かにいゝ人間が頭をもたげ出してゐるやうに僕には思へて仕方がないのです。一時代に立派な人間が頭をそろへて出てくるのを見ることが出來たら、實にすばらしいと思ひますね。力のありあまつた人間が何處かに居さうに思ひます。

妹。それでは始めませうか。

畫家。あゝ。

（妹琴をひき出す。畫家畫をかかうとする）

第一幕

（前と同じく畫家室、敏子一人）

山中。先生は留守ですか。

敏子。えゝ留守よ。

山中。しめた。

敏子。何がです。

山中。僕はあなたと二人切りでゆつくり話したい事があるのです。

敏子。なに。

山中。あなたはいつまで獨身でゐるつもりなのです。

敏子。一生よ。

山中。一生ですか、先生は結婚なさらないつもりですか。
敏子。兄は結婚しないでせう。
山中。あの人とも。
敏子。えゝ。兄もあの人も結婚はしないでせう。
山中。どうしてゞす。
敏子。それは私にはわかりませんがね。二人とも結婚は嫌ひなのです。
山中。そしてあなたも結婚嫌ひですか。
敏子。さうね。嫌ひでもすきでもありません。
山中。さうですか。
敏子。それを聞いてどうしようと云ふのですか。
山中。きいてくれと人にたのまれたのです。
敏子。誰です。
山中。あてゝ御らんなさい。
敏子。わかりませんわ。又考へて見る興味もないわ。結婚したがるのは生活の出來ない女だけだと兄は云つてゐますよ。
山中。僕はさうは思ひませんね。結婚してこそ本當におちついた生活が出來るのぢやないのでせうか。
敏子。それはさう云ふ人もあるでせう。だが結婚したくない人と結婚するのは、生活の出來ない人か、異性に飢えてゐ

る人に限るでせう。

山中。さうもゆきません。家と云ふものがありますから。

敏子。それは人によりますよ。

山中。それだつて子供をほしく思はないのですか。

敏子。それだつて戀しない男の子供を生むのは女の恥だと思ひますがね。

山中。さう許りは云へないでせう。先生はあなたの結婚するのに反對なさるのですか。

敏子。そんなことはありません。ですが私が兄のわきにゐるのはよろこんでくれてるのです。お前程、俺の性質や仕事をのみこんでゐてくれるものはない。お前のわきにゐると一番仕事が出來ると云ふのです。

山中。さうですかね。僕には先生の氣持はわかりません。

敏子。どうして。

山中。だつてあの女の人と別居して平氣でゐられるのは不思議です。

敏子。ちつとも不思議なことはないわ。兄は仕事が第一ですからね。女は第二、第三ですからね。それにあなたも知つてゐるやうにあの人は兄のモデルだつたのですからね。それにあの人には情夫がある。兄はそれも知つてゐるのです。

山中。そんなものがあるのですか

敏子。あるのよ。

山中。それで先生は平氣なのですか。

敏子。えゝ、平氣なのよ、又平氣になるより仕方がないでせう。金もないのですから買ひ切りにするわけにもゆきませ

んからね。

山中。それでいろ／＼のことがわかりました。それであなたはつまり兄さんの犠牲と云ふわけですね。

敏子。そんなことはありません。私達の間に犠牲はありません。私は一人の職業婦人として兄の仕事を助けてゐるにすぎないのです。職業婦人は金のために、食ふために働いてゐる、しかし私は私の尊敬する仕事のために働いてゐるのにすぎないのです。だから私は結婚することがあつても、この仕事はつゞけてゆくつもりです。兄が私を必要とする間は、兄も一時は中々馬鹿でした。苦勞もしたやうです。しかし今は一種の悟をもつてゐます。他人は他人だと云ふ悟りです。

山中。淋しい悟りですね。

敏子。いや其處に又、本當の愛も、よろこびも生れるのです。

山中。さうですかね。

敏子。兄はあの人が、兄をすてずに、今でも兄の爲にごく僅かの金でモデルになつてくれるのを兄はよろこんでゐます。戀人と思へば腹もたつが、他人と思へば感謝する。兄はそんなことを云つてゐました。

山中。中々先生は實利主義ですね。

敏子。さうですかね。あなたの目から見るとね。

山中。誰の目から見てもさうでせう。先生は實にエゴイストですね。

敏子。仕事のこと許り考へてゐますからね。仕事のことを考へない時は、女のことを考へてゐると云ふんです。

山中。金と女ですか。

敏子。まあさうよ。兄は仕事は進むに從つて大きくもなり深かくもなり、實に深い味を見せてくれるが、女はさうはゆかない。尤も女の肉體の美しさは特別だがと云つてゐます。

山中。女にもよるでせう。

敏子。私もさう云つたのです、そしたら男にとつて女と云ふものはさう云ふものぢやない。女も人間としては味の深いのもたまにはゐる。しかし女としては味はいつくせば、かすのやうなものだと云ふのです。子供さへ出來れば自然にとつては用はないのだからと云つてゐます。

山中。矢張り先生は何處か悟つてゐますな。私もあなたと話してゐると、少しづゝ悟つた人間になりますよ。

敏子。私はこの頃、人間と云ふものは馬鹿なものだと思ひますよ。しかしその馬鹿さにいろ〳〵ありますがね。利口な馬鹿と、馬鹿な馬鹿と。

山中。利口な馬鹿とはどんな人です。

敏子。まあ兄や、赤石さんなんかは利口な馬鹿でせう。ともかく他人をやつけてよろこぶやうな馬鹿はしませんからね。他の人に迷惑にならない程度の馬鹿です。そして段々仕事が進めば段々人間も進んでゆくのですが、馬鹿な馬鹿は他人をやつけてゞも金持になりたいとか、名譽を得たいとか、云ふ人間です。

山中。あなたの云ふことは一理があります。そしてあなたや、僕はどうなのです。

敏子。さうね。あなたと一緒ぢや私が可哀さうよ。

山中。それはいゝ御挨拶ですね。

敏子。だつて私にはちやんと仕事があるのです。そして一生の方針がたつてゐるのです。あなたのやうに細君をさがし

て歩いたりはしてゐませんでしたわ。

山中。いや僕は細君なんかさがしてはゐません。

敏子。いゝ人があつたら世話してくれと兄に云つたさうぢやありませんか。

山中。それは一寸云つて見たのです。

敏子。それでもうあきらめたのですか。

山中。どうもあきらめなければならないやうですね。さうでせう。

敏子。私にはわかりませんよ。

山中。あなたに一番わかつてゐるはづです。蛇の生殺しは困ります。

敏子。私はちつとも生殺しにはしなくつてよ。たゞあなたの奥さんになる方は、私の知つてゐる所には一人もゐませんが、私の知らない處に、

山中。どうか、そんなことは云はないで下さい。僕は正直に云ひます、敏子さんと結婚したいのです。

敏子。それはだめ。

山中。どうかそんなことは云はないで下さい。（泣く）

（中岡、登場）

中岡。おや、先生、おるすですね。山中君何をないてゐるのだ。

敏子。山中さんは泣き眞似してゐるのよ。

山中。うそです、うそです、僕は泣き眞似なんかしません。

敏子。馬鹿ね。あなたは。泣くのが自慢なの。女でも近頃、泣くのははやらなくつてよ。

山中。僕は流行で泣いてゐるのではありません。

敏子。馬鹿ね。あなたは、だが可愛い、馬鹿だわ。

山中。(よろこび) あなたは僕を嫌つてはゐないのですか。

敏子。あたりまいよ。

中岡。そんな話はよさう。見ともないからな。

山中。今に君だつて泣くよ。

中岡。僕は何遍も泣かされたよ。だがどうしても思ひ切ることは出來ないのだ。

敏子。困つた人達ね。女はいくらだつてゐるわ。

中岡。だけど僕はあなたのやうな人を知らないのです。

敏子。私よりいゝ人はいくらでもゐるわ。

山中。
中岡。｝断じてそんな人はゐません。

敏子。きつとですか。

山中。
中岡。｝えゝ。誓ひます。

敏子。本當に可笑しな方ね。

中岡。（ふき出しながら）ちつともおかしくありません。

山中。僕は悲しいのです。

（三人笑ふ）

山中。敏子さんにあつては叶はない。あなたは心中の出來ない方ですね。

敏子。あたりまいよ。無理心中は一番閉口よ。

山中。大丈夫です。僕は死ねば一人で死にます。

中岡。君が死んでくれると僕は大いに助かる。

山中。死にはしないよ。

中岡。さうか。それぢや俺が死ぬか。

敏子。くじできめたらいゝでしよ。

山中。生きのこつた人とは結婚してくれますか。

敏子。私はあなた方二人とはどうせ結婚なんかしないわ。

中岡。そんなことを云ふと殺しますよ。

敏子。本當におどすつもり。

山中。僕だつてあなた位ゐなら殺せる。

敏子。本當？

山中。本當です。

敏子。馬鹿ね。愛想がつきるわ。もうそんなことを云ふ人はきらひだから歸つて下さい。愛想がつきたわ。

山中。さう怒らないで下さい。今のは冗談ですから。

中岡。あなたは本當にしたのですか。女て利口でも馬鹿ですね。

敏子。生意氣なことを云ふと、おひ出してよ。

中岡。あやまる。あやまる。あやまる。

敏子。馬鹿ね。本當にいゝ齡して。早く兄さんが歸つてくるといゝ。

中岡。桑原、々々。

敏子。兄がそんなに怖いの。

山中。それは怖いですよ。少しキ印ですからね。

敏子。どつちが。

（岡島登場）

岡島。や、おそろひだね。

山中。敏子さんの見まくが强いのでね。

敏子。三人がゝりは卑怯よ。

中岡。それならあなたも加勢をよんでくればいゝでせう。

敏子。そんな人はないわ。

山中。一人の方がいゝのでしよ。

岡島。女には友達は出來ないのですかね。
敏子。そんなことはないわ。ですが男のやうに友達がゐなければ淋しいなぞと云ふ意氣地なしぢやありませんよ。
岡島。先生は何處へ行つたのです。
敏子。寫生よ。
岡島。赤石は今日は來ないのですか。
敏子。今日は人が來るのでおそくなると云つてゐました。
岡島。あなたは赤石に氣があるつて評判ですが、本當ですか。
敏子。そんなことは嘘よ。赤石さんは女には卒業してしまつたのよ。
中岡。どうですかね。
敏子。あの人はいそがしいのですからね。
山中。急がしくたつて女のことは別でせう。
敏子。あの人はもう女のことで、ごた〱するのには閉口してゐるのですよ。
岡島。あなたの方はどうなのです。
敏子。私の方はなほ男には卒業してゐるわ。
岡島。卒業同志ぢやあやしいものですな。
敏子。さうを、何とでもとりたければとるがいゝわ。
山中。之はおどろきました。

敏子。おどろいてもよくつてよ。私はあの人には同情してゐるのですから。
中岡。何を同情してゐるのです。
敏子。あの人は淋しい人です。
岡島。あんな呑氣な人はゐません。
敏子。あの人は淋しい人です。私はあの人を少しでも愛してはゐないのです。だがあの淋しさだけはどうかして上げたいと思つてゐるのです。
中岡。それは危險です。女が男に同情するのは。
岡島。それは本當によくありません。噂が立つだけでも面白くありません。
敏子。噂を立てるのは誰なの。第一あんな禿頭の老人に浮いた噂なんか立てるものぢやないわ。私はたゞ話し相手になつて上げてゐるだけです。少しも疾しいことはないわ。他の點では私は悪口云はれても仕方がないことがあるかも知れませんが、赤石さんのことだけは私は自分で自分をほめてゐるのです。
中岡。困つたものですね。
敏子。ちつとも困らしないわ。
岡島。赤石には妻子があります。二十年も一緒にゐる。そして十五になる子をかしらに五人の子供があります。
敏子。だが赤石さんの淋しいのは事實です。私があの人に同情してゐるのも本當よ。だがそれだけよ。
岡島。それだけではすみません。男は途中ではとまりません。女とあつさりつきあふのではおさまりません。
敏子。人によりますよ。

岡島。赤石にはそれが出來ると云ふのですか。大まちがひです。あの男は女優と逃げたこともある男です。
敏子。そんなことは百も承知よ。
岡島。あなたはあの人が有名だから。
敏子。馬鹿、おつしやい。あの人の淋しさのわからない人には私の氣持はわかりません。
山中。僕達の淋しさもわかつてもらひたいものですね。
敏子。あなた方の淋しさは他の女の人で滿されることが出來ますよ。私では無理です。はみ出ますわ。
岡島。赤石だとはみ出ないのですか。
敏子。ひつつこいのね。
山中。斷じて僕はあなたより他の女のことは考へません。
敏子。その言葉をよく覺えてゐらつしやい。私は今に私よりも、あなたに似合ふ女が出て來て、あなたのよろこぶ姿がはつ切り目に浮びますわ。
山中。それはひどい。
岡島。僕も山中に同情する。
敏子。いくら同情しても駄目よ。
岡島。赤石て本當にいやな男ぢやありませんか。
敏子。どうでもいゝわ。あなた方の知つたことぢやない。
中岡。四十男と云ふものは危險なものだと何かにかいてありましたよ。

岡本。お前は女と見るとへんなことをするのださうだな。

山中。本當にそんな奴だね。

関根。あいついかくもいをよすと性格の男はおするね。

綾子。それならあなた方は女の嫌ひがするの。

岡村。あなたは私達をあまり悪く思つてゐます。

綾子。そんなことはないわ。

関根。本当かなんだ、山崎にしてゐる。先生も先生だ。あの男がなぜ先生の書をほめるかわかりさうなものだ

綾子。先生さんを大して…はずですよつて、先生様は…のあることを知らないで兄の書をほめたのです。

関根。それがあてになりますか。

山中。あてになるものですか。

関根。僕はあの男のことは實によく知つてゐますよ。僕の知つてゐるなかで、あの男にへんなことをされた女があります。女は方々をくにげたさうですが、それからあの男を大變恨んでゐました。

綾子。関根さん、あなた…はあにないのいゝ…いつてゐる…で、女をくどく名人は関根さん、あなたですよ。私はそれであなたを…にはしませんね。あなたも悪い人間だと思ふだけですね。

山中。それは…にならないですな。

綾子。私の知つてゐる限りで、女をくどくことの一番下手なのは山中さんで、一番上手なのは岡村さん。一番幽々しいのが中岡さん。

中岡。どうもひどいですね。

敏子。だつて事實よ。だが赤石さんは又た、その山中さんよりまだ女をくどくことにかけては下手ですわ。あれぢやどんな女だつて、くどかれはしないわ。

山中。赤石はあなたをくどいたのですか。けしからん。

敏子。けしからんでは、あなたの方がずつと上手よ。赤石さんは私を爪のあか程も、くどきはしませんが、態度でわかるわ。

中岡。先生はどうです。

敏子。兄妹ですからね。さう云ふ方は考へても見ませんがね。赤石さんよりはひつつこいかも知れませんね。あなたよりはましでせうが。

中岡。どうもあなたにあつては叶ひませんね。

山中。岡島、君は默つちやつたね。

敏子。默つてゐないといけないことがあるのですね。だが私は默つてゐてあげるから安心おしなさい。私は、男にくどかれたり、へんなそぶりをされたりしたつて、それでその男を輕蔑はしません。始めつから男と云ふものはさう云ふ風に出來てゐると思つてゐますからね。だから私は男の人には油斷はしないのですよ。誰でも。人のよささうな顔してゐる人が、存外、へんなことを云つたり、したりするものですわ。尤もそれは半分は女が惡いのですが、女がよくつても、男のわるい場合もいくらでもあるわ。その反對もあるかも知れませんがね。私は之でも後家さんですから、男の秘術位ゐよく知つてゐますわ。

岡島。ですが、赤石は用心なさる方がよろしいね。

敏子。そしてあなたには用心しない方がいゝのでしよ。あなたは默つてゐる方がよくつてよ。私はそんな話はきらひなのです。私はなんでも知つてゐますが、赤石さんの悪口は云はない方がよろしい。あの人が悪ければ私が悪るいのです。あの人は私の出やうでどうでもなる人です。だがそんな話はよさうぢやありませんか。私は嘘を云ふのも嫌ひですし、本當を云ふのも嫌ひです。男と女は性のことを忘れてしまはないとつきあつてはゆけませんよ。私はあなた達も男だと思つてはゐませんよ。

中岡。それであなたは淋しくないのですか。

敏子。淋しくつたつて、淋しくなくつたつてあなた方の知つたことではない。私は自分のことは自分でやつてゆきますよ。自分の淋しさ位ゐ、自分で背負へないでどうします。男のくせして。

中岡。それなら赤石はどうなのです。

敏子。あの人は自分の淋しさを賣りものにはしてゐません。私に助けてくれなぞとは云つてはゐません。たゞ私の方から助けて上げたいと思ふだけなのよ。あの人は乞食ぢやないわ。

山中。それで私達は乞食だと云ふのですか。

敏子。さうね。ものはとりやうよ。早く兄が歸つて來ればいゝのに。

岡島。先生は寫生してゐれば時間も忘れますよ。あなたはそんなに僕達を輕蔑するなら、僕達にだつて考がありますよ。

敏子。假面をとると云ふのでせう。だがそんな殺風景な話はよしませう。其より私達をかいて見たのよ、見て下さらない。

中岡。是非拜見しませう。

（敏子退場）

岡島。女をやつけるのは腕力より仕方がないと云ふのは本當だ。

中岡。それは野蠻だ。

岡島。どうせ男性と云ふものは野蠻なものさ。

山中。やつける勇氣が君にあるか。

岡島。法律の罪人にされちや馬鹿氣てゐるからな。だが口ぢや女には叶はないよ。

中岡。敏子さんはあまのぢやくだからあまりつゝかない方がいゝ。

（敏子畫を持つてくる）

敏子。どうを。

中岡。あなたがかいたのですか。

敏子。それはほめたのですか。惡口なのですか。

中岡。僕は先生の畫よりあなたの畫の方が好きです。

山中。本當に先生よりあなたの方がうまい。

岡島。僕にその畫を賣つてくれませんか。

敏子。さうね、いくらなら買つて。

岡島。僕は金持ならいくらでも出しますがね。まあ、二十圓に負けておいて下さい。

敏子。二十圓？

岡島。先生の畫を先月頂いたのは十五圓でしたからね。先生のより五圓たかく買ふわけです。いゝでせう。

敏子。さうね。だけど、之は始めてかいたのですからね。

山中。之が始めてなのですか。

敏子。それは水彩や、鉛筆畫はかいてゐましたが、油繪具は少しもつかはしてくれないので、かけなかつたのですが、昨日兄がはじめてゆるしてくれたので、かいたのですが、まだものになつてゐませんからね。

岡島。そんなことはありません。

山中。今にあなたは日本一の女流畫家になりますよ。

敏子。どなたかいらつしたわ。（退場）

中岡。中々うまいね。俺達も油斷が出來ない。

岡島。だが、まだ幼稚だね。

山中。それは仕方がないさ。

（敏子、赤石と登場。赤石、皆にあいさつする）

敏子。赤石さん。この私の畫、どうですか。

赤石。あなたにしてはうまいですな。

敏子。あなたはこの畫をいくらなら買ひます。

赤石。さうですね。靑海君の畫が三十圓とすればあなたの畫は三十錢くらゐのものですかね。

敏子。まあひどいのね。

赤石。それは仕方がありませんよ。まだ始めてまもないのでしよ。
敏子。だけど竹さん、随分ほめて下さつたのですよ。
赤石。それは、赤坊にしてはと云ふのでしよ。
敏子。まあ、ひどい。
赤石。だけど、一生懸命にやればあなたもものになるかも知れない。
敏子。一生懸命にならないとものにならないの。
赤石。それはものにならないでせう。たのしみになら別ですがね。
敏子。この畫、二十圓なら買ふと云ふ人があるのよ。賣りませうか。
赤石。それは是非お賣りなさい。しかし僕ならもう十圓はりこんで青海君の畫を買ひますが、物好きな人もゐるものですね。
敏子。こゝにゐる方よ。
赤石。それは氣がつかないで失禮。
敏子。私、一寸兄をよんで來ますわ。
赤石。僕は急ぎません。
敏子。いえ、兄があなたが來たらよびに來てくれと云つてゐましたから。
赤石。さうですか。
敏子。それでは一寸よんで來ます。

中岡。それでは僕も失禮します。

敏子。さうですか。それなら一緒にゆきませう。

岡島。僕も失禮します。

山中。僕も失禮します。

敏子。さうですか。それでは御一緒にゆきませう。それでは一寸失禮します。

赤石。どうぞ。

(皆赤石に挨拶して退場。赤石おちつかずにいろ〳〵の畫を見てゐる。その内に畫に夢中になる)

赤石。いゝ奴がゐたものだな。(なほ畫を見てゐる。)

(敏子そつと登場)

敏子。赤石さん。

赤石。(びつくりして)なんです。

敏子。兄はすぐ歸るからよろしくと申しました。

赤石。さうですか。畫は賣らなかつたのですか。

敏子。誰が賣つてやるものですか。あんな狼連に。

赤石。あなたは狼が嫌ひぢやないのでせう。

敏子。一寸、面白い處もあるわ。あゝ云ふ人達にあつてゐると、一寸自分が利口になつたやうな氣がしますよ。兄に逢つてゐると自分がだん〳〵小さくなつて時々いやになりますがね。

赤石。丁度人のよささうな方ですね。
敏子。人はわるくはないのですが、いゝともゆきません。一人は好人物、一人もさうわるくないのですが、一人は一寸わるいのですよ。だが私のいゝ話相手ですわ。
赤石。あなたの兄さんは本當に大した人ですね僕は今また感心し切りました。
敏子。兄はまたあなたに感心してゐます。
赤石。いや、僕はだめです。廢物です。
敏子。兄はあなたに、いゝ味方があるといゝのだ。あんなに働かすのは、よくないと云つてゐます。あなたにはいゝ素質があるのだがなーと云つてゐます。
赤石。僕はもう、つかれ切つた廢物です。かき損ね許りしてゐます。頭がだん〳〵惡くなる一方です。
敏子。一年位ゐ、何にもなさらないといゝのですよ。
赤石。さうはゆきません。僕にはいろ〳〵義理があります。子供も多いし、金のゐる仕事もあつて、男としてやめられない仕事ですから。自分なんかどうなつたつていゝと時々思ひますよ。又今のまゝでゆけば、だめになることはわかり切つてゐます。
敏子。兄もそれを心配してゐました。
赤石。しかし僕なんか、どうせだめな人間です。この齢になつて、碌な仕事は一つもしてゐないのですから。もう望みはないのです。せめて、いゝ人間が何處からか出てくるために働かうと思つてゐます。
敏子。兄はあなたのその考が大へんまちがつてゐると云つてゐました。あなたの求めてゐる人間は、あなた自身なのだ

が、あなたはそれを知らずに、あんまり自分を亂暴にあつかひすぎると云つてゐました。それはあなたが人がよすぎるからだと云つてゐました。
赤石。　それは嘘です。僕は人のいゝ人間ぢやありません。僕の内にはよくないものが澤山あります。僕は救はれない怠けものです。
敏子。それはあなたがつかれてゐるからです。
赤石。いや、僕の怠けものは昔からです。それに僕は下等な空想をすることがよくあるのです。それさへなければ、もう少しは仕事が出來るのですが。
敏子。それはあなたが道樂をすることを知らないからです。
赤石。僕はもつと力づよい人間になりたいのです。疲れを知らない人間になりたいのです。僕は大天才のもつ、噴火山のやうな力をもちたいと思ふのですが、くすぶつて許りゐて、少しも燃え上らない頭の持ち主です。
敏子。それはあなたの本音なのですか。わざとそんなことを云つて見てゐるのですか。
赤石。僕はもう一息と云ふ處までゆくことを許されながら、もう一息と云ふ處でくたばるあはれな運命を背負された男です。處があなたの兄さんは、平氣で堂に入つてしまつて、堂のなかで自由自在にふるまつてゐる。
敏子。兄に云はすと、いつも自分はまだ、だめだ、だめだと云つてゐます。
赤石。さうですかね。あんなに力があつてもですかね。
敏子。兄はあなたのことを隨分氣にしてゐます。
赤石。それはうれしく思ひますが、しかし僕はもう、自分をすてゝかゝつてゐるのです。

敏子。あなたには樂しみがなさすぎると云つてゐました。

赤石。いや、それは嘘です。僕は幸福すぎる人間なのです。たゞ力が足りないのです。もう一息と云ふ處で、足が進まないのです。

敏子。よろこびがあつたらあなたの足はすゝむかも知れませんわ。

赤石。いや、喜びは私の力を奪ふでせう。一體日本は大きな人物が出るのには實に不適當な國です。しかしあなたの兄さんのやうな人が出たのは不思議です。

敏子。兄は、あなたが何處かへ二三年かくれるといゝと云つてゐます。あなたは子供にはやさしすぎる。あなたの處へくる人にはいくらでも時間をとられてゐる。頭まであなたは他人にとられすぎてゐる。もう少しあなたに冷酷な處があるといゝのだがと云つてゐます。

赤石。之でも隨分冷酷なのです。

敏子。それを始終あなたは氣にしてゐるからいけないと云つてゐます。あなたは道樂でもする方がいゝのだと兄は云つてゐました。

赤石。僕のやうな人間は道樂して、好きな女でも出來たらそれこそ大へんです。金がないから大丈夫ですが。

敏子。それはさうかも知れませんね。

赤石。兄さんはどうしたのですかね。

敏子。畫で夢中になつてゐるのでしよ。

赤石。兄さんのこの畫は大した畫ですね。

敏子。兄もそれをかいた時、自慢してゐました。この畫の味のわかる奴が日本にゐるかな。と云つてゐました。日本にゐなければ何處にゐるのと聞きましたら、さうだねーと云つてゐました。

赤石。畫は世界的ですから、西洋にだつてわかる人がゐるかも知れません。何しろ僕は本氣になつて勉强しなければならないと思ひます。僕は心がけを本當によくして、新に生きかへつたつもりで仕事をしたいと思つてゐます。

敏子。本當にさうなさるといゝわ。あゝ、その畫は御らんになつてはいけません。

赤石。なぜです。いゝぢやありませんか。

敏子。わるくはないのですが。

赤石。美しい身體ですね。

敏子。さうね。この花の畫はお好きですか。

赤石。大好きです。

敏子。この女の畫は、兄の好きな人なのですよ。

赤石。さうですか。中々するどい顏をしてゐますね。

敏子。その人は兄を馬鹿にしてゐるのですが、兄はへんにその人が好きなのですよ。男て馬鹿なものですね。すぐれた兄がこんな女を尊敬するのですものね。

赤石。それは他の人に氣がつかない、いゝ處をあなたの兄さんが見ぬいたのでせう。

敏子。あなたは今日は少し元氣ですね。仕事がうまくいつたのですか。

赤石。仕事の方はすつかり絕望です。もうすてゝしまつたのです。

敏子。それならうれしいわ。

赤石。ですからうちに歸ると、文机に向はないわけにゆかないのですよ。文學つて厄介な仕事ですね。せめて一年に一つか、二年に一つ仕事をすればいゝのだといふのですが、僕のやうに毎月二つも三つもかゝなければならない。そのくせ全力を出し切らないと一行もかけないと云ふ人間は見じめです。しかし泣きごとはあなたと、あなたの兄さんにだけ云ふことにしてゐるのですよ。世間には、多々益々可なりと云ふ顔をしてゐるのですよ。男子がへこたれるなんて云ふことはあり得ないことですからね。死ぬまではくたばつたなぞとは云ひたかありませんからね。なんでも引きうけて片端からやつてゆく、巨人になりたいと思ひますが、矢張りだめです。しかし泣きごとは斷じて云はないつもりです。

敏子。あなたが、もう少し圖太いといゝのですがね。

赤石。あなたゝちは世間と反對なこと許り云ひますね。だが私はあなた達がゐてくれるので實にうれしいのですよ。

敏子。私なんかゐたつて何にもなりませんわ。

赤石。大いにちがひます。女の友達には云ひたいことが云へます。男の友達には云へないことがね。そして女の人と話をする時、自分の心をとざしてゐる氷が本當にとけてくれるものです。この氷のとける氣持は、僕は二三年味はふことが出來なかつたものです。

敏子。あなたの肖像が出來ても、あなたは遊びに來て下さいますか。

赤石。あなたの方で御迷惑でなかつたら。

敏子。迷惑だつたらどうです。

赤石。迷惑だつたら勿論來ません。

敏子。あなたは私達がゐなくつても生てゐられる方ですね。

赤石。勿論です。僕は誰がゐなくつても、いくら參つても生てはゆきます。死ぬまではね。

敏子。有島武郎さんのまねはあなたには出來ませんわね。

赤石。勿論です。しかしこの頃になつて有島の死んだのも無理はないと思ひますよ。僕だつて時々何のために生てゐるかわからなくなります。あまり仕事に逐はれるとね。

敏子。ふだんは何のために生てゐるかわかつてゐらつしやるの。

赤石。さう云はれると一言もありませんが、ふだんは生てゐるのに何か目的があります。子供のためとか、隣人のためとか、仕事のためとか、もつと立派な仕事をしないでは死ねないと云ふやうな氣持がね。しかしこの頃のやうにいそがしいと、そんなことはどうでもよくなりますよ。死んだらさぞ樂だ。雷でも頭の上におちてくれたらさつぱりするだらうと、こないだの雷の時、思ひましたよ。

敏子。そんなことを考へてはいけませんよ。

赤石。大丈夫です。それは、その瞬間一寸考へたゞけで、今死んではたまらないと云ふ氣の方がずつとつよいのです。之で僕は一方、非常に呑氣ものですから。まだ一晩中眠れなかつたなぞと云ふことはありません。汽車で旅行する時は別ですがね。隨分あなたの兄さんは畫をかきましたね。

敏子。えゝ、もう畫をやつてから二十年程になるでせうが、賣れたのは少しですからね。

赤石。よくその間、少しも力をおとさずにすゝんで來られたものですね。

敏子。畫に許り沒頭してゐましたからね。そしていつも、まだだめだ、まだだめだと云ひつくしてゐましたよ。一方隨

分自惚れのつよいことを云つてゐましたがね。

赤石。個人展覽會をやるといふのですね。

敏子。兄は、六十になるまで有名になりたくないと云つてゐました。

赤石。さうですか。不思議な人ですね。誰でも火をもつてゐるものは、あたりをてらしたくなるものですがね。

敏子。まだ、だめだと思つてゐるのでせう。

赤石。之でもですかね。僕なんか、三十で世間に名を知られたのが、破滅の本ですね。

敏子。まだ破滅ぢやないでせう。之からぢやありませんか。

赤石。いや遲かれ、早かれ破滅です。内に力がしなびてくるのを感じてゐます。

敏子。あなたはいくつですか。

赤石。僕は四十一になります。

敏子。まだ若いぢやありませんか。

赤石。自分でも若いつもりですが、内に力がしなびて來てゐます。この頃は仕事が一つも出來ません。

敏子。兄は四十三ですが、之からだと云つてゐます。不思議に兄は齡とる程若く、元氣になります。

赤石。仕事に少しも無理をせず、泉を底からかいぼりするやうなことがないからでせう。

敏子。私は、あなたが、そんな意久地のないことを云ふ方とは思ひませんでした。

赤石。僕だつてこんなことは云ひたかないのです。しかしそれが事實であれば仕方がありません。僕は去年あたりから、何に一つ仕事らしい仕事はしてゐません。一時の評判をやつとたもつてゐるので、金がとれると云ふのにすぎません。

敏子。しかしあなたの内にはまだ燃くべき火があると兄は云つてゐます。

赤石。それが、全く窒息しさうになつてゐるのです。あなたたちに逢はなかつたら、なほ私は早く參つてしまふ處です。

敏子。あなたの云ふことには少し誇張があります。

赤石。いや誇張なんかありません。私はもうすつかり駄目な人間になつたのです。

敏子。そんなことはありません。

赤石。僕の方が僕のことは知つてゐます。

敏子。あなたはたゞ少し疲れすぎてゐるだけです。すぐ今にあなたは元氣になります。

赤石。どうですかね。

敏子。兄は人相を見ることが上手ですが、あなたは今年から力が新に加はるはづだと云つてゐます。あなたは今年から道がひらけ、今年からあなたの骨折りが、だん〱あらはれ出すと云つてゐましたよ。

赤石。それが本當でしたらね。

敏子。それを信じなければ駄目です。信ずるとおつしやい。兄があなたの賢者で、私が看護婦です。

赤石。それは勿體ない話です。僕にはそんな値打はないのです。

敏子。云ひわけは馬鹿な相手にするものださうですよ。

（青海、登場）

青海。隨分お待せした。

赤石。いゝや。敏子さんにいろ〳〵力をつけてもらつてゐる所だ。

敏子。ね。お兄さん。赤石さんは、今年から運が向くのですわね。お兄さんは人相見るのが御上手ね。だけど赤石さんは信用なさらないのよ。

青海。それは本當だ。君は今年から運が向く。君の内に新しい力があふれて來る。今君は大事な時だ。君の顏にはそのことがはつ切りかいてある。

赤石。（淋しく笑ひ。）君達の親切はうれしい。しかしそんな子供だましはやめた方がいゝ。

敏子。子供だましですつて。

青海。まあいゝさ。信じられなければ仕方ない。しかしどつちにしろ、君はくたばり切れる男ぢやない。そして今に自づと元氣になり、力が内からあふれ出てくる。それが僕には見えてゐる。

赤石。さうかね。僕には信じられないが、君達を嘘つきだと思ひたくない。いくら親切にしろ。

青海。それは僕達だつて君に嘘がきゝめないことは知つてゐるよ。人間と云ふものは絶望し切ると新しい力の出るものだ。

赤石。君は絶望したことはあるまい。

青海。ないとは云へない。僕だつて苦勞を知らない人間ぢやない。死にたいと思つたこともないことはない。もう七八年前の話だがね。

赤石。さうかね。君にもそんなことがあるか。

青海。僕だつて生きてゐても始まらないと思つたことはあるよ。だがその時僕はたゞ生てやらうとは思つたがね。死ん

だつて同じことだからね。死んだつて生き甲斐を得られるわけではない。淋しさに打負されて、生きてゐるのがいやになつた時でも、死にたいと思つた時でも、心の底ではなほ生きてやる。やるだけのことはやつて見ると云ふ決心はなくならなかつた。僕は人生を明るく見ることの出來たのは、二三年前からだ。自然の美しさの關係を知り、それを自分でいくらかかくことが出來るやうになつてからだ。それ迄は淋しい谷をさまよつた。敏子が居てくれなかつたら僕は參つたかも知れない。敏子は僕より生だ淋しがつてゐた。夫をなくした時なぞはね。二人でお互に生きやうと約束したものさ。それから二人はたゞ生てゐればいゝと云ふやうな、すてばちの時代を通りこして來た。すべてをすてると、又少しづゝ力がわいてくるものだ。世間には何も怖いものはない。死さへ怖くない、その時、猛然と生命が不思議な力で生て來た。

赤石。さう云ふ氣持は僕にもわかる。

青海。矢つき、力つきて、さて殘るものは男の意氣許り、たほれてのちやむと云ふ決心を何度したらう。そしてしがみついた仕事はなか〳〵はかどらない。すぎてしまへばなんでもないが、十何年の辛抱は樂だとは云へなかつた。

赤石。君の畫はたしかに淋しさで鍛へられてゐる。

青海。君も之から本當に鍛へられる時が來たのだと僕は思ふ。そしてそれは君にとつて最後の鍛えになると思ふのだ。人間は樂ばかりしては中々ものにはなれない。鍛えぬかれた刀のやうに、君の生命は鍛えぬかれてものになるのだ。

赤石。しかし僕はたゞ疲れてしまつたゞけなのだ。

青海。だが君の內に今にも泣き出しさうな淋しさが僕には感じられる。僕は日本で、君位ゐ仕合せで、あかるい、呑氣な人間はないだらうと狹々猜敬してゐた。しかし實際を見ると、中々さうぢやない。今の內には泣きたくつて泣けな

い涙が、あふれるやうにたくはへられてゐるのを感じる。之は君の背後をかくまでは感じられなかつた。そしてそれを最初に感じたのは、實は僕でなくつて繊子だつた。君の内には、まだ〳〵力はあるのだ。たゞ君は、あまりにいろいろのことを一時に考へすぎるのだ。あまりに君はしたいことが多すぎるのだ。そして寢られない夜がつゞくのだ。何より君には安眠と休息が必要だ。そして生るたのしみだ。

赤石。僕はこの頃、實に平穩無事な、幸福な生活をしてゐる。

青海。しかし君にはそれをたのしむ餘裕があるか、いろ〳〵の仕事が君の頭を奪ひすぎてゐる。君の心臟は凍えかけてゐる。力がうちにしなびるのは當然だ。

赤石。僕は君の云ふことの一面事實だと云ふことは認める。しかしそれが全部ではない。僕は生理的につかれて來てゐるが、僕にたのしみはないことはない。

青海。おちついて味はふことが出來なければ何にもならない。君の家庭は實に平穩無事だらう。だが君の心はそれで休まるかね。僕は君が、やむを得ない仕事の他は斷じて斷ることを忠告するね。君の頭と時間を君はもつと尊敬しなければならない。

赤石。それは僕もある處まで實行してゐる。

青海。しかしもう少し無遠慮に實行するのだね。そして吞氣にあそぶのだね。

赤石。之以上吞氣にはなれないよ。僕はむしろこのさい、うんと積極的に、出たらめに働いて、借金をかへしてしまひ、金の心配をないやうにして、そして一年間位ゐあそべるだけに、馬力をかけ切つて、そしてこの難關を切りぬけたいと思つてゐる。しかしいつも、もう一息の處でくたばつてしまふ。依然として借金がふへてゆく。

青海。借金なんか、氣にしないといゝのだがね。

赤石。だが義理がある。又約束がある。又迷惑をする人がある。それ以上、何かの力が僕を支配して、進めと云つてゐる。倒れるまで働いても、しりぞくなと云つてゐる。僕はそれに手向へない。

青海。さうか。それなら、思ひ切つてやりぬくのだね。

赤石。だがその力がないのだ。今迄も力一杯やつて來たのだから。

青海。更にこのさい力を出すのだね。僕達が君をたすけるよ。疲れたらやつて來たまい。そして、元氣になつたら闘へばいゝ。やるだけやり玉へ。出來るだけ積極的に。もう一息の所だから、僕達はどうにかする。小野道風の見た蛙のやうにね。

赤石。……………

青海。一體、運動とか、遊戯風のものだと應援がある。その他のことにも奬勵がいくらかあるやうだがね。文學の人は國民の傲りのやうな仕事をしても、いつも惡口許り云はれ、輕蔑許りされてゐるね。君なんか毎日惡口を云はれなかつたことはないだらう。

赤石。十五年の間、毎日やられたね。ほめられたことも少しはあるが、惡口の方はどの位ゐ云はれたか。今でも自分の子供のやうな奴から輕蔑されよく教訓を喰ふよ。十五年つゞけさまに喰つたのと同じ教訓をね。人間て、進歩するやうで中々進歩しないものだ。流行は隨分かはるが、云ふことは十何年少しもかはらない。相手が馬鹿者だからかも知れないがね。だがそんなことは平氣だよ。

青海。公けに賞められたことはあるか。

赤石。幸ひと無傷だよ。社會的に葬られかけたことはあるがね。しかし僕は惡口云はれるのと、世間から無視されることにはなれ切つてゐる。たゞ大きな仕事が出來ないだけが不甲斐ない。世界の劇壇位ゐ、征服する資格のあるものがかけないのが不甲斐ない。さうなればともかく金がとれるからね。世間からもらふもので、ともかく通用するものは金だからね。名聲なんて云ふものは馬鹿々々しいものさ。誰の生命にも役にはたゝない。尤も百萬圓もらつて下らないものをかくより、一文にもならないでも自分で滿足出來るものがかけばいゝがね。しかしどうせ自分にも滿足出來ないのなら、金にでもならなければ馬鹿氣てゐる。

青海。金の必要があるのは、藝術家にとつても、宗教家にとつても同樣、害があるね。

赤石。本當にさうだよ。だが必要にせまられてかいても僕は僕だけのものはかけるつもりだよ。それに二十人の僕の愛する人達が食ふに困つても困るからね。力さへあれば萬事よくゆくのだが。力が足りないのは不甲斐ない。

青海。まあいゝさ。今に君の内に力がわきだすよ。まあ、僕の云ふことを信じ玉へ。それでは一寸かゝしてもらはうかね。

赤石。あゝ。

青海。隨分なかくかゝりさうで氣の毒だね。

赤石。いや、一生かゝつてもらへればなほうれしいよ。それから君の畫を二三枚友人に買はしたいがいゝかね。

青海。それは大にありがたい。それでは始めるかね。僕は君の内にある生命を信じないわけにはゆかない。君の顏に
よろこびと希望がすでに見えてゐるよ。

赤石。それは君の心の反映にすぎない。

青海。そんなことは斷じてないよ。

（青海書をかきかける）

第二幕

（同じく、青海と敏子）

青海。赤石は近頃、少し元氣になつたね。

敏子。えゝ、窮すれば通ずと云ふのは本當だと云つてゐらつしやいました。決心し、すべてをすてゝしまつたら、又力がわき出して來たと云つてゐらつしやいました。

青海。お前のおかげだとは云はなかつたか。

敏子。兄さんのおかげだとは云つてゐました。

青海。赤石はお前を愛し出してゐるね。

敏子。そんなことはありません。

青海。さうかね。まあさうしておく方が無難だらう。

敏子。大丈夫よ。赤石さんは相手によつてどうでもなる方ね。だがあの方はわるい方ではないわ。

青海。ずるくない男でもあるまい。

敏子。男てつけ上らせば切りのないものね。

青海。女はどうだ。

敏子。人によるわ。

靑海。男だつて人によるよ。だが大たいとして女の方がつけ上るものだよ。

敏子。さうですかね。私はさう思ひませんわ。女はおさへつけられすぎてゐるのよ。男のやうに勝手が出來たら、女の方が謹み深いわ。

靑海。どうかね。

敏子。男の方がずつとひどいわ。女に殘酷性があるつて云つても、男の殘酷性には叶はないやうなものだわ。

靑海。それは男の方があらゆる點で優れた力をもつてゐる。

敏子。どうですかね。

靑海。男のくづと、女のましなのと比較すれば女の方がましだらうがね。

敏子。ともかく男の方がずるいのよ。女に許りつまらない仕事をさせておいて、私は女の子が出來たら男まさりの女をつくつて見せますわ。

靑海。結婚しないで子供が出來るかね。

敏子。それは結婚しないだつて、いくらだつて子供は出來るわ。嘘だと云ふなら。

靑海。いや嘘だとは云はないよ。だがお前は子供をつくる氣があるか。

敏子。それはつくらないとも限らないわ。相手によつては。お兄さんも同じ意見ぢやないの。

靑海。主義としては俺も賛成するよ。だが現實としては一寸賛成出來ない。

敏子。卑怯ね。

青海。お前だつて實行する勇氣はあるまい。

敏子。ないとは限らないわ。だがそんな相手は出て來ないと思ふわ。だけど、一生子供を生ないとは思つてゐないわ。結婚は一生せずにお兄さんにおひだされる迄はお兄さんのわきにゐるつもりですが。

青海。俺は一生、お前を逐ひ出しはしない。俺はお前が逃げ出す時のくるのをおそれてゐるよ。一方望んでもゐるがね。お前のためには。

敏子。もう結婚は閉口よ。私のやうな自分のしたいこと切り出來ない性質はね。私は畫をやめてまで結婚したくないわ。

青海。だが自然と云ふものは、中々俺達の思つた通りには俺達を導いてはくれない。皆空想では隨分虫のいゝことを考へながら、現實では隨分ひどい境遇であきらめることを強いられてゐる。

敏子。だけど、私には、こゝと云ふ逃げ場所があるのですからね。好んで不幸になる必要はないのですから。

青海。それはさうだ。そして之から少しづゝ幸運がむいて來るのだから。

敏子。私はそれを心配してゐるのですよ。今までお兄さんと一緒になるのをいやがつてゐた人も、お兄さんが金持になり、有名になればころげ込んで來ないとも限りませんものね。

青海。大丈夫だよ。

敏子。女は弱いものですから、利害關係をいつも考へてゞないと、戀はしないものですよ。やけつぱらにならない限りはね。それでお兄さんの處へくれば、一生業が出來ると思ふと、安心していろ〳〵の人がお兄さんにお世辭つかつて、細君になりたがるわ。

青海。大丈夫だよ。俺は金持にはならないからね。

敏子。あてにはならないわ。お兄さんの畫は三つとも賣れて、その内一つは百圓で賣れたぢやありませんか。

青海。もう賣らないよ。

敏子。金持ちになつたつてちつとも惡くないわ。細君さへもらはなければ。

青海。相手によつてはあてにならないよ。

敏子。そらごらんなさい。だがその時は私は別居して畫許りかいてゐるからいゝわ。

青海。だがお前が空想してゐる程、俺の畫は賣れないから安心さ。その方が俺も氣がらくだ。畫もおちついてかける。だが一寸は金持になつてもわるくはないな。そしたらお前はどうする。

敏子。私は別に考へてはゐないわ。美しい着物も着たくないし、立派な家にも住みたくないわ。矢張り私は貧乏性に生れてゐるのね。お兄さんは。

青海。俺も貧乏性に生れてゐる。金なんかもてあます方だよ。それぢや一寸俺は寫生に行つてくるよ。赤石がいつくるか、わからないからね。

敏子。もういらつしやるでしやう。

青海。あいつの處はお客が多いから、あてにはならない。例の所でかいてゐるから來たら知らせてくれ。

敏子。えゝ。

青海。それなら行つてくるよ。

敏子。行つていらつしやい。

（二人退場。まもなく敏子登場。室をかたづける。誰か來た樣子。敏子退場。赤石まもなく歸つてくる）

敏子。兄はたつた今まで待つてゐましたが。

赤石。さうですか。一寸仕事をしくぢつたので、ものになる望が持てるやうになつてから來やうと思つて、つひおそくなりました。

敏子。うまくゆきまして。

赤石。だめです。僕はもう創作は駄目です。かき損ひばかりしました。もうかきすぎて何をかいても、一ぺんかいたものとくつくので氣がさしてかけません。一寸でも氣がさすともう本氣にはなれませんからね。職業がへでもしたいと思つてゐるのですよ。そして五六年もあそんだら、又かきたいものが頭に浮んでくるかと思ふのです。しかしすて切るわけにもゆかないので、机にかぢりついてゐましたが、ます／＼頭が亂れる許りです。人相見の奴の云ふことも嘘許りではありません。

敏子。人相見の人は何と云つたのです。

赤石。人相見は、私が四十一で、仕事上の大難關にぶつかる。それがこせればいゝが、中々むづかしいと云ひました。そしてあまりつかれないやうにしろと云ひました。私は人相見の云ふことなんか信じてはゐなかつたのですが、今になつてそれは本當だと思はないわけにはゆきません。しかしまだ絶望はしてはゐませんがね。こんな苦しみをする位ゐなら牢屋のなかにでもゐて、靜かにマッチのペーパーでもはつてゐる方がまだましのやうな氣がします。

敏子。そんな弱いことを云ふものぢやありません。

赤石。自分の仕事のことをすつかり忘れてしまつて一日でもぼんやりしたいと思ひますよ。仕事がうまくゆく時だつて

精も根もつきはてますが、仕事がまづくいつて、しどろもどろになる時は、ついやけつぱらになりたいのですが、やけつぱらにはなれない位置にゐるのですから、自分で自分をおさへつけて又仕事にかゝるより仕方がないのですから。時々泣きたくもなりますが、誰にだつてこの氣持はわからないのですからね。一人でぢつと耐えて、又机にしがみつくより仕方がないのです。今日なんかも仕事がうまくゆくためには土呂の上に坐つておぢぎして祈つてもいゝやうな氣持がしました。昔の人が身を清めて神を祈つて仕事をした氣持がよくわかりますが、その信仰のない僕には、とぼ／＼とこわ／＼机に向つて見るより仕方がないのです。こんなことが云へるのはあなた許りですがね。他の人にははづかしくつて云へないことです。

敏子。仕事の御手つだひが出來ればね。

赤石。その内にはどうにかなると思ひますがね。今迄だつてこんな氣持はよく味はつたのですが、今度はそれが半年位ゐつゞいてゐるのですからやり切れません。仕事さへ出來れば萬事よくゆくのですが、しかしやつと一つ仕事がすむと、又すぐあとに又一つの仕事がひかへてゐて、一生この不安な仕事からぬけ出ることが出來ないことを考へると、元氣な時はよろしいが、元氣のない時はがつかりします。しかしこの道を撰んだ以上ゆく所まではゆきますがね。まづい仕事をそのまゝ發表しなければならない時の、氣の滅入り方は、角力取りが本場所で負けたよりも、なほ氣が滅入ると思ひます。何しろ、永遠の勝負に負けることになるのですからね。

敏子。……

赤石。だが仕方がありません。實力のないものが、力のあるやうな顏をしてゐるのですから、そして出來もしない仕事の約束をして原稿料の前がりを出來るだけしてゐるのですからね。しかしこんな話はよしましよう。僕はあなたと

からこんなことを云つて見るのです。他の人にこんなことを聞かして御らんなさい、鬼の首でもとつたやうに赤石つひにくたばると云つて祝盃をあげないまでもいゝ氣味に思ふでせうからね。さう思はせておいて、高みで、あはゝゝと笑ふことが出來ないのが、癪にさはります。しかし力がないのですから仕方がありません。

敏子。何とかいゝ方法はないものですかね。

赤石。しかしその内には何とかなるでせう。井戸掘が、井戸を掘つても、掘つても水が出ないので、水はもう出まいとあきらめながら、それでもまだあきらめ切れず、掘つてゆく氣持に似た氣持で、毎日机に向つてゐるのです。今日は水が出てくるだらう。明日は水が出て來てくれるだらう。この一ほりで水がこん〳〵とわき出してくるかも知れない。さう云ふ氣持で、つかれ切り、いら〳〵しながらもなほあきらめ兼ねて、井戸をほつてゐるやうなものです。しかし井戸は自分の內にあるのですから、內の力がしなびたらそれまでです。しかしまだくたばり切りもしないとは思ふのですが、

敏子。もう仕事のことはお忘れになるといゝのですよ。

赤石。それがすつかり忘れられゝばいゝのです。しかしさうもゆきませんからね。

敏子。へたな琴でもひいて上げませうかね。

赤石。どうぞ。

（敏子琴をもつて來てひき出す。赤石それをきゝながら居眠る。敏子それに氣がつきなほ靜かにひく。岡島登場）

岡島。おゝ之は失禮。

敏子。靜かに、赤石さんがねてゐますから。（琴をやめる）

岡島。先生は。

敏子。寫生に行つてゐます。

岡島。どうも本當に失禮いたしました。お二人とは思ひませんので。

敏子。なにを云つてゐるのです。

岡島。どうか琴をひいてゐて下さい。琴の音のもれると云ふのはいやに感じのあるものですね。

敏子。もうひかないでもいゝのです。赤石さんを眠らせるためにひいたのですから。

岡島。うまいものですね。人をねかしたり起したり自由に出來ますか。

敏子。下手だからねるのですよ。起すのはわけないわ。がちやんとやればいゝのですから。

岡島。せつかくの所ですから、今日は失禮します

敏子。あなたはへんなことを云ふのね。

岡島。かくしても駄目です。

敏子。なにが駄目なの。

岡島。とぼけても駄目ですよ。

敏子。何がだめなの。

岡島。あなたと赤石さんのことはもう、有名ですよ。

敏子。何が有名なの。

岡島。赤石は前科者ですからね。

敏子。赤石さん牢屋へ入つたことがあるの。通りでさつき牢屋の話をしてゐたわ。
岡島。あなたは今日はとぼけるのが上手ですね。赤石はこの前は女優と家をとび出したことがあるのですよ。
敏子。その話なら知つてゐるわ。それでつかまつたの。
岡島。それはすぐつかまつたでせう。だが半年も一緒にゐましたからね。女優に逃げられてすご〳〵家へ歸つて來たまで。
敏子。それでどうして前科者と云ふの。
岡島。とぼけることが上手ですね。女にかけては前科者だと云ふのです。
敏子。それがどうしたの。
岡島。だからあなたも用心しないと新聞に出されると云ふのです。
敏子。新聞に、どうして。
岡島。赤石さんとあやしいつて。
敏子。なんだと思つたら、そんな話、馬鹿々々しいわ。
岡島。それでもあなたも後家さんですから、新聞ではよろこんでかきますよ。
敏子。それだつて、それはお氣の毒ながらだめですよ。
岡島。何が駄目です。
敏子。だつて二人ともお互にちつとも愛してはゐないのですからね。
岡島。だが、世間では信じますよ。

敏子。それだつて、いくら評判だつて、二人が友達になつたと申したつて仕方がないでせう。

岡島。あなたが新聞に出て困らないなら、よろしいが、困るのなら赤石さんと二人だけで逢ふのはよしたがよろしい。

敏子。餘計なお世話よ。私はあなたとだつて二人切りで逢つたこともあるし、山中さんや、中岡さんとは二人切りの時が、今迄に何度だつてあつたわ。

岡島。私達は有名ぢやありませねからね。それに私達のためにあなたは一度だつて琴をひいてねむらしてくれたことがありますか證據歷然と云ふものですね。

敏子。あなたがどう思はふとそれは勝手ですがね。事實はどうにもなりませんから新聞記事にはなりませんよ。

岡島。新聞によつては大丈夫なりますよ。

敏子。なつたつて噓ですからかまひません。尤も本當だつたつてかまひませんがね。私達は愛し合つてゐないことは自慢にもしてゐませんが。だが岡島さん、あなたは卑怯ですよ。そんなおどしで二人の友情をきづつけやうとするのは。

岡島。友情？男と女の間に本當の友情はなりたゝないと赤石は何かにかいてゐました。

敏子。赤石さんが何とかいても、事實は事實ですからね。私は赤石さんを尊敬してゐるのは事實です。赤石さんが疲れてゐるのをなほして上げたい。そして赤石さんの仕事がよくゆくやうにしたいと思ふのは事實です。しかしそれだけです。その他の感情は少しももつてゐません。私はほめられてもいゝと思つてゐるのです。赤石さんの仕事は何と云つたつて日本の誇りになる仕事ですからね。その仕事を手つだうことが出來れば、ほめてもらつていゝと思つてゐま

すよ。少しも耻かしいとは思つてゐないのですよ。

岡島。赤石はそんな値打のある男ぢやありませんよ。あの男は一種の誇大妄想狂にすぎません。あいつは自分を天才だと思つて得意になつてゐますが、あいつのこの頃かくものゝ貧弱さはどうです。疲れたロバにすぎません。あなたの利口にも似合ないことです。赤石を買ひかぶつても、信用し切つてもひどい目にあひます。あのつかれ切つた、よだれをながして、ゐる顔を見ても、あなたはなほ赤石を信じるのですか。

敏子。赤石さんは氣の毒な方です。

岡島。何が氣の毒なものですか。あの男がくたばつたつて、氣の毒に思ふものはありません。何しろ質がよくないのですから。

敏子。それだつて、大勢の人のために働いてゐらつしやるのです。

岡島。それは彼の自惚れの強い、野心のさせることです。彼はあなたの同情にすがるやうなことを云ふなら、それは彼の野心を滿すために嘘を云つてゐるにすぎません。僕は赤石をよく知つてゐる男を知つてゐます。その男は赤石は世間の人が思ふより、ずつとわる賢い男だと云つてゐます。

敏子。あのよだれを出してゐる猿顔がわる賢い顔ですか。

岡島。あなたは今にひどい目にあひますよ。あの男は女と二人切りになれば、必ずわるいことをする男です。

敏子。それは嘘よ。女と二人切りの時のことをあなたはどうして知つてゐるのです。私の方がよく知つてゐます。勿論それは女の人にもよるでせうが、私は二人切りの時が三度ありましたが、あの人はたゞの一度も厭しいそぶりはありませんでした。

岡島。それは大きな野心をかくしてゐるのです。

敏子。大きな野心。

岡島。あなたを骨の髓までしやぶらうと思つてゐるからです。

敏子。あなたにどうしてそんなことがわかるの。赤石さんが、本當にそんな方なら、私、しやぶらして上げてもいゝわ。だが赤石さんはそんな人ぢやありません。

岡島。あなたは救はれない程、もう深か入りしてゐるのですね。

敏子。私の本當ことを知つてゐるのは、神様だけよ。

岡島。神様なんかゐませんよ。

敏子。それなら知つてゐるのは私だけよ。

岡島。あなたゞけでは通用しません。

敏子。通用しないでも仕方がありません。

岡島。あなたは赤石を愛してゐないとさつき云ひましたね。

敏子。戀してゐないと云ふ意味よ。

岡島。それで深か入りしてゐるのですか。

敏子。岡島さん。深か入りとはなんですか。

岡島。わかりさうなものですね。

敏子。深か入りと云へば大概、肉の關係があると云ふことでせう。

岡島。まあ、さうです。

敏子。「まあ、——」ですか。

岡島。あなたと赤石と肉の關係はないのでせう。

敏子。そんなことを聞いてどうするの。

岡島。あるのですね。

敏子。云はなくつたつてわかつてゐるはづです。

岡島。あるのですね。

敏子。あなたは馬鹿ね。

岡島。勿論、僕は馬鹿です。

敏子。赤石さんと私とは友達だけの話よ。お氣の毒ですが、新聞記事にはなりません。

岡島。世間はうるさいですからな。

敏子。赤石さんとつきあはない方がいゝと云ふのですか。

岡島。あなたが世間の評判を氣になさるならね。そして赤石の名譽を重じなさるならね。

敏子。友達づきあひがわるいことはないぢやありませんか。

岡島。日本ではまだ男女の交際を色目がねで見ますからね。殊に相手が前科者の赤石ではね。

敏子。私は世間の評判は氣にしませんよ。

岡島。赤石にとつては、今度こそ致命傷になるでせう。

敏子。私とつきあふからですか。

岡島。あなたが赤石をほめすぎるからです。

敏子。私は赤石さんの魂へかけてゐる心臓をあたゝめて上げるだけです。

岡島。それですみますか。男女の間と云ふものは落ちつくさきはわかつてゐますよ。

敏子。もつと小さい聲でね。

岡島。大丈夫ですよ。イビキをかいてゐますからね。よくねてゐますね。死人のやうに。

敏子。睡眠不足がつゞいてゐるのでせう。

岡島。どうですかね。だがあなたは赤石の近頃の評判を知つてゐますか。

敏子。どんな。

岡島。赤石は時代おくれの三流所の作家だと云ふことが定評になつてゐるのです。赤石がくたばることは、日本の文壇にとつて少しも損失ちやないのです。むしろ日本の文壇のためにいゝのです。そして赤石のものが世界的のものだとか日本の名譽だなぞと云ふ考は五年前からすたれてゐます。それも弟子達にそんな噂をたてさしたにすぎないのです。そしてそんな噂がたつたために、あいつの名譽心は誇大されて、ついに見ちめなくたばり方をしたのです。赤石のくたばつたのは自業自得です。今でも餘命をつないでゐるのは、赤石が賣名術がうまいからにすぎないのです。しかし世間には具眼者がゐますから、とうく赤石は日本の三流作家以上ではないと云ふ定評が出來たのです。先生は靈の方はわかるでせうが、文學はわからない。

敏子。岡島さん、あなたの云ふことは本當かも知れません。しかし私は赤石さんの淋しい魂にふれたのです。それで私

の今後の仕事はきまつたのです。一つの淋しい孤獨な魂をあたゝめると云ふことは最も女らしい仕事です。赤石さんの内には珍らしく美しい魂があるのです。それが孤獨に泣いてゐます。

岡島。あなたはローマンチストですね。淋しい魂、美しい魂、美しい言葉ですね。しかし用心おしなさい。自分の空想にだまされて現實を見ないとひどい目にあひますよ赤石にそんな魂があると思ふのはあなただけです

敏子。私だけで結構よ。私は兄の仕事をたすけて來ました。今度は赤石さんを助けてあげる番です。

岡島。赤石はあなたに助けられなければだめな人間なのですか。

敏子。私の助けが、今赤石さんには必要なのです。

岡島。僕はあなたをそんな空想家とは思つてゐませんでしたよ。そんなお目出たい。

敏子。何とでもお云ひなさい。私の決心は動かないのですから。

岡島。それなら新聞に出しますよ。

敏子。何をです。

岡島。赤石が美しい後家さんをだましたと云つてね。

敏子。そんな馬鹿なことはおよしなさい。

岡島。それなら赤石なんかの肩をもつのはおやめなさい。あいつは淋しい魂なんか持つてゐません。又もうくさつた木です。いくら春の光があたつても芽の出やうのないくさつた木です。

敏子。新聞には出すのはやめて下さい

岡島。あなたが僕の忠告を入れなければ出します。

敏子。あなたの患者とに

岡島。赤石と交際をやめるのです。

敏子。そんなことは出來ない話ぢやありませんか。

岡島。それなら新聞に出しますよ。

敏子。そんな嘘なことを。

岡島。嘘だと云ふ證據がありますか。

敏子。本當だと云ふ證據があるのですか。

岡島。疑ひを入れる餘地はいくらでもあります。

敏子。赤石さんが來て下さつたので、兄も助かつてゐるのです。

岡島。だからあなたは赤石に媚びるのですか。

敏子。あなたはなんと云ふいやしい考へ方をするのでせう。

岡島。本當のことにふれたゞけですよ。

敏子。もうあなたと口はきゝません。

岡島。結構です。赤石を社會的に葬つて見せます。

敏子。そんなことはいけません。それは卑怯です。

岡島。なぜそんなに赤石のことになるとムキになるのです。

敏子。あの方は氣の毒な方です。

岡島。何が氣の毒です。妻子もあり、世間から買ひかぶられすぎてゐて。

敏子。あの人はつかれてゐるのです。私達の助けが必要なのです。

岡島。力もないくせに世間から買ひかぶられたのが、赤石のつかれた元凶です。自業自得です。世間には赤石より不幸な人がいくらゐるかわかりません。

敏子。あなたには孤獨の魂と云ふものがわからないのです。

岡島。そんなものはわかりませんよ。また赤石に孤獨の魂があるのなら、世界中に孤獨の魂を持たない男がありますか。

敏子。ともかく新聞にそんな馬鹿々々しいことはかゝないで下さい。

岡島。新聞に出るのが怖いのですか。赤石の孤獨の魂をあたゝめる後家さん。新聞のいゝ記事になりますよ。

敏子。そんな馬鹿なことを出すものぢやありません。

岡島。ともかく僕は失禮しますよ。よく考へておきなさい。新聞に出されるのがいやなら、僕の云ふことはきかなければいけません。

敏子。あなたの云ふことは斷じて聞きません。あなたは惡黨ですね。かきたければ勝手におかきなさい。

岡島。明日の朝の新聞にはね。怒つたのですか。

敏子。出てしまつたら私はもう怖いものなしですからね。あなたとは絶交しますよ、出すなら出して御らんなさい。あなた方、全部とは絶交するだけです。出すまでは私の方によは味がありますがね。出してしまへば私の方に强味がありますよ。私は赤石さんとは何處までも淸くつきあふつもりですがね。新聞に出たら私はもう赤石さんと地獄にでも

ゆくかも知れませんよ。

岡島。女らしい脅迫の仕方ですね。

敏子。新聞に出して下さい。明日ね。その方が思ひ切りがいゝわ。

岡島。さうですか。

敏子。歸つて下さい。女が決心すればどんなに強いか見せて上げますよ。

岡島。後悔なさらないでせうね。さよなら。又來ますよ。

敏子。新聞に出さなければ來てもいゝわ。

岡島。どつちですかね。だがまあ出さないことにしてあげますよ。

敏子。どつちだつていゝわ。

岡島。本當にどつちでもいゝのですか。

敏子。どうでも御勝手に。

岡島。さうですか。それでは勝手にさしてもらひませう。一寸の蟲にも五分の魂はありますからね。

敏子。それは私の方で云ふことですよ。さよなら。

（岡島、敏子退場。敏子歸つて來、氣をおちつけ、靜かに琴をならす。靑海登場）

敏子。お歸りなさい。

靑海。今ね。岡島に逢つたら、赤石君が來てゐると云ふので歸つて來た。

敏子。さうを。あんまりよくねてゐらつしやるのでね。少しでもねさしておく方がいゝと思ひましして、お知らせしませ

んでした。

青海。それはよかつた。よくねむらしておく方がいゝ。

敏子。お兄さん。赤石さんを、本當にどうにかして助けて上げたいと思ふわ。私赤石さんにすつかり同情しましたの。

青海。だが赤石君がお前を戀したらどうする。

敏子。私、ちつとも困らないわ。一緒に地獄でもゆきますわ。

青海。之はおどろいたね。だが悲劇の種をまいてはいけないよ。人生にとつて平和程いゝものはないのだからね。赤石を愛すなら靜かに愛しておやり。

敏子。えゝ出來るだけ私、さうしますわ。ですが一寸心配なことがあるの。

青海。何んだ心配のことつて。

敏子。大がい大丈夫と思ふのですがね。岡島が私達のことを新聞に出すと脅迫したの。

青海。新聞に出されて困ることがあるのかい。

敏子。事實にはないのですがね。噓をかけば切りがありませんからね。

青海。まさか、噓もかくまい。

敏子。岡島ぢやあてになりませんよ。あんなに人のいゝ倉島さんでさへかゝれたのですからね。かきやうによればどうにでもかけるわ。私がまた腹が立つたので、少し餘計なことを云つたのでね。

青海。何と云つたのだ。

敏子。私は赤石さんの孤獨な魂をあたゝめるだけだと云ふやうなことを云つたのです。すると赤石の魂をあたゝめる若

い蓬宋さんと逢ふことが出來ると面白いと云つてゐました。

青海。何のためにそんなことをおくのだ。

敏子。私と赤石さんとを絶交させたいらしいのです。そして赤石さんを世間的に葬つて仕舞ふと云つてゐました。

青海。そんなことで心配することはない。人間一匹がそんなことで葬られるものか。だがおどしにすぎないだらう。

敏子。私もさう思つてゐるのです。ですからあんまり心配はしてゐないのですがね。(青海の赤石を見てゐるのに氣がつき) 赤石さんをお起ししませうか。

青海。もう少しねかしておいたらいゝだらう。少しでもながくねかしておく方がいゝ。だが赤石は隨分顔色がわるいね。光線の具合かね。お前の手をあすこにやつて御らん。お前の手は何ともないね。矢張り光線の具合ぢやないね。耳の色もよくないな。赤石はもしかしたら病氣かも知れないね。たゞのつかれではないかも知れない。

敏子。もし病氣だつたら大變ですね。

青海。今赤石に大病になられては俺も困る。せつかく知己が出來てよろこんでゐるのだからね。

敏子。大丈夫ですわ。まさか死にもなさりませんから。

青海。だがお母さんがいつか云つてゐたよ。耳の色がわるいときつと死ぬつて、どうも赤石の耳の色はよくない。

敏子。そんなにおどかしてはいやですわ。

青海。日本と云ふ所は少しましな人間はどん〱死んでゆく處だからね。

敏子。そんなこともないわ。

青海。殊に文士でいゝ人は不思議に早く死んでゐる。

緋子。死ぬから評判になるのでせう。日本人は死んだ人を尊敬して、生てゐる人を輕蔑する國ね。

青海。さうぢやない、生きてゐる間はさんぐ\悪口を云ふ、一種嫉妬でね。そして殺してしまうと、ほめないのを恥と心得る國民だよ。

緋子。日本人だつてそんな人許りでもないでせう。

青海。それはさうだらうが、全體の空氣がさう出來てゐるのだよ。赤石だつてもう少し國民が大事にしてやれば、こんなにまで疲れはしなかつたらう。日本人は人物が少ないから、少しでもとり柄のある人間があると、その人の力を心のずゐまでもしぼりとらないと我慢が出來ないのだ。あんまりせつかちにしぼりとりすぎる。だが俺はしぼりとらしはしないがね。何しろ赤石は早く醫者に見せる方がいゝね。手おくれになると厄介だからね。

緋子。赤石さんもこの上病氣しちやお氣の毒ね。

青海。人間て、見やうによれば氣の毒なものさ。よく生てゐると思ふことがあるね。何が面白くつて生てるかつてね。

緋子。だけど私、死にたくないわ。

青海。あたりまいだよ。人間が死にたくつくられてゐたら人類はとつくに極樂往生をしてゐる。そして俺達は生れないでもよかつたらう。

緋子。生れない方がよかつたの。

青海。同じことだね。生れたつてどうせ大したことはない。どんな不幸が來ても、やがてすぎてゆくにちがひない。

緋子。だけど私、どうしたつて、赤石さんを死なしたくないわ。

青海。俺だつてさうだよ。

[illegible]

青海。お前は中々夢想家だね。

敏子。それだつて、赤石さんは本當に淋しさうなのですもの。

青海。もうぢき目がさめるだらう。赤石のことは話さないがいゝ。

敏子。人生ていろ〳〵のことが起るものね。

青海。生きると云ふことは、がんばり通すことだね。

敏子。私はさうと許りは思ひませんわ。

（赤石目をさます）

赤石。あゝゝゝ。隨分よくねた。

青海。目がさめたかね。

赤石。君はいつ歸つて來た。

青海。一寸前に歸つて來た。

赤石。さうか、ちつとも知らなかつた。よくねた。御かげですつかり元氣になつた。顏をあらう處は何處かね。

敏子。御案內しませう。

赤石。ありがたう。

（敏子、赤石退場、敏子登場）

敏子。赤石さんも目がさめたら血色が少しはよくなりましたね。

青海。そうかね。

敏子。私大したことはないと思ひますわ。

青海。ともかく醫者に見せる方がいゝね。

敏子。何んだか心配ですわ。

（赤石登場）

赤石。さてさつぱりした。僕のかいた畫を見せ給へ。

青海。まだ、だめだよ。（見せる）

赤石。いや隨分いゝものになりさうだね。僕の心持がよく出てゐるね。いや、僕の元氣のない所がおそろしくよく出てゐることかも知れないが。

青海。僕は何處か專門でもわるいのではないかね。

赤石。さうかも知れない。少しつかれすぎる[illegible]して[illegible]。

青海。醫者に見てもらふといゝね。

赤石。二三日、見てもらはう。

青海。早い方がいゝね。

赤石。なんだか僕にさう云はれると病人になつたやうな氣がするよ。（淋しく笑ひながら）[illegible]しないよ。[illegible]ね。

赤石。[illegible]おかしい話さ。だが僕の本當の値打は君も云つたやうに、之から出ると云ふことを僕は信じてゐるよ。畫をやらないのだ。

青海。やるよ。だがその前に、この近所の醫者に身體を見てもらつたらどうだ。わりにうまいのがゐるのだ。

赤石。そんなに急ぐ必要はあるまい。

青海。僕は早い方がいゝと思ふね。疲れすぎるといろ〳〵の病氣が頭をもたげるからね。

赤石。なんだかそう云はれると、自分でも少し病人のやうな氣がして來る。

敏子。氣になさらない方がいゝわ。

青海。敏ちやん。安竹さんの處へ案內しておあげ。

敏子。はい。それでは兄があんなに云ひますから。お伴いたしませう。

赤石。さうですか。僕はなんでもないと思ひますがね。

敏子。なんでもなければなほいゝぢやありませんか。

赤石。それでは一寸失敬して行つてくる。

青海。歸りに是非より玉へ。

赤石。よるよ。

(三人退場)

幕。

第三幕

（ある海岸の宿屋の別莊）

（赤石一人日向ぼつこして何か考へてゐる。庭から女中手紙をもつてくる）

女中。お手紙が參りました。

赤石。ありがたう。

（女中手紙ハガキ五六通渡し退場。）

（赤石一つのハガキを見、淋しき嘲笑をうかべる。他のハガキを見る。最後に手紙を見る。嬉しさうに涙ぐみ、何度もよみなほし、手紙を二三度頭に戴き祈る。間を一寸おいて女中登場）

女中。山田さんがお見へになりました。

赤石。さうか。

（山田登場）

山田。しばらく。

赤石。よく來てくれた。

山田。君の手紙を見たら急に來たくなつてね。

赤石。それはありがたう。君の處は皆さんお丈夫か。

山田。ありがたう皆丈夫にしてゐる。
赤石。男の子が生れたつて。
山田。あゝ、生れた。
赤石。それはよかつた。
山田。君の身體はどうだ。
赤石。大したことはない。
山田。無理はしない方がいゝね。
赤石。無理はしない。病氣だとわかつたら反つて決心がついて、怠けられるのでいゝ。それに皆もよくしてくれ、僕は反つて病氣と云ふことがわかつてから、おちつき、幸福にしてゐる。一時は參つたがね。どうなるかと思つたがね。
山田。さうか。君の手紙を久しぶりに見て、うれしく思つた。矢張君だと思つた。
赤石。僕も君の手紙を見た時、本當にうれしかつたよ。お互にいそがしくなつて、ハガキ一つやりとりしなかつたので、どうしてゐるかと思つてゐた。
山田。本當にハガキ一つ思ふやうにかけないね。新聞が馬鹿なことをかいたので、腹が立つたが、君の手紙を見て、すつかりうれしくなつた。
赤石。よく遠い所を來てくれたね。君が近くにゐてくれたら、僕は病氣にならなかつたかと、君の手紙を見た時さう思つたよ。僕はへんに淋しかつたのだよ。今思へば、その時から少しづゝ肺がやられてゐたのだね。

山田。お互に少し急がしすぎるのはよくない。

赤石。しかし君の元氣なのにはおどろくよ。君の今度の仕事には隨分感心した。

山田。駄目だよ。

赤石。僕も反つておちついたから、之から短かいものでも、氣らくにかゝらうかと思つてゐる。詩のやうなものをちよいちよいかいてゐる。

山田。さうか。君は中々元氣だね。

赤石。だが僕はなが生きをしさうな氣もしないよ。

山田。そんな弱いことを云ふものぢやないよ。

赤石。正直に云ふとさうさ。だが一方、さうもろくは死ぬとは思つてはゐないがね。

山田。僕はこの頃肺病と云ふものはたすかるものにきめてゐるので、安心してゐる。

赤石。しかしさうともいかないよ。肺病にもよるがね。しかし僕は生きられるだけ生きればいゝと思つてゐる。わるくつても仕方がないがね。

山田。君のお子さんはどうしてゐる。

赤石。東京にゐる。學校があるからね。それに病氣が病氣だから、あまり來ないやうにさせてゐる。

山田。皆、お丈夫かい。

赤石。丈夫にしてゐる。今も總領から手紙が來て、皆元氣にしてゐると云つて來た。あんなことが新聞に出たので、氣にしてゐたが、妻や子供のけなげな態度には僕は泣きたくなる程感心してゐる。

山田。しかし新聞は少しひどいね。

赤石。しかしかゝれて反つて僕は決心がつよくなれた。僕は實際病氣になる前は、傲慢になつてゐた。何にもかも、自分がやらなければならないやうに思ひ、又世間總がゝりで自分をやつけやうとしてゐるやうな、へんな考方をもつてゐた。だから罰を受けても仕方がないと思つてゐる。今度のことだつて、僕は孤獨だなぞと云ふ自惚れ根性がよくなかつたと思つてゐる。出來事は實になんでもないのだが、何んでもない處から攻撃されるのは、何處か僕の態度によくない處があつたのだと思ふね。實際心のなかに入ると、自分ながら蟲のいゝ處があつた。だが病氣とわかつて、すつかり蟲のいゝ處がなくなつたら、いろ／＼のことが今更にわかつて、僕は今更に友人の恩や、妻子の恩を感じて、心の底から感謝することを知つた。身の程を知ると云ふことは必要なことを知つた。かうしてゐても、身の程を知ると、實に平和だよ。

山田。君はこの二三年隨分仕事をしたね。

赤石。耻かしい仕事許りさ。臆面もなく、金さへとれゝばいゝと思つてね。そしていつまでも生きられるつもりでゐたから、名聲なんかドブのなかに何度たゝきこんでもすぐひろひ出せるものと思つてゐたよ。まあ心のこりと云へば、見ともないものをかきすぎたと云ふことだ。しかし今更、耻かしがつても仕方がない。仕方がなくつても耻かしいことは耻かしいが、考へないことにしてゐる。

山田。そんなことはない。耻かしがることはない。

赤石。しかし僕はもつと立派な仕事の出來る男だから惜しい。しかしわかる人にはわかると思ふがね。すんだことはすんだことだ。之から生てゐる間に、何か立派な仕事をして見るつもりだ。幸ひ頭をやられる病氣ぢやなかつたから。

何か僕にふさわしいものをかくつもりでゐる。それも野心も名聲心もなく、氣らくにやるつもりだ

山田。それはいゝね。

赤石。まあ、死ぬまでは僕も立派な生活をするつもりで今はゐるよ。あてにはならないが。さつきハガキが來て、新聞の記事を見て隨分腹を立てゝ、首でもくゝつて早く死ね。貴樣見たやうな恥知らず。と云ふやうなことがかいてあつたよ。しかし首はくゝらないだつて、人間は早く死ぬものにきまつてゐる。

山田。馬鹿な奴だね。その男は恥を知つてゐるのかね。

赤石。僕は今度のことでおこられるのは少しわりがわるい、何しろ敏子さんとは話をしたゞけだからね。接吻一つしなかつたのだからね。だが他の女の人とのことを考へると、僕は攻撃されても仕方がない。だが僕はそれ等にたいしても、少しも後悔はしてゐないし、恥てもゐない。そしてさう云ふ女の人にたいして、僕は實に感謝してゐる。女の人も僕を憎んではゐまい。僕は性慾と云ふものにたいしては、隨分世間の人はまちがつた考をもつてゐると思ふ。すぐキタナイ、すぐ罪だと思ふのは、少し思慮がたりないね。だが世間の道徳と云ふものは、暴君の氣まぐれ見たやうなものだから不服を云つたり、忠言したりしたら、ます〱怒られてお手打になるより仕方がないがね。まあ、お手打にならないのを仕合せと思つてゐる。しかし氣の毒なのは敏子さんだよ。世間的に云つたつて、何に一つわるいことはしてゐない。たゞ僕が聞かせないでもいゝ泣きごとを一すきかせたので、僕に同情したゞけなのだ。今考へても、泣きごとを云つたことはぞつとする。馬鹿なことを云つたものさ。臆面なく。自分の馬鹿が腹が立つ。沈默してゐればよかつたのだ。今の人間には正直すぎることはいゝと許りは云へない。

（女中登場）

女中。かう云ふ方がお見へになりました。

（女中名刺をわたす）

赤石。お通し下さい。

女中。はい。（退場）

山田。誰だ。

赤石。雜誌記者だよ。

山田。さうか。

（雜誌記者女中に案內されてくる）

赤石。どうか。

雜誌記者。失禮いたします。

（女中座蒲團を出し、退場）

赤石。どうか敷きたまへ、そして足をらくにしたまい。

雜誌記者。はい。結構です。實は失禮なことですが。今度のことでお話がおきゝしたいのですが。

赤石。なんでもきいて下さい。御返事出來ることならしますから。

雜誌記者。それでは失禮ですが、無遠慮におきゝします。

赤石。答へる氣がするだけお答へします。

雜誌記者。新聞に出てゐるのは何處まで本當で何處から噓なのですか。

赤石。さうですね。僕が肖像をかいてもらひに毎日青海君の處へ出かけたと云ふのは本當です。しかし青海君の畫に感心したふりして急がしい最中出かけたと云ふのは嘘です。たしかにモデルになるのは疲れるわけですが、青海君のモデルになるのは樂です。それに僕は夜中か、午前に仕事をするので、午後仕事をすることは滅多にないのです。青海君に肖像をかいてもらはないでも午後はのらくらしてゐます。

雜誌記者。青海さんの畫はどうなのですか。

赤石。青海君の畫には僕は感心し切つてゐます。感心したふりして出かけるとは、少し卑劣な考へです。こゝに青海君の畫を持つて來ましたから、お目にかけませう。

(赤石隣りから畫をもつてくる)

赤石。どうです、この畫が下手ですか。山田君どう思ふ。

山田。本當に立派なものだ。大したものだね。君が感心するのはあたりまいだ。僕でも感心する。

記者。あなたは山田さんですか。

山田。さうです。

記者。失禮しました。僕はかう云ふものです。

山田。さうですか。

赤石。僕が青海君が寫生してゐるのを見て、一目で惚れ込んだのは無理はないだらう。そして青海君が肖像がかきたいと申し込んだ時、僕がよろこんで承知したのは當然なことだらう。

山田。それは當然すぎることだ。

赤石。僕はその時、既に敏子さんのことを知つてゐたと新聞にはかいてゐたやうですがね。

記者。かいてありました。

赤石。それも嘘です。賤しい想像です。しかし敏子さんに逢つて、最初からいゝ感じをうけたことは事實です。僕が一種のよろこびをもつて青海君の處へ行つたと云ふことは、本當だと思ひます。しかし敏子さんに野心があつたと云ふのは嘘です。絶對になかつたとは云へないかも知れませんが、意識してそんな氣はもちません、そんな氣を持たせないだけのおちつきを敏子さんは持つてゐました。僕は妻以外の女に絶對に野心を持たないと云ひ切れる男ではありませんが。敏子さんには持つ氣になれなかつたのです。それは一つは青海君を尊敬してゐるからかも知れません。

記者。私はあなたのおつしやることを信じますが、しかしそれならなぜ新聞にあんな記事が出たのでせう。

赤石。僕には正直な處わからないのです。中傷かとさへ思ふのですが、しかし僕の態度にもよくない處があつたのかも知れません。僕は敏子さんと話してゐる内に、すつかり敏子さんを信用してしまひ、この人なら自分の友達になつてもらへると思つたのです。私は男の友達は澤山もつてゐます。その中には隨分いゝ友達をもつてゐます。しかし女の友達はもつてゐないのです。又もつ資格も自分にまだ出來てゐなかつた。私はその機會を二三度與へられましたが、私はそれを本當に生かすことが出來ませんでした。

記者。どうして出來なかつたのです。

赤石。正直に云ふと、自分の内に性的興味が生れて來たのです。それが女との交際の邪魔をしたのです。こだわりをつくつたのです。一度ある女優と深か入りしすぎてしくぢつたことはあなたも御存知でせう。あの時も深か入りさへしなければ、きもちのいゝ交はりがつゞいたかと思ふのです。しかし自然と云ふものは、中途半途を嫌ふもので、すゝ

だけ拘束さうとするものです。だからお互の情熱を失はない程度でとめておかないと、今度は結婚とか、恋愛とかいふものに生れて来て、友達ではすまなくなりやすいものなのです。

記者。さうですか。

秋石。あなたはさうは思ひませんか。

記者。私にはわかりません。これは敏子さんの場合は友達になれると思つたのですか。

秋石。思つたのです。

記者。それで友達になれたのですか。

秋石。なれたと思つて居ます。なぜかといふと、敏子さんは一生結婚しないで兄さんの仕事をたすけるのを自分の仕事にしてゐます。女の人は結婚してしまふと男の人と友達になることは、夫から許されない場合が多いと思ひます。それには夫の立場からいへば仕方がない。

記者。それならば、夫人の立場からいへば夫が女の友をもつといふことはあまり気持のいゝことではないでせうね。

秋石。それはさう思ひます。

記者。それだのにあなたにも妻子がおありになるのに、女の友をおもちになつたわけですね。

秋石。さうです。問題はその點で止まつてゐれば個人的事にたいして僕は不服はいへないのです。殊に内部で、商売柄の店へ行つて、職業として一生男の人と話をしてもいけない女の人と話をするのはけしからん。さういつてなければいへばなるなら、僕はその人のお才行に服従するだけで、不服はいへないのです。

記者。少したち入つてのお話ですが、あなたは芸術の魂を敏子さんにあたゝめてもらつてゐたといふのは本當ですか。

赤石。いやな言葉ですか、悪だとは云ひません。

記者。それはいゝことでせうか。

赤石。わるいことですか、と僕の方で聞きたい所です。僕は考へとしてはもう少し亂暴な考へをもつてゐるのですがね。

記者。亂暴な考へとは。

赤石。それは今云ひたくありません。まだ時が來てゐませんから、今云ふのは早やすぎます。

記者。雜誌にはかきませんから、私の參考にだけ云つて下さい。

赤石。君もまだ若いから云ふのはよしませう。だが細君をもつ夫が道樂するのを、君はわるいと思ひますか。いゝと思ひますか。

記者。わるいと思ひます。

赤石。それなら君の處で一つ、さう云ふ夫の人身攻撃を公平にあまさず片端から事實を上げて攻撃して御らんなさい。

記者。そんなことは出來ません。

赤石。なぜです。

記者。あまり人數が多すぎますから。

赤石。三千人の女をなぜ切りにすることを自慢にしてゐる紳士。わい談を得意にしてゐる男。社會は決してさう云ふものを社會的に葬らうとはしてゐません。

記者。それは相手が賣りものだからです

赤石。それで細君はよろこんでゐますか。花柳病を細君にうつして泣かす事は、默認していゝのですか。

記者。仕方がないでせう。今の世では。

赤石。男女の間と云ふものは、あまりあらひざらひしないのがいゝのではないですかね。しかし細君を泣かしていゝとは云へないでせう。僕は珍らしい例として非難されるのですがね。僕のした事、よその後家さんと二人で話したと云ふことはかきたてれば問題にもなるでせうが、實際から云へば馬鹿々々しいことぢやないのですか。たゞ絢子さんと話をした。僕の妻はそんなことで不幸にはなりません。だから要するに僕の今度のことを問題にしたのは馬鹿氣たことなのです。しかし僕は不服は云はない。自働車にぶつかつて死ぬ人さへあるのですからね。

記者。話をどうかわき道にもつていつて、ごまかさないで下さい。淋しい魂の話をして下さい。

赤石。淋しい魂。そんな話は、だまつてゐるべきぢやないですか。君は淋しい魂、孤獨の魂の持主ではありませんか。孤獨の魂の持主は、少ないですかね。

記者。さう云はれると困りますが。

赤石。皆なそれをもてあますから、いろ〳〵のことをして見るのではないのですか。酒や煙草。女、名譽、戀愛、仕事、革命、戰爭、藝術、宗教、皆んな孤獨の魂のする仕事ぢやないのですか。直接、間接にね。しかしそんな理窟はやめましよう。僕は特に絢子さんにあつた時は淋しかつた。今でも淋しい。正直に云つて、この淋しさは男の友では滿されない淋しさだ。[illegible]分は滿される。だが何か[illegible]のこる。創作。創作がどん〳〵出來ればいく分か滿される。だが僕はその時淚ぐむ。息ぐるしくなる。身體が疲れてしまふ。僕が道樂者で金がありあまる人間なら、賣りもの丶內に、僕の魂の淋しさを滿してくれる女を求めることが出來たかも知れない。いや僕はそんなものを求めることさへいさぎよくし

なかつた。なぜかと云ふと、孤獨を耐へると云ふことは、藝術をやる男子の使命ですからね。沈黙して孤獨に耐へられないやうな男に何が出來ます。しかし孤獨は孤獨です。淋しい時は淋しい。其處に紡子さんのやうな人があらはれた。溺れるものでも何にもなければ何にもつかまずに成佛するでせう。僕だつて紡子さんのやうな人に逢はなければ、勇ましく成佛出來たかも知れません。見ともない眞似して、孤獨の魂なんか見せびらかさずにすんだでせう。だがつひ甘えたい氣になつたのです。紡子さんにではなく、運命にです。微笑を見せてくれた運命にです。（せきする）

山田。赤石君、もうだまつてゐたまい。もうわかつた。よくわかつた。身體を大事にしなければいけない。

赤石。ありがたう。それぢや、もういゝでせう。

記者。ありがたう御ざいました。何處か身體でもおわるいのですか。

赤石。いえ、ありがたう何處もわるくないのです。仕事をしに新聞記事が出る前からこゝに來てゐるのです。

記者。さうですか。それでは失禮します。

赤石。さうですか。さよなら。

（記者退場）

山田。身體にさはるといけないよ。

赤石。大丈夫だよ。僕は世間の人に今病人とは思はれたくないのだよ。世間の奴の考があまりはつ切りわかるからね。惡口云はれたので參つたのだつてね。僕は實際參りはしない。惡口云はれて參るのは男の耻だからね。幸ひ僕は筆をとる人間だから、後世の人には僕の本音を知らせることが出來る。（間）山田君、僕は君にたのみたいことがある。

山田。なんだ。

赤石。僕は今死ぬとは思はないがね。萬々が一、死んだらね。僕の妻子や、僕を信頼してゐてくれた人達が獨立出來るまで心配してほしいのだ。僕はまだ死ぬ用意はしてゐなかつたので一文のたくわへもないからね。死ねば本が賣れるかと思ふが、あてにはならないからね。

山田。僕は君がさうたやすく死ぬとは思はないよ。僕の方が君より先に死なないとも限らない。人間の生命と云ふ奴はわからないからね。だが僕の方が生きのこつたら、皆と相談していゝやうにするよ。決して心配しなくつていゝと思ふ。君の本だつてうれるにきまつてゐるよ。

赤石。今のやうぢやあてにならない。

山田。なに、世間の攻撃と云ふものはあてにならない。殊に死んだ人は日本人は攻撃はしない。生てゐる人間をほめるのには遠慮しても、死んだ人間にたいしてはほめないことを恥ぢる國民だ。

赤石。當人には聞えないからね。當人を自惚れさす心配もないし、よろこばす心配もないからな。

山田。まあさう云ふわけでもあるまいが。

赤石。しかしさう云ふ所もたしかにあるよ。日本人は、僕は外國のことは知らないが、生きてゐる人間には少し冷酷で、死んだ人間には親切な國民だと思ふよ。しかしこのことはあまり利口ではないと思ふね。それは生きゐる人間を出來るだけ馬車馬的に働かさうとするのは無理のない所もある。出來るだけ鞭をあてる。出來るだけ走らせる。くたばるまで鞭をあてる。そして死がいにして、そして死がいを鞭うつのは恥ると云ふのが日本人のやり方だ。人間がよろこぶなぞと云ふことは贅澤だと思つてゐる。農民の家庭では殊にそれがひどいが、それが一般の考へ方だよ。飯さへ食はして鞭さへあてればいゝと思つてゐる。

山田。さう云ふ事もあることはある。

赤石。僕はね。日本に出來るだけ立派な寶を捧げて死んでゆきたいと思つてゐる人間が、僕の寶一つ一つにキズを與へないでは承知が出來ないやうに、僕の心をひがまさう、ひがまさうとしてゐる。そして僕自身までキズものにして、そして彼等はよろこんでゐる。そして僕が日本に捧げたく思つてゐる寶をそんなものはいらない、いらない。それより早く死んでくれ、さう云つてゐる。しかし何と云はれたつて、どんな目にあはされたつて、日本踏切り出來ない僕は、矢張り出來るだけ立派な寶を日本に捧げてゆきたいのだ。頭をぶたれても、顔にタンをひつかけられても、血をはいても、それでも僕は日本に寶を捧げてゆきたいのだ。僕にも缺點があるかも知れないが、捧げたがつてゐる寶だけは十分美しいものにしてうけとるやうにした方が利口だと僕は思ふね。しかしかう云ふ運命にあふのは勿論僕ばかりぢやない。僕は之れでも仕合せの方だらうがね。僕は日本のために惜しむよ。だがまだ日本では、世界と云つてもいゝ。人間の生命すら輕蔑し、侮辱し切つてゐるのだから、顔にツバひつかけられる位ゐは仕合せと思はなければならないかも知れないがね。

山田。しかし心ある人は君を決して侮辱してはゐないよ。

赤石。どうかね。僕だつて他人のことが、あゝ新聞に出たら笑ふ一人だね。輕蔑する一人だらう。孤獨の魂をもてあまして、賢りものにして後家さんをだまして歩く男。そんな男があれば誰だつて不愉快に思ふね。思はない方が馬鹿だよ。一體日本人は、他人のことを想像する時に、きつと皮肉に見たがる。出來るだけ賤しく見たがる。僕にもその血がある。あまりいゝことゝは思はない。

山田。だがわかる時は、わかるよ。

赤石。それはわかる人にはわかるとしておくより仕方がない。僕はもうすんだことはどうでもいゝ。仕方がない。すんだことをくよ〳〵思ふのは利口ぢやない。だが僕は生てゐる間に何かいゝ仕事をしてゆきたい。それが思ふやうに出來ないのが殘念だ。もう一寸力があればいゝのだがね。せめて五十五六迄でも生られたら、何かいゝ仕事をして見せるつもりだが、あと十五六年は生きられまい。

山田。人間の壽命は又別だよ。

赤石。まあ、さうとでも思つておくのだね。僕は子供の時から、だまされるのが嫌ひだつたが、いつのまにかだまされてゐるのに氣がついてゐることを示すのが、耻かしくなつて、だまされてゐるのを氣がつかないふりをすることをおぼえたよ。

山田。靑海君の畫は本當にいゝね。

赤石。いゝだらう。ありあまつた力が適度に支配されてゐる。このありあまつた力と云ふものが、なか〳〵ないものだ。僕なんかもありあまつた力さへあればとよく思ふ。

山田。（時計を見る）僕はそれなら今日は失敬する。又くるよ。

赤石。まだいゝだらう。又くるつて厄介だからね。それに今度君に來てもらふ時は、僕の葬式の時らしいからね。

山田。そんなことはないよ。

赤石。まあ、ないことにしておくか。しかしまだいゝだらう。

山田。この汽車にのりおくれると約束にそむかなければならないのだ。

赤石。それぢや仕方がないね。しかし今日はよく來てくれた。うれしかつた。

山田。身體を大事にしたまい。
赤石。君もあんまり無理しない方がいゝよ。
山田。ありがたう。
赤石。それぢや、萬事たのんだよ。
山田。あゝ。萬々一のことがあつたらね。
赤石。こんなことを思はなければならない日が、こんなに早くくるとは思はなかつたよ。だが死んでしまへば、このくらゐらくなことはあるまい。
山田。なるべく一日でもながく生てゝほしいね。君に死なれては僕も心細いよ。
赤石。首はくゝらないよ。少しでも生きられる限り生るよ。僕は執着の強い方だからね。
山田。それぢやさよなら。
赤石。さよなら。
（山田泣きかけてくるのをこらえて庭から退場しやうとする）
赤石。山田！
山田。なんだ。
赤石。別に用ぢやない。もう一度顔が見たかつたのさ。僕を知つてゐる人には皆よろしく云つてくれ玉へ。
山田。あゝ。承知した。
赤石。それぢやさよなら。（お辭儀する）

山田。さよなら（お辭儀し退場。）

（赤石すゝりなく。女中登場）

女中。敏子さんと云ふ方がお見へになりました。

赤石。（平氣を裝つて）。さうですか。

（敏子、女中と登場）

赤石。よく來ましたね。

敏子。兄も一緒に參りましたのですが、一寸寫生してからゆくからさきにゆけと云はれたので、さきに參りました。

赤石。さうですか。

敏子。少し前に來たのですけど、お客さんだつたので、お客さんのお歸りをまつてゐたのでした。

赤石。さうですか。それは惜しいことをしました。今居たのは僕の友達の山田次郎です

敏子。さうでしたか。櫻が美しく咲いてゐますね。

（女中片づけて退場）

敏子。本當にすみませんでした。

赤石。何にもすまないことはありません。

敏子。新聞にあんなことが出たので。

赤石。僕の方こそ、お氣の毒に思つてゐるのです。

敏子。私は平氣ですが。

赤石。僕だつてあなた位ゐには平氣ですよ。ただいやなかき方がしてありましたね。

敏子。あれは岡島さんがかゝしたのですよ。私にかゝすかゝすと辭退したのですが、私がとりあはなかつたので。岡島さんていやな人なのです。

赤石。さうですか。あんなに温和しさうに見へて、僕がいつか往來で逢つた時、お世辭許りつかつてゐましたよ。

敏子。さうですか。兄も怒つてゐました。

赤石。僕は新聞に出たので、あなたに逢へなくなつたと思つてゐましたよ。

敏子。兄はあなたの手紙を見たらすぐ行かうと云つてくれました。私も一度お見舞に上りたいと思つてゐたのですが、一寸上りにくかつたのです。

赤石。僕は病氣だときまつて、反つておちつきましたよ。惡口云はれて、反つて度胸が出來ました。おめ／＼とくたばつてはやらないつもりです。

敏子。本當に之から二人しつかりしなければなりませんわ。

赤石。あなたは僕を本當は愛してゐないのでせう。

敏子。あなたはどうですの。

赤石。云はない方がよろしい。

敏子。それなら愛してゐて下さらないの。

赤石。あなたにはわかつてゐるはづです。

敏子。私の心はおわかりにならないのですか。

赤石。あなた僕に同情してゐてくれることはよくわかります。あなたが僕の仕事を尊敬してゐてくれるのもよくわかります。又（微笑しながら）僕の孤獨の魂

綾子。それはどうか云はないで下さい。私はあの文句が一番恥かしいのです。

赤石。それだけなのでしよ。

綾子。それだけとしておきますわ。

赤石。それなら僕もそれだけにしておきます。私は病人で、あなたは看護婦にすぎないつてね。

綾子。それで結構です。私は兄にたのんで、こゝに住まうかと思つてゐます。

赤石。僕の生てゐる間ですか。

綾子。そんなにながくは。

赤石。いゝえ。そんなにながいとは思ひません。

綾子。そんなよわいことをおつしやつてはいけません。

赤石。嘘を云はないといけないのですか。

綾子。あなたは知つてゐらつしやるの。

赤石。いつまではもつまいと云ふことをですか。

綾子。そんなことはありません。そんなことは本當にないのです。

赤石。もう少しは生きられるのですか。

綾子。まだいつ死ぬときまつてゐるわけではありませんわ。

赤石。當分、死なずにすむかも知れないのですね。

敏子。なほるかも知れないのですよ。

赤石。それは本當ですか。

敏子。本當です。

赤石。あなたの生命にもかけて。

敏子。えゝ、生命にもかけて。

赤石。それなら僕がよろこんでもぬかよろこびではないのですね。

敏子。大丈夫です。

赤石。だが八分通りは死ぬのですか。近い内に。

敏子。八分通りは死なずにすむのです。

赤石。嘘ついては承知しませんよ。

敏子。大丈夫です。だが身體を大事になさらなければいけないのよ。

赤石。字をかいてはいけないのですか。

敏子。えゝ。

赤石。それは駄目です。字をかゝないで、なほらなかつたらどうします。

敏子。……

赤石。私は生てゐる限り何かかゝないではゐられません。

敏子。それでも、靜かにしてゐらつしやれば八分通りなほるのです。少し手おくれにはなつてゐますが。

赤石。なほるときまれば辛抱しますがね。

敏子。私に免じてかゝないで下さい。

赤石。しかしさうなつては、一文も金がとれませんよ。

敏子。それはお友達におたのみになれば。

赤石。そんなことは出來ません。死んでしまへばどうにかなりますが。

敏子。だつて今本當に大事な時なのです。

赤石。しかし意地のわるいもので、この頃しきりと何かかいてゆきたいのです。

敏子。それでは死んでもいゝのですか。

赤石。死にたくはありません。だが僕は一文なしなのです。そして友達から金をかりられる限りかりてあるのです。この上生てゐて借りると云ふわけにはゆきません。僕の友達に同じ病氣でいくらでも立派な仕事をしてゐる人があります。その友達の金さへ僕はかりてゐるのです。

敏子。しかし同じ病氣にもいろ／＼あり、體質にもよりますから。

赤石。だがそんなことは出來ません。

敏子。私を可哀さうに思つて下さい。

赤石。僕だつて死にたくはないのですよ。男の意地と云ふものがありますから。

敏子。それではどうしても駄目ですか。

赤石。そのことだけはだめです。

敏子。私が兄と相談して金をあつめて見たらどうですか

赤石。だめです。それでは金の高が少しすぎます。

敏子。それをあなたは自分でうけるつもりなのですか。

赤石。えゝ毎日三四枚仕事をすればいゝのですから。世間では僕より氣の毒な人がいくらでもゐます。

敏子。それであなたは死んでもいゝと思ふのですか。あなたは生てゐれば、今よりも、もつとずつと立派な仕事が出來る方です。

赤石。人間の壽命はあてになりません。やれる間にやらなければ。

敏子。それではあなたは死んでもいゝのですか。

赤石。やむを得ません。

敏子。そんなことは云はないで下さい。

赤石。僕だつて生きたいのですよ。死にたくはないのです。ですが男の意地と云ふものがあります。

敏子。女にも意地がないと思つてゐるの。

赤石。それはあるかも知れません。しかし自分のことゝ他人のことはちがひます。

敏子。私がお友達の方達をおたづねして歩きますわ。

赤石。これはいけません。友情を利用してはいけません。それに僕の友達に富んでゐる人は一人もないのです。僕は友情を重荷にしたくありません。今迄にさへ少しつけ上りすぎて考へるとすまない氣がしてゐるのです。

敏子。それなら仕方がないのね。

赤石。仕方がありません。戰ふだけ戰つて、それで生きられゝばこの上ありませんが、生きられなければ死ぬ許りです。

敏子。矢張りあなたは男ね。私もう何にも申しません。

赤石。僕はあなたがそんなにまで云つて下さるのは實にうれしいのです。

敏子。…………

赤石。緣に出て櫻の花でも見ましよう。

敏子。えゝ。

赤石。本當によく來て下さいましたね。

敏子。私は決心して來たのですよ。どうかしてあなたを生かそうと思つて。

赤石。ありがたう。

敏子。私程、不幸なものはありません。

赤石。そんなことは云ふものぢやありません。不幸な人はいくらでもゐます。

敏子。それはさうでせうが。私は今日はあなたを慰めに來たつもりなのに私の方が慰さめられてゐるのですね。

赤石。僕はもう決心したものなのです。しかし今あなたに逃げられたら、僕は矢張り、僕程、見ぢめなものはないと云ふかも知れません。

敏子。どうにかならないものですかね。

赤石。何故です。

敏子。あなたが一年か、二年金をとらずにいゝ工風か。

赤石。そんなことは出來ませんよ。さううまくは、とんやがおろしてくれません。お兄さんがゐらつしやいました。

敏子。兄の畫がうんと賣れるやうになればね。

赤石。萬事、二三年たてばよくなるのです。二三年たてば僕は金をとる必要はないのです。だがその必要のない時、僕はもうこの世にはゐないでせう。そして皆は僕に同情をしてくれるでせう。

（女中につれられて青海登場。赤石默つて笑ひながらあいさつする）

青海。君は思つたより元氣だね。

赤石。我ながら思つたより力が出て來たよ。畫を見せないか。

青海。だめだよ。

赤石。だめでもいゝ。まあ見せたまへ。

（青海、スケッチ板の畫を見せる）

赤石。矢張りいゝね。之をもらつてもいゝかい。

青海。よろこんで上げるよ。

敏子。お兄さん。赤石さんは私の云ふことをきいて下さらないのよ。

青海。何をだ。

敏子。養生をして下さらないのです。

赤石。僕に筆をとるなと云ふのだよ。だが僕は筆をとらないわけにはゆかない。金もとらなければならないからね。さうすると死ぬとおどかされるのだが、僕も男だから、死ぬのが怖いとは云へない。

青海。死んぢやいけないね。

赤石。僕だつて死んでいゝとはちつとも思はないよ。だが死ぬのが怖いから、仕事は出來ないとは云へない。

青海。それはさうかも知れない。僕に力があればね。

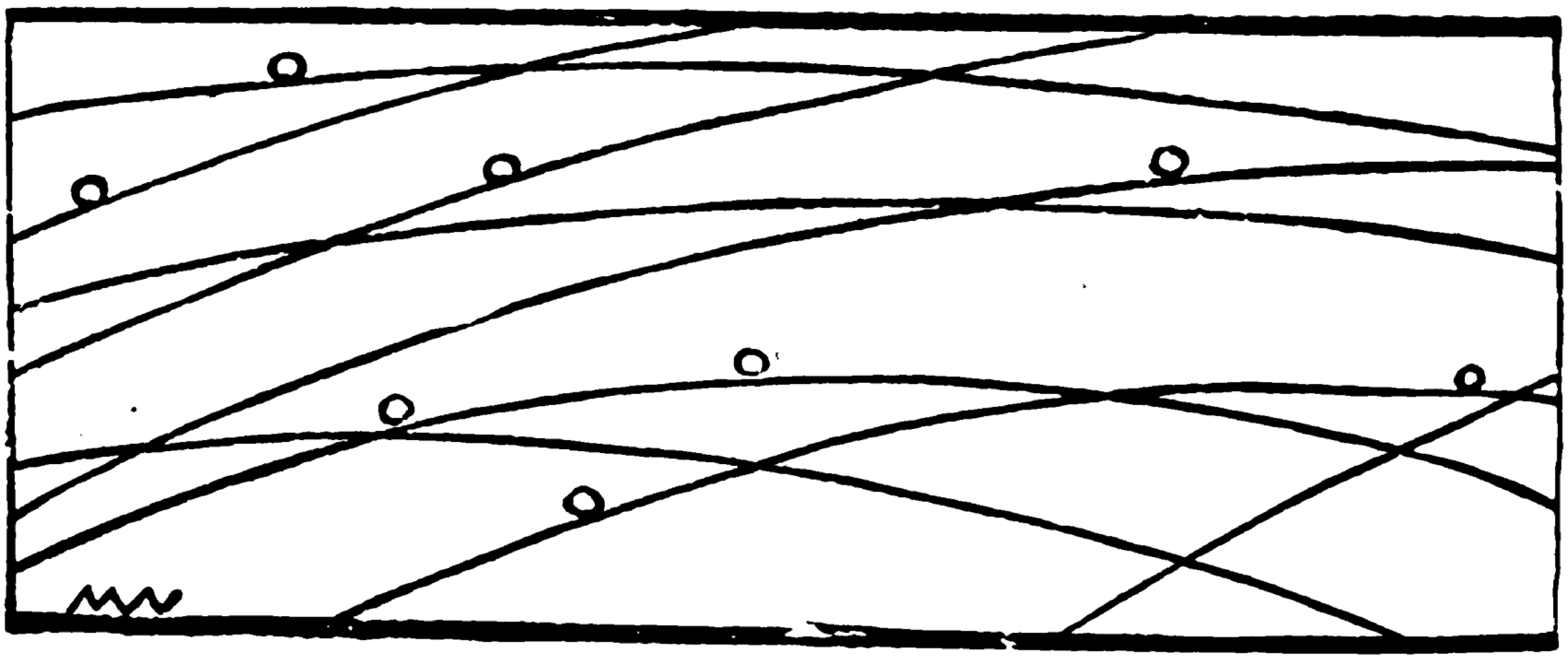
赤石。君に力はありすぎるよ。だが世間が認めないだけさ。僕だつてさうさ。世間が僕の死ぬのをのぞんでゐるだけさ。僕はたゞ與へられた杯をのむだけさ。だが僕が生て出來なかつたことは、死ねば出來ると思ふよ。だから僕は安心して死ねると云ふものさ。

敏子。死んではいけません。(泣く)

赤石。なくものぢやありません。一緒に笑つて下さい。

(幕)

(二六、六、一〇)



春の人々

佐藤春夫

彼は毎日、自分の家を出ると坂道を登つて廣い野原へ出た。(彼の家はやすい貸家だから、郊外の低い土地にあつた。)

彼はまだ二十をすこしすぎたばかりの青年だつた。それだのに彼はもう細君をもつてゐて、子供まであつた。生れてこそはゐなかつたが子供は細君の腹のなかにあつた。さうして彼には職業はなかつた。

彼の細君は毎日、大きな腹をかかへて生計を苦にしてゐた。さうして、彼に早く職業を捜すようにせがむのであつた。

職業は彼も欲しかつた。しかし職業といふものはどうも、無いものであつた。またどんな職業も彼に適するものはありさうになかつた。彼は自分でそれをよく知つてゐた。

彼は毎朝おそく起きて、すぐに家を出た。

彼の細君は彼が職業を捜しに出るものと思ひ込んで、一張羅の着物を着せて出す

のだ。

しかし彼は毎日、停車場でバットを一つ買つて、それから近くの踏切を横ぎつて、坂道を上つて、廣い野原へ出た。その高臺からは彼自身や或はその隣人達の貧乏な家の一群が工場の煙突の根もとに小さく見えた。彼はつまらなさうにそれ等の景色を一瞥してから、野原のうちの木立のある方へ歩いて行つた。

野には草が生えてゐて、それにはそれぞれに花が咲いてゐた。春だからである。

野原には殆んど人影もない。(日曜や午後からになると子供たちが來る。)

彼は雜草の花を踏みながら、あんまり早く結婚した事を悔いてゐる。

木立の下へ來て、彼は草を藉いて横になる。仰向きになる。彼の上には空と雲と風とがある。

彼は毎日、かういふ風にして三時間ばかりをここで暮してゐた。

或る日、やはり仰向きになつて空を見てゐた。すると人の足音がしたので、彼は視線をその方へむけた。

三間ほど向ふに、ひとりの女性がうな垂れたまま歩いて來た。つつましい歩調であつた。彼女は、彼のゐることに氣づかないらしく、彼の横はつてゐる方へ進んでゐた。

彼は、彼の姿勢が異性に對して無作法だと思つた。(彼は若い男だからである。)女は近づきつつあつた。彼は、そこで、身を起した。

女は、急に動いたものがあるのに驚いて立止つた。しかし、それは目の前に若い男が足を投げ出して草の上にゐたのだとわかると、彼女は直ぐまた歩き出した。今までと少しも違はない歩調で彼女はもの靜かに、彼のそばを通り去つた。

彼は彼女を見送つた。背の高いうしろ姿のいい人であつた。——しかし、彼女は年とつてゐた。と彼は思つた。彼は

最初に彼女を認めた時、三十ぐらゐの女だと思つた。傍を通りすぎる時に二十七ぐらゐの、と思つた。うしろ姿を見ると、やはり三十位に見える。――それは彼女が黒い地味な服裝をしてゐるからである。

彼女は頸を垂れたまま、ごくもの靜かに遠ざかつてゐた。

その次の日に、やはり同じ場所で、同じ時刻に、同じ女を、彼は見た。彼はやはり起き直つて彼女を迎へた。

彼の女は手に小さな黒い本をもつて、それを讀みながら來たが、彼の傍をとほる時に、開いたところに指をはさんだままその本を持ち直しその手を垂れてとほり過ぎた。それより外に彼女は、別に彼のゐることには注意をしなかつた。

彼は彼女を見送つた。彼は彼女が讀んでゐたのはバイブルであることを推察した。あの垂れた片手のなかに持たれてゐたやうなそんな形の、そんな色の本は、バイブルの外にはないからである。さう言へば彼は彼女の胸か或は帶のあたりかに、銀の小さな十字架があつて光つたのを見たやうな氣がした。

彼女は頭を垂れたまゝごくもの靜かに遠ざかつてゐた。――くつきりとした姿の影を草の上に曳きながら。

彼は考へた。――頸をあんなに垂れてゐるのは、彼女が再びバイブルを讀み出したのだ、と。

三日目に、やはり同じ場所で、同じ時刻に、彼女は彼を見た。この日、彼は彼女を豫想してゐたので、足音を聞かないうちから、彼は身を起してゐた。いつもの時刻であつた。(彼は永い間、時計を持つた事が無かつたので、時間のことはいつもはつきり知つてゐた)

彼女は木立のかげから出て來た。やはり本に見入りながら歩いて來た。彼女はやがて彼の近くへ來ると、手の本を閉ぢて前方を見た。

彼と彼女とは偶然に目を見合した。

彼女はすぐに目を伏せた。

彼はぢつと彼女を見つめてゐた。彼女の帶には彼が考へたとほり、銀の十字架がゆれて光つてゐた。

彼女が間近かへ來た時、彼も目を伏せた。彼女が行き過ぎた時に、彼はもう一度目を上げて彼女を見送つた。（うしろ姿のいい人である。しかし、彼女は年をとつてゐる。さうして彼女はもの靜かに歩き去つた。彼女は一度ふりかへつて見た。それから廣い野原のなかで彼女は小さく歩いてゐる。）

四日目に彼女は昨日と同じやうに彼の傍をとほりすぎた。

彼は彼女がかすかに笑つたやうな氣がした。

彼は彼女の年を二十五ぐらゐに思つた。さうして彼の心をひくのは、彼女の落着き、もの靜かさ、さびしさだと思つた。

五日目に彼は、彼女が確かに笑つたことを見た。

彼は彼女のうしろ姿を見送つてしまつてから、また再び仰向けになつた。彼はいつもより一時間以上も長いことそこにゐた。彼の上には空と雲と風と、それから青春とがあつた。

その次の日に彼は彼女に輕く頭を下げた。彼女も禮を返した。

その翌日には彼女は禮を返して行きすぎると、彼の方をふりかへつた。――彼から六七歩はなれた近いところで、歩きながら。

さうしてその次の日には、彼女は同じやうに近いところで彼をふり返つて、立止つた。

その時、彼は立ち上つた。さうして彼女の方へ歩いて行つた。別に彼の意志や思慮を要しなかつた。彼女が彼にそれを促してゐることを感じたのだ。彼女にも彼にも不自然な動作は少しもなかつた。

彼がさうして彼女の方へ歩み出したのを見ると、彼女も歩き出した。さうしてもう一度ふりかへつて彼を見た。彼女には ひのいい顔を見せて笑つてゐた。

彼は彼女より二三歩おくれて歩いた。並んで歩くためには、彼は多少の勇氣と決心とを要した。それでも彼女はいつもよりももつともの靜かに歩いてゐるのを見た時には、彼は直ぐに彼女の片わきへ行つた。

「毎日、お目にかかりますのね」

彼女が彼にさう言ひかけたのは、思ひがけなかつた。(――同じ事を、彼女が言はなかつたら彼が言つただらう。)

「え……」

彼は狼狽してしまつた。さうして何も言へないで、三十歩ほど歩いた。それから彼は言葉を見出した。

「御宅は御近所でいらつしやいますか」

「え……」

彼女はさう答へただけでゐた、三十歩ほどふたりは歩いた。

「あなたは」と彼女が言ひ出した。落着いたいい聲であつた「毎日あそこで何をしてゐらしやるの。ほんとうにお樂さうですわねえ」

「いいえ」と彼は答へた。彼女が彼を子供のやうに思つてゐるらしいのに少し不滿を持ちながら、それでも彼は子供のやうなことを言つてしまつたのだ「樂しくはないのです。仕方がないのです。僕はすることがないので毎日あそこへ來るんです。外に行くところもないのです」

「まあ！　まるでわたしのやうですこと！」

彼はたのしくなつた。さうしてもう何も言はないでも滿足出來た。
野原は廣かつた。さまざまの草があつた。それが各々それぞれの花をつけてゐた。
彼女は不意に身をかがめた。彼女は足もとから花を一本摘みとつた。
「何の花です。――白い蓮華ですか」
「いいえ。クローバアでせう」
彼女は答へながら、手にもつてゐた本の中へそれを挾んだ。彼はもうその本のことは忘れてゐたが、それはやはりバイブルであつた。彼女はそのなかから何かをとり出しながら、その時、彼の手のひらに渡した――
「ごらんなさいまし。そら、これがわたしの二十の春の花ですよ」
「はあ。――すみれですね」
「さうですわ。眞黑になつてしまつて……」
彼は彼女をふと老孃だと直感した。堀田は全く何もなかつた。
彼女は默つて歩き出した。今までよりもいくらか早足だつた。しばらくして彼女はまた言つた。
「どこへもいらつしやるところがないのなら、わたしのところへいらつしやいましな。――お遊びに。あそこですの。
そら屋根が見えませう――赤いのではなく、その隣りに小さい……」
「やはり洋風の……」
「さうですわ。Tといふ表札がかかつてゐます。――門は閉つてゐても、わたしは居ます」
彼が何か返事をしようと思つてゐるうちに、彼女は言つた。――

「さようなら」

彼女は踵を返してもと來た方へひき返して行つた。それは殆んど唐突な言葉で、唐突な動作であつた。

彼女は見かへりもせずに歩み去つた。

見送つてゐた彼は、呆然とした氣持からやつとさめて彼がまだ返さずにゐた押花の黑くなつた莖に氣がついた。彼はそれをバットの箱のなかへしまふ序に、そこから一本拔き出して火をつけた。深く吸ひ込んでその煙を空へ吐き出した。

それから彼は口笛を吹きながら踏切の方へ坂道を下りて行つた。

彼はそわ〱してゐる自分に氣がついた。それから彼は女房を思ひ出すと、彼女がそのそわ〱した彼をもしみたならば、きつと職業を見つけたに違ひないと思ふだらうと考へ、彼は苦笑して、それから妙に心細い悲しい氣持になつた。滅入つて來た……。女房を厭ふのではない。寧ろ不憫に思ふのだが、その感情が自分に煩はしいのだ。

もう三月もすれば子供が生れる筈だけれども、無論それまでに彼が職業を求め得られさうなわけはなかつた。第一、彼は毎日あのとほりだから、職業などは一つも心掛けてはゐなかつたのだ。心掛けるどころではない斷念してゐた。かうやつてゐればいづれ女房はそのうち彼女の實家へでも返す外はない。その家は彼の家とは不釣合に富有なのだから娘ひとりぐらゐの世話はする。現に今でも歸つて來るやうに度々手紙を寄こすのだ。しかし彼女はそれに應じない。家出するやうにして彼のところへ來たといふ意地もあるのだし、それに彼女の家に彼女が歸つたならば、多分、實家では彼女を再び彼のところへは歸さないだらう――彼が自活出來ない限りは。と、彼女はいつもそれを言ふのだ。

彼は職業を見つけなかつたけれども、その代りに戀に似たやうなものを見つけ出した。さうして、空になかつたバットの箱の銀紙のなかに、ひとりの女が、心あつてか心なしでか、彼にくれた彼女のむかしの花を大切に持つてゐる。

さうして彼は明日を待ち兼ねてゐる。

――成るやうにしかならない。仕方がなければ女房を當分（といつていつまでだか）實家へ預けるより外に仕方がない。尤も、彼は別に不憫なその女を捨てようと思つてゐるのではない。

高臺の廣い野原には日が照つてゐる。（彼の上には空と雲と風と、それから青春とがあつた。）

彼は隨分待つた。待ちくたびれた。彼はバイブルの女が晝飯後の散歩のためにここへ來ることを知つてゐた。それは今まで一時から一時半までの間に間違なく行はれてゐた。（彼は長いこと時計を持たないので、時間のことはよく知つてた。）さうして今はもう世界が、森羅萬象が、間違なく二時にはなつてゐる。

もう靜かに歩く女の姿はいつまでも見られない。

彼は斷念して坂道を下りた。停車場へ寄つてみた――バットを買ふためではない。彼は時計を見たのだ。二時を三十五分過ぎてゐた。

彼は彼女がその日、訪問者があつたのだと思つた。

その次の日にも彼は彼女を見かけなかつた。

彼は、彼女を嘘の存在ではなかつたか――何か、妖氣のものではなかつたらうか、と空想してみた。もの靜かな態

度、つつましやかでありながらしかし翳りのある様子、さうしてどこか冷たい美しさ。彼が彼女を妖花、或は靈性を持つたもののやうに空想したのは自然であつた。

しかし、本當は、彼女はただ病氣で昨日から寢てゐるのだ。彼女は一たい病身な性で——と、彼は別にもう一つ空想してみた。やや額の廣い細おもての女が、白いベツドのなかに埋まつてゐるのを、彼は空想した。

——彼は屋根の見えるところまで行つて彼女の家を見た。もし、明日もう一日待つてみて彼女が來なかつたならば、彼はその家を訪れてみようと思つた。さうして、その屋根のある方へ彼は歩いて行つた。その家をよく見て置かうと思つた。

——近づいてみたら、忽然その家が見えなくなつたら、これはお伽噺だと、彼は思つてみた。

小さな石の門にはTとその姓だけ書かれてあつた。家も小さな、さうして殆んど眞四角なものであつた。まだ新らしいもので門から玄關までの間はやや奥ぶかかつたけれども、そこに木らしいものは殆んどなかつた。たつた一つ、白い薔薇のために籬をこしらへてあつたが、その木はまだ若くつて蕾つてはゐなかつた。しかし二つ三つほど花をつけてゐた。家の感じはすべて白と黒とであつた。それはあのバイブルの女の感じにそつくりであつた。

「明日こそ、この門をくぐつて彼女に會はう——今日はもう一日待つてみよう。

彼は自分にむかつてさう呟いてから、この門の前を去つた。

二階のカアテンの隙間から、病牀のなかにゐる彼女が、自分を見てゐはしなかつたらうか、と彼はふり返つてみた。

(彼はあまりに早かつた自分の結婚を甚だ悔いてゐる)

彼の足もとには雜草がそれぞれの花をつけてゐる。そのなかに、一昨日、彼女が摘んだと同じクロオバアがある。

その次の日にはひる前から雨がふつた。彼は高臺の野原へも、また彼女の家へはなほさら行けなかつた。——彼は

駄がなかつたのだ。彼の女房はどうしてだか、しく／＼泣いてゐた。彼はふと死んでしまひたいと思つた——冗談にではあつたが。

明る日、雨は晴れてゐた

彼は今日こそ彼女に會へると思つた。

雨の後の日には誰でも散歩に出たくなる。だから彼女もきつと今日は野原にゐるに違ひない。もし、今日そこにゐなかつたとしたならば彼女は、もう疑もなく病氣なのだ。だから見舞ひに行かなければならない。

野原には彼女はゐなかつた。

彼は彼女の家の石の門をくぐつた。白い新らしい蕾が薔薇の上にあつた。

彼は玄關にあるベルを押した。扉のガラスは半透明であつたから、家の内部は見ることが出來なかつた。

その扉が開けられた。まだ十五にならないほどの小さな女中が大へん鄭重に頭をさげた。

彼は、彼女のことをここで何と言つていいかに迷つたが、相手が小供だから言つた——

「僕、奥さん——ですか、お嬢さんですか、とゝかくもここの女の方にお目にかかりたいのです」

取次はけげんな顔つきであつたが、

「はい。——お嬢さまにですか。どなたさまでゐらつしやいませうか」

「お目にかからなければ判らないのです。お目にかかればわかります」

彼のその聲を聞きつけたやうに、すぐ片わきの扉が開いた。彼は胸をとどろかしたが、それは大學の制服をつけた青年だつた。彼と同じ程の年頃であつた。その金ボタンは新しかつた。それから襟にある文字で工科の學生だといふこと

がわかつた。

「あなたは」とその青年が言つた「姉に用があるとおつしやるのですか」

彼はその青年を見た。細面で鼻が高くつて、言葉つきも樣子も沈靜であつた。さうして彼女の弟だといふことは一目でたしかであつた。

「え、さうです。……別に用事といふのではありませんが、……お目にかかりに來たのです」

「は?」

彼女の弟は彼をぢつと見つづけた。

その間に彼は、その家のなかを見た。玄關のホオルの突當りが一直線に長い階段になつて、彼の目の前に上つてゐた。それを見つづけながら、彼は言つた——

「あの方がわたしに、遊びに來いとおつしやつて下さつたのです。だから、私は伺ひました」

「それは」と相手はうさんげに答へた「きつと人違ひでせう——うちの姉は男の方やなどにはお友達はない筈です」

「でも、このおうちを私に教へて下さつたのです。でなけや……」

と、彼が見つめてゐた白い長い階段の最も高いところを、靑いスリッパをはいた足が音もなく下りて來た。それは一段ほど下りて來て、着物の裾が見えて、まさしく彼女のものであつた。

彼は彼女が下りて來さへすればわかると思つた。さうして口を緘んだ。

しかし彼の女は、足と着物の裾とを見せて二段まで下りて來たまま、それ以上にはもう降りて來なかつた。——彼はぢつとそれを見つめてゐた。

「ともかくも、姉は只今は留守です。それにわたしはきつと間違だと思ひます。どうぞお歸り下さい」

その聲には不思議な威嚴があつた。彼はまるで叱りつけられた人のやうに頭をさげた。

扉はなかから、あの青年の手で閉められた。その金屬的な音が外までひゞいた。

彼は侮辱と憤懣と失望で、あの階段の三段目までこつそり下りて來た足を思ひ出した。それを思ひつゞけた。感情を弄ばれたことの憤とそれを自から嘲ける氣持とが半分々々になつた。

彼はしかし空虚だつた。いつもの木立のところへ來て仰向けになつた。しかし空は悲しかつた。そこで彼はうつぶせになつた。（草はそれぞれに花をもつてゐる。）

ふと、白いものが彼の目の前にあるのを見つけた。それは小石でその上を押へた紙片であつた。彼は期待と不審とで手をのばしてそれを拾ひ上げた。それは四つに細長く折つてあつた。

彼は開いてみた。それには文字が書かれてあつた。

> あなたが一昨日、門の前までお出になつた事は存じて居ります。しかしもう二度とはお出下さいませぬようこの手紙を上げます。ふとした輕はずみで、お遊びにお出なさいなどと申しましたが、來て下さつても私はもうお目にはかかりません。——どうぞわたしの輕率をお許し下さいませ。

見事な筆蹟であつた。



街へ出るトンネル

横光利一

一

計介は通りすがりに自分の家へ寄つた。妹はダイナマイトを積み上げた箱の傍で、こつそり鏡を覗いてゐた。彼は庭に立つたまま妹が誰を思つてゐるのかと一寸考へた。

「あら、兄さん、街へいらしつたんぢやなかつたの。」

「うむ。」

「あのね、私、今日ラ・パロマを弾いたのよ。」

彼は默つてまた表へ出ると、峽谷の片側にかかつた枕木の上を渡り出した。ふと彼はそこから崖の下へ墜落したトロッコの有様を眼に浮べた。滿載された人々の身體が一齊に口を開け、岩角に彈動しながら渦の中へ突き刺さるやうに降り込んでいつた。だが、彼には人々の落ちる赤い口だけが、蝶々のやうにいつまでも眼に映つた。――

彼が九號のトンネルの入口へ來かかつたとき、お熊は岩角へ太股を擦りつけて足の裏の石を拔いてゐた。計介は半面の蔭の中から、新らしいお熊の股と岩とを眺めてゐた。暫くすると、お熊は歪んだトンネルの口から穴の中を覗きながら、にやりと誰かに媚つたやうな微笑を投げかけた。と、代りにころころ石ころが轉んで來た。

計介はポケツトから卷尺を出してお熊の傍へ出ていつた。彼はこれからトンネルの中へ這入つて今日の進行を計らなければならなかつた。だが、それが彼には此頃は無氣味であつた。彼の父が穴の中で働いてゐる坑夫達の單價を上げずに頑張り出してからは、計介には誰も彼もが自分に向つて絶えず飛びかゝらうとしてゐるやうに思はれた。彼は右手のポケツトに實彈を込めたピストルを入れてゐた。彼は恐怖を感じる毎に、そのピストルの口徑の數字を咒文のやうに呟くのだ。

「何アにどんと一發さ。殺す奴は殺すがいい。」

しかし、彼はいつか自分達一家の者は、自分も父親も妹も、墜落したトロツコ同樣峽谷の渦の中へ投げ込まれるにちがひないと思つてゐた。實はあのトロツコと一緒に墜落した人々も、計介一家の利益を上げる過程への犧牲だと云へば云へた。だが、彼にして見れば、さうは簡單に社會學の抽出を開けてみる氣はしなかつた。それは峽谷の河口で發展する港が惡いのだ。港の電力が此の水道工事の作業を勝手に必要としてゐるからだと彼は思つた。また彼は自分達一家に迫つてゐる今の此の恐怖さへ、實は港の發展に與へられてゐる一つの犧牲だと思つてゐた

「とにかく俺は知るものか。あの下の港に訊くが良い。あ奴はひとり何もかも飲み込んでゐる怪物なんだ。」

そして彼はただ峽谷の橫腹に掘られてゐるトンネルが、日日幾尺の岩石をぶち碎いて港の口中へ進みつつあるのかを尋常に計つてゐればそれで良いのだと思つてゐた。

「岩川君、もう直き雨になりますぜ。」

会津は鞭を振りながら空虚(から)のトロッコを穴の中へ押し始めた。渓谷に河口から吹き上げて来た。峡谷の黒い岩肌が油のやうに滲り出した。すると、濃霧は渦を巻かした峡谷の水の上を攻め込むやうに唸りながら昇つて来た。

二

計介は冷い岩を手探りながら穴の奥へ這入つて行つた。水が錐(きり)のやうに首條へ滴つた。時々奥の方でカンテラの光りが揺らめくと、突如として行手の曲つた岩角が険烈な陰影を浮かべて明滅した。圧縮された歌がシャベルの音と一緒に壁に突き衝つて曲つて来た。

奥では杭に引つ掛かつたカンテラの光りの中で、二人の男がダイナマイトを塡し込む穴を掘つてゐた。一人が歌を唄ひながら鉄槌を打ち下ろす。すると、一人が掛け聲かけて鉄槌を振り上げる。此のリズムに調子を打つて、二人の尻に下つてゐる藁の腰蒲團がぺたぺたと二人の尻を叩いてゐた。一度叩く度毎に、二人の打ち込む鑿(たがね)は港へ、港へ、その港の口を狙つて進んで行く。

——「アー、お陽(ひ)さま昇ると穴の中、」

——「そら来た。」

——「お陽さま這入つても穴の中、」

——「よいしよ。」

——「アー、くるくる廻つて日が暮れた。」

――「どつこいな。」

歌がやむと、二人の男は鑿と槌とを投げ出してギロリと計介の方を振り返つた。彼は卷尺の端を穴の先端へ當てさせ、その月初の進行起點まで卷尺を曳き延ばした。

「十六尺三寸、」と彼は目盛を讀み上げた。

「すると、どうなりますかな？」

「九寸三分の進行だ。」

「石が惡いんだ。」と默つてゐた男が不平さうに横から云つた。

計介は卷尺を卷きながらも男達の樣子に絶えず注意をはらつてゐた。お熊は兩足をふん張つて轉げてゐる岩塊を胸に抱き上げた。と、どつとトロ箱の中へ投げ込んだ。計介の卷いてゐる鋼鐵の卷尺だけは、岩を擦つてささやかな流れのやうな物優しい音をたててゐた。

「お熊、今夜は誰と寢る番ぢや？」と太つた男が云つた。

「お前とぢや。」

と、お熊は浴びせると、「そら來た。」と掛け聲もろともまた一つの岩塊を、男を抱くやうに抱き上げた。

男はにやにや笑ひながら蠟燭のやうなダイナマイトを横に喰はへた。ダイナマイトの影は、横に大きく彼の口を斬り下げて怒り出した。彼は雷管へ導火線を挿し終ると、それをまた喰はへてゐるダイナマイトの中へ突き込んだ。

「おい、お熊、うろうろしてると、どてつ腹へ風穴通してやるぞ。」

計介はその男の言葉が自分に向つて投げつけられたのだと云ふこと位は分つてゐた。彼は出口の方へ歩き出した。

と、彼の後でもうダイナマイトの導火線が火花を吹き出しながら岩の中へ燃え込んでゐた。後から、人影が岩壁の上へ折れ重なつたまま殺到して來た。彼はピストルを構へて出口の方へ駈け出した。

三

計介は九號を済ますと十號の穴へ來た。穴は峽谷の一方の岩壁に添つて二十二ケ所に掘られてゐた。此の二十二ケ所の穴は全線一里に渡る街までのトンネルをやがて一直線に連結しやうとする小口の穴である。

十號の穴の中では、白衣を着た三人の朝鮮人が水の中に浸つたまゝ默々として岩を掘つてゐた。計介はその黒い岩と對面しながら金槌のやうに何事も考へてゐなささうな彼らを後から見てゐると憂鬱になつて來た。此れは俺に世の中で最も同情されるべき存在だ。その絶えず默つてゐるものは黒色である。その黒色の中で逡巡と鳥のやうに翅を延ばした彼らは一體何を考へてゐるのか、と彼は考へた。「しかし、俺の方は危いんだ。俺は殺されようとしてゐる。俺は殺されるべき理屈を發見されたのだ。此の理屈が俺を絶えず追つ駈け廻してゐるではないか。」

彼は進行を計り終ると直ぐ十號の穴から外へ出て來た。——「俺を守つてくれるものは何もない。たゞ一本、引金を引く俺の人差指だけだ。これだ。」と彼は人差指を出して見た。

彼は此の危險な仕事をしてゐる自分の家から逃げ出すことが出來なかつた。もし彼が此の危險の中に踏みとまつてゐるなら父と妹はそれだけ助かるにちがひないのだ。いつか前に、彼は坑夫頭の瀧川が代表となつて、父の所へ要求を持ち出しに來た五六回目の夜であつた。計介はその後で父に坑夫達の要求のまま單價を上げてはどうかと奨めたことがある。すると父はいきなり傍の記入簿を開けて彼れに云つた。

「わしは資本家ぢやないのだぜ。資本家は市役所だ。あの街全體が資本家だ。わしの入札して落した仕事は、どんなことがあらうとも絶對に動かすことが出來ないんだ。もし今坑夫達の要求の通り單價の一割を値上げるとする。するとだ、良いか、わしの利益は一日平均たつた六十圓だ。」

「そんなにあればいいですな。」と彼は云つた。

「うむ、良い。しかし、お前はまだまだこれから物價が騰ると云ふことを考へてゐないのだ。」

「物價が騰れば坑夫達の諸式も高くなるでせう。さうしたらなほ單價を上げてやらなきア」

「それは誰れでもさう思ふ。それでわしは困るのだ。米や味噌が上るとまた單價を上げよと云つて來る。もしわしが坑夫の單價を上げるとする。するとわしの損はそれだけぢや濟まないのだ。それだけ損ならわしは我慢するつもりだ。所が、わしの方ではわしの家の味噌や醤油である火藥や鐵やコンクリートや煉瓦の高くなる損まで引き受けねばならんのだ。此の損はわしはどこへも持つて行き場がないのだよ、もし持つて行き場があるなら、上げよと云ふ坑夫の單價を、こちらから下げよと云ふより仕方がない。しかし、いまわしが上げる代りに下げたとする。すると、彼は云はないでも分るだらう。所が、いま物價はずんずん上つてゐる。まだまだ上るにちがひないのだ。」

「ぢや、結局工事を投げ出すより仕方がないぢやないですか。」と彼は云つた。

「うむ、そりや物價次第だ。」と父は答へた。

「物價がトンネルを掘つてゐると云ふんですか。」

「さうだよさうだよ。しかし、わしは一つ鑿岩機を買はふかと思つてゐる。これを一臺買へば三十人の坑夫が要らなくなる。いくら物價が高くなつても機械は單價を上げてくれとは云はないからの。」

「しかし、そんなことをするならもつと初めからしたければ。」

「そこだて、だから坑夫の知らない間にこつそり買ふんだ。知らして了へば何をし出すかしれないからな。」——

計介はいま彼の家で秘密にその鑿岩機の注文してあることを思ひ出した。一臺の鑿岩機が三十人の人間の愛慾と食慾とを奪ひ上げる。その結果は？　彼はそれを豫想することが出來なかつた。しかも事實は日日その結果の方へ進んでゐる。彼は枕木の上を歩きながら、絶えず大きな賭博を打つてゐるやうな氣がして來た。

四

計介は首條へ流れ込む霧を防ぐために上着の襟を立てて歩いた。石斛の花を全身に咲かせた岩層が霧の中に反りを打つて延び出てゐた。

譬へば今五人の男が不意に凶器を持つてあの岩の角から現れたとする。すると、俺はどうすれば良いか。——彼はその岩層の向ふに折れ込んでゐる霧に埋つた見えない路が不安にたつた。路はトロッコのレールと人道とを兼ねた幅三尺程の路である。頭の上は十數丈の絶壁で足の下は數百尺の斷崖だ。ここで挾み打ちに合はされれば一挺のピストルで間に合ふか。これが彼のいつもの最後の問題である。

彼はその最後のときの練習のために、石斛の花の描いた白い曲線の下部を狙つてピストルを差し向ける姿勢をとりながら、岩角の先端へ身を現した。すると、茫々とした霧の中から、ダイナマイトの箱が徐々に押されながら浮んで來た。それは街から今日計介の家へ着く筈の荷物である。家には火藥のことは分らないかたがただ一人ゐたのを彼は思ひ出した。

彼は暫くそこに立つてゐてから重さうにダイナマイトを押して來る二人の人夫の後について引き返した。人夫は時々、

の家の前まで來るとトロ箱から荷を降ろして擔ぎ出した。ダイナマイトは二人の肩の上に並んだまま、岩石の間を默々として動いていつた。一層の莊嚴な峽谷の胸はその小さな物體を見下して靜まつてゐた。だが、今はダイナマイトは默つてゐた。

計介が勝手口から早廻りして家へ這入ると、妹は周章てて袂の中へ紙片を押し込んだ。

「一人かい？」

「ええ。」

「誰か來たか？」

「いいえ。」

「父さんは？」

「まだよ。」

妹は彼に背を向けて答へると靑くなつたまま直ぐバイオリンを彈き始めた。ふと彼はいま誰かに忍び込まれて接吻された所ではないかと思つた。彼は立つたまま變化する妹の耳の色を見詰めてゐた。

樓へ上るバイオリンの音に迎へられてダイナマイトが這入つて來た。彼は人夫の差し出した傳票に印を押さすと記入簿へ書き入れた。

「雷管三百個、導火線三百條、ダイナマ三百本、十三號へは十五個行き過ぎ。」

此の行き過ぎ十五個のダイナマイトの用途は計介にとつて疑問であつた。凡そ一日の工事の進行度合とダイナマイトの使用量とは比例すべきが原則である。しかるに十三號の進行度合は、その部面の岩質の硬度と比較してさへも、ダイ

ナマイトの使用[illegible]。此のダイナマイト使用統計表に現はれ[illegible]すには、常に[illegible]。
密かにそのメートルを上げてゐると見らるべき素質があつた。

計介は、[illegible]川西坑・[illegible]と云ふ箇所に警戒の線を引いた。ここの両坑には僅に前から無用のダイナマイトを所持してゐる者が潜んでゐた。少くなくとも今迄の統計表に現れてゐる限りに於ては、百本のダイナマイトが減つて誰かの懐中に隠れたままうろついてゐる。計介は自分を狙つてどこからともなく忍びよるその百本のダイナマイトの無気味な沈黙を嗅ぎつけると寒くなつた。

しかし、間もなく妹のバイオリンは霧の中でラパロマを唄ひ出した。すると、忽ち行衛不明の百本のダイナマイトは彼の頭の中で踊り出した。彼は浮き立つた心を耳に集めて拍子をとつた。——誰が喜びよりも苦しみを欲するものか——歌へ、歌へ——彼は不意に街のお柳を捉へて、こつそりキスしたときの燦めく欲情を思ひ出した。——あのお柳は今頃は、酒の窓から火の點いた船を覘へてゐるにちがひない。——

白目の下男が火のつかぬランプをさげて、傍の間からむつくりと這入つて来た。

霧は峡谷の中で渦巻きながら雨になり出した。

五

山蟻は截り倒された而木の幹の上を急がしさうに往つたり来たりしてゐた。計介は暫くさうに仲間の死骸を咥はへてよろめいてゐる一疋の蟻を見詰めてゐた。

そのとき、濡れた柱の横腹から一臺のトロツコが現れると、闇の中を叩いて彼の方へ駈け降りて来た。ブレーキを掛

つて突つ立つてゐる坑夫は頭髪に風を立てて叫び出した。

「十四號で、やられたぞォ」

計介は表の方へ馳け出してみた。脱れかかつたレールの上を疾走して來るトロッコの上に、血にまみれた若者が合羽を冠つて倒れてゐた。

「やられた、やられた。」

負傷者を乘せたトロッコは彼の前で一段と喚くと、颯爽としてまた岩陰へ辷り込んだ。後では峽谷の風景が雨に濡れたまま蕭條と靜まつてゐた。遠くの岩角を墨汁のやうに浮き上らせた雲の中から、弱々しい蟲の聲が聞えて來た。

計介は此の靜まつた峽谷の中を、街の病院まで血をつけて馳け拔けて行くその一條の狂暴な空氣が恐ろしかつた。これは丁度計介一家に反感を持つてゐる峽谷の人々の胸へ、火をつけながら馳け下つてゐるやうなものだつた。彼は直ぐそのまま、火事場へ飛込む氣持ちで現場の十四號の隧口へ行つてみた。

十四號の入口からは、物々しい顏をした坑夫達がトロッコを押して崖の方へ進んで來た。トロッコの上には、鋭い角を立てた凶惡な相貌の岩塊が、ただ一つ傲然と乘つてゐた。

「これが犯人だな。」

「こいつですよ。こいつがどッと天井から來やがつたんでサ。肋が五六枚折れましたかな。あの男は新米ですからハッパの後へ飛び込んでいつたんですよ。馬鹿な。」

十四號の飯場頭は計介を見ると、血のにじんだ岩塊の頭を足で踏みつけながら云つた。穴の中ではダイナマイトをか

けた瞬間が一番危險なときである。計介には隙間の歪んだ岩穴の中へ一挙に飛び込んでいつた。その男の姿が眼に見えた。

「保ちさうかね。」

「いや、街へ行きつくまでに參りまさア。」

「俺ア、後から行つたんだが、アツと云かずと、もう此の石をひつ掻いてやがつた。」と一人が云つた。

負傷者の友人の一人は傍の者が計介に話しかけるのを腹立しさうに舌打した。青ざめた顏を怒らせて彼はその岩塊に手をかけた。

「おい、抛り込め。」

「よし來た。」

忽ち集つた數人の手の中で、黒い岩塊は鬱憤を晴した凶賊のやうに、悠々と渦の傍へ動き出した。

「よいか、やるぞ。」

「いち、にい、さん。」

「こん畜生ツ。」と聲が揃つた。

岩塊は一叢の羊齒の葉を突き破つて轉がると、がツと唸つて崖の中途で飛び上つた。と、あたりの岩片を蹴りつけながら、猛烈な生物のやうに渦の中へ飛び込んだ。

萬事がすむと計介は坑夫達が一齊に自分の方を見たと思つた。自分を投げ込んだ彼の手際を示すかのやうに、

「こら、この通り。」と誰も彼もの顏が澄してゐた。彼は發作的に狂暴な怒りを感じ出した。

彼はふと[illegible]の中へ[illegible]けると、[illegible]が[illegible]の[illegible]き、[illegible]たやうに[illegible]れた[illegible]に[illegible]れてゐた。

――よし、仕事をやつてくれ。

彼はいきなり彼らに背を向けると、窓の[illegible]に立つて、[illegible]の[illegible]い[illegible]の上を、[illegible]に[illegible]した一本の[illegible]のやうに[illegible]出した。彼の[illegible]から[illegible]が[illegible]つて来た。彼の背中は[illegible]んだ沈默に[illegible]まれて[illegible]のたうちながら、前へ前へと一團の沈默を引き摺つて前進した。瞬間、彼は自分の兩眼が、自分の内部に[illegible]げられて[illegible]を同時に見ることが出来ないと云ふ人間の[illegible]を[illegible]した。

彼は[illegible]られた[illegible]つて[illegible]になら[illegible]、[illegible]て[illegible]物の[illegible]に[illegible]て[illegible]自分の[illegible]を[illegible]た。[illegible]の[illegible]に自分の組織してゐる一個の[illegible]の[illegible]は、[illegible]の[illegible]んでゐるト[illegible]の[illegible]に[illegible]へ[illegible]く[illegible]、[illegible]へると、彼は自分の[illegible]の[illegible]に[illegible]く[illegible]つて来た。自分の[illegible]ることは、ト[illegible]の[illegible]たのだ。ト[illegible]は[illegible]する[illegible]として、[illegible]人間[illegible]宮の[illegible]物が[illegible]する。[illegible]して、[illegible]は[illegible]の[illegible]――

――しかし、[illegible]しいんだ。

[illegible]はいつ[illegible]に[illegible]て[illegible]

[illegible]い、

――[illegible]に[illegible]くの[illegible]の目的は、[illegible]の[illegible]作用である。

峡谷は月の下で鉛の皿のやうに光つてゐた。計介は十三番の番割からお熊を呼び出さうと焦慮してゐた。彼は[illegible]から到着する筈の鑿岩機が坑夫達に担ぎつけられてゐるかどうかを知りたかつたからである。

彼は飯場へ行くと、水管にかかつた筧の水を跨いで裏口から覗いてみた。すると、お熊は、立ち上つた男の頭へ猛狗のやうに飛びかかつた。

「ぶち斬るぞ。」と男は叫んだ。

男はお熊の首へ手を巻くと、ぶるぶる左右に揺れ出した。お熊は男の片足をひつかかへて押しつけたと、男の頭はどつと後の藁壁の中へ突き刺さつた。

計介は此の二人の格闘を別に珍らしいとも思はなかつた。これはいつでも起るお熊と男との痴情の果だ。

男は藁の中へ頭を突き込んだまま逞しい片足を觸角のやうに振り廻して呻いてゐた。その暇にお熊は素早く裏の方へ飛び出した。彼女は月に誘ひ出された狐のやうに、どこかの岩影に隠れてゐる新らしい男の所へ行くのである。

計介は小屋の横へ廻つてお熊の行く先きを眺めてゐた。彼女は太股に月の光りを踊らせながら、勇ましく枕木の上を駈けていつた。暫くすると彼の女の後から、ビール壜をひつさげた男が静まり返つた殺氣を含んですたすたと駈けて来た。丁度お熊が岩角の先端を廻らうとしたときである。「待てツ、」と男は叫ぶと、お熊を目がけてビール壜を投げつけた。壜は一閃、岩角に衝つて爆けると、月の破片のやうにばらばらと崖の下へ散つていつた。

計介はお熊の行衛を追跡することを断念した。今數分の後、岩影で野蛮な喘々の聲が二つ洩れれば済みさうに思はれたからだつた。彼は暫く筧の傍の苔の上に腰を下ろしてお熊の歸るのを待つてゐた。

隣りの小屋の湯氣の滿ちた裏窓からは、滿面に腫物を咲かせた坑夫の子の凝顔が岡のやうに見えてゐた。その前の横

からは、怠惰な足が一本鬚を生やして延び出てゐた。その足と髪頭の上で、時々大きな母親の影が湯氣と一緒に搖れてゐた。

その横の飯場頭の部屋の中では、渡り者の坑夫達が轉がりながら放埒な殺人法を物語つてゐるのに相違なかつた。この頭の瀧川はもう人を三人殺して來た男である。人を一人殺す度に彼は部下の者から尊敬された。さうして、彼はまたより部下の信頼を得んがために計介の父の所へ坑夫達の代表となつて要求を持ち込んで來るのが例であつた。その癖、彼は計介の父が利益を得てゐる歩合よりも、時にはより多く坑夫達の割前を刎ねてゐた。實はトンネルが一日街へ近づけば、その近づいた程度に應じた金額を計介の父から受けとるものは、坑夫達ではなくして此の飯場を持つた飯場頭である。彼はその金の中から、坑夫達の食費と、頭として尊敬された滿足な代價とを引きとつた殘金を、單價に從つて下の坑夫達に與へるのだ。さうして、坑夫達は、ただ此の頭の命のままに、何らの不平をも赦されず決定された日給額をもつて、日日岩石と格鬪を續けて行く。もし彼らが一尺トンネルを街へ向つて押し出せば、その上へ落ち込んで來る街からの利得は計介の父と飯場頭がただ無爲の報酬として簡潔に取り去つて了ふだけなのだ。此のため、トンネルの進行と共に起る爭ひは常に計介の父と飯場頭との間に於て續けられた。飯場頭は部下の坑夫達の暴力を背景にもつて計介の父を脅迫した。しかし、計介の父は、ただ飯場頭を撰定し得る權力と、所得を誤魔化し得る地位以外の何物も持つてゐなかつた。

計介は飯場頭の中でも特に瀧川にもつとも反感を感じてゐた。瀧川は部下の坑夫達を脅迫するために用ひる力さへ、彼の殺人して來た頭數と、その屏風のやうな肩とであつた。

七

計介はふと瀧川が坑夫達に隠してゐるダイナマイトのことを思ひ出すと、小屋の外から裏庭の闇を手探つてあいてみた。彼の影の移動につれて、踏まれる蘭の花の中でキリギリスが鳴きやんだ。

彼が足音を忍ばせて月光の中から軒影へ廻らうとしたときである。不意に町の闇の中で二人の男が飛び出した。計介は小川を飛び越すやうに、小屋と小屋との間をひらりとんだ。だが、飛んだ瞬間、彼は眼の一角で濃艶な、瀧川の妻の亂れた赤い姿を見てとつた。

計介は瀧川がゐないと知ると、表へ廻つて彼の小屋へ行つてみた。中には坑夫が一人火の消えたバットを喰はへたまま眠つてゐた。彼は今すぐにも這入つて來るにちがひない瀧川の妻の亂れた樣子を眺めるのに興味を持つた。彼は藥の上に腰を降ろして部屋の中を見廻した。此の部屋の中のどこかに百本のダイナマイが隠れてゐる。それを思ふと、彼は今此の家に火を點けて、次から次へと正直に自分の所在を爆發させて行くダイナマイトの顔を見たくなつた。

「あーら、いらつしやい。」

暫くすると瀧川の妻のお品が這入つて來た。

「今晩は。泥棒がしたくなつたので坐り込んでゐるんだよ。誰もゐないぢやないか。」

「ええ、坑夫が二人逃げたので皆が追つかけていきましたの。」

「いつ逃げたんだ。」

「さうね。今頃は崖から抛り込まれてゐる頃よ。」

良人の留守を適用しても、此の若い女は湯から上つたやうにさばけてゐた。

「二人逃げたとすると、三百圓の損か。」

「さうよ。でも、こんな處だから逃げないものは馬鹿だわね。私、あの二人の逃げるのはちやんと前から知つてゐたの。」彼女は聲を潜めて囁くやうに彼に云つた。

「ぢや、默つてゐたのはおかしいぞ。」

「だつて、私だつて逃げたいのよ。」

計介は全く此の思ひがけないお品の言葉に默つて了つた。何ぜ自分にさう云ふことを彼女は云ひ出したのか、それが彼には分らなかつた。

「君は瀧川が嫌ひかね。」

「ええ、私、瞞されて來たんですもの。」

「ぢや、逃げるんだ。」

「逃げるなら、こんなときだわね。」

「瀧川と一緒になつてどれほどになるんかね。」

「半年ほどよ。でも木山さん、私、逃げたいんだけど、」

そこまで云ふと、急にお品はうなだれて默り出した。彼は一寸釣られて此の峽谷から逃げ出す方法を考へた。

「でも、私が逃げたら、瀧川はきつと私を殺して了つてよ。」

「そりや分らないな。しかし、あんな男だからそのうちにまた他の女を見つけるさ。」

計介はふとその話とは全く別の、瀧川が自分達一家の者にどんな計畫を立ててゐるかと云ふことを知りたくなつた。

「瀧川は俺の親父のことなんか、何とか云つてゐなかつたかね。」

「默つてゐたわ。怒つてゐてよ。」

「そりや怒る。」

「あなたのお父さんが腰を上げないものだから、私、まだ荷物もまとめて貰へないの。」

「實は、俺もこの山にはもうゐたくないんだが、どうも思ふやうに行かなくつて。」

「あなたなんかいいぢやないの。お金はあるし、身體はきくし。私なんか一寸思ふやうに動くと殺されるんだから。」

「そんな風に見えるかね。俺だつていつ殺されるか知れたものぢやないんだが。」

「どうしてさ？」

「現に瀧川なんか、俺や親父を敵のやうに思つてゐるんだからね。」

彼女は暫く默つてゐてから眠てゐる男の方を顧つた。

「あの男も、もう直きに逃げ出してよ。そりや氣の毒なほど瀧川になぐられ通しなの。」

「とにかく、お品さんや坑夫はたゞ上手に逃げればそれでいいんだ。しかし、俺はさうはいかない。第一俺なんか自分一人で逃げたつて、後に親父や妹がゐるんだからね、それが始終氣になつて。」

「ほんとにここにゐると、始終びくびくしてなきやならないわね。今日逃げた坑夫だつて、夕べはビール壜で頭をなぐられたのよ。」

「どうしたんだ。」

「ただね、風邪を引いて寝てただけなの。」

二人は呼吸が詰つたやうに默つてゐた。

「私、思ひ切つて逃げやうかしら。」とお品は云つた。
「そりやそうするに限る。」
「でも、私、うまく逃げられるかしら。」
「逃げてからが難かしいよ、逃げてからどうするんだ。」
「そりや何んでもないわ、あのね、」とお品は云ふと立ち上つて、「一寸」と云つた。
彼女は裏口へ出ると、月の光りの中からすらりと彼の方を振り返つた。彼はお品の後からついて出た。筧の下の蘭の白い花の中で、入れ忘れられた釜が月光を含んだまま傾いてゐた。
お品は斷崖の端の窪んだ岩影の間へ來ると、あたりを見透かしながら息づく大輪のやうな華やかな胸を近づけた。
「ね、木山さん、私、ほんとうに逃げるつもりたんだから。」
「うむ、」
彼の呼吸は彼女の忙しい胸の起伏に引き摺られた。
「あなたに迷惑はかけないわ。私、とうから逃げやうと思つてたんですもの。」
「うむ、」
「私、瀧川に瞞されて來たんだから、捕まれば街の警察へ云へばいいわね。」
「瞞されたつて！」
「私、お父さんがここにゐるつて云はれたものだから、瀧川について來たの。そしたら、みんな嘘だつたのよ。ね、逃げるんだつたら、今からがいいかしら。」

「駄目だ。」

「夜明け前の方がいいかしら。」

「うん、今夜は皆が坑夫を探すのに疲れてゐるから、その方がいい。」

「さうね、ぢや私、さうするわ。」

計介は大海へ乗り出したやうに引きしまつてきた。

「一人で逃げるのかね。」

「ええ、何ぜ？」

「連れがあるんだらう。」

「いやよ、さつきはお金を借りてたの。」

「いや、ある方が心配がないからさ。」

「一人よ。あなたも逃げてくれればいいんだけど。」

「そのうちに行く。だけど、お品さん、逃げてからどうするんだ。」

「私、女給になるの。前にもさうだつたのよ。」

「危いね。」

「ね、ね、どうかしてよ。」

「よし。」

彼は片手で藤蔓を掴んだまま、お品の背中に手を廻した。月光を割つた顔が、鮮鋭な斧のやうに迫つて来た。女の好

閉じた彼の胸の中で、弱々しく断片の外へしなり出した。と、片肉の襞が彼女の頬髭に挟められて跳ね上つた。

「私、ほんとに待つてよ。」

「ああ、」

「向うへ行つたら直ぐ手紙を出すわ。」

「うちへ来いつたらおつしやる。」

「私、お金こしらへたらあなたに来て貰ひたいの。」

「分つた。」

「そのがどんなに嬉しいか知れないわ。」

「分つた。」

「何だかあなた、ぽんぽん云つて、ね、ね、ほんとに来てよ。私、さう思やなけりや、ね、ねえとお門は云ひながら叶介の胸を抓つて揺り動かした。

八

叶介はその夜床の中へ這入つても眠れなかつた。彼は表の門の外から音を踏んで近か寄る酒川の足音を身に感じた。足音が高まると、耳元のピストルに手を触れて冷たい銃身の感触に気を鎮めた。時計の音がだんだんと強く彼の心臓を狙つて進んで来た。ふと彼は表門の方から岩を裂きむしる行音をききつけた。彼は床は起きて障子を開けた。と、彼の大きな眼が突つた夜の中へ関にたきき立つて彼を見詰めてゐた。彼は一斉に矢口を向けられたやうに身が慄へた。彼は

身體をすくめて[illegible]お酒すと闇になつた。彼はただ[illegible]
心に外界にこれから空を向いて這ひ出めた。すると、彼は間もなく月に照らせられるやうに唸りだした。眼を覚めると、
行に晴れ渡つてゐた。すべては[illegible]と云ふ事で[illegible]しても昨夜のやうな気持に返らなかつた。

彼はお品が逃げ出したといふ噂を聞いたのはその日の午後であつた。

瀧川はお品を逃がした手引きを茶店の老婆だと睨んだらしく、街へお品を捜しに行く途中、ダイナマイトをもつて直ぐ茶店へ飛込んだと云ふ話も聞えて来た。

計介は進行を計る寄り道に、瀧川の飯場を覗いて見た。すると、誰もゐない部屋の中にお品の赤い古着の裏が残されたやうに引き摺られてのめつてゐた。

「やられるな。」彼は脊中を叩かれたやうに動悸が打つた。

彼は昨夜お品の胸が芳香を放つて反り返つた断崖の傍へ行つてみた。彼が彼女を抱きかかへたときに握つた藤蔓は、葉を落としたまま所々擦りむけて青い肌を出してゐた。ふと彼はお品の胸から股へうねつた芳醇な熱い一疋の線を思ひ出した。

それは昨夜から絶えず彼の胎内に入り浸つてゐる新鮮な吸盤を持つた生物だつた。此のお品の弾力に満ちた鉄線が揺らめく度に、彼は彼女に逢ひたくなつて切なかつた。

遠くの一面の白い花の中で、黒い花のやうに開いたトンネルの口から、坑夫達は鍛冶場へ昆蟲のやうに飛び降りてゐた。続いてダイナマイトの爆発する音響が次ぎ次ぎに峡谷の中で震動した。

計介は筧の水を飲みながら、瀧川飯場から坑夫達が続々と逃亡することを希望した。もし瀧川が日日お品を街へ捜し

に出歩いてゐるとするなら、瀧川飯場は潰れて行くにちがひなかつた。もし瀧川飯場が潰れたなら、街から來る警官隊を瀧川の持ち場の十三號のトンネルへ据えつければそれで良いと計介は考へた。もしまた、その十三號が彼自身の自由になる日が來たならば彼はそれから上る利益を直接坑夫達へ分擔しやうと計畫した。すればピストルが不用になる。物價の暴騰が恐るるに足らなくなる。坑夫達の生活は堅固になる。負傷者の家族は安心する。父と妹の危險が救はれる。さうして、街へ出るトンネルは、日日その進行能率を平和に増進さすにちがひない。——

計介はお品の逃亡を感謝した。ただ今は、もつとも健全にトンネルを街へ進行さすための問題として瀧川の理性がお品の逃亡によつて、どれほど狂ひを生じてゐるかと云ふことが殘されてゐるだけだつた。それを思ふと、彼はまたあのお品の胸から股へ走つた潑剌とした一定の熱線を試すやうに思ひ出した。もし瀧川の頭に狂ひが激しく生じたとしたならば、それはお品のあの胸から股へ走つた熱線が街へ走つたからにちがひないのだ。——

つまる所、お品の一定の線が街へトンネルを押し出す線であつたのだ。——計介は、此の突如として混沌の中からめれ上つて來た一本の新鮮な理論を發見すると、にやにや陰謀者のやうに笑ひ出した。

く——濟まぬが、あの線は俺の胸へひつ着いた線なんだ。

——あの線は俺の云ふままになる線だ。

九

その日の夕暮、瀧川飯場から三人の坑夫が逃げ出した。しかし、お品を捜しに行つた瀧川はまだ街から歸つて來なかつた。

次の日の夕暮が再び來た。

すると、白髮の下男が青ざめた顔をして、レールに躓きながら計介の方へ馳けて來た。

計介は不吉な風を感じて立ち上つた。

「旦那さまが、旦那さまが。」

下男は吃つたまま計介の手を引つ張つた。

「やられたのか。」

「旦那さまが。」

計介は下男の指差してゐる斷崖の方へ馳け出した。やつて來たな。と彼は思つた。

峽谷は眞白な嵐に見えた。

――だが、どこへ行くんだ。――

峽谷は廻つてゐる車輪に見えた。

彼は光つたレールに曳かれて岩層を一つ廻つた。

と、斷崖の上で、彼の父と瀧川が抱き合つたまま俯いてゐた。

彼は空中を狙つてピストルを二發放つた。

彼はしなしな風に吹かれたやうに傾く二人の方へ近づいた。

計介の父は、下から瀧川を睨むと、最後の言葉を一口云つた。

「貴樣、話では分らぬ奴か。」

すると、突然、瀧川は、平手で打たれたやうに引き下つた。

クライマツクスの頂點で、瀧川は脆くも一滴、彼の虚榮心へ注射されたのだ。

計介の父は眞直ぐに立ち直ると、汗をかいたまま威張り出した。

「話があるなら、今晩來い。」

「はア。」と瀧川は頭を下げた。

父と息子は歸つて來た。二人は竝んだまま、鼓動の高さを驗べるやうに默つてゐた。

計介は瀧川の怒りがお品の逃亡と徒勞な彼の探索からだと云ふことは直ぐ分つた。瀧川はお品の逃げた原因を、彼女の着物を買はなかつたがためだと思つてゐる。彼のお品を繋ぎとめてゐた繩が一枚の晴着だつたとしたならば、瀧川に晴着を買はさなかつた計介の父が突きかかられるのは定つてゐた。

――しかし、お品を逃がしたのは此の俺だ。

――お品の線がトンネルを押し出す前に、親父の身體が押し出された。

計介は悲劇と喜劇の境界線が何處にあるのか分らなかつた。

だが、彼は瀧川に對する反感から今は少しも彼に恐怖を感じなかつた。ただ恐怖に代つて腹立たしさが昂じて來た。二人が家へ歸ると、妹は窓へ投げかけられた着物のやうに、俯向いたまま窓の外へ折れてゐた。霧が煙のやうに峽谷へ流れて來た。下男は物音を潜めて夕食の準備をし始めた。霧の中を一列に竝んだ坑夫の足が影のやうに通つていつた。計介の父はランプが點いても默つてゐた。夕餉の時にも默つてゐた。恐らく頑固な父の胸で、恐怖が嵐のやうに吹き捲くつてゐるのに相違ない。――ふと計介は、父が坑夫の單價を上げ出すことを考へてゐるのではないかと考へた。

「お父さん、もういいですからまた單價を上げて下つたらどうですか。」

彼は夕飯をすませてから、父の傍で煙草を吸ひながら一流の注射をやつた。だが、父は起されたやうにむつとして黙つてゐた。

「お父さんはいいでせうが、傍にゐる者が心配でいけませんよ。」

「うむ、」と父は初めて云ひ出した。

「上げてやつても根つから損はしないでせう。僕は損をするより、今日のやうな危いことのない方がいいですな。」

「お前のやうなものは、此の商賣は出來んわい。」まだ、生意氣なと彼は思つた。

二人はそのまま黙り込んだ。しかし、計介は父が弱味を見せない範圍に於て、間もなく確に單價を上げて行くにちがひないのを見てとつた。彼は街へ逃げ出したお品の線が今頃黙つて父の心臓を狙つて來たのを感じると、窓で坐つたランプの下でまたにやりにやりと笑ひ出した。

十

計介は坑夫の單價の上ることが、トンネルの構成上喜ぶ可きことであるとしても、坑夫の單價が上ることによつて、瀧川が一層坑夫達の中で勢力を張り出すのが不快であつた。彼は出來ることなら、此の機會を利用して瀧川を完全に峽谷から追放したかつた。彼が峽谷に動いてゐる限り、計介の父が坑夫の單價をいくら上げたとしても同じであつた。瀧川は、その上つた單價に從つて、また下の坑夫からそれだけ絞り上げるのは定つてゐた。

——あ奴はトンネルを食ふ蟲だ。

――あ奴は坑夫を痩せさすバチルスだ。

――あ奴が居れば、今にそこからトンネルは腐るのだ。

しかし、ただ三人の人間を殺して來たと云ふに過ぎない瀧川の一箇の過去が、何故かくも大きなトンネルを腐らすのか。計介は今はただ瀧川一人の狂暴な性格をめがけて突きかかつて行きたくなつた。

――他のことは後廻しだ。

――あ奴をここから抛り出すのだ。

彼はふと今日瀧川の飯場から、三人の坑夫が逃亡したのを思ひ出した。――これで總計五人の坑夫が逃亡した。五人の勞力がなくなると、瀧川の隧口からは一日平均二尺の進行が遲れて來る。二尺の進行が遲れると、彼の損害は一日平均十圓だ。今だ。

――今一人逃亡すればあ奴は完全に立てなくなる。

――すればあ奴は逃げ出すより仕方がない。

――お品萬歳！

――俺は彼の後へ鑿岩機を据ゑつけるのだ。

――鑿岩機が追ひ出す人間だけは他の隧口へ廻せば良い。

計介は萬事今暫く待つて瀧川の様子を見やうと考へた。今はトンネルを最も立派に進行さす條件として殘されてゐる問題は、鑿岩機が到着する時機よりも、瀧川の逃亡する時機の方がより早かるべき必要のあることだつた。もし瀧川が鑿岩機の到着を嗅ぎつければ、彼は此の峽谷から動かないのに定つてゐたも。しそれを強ひて追放するとすれば、彼

は[illegible]の峡谷の内に[illegible]なことさへあつた。

しかし、計介には瀧川の逃亡の後、瀧川の唯一の功績である賃銀の引上げ運動の結末をいかに[illegible]すべき[illegible]なつて来た。恐らく計介の父は、瀧川のゐない限り、賃銀を上げやうとはしないにちがひないのだ。

――よし、そのときはその時だ。

――俺は瀧川に代つて親父とどこまでも争ひを続けてやる。

――もしそれでも親父が俺の云ふことを聞かないなら、俺は親父を守ることは断然やめだ。

しかし、瀧川は逃亡した坑夫の頭数だけ、再び坑夫を募集し始めたとしたならば？　これがまた計介の新らしい問題となつて彼の頭に残り出した。だが、瀧川が五人の坑夫を集めるには少くとも三百円の現金が必要だつた。彼に今三百円の金が出来るとすれば、いづれ計介の父から借りるのは分つてゐた。

――そこで、一つ瀧川に嘘をついてやるのである。

「いや、お前の所のトンネルは、まだきだこれから石が硬くなるばかりだと技師は云つてゐる。お前の所へ金を注ぎこんでばかりゐては、他の飯場が怒り出すに定つてゐる。」

計介の頭は此の嘘と事実の丸薬を考へ出すと、初めて軽くなつて来た。だが、もし此の寸法に一分でも狂ひでも出来始めたら、トンネルは峡谷の横腹で洞穴になるにちがひないと思つた。

十一

翌日、お品から計介の所へ変名の手紙が来た。

——私たちたちこんな所へ來たわ。ここは汚いカフエーよ。お別れした晩は眠れませんでした。私の名前はお櫻さんつて云ふの。早く來て下さいな。ずつと一緒にゐて下さいなんて云はなくつてよ。御身分が違ふんですもの。でも、一日でもいいから來てちやうだい。早くよ、遲くなれば私、どんなになつてゐるか知れないわ。私もう瀧川に逢ふのなんか恐かないの。私、あなたにお逢ひしたい一心なの。もうずつと山にゐるときから私、あなたのことばかり思つてゐましたの。でも、あなたはいつも横ばかり見て鬱ぎ込んでゐらしやるんですもの、私だつて仕方がないわ。ね、ね、早くよ、下から呼ぶからここで、ね、——

計介はお品に襟首を掴まれて搖られてゐるやうな感じがした。

「行く行く、だが、まア待つてくれ。」

今直ぐ行つては、瀧川と父とのその後の樣子が分らなかつた。彼はお品に返事を書かうと思つて手近の紙片を搜し出した。積み上られたダイナマイトの箱の上に用紙が見えた。彼は周章てながら下からその用紙の片端を持つて、上に乘つてゐる塵紙の包み物のまま引き摺つた。と、塵紙の中から、數百枚の紙幣が乾いたビラのやうに、彼の頭の上へ降つて來た。彼は、水を冠つた裸體のやうに紙幣を浴びて動けなかつた。彼はふためきながら散亂してゐる紙幣を掻き集せやうとした。だが、ふと彼は、紙幣に叩かれて化石してゐる自分の心臓を感じると、ぐつと腹が立つて來た。彼は意地になり出した。數枚の紙幣の群れが、微風に波立つて緣側の方へ辷つて行つた。

——俺は拾つてやるものか。

紙幣の群れは、彼の背後を馳走する無數の慧敏な魚に見えた。

——此奴だ、

——此奴が人間を馬鹿にした奴だ。

彼は鮮かな十圓紙幣の畑の中に坐り込むと、直ぐお品へやる戀文を書き始めた。

「俺はあのときからあなたに逢ひたくて仕方がない。しかし、今直ぐに逢ひに行つては後が困るのだ。長くは必ず待たせないから、いま暫くだ、ばたばたしないで音無しくしてゐてくれ。金は暫くすれば持つて行く。」

彼は手元にひつかかつた十圓札を四五枚つかんで手紙の中へ卷き込んだ。午前のダイナマイトが地の底で爆け出した

——いや待て、と彼は思つた。

此の金は親父が坑夫へ支拂ふ此の月の金にちがひない。すると？

——俺の撒き散らした金は坑夫の金だ。

續いてまたダイナマイトが八號で爆發した。

——今俺が此の金を一枚失へば、七人の坑夫の今日の生活が吹き飛んで了ふのだ。

——それを三百枚としてみると？

——二千人の人間だ！

また十號と九號とで爆發した。と、續いて五號が彼の直下で爆發した。

彼は狙はれたやうに狼狽へ出すと、ひらひら風に搖れながら散亂してゐる紙幣の波の中を這ひ廻つた。

「あらあら、兄さん。」

妹は夾竹桃の花束を持つて新鮮な顏で這入つて來た。彼女は暫く手品師でも見るやうに、ぼんやりと彼を見降したまま立つてゐた。

「それ、お父さんが紙で包んでをきなすつたお金でせう？」

「拾へッ。」と彼は云つた。

妹は緣側から崖の方へ飛び立たうとする紙幣の群れを、夾竹桃の花束で掃きよせ出した。遠くの峽谷の上下から、ダイナマイトの爆發する音響が次ぎに次ぎに襲つて來た。

暫くすると、掻き寄せられた紙幣が盛り上つた更紗の模樣のやうに二人の前で混雜した。

「私、折角貰つて來た花が目茶苦茶になつちやつたわ。どうなすつたの。」

「此の金を揃へてくれ。」

「でも、お母さんの日にお金を撒くなんて、隨分お母さんだつて喜んでゐらしつてよ。」

計介には、父が此の多額の金を故意に數枚の鼻紙の中にくるめて出て行つた大膽な心理が直ぐ飲み込めた。金庫の中に秘められた金よりも、鼻紙の中に包まれた金の方が、いつの場合に於ても、より鼻紙に見えるにちがひないのだ。

彼は妹が紙幣を揃へてゐる暇に、お品と自分の手紙をポケットの中へ押し込んだ。

——しかし、金は？

金は手紙にくるんだそのままをお品へやらうと彼は思つた。

——今にお品が坑夫の單價を上げ出すのだ。その他の誰でもない。これは明かなことではないか。

彼はお品にやつた足らない坑夫の金だけは、やがてお品が瀧川を追放させる報酬として、父がそれだけ負擔すべきが當然だと考へた。彼は直ぐポストのある峽谷の村の方へ下つて行つた。

十二

計介が村から歸つて來ると、彼の家の方から瀧川が歸つて來た。二人は當然レールの上で行き合はねばならなかつ

た。だが、計介には、瀧川の姿がまるで肩の張つた一疋の家畜に見えた。彼は自分がどうして此の瀧川を恐れてゐたのか分らなかつた。彼は瀧川を見降するやうに、彼から二人の距離を縮め出した。

「ヤア、」と瀧川は猾さうに笑ひかけた。

「ヤア、」と彼は云つた。

二人はその儘肩を譲り合つて狹い枕木の上を行き過ぎた。計介は二人の間をかすめた風からお品の匂を嗅がうとした。

――だが、あの曲者め、俺の家で何をやらかして來たのかな。

ふと彼は父が絞め殺されてゐる所が浮んで來た。彼は急いで家へ這入ると、父はよろめきながらズボンへ片足を入れてゐた。

「今、瀧川が來たでせう。」

「うむ、」と父は云つた。

「何にしにやつて來たんです？」

「鑿岩機が來たら、あ奴に借してやることにしてやつた。」

――駄目だ、と彼は思つた。

トンネルが俄に彼の頭の中で崩れ出した。

「あ奴に借してやらないと、進行がむづかしい。」

――親父は瀧川が恐いのだ！

彼は腹立たしさに黙り込んだ。

――俺が瀧川を一番苦しめてゐるときに、瀧川を一番助けてゐたのは俺の親父だ。

――賭博の勝負は決定した。

――瀧川が勝つたのだ。

計介は一切の苦しみを振り捨てゝ、今は、瀧川に復讐するために、街のお品の所へ馳け出して行きたくなつた。

「いや、何に、利益は俺と瀧川とで分けるのさ。」と父は云ふと笑ひ出した。

彼は横を向きたくなつた。――もう單價は上ることがないだらう。坑夫達は鑿岩機に食はれて了ふにちがひない。

「それで他の者が、指を喰はへてゐればいいですね。」

「何ァに、」

「第一もう物價が騰つて來るぢやないですか。」

「さうしたら、それまでさ。」

「まだまだ瀧川のやうな奴の出て來るのは、これからですよ。」

父の鼻は赤い顏の眞ん中で膨れ出した。

「貴樣は默つてゐりやそれでいいんだ。」

「來ましたね。」

「何をツ、」と父は叫んだ。

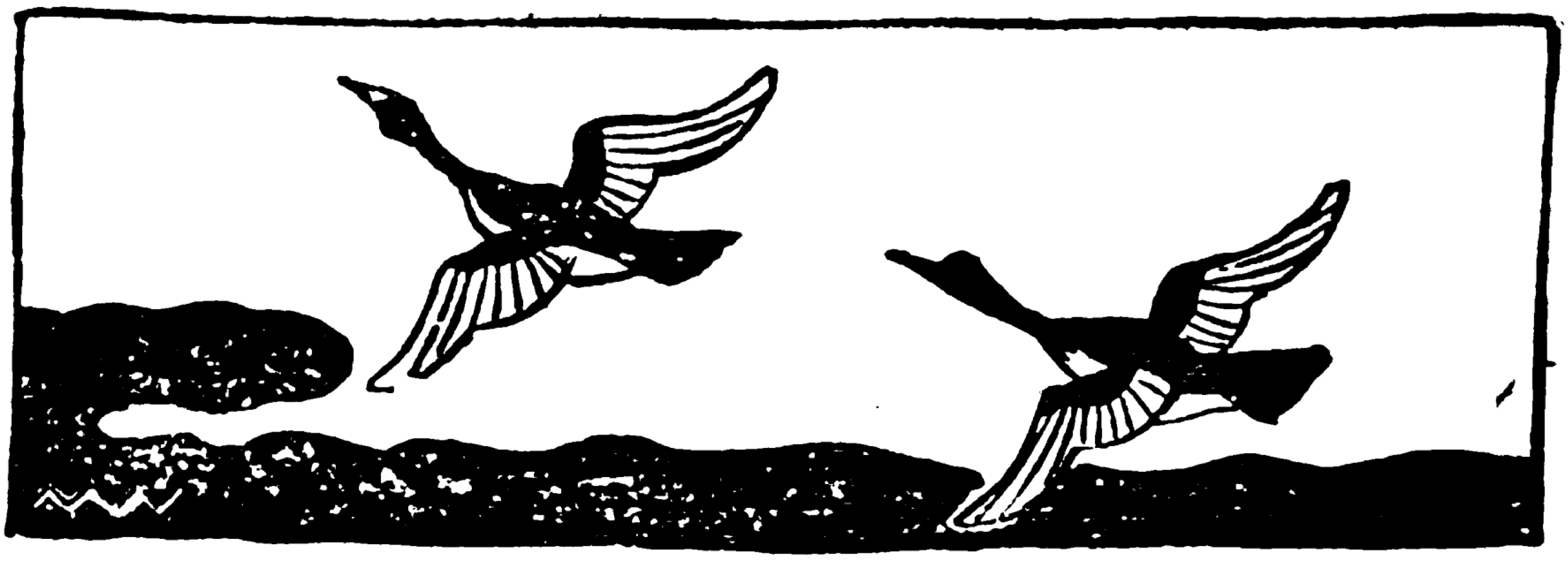
彼は横づらを毆打られると、反り返つた。と、また父の拳が振り上つた。彼は表の方へ飛び出した。

――誰がこんな苦しみをするものか。

――今にトンネルは洞穴になるだらう。

――今に親父の死骸が洞穴のまん中で寢轉んでゐるだらう

彼はトロツコを拾ふとお品のゐる街の方へ疾走した。岩層のカーブを乘り切る度に、峽谷の風光は明るく河口の方へ展開した。晴れ渡つた河口からは、濃藍色の鰯の群れが峽谷の中へ登つて來た。彼は初めて、トンネルを拔け出るやうに刻々幸福な速力を感じ出した。



仇討出世譚

菊池寛

人物

立石伊織――その娘楓
柴田與七郎――その弟時之助
小伴新四郎――その子新之丞
大石半九郎――その弟半三郎
久志小左衞門――その子澤之助

時

萬治の頃。

第一幕

第一場

但馬。出石の郊外。

情景。

神社の玉垣を延見する森の中。老杉が多い。十間ばかり彼方に一際秀れた大樹が見える。地上から、一間位上に注連縄がはり渡してある。神木であることが分る。地上には尾花や女郎花が咲いてゐる。百舌鳥の聲が、けたましく聞える。小伴新四郎と葉田與七郎とが、連れ立つて梢の鳥を探してゐる。葉田與七郎は、半弓を手にしてゐる。

小伴。おゝ居たぞ。居たぞ。

葉田。何處だ。〳〵。

小伴。ほら！あすこだ。見えんか。もつと此方へよつて見ろ。

葉田。見えん。何處だ何處だ。

小伴。あれが見えんか。ほら、あの大きい枝と幹との分れ目を見ろ。

葉田。なるほど、ゐた〳〵。何だ、白鷺ぢやないか。

小伴。白鷺だつていゝじやないか。

葉田。よし、俺がやらう。

（矢をつがへる）

小作。茲からは、少し遠いぞ。

栗田。もつと近よつて見ようか。

（栗田。二間ばかり近寄る。すぐ引返す、

栗田。いやいかん。矢頭を近くすると見えなくなる。茲から、やる。

小作。茲からでは遠いぞ。當らないぞ。

栗田。えゝかまふものか。（きりゝと引きしぼる。）

（立石伊織、四十位の年配、武士らしき品位と物ごし、いつの間にか二人の後に立つて居る。）

立石。およしなされ、栗田氏（ニコ〳〵笑つてゐる）

栗田。（をどろいて振り返る）何だ！　伊織殿か、なぜお止めなさる。

立石。御覧なされ。あの杉には注連縄を張つてあるではないか。神木に矢を引くとがめ、恐しいぞ。

栗田。神木！　馬鹿なことを云はれるな！　それよりも身共が手練を御覧なされい！

（與七郎切つて放つ。矢は杉の梢に飛ぶ。が、鳥には當らない。白鷺はゆつくり飛び立つ！）

栗田。ちえつ！　しくじつた！　殘念！

立石。それ御覧なされ！　神木に止まつてゐるものに、矢が立つ筈はない。

栗田。馬鹿な！　貴殿が、ケチをつけるからぢや

立石。あはゝゝ、御身の下手な腕前の尻を此方へ持つて來るなよ。あはゝゝゝ。

葉田。あゝいま〳〵しい。

小伴。貴殿なぜ、此邊を一人でウロ〳〵してゐる。

立石。散策だよ。

葉田。嘘を云ふな。大方、此の邊で若衆とでも落ち合ふ約束があるのだらう。

立石。あはゝゝゝ阿呆なことを申すな。此立石には、そんな色めいた筋はないわ。

小伴。逸れた矢を探しに行かうか。

葉田。をけ！　見つかるまい。

小伴。茲は駄目だ。朝子山の方へでも行かうか。どうだ、立石氏同行せぬか。

立石。又にせう。

（立石、二人と別れて去らうとする。そのとき、矢のそれて行つた杉林の奥から久志小左衛門が、一散に走しつて來る。血相が變つてゐる。見ると、右の手に、今與七郎が放つた矢を握つてゐる。しかも、その矢じりは黑く血に染んでゐる。）

久志。（與七郎につか〳〵と進み寄りながら）今此の矢を射たのは貴殿か。

葉田。（駭きながらも、決然と）いかにも拙者

久志。しかと貴殿か。

葉田。念には及び申さぬ。只今樹上の白鷺に放つた矢に相違ござらぬ。

久志。然らば、改まつて申す。此の矢先にかゝつて、同件の大石半九郎、相果て申したぞ。

葉田。えゝつ！
立石、小伴。えゝつ！
葉田。それは實證か。
久志。何を僞りを申さう。
葉田。念のため、半九郎殿の御容子見分いたす。
久志。それは、御存分に。その上での御覺悟はござらう。
葉田。御念には及ばぬ。
小伴。拙者とても逃れぬかゝり合、覺悟がござる。
久志。然らば、御案内いたす。
（久志先に立つ。）
葉田。立石氏、御覧の通りの次第ぢや、半九郎殿の最後見屆けた上からは、われ等は久志殿と自然打ち果し申さう。貴殿、御迷惑ながら、御立合下さらぬか。
立石。よろしい。一緒に參らう。
（四人打ち連れて森の奥には入る）

第二場

森の奥。薄が亂れ咲いてゐる中に、大石半九郎が倒れてゐる。

前後の四人を見送りながら、[illegible]の[illegible]。

[illegible]、[illegible]。[illegible]。

久[illegible]。[illegible]、[illegible]

[illegible]。いかにも。

[illegible]。[illegible]、何[illegible]、[illegible]ない[illegible]。

久[illegible]。[illegible]、[illegible]ろ。

[illegible]のため[illegible]。[illegible]

久[illegible]。[illegible]

に、[illegible]。

[illegible]。[illegible]。

久[illegible]。[illegible]ない！

[illegible]。[illegible]！

（[illegible]。）

久[illegible]、[illegible]に。

[illegible]。いや、[illegible]、[illegible]たれば、[illegible]にお[illegible]したのも

ぞ。小[illegible]にとつても、[illegible]、[illegible]る中に、[illegible]用。

[illegible]。[illegible]、[illegible]、[illegible]

されい。

栗田。心得た然らば久志氏！

久志。おう！

（二人激しく切り合ふ。與七郎の打ち込む太刀を拂つた小左衛門の刀は、そのまゝ斬り返されて、與七郎の小びんをかすかに拂ふ。傷きながら、打ち降した與七郎の刀が、小左衛門の肩をかすめる。血を見ると、二人の爭ひは必死になる。だが、ともすれば、與七郎の太刀筋が亂れる。小伴が、助太刀の用意をする。やがて、與七郎は敵の刀を受け損じて肩先を三寸ばかり斬り下げられ倒れる。小伴新四郎、刀を拔き久志に斬りかゝる。）

小伴。助太刀御免！

久志。心得た！

（十數合。小左衛門も新四郎も、淺手深手、數ヶ所負ふ。栗田與七郎は、いつの間にかこときれてゐる。新四郎が、蔦草に足をとられて倒れる、もう起き上る力がない。小左衛門も、それに近寄らうとするのだが、身體が動かない。これも、瀕死の傷を負ふてゐる。立石、久志に近づく。）

立石。久志氏、始終のなされ方、天晴ぢや。仔細、目付へはもとより、大石氏御家族、貴殿御家族にお傳へ申すであらう

（久志は、うなづいてこと切れる。立石は、今度は、小伴新四郎に近づく。新四郎を抱き起す。）

立石。小伴氏、氣をたしかに。

（新四郎も、ほとんど息が絶えかゝてゐる。）

立石。小作氏！ 旦那ぢや、ようなされた！ 仔細、御家族に傳へようぞ。

（小作かすかにうなづき、息が絶える。そのとき、大石半九郎の仲間六助水を汲みに行つてゐたのが、竹筒に水を汲みながら、歸つて來る。此の場の容子に驚いたが、刀を拔くと、いきなり立石の背後より斬りかかる。立石危く身をかはす。）

六助。旦那さまの敵。

立石。理不盡な、人違ひぢや。

六助。えゝ逃さぬ。

（立石危く二の太刀を避ける。）

立石。えゝ、人違ひだと申すに。

六助。えゝ、卑怯者め！

（六助、はげしく斬りかかる。立石、左手をかすかに傷られる。）

立石。なに卑怯者とな、堪忍ならぬぞ。

（彼は、六助の刀を奪ひ取ると、一氣に斬り倒す。）

立稍。（自分の短慮に氣が、つく）しまつた！これでは立派な助太刀だ。加擔人になつてしまつた。もう立合人ではなくなつた。（ぢつと考へる。）含み狀をして腹を斬るか。だが、それは犬死だ。こんな小者を手にかけて。仔細をかき置いて國を出よう。逃げても心にやましいことは、少しもない俺だ。

（立石、思ひ返すと、四邊を見廻して歩み去る。入れ違ひに、大石の弟半三郎が、かけつける。兄の死骸を見て、驚

[illegible]しつゝ、久六の死骸をあらため、最後に六助を抱き起す。六助はまだ息がかよつてゐる。）

半三郎。これ、六助氣をたしかに。仔細をかたれ！　仔細を。

六助。（口をうごかさんとして言葉出でず）………

半三郎。兄上を討つたは誰ぢや。相討か、外に敵はないか。どうぢや、どうぢや。

六助。（何か話さんとして口をうごかす）………

半三郎。氣をたしかに兄上の敵は誰ぢや

六助。たて……

半三郎。何！　たて……たて……

六助。たていし……

半三郎。立石！　立石誰ぢや。立石伊織か。

六助。（うなづく）………

半三郎。それに間違はないか。兄上を討つたのは、立石に相違ないか

六助。（うなづく）………

半三郎。その立石は、どうした。逃げたか。

六助。（うなづく）………

半三郎。ちえつ、殘念！一足違ひだつた。

（くやしがる）

第二幕

河内國龍田越の茶店。萬治三年の春の暮、藤棚の藤は一杯に咲いてゐる。茶店の床几に、粟田與七郎の弟時之助と小伴新四郎の一子新之丞とが、一緒に腰かけてゐる。新之丞は、角を入れた前髮、二十に近い。時之助は二つ三つ年若。

新之丞。半三郎や澤之助は、まだ見えぬのう。

時之助。一緒に旅をして居ても、敵同志であることが、この頃はハッキリと分つて來るやうぢや。

新之丞。うむ。いつも云ふ事ぢやが、御邊の父者や拙者の兄が、立石殿に討たれる筈はない。

時之助。さうとも、立石殿が國元を立退かれるとき書殘された通、われらの父者や兄は大石殿や久志氏と打ち果されたに違ひない。

新之丞。大石殿の仲間六助が、末期の言葉丈で、立石殿を敵と思ふのは笑止ぢや。

時之助。立石殿に廻り合へば、事はハッキリ解るのぢや。

新之丞。久志や大石と敵同志であることが分つたら、どうする。

時之助。その場を去らず、斬り結ぶまでぢや。

新之丞。久志や大石も、その事が此頃は漸く分つたらしい。卑怯者の彼等ぢや、吾等の寢首を狙つてゐるかも知れぬぞ。

時之助。あはゝゝゝ立石伊織、われらは敵を狙ふてゐるのではなうて、伯父貴でも尋ねてゐるやうな氣がする。

新之丞。御身と、伊織殿息女とは、約婚との噂を聞いたが。

時之助。それは、一向存ぜぬ…………なれど鳳殿も、今年は十六か…

新之丞。あはゝゝ、時々は思ひ出すと云ふのか。
時之助。埒もないこと云はれるなよ。
（二人は笑ふ。そのとき、峠の下から大石半九郎の弟半三郎と久志の小左衛門の一子澤之助とが、旅姿で出て來る。編笠を手にしてゐる。床几に腰かけてゐる前の二人に近づく。）
半三郎。何だ！　また休んでゐるのか。
時之助。休んだが悪いか。
半三郎。藤井寺で、晝食（ひるげ）を使つたときあんなに休息をしたではないか。遊山半分の旅ではないぞ。
時之助。と云つて、先を急ぐ旅ではない。
新之丞。今夜は、麓の宿で宿ればよいのぢや。
澤之助。悠長なこと云はれるな。まだあんなに日が高い。壺阪まで行かねばならぬ。
新之丞。そんなに先を急いで、何になる。何時何日に、何處まで行かねばならぬと云ふのではない。敵討の旅に先をいそぐは無用ぢや。敵は、案外この邊に居ようも知れぬ。
半三郎。そのやうな心掛なればこそ、まだ敵が討てぬのぢや。國を出て二年になるに、まだ日本半國廻れぬのぢや。
新之丞。日本全國六十餘州を廻り切つたら、敵が打てる保證があるか。
半三郎。茶店の床几にのんべんだらりと腰かけてゐるよりも、保證があるわ。
新之丞。何を！
澤之助。まあ、いゝ。まあいゝ。だが、新之丞どの。彼是と口實を作つて、身の足弱をかくされるな。

新之丞。なに、足弱！貴殿こそ、米子から津山へ出る四十曲の山坂へかゝつたとき、足を痛め、身共の肩にかゝつたのを忘れたか。

澤之助。何を！

新之丞。敵の在所さへ別れば、三十里四十里は、一飛びにでも飛んで行く。わかりもしない敵に、先を急いで何になる

澤之助。御身達が、急がなければ拙者達丈でも急ぐ。大和路へは入つて、今日で幾日になると思ふ。故郷を出てからも、二年と三ケ月ぢや。我等は敵を打つに心が急がれるのぢや。悠長な、其方達と同伴は所詮無用ぢや。今日からは、別々にならう。のう、大石氏。

半三郎。道理ぢや、毎日恩鬪々々いがみ合ふよりも別れた方が、せいせいする。

時之助。別れる？　別れるのは此方が、不承知ぢや。

半三郎。何ぢやと。

時之助。立石伊織に逢つて、委細が分れば、拙者等の敵は、立石殿でなくて御身達かも知れぬのぢや。

半三郎。それは、此方も覺悟をしてゐる。

新之丞。それ見ろ。お互に敵同志かも知れんではないか。立石殿に逢ふまでは、お互に取り逃してはならんのぢや。

半三郎。立石に逢ふまでもない。望みとあらば、今でも立ち合ふてやる。刀を拔け！用意せい！

時之助。何を。

新之丞。まて〳〵。今斬合ふて死ねば犬死ぢや。立石殿に逢ふて、義理を質してから、潔く斬合ふ。

半三郎。えゝ面倒な待遠しい。

時之助。待遠しい！　拙者等の太刀先にかゝるのだ、それほど待遠しいか。
半三郎。何を！
澤之助。お待ちなされ半三郎どの。問答無益ぢや。立石に逢ふまで、勘忍なされ！立石に逢へは、何事も片がつくのぢや。
新之丞。(冷笑しながら) 其處へ氣がつけば重疊ぢや。敵打の旅は、たゞ辛抱に在りと、昔から定まつてゐるのぢや。
半三郎。あゝ、ぢりぢりする。
澤之助。まあ、いゝ。
時之助。此方こそ、ぢりぢりするわ。

(半三郎と澤之助、前の二人とは別な床几に腰かける。茶屋の女房茶を汲んで二人にも出す。そのとき、峠の下から一挺の女乘物が、上つて來る。四十位の町人風の男がつき添つてゐる。)

茶屋の女房。どうぞ、休んでおいでなさいませ。
籠の者。旦那、休ませて下さい。
付添の男。よからう。少し休んで行かうか。でも、蟲坂までは、いく程もなからうな。
籠の者。大丈夫でございます。まだ日の在る中に、向へつきます。
付添の男。やつと、これで重荷が下りた。

(茶屋の女房茶を汲んで、皆に出す。乘物に近づく)

茶屋の女房。どうぞ、お茶を一つお上りなさいませ。
付添の男。お孃さま。一寸、降りて御休息なさりませぬか。よい景色でござりますぞ。

籠の中の聲。いゝえ。
付添の男。お疲れではござりませぬか。
籠の中の聲。いゝえ。かまふて下さるな。
茶屋の女房。お茶など一つ召上りませ。
（籠の中の女、簾を半かゝげ、白き手を出してそれを受ける。以前の若衆達、若き女性のけはひを感じ、一齊に籠の方を注視する。ふと、籠の中で鈴の音がする。一疋の狆が走り出る。）
籠の中の聲。玉よ。出るのではないよ。玉よ玉よ。
（狆、振り向かずに籠をはなれる。）
茶屋の女房。可愛い仲でございますな。
籠の者。狆も、籠の中ぢや窮屈だらう。小便をしたいのぢやございませぬか。
籠の中の聲。はやく捕へてたも。
（狆、いつの間にかちよこ〳〵と走しり、新之丞の坐つてゐる床几の所へゆく。新之丞、手であやす。）
新之丞。お〻可愛い狆ぢや。（抱き上げる）
茶屋の女房。どうぞ、此方へ下さいませ。
（新之丞、女房に手渡す。時之助鋭くその狆を見入る。女房籠の中に狆を入れる。）
付添の男。どうだ、少し早いやうだが、もう一息やつて貰はうか。
籠の者。合點ぢや、さあ相棒もう一息やらう。

他の籠の者。合點ぢや。

(付添ひの男茶代の鳥目を拂ふ。籠をかき上げて去る。時之助、じつと、その後を見てゐる。)

新之丞。時之助どの。どうしたのぢや。

時之助。あの狆、たしかに見覺えがある。

新之丞。何ぢやと。

時之助。伊織どの息女楓どのが、秘藏した狆に相違ない。

新之丞。然らば、籠の中は楓どのか。

時之助。さう思はずにゐられない。

半三郎。(飛んで來て)何に、あの籠の中が、伊織の娘か。つゞけ、小作氏。

澤之助。合點ぢや(走しり出す。)

新之丞。おい!待て。つけるのなら、一緒にぢや。殊に、大事な手がゝりを見つけた時之助こそ、先達ぢや。義理を知れ!

半三郎。と申して……。

新之丞。あはてるな。つけるなら、一しよにつけよう。さあ時之助どのお立ちなされ!

時之助。(やゝ憂鬱になりながら)うむ。つけやうか。

(四人先を爭ひながら、籠の後をつける)

第二場

壺坂の山の奥、立石伊織の侘住居の垣外。花の殆んど散りつくしてゐる山櫻が二三本ある。竹植の中には藁屋の棟が見える。門は見えない。「籠かきが、空籠を吊して去ると、四人の若武士達が、一人一人忍び寄る。銘々、垣からのぞく。

新之丞。どうぢや、伊織に相違ないか。

時之助。たしかに伊織どのぢや。

半三郎。わしは、見覺はないのぢやが、しかと相違ないか。

時之助。相違ない。

半三郎。澤之助どの、それ御用意!(半三郎と澤之助、一しよに飛び込まうとする)

時之助。何をする、お待ちなされ!

半三郎。敵を見ては、一刻も猶豫がならうか。

時之助。今更此期に及んで、何をあはてるのぢや。

半三郎。あはてはせぬ。だが、悠長に構へる必要はない。

新之丞。えゝ、待てと云へば待て。あれ見られい、久し振りに父と娘の對面ぢや。半刻の猶豫を與へるのは、武士の情ぢや。

澤之助。何と申す、二年越し尋ねる敵を見つけて、入らぬ仁義立てから猶豫をいたし、萬一取り逃がせば末代までの不覺ではないか。

時之助。えゝ人の情を知らぬ奴、あのやうに欣んでゐる親娘を今半時欣ばせたとて敵打の邪魔にはならぬ。

半三郎。えゝ、悠長な、そこの戸！

時之助。ならぬ

（四人激しく爭ふ中、半三郎柴垣を押し破つては入る。澤之助もつゞく）

時之助。え、聞きわけのない。仕方がない。新之丞どの、遅れるな。

新之丞。心得た。

（二人ともすばやく垣の中に飛び入る）

第三場

伊織の侘住居の座敷。伊織緣側に對面したばかりの娘をかばつて立つてゐる。四人の若武士伊織に迫つてゐる。

半三郎郎と澤之助は拔きつれてゐる。

伊織。何奴ぢや。案内も乞はずに理不盡な！

半三郎。云ふな立石伊織、御邊に見覺えはあるまいが、拙者は大石半九郎の弟半三郎。

澤之助。拙者は、久志小左衞門の一子澤之助。

半三郎。兄の仇、よも忘れはいたすまい。

澤之助。父の仇、尋常に勝負いたせ！

伊織。（苦笑しながら默つてゐる）…………。

時之助。おゝ立石の伯父上、拙者は柴田時之助。

伊織。(なつかしさうに)おゝ御身は、時之助か。大きくなつたのう。
時之助。伯父上も、御健勝で。
伊織。そちは、何用あつてこゝへ訪ねて來た。
時之助。伯父上、仔細はかうぢや。伯父上が目付へ遣した御書狀は、あれは本當でござ いまするか。
伊織。武士の書き遣したるものに僞りがあるものか。
時之助。なれど、その場に手を負ふてゐた大石殿の御家來の口からは、大石半九郎の敵は立石殿と、はつきり申されました。
伊織。うーむ、なるほど。
時之助。大石殿の敵が立石殿ならば、一緒に居られた久志殿の敵もやはり立石殿、かやうに決定いたしました。
伊織。うむ、それで
時之助。こゝに居られる大石半三郎殿、久志澤之助どの。伯父上を敵と狙ふて、仇討に出られまする。拙者も、小伴新之丞殿も、父兄を殺されてやつぱり安閑としては居られませぬ。
伊織。うむ。うむ。
時之助。私や新之丞どのは、伯父さまが敵とは思へませぬ。だが、大石殿御家來の云ふたことが本當でございませうか。
伊織。(ちつと考へる)其方が、久志小左衛門殿の御子息か。
澤之助。(刀を擬しながら)いかにも左樣、はやう御仕度なされ。
伊織。其方が、大石半三郎どのか。

三郎。（刀を拭ひながら）いかにも左様、早く尋常に立合はれい。

伊織。見渡したところ、いづれも頼しき若者ぢや、お身達の父や兄も、あつぱれ武士だつた。お身達も、父や兄に恥ぢぬわ。だが、拙者の書き殘したことが、本當ならば何とする。

時之助。本當なれば、敵は伯父上でなうて大石殿久志殿ぢや。

伊織。半三郎殿は、何うする。

半三郎。われらは、われら仲間の申せしと信ぜぬ譯には參らぬ。御身を打ち果した上、柴田氏小伴氏と打ち果す所存ぢや。

時之助。伯父上、はつきり云ふて下されば、伯父上の云ふことが本當ならば、伯父上の助太刀して大石氏、久志氏と潔く勝負いたします。

伊織。御身達の父や兄は、武士の意地から惜しき命を捨てた頼もしい武士ぢや。それにまた御身達が、その惜しい最期を習はうとするのか。まだ二十にも足らぬ若い身空で。

半三郎。立石殿、未練であらう。お仕度なされ！

伊織。よし、今仔細の様子を聞かしてやらう。あの書き置きは悉く僞はりぢや。まことは、はしなき爭論から、其方達父や兄を悉くを手にかけたは、かく申す立石伊織ぢや。

半三郎。うむ、さては正しく。

澤之助。ぬかるな、半三郎どの。

伊織。（娘に）そちはあちらへ參つて居れ。高が知れた小悴ども、立ちどころに打ちとつてくれる。そちは、彼方へ行つて居れ（泣き崩れてゐる娘を奥へ入れる）

時之助。伯父上、それは本當でござりますか。

伊織。此の期に及んで僞りを申さうか。その方達の父兄を手にかけた立石伊織ぢや。見事、父兄の仇を報じて國元へ錦をかざれよ。

半三郎。參るぞ。

伊織。(刀の鞘を拂ふ)よし。何處からでも來い。

(半三郎と澤之助、兩方より斬り込む。見事に拂はれる。時之助と新之丞はまだ刀を拔かない。)

伊織。時之助、臆したか、早く刀をぬけ、新之丞どのもおかゝりなされ。

(半三郎と、澤之助激しく斬り込む。また散々に斬り拂はれる。)

時之助。伯父上、貴君がわれらの父を手にかけたとは思へませぬ。

伊織。えゝ不覺人め、敵打に出たものが、敵を打たないで歸參が叶うと思ふか。はやう、刀を拔いて斬つて來い。父の敵を打つて、家督相續をなし、天晴武士となれよ。

澤之助。えい。(斬込んで來る)

伊織。うむ、見事な腕の冴えぢや。父小左衛門の太刀先にも劣らぬぞ。

澤之助。何を!

伊織。えい。(横に拂ふ)

(半三郎と澤之助、奮鬪すれども及ばず)

伊織。えゝ時之助、刀を拔かぬか。うろたえ者め、え、ぬけ!ぬけ!

時之助。伯父上、御免!(刀を拔く)

伊織。新之丞どのも、それ！おかゝりなされ。

新之丞。御免！

（二人とも漸く刀を抜く。半三郎と澤之助、二人に先をこされまいとして、盛んに斬り込む。伊織、二人を避け、時之助の刀を待つ。時之助後退みして、斬込ます。）

伊織。それ、時之助、斬つて來い！

時之助。御免、（斬り込めども激しくはかゝらず）

伊織。太刀先が、にぶいぞ。それ時之助其方初太刀を。

（半三郎、澤之助激しく斬り込む、伊織激しく斬り拂ふ。）

伊織。時之助、かゝれ！

（時之助かゝらず。亂鬪つゞく。伊織時之助に斬られんとすれども、時之助斬らず。）

伊織。お前達の鈍刀では、この伊織には刀が立たぬ。いつそかうしてやらう。

（伊織退いて縁に腰かけ、刀を返して自ら腹を突く。）

時之助。馳け寄りながら、伯父上。

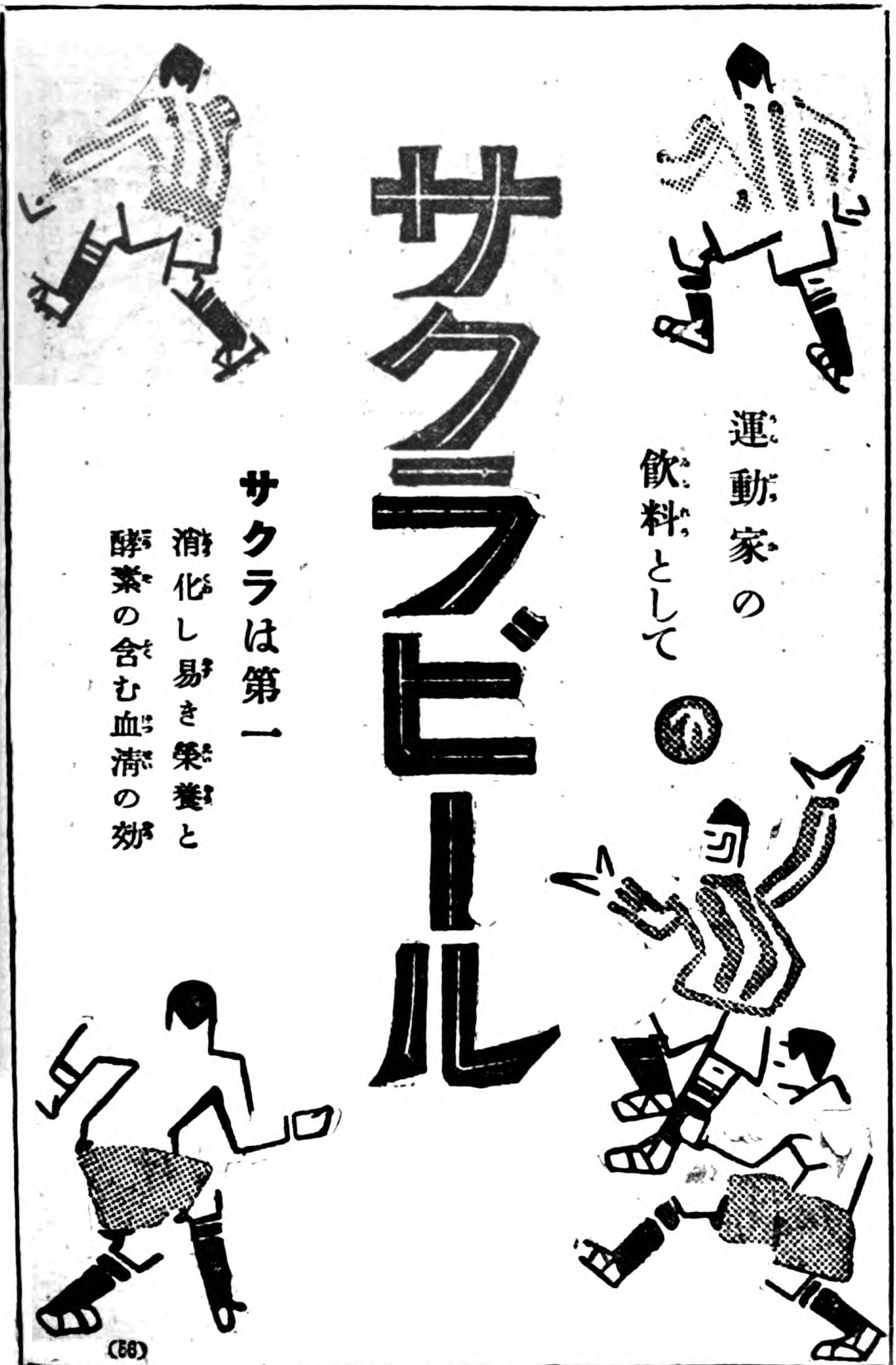
伊織。娘を出石の拙者弟の家まで頼む。

時之助。畏りました。

伊織。おゝみんな一太刀づゝ恨め！これで、めでたく、本懐を達したらう。四人仲よく歸國して、天晴武の誉を上げい。それ、一太刀宛斬れ！斬らぬか！

半三郎、澤之助達も茫然として振り上げた刀をおろし得ざる中に。

（幕）


運動家の飲料として
サクラビール
サクラは第一
消化し易き榮養と
酵素の含む血清の效
(58)

大鹽平八郎

眞山青果

大鹽平八郎（大坂東組與力隱居）
同　格之助（同上養子、與力）
同　おゆう（平八郎妾）
同　おみね（同上養女）
同　おいく（同上）
瀬田濟之助（東組與力、平八郎門弟）
小泉淵次郎（同上）
平山助次郎（同上）
吉尾九郎右衛門（東組同心、平八郎門弟）
庄司儀左衛門（同上）
渡邊良衛門（同上）
河合郷左衛門（同上）

宇津木矩之允　（彦根藩士、平八郎門人）
大井正一郎　（平八郎門人）
安田圖書　（同上）
梅田源右衛門　（彦根浪人、炮術者）
橋本忠兵衛　（般若寺村百姓、平八郎門人）
白井孝右衛門　（守口町百姓）
美吉屋五郎兵衛　（油掛町手拭地仕入業）
同　おつね　（同上妻）
その他、與力同心、百姓、塾生、群集、窮民、大鹽家下男下女等。

第一幕

時――天保七年丙申十二月下旬。
處――大坂天滿、四軒屋敷

東組與力隱居大鹽平八郎の居宅、謂ゆる洗心洞學舍なり。場面の裝置は平舞臺にて、平八郎の書齋を内部より見る。左方は襖をへだてゝ講堂（讀禮堂）に接し、右方は緣側づたひに土藏の前を通りて勝手向につゞく。床の間あり、頼山陽筆の壁上留詩の大幅を掲げ、書額、衝立など見ゆ。壁間には透間なく書物箱を積重

ゐたり。

正面の障子は開けるまゝにて、奥庭を見る。左方に竹林あり、右方に小池あり、老松その汀に蟠居す。植込の間より隣地東照宮の甍を望む。

平八郎の妾おゆう二十九歳、左方の障子外に立つ。平八郎（四十四歳）室の中央に青氈を敷きて「天保丙申秋登二甲山一」の詩幅を大書し終れるところにて、筆を持ちたるまゝおゆうの顔を凝視す。門生河合八十次郎（十七歳）侍坐して揮毫をたすく。後の人相書によれば平八郎は「顔細長く色白き方、目張強き方、眉毛細く濃き方、額開き月代薄き方、背格好常體云々。」とあり。おゆうはやゝ病身らしく、薄皮だちの女にて、切髪を澤々しく撫附けたり。常に平八郎の前を畏るゝ氣色あり。

勝手の方より微かに嬰兒の啼聲聞ゆる。

平八郎　（對者の眸を見詰むる癖あり、厳かに）嬰兒（あかご）が泣いてる。

ゆう　は？

平八郎　（持てる筆を顫はせ）書いてゐるのだ。

ゆう　は――

平八郎　えゝ、もう好しい。

おゆう、不審のうちに立去らうとする。

平八郎　（鋭くその後姿を睨みしが、急に）そして格之助はまだ歸らないか。

ゆ　う　今日は歸りが遲いやうに云つて居りました。（と戻る）

平八郎　あいつ――。（紙上の文字に視線を移しつゝ、嘆息するやうに呟く）又まづい返答を持つて歸るやつだ。――

ゆ　う　何か御奉行様へ……御建白でもなさいましたか。

おゆう、氣遣はしげに膝際にかゞむ。

平八郎　（筆に墨を含ませつゝ）大坂三郷では今、毎日五七十人づゝ、人間が餓死してゐるのだ。（悠然と落款を書く。）

ゆ　う　けれども餘り然う……御奉行所へお迫りなされては、格之助の身に何うござりませう。

平八郎　（屹と顔を上げて）格之助が何――。

ゆ　う　矢部様などゝ違つて、新御奉行様は御壯年にまかせて大層鋭いお方と伺ひましたから、若しまた組方のものにお憎しみでもかゝりますやうでは……。

平八郎　政治筋だ、口を出すのか。

ゆ　う　いゝえ、決して然うではございません。たゞ今朝格之助が出勤する時、すこし思案顔に見えましたから、おみねともそれを心配して居ります。

平八郎　（突然、遮つて）三平に云付けた、新熟舍の掃除は出來てゐるのか。今日矩之允が三年ぶりに、長崎遊學から歸つて來るのだ。彼が好みさうなものを、然う云つて置いてくれ。

ゆ　う　宇津木さんは深くお酒をあがりませんから……

平八郎　何んでも好い、早くせい。おれは事によると、この洗心洞を彼に讓るかも知れないのだ。早く、用意をしてく

た。

おゆう、去る。

平八郎、筆を置いて顔にて少年に指図する。八十次郎、立つて揮毫の大紙一葉を衝立の樣に掛け、文鎭にて抑へる。

塾生大井正一郎（二十二歳）、講堂より入り來る。平八郎を恐れてオドオドせる態度、遠く固く坐つて云ふ。白小倉の袴、背高く顔赤黑く、粗野なる男。

大　井　先生。瀬田氏小泉氏が見えました。

平八郎（立つて文字を眺めつゝ）然うか。

大　井　それから吉見河合等の衆は何う致します。まだ待たせて置きますか。

平八郎（少し顔を顰めて）會ふのが厭なのだ。――何うで愚痴だ。

瀬田濟之助（二十四五歳）、小泉淵次郎（十七歳）入り來る。共に東組與力にて平八郎の門弟なり。二人は立ちながら詩句を讀む。後向の平八郎はそれに心付かず。

大　井　それからで御在ります。（額の汗を袖にて拭つて）庄司生の手配をもつて、南本町の高上屋から白焔硝や硫黄の類を買ひ求めたさうでございますが、これは何う致します。

平八郎　格之助は留守だが、八十や英太を連れて、お前が引取つて來たら好いだらう。

大　井　は。

大井、去る。八十次郎、坐邊を片ける。

瀬田　はあ――過日の六甲山遊覽の御作でござりまするな。

平八郎　(振向きて) あ、貴公か――

平八郎、時として微かなる物音にも愕然として顔色を變ずる癖あり。

瀬田　(微吟) 今日思深似二前海一。彷徨不獨爲二詩篇一――相變らず淋漓慷慨でございますな。

平八郎　(忸怩としてやゝ眼を伏せ) いや、些か自ら警しむるこゝろもあるのだ。(苦しく笑つて座につく)

瀬田、小泉、坐る。八十次郎、去る。

瀬田　時に先生、今日格之助君をもつてお頭へ何か進言されたとは事實でござりますか。

平八郎　(驚きて) 誰に聞いた。

瀬田　小泉が今役所で聞いて歸りました。先生、少しまづい事でしたなあ。

平八郎　(手爐を退け、小泉を見て) 何かあつたのか。

小泉　いゝえ、巨細にはわたくし存じませんが、格之助さんの顔色が只事ならず見受けましたから…………

平八郎　(鋭く) それは跡部に會つた後か。

小泉　いゝえ、これから御座を願はれるところでした。(やゝ逡巡する)

平八郎　格之助には無理だつた。(額を抑へて俯向きつゝ) あいつには、情熱がない。

瀬田　先生。いづれ窮民救恤の御進策でござりませうが、少し功をお急ぎになりはしませんか。いかに時務に適切なる名策がありましても、新奉行は大鹽平八郎と云ふ名聲を忌々しく思つてをりますから、意地にも先生の意見に從ひません。

平八郎　まあ好い……まあ好いよ。

　平八郎、額に手を加へたるまゝ、悶き苦しさうに思案する。

瀬田　前任の高井や矢部は、どこに見處あつて大鹽を買ひ被つたか知れないが、俺は俺の見識をもつてお預りの大坂を始末する。高が與力の隱居風情が、何を知つて、煩さく御大法に差出口をするか、新御奉行は斯う思つてゐるらしうございます。

平八郎　その尊大は慥かにあるな。（やうやく顏を上げて）兄弟とて剛愎な點は、兄の水野越前によく似てゐるやうだ。

瀬田　それに新任の西奉行堀伊賀守は、水野さまの腹心鳥居耀藏と義兄弟にあたります。ます〳〵大坂の政道は、水野さま一黨をもつて基礎を固めて、過激な變革を企てるに相違ございません。

平八郎　（呻くやうに）用ゐると用ゐないとは、こりや仕方がない。わしはたゞ自らの至誠を吐露するだけだ。

瀬田　然し、奉行方では然うは見ません。先生が始終政治に喙を容れられるのを、自ら功用を急いで世間に用ゐられようとしてゐるやうに云ひます。

平八郎　（不快さうに笑つて）わが良知の欺かざるあり。それで好いではないか。

小泉　先生。

平八郎　あん。

小泉　然し、組替の噂は眞實らしうございますよ。跡部さまは西奉行堀さまの着任を待つて、われ〳〵東組の與力同心に可也厳しい御作法をなさるらしく見えます。

平八郎　そのために吉尾や郷左が先刻から訴へに來てゐるのだが、わしには何うも然うは思へない。

小泉　いゝえ、平山もそれを變へて居りました。今更西組に助役を申付けられ、わが組の與力同心一統がその下知につくやうになつては、何うも世間に顏向けがならないと申して居りました。

平八郎　それぢや、跡部は俺に喧嘩を賣るやうなものだ。然うぢやあるまい。

瀬田　一同を此方へ呼んでも好しうございませう。直接お聞きになると次第が判ります。

平八郎　兎に角貴公等は、跡部を餘り小人に見たがる。それほど佞奸の男ぢやない。

　瀬田、立ちて講堂に行く。

平八郎　そりや東組の與力同心には、兎角わしの說を信仰して、奉行跡部の新政を拒むやうな傾きはある。與力同心は土地に土着だし、東西奉行は江戸からの赴任で大坂の風俗に馴れないから、厭でも土着の下役の言葉を聞くことになる。上に立てば、なる程それは不快だらうと思ふ。然し、東西二組に與力同心を置いて、互に弊害を牽制し合ふのは、こりや御代々の規模になつてゐて、双方兩立するところに御深慮があるのだ。跡部輩の意見をもつてその制度を改革出來るものではない。

　平八郎の說話中に東組同心吉尾九郞右衛門（四十六歲）、庄司義左衛門（三十九歲）、邊渡良左衛門（四十七歲程）、河合郷左衛門（三十八九歲）の四人、瀬田の後につゞいて入り來る。庄司は沈默寡言、渡邊は溫厚實直の人、席もやゝ離れて坐す。河合はやゝ思慮燥急にして、言行に不謹愼なるところあり。吉尾は逡巡して決せざる態度あり。

平八郎　それに、わしに云はせれば、この秋跡部の新任以來、東方にも少し不愼みなところがあつた。例の一心寺の一件やまたその他にも手落がないではない。壯年血氣の跡部にして見れば、部下の者が大鹽の命令のみを聞い

て、若衣行をないがしろにすると思つたのかも知れない。然し、もう少し事件に通暁すれば、さうは云はなかつたらうか、今に分かる時が來るだらう。思ふに今度の細済の風説は、跡部が少し、策略を用ゐたのではないか。一同を反省させるために、故とそんな噂を立てたのではないかとも思ふ。先づ町を鎮めて、彼の擧動を窺ふのだな。

河合（庄司の膝を突き）そら、先生は斯う云はれると思つた。

平八郎（河合の輕燥を不快さうに見しが、目を轉じて）皆は跡部を埒もない小人物のやうに云ふが、彼にも相應の眷眼はあると思ふ。知つてる通り、わしは過日格之助をもつて、目前の飢饉救恤策を跡部まで申送つた。それは從來、大坂の役所には凡そ六七萬兩の闕所銀が納つてゐる。何故この際その不淨金を發して窮民を賑はさないと、彼に迫つて見た。その時跡部は答へて、三升五升の施米はたゞ貧民一日の饑を凌ぐに過ぎない。現在の急務は運漕廻米の便利をつくして、米價根本の調節をはかるにある。一國の經濟は、之を大局に失はざるにありと云つた。好く言つたと思ふ。

河合（口をモガ〳〵させて）然し先生はあの時——

平八郎（目を瞑つて河合を避け、強いて聲を沈めつゝ）なる程、おれはその時怒つた。然し……人の目には、その時憤激したわしの姿のみが見えて、同時に深く衷心に慚ぢてゐるおれの姿を見なかつたらう。わしはその刹那、正直に愧ぢ得られたことを、今も身の幸ひと考へてゐる。おれは元來惻隱の心に溺れやすい。天地の蒼々、萬物の無限を問ひながら、とかく目前の小仁に惑はされる習氣がある。これ一箇の欲情だ。然るに跡部殿の一言にさへ端的に慚ぢることが出來たのは、靈性の未だわれを亦さるものがあつたのだ。悔悟はその間を舒べるといふが、わしは跡部の一言に愧ぢ得たと考へるだけでも、自分のこゝろが暢やかになつたやうに思ふ。今日格

之助に第二の經濟策を跡部へ進めさせたのは、些か這の自尊心上の悦びを彼に寄せたのだ。用と不用とは素より問ふところではない。

瀨田　先生、その經濟第二策といふを伺ふことが出來ませうか。

平八郎　さあ、然し……（微笑しつゝ）恐らく諸公には、權奇の策を弄すると惡まれるだらう。

小泉　けれども我々の心得にもなります。

平八郎　（姿勢を正して）いつも云ふ通り、今年の饑饉は容易なことではない。三年前巳歳の不作などは比較にもならぬ。日本全國を通じて、先づ天明年間以來の大兇荒なのだ。京都役所の調書には、當秋以來の飢死人が三千離散民が八千とあるが、わしはそれ以上に見てゐる。大坂などもわしの胸算では、三月間の飢死が四千、新乞食三千、人別のがれの窮民が七千、先づその見當だらう。（言語次第に熱して、顏色却つて和らぐやうに見ゆ）この大患難の時を濟ふには、到底常道常識の政治では駄目だ。已むなくんば只、逆に取つて順に守る――斷だ、斷の一字にある。それで、わしは二ツの仕法を案じ出した。その第一は大坂三鄕の富豪家に嚴命を下して、この際半年間、諸國大名への貸銀を停止させるのだ。第二には奉行の威光をもつて、市中の米相場を急に暴騰させるのだ。當時淀屋橋が一石百六十目ならば、然うだ、百八十目九十目にも相場を引上げさせるのだ。わしは先づこの二策以外に、時の災變を救ふ仕法はないと思ふ。（頰笑みつゝ）斯う云へば、諸公或はまた中齋の逆說逆論と思ふだらう。けれども、わしは愼密に十呂盤珠を彈きながら話してゐるのだ。何うだ、諸公の意見を聞かう。

平八郎、晴れやかに笑つて坐中を見廻はす。一同、不審さうに聞く。

平八郎　(笑つて) 郷左、何か云ひたさうな顔だな、はゝゝゝ。云つて見やうか、貸付けた金は、諸侯方にみな財政に困窮して、大坂町人の借銀をもつてカツ〳〵台所を維持してゐるのだ。殊に大名等の足元に來て、銀主一統から融通お断りといふことになれば、厭でも今年の産穀を當津へ積込んで、それを銀に換へたければ、誠を送れないに極つてゐる。また堂島淀屋橋の相場にお手入れして、二三十目も相場を上向ければ、近國近在の百姓等はその値段に暗まされて、今まで來年高を思惑して出し惜んでる糴米を、みな大坂へ輸送するに相違ない。そら、船で來る、馬で來る。はゝはゝ。見ろ、ものゝ十日と經たぬうちに、大坂府内に常備米の四百萬石が、五百萬にも六百萬にも有り餘るだらう。何も狼狽することも、憂ふることもないのだ。はゝはゝ。遠慮なく批判してくれ。庄司、貴公は地方同心も勤めたのだ。何んと考へる。

庄　司　然やうでございまするなあ――。

河　合　(進み出て) そりや米穀は集まります。頭で相場に二十目も鞘が開いてゐるから、論なく米は集りませう。然し、その開きの金子は何處より産み出します。

平八郎　郷左、お前の智慧には無理だ。(笑ふ)

河　合　然し――。

平八郎　瀨田生、貴公は何う解釋する。

瀨　田　(腕組を解き) 分かりません。

平八郎　貴公等は金銀の運用に欺かれて、物の價位を忘れてゐはしないか。物價の高下は金銀にあると思つては間違ふぞ、物そのものが價なのだ。人は銀を食ふのではない、米を食ふのだ。市場に米穀さへ潤澤になれば、生民に

飢餓はない筈だ。その證據に、假りに大坂に七百萬石の米が集つて見ろ、厭でも米價は低落して、相場は百日以下に割れるに相違ない、金銀を通して米を見てはいけない、物を通してその價を見なければならぬ。これが經濟の骨髓なのだ。

瀬田　先生の說に從つて、假りに奉行所の御經營をもつて、一箇所の米相場を二十日づゝ引上げると致します。市中の小賣相場はその時どうなりませう。白米一升二百五六十文になりはしませぬか。

平八郞　それを考へないと思はれては困る。はゝはゝゝ。おれは一升二百五十が三百文にも上らせたいのだ。

河合　先生、愚昧な者には分りません。判然と教へて下さい。

平八郞　口に愼みのない男だ。聞け。なる程、この上相場が暴騰すれば、貧民の難儀は知れてゐることだ。（熱心に河合を睨みつけ）が、今日を何日と思ふ。師走も十日以上過ぎてゐるのだぞ。何人の懷合も節季金に押詰つてゐる時だ。好いか、大坂相場が天井値段と聞くと、五七日とも經たぬ間に、先を爭つて紀州大和の廻米が入津する。播州廣島は先づ十日と見よう。西國九州の遠國米は藏屋敷に談して、手附をうつても濟む。兎に角、諸國賣人氣を大坂に向けさへすれば、値段の暴落は見え切つてゐる。貧民が苦しむといつても、高がその間だけなのだ。三百文の米を食ふのは何日の間でもない。僅か七日か十日の苦しみだ。その五七日の間こそお藏米を施すなり、都下の金持どもに施米を強ひるなり、或は闕所銀、或は御用金、町奉行一箇の才覺をもつて貧民の難儀を救ふ方法は幾らでもある筈だ。差當りての人民の難儀は、來年麥秋までの食米を大坂に集めるための元入だ。小に失つて大に取る、それぐらゐの智慧が廻らないか。

平八郞、激昂するまゝに、一同を忘れ、たゞ河合一人を目標として壓倒的態度となる。彼の性癖なり

一

河　合（なッとして、腕組み）手前の申すのに合点す。政府財政を引上げる、その開きのまゝの州州を申したのでござる。

平八郎　無論、無論救助金が必要だ。最初煽り煽ふるためには、十萬や十五萬両は棄金にするのだ。

河　合　ですからその金は何處から――

平八郎　聞け。その金は死ぬ金ぢやない。直ちに生き返へる金なのだ。市中に米が潤澤になれば、それだけお金藏に富が回收されたといふものだ。富は天下の富だ、人民の富だ。政府や將軍の富といふものに有るべき者がないのだ。萬民が窮乏を救はれるそれだけ、國家の富は殖えてゐるのだ。この眼前の理がお前には分らないか。

河　合（反抗的にしぶとく）分りません。

平八郎　何。

河　合　手前どもはね、今日先生の議論を伺ひにまかり出たのではございません。組替一件でお訴へに出てゐるのでございます。

平八郎　組替一件だと…………小人。（と憫笑して）お主はうぬが眼の上の瘤より遂へないのか。天下の困難、生民の難儀を何と見てゐる。あゝん。

吉尾、袖を引いて制すれども、河合、眞蒼になつて聞かず。

河　合（顫えつゝ進み出て）小人でございます。とも――小人だ手前どもは活計が大事、若し組替になつて役方でも召上げられると、それこそ今日から路頭にも迷ひます。

平八郎　困つたやつだ。良知の學を何處へ學んだ。

河　合　お手前様はね、餘りに、弱い者を輕しめます。毎日一同が心配してゐるのを高處に眺めて笑つてござる。

瀬　田（心配して）郷左、少し過ぎるぞ。

河　合　學者のお話は、どこを性根に聞いていゝか、われ〳〵蒙昧には分りません。跡部さまを小僧だの小人のと云ふかと思ふと、今度は至極君子人のやうなことを仰しやる。

平八郎　何日おれが跡部を君子人と云つた。

河　合　存じませんね。

河合、反抗的に空嘯き腰の煙草入など出す。

瀬　田　郷左、今日はお前歸れ。

小　泉　然う激昂しては駄目だよ。話がまるで横道にそれてゐる。

庄　司（靜かに坐を進めて）先生。これは少しく御思案を願はなければなりません。先生は御信用なさいませぬが、今度の組替はどうも噂だけとは思はれません。

平八郎、河合を睨む。

吉　尾　役所うちの取沙汰では、西組與力の内山彥次郎樣を東組へ廻して、當組支配役を仰せ付けられるなどゝ、專ら申して居ります。何分にも跡部さまは悉く西方贔負の樣子で、われ〳〵東組の者はお屋敷お出入もかなひません。

渡　邊　今日もな先生。吾々の出勤刻限を西組から觸れて參りました。斯う何事につけて權柄が西へ移るやうでは、何うも困つたものと案じられます。

小　泉　そのほか何彼につけて片手落の仕打が見えます。これでは到底、組中一統職分が手につきません。

平八郎　（漸く河合から目を放し）おれは、それは今云ひ出す時ではないと思ふのだ。この上下變政の秋にあたつて、わが身保ひの問題のみ惜しむと云ふのは、ちと何うも……徒に捨て切れぬところがある。反省を加へたら何うだ。

小　泉　然しその前に、組林のお達しがあつては困ります。

平八郎　おれはそれは無いと云ふのだ。假りに跡部がそのやうな無法を行へば、その時彼はみづからその非を負ふてゐるのだ。

瀨　田　先生。然しこれには學問上の經緯もございます。內山初め西方一同は朱子學を奉じてゐて、平素からわれわれ陽明學徒を嫉視してゐます。天滿の我儕學問とか大鹽の氣違ひ學問とか誹謗して、東組の組下が大牛先生の門下に團結してゐるのを憎んで居ります。そこへ新來の跡部公は堀堂用身の腰抜け學問ですから、自然同用相救ふこゝろもあつて、他迄も先生が邪曲になるのでございませう。

平八郎　それぢや跡部は婦女子だ。

瀨　田　婦女子どころぢやない、わたしは佞奸者と思ひます。

平八郎　（兩手を握り合せて、一所を見詰める）おれは然うは考へたくないのだ。假りに跡部を敵としても、然う容易に敵を賤しめたくないなあ。憎いやつほど、强く、大きく見たい。（微笑に紛らしつゝ）貴公等は敵を然う容易に賤しめて、こゝろに何の不安も感じないか。おれは、性癖かなあ……おれは憎い敵ほどぐつと睨んでゐないと、眞劍になれない。力が入らない。諸君が然う容易に對者を賤しめて、滿足してゐるのを見ると、寧ろ淡しいやうな氣がする。

河　合　駄目だ〳〵。(突然煙管を叩いて)九郎右衛門、お暇致さう。先生は今日、饑饉の第一策とやらに御自身酔ひきつてござる。然う云ふお方なのだ。何よりも先づ、お手前様の智謀にお酔ひなさる人だ。(と、立上がる)

平八郎　(﨟として)郷左、來い、坐れ。

河　合　(立つたまゝ)何か御用でござりますか。

平八郎　えゝ、坐れ。

河　合　(忿然、對坐して)坐りました。

平八郎　(わが脇差を前に置き)これで跡部を切つて來い。

河　合　何んです。

平八郎　男子、憤りを口にする時、手既に刄を拔いてゐる筈だ。それほど跡部の所業を憎むなら、何故彼の役宅に踏込んで、死をもつて彼の非を責めないのだ。危きを見て命を致す、聖教の文字を何んと讀んだ。

河合、無言、平八郎を睨む。

平八郎　行ひて遂ぐる能はざるは恥なり。又、怒りて成たき者は犯さる、とも云ふ。貴樣は跡部と差違ひて死ぬ決心をなす時、初めてその言葉を發すべきだ。怯懦者。

河　合　………

平八郎　怨誹の言は婦女子すら恥辱とする。汝の如き者は、得に得て義に失ふ小人だ。一同も然うだ。貴公等は、最後には、跡部に謀叛するだけの確心あつて、今それを中術に迫るのか。たゞ、自家頭上の利害のために紛擾して、天下の災變のために憂ふるところを知らぬとは何事だ。心を太虚にして良知の心眼を開け。眞に憂慮すべ

き大事には、天下蒼生の上にあること。數年打續いての天變地妖、災害ならぬ繋り、昨夜も天文を案ずるのに、彗孛西北に出でて熒惑の見はるゝは、殺伐爭亂の氣が既に國内に動いてゐるのだ。現に先々月は甲州にも暴民が一揆を起し、近く南部領内にも百姓騷動が起りかけてゐるといふではないか。おのが損得利害のために、天下の憂患を打忘れてゐられるか。

一同、繭然として聞く。河合、俯向く。

平八郎（やゝ聲色を和らげ）おれとて組替の話は愉快に聞いてゐるのではない。が、然し、一段の功夫を用するのはこの時だ。これが若し反對に西組與力に何か失錯があつて、われ〳〵東組から支配役を出して、彼方が組替の恥をうけるやうな場合であるとしたら、貴公等は果して中齋に奉行の不法を訴へてくるだらうか。來ないぞ、必らず來ない。（微笑）みな心私かにわが組の手柄と誇つて、西方の難儀を悅ぶこゝろがあるだらうと思ふ。して見れば、悅ぶものも悲しむものも、共に私情、私慾だ。正義に發する靈性ではない。寵辱に驚き、禍福に趨避するの愚は、既にわしは劄記中に蒙を啓いてある筈だ。「這裏、微かに禍福生死の念の在るあらば、則ち格物の物字、決して分曉明白なること能はざる也。如し其念なければ即ち心、解了す」と、書いてあつた筈だ。若し跡部が大法を紊して、無謀の組替を行ふならば、その時こそ立つて斷然として爭ふのだ。風說にうろたへ愁訴哀願の為體は、われからわれを卑屈して敵に威光をつけるやうなものだ。行ふには自から時がある。時機だ。

庄司（深く頷いて）然う仰しやれば、事の未前に騷ぎ出して、却つて破綻を招いても困ります。

渡邊　こりや少し……輕率でしたかな。

平八郎　渡邊。貴公の老功にも似合けない。跡部にこの英斷あると思ふのが間違ひなのだ。はゝはゝゝ。先づ、これは中齋に任せて置け。跡部とて、平八の捌擻は江戸から聞いて來てゐる。そんなヘボ將棊はさすまい。はゝはゝは。瀬田、小泉、何う考へる。

瀬田　然やう……時機は深く考へなければなりません。

平八郎　小泉。（頤にて河合を指し、快然と笑つて）序に、こいつに頭下げさせる方法はないか。小膽者の剛情ほど腹が立つものはないぞ。

一同、微笑。

河合　（頭を上げ）先生。手前はまだ、御說に服しては居りません。

平八郎　斯う云ふ執拗だ。はゝはゝ。

河合　わたくしには始終疑問でございます。先生は何故さう切迫した言葉をお使ひになります。それ天變だ、箒星が出た、一揆だ、謀叛だ、騷亂だ、われわれを嚇すために面白づくに仰しやるやうに聞えます。

平八郎　貴樣に、この時勢がわかるか。（舌打）今の恐るべきは上にはない。

河合　然し。

平八郎　もう好い、澤山だ。（顏を顰めて立ち上がる）

河合　先生。

平八郎　（緣側を歩みつゝ、靜かに）何故におれは火藥を製造して、格之助や塾生等に砲術修行をさせてゐるのだ。斯る人心險惡なる時には、何時大坂に暴徒が蜂起しないとは限らない。人民の顏を見ろ、怒りはその面に顯はれて

ゐる。然るに今の政治のあのざまでは、何うしてその隙きがつける。おれはその時の用意をしてゐる。空言、空論ぢやない。

河　合　然し貴方の御説に随へば、四民の困窮も諸國の暴民も、みな上たる者の政治が過つてゐるからでございませう。近年の凶饉は惡政に對する天譴だとさへ仰しやつた。

平八郎　それが何んだ。

河　合　惡政に反抗する暴民に罪はありますまい。何んのために暴民を退治します。先生の論はいつも矛盾だ。

平八郎（睨んで）煩さいやつだなあ。政治が惡いと極まれば、その時こそ、大筒を逆様にして大坂城を撃つだけだ。

河　合　是非、拜見いたします。

平八郎　うゝ、こいつ――。

平八郎、啉として傍なる大杖を取る。一同、驚きて平八郎を支へ、河合を無理にもとの坐に引戻す。杖は洗心洞學舍の刑罰の具なり。

瀬　田（平八郎を支へて）先生、今日は鄕左も與猶して居りますから……

平八郎（やゝ慙愧の體にて）いや、俺も愼んでゐるのだ。然し何うもこいつの顏を見ると氣が苛立つて來る。工夫が足りないのだ。（嘆息）薛敬軒先生は一經字を治むるために二十年を費したと云ふが、深く鑑むべきことだ。（杖を棄て）靜坐、瞑目、山林にでも隱退したい。おれは人を敎へる身ではない。

瀬　田　敎へると云へば――然う〳〵先生、今日宇津木兒が長崎遊學から歸られるのではございませんか。

平八郎（俯向いて歩みつゝ、獨語のやうに）おれにも氣質一變の時が來てゐる。俺のこゝろに杖を加へる者は、疑に山

四、間久太郎があつた。今はたゞ字母木あるのみだ……

突然勝手の方より聖兒の暗殺、けたゝましく聞ゆ。下八郎、愕然として[illegible]、[illegible]

中に無意識にその障子を開きえんとして、一同の目[illegible]に[illegible]く。[illegible]

一同、目をそらし、或は夜の[illegible]に俯向く。

下八郎（障子に目をあてたまゝ、苦しげに呟くことも[illegible]）おれは今日[illegible]しなければならぬことがある。[illegible]見の暗殺だ。[illegible]まへに[illegible]、[illegible]つながれて置いた。[illegible]たゞそのくらゐ[illegible]はならない。[illegible]に入り[illegible]はそれ[illegible]。[illegible]……

[illegible]に目を開き、[illegible]目を見て）いや、然し、おれは今、[illegible]に[illegible]ないぞ。何かも聞かんぞ。[illegible]にも聞かんぞ、[illegible]には[illegible]、殺さねばならぬではない。また[illegible]もある。おれの心に[illegible]たない者の[illegible]に、何人にも[illegible]は聞かない。聞きたくない……（両目して[illegible]）

一同、[illegible]。[illegible]、[illegible]、[illegible]に目を見合せてうなづき、[illegible]しげに俯向く。[illegible]、[illegible]しく[illegible]きる。

[illegible]の暗殺。[illegible]。大井[illegible]、入りくる。

大井　おお。[illegible]の[illegible]上のお見えました。

平八郎、姿ばにしたく、キッと目を向きこれへてゐた。

大井　は。

大井、去る。

吉尾　何か御用談なれば、われ〳〵は御遠慮致しませう。

平八郎　なに好い。諸君の前に明々地に話したい。おれは自ら刑罰を加へなければならない場合なのだ。

般若寺村の富農、橋本忠兵衛（四十一歳）快活に正一郎と笑ひつゝ入り來る。忠兵衛は中齋塾の門下生にて、妾おゆうの義兄、養女おみねの實父なり。

忠兵衛　いや、この饑饉はとてもお話のほかです。二月三月にもなつたら、世上は何うなりますかなあ……。（と盃を頒はし來る）いよ、これは、皆さまお揃ひでござりますな。とんと最うこの頃は、洗心洞へも御無沙汰がちになりまして……。

一同、忠兵衛を先客として扱ひ、瀬田、小泉、坐を膝行る。大井、案内して去る。

忠兵衛　いや〳〵、瀬田さん（手を振り）わたしはこれで結構だ。何うか、何うかお構ひなく。

忠兵衛、下坐の同心等の大勢の傍に坐す。

平八郎、兩手の拳を握り合はせて何か考へゐたりしが、突と立つ。

平八郎　橋本。やはり講堂へ來て貰はう。

忠兵衛　何ん──。

平八郎　先づ足下に話すが順序だらう。聖像の前で話したい。

忠兵衛　何か、出來しやりましたか。（心配さうに見上げる）

平八郎（沈着きなく坐つて）今日、宇津木が長崎から歸つて來る。その前に、足下に話して置きたいことがあつて、それで使の者を出したのだ。

忠兵衛（煙管筒を拔きつゝ）ほう——。

平八郎　やはり講堂が好い。橋本。

平八郎、先に立つて講堂へ行く。忠兵衛、不審さうに立つて隨ふ。

瀨田（庄司の傍に行き、低聲）般若寺では知らないと見えるな。

庄司（講堂に注意しつゝ、不安さうに）何うも、然うらしうございます。

河合（不意に立ち）御一統樣はまだでございますか。手前はお暇いたします。

吉尾（河合の手を打ち）これ、何んだっ（目くばせして、頸を振る）

河合　何うして

吉尾　今あの……あのお話をなさつてゐるのだ。

河合　あの話？　嬰兒さまのことか、何んでもないことだらう。格之助樣のお子にして屆け、育てればいゝのだ。自體先生は、わが事となるといつも大騷ぎだ。嫌ひだあ！

瀨田（足踏み、睨む）郷左衛門。

河合　手前は歸ります。短日、人騷がせのお相手をしてはゐられません。

河合、忿然去る。一同、無言、講堂に注意す。

やゝ長き間。

瀬田　(嘆息して席に戻る) 然しこの度は……先生も苦しんだ。

小泉　けれども名義は立ちませう。格之助さんとおみねさまとの約束が變改になつた以上、例へ養女に子を産ませたと云ふ陰口はあるか知らんが、養子の娘を娶つたと云ふ非難をうける筈はないと思ふ。なあ、渡邊。

渡邊　拙者なども然う考へますなあ。格之助樣には一昨年先生血統の姪御さまを迎へて、既に許嫁の御披露まで濟んだのから、おみねさまと格之助樣の縁はきれて居ります。

瀬田　然う云へば然うだが、兎に角一度は……養子の娘にとして貰ひうけたおみねさまだ。それにおいくさんは、許嫁と云つても八歳の小兒だ。此と何うも、格之助が瞞し過ぎるよ。

庄司　(嘆息して) 困つたことでございます。然し又、あれまで苦しんでござる姿を見ては、一概に先生も責められません。

瀬田　格之助君の孝行は餘りに形式に泥むよ。あれは務めだ、眞情がない。

庄司　然やうさ……(仰向く)

小泉　(不服さうに) 然うかなあ……。わたしは先生の恥にはならないと思つてゐた。

瀬田　名目の問題ぢやない。心持のうへの話だ。

小泉　然し第一、格之助さんとおみねさまと結婚すれば、兩方とも養子養女で、大鹽家の血統は斷絶しますよ。おいくさんと格之助さんが一緒になれば……。

瀬田　(嘆息) 庄司、何んとかこれはならないものかなあ。

庄司　然やうでござりますよ。何う致しましてもなあ……。

瀬田　うむ。困つたことだ……。

吉尾、墨を突いて一同に注意する時、忠兵衛、腕組みしつゝ講堂を出て來る。默然とそこに坐す。

平八郎、講堂の圍際に來り立ち、忠兵衛を鋭く凝視する。一同、不安さうに氣色を窺ふ。

平八郎　(暫くして鋭く)忠兵衛、何故無言で中坐する。

忠兵衛　(固く腕を組み、瞑目のまゝ)このお答へは……容易にはなりませぬ。格之助様の意見もござりませう。

平八郎　何？　格之助――？(一歩づつ出て來る)おれは貴公に話してゐるのだ。格之助ではない。

忠兵衛　(目を開かず、重々しく)わたくしも考へる。貴方もとつくり……考へるが好い。(語尾すこし顫へる)

平八郎　わしの行爲が不德、不義――禽獸とでも責めるのか。その糺難は素より望むところだ。明かに正面から責めてくれ。何を憚つて沈默するのだ。

忠兵衛　(同じ姿勢にて靜かに)中齋先生。貴方は日頃われ〳〵にも、大虚の本性、虚無の至境を說かるゝ人ではござりませぬか。靜かに良知を致すべきはかゝる時かと思ひます。(微かに嘆息する)

平八郎　いや、その良知は、おれが事實を打明けた時、閃光一點、旣にお前の眼中に動いて居つた。おれは見た、それを見た。そのお前の良知の聲を問ふのだ。何故に斷言を躊躇する。

忠兵衛、沈思、答へず。

平八郎　人を攻め、吾を攻め、これを嚴に過ぎて悔まさるは吾が家の學風だ。友の不善を見て責めさるは、共にその汚穢を被むるものだ。柔佞狡詐、是れ良知を賊するの蟊毒なり。忠兵衛、何故躊躇する、何故沈默する。

忠兵衛、無言。

平八郎　好し、最う聞かぬ。今日は炬之允が歸る。(歩む) おれの心上に鞭撻を下す者は彼の外にない。おれは恥辱と、苦痛と、血涙とをもつてわが心を洗はねばならない。世に痛みなくして救はるる病患はない。おれの求むるのは唯一つ、痛みだ。體にも、心にも、おれは痛みを求めて進む。

この言葉のうちに、養子格之助、役所より歸り來り、下手閾の外に坐る。二十六歳、色黒く眉濃く、上の向齒三枚缺けゐる。謹格よりは迂直に近かき男。悄然として疊に手を突きゐる。

平八郎　(氣が付き、立ち止つて) 格之助。何時歸つた。

格之助　唯今――。

平八郎　(その姿を見て、不快さうに) 最う好い、分つてゐる。跡部に退けられて歸つて來たな。

格之助　跡部様はお父上が前任奉行高井公に重く用ゐられたことが、深く御氣に觸つてゐると見えます。高井には高井の見識があらう、俺は俺だ。繰返してそればかり仰せられます。

平八郎　大鹽は彼に惡まるゝを厭ふ者ではない。唯、おれの建言した經濟策を、正しく彼の胸臆に徹底させたか、それを聞くのだ。順序を誤らず、教へた通りに、彼の面前で詳かに話すことが出來たか。聞いて何んと云つた、跡部は何んと云つた。

格之助　はい。(俯向く)

平八郎　用ふると用ひない、それは拘らない。跡部はわしの意見を、現在救濟の爲策として、認めたか認めないか、それを聞くのだ。

格之助　はい。

平八郎　最後まで話を進めたな、中途で坐を立たせるやうな不熱心はなかつたな。最後の秘訣、かの仕法書も出して彼の前に示したたな。格之助、何を俯向く。お前もこの際は、天下の大事に任じてゐるのだ。跡部は何んと云つた。

格之助　それを申上ぐれば、御立腹になるばかりでございます。

平八郎　跡部の感情を問ふのではない。論策に對する彼の批評を求めるのだ。靜に論理をつくして説明すれば、例へおれの人物を憎んでも、彼は斷然として胸隔をひらくに相違ないのだ。

格之助　皆、わたくしの不能の致すところでございます。

平八郎　跡部に會つて、先づ何んと云つた。順序にそこで云つて見ろ。お前が熱誠を吐露して、おれが教へた通り進言すれば、いかに頑迷の跡部とて耳を傾けずにゐられない筈だ。おれは跡部が、お前の話に引入れられて、次第に膝を乗り出して來る、その順序段落までも一々こまかに目に描いて、終夜睡らずに案じ出した建言なのだ。云つて見よ、先づ何う云つた。

格之助　わたくしは大略………お父上の御趣意をつくしたつもりでございますが………、御奉行はお父上に對する僻見が先入の主となつて、心を開いてお聞きなさる模様がございません。

平八郎　趣意をつくしたつもり――？　誰がお前にその掛引きを頼んだ。お前は木偶になつて、中齋の言語を取次げばいゝのだ。雇はれ根性！　貴様には熱誠がない。

格之助　（涙ぐみて）高が二百石、與力隱居の祿高は欠けない。お上には散々御不興の體にて、御座を蹴立てゝお立ちになりました。わたくしの………無力のためでございます。

平八郎　與力隱居の察當、察當と云つたな。（嚇として養子を睨み）格之助、何故その時奉行の袴に縋つて引止めない。何故その暴言をゆるして歸つた。

格之助　は——。

平八郎　察當とは何んだ。察當とは何んだ。いま天下凶荒して餓莩みちに横はるの時、民の疾苦を憂ふるの聲が與力隱居の察當と云ふのか。格之助、なぜ暴言を聽して歸つた。何故敢然立つて爭はない。君父のためにはその侮りを禦ぐ、これ忠孝の第一要義ではないか。腑拔け者！

格之助　………

平八郎　おのれが腹に飽けば、民の餓ゑたるを知らず（大息して坐につく）一揆だ、一揆だ。今に必ず暴民が起つぞ。

忠兵衛、突と立上りて、勝手の方へ行く。

平八郎　橋本、何處へ行く。

忠兵衛　御内方さまにお目にかゝります。娘にも會ひます。

平八郎　橋本。

忠兵衛、聞えぬさまにて格之助に目くばせして去る。

平八郎、唇を噛んで鋭くその後姿を見送る。この以前より門弟等、互に小聲にて囁くことあり。

瀬田　先生。この際は一段沈着して形勢を御覽になるが好しいかと存じます。跡部様は壯年客氣にまかせて、御自分の施設に功をほこる心がございます。何人の言葉にも耳を傾けはいたしますまい。

平八郎　うむ………。（眼前の一點を凝視して、沈思）

渡邊（平八郎の揮毫を讀み）人隨二無事一醉二明時一。柔脆心腸如二女兒一――全くこの通りでございます。今の政治家は政治のための政治で、人民のための政治とは思はれません。

瀨川（微吟）却衛二秋熱一攀二山險一。誰識獨醒愼獨知――。先生。やはりこのお心よりほかに仕方がございますまい。

庄司（格之助に）若先生。昨夜よりの御當番でお疲れでございませう。御休息なされては如何でございます。高上から手前名目で買ひ求めました火藥についてお話もあります。お立ちなさい。御相談いたしたうございます。

庄司、傍に立ちて格之助を促がす。格之助、平八郎に一禮して悄然として立ち去る。

平八郎（獨語のごとく）雲烟は已を得ざるに聚り、風雨は已を得ざるに洩る。瀨川おれは恐しい時代に際會してゐると思ふぞ。

瀨川　はい

平八郎　おれは好んで過激な言葉を弄するのではない。過去の歷史に明徵がある。世に貧富の懸隔はなはだしき時、その國は必ず亂る。目前の事情がそれではないか。この眠れる庶民の怒り立つ時、その怒りは虎狼の群よりも悒しいと思ふ。（呻吟するやうに）高が一箇の與力隱居の猶當――嗚呼、跡部にはおれの言葉が、猶當と聞えるかなあ……。

一同、顏を見合はせて無言。

塾生河合八十次郎、慌しく走り來る。

八十　大先生。長崎から宇津木熟頭がお歸りになりました。

平八郎　矩之允が歸つた。何處に、何處にゐる。

八十　お玄關に、いま草鞋を脱いでゐられます。

平八郎　然うか、宇津木が歸つたか。然うか、然うか、然うか。

平八郎、欣然として落着きなく、玄關の方へ走り行く。渡邊、吉尾、八十次郎などその後につゞく。

庄司、勝手より出で來り、同じく玄關に行かんとする。

瀬田　儀左衛門。(庄司を呼止め)やはり君の心配する通りであつた。埒もないことになつた。

庄司　少しく氣をゆるやかに持たれませぬか、御氣性とは申しながら、傍で見るのもお傷はしう思ひます。

瀬田　小泉。こりや平山にも相談せざなるまい。

小泉　平山もうす〳〵は、聞いて知つて居りませう。

瀬田　それに何うも……酒も過ぎるやうだ。顔色が惡い。

庄司　御病氣が再發しませぬか、心配でございます。

瀬田　それよなあ——。(腕組みして、嘆息)

平八郎、宇津木の門弟岡田良之進を連れて入り來る。良之進、十五歳、柔和さうに白色く、内氣らしき少年。旅行姿にて脚絆など着けたり。

平八郎　(岡田の頭など撫でつゝ)瀬田、小泉。これが矩之助の弟子なさうだ。長崎から隨行して來たのだ。十五歳と云ふが、年齡には大きいではないか。はゝはゝ。好く來た、好く來た。何うだ大坂は賑はしからう。今に案內して見物だ。はゝはゝゝ。

平八郎、良之進を傍に坐らせ、ひとり悦ぶ。

宇津木矩之允、諸生に取卷かれて快潤に談笑しつゝ入り來る。年齢二十八歳。顏面ゆたかにして溫厚さうなる青年。絕えず微笑を貯ふ。質素なる着衣、旅裝。

宇津木　（平八郎の前に跪坐して）先生、只今歸塾いたしました。お蔭をもつて、諸方ゆる〳〵と遊歷して參りました。

平八郎　（思はず指差す）肥つたなあ——はゝはゝゝ。少しは飮めるか。

宇津木　その方は……相變らず可けません。たゞ田舍廻りでいくらか暢氣の修業をいたしました。

平八郎　何うだ。少しは恐しいやつにも會つて見たか。

宇津木　いゝえ。一向。——。（微笑）やはり恐しい咆哮の聲は、大坂の方から聞えました。

平八郎　駄目だ。はゝはゝゝ、駄目々々。（快然と大笑して、手を振りつゝ）その虎は檻のなかに繫がれた。山林野生の猛獸ではなくなつた。駄目だ、駄目だ。

宇津木　然し九州諸國にも……

平八郎　駄目だ、駄目だ。虎は檻につながれた。はゝはゝゝ——はゝはゝゝ。

平八郎、突如として又纔穩なく哄笑する。

第二幕

時――天保八年正月六七日ごろ。前幕より二十日ほど後。

處――洗心洞、新塾舍

新塾舍は平八郎が近年寄宿生のために、東隣の家屋を購ひて設けたる書生寮にて、いま宇津木等四五名の居るところ。大鹽屋敷うちの舊塾舍に對して爾か呼ぶなり。庭つゞきに兩塾相往來す。

舞台中央に、三圍に餘るほどの老松一幹、蔚然と聳立し、その枝傘の如く新塾舍の屋根を掩ふ。下手に見ゆるは瓦葺平屋の塾舍の一部にて、普通民家を修繕せるものなり。椽側あり沓ぬぎ石、手水鉢など見ゆ。柱に塾長室の木札を掲げ、障子のうちは宇津木の居室なり。椽側に講義室用の机數脚を積み重ね、壁に手拭歯磨袋など掛けてあり。

松樹を境にしてその上手は平八郎の後園よりその居宅につゞく。今その周圍を取り廻はして、高さ六七尺の葦垣を造らんとして、柱立を終り横竹を渡して、一部分には葦をつけたる所もあり。中央に潜り木戸を設けて、新塾との通路をなす。この葦垣は近來格之助等が炮術稽古に熱心するため、炮器火薬の製法を秘

密にして、人目を避けんとして急に門弟等に急造せしむるものなれば、構造など極めて麁略なるべし。
藁垣と新塾舎の後面を通りて、正面奥の門に通ずる一路あり。

冬の空うらゝかに晴れたる日の午後。遠く正月らしき紙鳶の唸り、囃し太鼓の音聞え、時々は隣地東照宮の鈴の音もさやかに聞ゆる。

塾生河合八十次郎、宇津木の弟子岡田良之進の二少年、松の下に立ちて互に爭ひゐる。良之進は平日の服裝にて、袴をつく。八十次郎は火藥製造に手傳ひせるため、短袴の上に浴衣を上張りに着て襷などかけたり。この日は藁垣を結び火藥を製造する日なれば、舊塾の寄宿生は全部その勞働に從事して、或は無尻半纏を被り、合羽を着け、泥にまみれ、頰被りして、思ひ／＼の姿をなす。

岡田　（八十次郎に胸坐をとられつゝ）知らん、僕は知らん。

八十　知らん――貴樣！　では君は誰の弟子だ。

岡田　云はん。君に詰問されて答へる筈はない。

八十　何、何。（松樹の幹に對者を押詰め）洗心洞學舍にゐれば大鹽先生の弟子ではないか。われ／＼舊塾の者が泥まみれになつて働いてゐるのに、新塾の者はぞべらくらりと見てゐるのぢやないか。長崎ばつこん、田舍者。

岡田　（蒼くなり顫えつゝ）僕は長崎生れだよ、田舍者だ。

八十　袴を見ろ。ズル〳〵引きずつて、地べたでも掃くのか。

岡田　何。

八十　君は洗心洞の塾風をやぶつてゐる。頭を見ろ。何んだ髪附油など光らせて、まるで影間野郎のやうだ。

岡田　何んとでも云へ、云へ。（口惜し涙を怺えて）僕は學問修業に上つたのだ。炮術稽古に出て來たのではない。

八十　何、青瓢簞！　大塩の學風は功名氣節を貴ぶ實用學だ。書物を讀むのも武術をやるのも、みな同じく學問だ。來て薪を搬べ。

岡田　僕は師匠から、そんな命令をうけてゐない。

八十　師匠とは誰だい。先生とは誰だ。

岡田　誰でもいゝ。

八十　貴公の師匠は、あの青表紙、腰抜け塾頭か。

岡田　（毅然と肩を立て）君。君は先輩にそんなこと云つて、好いのか。

八十　俺ひとり云ふんぢやない。舊塾生はみな然う云つて嗤つてゐる。

岡田　然し大塩先生でさへ呼び捨てにはしないぞ。宇津木兄とか共甫君とか、必ず敬稱を用ゆるぞ。

八十　大先生が餘り塾頭を大切にするから、それで新塾のやつ等増長するんだ。われ〳〵が毎朝暗いうちから起きて働くのに、新塾のやつは一人だつて出て來ない。新入生の癖に失敬だらう、生意氣ぢやないか。來て一緒に働け。（と引張る）

岡田　厭だ。腰抜け塾頭と云つたから餘計厭だ。僕は宇津木共甫先生の門人だ。

八十　生意氣云ふな。宇津木共甫は大鹽中齋の門人だ。

岡田　馬鹿云へ。僕が束修の禮をとつたのは共甫先生一人だ。

八十　馬鹿と云つたな。

岡田　君こそ、腰拔けと云つた。

八十　制裁を加へてやる。裏塾へ來い——來い。

岡田　厭だ。

八十　來い、來い。

兩少年、取組合つて爭ふ。

同じく齋塾の門生吉見英太郎、俯き姿にて一束をかつぎて入り來る。英太郎は同心九郎右衛門の悴にて、年齡十五歲、素直さうな少年。

英太　河合君。大井兄が呼んでゐる。葦束が着いたよ。

八十　(岡田と振ち合ひつゝ)こいつにも搬ばせてやるんだ。

英太　舍したまへ、亂暴だよ。(引分けつゝ)又大先生に叱られるよ。

八十　(岡田を睨み)實にこいつ、生意氣なんだ。

八十次郎、ブツ〳〵呟きつゝ門前へ走り去る。

英太　(扶け起しつゝ)君、何うかしないか。あ、袴がやぶけてゐる。

岡田　いゝえ、何んでもありません……。(極り惡るさうに微笑／

英太　實に粗暴だからねえ。この頃は大井兄の眞似をして、餘計いけないんだよ。（砕礫など拾つてやる）

岡田　僕も少し……言ひ過ぎたのです。有がたう。

二人の對話の間を縫ふて、塾生五六名、皆それ〴〵の姿にて、藁束を本宅の庭に搬び入る。

岡田　大層な藁ですね。この垣をつくるためですか。

英太　いゝえ外にも……。先生は何か炮術修業の驗しにするのでせう。好く知りません。

岡田　垣は、何んのために急いで造るんですか。

英太　火藥製造の秘法を人に見せないためでせう。棒火箭だの、炮碌玉だの、みな傳授事の秘術なさうです。

岡田　愉快だなあ。そして丁打の練習は何時頃です。

英田　來年の中旬、堺の七堂ケ濱で行ふことに願濟みになつてゐます。

岡田　僕もね、長崎で高島流の大筒調練を見ましたが、そりや壯快なもんだ。巣口からパツと白煙が迸つて、やがて天地を揺り動かして轟然と鳴りとゞろく時、僕はもう、……何んとも云はれない心持だ。煙を目に見て、音が耳に聞えるる。ホンの一刹那なんだが、僕はその間、息がつまつて……百までも勘定出來るやうな氣がしますよ。

英太　（目をかゞやかして）僕それ來月、自分で打つんですよ、打つんですよ。

岡田　壯絶だなあ　蒼空に唸りを引いて……グワアンと鳴りとゞろく、愉快だなあ。

英太郎、共に悅び笑ふ。

宇津木矩之允、詩稿を手にしてそれを推敲する心持にて縁側に出て、微吟しつゝ歩む。二少年の談話に心づかず。耳に朱筆を挾む。

英太　君はなぜ炮術の稽古に出席しないんです。

岡田　僕ですか。先生が……好みません。（萎れる）

英太　遊歩にも出ませんね。

岡田　えゝ些つとも。

英太　塾頭は謹直な人ですねえ。課業は終日讀書ですか。

岡田　長崎にゐられる時は快濶な方でしたが、當地に來てから段々憂鬱になられるやうです。

英太　大先生の書齋へも、近頃出入されもせんね。

岡田　元日の式禮に、御慶を述べられた限りでせう。

英太　何うしたんでせうね。大先生はあんなに塾頭を待つてゐられたんだが、議論でもしたんですか。

岡田　いゝえ共甫先生は人と爭ふ人ではありません。爭ふよりは負ける、先生の主張なんです。

塾生大井正一郎、薪束二束を擔ひ來る。白袴。

大井　危ない！（木戸口を塞げる岡田を突き除く）

岡田　（むつとして）何をなさる。

大井　通り路の邪魔だ。退け。

大井、去る。

大井の怒聲に宇津木顏を上げてその方を見る。寂しき冷笑をうかべて、又詩稿に朱を加ふ。

英太　（岡田を慰めて）打遣つて置きたまへ。實に過激粗暴な男なんです。去年の正月、酒に醉つて人を斬つて、それ

で先生の塾に預けられたんです。この頃新塾の評判になつたもんだから、餘計成績がよくないんですよ。

岡田　學識はあるんですか。

英太　近頃新塾には何んにもありません。たゞ時論です。

岡田　何んの議論？

英太　政事を論じたり、時勢を論じたり、たゞ悲歌慷慨すれば好いんです。だから僕なんかも、新塾に移りたいとも思ふんです。

宇津木　岡田。

岡田　は。（初めて宇津木に心づき恐縮する）

宇津木　君、今日の課業が終つたのか。學生の正月は三ケ日だけだよ

岡田　は。

宇津木　君、君……吉見君と云つたね。君の方の輪講會は何うなりました。明日行ふんですか。

英太　（躊躇しつゝ）さあ……まだ、聞きません。

宇津木　洗心洞の學風も變つたねえ。（微笑）大筒もいゝが何處へ撃つ積りだらう。玄關に脱ぐ下駄の亂雑になつたのを見ても、以前との相違が知れますよ。長崎から歸つて見て驚きました。

英太郎、俯向く。

宇津木　先生はどうしてゐられます。昨今やはり酒が進みますか。

英太　は。

宇津木（嘆息して）肺が弱いんだからねえ。誰か氣をつけてあげてくれないかなあ……。先生は嬰兒さんの顏を見る時がありますか。

英　太（當惑さうに）さあ……存じません。

宇津木　先生も苦しからう……。（嘆息）然し、何うにもならないことだ。あの境地を跳躍することは出來ないものかなあ……。

八十次郎。門前より英太郎を呼ぶ。英太郎、一禮して去る。

岡　田（日影を仰ぎ）今日もこちらで食事をつくりますか。

宇津木　然うだね、新しく炊くなら……今日は食堂へ出て見ませう。腰掛けて話したまへ。

岡　田　は。

宇津木（縁側に腰掛け、兩膝を抱いて）何うだ、岡田。そろ〳〵長崎が戀しくなるのぢやないか。

岡　田　私は、決心して家を出て來たんです。

宇津木　人間鄕愁を覺ゆるは、決して惡いことではない。（膝頭に顋を載せて、凝つと土を見詰めて）艱難にして父母の國を憶ふ、人間の本情だらう。故鄕を思ふのは、やがてわがうちにある天性を見ることだ。わが心性を深めもする、また强めもする。（と感慨深く獨語のやうに云ふ）

岡　田　先生。江州へお歸りになると云ふは何うしました。

宇津木　うん。そんなことも一度考へたがねえ……

岡　田　中止なされたんですか。

れが正しいのぢやないか、とさへ思ふ時がある。

岡田　謂ゆる良知の聲を待つですか。

宇津木　それとも違ふねえ。大鹽先生の教ふる良知は、明覺にして靈智、燭火の明かなるが如く明かに、音響の物に應ずるが如く分明に、一にして一、こゝに有りてこゝに執る——精確絶對のものに外ならないけれど、僕にはその直截簡明が妙に恐しく思はれて來た。物は二つありて正しく、一は二なり、そんな事も云はれるやうな氣がしてならない。それもハッキリしたのぢやないよ、實に曖昧なんだ。（頬笑みて）この頃も中庸を讀んで、例へばあの中字だが、僕は從來の註釋では到底堪られなくなつて來た。僕はこれをも一とは見たくない。兩端に分たるべき一とは見たくない、兩端に存するところ即ち一なりと云ひたい。然しこんな邪説を先生に聞かれると忽ち杖だ、打たれるぞ。はゝはゝゝ。僕はねえ元來、家の厄介者の四男坊に生れて、小兒の時に越前の禪宗寺へ養子にやられたのだ。そのため多少とも禪家の教育をうけてゐるので、その虚無、寂滅の觀念が今日なほ僕に影響してゐるかも知れない。あゝ、江州へ引込んで、また禪宗坊主にでもなるかなあ………。

八十次郎、英太郎、葦束を差擔ひにして、面白さうに掛聲して通りかゝる。

宇津木（後なる吉尾を見て）君、君、吉尾君。

英太　は。（立止る）

宇津木　大井君や安田君に話して、明日の輪番を催促してくれたまへ。

英太　は、畏りました。

兩人、また掛聲して走り去る。

岡田　先生が慨然發奮して學問に志したのは幾つの時です。

宇津木　あれは十七の時かねえ。發奮ぢやないよ、青年の功名心に驅られて坊主になるのが悲しかつたのさ。（微笑、兩膝を固く抱いて、瞼を細めて、土に落ちる靜かな冬の日を見詰むる）今考へると、果して何方に本來の自性を見出したか分らない。然し、その後京都に放浪して貧書生の辛酸をつぶさに甞めながら、山陽先生の門を叩いては人物に失望し、棕隱に失望し、敬所に失望し、殆んど自暴自棄にも陷らんとした時、人にすゝめられて中齋先生の歸大虛の說を讀んだ。あの時ばかりは全く、瞠目して衷心する思ひであつた。四五日の間はもう亢奮して眠られない。殆んど寢食を廢して、燒きつくやうな目で、陸象山の全集を耽讀したものだ。あんな青年時代の熱は、もう二度と來ないねえ。はゝはゝゝ。（寂しく笑ふ）

岡田　先生はこの頃、何か心中に御苦勞があるのぢやありませんか。

宇津木（獨語のやうに）僕を大鹽學に心醉さしたのは先生の大虛說だが、又然し僕を大鹽學から逐ひ出すのも、やはり同じ歸大虛の學說のやうな氣がして……（嘆息）何うも分らなくなつて來た。

宇津木、膝に顔を突つ伏して瞑想に耽ける。

平八郎門人平山助次郎、周圍に注意しつゝ窃かに入り來る。助次郎、三十二歲、同じく東組の同心にて、町目付の役を勤む。小心にして利害に鋭敏なる男。

平山（頭巾を取りて、小聲）宇津木さん。

宇津木（顔を上げ）おゝ、平山君か。何うしました。

平山　長崎から西洋砲術のことは聞いて居りましたが、昨年江川[illegible]の方におたずね致しまして、[illegible]文人とも交際を[illegible]いたさなければなりません。何分同僚友人の助けを[illegible]し、その他[illegible]を[illegible]ますため、自然[illegible]の諸先輩にも遠々しくして居ります。

宇津木　そりや窮屈だらう。然し、それも御出世です。

平山　時に内密の用事ですが、今日先生のお宅へ同役の庄司が上つては居りますまいか。儀左衛門でございます。

宇津木　先刻見かけましたよ。火薬製法の手傳ひに來てゐるやうです。

平山　恐れ入りますが、私と云はずに、ちよつとお呼出しを願はれませんか。

宇津木　急用ですか。（不審さうに平山を見詰める。）

平山　は、少しく………御上御用の匂ひもございます。

宇津木　岡田、君行つて呼んであげるといゝ。多分作事場だらう。庄司さんだよ、可也年配の仁だ。

岡田　は。

（岡田、走り行く。）

宇津木　お掛けなさい。（坐をゐさりて）暫くぶりでしたなあ。

平山　は、有がたう………。（佇立して思案する。）

宇津木　何か起つたのですか。先生……ぢやないですか。

平山　いゝえ……役所うちのことでございます。（氣を換えて、腰を掛け）御遊歴中は毎々先生からお噂が出ました。殊に四國漫遊の吟草などを拜誦して御進境のいちじるしさに、驚嘆して居ります。

宇津木　ねつから最う駄目です。總ゆるものに感興を失つてしまひました。わが心のうちに、素なれば、もう詩はありませんね。

平　山　詩と申せば、近來先生の詩作はますます激越の調を帶びて來ましたね。當春の口占など、少し險はし過ぎは致しませんか。

宇津木　然やう……。誰もそれに氣がつくと見えます。

平　山　(卒然として)相變らず、御癇癪でせうなあ。

宇津木　さあ、僕も一向知りませんが……何うも落着かないやうです。

平　山　お酒もかなり過ぎますさうですが――

宇津木　憂悶に耐えられないのでせう。然し、あの弱さが……先生の德性のあらはれでせう。今度長崎から歸つて氣がついたのは、先生のあの瞬目です。近頃は一層はげしいやうに見えます。

平　山　塾内の氣風をいかゞ思はれます。非常に斯う、政治的に、空論横議の風があるとは思はれませんか。

宇津木　(靜に頷首いて)確かに、認めます。

平　山　(熱心に)先月以來、先生は講義にも出席されないさうですね。事實でありますか。

宇津木　恐らく、聖教の書を講ずるに、堪へ得ないのでせう。

平　山　それは憂國のためですか。自責のためですか。

宇津木　――?(答へず、對者の顏を見る)

平　山　(やゝ鼻じろみて)何んです。

宇津木　君は現在、先生を[illegible]さい。

平山　そんな――

宇津木　搖いでは磁石の針のやうにゆれる先生の性質を、門弟たる君は知つてゐる筈だ。そしてその心の戰慄は、先生自身の鎭靜を待つよりほか、何人の助力にも救はれるものでないことを、君は疾に承知してゐる筈だ。(不快さうに屹と云ふ)

平山　それは知つて居ります。然し――。

宇津木　先生のことは先生自身にまかせる。その外に對症の法はない。餘計な深切、餘計な關渉は、却つて先生のこゝろを擾すものだ。

平山　は。

この前、岡田良之進、泣きながら入り來り、松樹の下に佇む。袖も袴もほころびて、顏の邊などすこし擦りむく。

宇津木　(良之進を見て)岡田、何うかしたのか。

岡田　庄司さんは……今、直ぐに、見えるさうです。

宇津木　お前、撲たれたのではないか。(庭に下りる)

岡田　舊塾の大井兄が――後から談判に來ます。

宇津木　君の方から仕掛けたのか。

岡田　舊塾が一致して、先生を……讒謗するんです。僕、それ、口惜しいんです。(啜り泣く)

宇津木　うむ、僕に關係したことなら、それで好い。暴惡にさからへばわが善もまた泯ぶ。紛爭を厭ふこゝろ、直ちに強者なのだ。痛むかい、水で冷してあげよう。

宇津木、岡田をつれて井戸の方へ行く。

河合郷左衞門、憤激してセカ〳〵入り來る。

河合　まだ庄司に會はないのか。

平山　（顏を顰めて、低聲）君が來ては困るよ。如何にも申合せたやうに見えるぢやないか。御門前に待つてゐてくれよ。

河合　鬪はん！こつちは死活の問題だ。

平山　まあ、落着けよ。

河合　先生が惡いんだ。われ〳〵を陷穽にかけるんだ。

平山　君は忰を退塾させると云つてゐたではないか。

河合　無論、退學だ。いま呼出しを頼んだから、連れて歸る。（ブリ〳〵してその邊を歩みつゝ）大鹽先生は恐しい人だ。自分の門弟をみな餌とする。增長、暴慢、ありや慢心病なのだ。いよ〳〵組替になれば、おれは孫子の代まで先生を怨む。

平山　（苦笑）お主にも弱る。口ばかりも愼めよ。

庄司儀左衞門、火藥製造の姿、厚子に細帶細褌、顏も兩手も木炭の粉に塗れて、頰被りを取りつゝ出て來る。

河合　(ツカ〳〵と進みてその胸を摑まへ)備左、備左。貴公と云ふ人は、何たる不料簡だ。
庄司　何んだ……。(呆れて河合の顏を見る)
河合　跡部様はひつしと御立腹だ。組替の取沙汰、聞かないのか。
庄司　僕は——。(面色を變じ)お觸出しになつたのか。
平山　河合、待てよ。(と間に入り)庄司兄、困つたことになつた。
庄司　然し、過日御上の御口振りでは——
平山　中齋先生にも脈ねるよ。(嘆息)爲ることが執拗過ぎる。御奉行様の御腹立ちは、尤もだと思ふ。
庄司　あ。(手の平を叩き)鴻ノ池一統に對する御用金の建白書ではないか。
平山　それだ。(重く頷首く)
庄司　あの事なら別條はあるまい。お上には書面を御覽の上に、文面の趣は能に聞き置く、追つて沙汰もあらうと、書狀は穩かに格之助様まで御下げになつてゐるのだ。
平山　それは庄司兄、第三回の建白書だらう。饑饉救濟のために鴻ノ池初め三郷の分限者に六萬兩の金を御用中付け、それを淀川運上に新規の課税をかけて、三箇年賦に辨濟するとか云ふ、先生御自慢の賦金法だらう。それも聞いたが、今度は別だ。
庄司　(平山の顏を不安さうに見詰めて)はアて?
　河合、木戸口に立ちて先程より切りに忰八十次郎を探しゐたりしが、遠くその姿を見つけたる心持にて、突然大聲に叫ぶ。

河合　八十〳〵、おうい、八十次郎、八十次郎！

平山　（舌打、河合を見て）喧ましいなあ、話があるんだ。

河合　こつちも用だ。（プンと面を膨らし、手招きしてわざと大聲に）八十、八十次郎、八十次郎！

八十次郎、走り來る。

八十　お父さん、何か用ですか。

河合　祖母さまが病氣だ。直ぐ願つて宅へ下るのだ。

八十　厭ですよ。炮術の稽古が出來なくなります。

河合　話がある。こちらへ來い。

八十　來月の丁打に、みな競爭して稽古してるんだから、宅下りなんか、僕厭ですよ。

河合　こちらへ來い、來い。

河合、塾舍の裏手の方に行く、八十次郎、澁々と隨ふ。

平山　（河合を見送りて後）今の話だが、その第三の建白が體よく却下になつたので、先生ひどく牙を嚙んだと見える。今度は先生直接鴻ノ池を訪問して、主人善右衞門に面談を求めて、聲涙ともに下るの熱辯をもつて、人道の大道を說き、施行金の發起を迫られたさうだ。

庄司　それは何日頃のことか。

平山　舊冬、二十八九日でもあらうか。鴻ノ池も先生の至情に感奮して、多少の義金に應ずる心があつたらう。返答ぶりが至つてさわやかなので、先生も大の御機嫌で、嘉例の大根煮とかを振舞はれて、大悅びでお歸りにな

つたさうだ。

庄司　行こ、行こ、うん。（膝を打つ）この巧妙に鴻ノ池の家風を責め、當代善右衛門の人物を認めてござるな。

平山　鴻ノ池とて一存にはならない。早速二十軒の兩替仲間をなだめて協議すると、皆も先生の存案に同意してゐる、それぞれ應分の醵金といふ場になつて、一人異存をとなへたのは米屋平右衛門ださうだ。米平の言ひ分には、窮民の救濟は公儀の御役で、御城代樣御奉行樣の御職掌だ。大鹽樣はいかに學者でも高が與力の御隱居、その言葉に隨つて金を出して、他日御奉行所から差越し名聞のお叱りをうけては申譯が立たない。一應御上に訴へ出で、御指圖次第に事を決めやうとあつて、一昨日兩替仲間から跡部樣に訴狀を出すことになつたのださうだ。

庄司　それで分つた。（重く頷首き）初春以來先生は妙にそはついて、何か喜び事でも待たしやるやうに見えた。學兄さまの心勇みかと思つたが、偖ては、鴻ノ池の返事を待つてござつたのだ。

平山　再三、再四だらう。あゝ責め立てられては、跡部樣も堪忍がなるまい。昨日も今日も散々の爲體で、われ〳〵東組に當りちらしてござる。內々は西組與力の內山彥次郎をもつて、東西組替の取調が濟んでゐると云ふ噂もある。

庄司　然うか。何んしても少し……あせり過ぎる。（嘆息）

平山　何うだらう、庄司兄。この上は門人一同必死の覺語をもつて、先生の面をおかして、反省を求めやうではないか。組の者一同の休戚にも關することだ。

庄司　何うも……覺束ない。（頭を振りて）議論となれば、善惡ともに屈しないのが先生の癖だ。それに先生には善事を爲すと云ふ信念がある。事實また、善事なのだ。たゞ、餘りにわが善を急ぎ過ぎるのが病ひだ。癇症を病む人には……得てしてあの偏執があるやうだ。（と大息する）

平山　瀨田氏小泉氏などの意見には、寧ろ宇津木塾頭を煩はして苦諫を呈しては如何といふ說もある。先生もあれほ

ど信頼してゐるのだから、無下にしりぞけもすまいと思ふが………。

庄司　さあ、これも思案ものだなあ………。

平山　然う老兄のやうに大事をとつては、話の乾る時がない。最近兄はもつとも先生に接近してゐるのだ、何んとか工風はないか。

庄司　さあ………。

八十次郎、バラ〳〵逃げ來る。河合、怒りて追ひ來る。

河合　八十次郎。（睨めて）お前、親の言葉をそむくか。

八十　丁打に行きたいんですよ。僕、砲術が面白いんです。

河合　親の頸に繩がかゝるぞ。

八十　大先生に聞いて下さい。僕、厭です。

八十次郎、走り去る。

河合　八十、八十………八十次郎！えゝ、勝手にしろ。（と諦めて戻り來て、平山に）何うなつた、え、え、話は何うついた。宇津木に頼んだら好いだらう。そこに居た、呼んで來ようか。

平山　待てよ。少し落着いて考へようではないか。

河合　だから、だから俺に委せろと云ふんだ。先生だつて大鹽だつて、おれは突ツ張るところは突ツ張る。貴公等は兎角因循過ぎる。明日にも、今にも、お觸出しになつたら何うするんだ。苦々しいこつた。おれは、うぬが飯の上の蠅だから追ふのだ！

宇津木、良之進をつれ濡手を手拭にてふきつゝ入り來る。

河合　塾頭、塾頭。

平山　(目にて叱り) 河合、また出過ぎる!

河合　(むつとして) 然うか――。悪るかつた、歸る。

　河合、去る。

宇津木　(岡田を塾舍に遣りながら) 何か起つたのですか。

平山　何うも輕燥な性質で、火を見た馬のやうに騷ぎたがります。では庄司兄、わしは隣家の瀬川氏のお宅でお待ちしよう。

庄司　直ぐ後始末して行きます。

平山　宇津木さん、又お目にかゝります。(一禮して歩み出し、奥の方を見て驚く) 先生だ、先生だ。こりや可けない……。

　平八郎、弓の折を杖に曳き、俯向きて何か考へつゝ、門口の方へ奥を通る。

平山　(仕方なく聲を掛ける) 先生、先生。

平八郎　(蔭の聲) おゝ助次郎か。久しう逢はなかつた。

平山　御遊歩でございますか。

平八郎　(沈みたる聲) うむ。一日に一度は川縁を散策しないと氣色が悪い。これも永年の習慣だ、誰か、ゐるのか。

平山　は、あの……。

平八郎　(聲) 宇津木兄もゐるな。これも久しく逢はなかつた。(寂しく笑ひながら、姿を顯はして來る) 同じ家にゐながら、少し遠いやうだの。

宇津木　(微笑) 先生淀川堤は寒うございますよ。又風が出ました。

平八郎　（一つ二つ輕く咳嗽して）うむ、寒いから出て行く。體をいたはつては地癖になる。

平八郎、疲れたやうに椽に腰掛け、柱に凭れる。

庄目、目禮して去る。宇津木、室内に入る。

平八郎　平山、當時世上の景氣は何うだ。

平山　豫想以上の凶作と見えます。回漕米がほとんどございません。

平八郎　人間、食はなければ死ぬぞ。貴公等、知つてゐるか。

平山　は。

平八郎　その中で、道頓堀の芝居は大入續きなさうだな。

平山　は。

平八郎　氣がついてゐるか、それなら好い。町目付の職掌を忘れるな。

平山　は。

平八郎、椽側にありし宇津木の詩稿を取りて、見る。足先に寒さを感じて、兩足を裾にくるみて、讀む。

平山、手持ちぶさたに佇む。

宇津木　先生。自用の坐蒲團を持ち來り、平八郎にすすめる。

平八郎　あん、有がたう。（なかば無意識に坐り）これは漫遊中の詩草だな。詩はあがつたな……。

宇津木　いゝえ。（微笑）暇にまかせて雌黄を加へて居ります。

平八郎　心境が澄んでゐる。むゝ、格調も高くなつた……。（獨語のやうに嘆聲を洩しつゝ讀む）

問

平　山　宇津木兄、失禮いたします。先生御免下さい。

　平山、去る。

　大井正一郎、垣に結ぶべく切り揃へたる薪束を擔ふて入り來る。宇津木を見るより、薪束をドサとそこに投げ棄て口をとがらして來る。

大　井　塾頭、最前は少年に傳言だつたが、明日の會日を何うなさらうと仰しやるんだ。

宇津木　たゞ輪講の有無をうかゞつたに過ぎません。

大　井　足下等は懐手して遊んでござるが、吾輩等は多忙を極めてゐる。少し目を開いて見て頂きたい。大體あの少年は何んだ。生意氣極まる

平八郎　（詩稿を讀みつゝ）喧ましい。何を理窟云ふ。

大　井　（初めて平八郎に氣がつき、心に驚きつつも）わたくしにも、理窟を云はして頂きたうございます。わたくしどものために洗心洞の塾風が墮落したやうに云はれては、面白くありません。

平八郎　（詩篇より目を離さず）煩さい、あちらへ行つてくれ。

大　井　先生は塾頭を片贔負になさる。仕事はもう厭だ。

　大井、怒りて出て行く。

平八郎　（暫くして、嘆息するやうに）うゝむ、恐るべき進歩だ。三四年前の詩とは、まるで面目を一新してゐる。

宇津木　それだけ、意氣が銷沈したのでございませう。

平八郎　いや、然うは思はれない。ものを見る目が深く、眼睛が澄んでゐる。（又讀みつゝ）深沈、淵默——靜影璧に沈むとでも評したい境にゐる。文字もみな坐るべきところに坐つて、絶えて動搖不安の騷がしさがない。

宇津木（顔を撫で、羞らつて）先生。そりや、そりや……困りますよ。

平八郎（巻を伏せ、瞑目）僕の文章などは、たゞ紛糾亂雜あるのみだ。

宇津木　先生、何うも……不可ませんな。はゝはゝ。

平八郎、大息して又讀む。

この時門前俄に騒がしく、地車の音、人夫の音など聞ゆ。

平八郎（突然、目を上げて）宇津木兄、君は夢を恐れないか。

宇津木　は？

平八郎　然うかなあ……。僕の恐れるのは夢だ。如何に自ら譴責しても、紛擾汚穢のわが夢をふせぐことが出來ない。

河合英太郎、駈け來る。

英　太　先生、先生。守口の白井氏から木砲をつくる松の木が着きました。

平八郎（目も上げず）大井がゐるだらう、然う云へ。

英　太　はい。

英太郎、走り去る。

宇津木（驚きて坐を進め）先生、木砲とは、木砲とは何んでございます。

平八郎　うん。木の大炮よ。（意にも留めず、膝をゆすりて讀み耽る）守口の幸右衛門宅の松の老樹を切つたと云ふから、試みに木砲をつくつて、成績をためさうと思ふのだ。

宇津木（不安さうに）然し、棒火箭とか、木砲とか、いづれ願済みとは思ひますけれど……何うでございませう。

平八郎　大丈夫だよ。棒火箭、木砲、みな炮術のうちだ。これ等を極めないでは、免許皆傳をうけたとは云はれない。

宇津木　然し――

平八郎　詩品は天真だが、人間は小心だなあ。はゝはゝ。

宇津木　………

　英太郎、又驅け來る。

英太郎　先生、大井兄は門前の居酒屋にゐて動きません。また醉つてゐます。

平八郎　わしも行つて見る。舊塾の者總出で、松の木を作事場へ搬ぶがいゝ。

　英太郎、走り去る。間もなく舊塾生八九名、ドヤ〳〵と走りつて門前の方へ行く。

　平八郎、詩卷を置いて立ち上る。俯向ける宇津木を凝つと見る。間。

平八郎　（涙ぐめる聲）宇津木兄。

宇津木　（顔を上げ）は？

平八郎　（その瞳を凝いつと見詰めて）君は遂に僕を責めてくれないのかねえ。僕は君の鞭撻を待つてゐたのだ。

宇津木　は――。（聲顫える）

平八郎　それ、逃げる。目を躱はす！（視線を動かせじとして）何故おれに善をなさしてくれないのだ。君は、僕の體の病ひを憂へてくれる、然し、おれの心上の病ひを何故救つてはくれないのだ。これ！、又俯向く、俯向くか、俯向くか――

宇津木　は、は、は、――

　宇津木、苦しさうに次第に俯向く。人勢大勢、塾生等、地車をとゞろかして松の巨幹を搬び來る。

　平八郎、凝然として宇津木を睨みゐる。夕日あざやかにその姿を色どる。

――幕――



定價送料		
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

大正十五年六月二十日印刷
大正十五年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　高野敬錄
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

中央公論社
東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同長野三二〇五番


贈答と人格
高貴の方々から
御愛飲の榮を賜はつてゐるカルピスは
御贈答用として
御接客用として
實に
最高敬意の表現であります。
滋强飲料
カルピス
酒店食料品店藥店にあり

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.